主筆　室伏高信
編・解題　飯田泰三

復刻版 批評

第3巻

龍溪書舎

本巻収録史料

批評

大正十一年三月三十一日第三種郵便物認可
大正十一年四月一日印刷納本發行

批評

第一號（四月號）

□ラテノウの新社會思想
（獨逸に於ける新社會主義運動の哲學）
室伏高信

□階級鬪爭に於ける知識階級、文化及び藝術の問題
室伏高信

批評社

「批評」復刊

□この雜誌は、半ばは、嘗つて私たち數人の同志が大正七年三月から大正九年十二月まで發行してゐた「批評」の復活である。

□第一號は、私一個の雜誌として出るの止むなき事情があつたが、決して私一個のものではない。若き日本と、凡ての「若き日本」の人たちとの自由評の機關でありたいと思つてゐるものである。

□次號からはまた別の趣きで世に出ることでしよう。　（室伏生）

ラーテノウの社會思想
（獨逸に於ける新社會主義運動の哲學）

彼は大資本家で社會主義者、政治家で哲學者、實業家で科學者、藝術家、豫言者、ユトピアンである。

彼は現代を魂の虐げられた世界であると罵しる。しかも科學的社會主義は人間の心を燃やさないといふ。Anbruch der Seele がきた、と彼は叫ぶ。

獨逸の彼は、英國のウヰリアム・モリスに比することができよう。

私は嘗つて、外遊の前に、オーウエンや、モリスや、または英國のギルデイズムの思想を紹介し、批評することに、私の小さい努力を用ゐた。私は今ま、獨逸から歸つて、新らしい心持ちで、獨逸の新社會主義運動について、私の力で、出來るだけの紹介もし、批評もして見たいと思ふ。こゝにヴアルタア・ラーテノウの社會思想についての一文をものしたのは、私の社會思想上における再運動の先陣である。

彼は今日の獨逸に時めく政治家である。否、今日の歐羅巴に星の如く輝く政治家である。ロシアにレニンがあるといふ人は、獨逸にラーテノウがあることを思ふであらう。彼は、彼の日常事務は、俗務中の俗務である。彼の手はまだ資本主義から離れてはゐない。しかし彼の心は當來社會への情熱に燃える。

ラーテノウは一九六七年九月、猶太人の兒として伯林に生れた。ギムナジウムを出てから、美術家または文藝家とならうとも迷つたが、自然科學を撰むことに決心してから、伯林大學とストラスブルヒ大學とで、物理、數學、化學を學び、またディルタイについて哲學をも學んだ。彼がドクトルの學位をとつたのは二十二の時であつた。

彼の父は獨逸における屈指の大實業家であり、世界的に有名な伯林の大電氣會社アー・エー・ゲーの社長エミール・ラーテノウといふた。一九一五年にエミールが死んでから、ラーテノウはその後を襲ふてアー・エー・ゲーの社長の椅子についた。戰爭中は原料供給を總理してその手腕を一般に認められた。

革命がきて、社會化委員會が組織された時に、彼はまた、カウツキーや、ヒルフエルデイングや、クノウ、ヴヰツセルなぞとともにその委員となつた。一九二一年六月ヴヰルト内閣が組織された時に、彼は改造大臣となり、同内閣が改造された後に外務大臣となつた。

彼が最初に文章をもつて世に問ふたのは一八九九年「ツークンフト」における一論文であつた。一九一二年に「時代批評」を發

表して以後、彼には次のような諸著がある。

1, Zur Kritik der Zeit, 1912

2, Zur Mechanik des Geistes, 1913

3, Deutschland Rohstoffversorgung, 1913

4, Probleme der Friedenswirtschaft, 1916

5, Von kommenden Dingen, 1917

6, Eine Streitschrift vom Glauben, 1917

7, Vom Aktienwesen, 1917

8, Die meue Wirtschaft, 1917

9, Der neue Staat

10, Kritik der dreifachen Revolution

11, Autonome Wirtschaft

12, Die neue Gesellschaft, 1919

右のうち一九一七年までの諸著の多くは、他の論文とともに「ラーテノウ集」全五卷（W. Rathenau, Gesammelte Sehriften, 1918）のうちに輯錄されてゐる

一、

ラーテノウは在來の社會主義を批評して、「思想貧困の社會主義」といつたことがある。（註一）彼に從ふと、社會主義

が、當來社會の指導原理となるためには、それは單なる制度や、政治や、經濟のために戰ふだけでは駄目である。それは思想のために戰はねばならぬ。それは經驗の世界、物質の世界、自然の世界を超越した、永遠なもののうへに、彼の理想をもつてゐるものでなくてはならぬ。つまり西南獨逸派などの考へてゐるように、自然に對する文化、實在に對する價値の世界へと交渉してゐるものでなくてはならぬ。彼の言葉でいふと、世界觀哲學（Veltanschauung）なり、信仰なり、若しくは先驗的イデーなりのうへに立たなくては、人生を革命することはできるものでないといふのである。（註二）

（註一）Rathenau, Die neue Gesellschaft, S. 9

（註二）Rathenau, Von kommenden Dingen (Gesammelte Schriften, 3. Band,) S. 17-8

マークスは巴里コムムーンを批評した時に、勞働者階級をもつて「新社會の要素」であるとはしてゐるけれども、この階級は自分自身を解放するためにたゞ永い鬪爭を重ねてゆくだけであつて、「實現すべき理想（イデアーレ、ツウ、ヘルヴヰルクリツヘン）」をもつてゐるものではないといつてゐる。またこうした理想とは、マークスに從へば、「出來合ひのウトピエン」であり、更に一種の「奇蹟（ヴンダア）」でもあるといふのである。（註三）ラーテノウの立場はこれとは正反對である。彼の世界は彼の所謂「目的人」（Zweckmensch）の世界である。現在から未來への豫見と、恐怖と、法悅とに生きる人々の世界である。（註四）彼に從へば人々が自覺的存在にある場合、即ち「目的人」の世界において、生活は決定されないで自定する。彼は外部から彼を指導する力を否定して自らこれを創造する。彼は最早や價値や、理想や、目標や、權力を受取ることなくして、自由に選擇（エルヴェーレン）するのである。（註五）宿命的の世界でなくて選擇の世界である。唯物史觀の世界でなくて價値創造の世

界である。機械的の並界でなくて目的の世界である。經驗的實在の世界でなくて先驗的當爲の世界である。ラーテノウはかくのごとき世界を名づけて「靈の王國」(das Reich der Seele) といふ。

(註三) Karl Marx, Der Bürgerkrieg in Frankreich, mit Einleitung und Anmerkungen von Conrady, S. 95

(註四) Rathenau, Zur Mechanik des Geistes oder vom Reich der Seele, (Gesammelte Schriften, 2. Band) S. 27

(註五) Neue Gesellschaft, S. 52

この「靈の王國」を名づけて、ラーテノウはこれは新社會と呼んでゐるのであるが、またこの新社會の人、即ち「目的人」こそ新人と呼ばれべきものであるが、それは實は新らしくもなく、古くもない。天才が古るくもなく新らしくもないように、力強い生命(クレフティゲ、レーベンデ)は、新らしくも古くもなくて、ただ若いのである。ラーテノウにとつては、近代主義は無意味であり、好古主義は屑であるからである。(註六)

(註六) Neue Gesellschaft, S. 49

「靈の王國」は、物質の世界と對立する。それは物質が精神を從屬させてゐる資本主義の世界と兩立することができないとともに、物質の分配よりも、より以上に出ることのできない社會主義とも兩立することがありえない。「思想貧困の社會主義」は、社會主義を、經濟學の範域にまで墮せしめてゐるのであるが、それはただ手段でありうる。それはある高き目的に奉仕するための手段としてのみ肯定しえられる。目的は經濟でなく、單なる經濟的正義ではなく、ラーテノウに從へば、「地上に創造し、實現すべきわれ〳〵の最後にして決定的な目的は人間の靈の解放である。」(註七)

(註七) Neue Gesellschaft, S.

人間の靈の解放は、物質の分配ではなくて精神の分配なのである。それは經濟の前に精神を沒入することではなくて、精神によつて經濟を征服することなのである。それは古るき經濟的から新らしい經濟的世界へゆくことではなくして、經濟的世界を廢止して精神的世界を創造することなのである。それは經濟的財の世界を改造することではなくて、「經濟財」の世界から「文化財」(Kulturguter)の世界へと革命することなのである。人間が自然の遊戯に奔弄されることでなくて、人間的自由(Menschliche Freiheit)を把握することなのである。

「われ〳〵が努力する目的を、人間的自由といふ。」(註八)

(註八) Von kommenden Dingen, S. 76

數と量との世界では利害が行動の動機であり、「成功」が行動の最高の指導者である。從つてかくのごとき世界では物も、人も、神も　手段にまで墮して、「人々は虚僞から虚僞へとさまよひ」、そしてそれを人々は生活といひ、勞働といひ、または創造とまで呼んでゐるのであるが、(註九)目的人の世界では、地上における外部的な幸福の大小などは問ふところではない。何となれば「われ〳〵の願望は功利でも、利潤でもなくて、神の法であるからである。(註十)彼曰く、われ〳〵は所有を欲するがためではなく、權力を欲するがためではなく、また幸福を欲するがためでもない、われ〳〵は人間の精神から崇高なものを輝かせるためなのであると。(註十一)

(註九) Kommenden Dingen, S. 39

(註十) Ebenda, S. 39

(註十一) Ebenda, S. 366

二、

・事物の最奥の内部は常に靜默である。中心から離れるに從つて運動の回轉は激しさを增すのである。(註十二) 日々の喧騷な進轉は、ただ外部的な激動であるに過ぎない。中心は「星のごとく靜かに」移る。(註十三)

(註十二) Ebenda, S. 21

(註十三) Neue Gesellschaft, S. 13

精神の王國は星のごとく靜かな世界である。かくのごとき世界に對しては、外部的なものは何等の權威をもたない。精神の基礎のうへに立たないものは、「目的人」の前には屑である。單なる階級鬪爭は、それが避くべからざるものであるにしても、人生を救ふものではありえない。人生を救ふものは、ただ内部から、ただ世界の最深の自覺からのみ、そして正義と自由の名において、人類の贖ひと神の榮光のために、來たるものである。(註十四)

(註十四) Rathenau, Die neue Wirtschaft, (Gesmmelte Schriften, 5. Band) S. 261

三、

ラーテノウはその哲學をディルタイから學んだ。ディルタイの影響は彼の哲學の基礎を築きあげてゐる。即ちディルタイが主知主義に反對して「精神の力」(Gemutskrafte)なり、體驗(Erlebnis)なり、若しくは意慾(Wollen)なりを説いたように、(註十五) ラーテノウもまた知性なり、自然科學なりによつては、到底世界理解に到達ることすができな

いと信じてゐる。そして直接經驗の世界は意慾若しくは精神の力によつてのみ理解することができるものと考へる。

（註十五）ディルタイ曰く「われ／＼は純粹の知的道程をとほして說明（エルクレーレン）するが、しかしわれ／＼は會得における凡ての精神力の協同によつて理解（フェルシテーエン）すると」（W. Dilthey, Ideen über eine beschriebende u. zergliedernde Psychologie, Akademie, 1894）

主知主義（Intellektualismus）の哲學は浪曼主義に對立せられる場合もあるし、若しくは主意主義と對立させられる場合もある。前者の場合には主知主義はベーコン等一派の自然主義または合理主義の哲學を指すのであり、後者の場合にはヘーゲル一派の汎理的、哲學であり、概念の證法的發展によつて世界を證明しようとする唯心論であるが、その何れの場合でも、主知主義の根本原理をなすものは「知は力である」とするの信條である。ラーテノウはかくのごとき哲學の根本に向つて挑戰する。彼に從へば知力は王笏でも拍車でもなくて、單なる道具である。（註十六）

（註十六）Mechanik des Geistes, S. 320

彼は知性と靈とを對立させて、知性は固定、性急、矛盾、混亂、苦痛を示すのに對し、靈は響音、着色、明瞭、單一を示すものである。一方は多く要望して何ごとをも信仰しないのに對し、他方は多く信仰して何ごとも要望しない。知性にとつては靈の把持は不賢明で、夢想的で、誇張であるが、靈の把持にとつては知性は不安で、貪慾で盲目である。知性は要望し爭闘するに對し、靈は感得し創造すると。（註十七）

（註十七）Ebenda, S. 63-4

彼に從へば知性の最大の任務は「知る」ことである。即ち事物を評價しまたは實現するために、先づそれが何ものであるかを知らねばならぬ。そは思惟の二つの領域をもつてゐる。數學及びディアレクチイクがこれである。即ち量の計算及び概念の計量がこれである。それ故に知性は外部的統計的經驗には役立つのであるが、感性的及事物的には評價の誤謬を導くのである。眞實なる思惟の規範は直觀である。直觀こそ感覺、藝術及先驗的への秘奥にと突入する力である。(註十八)

(註十八) Ebenda, S. 54 ff

科學は靈の王國を證明することはできない。それはたゞ地上の世界に役立つだけである。それは思想上の旅行者にとつては一つの「地圖」ではありうる。こゝに山があり、河があり、彼所に町があり、湖水がある。若し正しき道をとれば、われ／＼は目的の場所へと到達することができる。或はどの道が近道であるか、どの道が山岳重疊してゐるか、どこに自由な天然があるか、どこに文明があるか、われ／＼は「地圖（ラントカルテ）」によつてこれを知ることができるであらう。しかし如何なる地圖もわれ／＼がどの道を行くべきかを語らない。如何なる地圖もわれ／＼の心がどこにわれ／＼を求めてゐるか、またどこへわれ／＼の義務が求めてゐるかを語らない。科學は計量し、記述し、說明するが價値批判をしない。評價と撰擇（ヴェルトングヴァール）とがなくては目的へ目ざすことはできぬ。それ故にわれ／＼の理性的行爲が目的と窮極とを要求するものである以上、人間の活動にとつては、心が最高の決定者である。(註十九)

(註十九) Kommenden Dingen, S. 16-7

知性の最高事業は自己破壞である。そこに屍にまで墮せしめる「知の王國」がある。そは心を無情にし、靈を隔てる。(註二十)

((註二十) Reich des Geistes, S. 339

眞實が心胸を打つものはエネルギーである。凡ての眞實なる言葉は反響するエネルギーである。生命と信仰とを生み出す思想は、ディアレクチークな理解の迷宮のうちに生れた思想ではなくて、感情の血腥い胎内に生れた思想である。凡ての證明は單なる說伏であり、幻滅(トイシユンク)である。人が眞理を把持したと信んずることは人が思惟したがためではなくて、體驗したためである。何となれば目に見ゆる世界よりも、精神のうちに感得する世界は、よりよく眞實であるからである。この世界において、矛盾の嵐が去つた後に、影響を與へる唯一のものは、自覺への要求である。そは晝の騷々しさが去つて夜の靜けさがきた時に低く語る。生命の名において語る。そこには證明は役立たなくて、直觀が感情を强制する。若しこの小供らしいエネルギーがないとすれば、ただ學者の思想的遊戲と美的喜悅とが殘る。「かくして心が目的を、自覺が道を保障する。」(註二十一)

(註二十一) Kommenden Dingen, S. 61-2

われ〳〵が創造するものは深奧な無知な衝動(ドランク)からくる。われ〳〵が愛するものは崇高な力によつて觀る。われ〳〵の心配するものは知ることのできない未來の世界に屬する。われ〳〵の信仰するものは「無限の王國」に住む。これ等の何ものも證明することはできないが、しかも何ものもこれより確實なものはない。これ等の何ものも觸知すること

はできないが、しかもわれ〱の生活の凡ての眞實なる歩みは、これ等の表明すべからざるものの名において運ばれる。(註二十一)

（註二十一）Ebenda, S. 60

「われ〱は早朝から深夜まで何ごとをなすのであるか?」われ〱はわれ〱の意欲するもののために活きる。知性は、われ〱に何をなすべきかを敎へる力ではない。われ〱の生活の指導者は知性ではなくて意欲なのである。意思は、それが動物的でない限り、靈の泉から生れる。「人生のより大にしてより貴き部分は意欲から成立する。」凡ての意欲は證明することのできない愛と好みとである。そは靈の一部であり、その傍に、宛かも「世界の舞臺」への入口に立つ符付賣りのように知性が、數量を計へつゝある。(註二十二)

（註二十二）Ebend.

「われ〱は何を意欲するか?」それはわれ〱の知らないものであり、しかも不可侵に信仰するものである。そは證明することができないのであるが、しかも知的證明よりは遙に强い證明をもつ。プラトウやクリストや、ポウルの、證明なしに叫んだ言葉は、凡ての三百代言が論駁することができるにしても、しかもそは不滅であり、その凡ての言葉が、地上の物理的、歴史的、若しくは社會的理論よりも眞實な生命をもち、そしてより多くの信仰を燃やすのである。若し證明といふことを嚴格にいふならば、ユークリッド幾何學でさへそれに堪えることはできない。しかも尙ほ世界は深き眞理感をもつて常に浸透しきつてゐるのである。(註二十三)

（註二十三） Ebenda, S. 60-1

たゞ心をとほしてのみ世界の自由への道を指導することができる。（註二十四）

（註二十四） Ebenda, S. 24

四、

ラーテノウは現代社會生活の特質を「機械化」(Mechanisierung)にあると考へる。生活の機械化とは一般化と、機械的他制主義とをその內容とする。卽ち個性主義に對して一般化である。自律に對して他律である。目的に對して手段である。人格に對して機械である。靈に對して物質である。

機械化の現象は 個別經濟が破滅した時に始まる。交換財が蓄積され、交換が分業化し、經濟制度から人格の退場が始まる。機械が發明される。生產の集中と分業と、從つて非人格化とが促進される。生產の機械化は所有の機械化を伴つてくる。「所有の機械化を資本主義と名づける。」資本主義の發達は、一切の經濟制度を完全に機械化する。獨り經濟制度だけではない。近代國家の發達は、政治生活のうへに官僚制度を築きあげた。一切の社會制度が、一般化と、集中主義從つて强制的他制制度へと進んだ。そして目的の代りに手段、人格の代りに機械が、一切の社會生活を規律するの規範となつた。卽ち生活の沒目的的、沒價値的廻轉としての機械的生活樣式(mechanistische lebendform)をもちきたしたのである。現代社會生活がこれである。（註二十五）

（註二十五） Rathenau, Zur Kritik der Zeit (Gesammelte Schriften, I. Band), S. 45 ff.

機械化は、論理的に啓蒙された人間の意思の力から生れたのではない。それは人間の自由にして熟慮的な目的から生れたのではなくて、それは沒企圖的に、或は人間の知らない間に、人口の法則(Bevolkerungsgesetz)から生れた。それは如何に深く合理的であり、論理的の仕組であるにもせよ、無意識的過程であり、また無精神な自然的出來事である。力の權衡、爭鬪、利己心の非道德的立場に立つて、原始的社會への道に登る。「昔の人はその力と愛とを彼の仕事に注いだ。」彼は事物のために活きることを望んだ。彼は彼の愛する、親しい人々の狹い範圍のうちに住むだ。やゝ離れて彼の同僚が住むだ。そして彼の鬪ふ敵は遠く離れて控えてゐた。しかし新らしい人は事物のための生活することを欲しない。彼は所有のために鬪ふ。彼の行くところ、彼の目の達するところ、そこに他人がある、他人は敵である。彼と人との間には垣が立つてゐる。彼は垣を越えて、仲間を利用さすることがあるにしても、指導する人も、される人も愛のためにではなくて、利益のためである。各々が他人の目的のための手段なのである。役立たなくなつた時に棄てゝしまう。製造者にとつては、彼の同業者は競爭者である。從つて敵である。消費者は手段である。契約者は敵である。共同者は手段である。彼は、彼と關係ある凡ての人から何ものかを收益することを求める。求められる人もまた彼から何ものかを求める。人と人との關係は相互的な敵意と猜疑とである。

人と人との間における敵意から、團體と團體、種族と種族、民族と民族との敵意が生れる。

これ等の經驗は、哲學と、先驗的確信が、直觀の形式として、永遠の反影として存在することを否認するの思想によつて高調される。そして利益の實證、知力の專制、感情の奴隸化へと導かれてゆく。(註二十六)

(註二十六) Kommenden Dingen, S. 46-9

機械化は物質的秩序である。そは物質的手段と物質的意思とから成立する。そは地上の行動を非精神的傾向へと指導する。その傾向力から全く逃れることはできない、最高に精神化された人も、經濟の奴隷と化する。世界は商人や給仕人の世界となり、そして何人も時代の着色から免れることはできない。それが數世紀の間に、人間の精神に影響したことだらう！分業（アルバイツタイルング）の時代は勞働の專問化を求めた。固定した規範と、實用的規律の間に立つて、事件の沒目的な變化のぼんやりしたパノラマを見つめてきた精神は、偉大なものを小さく、小さいものを偉大だと見るようになつた。無價値な、無責任な判斷が榮えて、驚異と不可思議とが沈んだ。尊ばるゝものは數と量とである。思想は長さ、廣さ、厚さと幅とによつて計算されるものにまで墮した。道德的觀念は死滅して、性急な判斷が不可避となつた。誤謬と幻滅とが來たり、心は懷疑的となり、人々は耻恥を失つた。われ／＼は知識は力、時は金であるといふ。そして知識は沒認識に、時間は沒喜悅のうちに過ぎる。物自體は無視されて、凡てのものが手段と化する。人も物も神も手段と化する、われ／＼は文明の頂點にゐながら、たゞわれ／＼の祖先が奴隷に許るした生活、氣持、不安、喜びを經驗する運命のものとに置かれてゐるのである。

われ／＼の喜びは小兒の、奴隸の、若くは低調な女の喜びである。ぴか／＼と輝き、そして嫉妬を誘ふ所有（ベジッツ）と、享樂と、感能的陶醉(Sinnenrausch)とがこれである。所有の喜びは、貨物への狂氣的貪慾へと進む。彼の必要以上の何百倍ものものが蓄積される。沒價値の貨物が倉庫に滿つる。低惡な享樂が近代都市の喜びである。未來の不安の一瞬間をも感ずることなしに人々は享樂に耽る。陶醉、享樂、犯罪とが世界に與へられる。[註二十七]

（註二十七）Ebend, S. 38-41

機械化は強制組織(Zwangsorganisation)である。從つて人間的自由と兩立することはできない。そこでは、各個人は彼の勞働の尺度を發見することも、彼の生活の必要よりより以上の標準をも發見することはできない。彼はたゞ外部から與へられた規範、競爭のうちに規律される。彼は彼の力と希望との標準に從つて働いただけでは不充分である。そは他人の勞働量と比較されねばならぬ。半勞働または遲勞働は無價値である。世界の勞働は軍事統帥者から郵便脚夫に至るまで、職人から財界の人に至るまでAkkord-und Rekordsystemのもとに立つてゐる。各人に對して丁度他人からせられるだけのものが要求される。昔の職匠は愛と美の精神をもつて彼の仕事を仕上げた。機械の世界では、最低の價格がよくて、愛は計へられてはゐない。計へられるものは客觀的の力である。

人々は彼の活動の撰擇においても、若しくはその勞働の規律においても自由ではない。人々が一般のことに適してゐるか、若しくは專問的のことに適してゐるかは問ふところでない。凡ての人は專問家として使用される。人は生れながらにして商人に、教師に、技師に、昆虫學者にと運命を强制される。若し昔の騎士や職匠や、豫言者や、冒險者のようなものがあつても、彼は現代においては、最も賤しい務めを務めないではゐられないのである。

强制はこれだけに止まつてはゐない。自己責任もまた人間から除きとられる。何となれば、機械化の要求は、凡ての人、凡ての部分が、一冇機體となるまでは停止するものでないからである。かくして大きなものも、小さなものも、一つの論理形式に强制される。消費組合も、組合も、商會も、社會も、同盟も、官僚的、職業的、國家的、教會的のあらゆる組織も、複雜のうちに、人間を離合する。何人も彼自身のためでなく、凡ての人が從屬する。昔のギルドの職匠も從屬的でなかつたとはいへないにしても、しかしそは商業上の雇傭者が從屬的であるといふのとは意味が同一

でない。ギルドの職匠の從屬は疑を容れないことであるにしても、それにもかゝわらずそは内部的自由に滿たされてゐた。機械化の社會は自由の幻滅に蔽はれてだけなのである。そは昔の暴君が劍をもつてなし遂げえなかつた專制を仕上げてゐるのである。そは從屬を永久化する。

個人的の從屬は、團體的の從屬に比べると物の數でもない。團體組織としての機械化は人間のエネルギーを、單一としてでなく、流れとして要求する。フエーローのピラミッドを築くために使はれた奴隷だけでは、近代社會では、機械製造の一國にも足らぬ。ナポレオンの軍隊なぞは今日の一炭坑に使役するほどの數にもならぬ。われ〳〵の機械はその何々億といふ馬力とともに何々億といふ人力を要求する。機械化原理の内部的必要をとほしてではなく、この進化の從屬的狀態として、精神的勞働と體力勞働との分化は永遠化される。そして凡ての文明社會において二種類の人民が分裂される。そは血族であつて、しかも永久に分裂して、上層階級と下層階級とを形成する。しかもこの兩階級とも强制によつて支配される。上層階級に屬する何人も、彼の自由には、彼の地位を決することはできぬ、下層階級に屬する何人も、彼に資本と知識とを與へるところの傭倖をもつのでなくては、その地位から脫却することは不可能である。かゝる僥倖は、移民の場合ででもなくては、殆んどありえないことである。產業界に入つてゆく知識階級の青年のうちの、殆んどただの一人も、無產者階級から成るといふ例を知らないのである。

かくのごとき强制は古來背つて存在したことの類例がない。ヘロットや、農奴にしてもそうだ。農奴の仕事は苦に滿ちたものであつたにしても、尙ほ田園生活の美しい環境を享樂することができた。今日の無產者階級は、命令を受けないが指令をうける。彼は伍長のほかの主人に奉仕しない。彼は奉仕しないで自由人として自發的に働く。彼の人權は雇傭者と同一である。彼は住所の自由をもつてゐる。然り、何人も彼を從屬せしめるものはない。法律上

彼は自由人なのである。しかし法律の境を一歩越えると闇黒である。個人の代りにブルジョア社會が彼を支配する。彼の生活は何十年も何十年も退屈な單調さである。彼の勞働は無精神なのである。われ〳〵の時代は動物の虐待について政府の干渉する時代ではあるがその虐待を同胞の間にする場合には正當で合理的であると考へられる。被壓迫階級の人々か現代社會制度の永久のために投票しないと攻撃の合唱が起る。(註二十八)

(註二十八) Ebenda, S. 41-6

現代文明の特色は靈の喪失(Seelenlosigkeit)である。勞働も、敎育も、藝術も、文明も魂を喪失した。そしてただseelenlose Bildung, seelenlose Statten, seelenlose Stamme, seelenlose Glaubensform, seelenlose Kunstform, seelenlose Ideale, seelenlose Zivilisation が殘された。魂が失はれて機械化が殘つた。人格が失はれて機械が殘つた。目的人が失はれて機械人が殘つた。人も、物も、藝術も、哲學も、社會も、制度も、みな魂に餓えてゐるのである。

ラーテノウは現代社會の特質をかくのごとくに解した。(註二十九)

(註二十九) Mechanik des Geistes, S. 37-46

五、

現代社會の救濟者として立つてゐるものは、社會主義である。こゝには博愛的慈善論や、無原理の社會政策やは問題ではない。それ等はマークスの所謂「慈善袋」であるからである。問題とされるのは社會主義である。社會主義に當來社會の原理に價ひするか。

マルクス派社會主義は自ら科學的社會主義と稱する。それは歴史的進化の必然のうへに社會主義の基礎を置いたためであるが、そは一面には歴史を形而學から解放してディアレクチークの世界へ移したことである。エンゲルスの言葉でいへば自然はディアレクチークを證明するのである。しかしそはヘーゲルの理想主義を意味するのではない。マークス・エンゲルスに從へば、歴史は唯物的に解釋せられねばならぬ。從つて科學的社會主義の理論的基礎をなすものは、辨證法的唯物史觀だといふことができるのである。つまりヘーゲル哲學から辨證法を抽きとつて、理想主義を排斥し、そして理想主義の代りに、唯物主義をもつてこれに代えたのである。(註三十)

唯物史觀に從へば、人間の存在を決定するものは人間の意思ではなくて、それとは反對に社會的存在が、人間の意思を決定する。(註三十一)

人間は歴史を造る。しかしそれは人間によつて撰まれた條件において自發的に造られるのではなくて、彼等が彼等に與へられた他働的原因からそうするのである。(註三十二)

勞働者階級は實現すべき理想があるのではない。たゞ新社會の要素となることが彼等の歴史的使命であるに過ぎないと。

(註三十) F. Engels, Herrn Eugen Duhrings Umwälzung des Wissenschaft

(註三十一) Marx, Vorwort zur Kritik der politischen Oekonomie

(註三十二) Marx, Der achtzehnte Brumaire

ラーテノウは次のように述べる。

唯物史觀に從へば、人間は凡てのものを環境に負ふのである。血液も、空氣も、地球も、地位も、所有も、彼を拘束する。外界における凡ての變化はそれに相當する內部的變化をもち來す。歷史は到るところに唯物史觀を證據立ててゐるように見えてゐる。しかしかくのごとき理論はその根本において誤りである。それは肉體が精神に先だち、物質が精神を形成するといふ誤謬を前提としてゐるのである。若しわれ／＼が反對の前提に立つとすれば、即ち精神が肉體を形成し、意思が世界を高きに導き、われ／＼の內部に崇高な焰が燃えてゐるものだとすれば、人間は彼自身の製作であり、彼の運命は彼自身の作物であり、彼の世界は彼自身の作品である。若しそうだとすれば、海國民は海によつて惠まれた國民ではなくて、國民が海をもつことを望むだのである。地上の寶庫をもつてゐる國民は、幸福な發見者ではなくて征服的國民である。文明の進步をもちきたすほどの人口の稠密さをもつてゐる國民は、單なる多產の遊牧民ではなくて、子孫を願望し、そしてその子孫のための土地を用意した國民である。若しそうだとすれば高貴な血は、單なる自然の遊戲(シピイール)ではなくて、自己發展を要永する精神の產物なのである。(註三十三)

(註三十三) Kommenden Dingen, S. 56-8

地上の生活は精神に與へられる形體と武裝とを意味する。即ち精神がその權利と、存在と、その未來とのために戰ふための形體なのである。若し精神が無形の戰に適してゐるとすれば、それは有形の戰ひにも適する。貴き被造物は美を創造する。健全なるものは幸福を、強きものは權力を創造する。貨物それ自身のためではなくて、精神的存在の地上における着物としてである。武器の所持者が武器を規律するように、武器が所持者に反應する。國民がその美しきものとなるの力をもつたとすれば、その美のうちに、內部的尊貴への刺激を見たのである。

個人は終局目的(Endzweck)なのである。彼においては見ゆる創造の連續は終を告げ、「靈の連續」が始まる。靈の覺醒が始まる時に、彼はもう地上の特權なり、利益なりを求めはしない。貧困、病苦、孤獨も、彼に使へ、彼を祝福する。國民は彼の母である。そは永遠の仕事のために、美と、健全と、力とを要求する彼の地上の遍歷を見守る。われ〳〵の近隣も、遠方にあるものも、みなわれ等の母であり、兄弟である。個人の犧牲は、われ〳〵が生き、且産むためには小さい價である。(註三十四)

(註三十四) Ebend, S. 58-9

社會主義の父は、豫言者ではなくて學者であつた。彼は信を人間の心に置かずに、科學に置いた。この不幸な人は價値を知り、目的を見出だすの力が、科學であると考へた。彼は先驗的世界觀と、靈感と、永遠の正義とを排斥した。だから社會主義は決して建設的の力となることはできなかつた。そは嘗つて光明ある目的を示したことはなかつた。それの最も情熱的な叫びは不平と彈劾とであつた。それの活動は煽動的で無價値であつた。そは世界觀哲學を建設することの代りに物質的貨物問題をもつてした。そしてこの所有の、誰れのもの、彼れのものといふ、憐れむべき問題を、事務的な經濟學及政治學をもつて解決しようとした。無論、多くの社會主義者の間に、問題を論理的に、若しくは人間的に解釋しようとしたものがないのではなかつたが、これ等の考へは、社會主義運動の中心に置かれてはこなかつた。舞臺(ビューネ)の中央には唯物主義が立つてきた。彼の力は愛のうちにでなく、訓練のうちにあつた。彼の啓示は理想ではなくて巧利であつた。

否定から一政黨運動が起る。世界運動ではない。世界運動(Weltbewegung)は豫言と豫言的意義とから生れる。豫

言は單一で、理想的な言葉である。それが神と呼ばれても、信仰と呼ばれても、祖國と呼ばれても、自由、人道、魂と呼ばれてもいゝ。財と財の分配とは彼にとつては單なる第二義的なのである。生命も、死も、人間的幸福も、貧乏も、病氣も、戰爭も、最後の目的でも恐怖でもない。

科學的社會主義は嘗つて人間の心を燃やしたことがない。それは利害の心と、恐れとをもちきたした。利益と恐れとは一日を支配することはできるが一時代を支配することはできない。

世界を變革しようとすれば、人々は外部からそれを壓迫しても駄目だ。われ〱は内部からそれを把握しなくてはならぬ。世界は、心のうちに響く凡ての言葉のために開かれてゐるのである。(註三十五)

(註三十五) Ebenda, S. 70-3

社會主義は物質的欲求から生長する。それの中核は財の分配である。その目的は經濟的秩序である。今日、社會主義が異端からの理想を同化しようとしてゐるにしても、彼にとつては理想は無用である。それは地上から地上へ導く。その最後の信念は反抗であり、その最大の力は憎惡の情であり、その窮局の法悦は地上の榮福なのである。(註三十六)

(註三十六) Ebenda, S. 16

人間の社會が完全に社會化されたといふ標準が一つある。そしてただ一つある。それは働かざるものが收入をもたない社會なのである。それは兆候ではある。しかし目標ではない。それは、それ自身において決定的ではない。目標は如何なる種類の收入の割當でもなく、財産の分配でもない。それは勞苦の減少でもなく、享樂の增大でもない。それは無産者

的狀態の廢止(Abschaffung des proletarischen Verhaltnisses)である。そは傳來的奴隷制度の廢止である。そは傳來的な社會階級の廢止である。そは人間によつて人間を奴隷化することゝの廢止なのである。

しかしそはただ政治的の目標である。そは最後の目標ではない。如何にして經濟や社會が最後の目標がを語ることができよう? われ〳〵の最後窮局の目標は人間の靈の發展であるからである。(註三十七)

(註三十七) Neue Gesellschaft, S. 5.

實際的社會主義はただコレクチーフのものとしての意味をもつ。世界觀としてではない。しかし數學的正義による機械的建物は、當來社會の原理ではありえない。(註三十八)

(註三十八) Mechanik des Géistes, S. 302

六、

地上の凡ての事物は、第二の性質に再生するまでは、善くもなく惡るくもなく、若しくは有價値でも無價値でもない。習慣や友情的性質から生れてくる善は、心の力から再生したものでない以上、善ではない。自然は、精神のこもつた眼から見たものでなくては自然ではない。自由をかち得た傑作は、藝術をとほして自然に再生したのである。自覺と自由意思とをとほして、義務と、仕事の愛にまで再生することは、機械化(メカニシエルング)の要素とは兩立することができない。

國家が幾多の高貴な源泉から生れ出たといふことは事實である。家庭愛、種族的友情、文化と經驗との民族的共同感、宗教の同一感が、その王國を超自然的にまで高めたのである。しかし決定點はそれの起原の問題ではなくて、存

在の内在的必要なのである。決定點は神聖な制度が、個人の必要よりも高きに立つてゐるといふ自覺である。人は地上の幸福のために造られたのでなくて神の使命の充實のために造られたのであるといふの自覺である。人間の社會は目的結合（Zweckvereinigung）ではなくて靈の故國（eine Heimat der Seele）であるとするの信仰である。

科學及藝術、軍隊及國家における活動は、ただそれ自身にだけ責任ある活動といふものの存在しないといふことを數へる。凡ての仕事はそれ自身と、そして世界に責任をもつ。凡ての創造は義務と必要の鎖によつて結合される。絕對の我儘と離脱とは、利己心の耻辱をもつて印しづけられる、といふことである。

神への責任と感謝とは、一人の事闘を各人の事闘とし、各人の事闘を一人の事闘にする。われ〳〵の共同責任なき不幸も罪惡もありえない。全人の運命と離れて權利もなく、義務もなく、幸福も權力もない。機制體にして、若し一度この認識のうへに精神を同復したなら、それは最早や經驗的均衡狀態ではなく、それは創造的世界の總原理において純粹な有機體である。かくしてエネルギーが天帝の心から心へ汪洋として流れ、地球の生活は、有機的神政の像にまで到達するであらう。

機械化の害惡は、非精神的な力が内部的生活を統制することに始まる。そこに運動は無責任となり、務めの義務が放擲され、仕事の主體であるべき人間を、それの奴隷にまで墮せしめる。ここに不自由、無意味な勞苦、敵意、窮乏、精神的死滅の泉が横はる。(註三九)

（註三十九）Kommenden Dingen, S. 51-3

われ〳〵が客觀的事業としての機械化から超越した時に、われ〳〵が内部から精神的進化としてそれを理解する時

に、われ〳〵は痛切に感ずる、必要なことは機械的でなくて、精神の再指導であるといふことを。今日は魂の夜明け（アムブルッフ）の時代である！主知主義の時代が破綻して、それの果實が熟した！魂からの最初の射光が知的世界と、機械的秩序とに觸れた瞬間に、生命の靈的指導と、機械的秩序への魂の浸透がもたらされた時に、力の盲目的の横行から意識的な、そして自由な宇宙、然り人生に價ひする宇宙が生れる！（註四十）

（註四十）Ebenda, S. 54-5

人間の心は皮膚のごとく鋭敏である。必要が鐵を破る時に、人の信仰は山を動かす。時代の機械化が固化すればするほど内部的の焰は、いよ〳〵情熱に燃える！（註四十一）

（註四十一）Ebanda, S. 47-50

七、

失はれたものは魂である。回復すべきものは魂であらねばならぬ。支配してきたものは唯物的秩序である。來るべきものは理想でなければならぬ。然り、利益の代りに愛、機械の代りに人格、專制の代りに自由であらねばならぬ。われ等をして凡てのものを、人を物を、勞働を藝術を、秩序を世界を、悉く精神化せしめよ。魂の指導のもとに、地上のあらゆるものを、再生せしめよ！ Ein Baum wächst in Freiheit.

室　伏　高　信

階級鬪爭に於ける知識階級、文化、及び藝術の問題

一、はしがき

この一文を書く動機は、はじめ、有島武郎氏の「一つの宣言」（雜誌改造一月號）を讀むだ時に始まる。それから後三ケ月ばかりの間に、私はこの宣言を中心しての、有島氏や、片上氏や、廣津氏や、杉森、加藤、平林、細田、堺、その他文壇または社會運動の諸家の論文を、私の眼に觸れただけは讀むで見た。私は無論諸家から多くのものを與へられた。しかしまだ滿足さが充分であるとはいへない。

問題は必ずしも新らしくはない。或は昔から屢々社會主義者の間なぞに論じられた問題だともいへる。しかしこの問題は時代の大きな動きのうへに根を下ろしてゐる。そして時代の動きとともに、常に新らしみを增してゆくのである。何となれば新らしいといふことは珍らしいといふことではない。珍らしいことは、却つて多くは古いことなのである。新らしいことは、より多く現實的だといふことであるからである。

二、

社會主義思想の勃興した過去數年の間に、社會主義に關する理論は、各方面の入たちによつて、可成り多く論んぜられた。特にマークス派社會主義については、河上肇、山川均、高畠素之、堺利彥、福田德三等の諸君によつて、飜譯、解說、論評、攻擊と、理論上の根本問題の殆んど凡てに亘つて手を着けられてきた。しかしその割合に、マークス主義の根本問題の一つである階級の問題についてはあまり多く論んじられてきたようには思はれない。私自身も、こゝにこの問題を論ずることが主題ではなくて、階級鬪爭における知識階級の地位態度及任務を論ずること、並に階級または階級鬪爭と藝術或は汎く文化との關係を論ずることが目的であるが、しかしこの問題に入るには、先づ階級の問題から入つて行くことが必要なのである。

階級問題の基礎をなすものは階級分晰である。また階級分晰には、階級の存在を承認するとすれば、その階級の區別の標準をどこに置くか、また如何なる種類の階級に區別するか、の二つの命題が含まれてゐる。階級の問題を論ずるには先づこれ等の點に、しつかりした概念をもつてかゝることが心要であるが、加藤一夫氏が指摘したように、文壇の諸家を初め、この點についてあまり無頓着に過ぎてゐるのではないかと思ふ。即ち知識階級の問題を論ずるのに、その知識階級が、現代社會で如何なる地位をもつてゐるか、若しくは如何なる社會的職分をもつてゐるか、といふような、第一義的に必要な問題を閑却して、砂上の樓閣のうへで爭つてゐるといふ感を免れないのである。有島氏は自ら知識階級をもつて任んずるとともに、知識階級に屬するものは、みなブルヂョア階級のうちに入れてゐるように見える。有島氏のような、知識とともに、他の收入の源泉としての土地または他の生產手段を直接間接に所有してゐるものは、知識階級に屬すると否とにかかわらず、一個のブルジョアであることに、何人も異論のないことであるが、同氏に從へば、マークスでも、クロポトキンでも、レニンでも、みな一個のブルヂョアであり、文壇の、原稿生活を

する有名無名の士がみなブルヂョアであり、概して知識によつて衣食するものはみなブルヂョア階級に屬してゐるものである。有島氏のような知識ある人は、その財産を失つてしまつても、尚ほ「永年かかつて養はれた知識と思想」とがある以上、それはプロレタリアートより優越な階級に屬してゐると考へてゐるらしい。(註一)だから有島氏の說に從へば、「知識と思想」とをもつてゐるものはプロレタリアートとは別の階級に屬するものであること、そしてその別の階級とはブルヂョア階級であること、この二つの說を肯定してゐるとしか思はれない。このプロレタリアートでなければブルヂョアであるといふ考方は、私にはマークス主義の影響であると思はれるが、また後に述べるように有島氏には唯物史觀の影響が非常に大きいと思はれるのであるが、階級の區別についてのマークス主義の影響は、有島氏にはこれ以上及んではゐないらしい。何故ならマークス主義は、マークス自身が「資本論」のうちで述べてゐるとほり、階級分斷の基礎を收入または收入の源泉においてゐるのでもないからである。(註二)

(註一) 我等三月號

(註二) K. Marx, Das Kapital. IV. Bd. S. 422

米田博士(庄太郎)は、現代日本の學者のうちで、一番多く階級の問題を論じてゐるし、また同氏は社會學の專攻者であるからわれ〳〵の聽くべきことが甚だ多いと思はねばならぬわけである。同博士の見解は有島氏の考方とは大分違つてゐる。即ち同博士は知識階級の凡てがブルヂョア階級に屬するものとは思つてゐない。知識階級に屬するものであつても、「財産のない」ものは矢張りプロレタリアなのである。そしてこう考へることが、「科學的」であるといふてゐるのであるから、米田博士に從へば、有島說は非科學的だといふことになるのであつて、非有島說の側からいふと大に意を强うするわけであるが、それでは米田博士の「科學的」階級分斷はこの「財產」の有る無しを標準とするかとい

ふのに、そうでもない。否、米田博士に從へば、「財産の無い階級」即ちプロレタリヤ階級はあるけれどもそれに對立する「財産のある階級」といふものは現代には存在しない。同博士の科學的見解に從ふと、ブルヂョア階級の對立する階級はこのプロレタリヤ階級ではない。それは勞働者階級なのである。勞働者階級とプロレタリヤ階級とは同一階級ではなくて、全く違つた概念をもつ。プロレタリヤ階級とはただ「財産の無い」階級といふだけの意味しか無いからであると。勞働者階級とブルヂョア階級とは、米田説によると、現代社會において根本的に重要な社會階級であるが、然らばこの二つの階級は何によつて區別するかといふに、別に何んにも區別の標準になるものはない。ただ一方は財産があつて贅澤な生活ができて、その財産からくる威光で現代の社會または政治に野心があるといふことであり、他方は財産がなくて「賃銀によつて獨立の生活」を營む人々を云ふのだとある。(註三)それではここにも財産のあるなしが問題の要點かといふに、そうなるとプロレタリヤと勞働者階級との區別が分らなくなる。それでは「野心」のあるなしが問題の要點かといふのに、まさかにそれほど馬鹿氣た考方をしてゐるとも思へない。それでは「獨立の生活」といふことに重點があるかどうか。そうなると賃銀を受取つても、その賃銀が生活を支へるに足らない婦人勞働者の一部なぞは勞働者階級でなくてプロレタリヤだといふことにもなる。そこで最後に「賃銀」を受取ることによつて生活するといふことを中心とするかといふことになるが、ここになると知識階級に屬するものの受取るのは「賃銀」ではないかといふ疑問が當然起つてくる。この點についての米田博士の説明は、私の讀むだ範圍では見えない。要するに米田博士の階級分断は「科學的」を標榜してゐるにかかわらず、その分断の根本となるべき Was bildet eine Klasse? の命題が曖昧で、どこに分断の根據があるのか、さつぱり分けの分らないのを遺憾とする。

(註三) 米田庄太郎著「現代文化人の心理」一九二一―二〇二頁

階級分断の問題を、簡單であるが明確に説明したのは、今度の知識階級の問題に關連しては、加藤一夫氏である。同氏はブルヂョア對プロレタリヤ階級對立の基礎を、絞取と被絞取の事實において、ブルヂョア階級とは絞取者階級、プロレタリヤ階級とは被絞取者の階級だとなしてゐる。（註四）河上博士（肇）は自説を述べたことがあるかないか私は承知してゐないが、マークスの階級鬪爭説を述べた場合に、マークス説が加藤一夫説と同一であることを説明してゐる。（註五）そして河上博士が日本における代表的マーキストの一人であることは一般の定説であるから、博士自らもこのマークス説をとつてゐるものと思はれる。

（註四）「東京朝日新聞」三月八日以後

（註五）「社會問題研究」第六輯

階級の問題は、現代社會問題の燃ゆる問題の一つである。この問題に最も多く寄與したものはマークス、エンゲルスそして、その一派の學徒であつたといふことができると思ふ。或はマークスの階級鬪爭説は、コンシデランの小冊子（註六）から原由したといふ説も荒唐無稽ではないかも知れない。或はまたかくのごとき考は、マークス・エンゲルスに先つて、既にヴイダアルや、ルイ・ブランなぞによつて發表されたといふこともできるであらう。否、共産黨宣言のうちで、マークス・エンゲルスが既にかくのごとき事實を裏書きしてゐるともいへよう。何故なら、共産黨宣言のうちには、サン・シモンや、フーリエーや、オーウエンなぞが、「既に階級對抗（クラッセンゲーゲンザッツ）」に着眼してゐたことを承認してゐるからである。（註七）しかしカウツキーが嘗つて指摘したやうに、この説は、前代の何人によつてよりも、共産黨宣言によつて、深く突込んで論ぜられたといふことだけは、（註八）多くの詮索なしにも、斷定してもいゝことだらうと思ふ。

（註六）Victor Considerant, Principes du Socialisme; Manifeste de la démocratie au dix-neuvième siècle, 1847

(註七) Das kommunitische Manifest (Vorwort von Karl Kautsky), S. 53. Das kommunistische Manifest (Vorwort von Max Adler), S. 45; Das Kommunistische Manifest, erlin, 1919, S. 27.

(註九) K. Kautsky, Das Kommunistische Manifest ein Plagiat, Neue Zeit, 1906, Band XI

マークス說に從ふと、凡て從來の社會の歷史は、一つの例外(註九)を除いて、階級鬪爭の歷史である。そして現代社會は、ブルヂョア階級對プロレタリヤ階級の鬪爭の社會である。マークス說は、階級分析の基礎を無論經濟上の事實においてゐるのである。この點は唯物史觀を奉ずるマークス主義としては當然なことである。しかしここに經濟上の事實といふのは、單に貧乏であるとか、金持ちであるとかいふような、無意味な標準のうへに分析の基礎を置いてゐるのでなくて、絞取する階級と絞取される階級といふ、つまりブディンなぞのいふ、社會經濟的職分(Social-economic function)(註十)の相違の根據によつて區別してゐるのである。そこでブロレタリヤ階級とブルヂョア階級との區別がはつきりしてくるのであつて、ブルヂョア階級とは、プロレタリヤを使用し、若しくは社會的生產要具を所有する階級のことであり、プロレタリヤ階級とは、共產黨宣言の言葉でいふと、ただ仕事を發見することによつてのみ生活し、且つ資本を增加する場合にのみ仕事を發見する階級をいふこととなるのである。(註十一)

(註九) こゝに一つの例外とは、原始共產社會のことである。共產黨宣言では「凡て從來の社會の歷史」とは記錄上の歷史 die schriftlich ud.rli.ferte Geschichteのことだとなしてゐる。エンゲルスに從へば、それは原始的共產主義の時代を例外とするとなしてゐる。(Engels, Herrn Eugen Duhrings Umwalzung der Wissenschaft)

(註十) L. B. Boudin, The Theoretical System of Karl Marx, p. 109

(註十一) Das Kommunistische Manifest (Vorwort von K. Kautsky), S. 31(以下共產黨宣言を引用する場合はカウツキー版

たよる）

マークスは、そしてエンゲルスも、この勞働の絞取被絞取といふ社會經濟的職分によつて社會階級を區別してゐるのであつて、この點からいふと、社會的若しくは社會經濟的職分のうへから、何の根據もない理由によつて社會階級を區別する、一派の人々の階級分折に比べて、マークス說こそ「科學的」社會主義の名に背かないといふことができるのである。この標準のうへに立つて、マークス說は、現代社會階級をプロレタリヤ階級とブルヂョア階級との二階級に區別してゐるのである。そしてブルヂョア階級のうちに、資本家(Kapitalist)と地主(Grundeigenthümer)との二つを分けてゐる。前者は收入の源泉が利潤であり、後者は地代である（註十二）これに對し勞働賃銀（アルバイツローン）をもつて生活の源泉とする「近代勞働者階級」(die Klasse der modernne Arbeiter)が對立するのであるが、マークス說に「近代勞働者階級」といふのは、米田說の「近代勞働者階級」のように、プロレタリヤ階級と違つた概念ではない。近代勞働者階級即ちプロレタリアートなのである。（註十三）プロレタリアートをただ「貧乏な階級」だとのみ觀念する說は、例へば米田說なぞはマークス派の學說によると蒼然たる古色なのである。（註十四）

（註十二）Das Kap'tal, IV. Bd. S. 421

（註十三）Kommuoistische Manifeat, S. 31

（註十四）Boudin, op. cit. .p. 202

三、

ブルヂョア階級とプロレタリヤ階級とが現代社會の二大階級であることには、何人も異論のないことであるが（米

田說は例外）この二大階級のほかに、他の社會階級即ち中間階級はないか。マークス說によると、現代社會は凡てこの二大階級に包含されてゐるのではなくて、現代社會、即ち資本家的生產の行はれる社會では、社會が全體として、この二大階級に向つて益々分裂しつゝあるといふのである。（註十五）從つてこの分裂が完成されるまでは、この二大階級のほかに中間的の存在があるとしてゐるのである。この中間的存在とは、共產黨宣言によると、小商人、商店員、農民、技工、財產で衣食する中流人（Rentier）なぞをいふのである。共產黨宣言ではこれを中間的地位（Mittelstand）ともいひ、また階級（Klasse）ともいつてゐるのである。（註十六）しかしこれ等の中間的存在を、階級といふ言葉でいひ現はしてゐることがあるにしても、嚴格の意味では、これをもつて現代社會における社會階級とは考へてゐないようである。（註十七）何故となら、これ等の中間的存在は、共產黨宣言によれば次第にプロレタリアートに沈むでゆく一團であり、そして最後に、近代資本主義の面前において「衰頽し且つ滅落する」からである。（註十八）

（註十五）Kommunistische Manifest, S. 25

（註十六）ebenda, S. 33,35

（註十七「資本論」第四卷末では、マークスは社會階級をただ「三大階級」に分けてゐる。即ち資本家、地主及賃銀勞働者の三階級だけに分けてゐる。

（註十八）Kommunistische Manifest, S. 33,35

以上のマークス說から二つの疑問が提出される。一つはこれ等の中間的地位が果して衰頹し、滅落（Verkommen und gehen unter）するかといふ點である。このことについては日和見的修正主義者として知られるベルンシタインが詳論したことがあり。（註十九）またマークス主義の反對者が今日まで幾度か論じてきたことであり、マーキストの側

からも既に屢々適當に應戰されてゐるから私はこれまで論んじられてきた諸問題に觸れることを避けるが、ここに注意を要することは農民問題である。何となれば農民もまたマークスに從へば「衰頽し且つ滅落して」プロレタリヤ階級に沈む筈のものなのであるが、ロシヤ革命の經驗は決してこのマークスの豫言を立證しない。自ら純マーキストをもつて任んずるロシヤのレニン曰く、世界史上、始めてこゝに二つの階級――プロレタリアートと農民との二大階級が存在すると。(註二十)第二の疑問はマークス主義は知識階級(Intellektuellen)についてどういふ解釋をとつてゐるかといふ點である。

(註十九) E. Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben edr Sozialdemocratie, Zur Theorie und Geschichte des Sozialismus, 1904

(註廿) この問題については「改造」四月號拙稿「共產主義の農民政策」參照

四、

マーキストの立場から知識階級の問題について、比較的秩序的に書いたものとしては私の知つてゐる範圍ではマックス・アドラアの「社會主義と知識階級」及びカウツキーの「エアフルト綱領」等の數著である。カウツキーに從へば知識階級とは嘗つては「精神のアリストクラティ」Aristokratie des Geistes)と稱せられたものであるが、今日では「有識無產階級」(Proletariat der Intelligenz) 若しくは「有教育無產階級」(Proletariat der Gebildeten)と稱せられるものであつて、それはプロレタリヤ階級の第三種に屬するものである。(註二十一)この階級に屬するものは、カウツキーに從ふと、百年內外も前の時代には、これ等の地位にあるものはごく少數であり、學校も滅多になく、勉學といふことは非常な費用を必要とした。かゝる時代には教育ある人々即ち科學者や、藝術家や、教師、醫師その他の職業人を各方面に需要されたに對し供給が常に不足であつた。ところが、資本家制度のもとでは教育は(Geschaft)となつた。資本家社會及資本家國はその實業を管理するために知識と才幹とを必要とすることになつた。が資本家自身、また支配階級自身は、その全時間を彼等の實業と享樂とに費さねばならぬのであるから、この享樂支配階級は、前代の支配階級などと違つて、自分で科學や技術を修養するようなことをしないで、彼等が雇傭する特別階級の仕事に殘して置いたのである。この制度のもとで、教育は商品(eine Ware)となるに至つたのである。

商品となつた以上、それの相場は市場における需要供給の關係によつて支配されるのが當然なのである。從つて最初教育をうけたものが少なかつた時代には、教育は高き價格を要求した。そして教育を「所有」するものは、少くともそれを實用上の目的に供給したものは、贅澤な生活もでき、また往々にして名譽名聲を博するようになつた。辯護士、醫者、役人、書記、教授なぞがこれであつた。「精神のアリストクラティ」は門地や金のアリストクラティよりも優越だといふことを考へるようになつた。彼等の主として注意を拂ふことは、知識の練磨そのものであつた。教育はかくして力であり、幸福であつた。しかし教育がかくのごとき地位を占めるようになつてから高等教育が急速に發展してきた。高等教育の機關は益々増大してきた。特に學生の數が著しく増大してきた。小商人やその他の中等階級に屬するものは、彼等の子孫を體力勞働者に落さない唯一の方法が教育を與へるにあるといふことに氣がついた。……そしてこれ等の結果は、教育をうけた人が著しく増加したことである。こうなつてくると、教育が一つの商品である以上、それはまた市場相場の支配を免れることはできないから、教育商品が増加して、その價格が下落し、從つてその教育商品の所有者の地位が下落しないわけにはゆかなくなつた。今日では教育商品の市場は在荷過多に苦しむでゐる。ここに教育勞働の方にも體力勞働と同じく、失業者が生じ、そしてまた從つて有教育勞働者の「豫備軍」(Reservearmee)をもつこととなつたのである。ここにおいて知識階級もまた現代社會制度のもとでは疑もなくプロレタリヤ、即ち有識プロンタリヤとして認められるようになつたのである。(註二十二)

(註二十一) Das Erfurter Programm: In seinem grundsatzlichen Teil erlautert von Karl Kautsky, S. 14-5

(註二十二) Vgl. oben, S. 15

カウツキーの指摘してゐるとほり、教育商品の相場が下落して、知識階級の地位がアリストクラティからプロレタリヤへと落ちこむできた今日においてさへ、まだ彼等自身はプロレタリヤよりは何處か上等なものである。(etwas Besseres zu sein als die Proletarier)と夢みてゐる。彼等は無若氣にも、彼等自身をその主人の階級、即ちブルヂョア階級の仲間に入れて喜んでゐるのである。またあるものは、知識階級の從事してゐるのは職業(Profession)であるが、「Trade」ではないといつて、彼等の勞働を、體力勞働から區別しようとし、或はまた彼等の受取る俸給、手當、報酬なぞは「賃銀」ではないといふことによつて、彼等と體力勞働者とを區別しようとするのである。如何にも彼等の階級に屬するものは、ブルヂョアらしい着物を着て、ブルヂョアらしい靴を穿いて、髮を奇麗に分けて、手指が細くて、どこ

となくブルヂョアに類似してゐるところがあるし、またどこまでもブルヂョア顔をしようとする苦惱の情は察する餘りあるのであるが、しかしそれ以外に彼等の社會生活に、プロレタリヤと區別さるべき何ものがあるか。彼等所有するものは生産の手段ではなくて、ただ知識である。然り、賣るべき知識である。彼等はその知識を彼等自身から抽出して、これを勞働市場において賣買するのである。だから彼等の受取るところのものが如何なる名稱のもとに行はれるにしても、彼等の提供するもの、その提供する唯一のものは商品であるのである。從つて彼等の勞働は疑もなくTrade なのである。しかも彼等はこの彼等の所有する唯一の商品の賣買をもつて生活の主要手段(Hauptmittel)としてゐるのであり、且つこの商品の賣買は資本家側に利益を與へる場合にだけ行はれるものであつて、勞働の生産物についての統制權(多くの場合には生産の組織においても は資本家に屬するのであるから、彼等は「敎育商品」を賣ることによつて資本家の統制に服從する知識的奴隷であり、俸給その他彼等の勞働を資本家階級に接續してゐる制度は一種の奴隷制度である。カウツキーの言葉でいふと、彼等の意を注ぐところは、最早や知識の練磨ではなくて、それを賣ることなのである。彼等の立身の最上の道は、彼等の自我の賣淫(Prostituierung)なのである。然り、信念の賣却、黄金結婚、これが彼等の立身またはその生活の維持の、自然的にして且つ必要欠くべからざる手段なのである。(註二十三)

(註二十三) 前掲カウツキー書

五、

社會主義反對者、ブルヂョア學者、またはベルンシタイン一派の日和見的修正社會主義者の間では、知識階級は「新中等階級」と稱せられてきた。(註二十四) しかしこの「新中等階級」なるものは、中等階級としての彼等の新地位を築、代りに、急速に無産者階級への沈落作用の飜弄するところとなつた。ブルヂョア學者や、日和見主義者の學說を證明することの代りに、それは疑もなくマーキストの豫言を證據立てた。知識階級は「新中等階級」となることの代りに急速に「新プロレタリアート」を形成するの道を步むだ。

(註二十四) 私の尊敬する米田庄太郎氏が、かゝるブルヂョア學者の見解に從つて、知識階級を「新中等階級」だと眞似てゐられるのは殘念至極である。

知識階級が、急速にプロレタリヤの地位に沈みつつあることは、現代社會の最も顯著な現象の一つである。ロシアのやうな、共産革命の過程、若しくは無產者階級の獨裁政治の行はれてゐるところでは、この事實は殆んど勿論完成されてゐるのである。その他の諸國でも特に勞働運動の發達してゐるところでは、この現象は著しい。バーナード・シヨウの記るしてゐるところによると、俸給生活者が職工よりも善き報酬を受取るといふ考は、全く正反對な考方なのである。(註二十五) 英國でも獨逸でも、墺供國でも進步した歐羅巴の殆んど凡てに亘つて、體力勞働者の受取る報酬は、クラークまたはベアムテとして知れらてゐる俸給生活者の受取る報酬に優つてゐる。工場の中で働く油じみた勞働者の受取る賃銀は、オフ井ス(またはビユロウ)——ショウはこれを「監獄(プリゾン)」といつてゐる——の中で働く髮を櫛けづつた勞働者よりも豊かな報酬の受取者なのである。獨逸では勞働者の受取る賃銀の標準が二千馬克であるに對し、大學教授のそれもまた二千馬克、またはそれ以下である。(註二十六) 墺太利では、著名な大學教授でさへ、その年俸が、昨年の夏、一萬二千クローネ(日本金約四拾圓)の年俸を受取つてゐた。貧困に堪えずして死んだ教授も幾人があるといふ。彼等の多くは、慈善鍋の晝飯によつてその飢餓を癒やしてゐるのであるが、こうした貧しい食物は、この國の體力勞働者の口にしないところだといはれてゐる。(註二十七) 私は獨逸に滯在してゐる間に、幾人かの大學教授と相知つたが、それ等の人々の生活は體力勞働者のそれと少しも異るところはないのである。まただに報酬のうへだけではなしに、社會的地位のうへからいつても、知識階級が沈落しつつあることが著るしい。獨逸では大學教育をうけた青年若しくは Korps-student の一團は、特種の社會的地位と特權とをもつてゐたのであるが、今日では體力勞働者出身のものがどしどし顯要の地位に就く。エヴエルトやシヤイデマンや、ステゲルヴルトや、多くの純勞働者出身のものが國家の樞要な地位に昇る。プルシユヴイヒでは、革命の後に、前の洗濯女が文部大臣となる。また普通官吏の間でも、大學卒業生とそうでないものとの、待遇上の障壁は、次第に撤去されつつあるのである。

(註二十五) Trade Unionism for Clerks: Introduction by G. B. Shaw, p. 5

(註二十六) マーク相場の變動さもに賃銀または俸給も自然に變動する。特に昨年十一月以降勞働者の賃銀值上運動は效果を舉げてゐるので、今日では最早や二千マークが標準でなくなつてゐることは、その後の獨逸新聞によつて分つてゐるが、知識勞働者の方の俸給の變動の割合が、まだ私には分つてゐない。

(註二十七) The Observer, July 3, 1921

六、

知識階級の社會經濟上における地位が以上のとほりだとすれば、ここに問題となるのは知識階級が階級鬪爭に對して如何なる態度をとるかの事實と、如何なる態度をとるべきかのゾルレンの問題である。先づ事實の點から考察するのが順序であると思ふが、階級鬪爭問題、若しくは社會主義問題が提供された最初の時代には、それに對する理解の缺乏のために、種々複雜な現象が現はれてゐる。特に注意を要することは、體力勞働の一部が社會主義者運動に反對し、知識階級の一部がこれに味方することがある。例へばラサーレが初めて獨逸に社會主義運動を起した時には、彼は却つて勞働者から反對をうけてゐる事實がある。これに反して殆んど各國を通じて、最初に勞働者運動または社會主義思想が提唱された場合は、主として知識階級によつて行はれてゐる。サン・シモン、フーリエー、オーウエン、マークス、エンゲルス、ラッサーレなぞがみなこれである。英國にマークス主義を復活させたハインドマンなぞは、フロックコート、シルクハットの扮裝で社會主義の演説に出た位ひである。否、獨り指導者だけでない。これ等の社會主義運動に參加し、若しくは社會主義の社會を理想の社會であると考へてゐるものは、屢々多く知識階級の間にあつたのである。シドニイ・ウエッヴの『英國の社會主義』には次のような一節がある。

『一八四八年におけるヂョン・スチユワー・ミルの『經濟學』の出版は舊經濟學と新經濟學の間に都合よく境を劃するものである。ミルの書物は彼れの死がその『自傳』において彼れが完全なる社會主義のために單なる政治的デモクラシーに對する力の入つたそして明白な否認を世界に表明するに至るまで論調において益々社會主義的となつた。そして賃銀基金説の排斥、リカードの地代の法則の發展と延長、並にマルサス主義の漸次的修正と從屬とによつて、正統經濟學者と經濟的社會主義者との間における科學的の相違は、今日は主として術語と關係的重要のそれとなつた。その結果立派な經濟學者の一人は、彼れ自身は社會主義者でないが、悲痛の辭をもつて、多數の教授と、凡ての青年とは今や社會主義者であると公言した。(註二十八)

こういふ現象は日本の最近數年間にも見ることができたように思ふ。即ちデモクラシーの思潮の勃興が社會主義思潮によつて敲かれた最近數年の間に、知識階級の進歩的な分子が、可成り目醒ましい勢で社會主義思想に吸收されて

行つたのである。それはただ『共産黨宣言』にいふところの社會進化について充分理解ある ein Teil der Bourgeoisideologen だけではなしに、理解あるものも理解なきものも、少くともみな等しく社會主義かぶれがしたのである。この間に、社會主義に反對する言論は殆んど行はれてこなかつたし、大學教授なぞの間でも、彼等が社會主義的言論を試みることによつて、若き學生の急進慾との調和を保つことかできてきたのである。中には突如として、眞に突如として『余は十年間マークス主義を研究してきた』と自ら口にする大學教授をさへも見るに至つたのである。こういふわけで資本主義社會における知識階級の勞働運動または社會主義思想に對する態度は必ずしも最初から敵對的態度であつたといふことはできないのである。

（註二十八） Socialism in England, pp. 83-4.

しかし私が以上に述べてきたところは、知識階級が社會主義側にあつたといふことの證明になるよりは、寧ろ社會主義が知識階級の遊戯の對象であつたことの證明になるのだといつた方が正しいであらう。またある場合には知識階級は社會主義それ自身に贊成したのでなくて、彼等が舊社會の支配者に對する抗議として、否定的の意味で、偶々階會主義と一致したまでに過ぎないのだといふこともいひえられるのである。特に社會革命が開始され、またはそれが近づきつつあるといふ場合には、知識階級の心理は、反動主義において、彼等自身の擁護を覺えるものも思はれるマークスに從へば、一八四八年六月、巴里勞働者によつて、ブルヂョア共和國反對運動が起された時に、知識階級の有力者（Geistigen Kapazitate）が、農民や、産業的資本家なぞとともに、巴里勞働者に反對して資本階級の側にあつたことを述べてゐる。(註二十九) マックス・アドラアの述べてゐるところによれば、墺太利では、一九〇九年勞働者によつての大示威がヴ井ーンで催された時に、學生その他の知識階級の一團が『文化の旗』(die Fahne der Kultur)を押し立て、勞働運動への抗議のための大示威運動をなして、遂に鮮血を流したことの、恥ぢ且つ憤慨すべき光景を示したことがあつた。(註三十) このことは最近のロシャ革命及び獨逸革命において最もよく證據立てられてゐる。ロシャではボルシエヴヰキ革命以後、知識階級はブルヂョアヂィまたは王黨とともに、ボルシエヴ井キ革命の反對者であつた。(註三十一) レニン政府は、これに對して、知識階級をその味方に引入れる運動を試みたのである。專門家優遇方法のごときはこれなのである。しかしその結果は革命の前にプロタリヤと知識階級との眞實なる協同を見るに至つてゐないのである。(註三十二) 獨逸では、革命中においても、また或は特に革命後において、大學は殆んど社會主義反對運動の淵

義のような觀を呈してきた。獨逸の知識階級の人々が、如何に社會主義を憎むの念が强烈であるかは、私は獨逸にゐる間に、寧ろ私の想像以上にさへ出てゐるのを見た。エルツベルゲルの殺戮團として知られてゐるオルゲッシ（Organization Escherich）の一團なぞは、獨逸における猛烈な反社會主義團であるが、そは矢張り前士官その他の知識階級によつて組織されてゐるのである。英國においても事情は同じであつて、大學教授は舊によつて資本主義經濟學を講じつゝある。シドニィ・ウッエヴの名辭をもつてしても、倫敦大學では到底代議士當選の見込がないので彼は既に選擧區をダラムに變更するの止むなきに至つてゐるのである。

（註二十〇九）K. Marx, Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte, S. 14-5
（註卄）Max Adler, Der Sozialismus und die Intellektuellen, S. 28-2
（註〇一）N. Lenin, Des nächsten Aufgaben der Sowjet-Macht, S. 7 ff.
（註〇〇）The New Policies of Soviet Russia by Lenin, Bukharin, Rutgers, p. 84

七、

知識階級が階級闘爭に面して如何なる態度をとるものであるか、の問題は、私の考では一樣には云ひえられないことだと思ふ。少くともそれは三つの場合において相違する。一はその階級闘爭が如何なる方法狀態または戰術のもとに行はれるかの問題である。つまりロシヤ革命のように暴力的に革命の行はれる場合と、社會革命の社會的條件が爛熟するのを待つて行はれるような場合、言葉を換えていへば社會革命が殆んど自然的に行はれるような場合とによつて、知識階級の態度に相違のあることは何人にも想像されるところである。即ち後者の場合には知識階級はそのブルヂョア的執着のために最後の反動を行ふにしても、この場合には知識階級の歩調は大に亂れるものと思はねばならぬ。ところが前者のような場合には、プロレタリヤ階級、特にその前衞としての一團が暴力によつて革命を指導し、且つ政治上にプロレタリアートの獨裁政治を施いて、勞働運動の側から知識階級の一部を排斥するのであるから、かかる革命に對して知識階級が、新社會への情熱に燃えて、來るべき社會のために自己犧牲を惜まない人でない限りそは勞働者側に反對するものと思はなければならないのである。第二の場合は同じく知識階級といつても、その間には可成り

の隔りがある。即ち上層知識階級と下層知識階級との區別がこれであつて、上層にあるもののうちには、現代社會制度から經濟的、政治的、または社會的に相當の利益をうけてゐるもののあることは事實であるし、これ等の人々の多くは資本家的社會に適する知能をもち、且つこの社會に迎合することによつてその地位を保つてゐるものであるから、從つて勞働者が勢力を掌握する社會において、その現在保有する地位なり名譽なり、利益なりを喪失するであらうことは明白であるから、この自意識からしてこれ等の人々が階級鬪爭の前に資本家の擁護者として立つといふことは寧ろ自然の現象であると、見なければならない。これに反して下層知識階級に屬するものは、社會革命が行はれなくても、既にプロレタリヤの地位に沈落してゐるのであるから、現代社會に對して勞働者に近い不滿をもつており、且つ未來の社會に對して格別に失ふことの恐れをもつてはゐないのである。從つてこの階級に屬する知識階級の心理は前者の場合とは決して同一に動くものとは思はれないのである。第三の問題は階級鬪爭の過程の問題である。即ち今日の社會がマークスのいふとほり階級鬪爭の社會であるにしても、その階級鬪爭の當時者たる階級の分解がどれだけ深刻に行はれてゐるか、また知識階級自身がその鬪爭に當つて事實上どういふ地位にまで押し進められたか、といふことによつて知識階級自身の自覺の程度、覺悟の程度、斷念の程度が相違するものと思はねばならぬ。しかし知識階級の內部に於ける階級の問題とこの第三即ち階級鬪爭の過程の問題とは必ずしも別問題といふわけではない。何故かといふに、知識階級自身の間に種々の程度が出來てくる原因の主要なものは、矢張り資本家的社會の進化過程が相當に熟したことを意味し、從つて階級鬪爭の過程もこれに伴つて深刻化してゐるもの思はねばならぬからである。概していへば、階級鬪爭の過程が相當に深刻化して、從つて知識階級の一部が純然たるプロレタリアートに落ちた場合に、階級鬪爭に對して知識階級の心理が如何に動くであらうかといふのに、知識階級は先づ最初のような遊戲的氣分から脫する。そしてこの問題を自己の問題であるとまで意識するようになつてくる。そうなると彼は彼の周圍を見渡し且つ自分自身を內省する機會を與へられるのである。內省した時に、そしてある一部のものは『自己』を越えて來るべき社會を達觀するために、あるものは來らんとするものに憧憬するために、あるものはただ古るきものへの抵抗のために、あるものは運命の成行に觀念するために、階級鬪爭に對してそれぞれの程度において自己の態度を決定するようになるのである。そしてその結果は、知識階級自身の分裂を來すこととなるのである。詳しくいへば上級知識階級の大部分及び下層知識

保守分子が旗色を明らかにして勞働運動への抗議と憎惡とのために立ち、これ等の階級に通じての急進主義者または最下層知識階級の大部分が勞働運動に投ずることとなるのである。共產黨宣言のうちに、階級鬪爭がその決定的の日に近づくに從つて、支配階級の間に分裂が行はれ、その一小部分が革命階級に參加することとなるといつてゐることは（註卅三）必ずしも知識階級をいふてゐるのではないが、私の以上に述べてきた時期に相當するものといはねばならぬ。

今日の歐羅巴の諸國における階級鬪爭及び知識階級の地位は、丁度この時期に到達してゐるものと思はれる。私は既に英國の知識階級が一八八〇年代の遊戲時代の後に反社會主義思想の支持者となつたことを述べ、また獨逸においてもそういふ事實の存在することを述べてきたのであるが、しかし現代の資本主義の諸國に起つてゐる知識階級の運動を、過去から現代への眼でなくて、現代から未來への眼で見ると、既にこれ等の知識階級の間にも新運動の若葉が芽ばえてゐるのを看逃すことはできないのである。新運動といふのは知識階級の分解運動なのである。英國で見ると、大學生の間に可成り有力な社會主義團が成立して相應の活動成績を奉げており、（註三十四）上層知識階級の間でも最近に勞働運動の側に立つことを決し、若しくは進んで勞働運動の戰士として働いてゐるものも少くない。アスキス內閣のもとに陸相であつたホルデーンのごとき、また自由黨から勞働黨及共產黨に投じたトレヴエリアン、ウエッヂウッド、マーロンなぞがその著しい例である。そして知識階級の職業團體が、勞働黨または勞働組合運動に參加する傾向も益々顯著である。新聞記者組合、敎員組合、書記組合、技術者組合なぞがそれである。獨逸でも近頃大學で政治敎育か奬勵されるようになり、ベアムテ運動と勞働者運動とが提携し、敎員團と社會主義との結合の現象さへ現はれるようになつた。昨年基督降誕祭にドレスデンに催された『文化日』(Kulturtag)のごときはその一例である。

（註廿二）Kommnuistische Manifest, S. 35

（註卅四） この運動はメクリネイとコオルとを指導者として、小ヘンダスン、小クラインスなぞが活動してゐる。

八、

ここで私の議論は、有島氏によつて提供された問題へと入つてゆく順序になつてきた。第一は知識階級に屬するものが勞働運動に貢献することができるかどうかの問題と私は解する。第二は階級または階級鬪爭と文化または藝術との關係の問題である。

有島氏の提供された問題のうちには、私には二つの混同すべからざるものが混同されてゐるように思はれる。即ち有島氏の個人的立場と知識階級そのものとの同一視がこれである。有島氏はある場合には自己の名において云々し、或る場合にはブルヂョア、インテリゲンチャなぞの名においていつてゐる。有島氏自身は前にも述べたとほり知識ある人であつて、同氏が縦令財産を投げ出すようなことがあつても、尚ほ『知識と思想』とが殘ることは疑の餘地のないところであるが、しかしそれだけでもつて、有島氏が『知識階級』に屬するといふわけにはゆかぬ。何となれば知識階級とは、若しこれを階級だといひうるとしたら、ただ『知識がある階級』といふ意味ではなくて、『知識』を賣つて生活を支へる人であることが必要條件なのである。だからロスチヤイルドなり、スチンネスなり、ロックフエラアなり岩崎小彌太なりが如何に多くの知識をもつてゐるにしても、それは知識階級でなくて資本家階級なのである。有島氏のような人は、階級分析上には甚だ面倒な地位にゐるが、同氏が知識によつて生活する職業人でない以上、資本家階級に屬するものと見なければなるまいと思ふ。だから私は現代社會階級分折の場合に、有島氏を知識階級に入れて論んずることが當を得てゐないと思ふのである。また假りに有島氏を知識識階級に入れることに意同するにしても 資

氏は普通の知識勞働によつて衣食してゐる職業的知識人に比べると全く別の地位境遇にあり、從つて階級鬪爭への行島氏の心理が他の知識人と同一であると見、有島氏が自分自身『生れ且つ育つた境遇』をもつて他の知識人の『生れ且つ育つた境遇』を類推することは大なる間違であると見なければならぬ』。また從つて有島氏にとつて『越ゆべからざるもの』となつてゐるものも、他の知識人にとつては必ずしも『越ゆべからざるもの』であるとはいふことができないのである。

そこで問題は有島氏個人の問題と知識階級の問題とを區別しなくてはならないこととなるのであるが、知識階級に屬するものが勞働運動若しくは社會主義運動に參加ずることが『越ゆべからざるもの』を越えるといふことになるであらうか。或はそれが『どんな偉い學者であれ、思想家であれ、運動家であれ、頭梁であれ、第四階級的な勞働者たることなしに、第四階級に何ものかを寄與すると思つたら』それは『明らかに潛上沙汰であり、若しくは『第四階級はその人達の無駄な努力に依つてかき亂されるのはかまはないもの』であらうか。(註三十五) また『ユートピヤ的な社會主義から哲學的のそれになり、遂に科學的の社會主義が成就されたとはいへ、學說としての社會主義は遂に第四階級自身の社會主義であることは出來ない』であらうか。(註二十六)

(註卅五) 「改造」一月號「一つの宣言」

(註卅六) 「大觀」一月號「藝術に就て思ふ」

こういふ考方は、少くともマークスの考方に似たところがある。マークスは嘗つて勞働者階級の解放はただ勞働者自身によつてのみなしうる(Die Befreiung der Arbeiterklasse kann nur das Werk der Arbeiter selbst sein)といつたことがある。そして此の言葉は決して單なる片言片句ではなくて、マークスにとつては、彼の科學的社會主義の精神を

表明してゐるものにほかならないのである。共產黨宣言に凡ての階級のうちでプロレタリヤ階級だけが眞革命的階級(eine Wirkliche revolutionare Klasse) となることができるといつてゐるのもこれと同じ意味であると思れる。(三十七)つまりマークスに從へば、資本家社會において絞取されてゐるのはプロレタリヤ階級であり、その階級は資本家的社會の進むに從つて增大し、結局資本主義の倒壞を來すことによつて新社會が生れるものであるから、この新社會への革命的勢力は他の何れの階級でもなくてプロレタリヤ階級であり、また新社會の要素となるものもこのプロレタリヤ階級にほかならないと考へたのである。即ちマークス以前の社會主義または社會改良家の考へたような空想、慈善、ファランステール、イカリアなぞの理想村の試みによつては實現のできるものではないとともに、中等階級の一部のような、縱令階級鬪爭に面して、支配階級に反抗の態度に出ることがあるにしても、それはただ中等階級としての自己の地位を維持し、若しくは回復するための目的からきてゐる以上、それはもと／＼革命的ではなくて、却つて反動的なのである。從つて無產階級の解放は無產者階級自身の力によつてでなければならぬといふたのである。繰返していへば社會の歷史的進化のうへに社會主義の基礎を置いたのであつて、ここにマークスの社會主義が科學的社會主義であるといふの理由が存在するのである。從つてマークスの考は、一方に空想主義―この時代の空想社會社會主義運動は一種の中等階級運動であつた(註三十八)―を排斥するとともに、中等階級が、尙ほプロレタリヤ階級そのものとなつてゐない以上、階級としては革命的精神の持主ではありえないといふことを論じたのである。從つてマークス、そしてエンゲルスの意思は、決して嘗つて中等階級に屬してゐたものを悉く勞働運動から排斥しようと企てたものとは思へぬ若しそうだとしたらマークス、エンゲルス自身が、最先に社會運動から手を引かねばならなかつた筈なのである。特にマークスはこの場合、知識階級、もつと正しくいへば知識的職業人を、勞働運動から排斥したものと思ふべき理由は存

在しない。思ふにマークスが共産黨宣言を發表した時代には、まだ知識階級の人の數は甚だ少く、從つて知識あるものはカウツキーが述べたように、力であり、幸福であつた時代なのであるから、今日のように知識階級がプロレタリヤ階級に沈落してゐる時代とは同一に論んずることはできないのである。

(註卅五) Kommuni-tische Manifest, S. 35

(註卅六) Communist Manifesto, Kerr edition, p. 6—8

近代勞働運動のうちで、知識階級に對して不信の態度を明白にしたのは、人のよく知るとほりサンヂカリズムである。ラガルデルのごとき、ソレルのごときはそれである。ソレルに從へば、勞働者階級が思想階級のごとき弱者の道德に從ふようなことでは、革命的サンヂカリズムは不可能であると。(註三十七) しかしサンヂカリズムが知識階級を排斥するといふことについては、少くとも二つのことが考へられなければならぬ。その一つはフランスにおける特種の狀態である。その二つはサンヂカリズムが排斥しようとする對象の實體なのである。先づ第一の方から觀察するが、レバインが嘗つて指摘したとほり、サンヂカリズムが佛蘭西に發達したのは、少くとも一つは佛蘭西における特種狀態の存在に基因してゐる見なければならぬ。(註三十八) そしてその特種狀態のうちに、少くとも知識階級の不信と非革命的態度とを計へねばならぬ。ミルラン、ブリアン、ヴ井ヴ井アニは、その不信の知識人としての典型である。議會的社會主義の指導者の妥協的態度は革命的サンヂカリズムを奉ずる一派の人々の精神とは到底兩立することができないのである。しかも議會的社會主義の指導者の多くは知識階級の人々——辯護士、醫師、新聞記者、大學教授などであるから、これ等の知識階級への抗議が、革命的勞働運動の側から提唱されたることは寧ろ自然の結果である。從つてこういふ事情は他の諸國では容易に考へることはできない。例へば英國で見るのに、勞働運動の指導者であつて、最高の地位にあるものは多くは、體力勞働者出身であるからである。且つ體力勞働者出身であることは英國の勞働運動を革命的たらしめてゐる所以でなくて、却つて妥協的、日和見的とならしめてゐるのが事實なのである。現に英國における勞働黨の指導者が主として體力勞働者出身であるに對し、共産主義運動の指導者の多くが知識階級に屬する人であるのに見ても了解されるであらう。(註三十九) 第二に注意すべき點はサンヂカリズムの排斥せんとする對象の內容の問題であるが、ソレルに從へば、彼の所謂知識階級とは、思想を職業とするものであり、且つ『貴族的俸給』を受取る人をいふのである。(註四十) 從つてソレルが知識階級といつてゐる場合には、今日の知識階級の大部分の場合には當

縮まる議論ではない。また彼の意思が、勞働運動から一切の知識階級、例へば小學教師や、書記や、新聞記者などの所謂『貴族的俸給』を受取らない人々をも排斥するにあるとは想ふことができぬ。特に彼の排斥しようとし、重點に非革命的精神なのであつて、勞働運動から、革命的知識人としての、マークスやエンゲルスや、リーブクネヒト父子やバクーニンや、レクルスや、クロポトキンや、レニンや、トロツキーや、ラデツク、ブハリンや、ラガルデルや、ベルチウエそしてソレル自身を排斥しようと考へてゐたものとは思はれぬ。最後に注意を要することはサンヂカリズムの排斥せんとしたものが、知識階級の勞働運動への參加そのものでなくて、知識階級によつて指導されることなのである。知識階級を勞働運動の指導階級とすることなのである。

（註三十七） G. Sorel, Reflections on Violence, pp. 278-9

（註三十八） Levine, Syndicalism in France

（註三十九） 英國勞働黨ではスマイリイ、ホッヂエス、ヘンダスン、クラインス、トーマス、カメロン、ダンカン、ゴスリンゲ等みな體力勞働者出身である。共産黨の指導者マックマナス、パウル、メラア、インクピン、除名されたバンカース等みな知識階級の人々である。

（註四十） Sorel, op. cit. p. 163

有島氏の問題はもつと廣汎な、概念的な問題である。有島氏に從へば、一、知識階級は必然的にブルヂョア階級である。二、この階級に屬するものは勞働運動の理論的實際的、指導者となることはできぬ。三、この階級に屬する人々が勞働運動なり若しくは第四階級の文化運動に加はることは越ゆべからざるものを越えることである。四、知識階級に屬するものは財産の有無にかかわらず勞働者とは全然別の世界の人間である。

これ等の問題のうちで、ある點については既に先きに私の意見を述べたからここに繰返さない。私の見るところでは平常の有島氏は多分に理想主義的色彩をもつてゐたようであるが、階級鬪爭と知識階級との關係についての、氏の態度のうちには、却つて多分にに唯物的傾向が見える。即ち有島氏に從へばブルヂョア階級なら財産階級に屬するものは、その所有するものからの影響を、精神の働きのうへに、必然的にうけるものであるといふの前提に立つてゐるように見える、若しそうでないとしたら、ブルヂョア階級の出身者は、必然的にブルヂョア・イデイオロギーの所有者であるとすることはできないからである。またブルヂョア出身者が必然的にブルヂョア・イデイオロヂイをもつてゐ

るものだとしなくては、有島氏の議論は根本的に成立しないからである。またそれでなくては、知識人が勞働運動に參加した時に、それが「越ゆべからざるものを越えた」とはいふことができないからである。

私は必ずしも有島氏の立場の凡てを否定しようとするものではない。有島氏の考のうちには私の多分に理解もでき同情もでき、或は贊成もできる點もある。特に勞働運動が流行期にあるやうな場合、若しくは勞働運動の勝利が近づいたといふやうな場合には、何んの確信もない人、勞働運動について何の理解もない人、勞働者の生活について何の同情もない人、若しくは來るべき新社會について燃える情熱もない人達が、樣々の混雜した心理から、特に政治上の野心または物質的野心から、勞働運動の側に立つものが少くない。かういふ場合には、これ等の人々の勞働運動はいふまでもなく勞働者階級にとつて有害であつて、有島氏の所謂越ゆべからざるものを越えたといふことゝなるのである。私はかくのごとき種類の知識人の勞働運動には何の同情ももとよりもつてはゐない。そして私等自身がさうした人々の仲間の一人ではないかといふことをさへ常に反省するだけの用意はもちたいと思つてゐるのである。またかうした野心なり、利己心の持主でなくても、知識階級が尙ほ習慣的にでき上つた自尊心をもつて、自分若しくは自分等の仲間が、體力勞働者に比べてどこか優越な人間であると意識してゐる間は、彼等の心は第四階級の心と通ずることはできないのである。かうした心が知識階級の間に殘つてゐる限り、佛蘭西の社會黨が嘗つて經驗したやうな勞働運動の『二つの魂』はどこまでも調和することのできない『二つの魂』として續かねばならぬのである。また有島氏がいつたとほり、ブルヂョア階級に屬する知識人は、縱令財産を失つても尙ほ『知識と思想』とを殘してゐるのであるが、その知識と思想とは、原則としては、資本家社會の要求に從つて、それの生産と政治と社會生活とに適應するやうに養成されたものである。特に政治學や經濟學は專らブルヂョア階級のイディオロギイの組織なのである否、哲學でも、藝術でも、宗教でも、主としてブルヂョア社會の原理と秩序との維持者であるのが現代の嚴然たる事實である以上、かうしたブルヂョア的の『知識と思想』とは、プロレタリアートの新社會に對しては何の役にも立たないばかりでなく、甚だ有害な毒素である。從つてかうした『知識と思想』とは、その持主をしてプロレタリヤから隔絶離反せしめる要素としての役割を演ずるものと見なくてならぬ。有島氏にしても、若し氏の自ら云つてゐるとほり、氏の今日のブルヂョア的環境のもとに、氏の思想と知識とが存立してゐるものとしたら、有島氏のもつてゐる、『知識と思想』とも同じくプロレタリヤ運動に有害なものであると云はなくてはならぬ。

しかし私はここに有島氏個人の問題を論ずるのが主眼ではない。私の論じようと思ふのは知識階級とプロレタリヤとの關係なのである。知識階級そのものの立場については、私は既に私の觀察を述べてきた。即ち知識階級とは彼自身プロレタァ階級なのである。これをプロレタリヤ以外の一階級といふことが誤りなのである。從つて知識階級が勞働運動に加はるにしても、第四階級運動に對して他の一階級がこれに參加するのではなくて、第四階級それ自身の運動なのである。從つてそれを第四階級に對しては越ゆべからざるものを越えての運動であると見ることはできないのである。しかし問題はただこれで終つたと思ふと矢張り誤りである。何となれば知識階級に屬するものは尙ほ彼れと同一階級に屬する體力勞働者とを別種のものであると意識し、或はその意識が殘存してゐる以上、これを單なる經濟上の理由から見て體力勞働者と全く同一物であると見るような平面的な考方は複雜な社會事相と兩立することはできないからである。

私はこの點において、少くとも第四階級を二種に區別しなければならないと思ふものである。知識的プロレタリヤと體力的プロレタリの二つがこれである。從つてそこには別種の職分が存するものと見ねばならぬ。從つて知識階級は今日の社會においても、また新社會への過渡期においても、別種の職分が與へられてゐると見なければならぬ。しかし別種の職分が存するといふことは知識階級が勞働運動におてい、體力的プロレタリヤと協力してならないといふの意味ではない。否、正反對である。知識が勞働運動おいても、來るべき社會においても必要なものである限り、知識人の職分は存在するのであり、また從つて知識人は要求されねばならぬのである。否、カウツキーの指摘してゐるとほり、知識人なくては生產は全く不可能なのであり、知識の要求は益々增加するとも減少することはありえないのである。(註四十一)そして過渡時代において、體力勞働者のもつ知識は、知識的プロレタリヤのそれに比して優越でないものである以上、この時代においては、資本家社會においての知識人が需要されねばならぬのである。レニンが專問家を優遇せなければならなかつたのはこの事實の何よりの裏書である。

そこで私は次のごときことが云ひうる。資本家社會から次の社會への過渡時代には、知識階級は勞働運動に對し重要な役割をもつてゐると。

（室伏高信）

（註四十一） Kautsky, Diktatur des Proletariats,

この問題は尙ほ論旨の半ばに達しただけである、次は主として當來社會に關するものであるから次號に讓ることゝした。

定價

毎月一回一日發行		郵税
一部	卅錢	五厘
半年分	一圓七十錢	税共
一年分	三圓三十錢	税共

但特別臨時號の價は別に申受く

▲誌代は總て前金　▲郵券代用一割増
▲送金は可成振替　▲外國行郵税

大正十一年四月一日印刷納本
大正十一年四月一日發　行

東京市芝區三田一丁目二十六番地
編輯兼發行兼印刷人　利部一郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷所　川崎活版所

東京市芝區三田一丁目二十六番地
發行所　批評社
振替東輔四五三四六

大正十一年三月三十一日第三種郵便物認可
大正十一年五月一日印刷納本發行（毎月一回一日發行）

批評

第二號（五月號）

批評社

May Day

The song of the world' s awakening
Shall be sung by the Queen of the May.
For that, with its news of her gladness,
Is the song of the oldest day,

Tis the voice of the Maiden singing
(From the East to the west is it far?)
The song of a Soul with its dwelling
Where the homes of the angels are.

Forever increasing in volume
Sustained and upborne by the throng,
Is the tremulous note of the singer
Whose voice is a river of song.

The face of the Earth is gladdened,
The depth of the Earth are stirred,
The beat of the heart in her bosom
Is stayed by the Angel' s word————

The note is upheld by the chorus,
The tremple is in the refrain.
Oh, blessed are we to be hearing
Of that which recalleth again,

To the mind of the Mother of Mothers
The pealing of bells in the morn,
The bells that preluded her wedding,
And told of the child to be born,

There is promise of life in the message,
Of love in the darkest of days,
And, fast as her tears are falling,
Her voice is uplifted in praise,

Our Queen on the threshold standing——
Oh Life, it is good to be fair, !
If all that we love could be singing,
Life , Life, it were good to be there.

Ernest Radford.

信用社會主義

—（英國の新社會主義運動）—

ラーテノウの社會思想に引續きて、私は尚ほ獨逸の社會主義運動とその理論とについて紹介したいと思ふものが數多あり、ラーテノウのことについても、更に詳細に研究を發表するの機會があると思ふものであるが、雜誌の頁の關係上思ふに任せないから、ここには私の社會思想の再運動の第二回目として、英國のクレディット運動のことを話したいと思ふ。この運動のことは私が外遊前から興味をもつて眺めてゐたところで、拙著「ギルド社會主義」第一卷のうちにも少しばかりこの問題に觸れておいた。しかし私の知つてゐる範圍では、その後、その前には無論、日本でこの問題についての研究を發表したものがないように思ふ。アダム・スミスやリカアドやパラノウスキーなぞについては、多くの學者が相爭つて研究すること誠に壯觀であるが現代に新興してゐる新學説または新運動について、多くの學者が鳴りを鎭めてゐること誠に寂寥である。

私の考では、私がこれから述べようとするクレディット運動は、凡ての經濟學者または社會主義者、或は社會運動家が、この説に贊成するものもしないものも、等しく研究、大に研究討議する必要のある、學問上並に實際上、當面の大問題であると思れる。

一、

信用社會主義（註一）が最初に提唱されたのはドグラス（註二）によつてゞある。雜誌『ニュー・エーヂ』におけるドグラスの諸論文によつてゞある（註三）一九一八年、ドグラスがこの新提唱を試みてから、『ニュー・エーヂ』の主筆オウレーヂもまた終始彼と立場を同じくし、ドグラス案をもつてギルド社會主義の唯一の解決策であるとなしてきた。否な、獨りギルド社會主義においてだけではない、それが今日の社會問題を解決すべき唯一の原理であり、また實行しえられる唯一の

方法であるとなしてきた。勿論この運動に對しては、ギルド社會主義者内部においても有力な反對があり、コオル、ホブスン、ペンティ等みなこれを攻撃し、(註四)特にコオルはこれをもつてギルド社會主義の産業民主主義とは正反對の立場にあるもので、實際上には役に立たないで、經濟上には不完全で、道徳上には望ましくないものだとまで痛論してゐるのである。(註五)ナショナル・ギルド同盟では、一九二〇年の年會でこの問題の調査委員會を設けることとしたのであるが、そして委員會はドグラス案をもつてナショナル・ギルドへの接近に對して starting-point を與へたものだとなしてゐるのであるが、(註六)同年十二月の特別會議では十三對四十一の大多數でこの委員會の報告を一蹴し去つてしまつたのである。從つての問題は、コオルが私に語つたように、ギルド同盟の範圍では、一應否定されてしまつたともいふことができるのである。(註七)しかしこの問題は、一回の決議で抹殺されるほどに簡單な問題ではない。否過去一、二年の間に、社會主義理論のうちで、この問題ほど盛んに議論されたものはあるまいと思ふ。(註八)實こ過去數年の間、この問題は、英國における社會主義理論の、燃ゆる問題であつた。一九一一――一二年がサンヂカリズムの時代であるといふことができるとするならば、また一九一五――一九年が、産業自治論としてのギルデイズムが英國における勞働運動の急進主義を燃やしてゐたとするならば、一九二〇年以後は、クレデイット統制問題が、英國勞働運動の頭腦を刺激してきた時代であるといふことができようと思ふ。オウレーヂはコオルの批評に答へていふ。『ニュー・エーヂ』こそギルド社會主義の父であり、コオルがまだオックスフォードの學生であつた時分に、われ〱はそれを養育してきたのである。ドグラスこそ最も完全なギルド社會主義者であり、そしてコオルは、最早や『ドグラス以前』のギルド社會主義者であるに過ぎないと。(註九)

(註一) 私がここに「信用社會主義」といふのは、ドグラス＝ニュー・エーヂ計畫として知られてゐる、信用社會化運動及び其理論をいふのである。それはギルド社會主義運動のうちに創生し生長してきたものであるから、ギルド社會主義の一種であるが、しかしこの新運動及びその理論が「信用」問題に根據を置いてゐることから、ここに「信用社會主義」と名づけたのである。そしてそれは私自身の造語である。

（註二）ドーグラス（C. H Douglas）はもと陸軍少佐である。彼はオウレーヂを主筆とする、雑誌「ニュー・エーヂ」の寄書家である。

（註三）ドゥグラスのこれ等の論文の多くは、次の二書のうちに收錄されてゐる。

1, C. H. Douglas, Economic Democracy, 1920,

2, C, H. Douglas, and A. R. Orage, Credit-Power and Democcracy, 1921

（註四）左記著書及び論文參照

1, G. D. H. Cole, Chaos and Order in Industry

2, S. G. Hobson, Concering Credit (The Guildsman April and June, 1920

3, A. J. Penty, Guilds, Trade and Agriculture; 1921

（註五）The Guildsman, Febuaay; 1921

（註六）Final Reports on the Douglas Credit Scheme, by Baker, Reckitt, and Taylor.

（註七）私は一九二一年三月から七月初めへかけて倫敦に滞在してゐたが、この間にコオル氏とは數回に亘つて長時間の會談を試みた、その時の話。

（註八）この問題については、英國は各地、各方面に研究會が設けられ、英國勞働黨もまたシドニイ・ウエッブ以下を調査委員に擧げてゐる。また最近には特にこの運動の專門機關紙として Public Welfare が發行されてゐる。

（註九）The New Age, March 24 and October 13, 1921

二、

信用社會主義は、その實行的方面に意を集中してゐるために、その理論的構造は、必ずしも偉大なものではない。

ある意味からいへば、彼は社會主義を經濟學にまで墮せしめてゐるといふ嫌ひがないことはない。若しドグラスやオウレーヂの著述だけによつて、信用社會主義の全構造を見なくてはならないとすれば、そは少くとも政治的、社會的、哲學的、若しくはペンテイの所謂道德的理論を欠いてゐるものである。そは人間生活を單なる經濟生活の方面から觀察して、經濟生活の解決によつて、人間の政治的または社會的生活の目的に到達しようとするものである。しかしそれは政治的なり、社會的なり、または哲學的なりの理論を無視してゐるのでもなく、また不必要だといつてゐるのでもない。それはギルド社會主義の發見者の一人であるオウレーヂを協同者とするだけに(註十)またギルド社會主義の畑のうちに生れただけに、一種の修正派ギルド社會主義であり、また從つてその根本理論において、正統派ギルド社會主義との間に、重要な共通點をもつてゐるものである。否、その共通點が、彼等の間では、あまりに明白且つ自然であるために、信用社會主義の建設者の間に、意識的または無意識的に、議論の閑却が行はれてゐるともいふことができるのである。

信用社會主義は、正統派ギルド社會主義と同じように、個人の自由から出發する。個人の自由は、その政治的、社會的、または經濟的理論の根底に横はる。政治も、經濟も、社會も、たゞ個人の自由のために存在するものでなくてはならぬ。ドグラスの言葉でいへば、制度は人間のために造られたのである。人間が制度のために造られたのではない。しかも人間の利益とは、自己發展にほかならぬ。自己發展は、宗教的であれ、政治的であれ、あらゆる制度を指す導るものでなくてはならない。だから、若し國家制度にして人間の自己發展に有害だとすれば、そは廢止されねばならぬ。若し社會的習慣にして、この原理を妨げるものであるとしたら、そは變更されねばならぬ。また若し放縱な産業主義にして、その發達を禍ひするとしたら、そは制縛されねばならぬ。即ちわれ〳〵は國家からではなくて、個人から建き上げねばならぬ。また從つて彼の建設しようとする社會とは、フエービアンやその他によつてのような、集産主義の社會ではない。そは個人の自發性の基礎のうへに、經濟的及び政治的再整を行のものでなくてはならぬ。

しかし彼が個人の自由といふ場合には、今日まで、個人主義の名によつて、または自由主義の名によつて知られて

きた商業主義、資本主義、またはブルヂョア自由主義をいふのではなく、これ等の經濟的オートクラシー、從つてまた政治的オートクラシー、に對して經濟的デモクラシーまた從つて政治的デモクラシーを主張するものである。この意味において、彼は個人の獨立若しくは自由の基礎が、決定的に經濟的であることを信んずるものであた。そして經濟的自由を、意識的または無意識的に閑却して、自由を論ずることは、彼にとつては單なる僞善であるに過ぎない。(註十一)

(註十) オウレーヂは既に一九〇七年の論文（Politics for Craftsman, in The Contemporary Review, June 1907）のうちでフエービアンその他の集産主義に攻撃を加へ、Arts and Crafts の立場から、新社會主義の原理を要求してゐる。(七百八十二頁――七百九十四頁參照)

(註十一) Economic Democracy, pp, 5-7

また從つて、信用社會主義は、正統派ギルド社會主義と同樣に、現代社會の病弊を、貧乏の問題とは見ないで、奴隷制度にあるとする。奴隷制度とは、賃銀制度である。だから個人の自由への再整のためには、貧乏の廢止の代りに奴隷制度の廢止を要求する。この意味において、信用社會主義はギルド社會主義である。しかし正統派ギルド社會主義に從へば、賃銀制度を廢止することは、生産手段の國有と、そしてギルドに組織された生産者によつての、生産の民主的自己統制である。(註十二) しかし信用社會主義は、正統派ギルド社會主義とは、全然その立場を異にするものである。彼は生産手段の國有をも主張しないし、また『生産』の民主的統制をも要求してはゐないからである。だから若し生産の民主的統制がギルド社會主義の要素であるとしたら、信用社會主義は、明らかにギルド社會主義から、區別されるものでなくてはならぬ。

(註十二) The Policy of Guild Socialism, by The National Guilds League 參照

三、

信用社會主義は、資本主義の害惡、從つて新社會への鍵が、利潤の問題であるともしない。資本對勞働の直接關係

にあるともしない。またそれが產業上の行政問題であるともしない。

彼れに從へば、今日までの社會主義は、利潤の問題にあまり重きを置き過ぎた。(註十三) 利潤は、それ自身が害惡であるといふよりは、利潤の寡頭的横奪が害惡なのである。否、利潤が生產への誘引であるが、誘引は常に强制よりも、事物を爲しとげさせる手段としては、よりよき方法である。利潤の問題が、社會主義理論の中心をなすことは、社會的疾病についての無識の結果であるに過ぎない。(註十四)

(註十三) パカレイ教授の計算に從へば英國で一年一人百六十磅を超過する餘剩收入の總額は二億五千萬磅である。從つて若しこれを一千萬の家族に均分すると、一家族あたりが、二十五磅であると。

(註十四) New Age, July8, 1920, PP. 152

ギルド社會主義は、統制の問題に重點を置いてきたのであるが、しかし統制がどこに存在すべきかの問題についての理解を欠いてゐる。(註十五) 彼は產業統制といひ、または生產の民主的統制といふのであるが、しかし生產は生產者によつてのみ行はれるのではない。却つて生產された富の大部分は自然增價 (unearned increment) である。それは社會の存在とその總活動とに、若しくは過去から承けた思想と知識とに負ふものである。道具、機械、及び產業行程とは何世紀かに亘つての、人々の天才と思考との產物である。若しこれ等の過去における人々の思想の寄與を除いたなら果して何ほどのものが殘されるであらうか。然り、何人も、その生產に關與したといふの理由をもつて、その生產物の一片――例へば機械の一片が、自分の生產だといふことはできないのである。(註十六) しかも近世の協同的產業の專門的指導は、凡ての生產者の、簡單な賛成や、反對といふような方法によつて行はれるものと思ふのは、單なる幻想である。またこれ等の指導が、單に專門家を顧問とすることによつて行はれるものとなすことも單なる幻想である。若し社會にして、眞に機械の專制から解放されようと希望するならば、そして科學と產業との廣大な遺產を利用しようとするならば、生產指導者の位置に、完全に工學の眞髓を理解してゐる技術家を据えなくはならぬ。(註十七) 何となれば、產業行政の問題は、本質的に技術問題であるからである。(註十八)

（註十五） Credit-Power, P. 129

（註十六） New Age, July 8, 1920, p. 151

（註十七） Credit-Power, pp. 79-85

（註十八） New Age, June 10, 1920, p. 85

四、

信用社會主義の特質は、資本主義の害悪を、從つて社會主義社會への鍵を、信用（Credit）の問題にあるとするの點にある。また從つて物價の問題にあるとするの點にある。彼曰く『鍵は信用の統制のうちにある』と。（註十九）また曰く、この信用制度にして改造されるなら、世界は、五年のうちに改造することができると。（註二十）

（註十九） New Age, Dec. 30, 192, p. 102.

（註二十） Credit-Power, P. 86

五、

信用社會主義の原理を把握することは、經濟學徒以外の人々にとつては、決して興味ある課程ではない。何となればそは先づ一、信用制度の本質を學び、且つ二、物價の成立關係を理解することであるからである。

物價問題と信用問題とは、信用社會主義にとつては、楯の兩面である。

近世の工業は、無論種々の複雜した生產過程のために、多くの費用をかける機械裝置や、動力や、光や、を必要とするのであるが、それ等の動力や光やは消盡されるものであり、機械もまた破損し、消耗して、常に機械の修繕なり

取換えなり、若しくは新らたは動力なりが供給されなければならないのであるから、そして人員と原料とが生産に必要であることも勿論であるから、生産に要する工場費は一、原料費二、賃銀及俸給三、設備費から成立するのである。ところが資本主義のもとでは、生産の目的は利潤にあるのであるが、その利潤は生産物の價格から生ずべきものであるから、その生産物の價格には、以上の工場費のほかに、利潤の要素が加はらねばならぬ。且つ生産物が消費者の手に移るためには尙ほ賣却費を計算しなくてはならないから、生産物の賣價は、工場費、利潤及び賣却費の總計となるわけである。從つて企業の働きの結果として、世界の富は、この工場に使用される原料の價値を、その生産物の賣價によつて代表される總額との相違によつて增加するといふことは勿論であるが、しかしこゝに確實なことは、賃銀、俸給及び配當によつて分配されたものの全額が、生産物の賣價の總額より非常に少けないといふことである。そして若しこのことが一工場についていへるならば、それは凡てにおいていへることである。卽ちこの種の製造行程において支拂はれた金の全額は明らかに生産物の賣價よりも少けないのである。(註十二)

繰返していふと、凡ての近代的企業の支拂は次のような二種類の項目に分類することができる。

(A)、各個人への支拂(賃銀、俸給、配當)

(B)、他の組織への支拂(原料、銀行その他の外部的費用)

從つて個人への支拂は、企業の支配の全部ではなくて一部であるが、生産物の賣價は工場費、賣却費、利潤の凡てを含むものであるから個人への支拂より多額のものとならなくてはならない。つまり個人への支拂は單に(A)だけであるが、生産物の賣價は(A)+(B)であるから、前者は後者よりも小さくなくてはならないのである。そして前者が一般消費者の購買力にほかならないのであるからこの購買力は(B)だけ生産物の賣價より小さいこととなるのである。

ところが購買力の存在しないところには貨物の生産がありえないのが原則であるし、(A)だけの購買力に對して(A)+(B)の賣價が存在することは想像しえられることでないから、この賣價によつて代表される支拂の在存するために

(B)に當るだけの購買力が創造されなければならぬ。そしてこの新に創造される購買力は(A)のうちに包含されるものではなくて、他の外部的要素によつてのみ可能である。內國的には、「信用」がこれである。(註二十二)

(註二十一) Economic Democracy, pp. 57-9

(註二十二) Credit-Power, pp. 21-3

近世の大企業は、信用制度の基礎のうへに行はれる。企業家はその財產權を抵當として銀行から、この信用のうへに「貸越し」を許るされる。そして銀行家の事業は、その一小部分が現金で行はれるだけであつて、取引の大部分は小切手で行はれるのであるから、この「貸越し」は、明らかに新貨幣であつて、銀行家が貨幣を鑄造し、または紙幣を印刷したと同一結果をもたらすのである。卽ち通貨の膨脹(inflation)と同一効果に陷るのであつて、その結果はそれが貨物の需要として働く瞬間に、他の凡ての通貨の購買力を減退せしめることとなるのである。且つ、かくして「信用」からえられた購買力に、大部分、資本生產卽ち道具や、工場やその他の中間的生產物のために投資されるのである。卽ち消費者にはそれ自身必要のない物のために投資されるのである。從つて今日の信用制度のもとでは、且つこの信用制度に伴ふ物價制度のもとでは、購買力は資本生產物と最終生產物との双方に分配されるのであるが、その分配された、購買力は——實際にその大部分が——たゞ最終生產物の價格だけによつて回收されるのである。つまり全體としての社會は資本生產物と最終生產物とを買ひながら、たゞ後者だけの引渡し——統制をうけるに過ぎないこととなるのである。(註二十三) 他の言葉でいふと、社會は資本貨物と消費貨物とを生產しながら、個人の集合としては、たゞ後者だけを消費するに過ぎないのである。(註二十四)

(註二十三) Credit-Power, pp. 28-36

(註二十四) ibid., p, 99

六、

この點を明瞭にするためには信用についての明確な理解が必要である。信用には實信用（real credit）と金融信用（Financial credit）との二種類が存在する。オウレーヂの説明によると、眞信用とは貨物の引渡の可能に關するものであり、金融信用は貨幣の引渡の可能に關するものである。卽ち眞信用は貨物の供給、金融信用は貨幣の供給に關するものであるといふことができるのである。しかし眞信用は貨物の現實の供給によつてではなくてその『可能』の供給によつて測定されるのである。言葉を換えていへば、眞信用とは、貨物の要求、要求される時、要求される場所に從つて、その貨物を生產し且つ交付する能力の正確な計算である。一つの機械は需要に應じてのそれの貨物生產能力の正確な計算だけの眞信用をもつ。一國民の眞信用とは、可能の消費者によつての要求內容に從つて貨物を生產し交換する國民の能力の正確な計算である。そこで眞信用には二つの要素が存在するのを知る。一つは生產の能力であり、他の一つは需要である。このうちの一方が存在しなければ他方は無用である。卽ち何人も需要せざる貨物の生產者は生產されることのない貨物の可能消費者と同じように、無價値である。他の言葉でいふと、眞信者の存在のためには、生產者と同じく消費用が必要なのである。たゞに消費者が必要な要素であるばかりではなしに、社會全體が必要なのである。經濟的に觀察すれば、國民とは、眞信用の生產に從事する人民の結合なのである。そしてこの意味において、國家は、共同社會の眞信用の管理者として、生產者消費者の利益とをともに代表するといふことができるのである。何となればこの二つながら眞信用の創造のために欠くらべからざる要素であるからである。ところが全社會は生產者と消費者とから成立するのであるから、眞信用はその起原において社會的であるといふことができるのである。從つてそれは生產者にも消費者にも屬するものではないのである。

これに反して、金融信用は、貨幣のうへに立つ。しかし貨幣はそれが貨物によつて基礎づけられ場合にのみ價値をもつのであるから、金融信用は眞信用から生ずるものである。つまり眞信用は直接に貨物を基礎とし、金融信用は貨幣の媒介によつてのみ貨物を基礎とするのである。そこで金融信用の職分は何かといふのに、それは眞信用を働かせることである。車を回轉させるのは貨幣であるからである。例へばこゝに靴の製造のための工場裝置があるとする。

それが靴の製造の能力があり、且つ靴への需要が存在するとせよ、こゝに眞信用は存在するのである。しかしこの工場裝置が實際に靴の製造をなすためには、即ち眞信用が働くためには、こゝに他の一定の條件が必要である。即ちこの工場裝置の所有者は靴の製造に必要な原料と、これを働かせる人間への賃銀、俸給その他の必要な費用をもたなくてはならぬ。ところで彼にこれを充當すべき貨幣がないとする。彼はそれを借りねばならぬ。即ちその機械を働かせるために必要な金融信用を借りねばならぬ。この金融信用の發行者は普通には銀行である。

　ところが銀行は、貨物そのものを必要とするものではない。勿論前にも述べたとほり、金融信用は窮局において貨物の基礎を離れては存在しないのであるが、直接的には貨物の基礎のうへに存在するものではない。銀行の職分は、その債務者たる生產者が如何なる貨物を生產するかの問題とは交渉がない。彼の考量に上るのは、その債務者としての生產者が貨幣を返却する能力があるかどうかの問題である。ところが生產者の貨幣返却能力は、その生產物への可能の需要が存在するか否かの問題と交渉するのであるから、若し有望な消費者が存在しないとしたら、銀行は金を貸さないこととなる。何となれば、銀行は債務者即ちこの場合の生產者から回復することのできない金を貸す筈はないからである。しかし消費者は常に、その需要するものの全部に對する購買能力があるのではない。だから消費用は貨物の全部を求めてもしかもその一部分しか消費する能力がないことがある。そしてこの場合には、銀行から發行される金融信用は、消費者の實際の購買能力によつて制限されるのほかはない。從つて金融信用は眞信用によつて測定されるものではないこととなる。生產者に生產の手段を與へよ。彼はより多く生產することができる。消費用に需要の手段即ち金を與へよ。彼はより多く消費することができるのである。しかし銀行はこうしたこととは沒交渉である。彼の關はるところはたゞ金、そして金と直接關係にある貨物のことだけである。

　そこで次のようなことが云ひえられる、眞信用の生產者は統一社會であるが、それを働かせる手段をもたない統一社會はこの眞信用を實際に活用することができないと。從つて眞信用の統制は社會共同體によつて行はれるのではないといふこと。

そは金融信用によつて働く。從つて金融信用の發行者によつて統制されるのである。そして金融信用の發行は金融權力（finacial Power）に屬するのであるが、その權力の運用者が銀行（bank）なのである。（註二十五）

（註二十五） Credit.-Power, pp. 156-162

七、

そこで次のようなことがいひえられるのである。

(一)、凡ての信用價値は、永久組織としての統一社會から生ずる。たゞ現在の精神的及び體力的勞働者の時代からだけではない。

(二)、生產の率は第一に統一社會の科學的及び文化的遺產によつて、第二には機械及び裝置に、第三には總人員によつて決定される。

(三)、賃銀、俸給及び配當は全生產物を買ふことができない。

(四)、この個人の購買力と、全生產物の價格との隔りを補塡する唯一の方法は信用の發行と輸出とである。

(五)、凡ての產業的國氏は輸出の競爭をする。その結果は戰爭である。

(六)、個人へ分配される購買力の主要部分は賃銀と俸給とであるが、生產における重要さを增してゆく要素は生產行程の改善と自然力の利用とである。

(七)、前項の後者は賃銀と俸給とを排除し、その結果として各人への貨物の分配を排除する。かうして購買力における信用的要素が增大して、それが生產を支配する。

(八)、從つてかゝる生產は信用の統制者によつて要求される性質のものとなり、そして資本生產である。

(九)、信用の發行と價格決定とは、社會の經濟生活を支配する職分の積極的消極的方面である。從つて社會自身を統制するのである。

(十)、社會は、今日では、信用發行及び物價決定を統制しない。社會は社會の經濟的生活を、また從つて社會自身を統制しない。

(十一)、その統制者は金融の權力である。金融の權力は少數の金融家の手にあり、銀行がこれを運用する。(註二十六)

(註二十六) New Age, Dec., 23, 1920, p. 80; Credit-Power, pp. 38-9 參照

八、

また更に次のことがいひえられるのである。

(一)、資本家には生産的資本家と金融的資本家の二種類が存在する。

(二)、金融上の權力從つて經濟上の權力は後者の把握するところである。卽ち資本主義の權力は金融家のうへにあつて生産者的資本家は最高の權力者ではない。

(三)、資本主義の害惡は金融のうへにあつて、利潤なり、生産手段の所有者なりの問題は却つて第二義である。

(四)、從つて資本主義の害惡から解放されるためには第一に金融制度の改造が必要とされねばならぬ。第一に必要なことは生産手段の國有でもなく、生産行政の統制でもなく、利潤の廢止でもない。

(五)、信用制度の改造は信用制度の破壞ではない。信用制度は文明の血液であり、その破壞は文明の破壞であるからである。

(六)、必要なことは眞信用の所在に金融信用を一致せしめることである。卽ち信用制度を社會的統制のもとに置くことである。また從つて物價の統制を社會に歸せしめることである。つまり信用制度及び物價制度の社會化なのである。

九、

信用社會主義はかくして信用制度の社會化、從つて物價制度の社會化を要求するものである。そしてこの方法さへ行はれると、世界の改造は五年にして行はれるといふのである。(次號につゞく) (室伏高信)

インタナショナルの新運動

〔Einheitsfront の問題〕

一、

四月二日から三日間伯林の議事堂で開かれた國際社會黨の各派の會議は世界の社會主義運動の歴史のうちで空前の大運動である。少くとも空前の大運動の除幕である。

その集まつた人たちの數は、僅々數十人（詳報に接しないが）に過ぎないが、その集まつた人々の顏觸れから見るに、第二インタナショナルを代表するものとして英國のラムセイ・マクドウナルド、白耳義のヴンダアベルトがあり第二半インタナショナルを代表する墺國のフリードリッヒ・アドラア、佛國のロンゲー、露國のマルトフがあり、共産インタナショナルからはブハリンとラデック及フロッサールがあり、更に何れのインタナショナルにも屬することのない伊太利のセラチイがある。卽ちインタナショナルの既成團體に屬してゐるものも、若しくは何れに屬してゐないものも、世界の勞働運動の本流に立つてゐるものは、殆んど悉く一堂に會したのである。

今日まで、世界の組織的勞働運動が、完全にインタナショナルに統一されたことは無論無い。マークスの第一インタナショナルの八年間は、各派の勞働運動を連ねたにしても、その數は微々たるものであつた。第二インタナショナルに復活された時に、獨逸からはベーベル、大リーブクネヒト、ベルンシタイン、クララ・ツエトキンなどが、英國からはケーア・ハーデー、ヂョン・バーンスその他、露國からはプレファノフその他、佛國からは二百二十一名の代表者が、その他の各國からもそれ〴〵の參加者があつて、その規摸は無論第一インタナショナルよりは大きくなつては來てゐたが、しかし最近伯林で開かれた、今回のインタナショナルの共同會議に比べると物の數にもならぬ。何となれ

ば伯林會議は、今日の世界、組織的勞働者、約五千萬を代表するに近いものであるからである。

二、

インタナショナルの分裂はチムメルワルド會議以後である。ロシアのボルシエヴ井キ、獨逸のスパルタクス、和蘭のトリブウニストの運動、それから第三インタナショナルの創立となり、また昨年二月の第二半インタナショナル(I. A. S. P.)となり、更にまた昨年十月の第四インタナショナルとなり、そして第三インタナショナルに、若しくは第二半インタナショナルに加はるべくして加はらなかつた伊太利のセラチイ、米國の社會黨その他があり、國際社會主義運動は、戰爭とともに、過去數年間、殆んど手のつけようのないほどの分裂に苦るしんできたのである。勿論その分裂にはそれ〴〵の理由がある。特に分裂者の方により多くの理由がある。しかしその理由のあると無いとにかゝわらず、この分裂が、今日の世界勞働運動の疾ひであつたことは、從つて同時に世界の資本家階級の乘ずるところであつたことは、疑の餘地がない。

三、

共産インタナショナルは、世界の資本主義と戰ふとともに、「また世界の日和見的勞働運動と戰つてきた。否、資本主義と戰ふことよりも直接には既成勞働運動と戰ふことに全力を注いできた。第二回會議の決議に曰く、アムステルダム・インタナショナルに對して『頑强な鬪爭』(hartnäckig Kampfgegen die Amsterdamer Internationale) を行ふと。また曰く、共産インタナショナルは『凡ての黄色社會民主黨に對して戰を宣する』と。たゞに第二インタナショナルに對してだけではなしに、カウツキーにも、ヒルキットにも、ロンゲーにも、マークス主義の中央派の諸君をも排撃し、共産インタナショナルの旗下に參するものは、何れの國においても、先づ凡ての日和見主義者と、凡ての『中央マーキスト』(Zentrumsleute) とを驅逐することが必要條件であると宣言したのである。(註一)

（註二） Leitsätze über die Bedingungen der Aufname in die Kommunistische Internationale

第三インタナショナルのこの戰法は遂に大なる反響があつた。古るき社會黨または勞働黨が各國において相次いで動搖し、若しくは崩壞した。カウツキーは『變節漢』だとレニンが叫ぶと、各國の大小、有名無名のレニン派が、昨日まではカウツキーを宗主と仰ぎ、彼の書物からのクオテーションを陳列することに忙しかつた人々、までが、あれは『變節漢』だと應ずる。一九二〇年から二一年初へかけての世界の勞働運動は、共產主義の颶風が席捲するの勢を示したのである。

四、

しかし颶風は、そう長くは續かなかつた。セラチイはとう／＼モスコウへは加らなかつた。それがヂノヴヰエフの最大の躓づきであつた。獨逸の共產黨、ロシアに次いで最大の共產國としての獨逸の共產黨（V. K. P. D.）は一九二〇年から二一年へかけて二十萬ばかりの會員を失つた。そして殆んど群衆から遠ざかつた。佛蘭西の共產黨は曖昧黨である。英米は全く問題にならない。そこで一九二一年は共產インタナショナルが、一大方向轉換をしなくてはならないの時であつた。同年の第三回會議は、共產主義がロシア農民の前に、彼の政策を根本から轉覆したのみではなしに、その國際政策のうへに、それにも劣らぬ一大回轉を斷行するの舞臺となつた。

五、

チチエリンはロイド・ヂョーヂを讃美した。ザール時代の舊債承認を宣言した。彼はロシア内に農民の商行爲を承認するのみでなしに外國人の商業を許るそうといふ。ブハリンやコロンタイの左翼派が敗れて、クラッシン、チチエリンの右翼派が時めく。内に無政府主義者が牢獄に泣いて、外にロイド・ヂョーヂ、バルツーと手を握る。

この變化はインタナショナルのうへにも勿論現實になつた。彼が『變節漢』、『日和見屋』といつて口穢く罵しつたマクドウナルド、セラチイ、ロンゲー、ヴンタアヴ井ルトと、獨逸議會の一室において會議卓子をともにする。ラデツクも、ブハリンも、レニンの言葉でいふと、正に一大變節漢である。

六、

共産インタナショナルの第三回會議の敎訓、所謂新戰術は、ヂノヴ井エフの指摘してゐるとほり、Heran an die Massen ! である。昨日までの部局的運動から『群衆(マッセ)』の運動へと轉回することである。即ち、プロレタリヤ及半プロレタリヤの群衆の密集(ヂイヒテステ)群(ゲドレンゲ)のうちに參入することとなのである。(註二) こゝに既に伯林會議への方向が存在する。

（註二） Die Kommunistische Internationale, Nr. 18, S. 8

この傾向は、獨逸の共産黨によつて最先きに具體化された。獨逸の合同共産黨は、昨年パウル・レビーを除名したが、しかし一方にはカー・アー・ペー・デーを排斥しながら、『共同陣營』を主張することに、決して機會を逸してはゐなかつた。昨年エルツベルゲルの暗殺された時に、「ローテ・ファーネ」は、獨立社會民主黨と、そして、ローザ・ルクセンブルヒとカール・リーブクネヒトを殺害したことによつて、「拭ふべからざる汚辱を印してゐる社會民主黨(註三)に對してさへ、(註四) Einheitsfront を主張したのである。それが昨年末になつて、遂にモスコウの本部へ向けて、インタナショナルの全戰線に向つての、Einheitsront の要求にと飛躍するに至つたのである。これが共産インタナショナルの伯林會議への發展の、第二回段である。

（註三） リーブクネヒト、ルクセンブルヒの虐殺に、ベルシタインのような日和見主義者でさへその獨逸革命論の近著のうちで痛擊を加へてゐる。E. Bernstein, Die deutsche Revolution, 1921, S. 165-72

（註四） Die Rote Fahne, 28. (Abendblatt) August, 1921

七、

獨逸共産黨の要求は、こゝに一九二二年十二月十八日の、各派インタナショナルへの、共同陣營の宣言となつて現はれた。即ち共産インタナショナルの執行委員會の決議として十二月十八日のプラウダに發表されたものがこれである。この宣言に從へば、各國において、プロレタリヤ諸政黨の共同陣營が必要である。そしてこの共同陣營は、インタナショナルのうへにも必要である。彼に從へば Heran an die Massen ! とは、要するに各派の勞働團との共同陣營でなければならぬ。そして『共産インタナショナルは、共同陣營の標語を發するに當つて、且つ共産インタナショナルの各支部が、第二、第二半及びアムステルダム・インタナショナルの各派との協調を許容するに至つて、インタナショナルの範域にも同様の協調を拒むわけには行かぬ。』

こゝに共産インタナショナルの一大轉回が明確現實に宣言された。それは共産インタナショナルの一大轉回であるとともに、凡てのインタナショナルの轉回、從つて世界勞働運動の轉回である。

八、

私は今まで共産インタナショナルの方だけを述べてきた。そしてまたそれが轉回でもあり、行詰まりでもあり、若しくは變節でもあるといふことを述べて來た。しかしそは共産インタナショナルだけの問題では無論無い。ロンドンインタナショナルは、その有名なベルンの會議で、ロシアが、民主主義の原理、所謂 Demokratie überhaupt の原理を採用しない限り、それとともに行かないと言つて來た。しかしロシアのレニン一派から彼の生命としての無産者階級の獨裁政治の原理を放擲することは、ボルシヴエ井キの死滅である以上、かくのごとき條件で、各國勞働運動共同行動の出來上る筈がない。從つてこれ等の黄色派が、眞に赤色派とともに行かうとするの誠意があれば、彼等は彼等自らを變へて行かねばならぬのである。

第二インタナショナルは、英國勞働黨と獨逸の社會民主黨とを提げてゐる限り、その分量において最大のインタナショナルである。特にアムステルダム・インタナショナルがこれとともに行くかぎり、彼の地位の優越は動かない。しかしそは少くとも第二半を失つてからは、支配的な力ではない。勞働運動の活動的な、燃ゆる力である急進派を失つてゐる以上、最早や精神的死滅である。然り、第二インタナショナルは、その數學的の勢力の如何にかゝわらず、既に久しく屍である。彼が如何なる工夫をこらし、如何なる新戰術を用ゐても、そはモスコウからの嘲罵の とほり『屍の鍍金』(Galvanisierung des Leichnams der Zweiten Internationale) であるに過ぎないのである。(註五)

(註五) Beschluss über die Stellung zu den Sozialistischen Stromungen und der Berner Konferenz

九、

第二半インタナショナルがヴ井ーンで創立されたのは昨年二月二十二日のことである。この一團はヒルフエルディング、バウアア、マルトフ等の、所謂マークス中央派を指導力とするものであつて、獨逸の獨立社會民主黨と、佛蘭西の社會黨と、墺國の社會民主黨と英國の獨立勞働黨ロシアのメンシエヴ井キなぞを中堅とするものである。即ち大體においてカウツキー派の理論を奉ずる一團である。また從つてモスコウの理論と感情とも兩立することのできなかつたのは勿論である。ラデツク曰く、第二半インタナショナルに對する共産インタナショナルの關係は第一に戰鬪の關係でなければならぬと。(註六)

(註六) Karl Radek, Die Grundung der 2½ Internationale

しかし第二インタナショナルは、こゝに別種のインタナショナルを彼自身の勢力のもとに樹立しようとしたのではなかつた。彼の目的とするところは、革命的階級鬪爭の線に從つて、世界のあらゆる革命的勞働者階級のうへに包括的なインタナショナルを樹立することなのである。第二半インタナショナルの出來た時には、即ち昨年の春には尙ほ未だ世界の勞働運動のうへに共産主義の颶風が收まつてゐない時であつたのであるが、しかしそれも漸く收まらうとする

方向に向つてゐたし、第二インタナショナルが精神的に死滅してゐた時であり、且つ世界の勞働運動が大に分裂難に苦しむでゐた時であり、更にまた、世界の對資本主義關係が、勞働者の一大團結を要求してゐた時であつたから、彼の目的とするところは、甚だ困難な事業であつたし、また事實彼の期することそれ自身は今日においても尙ほ絶望的ではあるが、しかし何等かの形において、彼の期待に反應するものがあるべき形勢のもとに立つてゐたのである。彼が昨年十二月十九日の會議で、先づ五ヶ國の各派社會黨または勞働黨の包括的會議を開くことについての具體的の方法を樹てたのは、ロシアからの共同陣營の宣言と殆んど時を同じうして行はれてゐるのである。それから今年一月十四日及十五日の伯林會議に發展し、この會議では二つの共同陣營を要求した。一つは全勞働運動の共同陣營であり、他の一つは五ヶ國だけの、即ち戰爭から直接影響された五ヶ國の勞働者階級だけの共同陣營の要求である。

十、

五ヶ國社會黨會議は最初に、二月四日から巴里で開かれた。ブルバールの Soci'été de Geographie で開かれた。そは慥にロンゲーのいつてゐるとほりに、歷史的事件であるに相違ないであらう。鐵道ストライキのために獨逸からはロンゲーの所謂『偉大な老人』レデブーア以下は來なかつたし、期待された伊太利のセラチイも來なかつた。特にこの會議では白耳義の一委員から、ロシアと共同するの條件は、ロシアが『獨裁政治』をやめねばならぬといふような、出來ない相談まで持ち出されたほどであつた。(註七)しかしての會議がロシアからの共同陣營の宣言に、反對すべく、時代があまりに勞働者運動の統一を要求してゐたのであつた。そこでこの會議に引續いて、二月二十五日からフランクフルト・アム・マインで五ヶ國社會黨各派會議が開かれることとなつた。この會議は、佛蘭西からロンゲー、ルノウデル、獨逸からレデブーア、ウエルス、ブラウン、ベルンシタイン、ジルベルシユミツト、ブライトシヤイト、ヒルフエルデイング、クリスピエン、ヂツツマン、ヂツトマン、白耳義のヴンダアベルト、英國のウオールヘツド、チヨウエツト、チレツト、伊太利のセラチイその他、それから共產黨を除名されたパウル・レビー、ガイアーその他

も參加して、歐州改造について、ゼノァ會議以上の有意義の會議を開いた。この會議では歐州の改造が主題ではあるが、しかしそれとともに、インタナショナルの共同陣營の問題が、他の一つの重要問題であつたこと勿論である。そしてそはヴンダアベルトの提案に從つて、

一、チョールジアの自治權

二、政治犯人の釋放

の二つを條件として、各派インタナショナルの共同會議を決定したのである。(註八)この決議は、實にモスコウの十二月十八日の宣言に對する第二及び第二半インタナショナルその他の態度の宣言であつたのである。

(註七) Daily Herald, February 6, 1922

(註八) Freiheit, 27. Februar, 1922

十一、

こゝに、第二、第三、第二半、及びその何れにも參加せざる、セラチイ、レビー等の、殆んど世界の勞働運動の全體を包括する一大會議が四月伯林で開かれることの運びになつた。その決議は左のごとくである。

共産黨「第三インターナショナル」は社會革命黨員四十七名の審理に辯護人を許すこと、必ず死刑を行はぬ事、同審理を公開にして三派執行委員の傍聽を許す可き事等を宣言し三派執行委員會は各方面の材料蒐集の上ジョールジャ問題の調査研究に從事し其結果を次回會議に報告し會議は「第二インターナショナル」が其所所屬各團體と交渉せぬ限り今月中に態度を決定することは能はず從つてゼノア會議會期中本會議の開催は不可であることするを承認するも成る可く速に次回會議を招請するの必要を認む無資産階級共同作戰の實を示し、勞農露國の外交關係復活其他の目的を達成せんが爲四月二十日或は五月一日示威運動を行ふ可し。(外務省發表)

十二、

この會議は、勿論不充分なものである。しかしそは滿足への第一歩だと見られるであらう。そして十二月十八日の宣言のとほり、世界の勞働運動が統一への『拒むべからざる衝動』に動かされてゐることの紀念塔であつて、この會議そのものが成功すると否とにかゝわらず、共產黨宣言にいふところの Bewegung der ungeheueren Mehrzahl に向つて世界の勞働者が、眞實の體現を見せるの機運が漸く迫つきたといふことだけは、疑ひもなく證明せられたのである。

十三、

この機運を導いたものは一、第二インタナショナルの精神的死滅二、第二半インタナショナルの努力三、第三インタナショナルの行詰まり及び方向轉換。四、それにもかゝわらず全體としての世界勞働運動の左行、五、資本家階級の反動政治を計へることができると思ふ。特に資本家階級の反動政治は最近數年間における世界の最も頭著な傾向であつて、かくのごとき野蠻政治は世界の勞働者階級がともに堪へざるところであつたが、伯林會議は一面に於いてこの反動政治への世界の勞働者の答であつたのである。（室伏高信）

正誤

第一號には大分誤植がありました、こゝにその一部を訂正します

第一頁Anbrueh は Anbruch　第四頁 Veltanschauung は Weltanschauung　第六頁 Kulturguter は Kulturgüter　第七頁 Gemütskrafte は Gemütskräfte　第十頁 Reich は Mechanik　第十一頁 Edend は Ebenda　第三十六頁 Odseruer Iulg は Observer July　第三十三頁 Thekrie は Theorie　第八頁「汎理的」は汎神的其他

ロマン・ロランと共産主義

（彼の態度の雄辯な宣言）

一、

アナトール・フランスとアンリ・バルビユッスとの、佛蘭西文壇の二つの巨星が共産主義運動に加はつた時に、他の一つの輝く星、ロマン・ロランが 共産主義運動に對してどういふ態度をとるかの問題は佛蘭西文壇にとつて若しくは世界の文壇にとつて、若しくは世界の社會主義運動にとつて大きな興味であつた。

二、

ロマン・ロランが共産主義の前に、彼自身を宣言するの時が來た、今年の三月、彼はクラルテへ二つの手紙を發表した。それはバルビユッスから「知的冷淡」だと責められたの對にする、彼自身の宣言であつた。暴力と共産主義とに對する彼自身の雄辯なる宣言であつた。『新マルクス派共産主義は、私には、現實な人間的進歩と殆んど調和しない、絶對主義的形體であると思はれる』――彼はその第一の書簡でこう宣言した。何故にそうか？

「何となれば、ロシアにおけるそれの實行はたゞに兇惡且つ慘忍な誤謬によつて汚瀆されてゐるばかりではなしに、（ヨオロッパ及び亞米利加の政府の罪惡が重い責任をもつことは勿論であるが）、その實行において、新秩序の指導者たちは、最高の道德的價値――人道、自由、及び凡てのもののうちで最も貴重な眞理を、熟慮的に犧牲にしたからである。……軍國主義、警察權、若しくは慘忍な暴力は、私にとつては、それが金權政治のためでなくて

共産主義者の獨裁政治の手段であるといふの理由でもつて、神聖なものとすることはできない。」

ロマン・ロランは、目的が手段を神聖化させるといふ、ありきたりの暴力擁護論には、何の尊重をも拂つてはゐなかつた。彼は正反對なことをいふ。そして偉大なことをいふ。曰く『目的が手段を正しくするといふことは眞理ではない。手段は眞の進歩にとつて 、目的よりも重要である」と。何故に？

「何となれば、目的は、滅多に到達されるものではなくそして常に不完全にしか遂げられるものでなく、そはたゞ人間の外部的關係を制約するに過ぎないが、しかし手段は正義の韻律に偕調しても、若しくは暴力のそれに應じても、人間の靈を形作るからである。若しそれが後者であるとしたら、如何なる政治形式も、强者によつての弱者の壓迫を、永久にとゞめることはできないのである。だから私は思ふ、道德的價値を擁護することが恐らくは平常においてよりも革命の時において、より多く緊要であるといふことを。

『革命の支持者の精神が狹隘にも政治的なものであつてそして良心の神聖な叫びを『アナキズム』だとか『感傷的』だとかいつて輕蔑してゐる間は、私は何の幻滅も伴しに爭ひの問題について、私は傍觀してゐるであらう。

『しかしこういふことは、私が不活動でゐるといふ意味ではない。………私は現在の世界の痙攣が、人類の生長における長い危機、人民が他の多くの戰ひを忍ばねばならぬところの、痙攣の時代の、たゞの始まりにしか過ぎない。私たちはこうした、私たちの眼が見ないが、しかし私たちの精神の何ものかが生殘するであらうと信んずる鐵血時代に向つて、私たち自身を武裝しつゝある。私たちは、私たちの後に來たる人々のために、彼等を嵐のうちに泳ぐことに助ける、理性と、愛と、信仰の力を救ひ且つ集中しようと、努力しつゝある。………私たちは曙の光を眺め、そして人間の進みを妨げる過去の滅ぶべき羈絆を破ることに努力する。しかし私はそれの代りに新らしい且つ有害な羈絆を置き換えはしないであらう。

三、

ロランの第二の手紙は、共産主義に對する彼の態度の宣言に更に一歩を進めた。自由人としての彼の面目は一層躍如たるものがある。彼は、自由人としての彼は勿論

革命から逃げようとしてゐるのではない。否、〇〇〇凡ての幸福とよりよき生活とを希ふ凡ての人々にとつて〇一つの建物であつた。彼自身はそこを彼の住居だと信じてゐるのである。しかし彼はいふ。

『しかし私は、ブルジョアと共産主義者との爭鬪が私たちに課する『仲間』の空氣のうちに生活することはできない。これ私が窓を開き、且つ呼吸のために若し必要ならば、窓硝子を破らうとさへも用意してゐる所以である。………

佛蘭西の指導者たちがもちきたしてゐる怪物はとても歡呼のできるものではない。そして私は群衆を見る時に私は、多數者の冷たい利己主義の中で、暴力と攪亂的の勢力とが、建設によりは、破壞のために役立つことを見る。

『私たちの西方の世界は、傷いた巨大な鹿に似てゐる。そはそれの傷を舐める。そして血が愈ゝ流れる。それの精力を回復するのは新らしい傷によつてゞあらうか？私は恐る、殘つた血をも失ふであらうといふことを。

われ〳〵の共同の敵は今日存在するような人間の社會の壓迫的暴力である。しかし君（バルビユッス）は反對の暴力を採用しようとしてゐる。かゝる方法は、私の考では相互的の破滅に導く。

『私が私の友に薦める態度は離れてゐることでも、絕つてゐることでもない。反對に私はいふ、休止する勿れ！妥協する勿れ！不正及び虛僞とかゝわる勿れ！新らしきもののために古るき偶像を逐一に破壞せよ！敢行せよ！汝自身を犧牲にせよ！そして汝の努力が決して無駄にはならぬと信んずべきである。汝は來るべき時代のために働きつゝあるのである。目的に達しないといふことを託つこと勿れ。汝の生命の及ぶべき範圍を超えての仕事に掌つたといふことを喜ぶべきである。それは汝が生きゐる間に不滅を味ふの道である。

四、

『一日の人類、その朝生暮死の信仰、それの喪失、それの勝利を超越した何ものかゞ存在する。そしてそれは永却の人類である。

五、

『一九一四年の權利の軍隊へのように、一九二二年に、革

命の軍隊に加はることが、藝術家や、學者や、思想家の義務だと、君は信んずるか？　人類と革命自身とに奉仕するのに、革命が自由の致命的要求を包括してゐない時には革命に反對することであつても、尙ほ君の自由思想の完全な保持することが、最良の道だとは思はれないか？　若し革命が自由の致命的要求を含むでゐないとしたら、そは更新の力ではないであらう。そは百面相の怪物――反動の新らしい形體となるであらう。

アナキストの抗議

勞働者の國、無產者階級の獨裁政治のもとで、無政府主義者は如何なる態度をとつてゐるか、また如何なる待遇をうけてゐるか。エムマ・ゴオルドマンとアレキサンダアバアクマンとの、二人の卓越したアナキストが、エリス島から、Red Ark に乘せられて『自由』のアメリカを追放されて、彼等の故國、『無產者』のロシアへと送られてから、二年、彼等は『無產者』の故國から逃れた。エムマ・ゴオルドマンの言葉でいふと「監獄」――彼女は今のロシアを監獄いとつてゐる――から逃れた。そしてストツクホルムから數通の手紙を各國の同志へと送つた。

一月七日（一九二二年）ストツクホルムにて。

親しき友よ、――ロシアにおける革命的分子の迫害は、ボルシエヴ井キの政治的及び經濟的變化とともに、減退はしてゐないのです。反對に、そはいよ〳〵激烈且つ斷乎たるものになつたのです。ロシアの、ウクライナの、シベリアの監獄は、男や女や――或る場合には單なる小供さへも――支配する共產黨のそれから違つた意見を抱持することを敢てするもので、一杯になつてゐます。私たちは態と『意見を抱持』するといふのです。何故なら今日のロシアでは、捕縛に服することとなるのには言葉や行動で、あなたの反對を表現する必要はないのです。………

しかしロシアにおける凡ての革命的分子のうちで、今日一番に無慈悲な、そして組織的な迫害をうけてゐるのは、アナキストなのです。ボルシエヴ井キによつてアナキスト迫害は既に一九一八年に、――四月です――共產政府が何の警告もなしに、モスコウの『無政府主義者俱樂部』を襲擊し、そして機關銃と大砲の使用とをもつて、全團體を「一清算」した時に始まつたのです。それが無政

府主義者狩りの初めであるのですが、それは寧ろ散漫的な性質のもので　時々に起り、全く無計劃で、そして往々自己憧着のものであつたのです。だから無政府主義の出版物は、ある時は許るされ、ある時は禁じられました無政府主義者は此所では捕縛され、彼所では釋放されました。時としては射殺され、またある時は最も責任ある地位をうけとるべく懇願もされました。しかしこの混沌たる狀態は一九二一年四月の、ロシア共產黨の第十回會議で、レニンがたゞ無政府主義者に對してばかりでなしに、『凡ての小ブルヂョア・アナキストとアナーコ・サンヂカリストの傾向』に對して公然の、且つ無慈悲な戰を宣言した時から終りを告げました。この時からこゝにボルシエヴ井キの支配するロシアにおいて組織的な、慘忍な無政府主義者の根絕が始められたのです。レニンが演說したその日に、モスコウとペトログラードで數十人のアナキスト、アナーコ・サンヂカリスト、とその同情者とが捕縛され、次の日に、全ロシアに亘つて、私たち同志の捕縛が行はれました。その時から迫害はいよ〳〵暴力を增して行きました。そして共產主義者の治世と資本主義の世界との妥協が擴大すればするほど、無政府主義者への彼の迫害はいよ〳〵激烈を加へたものです。

　私たちの同志への野蠻な處置に、匪徒主義といふ常套的糾彈の假面を被らせることは、ボルシエヴ井キ政府の確定政策となりました。この糾彈は實際に凡ての捕縛された無政府主義者に、そして往々單なる私たちの運動の同情者にさへも加へられてゐるのです。實に有力な便利な方法です、何故なら、それによつて、公判、審問、または取調べなしに、誰れをでも秘密に死刑執行をすることができるからです。

　レニンの無政府主義的傾向に對する戰爭は、最も忍び難い亞細亞的の剿討形式をとりました。去年の九月には多數の同志がモスコウで捕えられ、そしてその月三十日のイスベスティアで、この捕縛された無政府主義者のうちの十人が匪徒として射殺されたことを公式に發表されました。彼等の何人も審門または公判をうけはしなかつたし、また辨護士によつて代表され、或は親戚友人などによつて訪問されることも許されはしなかつたのです。死刑を執行された人たちのうちには、二人の最も著名な無政府主義者、…………がありました。一人はその數ケ月前にリアザンの監獄から逃げ出したファンニイ・バロ

ンと、ザール時代に彼の革命的活動のために西伯利のカトルガで長い年月を送つた。人氣ある講演家且つ記者のレフ・チョルニイとです。ボルシエヴ井キは、チョルニイを射殺したことを公言するの勇氣をもたなかつたのでした。………

剿絶政策は續行されつゝあります。數週間前にモスコウで無政府主義者の捕縛が行はれました。今度やられたのは universalist Anarchist の一派で………あつたのです。捕縛されたもののうちには全露に有名な………アスカロフ、シャピロ、スチツツエンコなどがあります。………

これ等の捕縛と糾彈の目的の非道なことは殆んど信んじられないほどです。アスカロフや、シャピロや、スチツツエンコ等を『レフ・チョルニイの地下團』の會員だとして罰に問ふことによつて、ボルシエヴ井キは、九月に死刑にしたバロンやチョルニィ等の穢れたる殺戮を正化しようと欲し、且つ他方もつと他の無政府主義者の射殺への便利な口實を造らうとしてゐるのです。しかし私たちは讀者に保留なしに且つ絶對的に、『レフ・チョルニィ地下團なるものの無かつたといふことを保障することができます。これを否定するのは、極惡な虛僞です。………

今や世界の革命的勞働運動が、ボルシエウ井キ政府によつて、凡ての他の政治上の考の違つてゐる人々のうへに實行した血と殺戮の治世を識るべき最高の時であります。………

アレキサンダア・バークマン
エムマ・ゴオルドマン
(署　名)

一月十二日、ストツクホルムムにて。

最近にロシアを去つてから、私たちは、私たちの第一に且つ最も急切な言葉が、ロシアにおける私たちの政治的囚人のために語られなくてはならないことを感じます

社會革命の國における政治的囚人のことを語るのは、ロシアの狀態についての悲しむべき、そして斷腸の思ひする批評である。しかし不幸にしてそれが事實なのです。………虛僞のようには見えるかも知れないが、ロシアの監獄は、この國の革命的分子、最高の社會的理想と願望との男女によつて、雜沓してゐるのです。廣大なる全國を通じて、ロシア本土も西伯利も、舊治世の監獄も新

らしいそれも、チエッカの特別區劃（Ossoby Otdell)の通じがたき、土牢のうちにも、各政黨及運動の憔悴した革命家、左翼派社會革命黨員、最極派、勞働反對派」の一派としての共産主義者、無政府主義者、アナーコ・サンヂカリスト、及びユニバアササリスト——社會哲學の各派の信奉者、しかし彼等の凡ては眞正の革命家であつて彼等の大部分は一九一七年十一月革命の最も熱烈な參加者であつた——に滿ちてゐます。

これ等の政治的囚人の地位は極度に憐れむべきものであるのです。たゞ彼等の精神的憔悴と苦痛とばかりではなしに、純粋に彼等の生存の肉躰的方面から見ても、言ふべからざる不幸なものであるのです。ロシアの一般狀態のために、建築材料と熟練勞働との欠乏のために、監獄の修繕は實際に問題外なのです。…………しかし最惡なのは食物問題であるのです、如何なる時でも、ボルシエヴヰキ政府は、その存在中に、囚人に充分の食物を供給することはできなかつたのです。彼の食料の割當は單なる生存の可能の最小限にも當るものではなかつたのです囚人の實際の支持は彼等の友人、親戚または同志の責任になつてきました。しかしこの狀態は今日はいよ〳〵惡化してきました。食物税は五十二パアセントしか集められないし、また實際にこれ以上集まる見込みもなし『ヴォルガの戰慄すべき飢餓と、政府の經濟機關の破滅とともに囚人の地位は、實に絶望的のものとなりました。……

……………………………モスコウの監獄から ペトログラードの監獄から、オレルから、ウラヂミールから、東方の遠い地方から、凍る北地に流刑された同志から戰慄すべき報知が來ます。飢餓の恐るべき罰、戰慄すべき壞血病が彼等を襲ひつゝある！　彼等の手と足とが膨れ、彼等の齒齦が緩るみ、齒が抜け、腐蝕が生ける身體に起りつゝある！…………………………

アレキサンダア・バークマン

エムマ・ゴオルドマン

エ・シャピロ

スツルム運動

戰爭の苦るしみのうちに獨逸の劇場がどうして維持されたかは、寧ろ一つの奇蹟のようであるが、しかし獨逸の劇場は、たゞに戰の苦るしみに堪えたばかりでなしに戰の苦るしみのうちから、新らしい生活に復活しつゝある。獨逸劇場は、今や、繪畫や、彫刻や、建築やと同じく、獨逸人の內生活の革命を、到るところに啓示しつゝある。

帝室劇場は嘗つて久しく獨逸の皇室的且つブルヂョア的藝術の紀念塔であつたが、今では『モンナ・リザ』の作曲家マックス・フォン・シルリングスがオペラ (Staatsoper)を、レオポールド・イエッセルが劇場(Staatstheatre)をそしてミユンヘンの青年藝術家ピルハンが舞臺裝飾を支配する。エミール・ピルファンの表現主義的な、單純化された裝飾は、帝室劇場の舞臺の光景を全く革命化した。そこに『リヒアード三世』が演んぜられた。それは革命化された、表現主義的『リヒアード三世』であつた。

伯林カール術のシユーマン曲馬場は、著名な新舞臺裝飾家ピエーチッヒの天才によつてラインハルトの有名な『大劇場（グローセスシヨウシピールハウス）』に革命された。それは近世的希臘劇場の一種であつて、廣大な Amphitheatre の四分の三が觀衆席で殘りの一角が數層の舞臺になつてゐる。そして以前の曲馬場の圓心が最前面舞臺となつてゐる。シエークスピーアのハムレットや、シーザーや、ロマン・ロランの『ダントン』や、ハウプトマンの『ガイアー』なぞがこの大舞臺の革命的スゼーネのうちに演んぜられた。

人民劇場 (Volks-theatre) は獨逸の到るところに建てられてゐる。就中伯林の Volksbühne はその構造においても裝置においても驚異に價ひするものであつて、十二萬五千人のプロレタリヤがその會員として登錄されてゐるのは、正に新劇場運動の方向を示してゐるものでなくてはならぬ。

トリビユーネは革命とともにまたそれ自身を革命してマックス・ハインツのもとにミユンヘンの女優チラ・ヂユウリオイ――革命的文書の出版者として知られるポール・カッシラーの妻――は、獨逸における最大の悲劇役者の一人として、自由と革命のために、彼女の藝術を捧げ

つゝある。

戯曲的本能は、獨逸の到るところに勃興しつゝある。如何なる小都會へ行つても、今では劇場運動の行はれてゐないところはなく、しかもそは獨逸人民の新生活の要求とともに動きつゝあり、また從つて國家も都市も劇場運動の支持者として立つてゐる。誰れかゞいつたとほり、ドラマは、今の新獨逸國家の、有機的機能の一つとして承認されてゐるのである。

嘗つてはハウプトマンとズウデルマンとは、獨逸文壇の二つの星であつた。ハウプトマンは今も尙ほこゝに輝く星の一つではあるが、そして彼の戯曲、農民戰爭を書いた『ガイアー』はラインハルト大劇場に演んぜられて大喝采を博した。しかしズウデルマンの時代は、今や獨逸文壇から永久に去つた。そしてシエークスピーアの樣々の劇や、ワイルドの『理想の良夫』や、シヨウの樣々の劇や、ゲーテのフアウストや、シルレルのヴ井ルヘルムテルや、またはモリエールや、イプセン劇などが復活する。そしてマックス・ブロートや、アントン・ヴ井ドガンや、ラインハルト・ゴエーヘルや、フオン・ウンルーや、フランツ・ヴエルフエルや、カール・シエーシヘルやの、革命的、表現主義的新藝術家の名が輝く。グルタア・ハーゼンクレバアの共產主義的若しくは人道主義的表現が新獨逸青年の喝仰を集める。

劇場建築術のうへでは、エリック・メンデルゾンや、ブルノウ・タウトや、若しくは『グローセス・テアテア』のポエチッヒ敎授などが、舞臺建築を革命し、畫家フリードリッヒ・シエフラアの舞臺裝飾が獨逸劇壇の革命運動と呼應する。

獨逸の畫壇は、今まカンヂンスキーの影響のもとに立つといふことができるであらう。『新らしい畫』(Die neue Malerei)のヘルヷース・ヷルデンや、ヤコバ・フオン・ヘームスケルクや、ヨハネス・モルツアンやバウアーや、マックス・シヤーガルや、若しくはミユンヘンのパウル・クレーや、マックス・ピッカートや、表現主義が、獨逸畫壇の新生命であるとは、既に汎く世界に知られてきた。

五ケ年の痛ましい戰は數百萬の獨逸青年の生命を奮つた。その屍のうへに、獨逸議會の石壇のうへから『血の無き革命』が宣言せられた。その革命は、政治と經濟との外面生活のうへでは、尙ほ混沌の狀態から一歩も出でゝはゐない。しかし戰ひの苦惨と、そして多年に亘つて

絶對的な、若しくは形式的なものに壓迫されてきた獨逸人の慘じめな『自我』は、その古るき形式と權威とに反抗して彼自身の力を自覺しないではゐられなかつた。それは單なる政治上や經濟上における古き權力の否定であるばかりではなしに、知力の專制に對する、若しくは自然の專橫に對する、人間の反抗であつた。そこに幻想と、神祕との、偉大なる力が彼を捕へた。そして人々は自然の啓示を受ける代りに、彼自身を表現することを求めた表現主義は印象主義の自然的發展とも、若しくは印象主義への反抗とも解されてゐるのであるが、しかしマックス・ピッカートのいつてゐるとほり、表現主義は印象主義の純粹客觀の代りに、Subjektive Affektation を畫出きすのであり、それは事物との交涉の代りに神との交涉であり、しかも印象主義が過去（Gewesen）にかゝわるに對して表現主義は存在（existieren）するのであり、また疑視から激動 Vom Starren Zum Bewegten）への轉移を示すのである。その個人主義、しかもそは深く現代無產者階級の生活のうへに根を下ろした共產主義的個人主義が、新獨逸の内的生活の表現として、新藝術を指導する。

伯林の中央に近かく、ポッダマア・シトラッセの一角に、『スツルム』(Der Sturm) の本部がある。小さくはあるが感じのいゝ建物の中に、繪畫に似たようなものやら建築術に似たようなものやら、若しくは政治上のブラカートのようなものが一杯に並べられてゐる。ヘルヴースヴルデン等のような人たちがこの建物のうちに出入する獨逸の深眞な革命は『血のなき革命』が宣言されたライヒスタッハの宏壯な建物からよりは、このポッダマア・シトラッセの小さな建物から生れつゝある、といつても過言ではないであらう。

△新社會への藝術（西村陽吉著）

この一卷は所謂「社會藝術」の提唱である。社會藝術とは、著者に從へば、「民衆藝術」といはれてきたもののようなポンヤリしたものでなく、社會階級のうへに根ざした、階級藝術である。著者は藝術を階級的爭鬪の手段だと言はないが、藝術至上主義に反對し、藝術は生活の一部分であると解する。從つて實生活の事實である階級感のうへにでなくては藝術は存立しないと考へる。この考は藝術をブルヂヨア藝術と、並に著者の所謂社會藝術とに區別せしめる。そは少くともブルヂヨア若しくは「民衆藝術」への抗議としては頗る明瞭な批評である。新藝術への方向としても著者の考はいろ〳〵の方面から述べられて居る。ただ文化價値としての藝術價値についての著者の充分の意見の見えないために、新藝術への強い情熱を燃やすには尙ほ遠いと思ふ。（別紙廣告參照）

近代經濟制度の藝術的批評

――ウヰリアム・モリスの近代經濟制度批判――

一、

モリスの近代經濟制度の批評は、甚だ特異の地位を占めてゐる。彼は單に通常の社會主義的思想家が、その論點を貧富の懸隔に集中する以上に出でてゐるのである。言葉を換へて云へば、彼はカァル・マルクスの經濟學に影響されたものであるが、彼の思索はこれに止まらなかつたのである。彼は思索は貧富の懸隔と云ふ點を見逃さなかつた許りでなく、近代の經濟的制度が全然人間本來の要求である勞働の享樂化と云ふことを消滅せしめたことを力說する。(C. Delisle Burns, The Principles of Revolution. William Morris and Industry p. 71) 何故に然りしかと云へばモリスの社會主義に入つた動機が他の普通の社會思想家と異るからである。モリスをしてその事情を語らしめよ。彼曰く「要するに歷史の研究と藝術に對する好愛とその實行とが自分を導いて現代文明の嫌憎に至らしめたのである。もし文期が現狀のまゝに止まるならば、それは歷史をして、何等成果のない無意義のものたらしめ。さうして藝術をして現代の生活に緊要な關係を持つてゐない過去の珍奇品の蒐集たらしめるであらう。しかし乍ら、現在の嫌惡すべき社會の中に生じつゝある革命の意識が、多くの藝術に理解ある人々よりも幸にも、自分をして、「方においては「進步」に對する單なる嘲笑者と化することを防げ、さうして他方においては、藝術が何等の根底を持つてゐないときに藝術を繁榮させるやうと希望する中流階級の藝術好愛者によつて企てられる多くの計畫に時間と精力を注ぐことを防いたのである。かくて私は實驗的の社會主義者となつたのである」と。("How I became a socialist" Collected Works, Vol 23, pp. 280-281)

事實においてモリスの近代經濟制度に關する批評に就ての材料たるべき經濟學に接したのは、社會主義者となつてからのことである。モリスは社會主義者となる以前においては、アダム・スミスもリカアドオも、またカアル・マルクスをも讀むことがなかつた。たゞ彼はフトリエの社會主義を攻擊したジョン・スチュアート・ミルの遺稿をある雜誌上で讀むで、社會主義の必要なること、並びに現代の社會にそを持ち來たすことの可能を悟るに至つたのである。このミルのフーリエ論はモリスをして社會主義に改宗せしめたものであつた。かくて彼は民主主義聯盟に加入し、さうして社會主義の經濟的方面を研究し始めた。彼はカアル・マルクスの資本論を苦讀した。資本論の歷史的部分に就いては、彼は喜んでこれを讀むことが出來たけれどもその純理經濟學に至つては頭腦の混雜を免れることが出來てなかつこの讀書のと、モリスのハインドマン、バックス、並びにシユーとの交友は彼に經濟學的智識を供給したのであつた。("How I became a Socialist" pp. 277-278)

既に述べたやうに、モリスが社會主義に入つた根本の原因は歷史の研究と藝術の好愛とその實行とであつた。それはモリス自らの性情であつた。しかし乍ら、その性質を養つて行つた源泉は何であつたか。モリスの掲げてゐるところによると、それは當時——社會主義復活以前——の自由主義的文明に反抗して起つてゐた二人の藝術的思想家——トマス・カアライルとジョン・ラスキンとであつた。殊に後者のジョン・ラスキンはモリスの思想の源泉であつた。ラスキンに就いてモリスは云ふ。『後者(ラスキン)は私がまだ實際的社會主義とならない以前において既に述べた(藝術的)理想に關する自分の師であつた。自分は往時を回想して、二十年以前に、もしラスキンが生存してゐなかつたら世の中はどんなにか單調であつたらうと云はざるを得ない。自分の不滿は漠然とはしてゐたとは云ひ得ないが、その不滿に一定の形態を與へることを學んだのは、彼を通じてであつた。』と。(How I became a Socialist. p. 279)

かくの如くカアライル、ラスキンの社會思想によつて、感化されたモリススの思想は彼自身の言葉を以て云へば次の如きものである。『美しいものを生産すると云ふ願望を外にして、私の生涯の主要な感情は現代文明の嫌惡であつたし、また現在もさうである。』(How I became a Socialist, p. 279)藝術と云ふ觀點から現在の經濟制度を眺めたとき

に、その亡ぼされた藝術を救ふべき道は、モリスに對しては社會主義に行くことであつた。さうして社會主義者となつたモリスは現代經濟制度に關する藝術的批判と共に經濟學的批評を行つてゐるのである。故に、もし私共がモリスの近代經濟制度に關する藝術的批評を聞かうとするならば、これと共にその經濟學的批評をも聞くことを要するであらう。

二、

モリスは先づ近代經濟制度の如實を見る。彼は現代の社會が、不斷の爭鬪の上にその基礎を置いてゐることを發見した。屢々經濟學者等によつて主張せらるるやうに、不斷の爭鬪即ち經濟上における競爭は、現在の生產の原則でさうして國民の經濟的進步の動因であるかくの如く考へられてゐる。さうして、この爭鬪は他人の損失において最もよく自己を利益しやうとするのであつて、現在にあつては商業なる形式の下に表はれてゐる。さうしてこの競爭には、三種の別がある。それは第一に國際的競爭であり、第二に資本家間における競爭であり、第三に勞働者間における競爭である。この三種の競爭は吾々に何を與へたか。

國際的商業戰が現今においては、すべての文明的國民に對して絕大なる火藥と銃劍との負擔を負はしめる。原因である。それは國際的市場の獲得から起ることである。英國においては既に世界の商業市場を占有してゐるので、市場獲得のための戰爭を排して、國際的平和を要求しやうとしてゐる。けれども、それは國際的市場の占有と云ふ前提の下においての平和の要求であり、武裝的平和の狀態である。もしも、文明の劣れる國に對して砲火と劍戟とを以て利潤獲得の市場を開拓し得るとすれば、國際的競爭は消滅するの時期がないであらう。

更らに『勞働の組織者』並に大株式會社、大製造家等、約言すれば資本家の間における競爭を觀察しやう。競爭は生產を刺激すると云ふ。然らばその生產とは如何なる種類の生產であるか、それは利潤を得て賣ることの出來るものの生產である。換言すれば利潤の生產がこれである。この目的のために資本家は懸命に貨物の生產に從事し、さうし

て市場に商品を供給する。このために資本家はあらゆる手段とあらゆる機會とを利用する。このために生産が廉價に行はれると云ふのは、ある意味において眞實である。けれども、一般勞働者の賃銀は價格の低落と共に低下する。然かも資本家は利潤の獲得を熱望する。その結果として、價格の低廉は單に消費者を欺瞞し、眞の生産者をして餓死狀態に置くことによつてのみ達せらるるのである。製造業者は單に價格の低廉と云ふことだけで、その獨占的勢力を利用して、その貨物の購買を消費者に强要する。かくて良い品を消費すると云ふ數千年間の傳統は僅々數ヶ月の間に打破せられ、さうして利潤生産の猛威は單に生産制度の進步してゐる諸國においてのみ、振はるる許りではない。それは弱い小國並に未開國の生産制度へも影響して、貴重な生産的傳統を滅亡せしめ、さうして藝術を破壞する。かくて諸國の消費者は掠奪の對象たるばかりではなくして、その藝術鑒賞　機會をも奪はるるに至る。利潤の追究をその唯一の目的とする生産の生産者卽ち勞働者に及ぼす影響は、消費者のそれに比較すべき程重大である。利潤追究の必然的結果である大生産制度は、多數の勞働者を一處に集中せしめ、勞働の能率を增進させるために、極度の分勞を强制的に訓練せしめる。かくて分勞の結果は各人の勞働を單一化せしめ、熟練勞働者を化して、不熟練勞働者の同位に居りしめ。その結果として勞働者の供給を過大ならしめる。かくて商業戰において絕對的に必要な產業豫備軍　The Reserve Army of labour　を構成するに至る。さうして『現在の狀態の下においては、產業に從事する多數の人々が周期的の半餓死の危險に晒さるることが必要である。然かもそれは他國の民衆のためにではなくして、彼等の墮落と奴隷化とのためのにである。』(Vol. 23.p.9) この墮落と奴隷化とが常に吾々の生活を脅威し、あらゆる精神的、物質的享樂を阻害する。それのみならず、國際的並に資本家間の競爭のこの惡果と維持、增進せしめるために、資本家階級は政治的權力との握手して、政治をして次の二機能を行ふ機關たらしめる。一、國内においては、弱肉强食の組織を維持するための强力なる警察權の行使。二、國外に對しては、商業的市場を維持し、且つこれを擴張するために經濟的侵略主義を遂行することがこれである。第三の爭鬪は勞働者間における。それである。この勞働者の生活のための爭鬪こそ、資本家をして容易にその利潤の追究に從事せしめる眞の原因である。かく資本家の利潤の追究においては

枚爭を必然的の條件とするが、勞働者の勞働においては爭鬪がその本質ではなくして、協同こそその本質である。けれども現在の經濟制度はたゞ國際間の爭鬪、資本家の利潤者爭、勞働者間の賃銀競爭の三つの爭鬪の存在によつてのみ、その成立が可能である。("How We Live and How We Might Live" Collected Works, Vol. 23. pp. 5-11) 何となれば現在の商業主義が人間のための市場ではなく、反つて市場のための人間、換言すれば市場は主人であり、人間は奴隷である狀態をそのモットーとしてゐるからである。(Art and its Producers. in Lectures on Art and Industry Collected Works. vol. 22 p. 349)

三、

この三樣の爭鬪は何によつて起るか。それは、現在の經濟制度の內容が勤勞を提供して生活資料を得る階級と、勤勞の提供なくして生活し得る階級の存在することに起因する。(Monopoly. vol. 23. p. 243) この勞働對不勞階級の內容に何か富の生產には少くとも勞働並に原料の二つの要素を必要とする。既に成年に達し、さうして病氣でない人々は勞働することが出來る。從つて富を生產することが出來る。然るに富の生產には原料を必要とする。この必要なる原料は現在の社會にあつては、ある少數者によつて占有されてゐるのである。この生產手段の占有こそ現在の經濟制度における病要である。モリスはこれを呼ぶに獨占 Monopoly を以てした。『獨占とは販賣者が何等の價値も貨物に附加することなくして、高價に貨物を販賣することである。そはまた次のやうに云ふことが出來る。即ち遂行されないもしくは遂行する意志もない勤勞、要するに假想的の勤勞に對して報酬を受くる習慣である。』(Monopoly. vol. 23. p 347.) 一先づかう定義したモリスはこれを以て獨占の性質を盡くしたものだとは考へなかつた。彼は更らに定義して云ふ。『獨占者とは假想的勤勞に對しての支拂を吾々に强要する特權を持つてゐるものを云ふ』と。即ち獨占者の行爲は單に欺瞞のみではなくして、その背後に暴力を持つてゐるものである (p. 247) この點において現今の獨占者——若しくは資本家——はギリシヤ、ローマの奴隷所有者または第十三世紀の農奴所有者に酷似してゐる。たゞ彼等と異

るところは、舊時の獨占者の暴行強制が明瞭に世人の眼に映ずるに反して、近代のそれが甚だ陰密なることである。彼等の地位は『國家の全權力によつて』法律的に認定せられ、維持されてゐる。(True and False Society. or Labour Question From Socialist Standpoint. in Lectures on Socialism. Collected Works. vol. 23. pp. 221-222)

かくて資本家は生産手段の獨占によつて、勞働者を強制して、その生産した富の正當なる分量を獲得せしめない。勞働者は働くか、さもなければならない。資本家は食料を持つてゐる。故に勞働者は、彼に強制せられた條件を認容しなければならない。これが所謂『自由契約』の内容である。(True and False Society. p. 223)

これを他の一面から觀察すると現在の生産制度の下においては、眞の富の生産が行はれないことにある。富と Wealth とは何か。モリスはこれを二つに分つた。第一、類は食物、衣服、家屋號第二類は藝術及び智識、即ち精神並に肉體に對して必要でよきものである、さうして現在の生産制度の下においては、第一類の富はこれを浪費し、第二類の富はこれを破壞する。(Art, Wealth, and Riches. 23vol. p. 157)眞の富の生産され得ない現在において生産されるものは金權 Riches である。金權とはある人が他に對して有する支配權を意味する。(p. 143) 支配權なるが故に他の生活を束縛する。さうして他人をして隷屬化せしめるのである。かくて富は生活を豐饒たらしめるものであるが、金權はこれを壓迫する。『現在の文明の創造したのは富ではなくして金權である。さうしてそは必然的に貧困を隨件する。何となれば金權は貧困、他の言葉で云へば、隷屬なくして存在することが出來ないからである。(Art, Wealth, and Riches. p. 158) この經濟生活は藝術生活は藝術に何ものを與へたか。

四、

先づ藝術とは何ぞやの問題が起つて來る。モリスの解するところによると『藝術とは人間の勞働における喜悦の表現である。』"Art is man's expression of his joy in Labour. (Art under plutocracy Colleted Wokrs, 23 vol. p. 173, 故に勞働の喜悦の存するところに必ず藝術がある。藝術は單に繪畫、彫刻、建築のみでなく、すべての形態と色彩と

を有する家庭用品、耕作用のすべての設備並に都市並に道路に關するあらゆる施設、一言にして云へば、吾々の生活の外的方面の表現を云ふのである。モリスは吾々の生活の環境を形成するすべてのものが。美であるか、醜であるかまたは吾々に對して苦痛で負擔であるか、快樂で慰安であるかでなければならないと考へた。(Art under Plutocracy, Collected Works. vol. 23. pp. 164-165)

さうして彼は便宜上藝術を分つて二つとしてゐる。即ちその一は精神的藝術 Intellectual Art であり、その二は裝飾藝術 Decorative Art である。精神的藝術は吾々の精神的要求に應ずる。さうして物質の關する限りにおいてはそれは必要なものである。裝飾藝術は、また精神的必要に應ずるものではあるが、それは元來肉體の必要に應ずるために作られたものである。精神的藝術の缺如してゐた時代と國民のあることは認め得る。然し乍ら裝飾藝術の嘗て存在しなかつたところはないだらう。藝術の發達してゐた時代においてはこの兩種の藝術は甚だ深い關係を持つてゐた、最高の精神的藝術は單に眼を樂ませる許りでなく、感情を喚び起し、智識を鍛練した。さうして裝飾藝術もまた有識者の智識と感情とを涵養した。兩者の間には本質的の差異が存在しなかつたのであつた。換言すると最善の藝術もまた勞働者であつた。さうして最も憐れなる勞働者もまた藝術家であつたのである。然るに現在の狀態はこれと異る。精神的藝術は裝飾的藝術と嚴然として區別せられてゐる。單に生産される物が異るばかりではない。その生産者の社會的地位も異るのである。即ち精神的藝術は自由職業者また紳士によつて遂行されてゐる。然るに裝飾藝術は賃銀勞働者によつて行はれる。(Art Under Plutocracy. CollectedWorks. Vol. 23. pp. 165-166)

精神的藝術また分つて二つとすることが世來る。その第一のものは、彼等の『クラフト』において重要なる地位を占めてゐる人々の藝術である。その第二は、彼等の藝術的素質によらないで、たゞ彼等の家柄とか、商賣上の習慣とか産業資本の所有とかの理由によつてゐるものである。この第二のものの藝術は、需要は存するが、その價値は甚だ高くない。彼等の内にもよい藝術家はゐた。けれども彼等は、利己的努力と强制する制度のために腐敗せられ、民衆藝術の生産に參與し得ないものである。第一のものは、その價値ある製作によつて世界を飾つてゐる。これらの人々

は彼等自らの努力によつて、その『クラフト』を習得した少數の人々である。けれども彼等もまた個人主義的傾向のある現在の社會制度によつて災されてゐる。第一に彼等は傳統から離れてゐる。彼等は藝術習得の近道である數世紀間の熟練の集積である傳統から離れてゐる。故に彼等はその藝術に關して常に自己の努力によつて、これを學修しなければならない。藝術家の孤立によつて現代は藝術的智識の缺乏し、これに對する愛の少ない時代となつた。かくて人間の美に對する本能は傷けられ、滅亡せられた。その結果は美に對する表現である民衆藝術は何處においても發見せらるることがない。たゞ孤立的な狀態において、少數な天才と才能との所有者の意識的努力の結果がたゞ氣息奄々の狀態において存在するに止まる。かくて大藝術家の心も狹隘となり、彼等の同情もその孤立的狀態によつて氷化した唯だに協同的藝術が行き詰つたのみではない。精神的並に裝飾的藝術の基礎が破壞されつゝある。藝術の泉はその源泉において毒されてゐるのである。』さうして美に對する本能の喪失は民衆藝術の滅亡に止まらずして、更らに吾々の慰安である自然の美をも破壞して行く。かくてモスリは、現代社會の狀態の特質を以て、藝術卽ち生活の快樂の破壞であると見た、然らば何がかくの如き狀態に達せしめたか。この問に答へるためには、歷史的觀察が必要である。

Art under Plutocacy, vol. 23. pp. 166-172 （つゞく）（加田哲二）

『マハーエフシュチナ』

一、

インテイェリゲンツィヤ（intyelligentjia）とは何であるか、この問題はこの言葉の本國ロシヤでも、可なり古くから爭ひの題目となつてゐる。ロシヤのインテイェリゲンツィヤは、ロシヤの文學もしくは更にひろくロシヤの文化を知らうとするものの到底閑却することの出來ない題目である。ロシヤの文學をインテイェリゲンツィヤの社會的運動の現はれとしてのみ專ら見ようとする一派の文學史家評論家、たとへば昨年故人となつたペトログラード大學のウェンゲロフ教授（Prof. Wengerof）の如きさへもある。實際またロシヤで多少とも社會的意義乃至關係を有してゐるところの思想上の事象であつて、それとインテイェリゲンツィヤとの間に重大な深い交渉のないものはないのである。そこには、インテイエリゲンツィヤが、單に知識教養を有する人々の仲間、即ちインテイェリゲントヌイェ（intyelligentnye. intelectuals）であるといふだけの意味でなく、特殊の意志方向を有する繼承的な社會的集團であるといふ解釋（イワノフ・ラズウムニク『ロシヤ社會思想史』上卷、序論）を成り立たしめる事情があり、またそれが、外國の有識階級といはれるものと比べて全く特殊の任務と意義とを社會的に有してゐるとする說（オフシャニコ・クリコーフスキー、『ロシヤのインテイェリゲンツィヤの歷史』）をも否定することの出來ないところがあるのである。それ等の人々の考へに從ふと、ロシヤの社會思想の歷史は卽ちインテイェリゲンツィヤの歷史であり、ロシヤ文學の主潮はまた實にインテイェリゲンツィヤの性格及びそれの表現の變遷の上に辿られるといふことにさへなつて來る。（イワノフ・ラズヴニクの『ロシヤ社會思想史』二卷は事實に於いて十九世紀から二十世紀初めへかけてのロシヤのインテイェリゲンツィヤの歷史に他ならないし、オフシャニコ・クリコーフスキーの『ロシヤのインテイェリゲンツィ

ヤの歴史」は、グリボイェードフ以後の作品にあらはれた各時代の特色を表現してゐる人物の心理的解剖に他ならないと言つてよい。）ロシヤのインティェリゲンツィヤに關する研究は、ロシヤ文學乃至ロシヤ文化一般を研究する上に恐らくは最も興味ある題目の一つである。私もまた私の材料と理解との許す範圍に於いて、多少の研究を試みようとするものであるが、こゝには差し當つて、そのインティェリゲンツィヤ研究の上に於いて、最も興味あるポイント、即ちインティェリゲンツィヤと民衆もしくは庶民（ロシヤ語で謂ふところのナロード norod. peaple）との關係、或ひは更にインティェリゲンツィヤとプロレタリヤートとの關係の問題に關する、ロシヤに於ける論評考察の重要なものを取り出して、讀者に紹介して見ようと思ふ。

二

ロシヤのインティェリゲンツィヤがロシヤの一般民衆と常に融合しがたき關係に於いてあつたことは、恐らくは既に多くの人の知るところであらう。この兩者の間には昔から眞の理解がなく、何となくよそ／＼しさの溝が深く横つてゐた。民衆はインティェリゲンツィヤにとつて何となく不可思議な信仰によつて生きてゐる如くに見え、西ヨーロッパから受け入れて來たインティェリゲンツィヤの人生觀、社會理想は、民衆の生活とは遠い隔りがあつた。もとより民衆のために盡くすといふのがインティェリゲンツィヤの本願であつて、或ひは鑛山の苦役に、或ひはシベリヤの雪に、更にまた銃殺の刑に、インティェリゲンツィヤは眞に身命を賭けて民衆のために苦艱の運命を堪へ忍んだ。而かもインティェリゲンツィヤの心の底には、どこか民衆とは離れ／＼な、しつくりと合はないところのあるのが感ぜられ、民衆もまたインティェリゲンツィヤを別種の人間として疎んじ、心からこれを信ずることがなかつた。ロシヤのインティェリゲンツィヤの悲劇的な運命は、專らこの兩者の疎隔の間から生れてゐるやうである。ツルゲーニエフの作品のうちにもその惱みが描かれてある。トルストイの一生涯もまた實にこの悲劇的運命を荷負うた一人の偉大なるロシヤのインティェリゲンツィヤの惱みの行程に他ならないとさへ考へることが出來る。ある人はこの疎隔の原因

をたづねて、インティェリゲンツィヤが自己の信條と理想とを—而かも西ヨーロッパから受け入れて來たそれ等のものを、民衆をして無條件的に受け入れしめようとしたところに在ると言つてゐる。またインティェリゲンツィヤが民衆に就いて學ぶことをせず、民衆の精神的寳庫を愛せず、民衆の魂の底にひそめる眞理を深め高め自由にせうとしなかつたからであり、要するに民衆とインティェリゲンツィヤとの間に宗敎的融合の境が打ち立てられなかつたためであると言つてゐる。(たとへば、『民衆支配』第十五號のブイストレニン、『ロシヤの自由』十二三號のムラ井ヨフなど)。またロシヤのインティェリゲンツィヤが自己の一切の力を手近かの目的の到達のために集注することをなし得ずして現在の生活の問題と極めて關係の遠い純學術上の論爭に熱注して、勞働階級の力を分裂せしめる傾向を有し、純理論的な抽象的な過誤の批評のために實際的な階級爭鬪上の必要を犧牲にする傾向を有することを以て、千九百十七年革命後の社會主義的インティェリゲンツィヤを非難してゐるものもある。(『デイエーニ』紙、千九百十七年百四十二號のザスラフスキー)。また人はよくロシヤの民衆を暗愚(チョームヌイ)(ロシヤ語で文字通りには暗黑の意味を有す)だと言ふが暗愚なのは寧ろ今日のインティェリゲンツィヤである。インティェリゲンツィヤの中に洞察力ある指導者のないといふことが、今日の分裂破壞を現出した所以であるといふものもある。(『リエーチ』紙、千九百十七年二百三十六號のコンドウルーシュキン)。更にまたロシヤのインティェリゲンツィヤは、その獨斷的、狂信的空想によつて民衆を欺瞞する、殊に土地の社會有といふ點で民衆を欺瞞してゐる、かくの如きインティェリゲンツィヤの態度は兩者の分裂を自から招くものであるとするものがある。(『自由』のゴーレフ)。更にまた革命後のインティェリゲンツィヤの小黨分裂紛爭を事として一致融合の精神に乏しいことを難じて、これを亡命移住時代の習性によつて說明せうとするものもある。(『プリアゾフスキー・クライ』百九十八號のアムフヒテアートロフ)。卽ち久しく亡命生活を送つて來た革命的インティェリゲンツィヤを通じての主要なる特兆は、極めて少數の人々を除いて、その根深く養はれた偏狹な心である。本國とも、その移住せる外國の周圍とも殆ど全く隔絕して生活せる彼等は、極めて狹いグループの間に分れて互ひに相下らず、その間の抗爭が彼等の生活では唯一の眞面目な政治上社會上の活動として考へられさへもしたのである。隨つて

その生活の氣分はいかにも幸福の光りのない不機嫌なものであつて、その不機嫌な氣分のはけ口は而かも自分たちの狹い仲間の上にしか向けられない事情の下に在つた。そこで鬱屈してゐる內心の不機嫌は、非常な勢で、而かも實につまらないことに一生懸命になつて、その狹い生活範圍へ向つて爆發する。ロシヤ革命家の亡命者の仲間では、仲裁裁判がしきりに開かれる。その仲裁裁判からまた爭ひが生じて第二の仲裁裁判が開かれ、更にまた爭ひが生じて第三第四とどこまでも爭ひがつゞく。この永い間の習性なり氣分なりが、ロシヤの革命的インティェリゲンツィャの紛爭排斥同士打ちを引き起こすに至つた心理的道德的の原因で、而かもかくの如き間に間諜的煽動者などの介在してゐることが發見せらるゝに至つて、革命的インティェリゲンツィャの間には、『凡ての人々が凡ての人々を信じなくなつた』といふやうな結果さへも生ずるやうになり、彼等は到底心から民衆と融合する心理的條件を失ふに至つたといふのである。

三、

インティェリゲンツィャと民衆乃至プロレタリヤートとの疎隔、不信、反感、反目は、實にロシヤのインティェリゲンツィャの歷史の初めから赤き一と筋の糸の如くに人の眼底に落ち來たる事實である。たゞその疎隔、不信、反感の現はれかたは、時代により場合により人によつてもとよりさまぐの姿をとつてゐる。千九百十七年革命後のインティェリゲンツィャとプロレタリヤートとの關係に就いては、もとより上に略述した說明の如きは、わづかにその當時に於いて、眼前の事象に刺戟せられた社會評論家の所見を、極めて無選擇に大づかみに取り出して見たのに過ぎない。しかしながらこの無選擇に取り出された二三の批評は、或ひは却つてその當時に於けるロシヤの一部のインティェリゲンツィャの自己を批評するものとして、それぐに生きた眞實に觸れてゐるでもあらう。所詮これ等の批評の示す如く、インティェリゲンツィャは多くの場合非難の的であつた。多年の艱苦に堪へ忍んで來たインティェリゲンツィャが、革命後殊に重大な社會上の任務を有することを說き、自ら策勵する傾きも、勿論多くの評論の間に少くはなかつたが、しかしそれ等の評論の中にすら、インティェリゲンツィャの過失、無氣力を或ひは責め或ひは瀉つの口

吻を交へざるものは殆どなかつたと記憶する。インティェリゲンツィヤと廣い意味の批評、また隨つて自己批評とは當然相離れがたきものである。批評のないインティェリゲンツィヤといふことは、前に述べたイワノフ・ラズウムニクの謂ふやうな意味で、言葉の上の矛盾となる。『意志方向を有する』といふのは、この場合批評的精神を有つといふ意味に他ならない。批評的精神に立つといふことが、インティェリゲンツィヤがたゞの知識を有つ人々といふ意味と自のづから異なる所以であらねばならぬ。

インティェリゲンツィヤに對するプロレタリヤートの不信、排斥の意志傾向が、明確な一つの主張として現はれて來たのは、ロシヤのインティェリゲンツィヤの歴史では、二十世紀の初め、千九百七八年の頃である。（イワノフ・ラズウムニク、『インティェリゲンツィヤに就いて』、千九百十年版による）而してこれを言ひ現はす特殊の言葉は、『マハーエフシュチナ』（makhaefshchina）である。

この言葉は千九百七八年頃の一般のロシヤの讀者にもまだ十分には了解せられてゐなかつた新語であつた。しかしその當時の新聞雜誌などにも漸くこの言葉は散見せられてるやうになつた。たとへばある勞働者の會合で、社會民主黨員及び社會革命黨員の演說の後、『勞働陰謀黨』の代表者が演壇に上つたと書いてあり、その『勞働陰謀黨』といふ下に括弧をして、『マハーエフシュチナ』と書いてある。或ひは無政府主義、マクシマリーズム、革命的シンディカリーズムに對する社會主義者の攻撃に際して、『マハーエフシュチナ』もまた一撃を受ける。これ等の用語例から察してこの言葉がロシヤ社會思想の極左翼に立つ新らしい思想傾向を意味するものゝやうに一般の讀者には受け取られたのであつた。『マハーエフシュチナ』とは、マハーエフ主義もしくはマハーエフ的傾向などの意味であつて、後に說明する如くこの思想の根底には社會主義に對する批評がある。而してこの新語の現はすところの意味は、結局社會組織に於けるインティェリゲンツィヤの位地の問題に中心を置いてゐる。隨つてまたインティェリゲンツィヤとは何ぞやといふ問題をも自のづから含んでゐるのは言ふまでもない。インティェリゲンツィヤの問題は實に吾々自身の問題であるインティェリゲンツィヤの問題の考察のための一資料として、マハーエフシュチナを讀者に紹介することは決して無意味で

はないと思ふ。（この紹介は主として前にあげたイワノフ・ラズウムニクの『インテイリゲンツイヤに就いて』のペテイエルブルグ千九百十年版に收められてゐるインテイリゲンツイヤに關する二つの研究のうち、『マハーエフシユチナとは何ぞや』により、それに雜誌『文學と生活の報告』に散見する諸論文及びワノーフスキー君など知人の説明を參照したものである。）

四、

マハーエフシユチナの根底には社會主義に對する批評がある。社會主義はマハーエフシユチナにとつて『打ち克たるべき』ものである。それは社會主義が『インテイエリゲンツイヤの階級的觀念に他ならないとするからである。マハーエフシユチナの態度は主としてこの意味で否定的である。社會主義に對するそれの批評の當否の問題以外、ロシヤのインテイエリゲンツイヤの問題としてもマハーエフシユチナは興味ある一思想たるを失はない。千九百五六年の革命運動當時社會民主黨に屬して流刑にも處せられたことのある一人のロシヤ人は、マハーエフシユチナはインテイエリゲンツイヤにとつて、ひろく一般の社會にとつて、最も有害な危險な思想であるとさへ言つてゐる。ともかくもこの思想が他の社會主義思想乃至階級觀念とどういふ關係に在あるか、その思想發生の論理的關係を明らかにすることが必要である。殊にこの思想の發生が、主として正統派のマルクシーズムの論理的連續であるとせられ、この思想の中心點が社會組織上インテイエリゲンツイヤの位地の問題に對する答へであるといふに於いて尚更さうである。勿論インテイエリゲンツイヤの社會組織上の位地の問題に對しては、さまざまの解釋があるのであるから、マハーエフシユチナのこの問題に對する解釋を明らかにするためには、先づ簡短にこれ等のさま〴〵の解釋を述べて置くことが必要である。これによつてはじめてマハーエフシユチナの由來及び意義を一層明らかにすることが出來るであらう、更にまたこの言葉の意味及びそれに關す　文獻に就いても多少の紹介を試みねばなるまい。

インテイエリゲンツイヤは勿論一つの社會上の意義を有する集團であつて、その特色が何によつて如何に決定せら

れるかゞ問題である。インテイエリゲンツイヤは結局社會的經濟的意義によつて決定せらるべきものであるが、もしくは社會的倫理的意義によつて決定せらるべきものであるか、この問題はロシヤに於いても十九世紀半ば以後の論爭の中心題目であつたと言つてよい。インテイエリゲンツイヤといふ言葉が、はじめてロシヤで一般に用ひられるやうになつて來たのは、千八百六十年代のことであつて、この言葉をはじめて用ひたのは、ロシヤが漸くインダストリヤリーズムの時代に入らうとした當時の社會生活を主題として多くの作品を書いたボボルイキンである。(ピョートル・ドミートリ井ツチ・ボボルトキン P, D. Boborykin. 1836-1921. 非常な多産の作家で、最近にはス井ツツルのルガノに住んでゐた。未刊の遺著も少なからずある。昨年八月ルガノで歿した。)千八百六十年代のロシヤは、有識無産で社會上一定の身分區別に屬さないところの知識階級と言ふべきものゝ急かに頭を擡げて來た時代であつた。この社會上新勢力を有するに至つた一團は謂はゆる*ラズノチーニエツ (raznotchinietz) である。この一團に對しては、身分上階級上の區別を意味する言葉でなく、經濟上乃至倫理上の一定の物質を表現する稱呼が與へられなければならなかつたのである。この社會上の新勢力に最も早く注目してその物質を一つの言葉に言ひ現はさうとしたものは當時の社會及び文學上の批評家ピーサリエフ (D. J. Pisaref 184118—68.)であつた。ピーサリエフはこの一團に『思索するプロレタリヤート』といふ名前を與へ社會的經濟的解釋を下した。(ピーサリエフ「可なりの長論文『思索するプロレタリヤート』は千八百六十五年の『ロシヤの言葉』に揭げられた。パウリエンコフ版全集補遺に收めてある。)この名稱は直ちに一般に流布し、七十年代に近づくに從つて『インテイエリゲンツイヤ』といふ名稱によつて代られるに至つた。インテイエリゲンツイヤは中立的の言葉として、即ち純然たる社會的經濟的の意味でもなければ純然たる社會的倫理的の意味でもなく、多少不明確な從つて廣い意味を有するところから、この言葉が前のピーサリエフの『思索するプロレタリヤート』よりは一層廣く用ひられるやうにもなつたのである。

(註)*ラズノチーンエツ(單)、ラズノチンツイ(複)、はロシヤに於いて制定せられてゐた身分上の區別、即ち貴族階級(ドウヲリヤンストヲ dworyanstwo)にも商人階級にも、組合が組織してゐる職人階級にも、また農民の階級にも屬してゐない人々を謂ふのであつて、たとへば、その本人の功蹟によつて特にその一人一代だけ貴族の身分に上げられその待遇を受けた、ロシヤで謂ふところの單身貴族(リーチュヌィ・ドウヲリャニーン)の子供たちの如きもので、即ち父の貴族としての待遇を受け得ない子供たちで、しかしながら敎育だけは受けたため、納稅の義務を免除せられてゐる人々の如きものがそれである。多くの場合ラズノチンツィは敎育があり、自己の財產はなく、身分上どの階級に屬するといふではないが、官吏などの子弟で多く中流以上の環境の中に成長して來たものであつた。無產有識階級ともいはゞいはれる。

(この紹介解說は今後數回を經て完結するであらう。一三、四、一七—八、)

片　上　伸

定價		
毎月一回一日發行		郵稅
一部	卅錢	五厘
半年分	一圓七十錢	稅共
一年分	三圓三十錢	稅共

但特別臨時號の價は別に申受く

▲送金は可成振替　▲郵券代用一割増

大正十一年五月一日印刷納本
大正十一年五月一日發行

東京市芝區三田一丁目二十六番地
印刷兼發行人　利部一郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷所　川崎活版所

東京芝區三田一丁目二十六番地
發行所　批評社
振替東京四五三四六

廣告	
半頁	十五圓
一頁	三十圓
二等一頁	四十圓
一等一頁	五十圓

大賣捌

▲神田　東京堂　上田屋……
▲京橋　東海堂　北隆館……
▲日本橋　至誠堂……

批評

第三號（六月號）

大正十一年三月三十一日第三種郵便物認可
大正十一、六月一日印刷納本發行（毎月一回 日發行）

「批評」は微力な一雜誌です。始めてからこれで第三號目、第一號は八千部を印刷して六千何百部を賣つたに過ぎません。しかし私たちは無な「自由人」の熱情によつて、きつと人々の心に訴へて行くことができると信じます。レニンが亡命中に編輯した「ゾチアール・デモクラート」、獨逸の「タート」、「スツルム」、「アクチヨーン」、佛蘭西の「クラルテ、」若しくは倫敦の「ニユー・エーヂ」などのような何れも片々たる小雜誌が、何ものにも增して、新らしい世界の文化に、大きな役割を演じてきた私たちの目の前の記錄が、私たちの希望を皷舞してくれます。どうぞ讀者諸君の指導と同情とによつて「批評」の志を遂げさせて頂きたいと存じます。

英國、印度及スワラヂ

＝ガンヂ手記＝

この論文は印度解放運動の巨人ガンヂ自身の書いたもの、日本に於けるガンヂ自身の論文の最初の發表である。英國民の本質を說き、深く文明の害惡を論じ、遠く印度の亡國の原因を究明し、そして彼の運動の大精神スワラヂに及ぶ。言々實に彼の偉大な思想と人格との結晶である。

ロオザ・ルクセンブルヒ女史のロシヤ革命論を讀む（室伏高信）

批評社

批評六月號目次

有島武郎氏の想片

有島武郎氏の「宣言一つ」が一寸した思ひ付きや、利害の動機や、若しくはその他の不純の理由からでなくして、眞面目に自己を内省し、煩悶し、可成り久しい間、氏自身の頭と、若しくはその周圍の人たちの智慧をもかりて、思ひに思ひをこらした結果の所産であることは想像にあまりある。この用意と眞面目さ、有島氏にありそうな眞面目の尊さがあつてこそ彼の「宣言一つ」があれだけに大きな波紋を起したのである。無論それにはいろ〳〵の影響がある。例へばそれが久しく日和見をしてゐた知識階級の心理狀態のある意味においての雄辯な代辯ともなり、また有島氏個人が文壇の代表的ブルヂョア（物質上に）であり、且つ同氏が從來日本の文壇にもつてゐた優れた地位と聲望などがこの「宣言一つ」をかくまでに大きな問題にまでもち上げた理由の幾つかであることは疑ひのないことではあるが、それにしても、有島氏の「宣言一つ」にあれだけの眞面目さがなかつたら、あれはたゞ嘲罵と冷評とをうけるにしか價ひしないものであつたらうと思はれる。勿論あの眞面目さがあつてさへ、文壇の一角では、たゞ嘲罵と冷評とをもつて有島氏の「宣言一つ」を、有島氏とともに、文壇から埋沒しようとするの意味かと思はれるほどに慘酷な批評をするものもあつた。しかし百の饒舌よりも、人格の片影は、強い力である。

しかしあの「宣言一つ」の後に、有島氏の發表したものに隨分無理がある。隨分な非論理がある。つまり「宣言一つ」を發表する時には、省察、煩悶の揚句あの結論に到著した跡が顯著であるのに、その後に發表されたものには、凡てのことをあの結論へ引張つて行こうとする努力なり煩悶なりが見える。同氏があの有名な結論を把持して動かないといふ確信の强さには敬服するが、しかし同氏の聰明をもつてして、あゝした結論に疑問を重ねることなくして、たゞそれを何んでも彼でも維持しようとする乃木軍式無反省の突進にはどうしても敬意を表することができない。特に「新潮」五月號に發表された「想片」を讀むとこの感を深くする。

1

この「想片」はその名の示すとほり斷片的な思想の寄木細工である。彼は「自己をこのうへもなく愛し、それを眞の自由と尊貴とに導き行くべき道によつて」突き進んで行くことが人間の唯一つの正しい道であるといふ。ところがこの考をもつて突き進んで行くべき有島氏は共産黨宣言から彼の思想の糧を求めようとする。そして共産黨宣言のうちには「暗默の中に」この氣持ちが現はれてゐるのだといふ。また唯物史觀の「背後」には精神的要求が「潛んでゐる」のだともいつてゐる。つまり有島氏はこの「暗默の中に…………潛んでゐる」もののうちにマークスの精神を洞察してゐるのである。實際共産黨宣言は幾度讀むで見ても新らしい氣持で讀めるのであるが、それだけに幾度讀むで見ても明確を欠くところがある。それだけにその片言隻句を引用すると、それは唯物論者にも精神論者にもそれぞれ都合のいゝ部分が發見しえられるのである。しかし共産黨宣言や唯物史觀が若し有島氏の解するような精神的なものであるとしたら、唯物史觀そのものが、それ自身を、若しくは有島氏によつて轉覆されたのではないであらうか?「思想の歴史は、精神的所産が物質的所産とともに變化することのほかの何ものを證明するだらうか?」(Was beweist die Geschichte der Ideen anders, als dass die geistige Produktion sich mit der materiellen umgestaltet? 共産黨宣言のこの言葉は、有島氏の考へてゐるような精神的なものであらうか?人間の思想が、物質的社會構造の上部構造であるといふ唯物史觀の「背後」に精神的なものが「潛む」でゐて、その精神的なもののうへに唯物史觀が成立するといふことがいひえられるであらうか?正反對である。マークスの見解は精神的なもののうへに唯物史觀が立つのではなくして、唯物的なもののうへに精神が構造されるのである。精神が物質を規律するのでなくて物質が精神を規律するのである。でなくて、どこに唯物史觀が成立するのであるか?。また共産黨宣言なり、その他のマークス主義の文獻のうちに有島氏の所見を裏書きすることのできるものがあるであらうか?

しかしこゝには唯物史觀のことを論んずることは止める。たゞ唯物史觀を有島氏のするように「精神化」することができるにしても、その「精神化された唯物史觀」なり、若しくは自己をこのうへもなく愛し、自由と尊貴とへ導き行くべき道を辿るのが人間にとつて唯一の正しい道であるとする有島氏から如何にして「宣言一つ」が生れうるかが

私の今の問題である。

▲甲の有島武郎氏曰く、自分は自己をこのうへも無く愛し、自由と尊貴とへ導く道を行く。これが唯一の正しい道だ。

▲乙の有島武郎氏曰く、自分はどうせブルヂョアの所産なのだ。縦令財産は投げ出しても尚ほ「知識と思想」とが殘る。だから自分はもうこの境遇から脱することができぬ。

つまり自由人の宣言と機械人の宣言なのである。自由人としての有島武郎の宣言と機械人としての有島武郎の宣言なのである。一つは價値批判であり、他は自然のエルクレールンクなのである。

▲甲の有島武郎氏曰く、自分はブルヂョア階級の崩壊を信んずる。

▲乙の有島武郎氏曰く、しかし自分はブルヂョア階級に踏み止まる。

つまり有島氏は崩壊するブルヂョア階級に、その滅亡を自覺しつゝ踏み止まるのである。滅亡の運命を見定めながらも尚ほ壇の浦までお伴する決心なのである。その決心と勇氣とは勿論敬服せねばならぬ。その非事大主義であるの點は敬服に堪えぬのである。しかし有島氏がこのブルヂョア階級の擁護のために働くような目先の見えないものと思つたらそは大きな見當違ひである。有島氏はブルヂョア階級に踏み止まりはするが、しかし彼はブルヂョア階級を滅ほすために働くのである。財産はなくなつても尚ほ殘存する「知識と思想」とをもつて鉾を逆さまにしてこのブルヂョア階級の覆滅のために働くのである。「生れ且つ育つた境遇」のもとに「永年かゝつて養はれた知識と思想」とをもつて——即ちブルヂョアの知識と思想とをもつてブルヂョア階級を滅ほすためにこのブルヂョア階級に踏み止まつて一歩も動かないといふのである。しかしブルヂョア階級を滅ほすために働くといふのは、有島氏に從へば、プロレタリヤの陣營に參加することではなくて、內からその崩壊を助けることである。その崩壊を助けるために何ごとか有島氏によつてなされるか?また「第三階級にだけ主に役に立つてゐた教養の所産」をもつて果して、よく第三階級の崩壊を助けることができるであらう?勿論、マークスの唯物史観を信奉する有島氏は、第三階級の自壊作用をも信んずる

ものであらう。その意味からすれば、第三階級の崩壞を助ける最大の道は、ブルヂョアのために、資本の集積、そうしてそれの上部構造であるブルヂョア精神を發揚することであると考へてゐるのかも知れない。その意味なら、有島氏の謂ふところの、ブルヂョアの崩壞を助けるといふことは、第三階級の崩壞を自覺しつゝ、ブルヂョア精神を發揮することであり、從つてブルヂョアのために歌ひ、踊り、合唱するといふことであらう。しかし有島氏としては、同氏の性格としては、彼に「知識と思想」を與へた彼自身の階級に對して、こうした「だまし打ち」のやうな、或は「獅子身中の蟲」のやうな戰術を用ゐること――尤もこれがブルヂョア精神ではあるが――があらうとは思はれない。それなら有島氏のとるべき方法または態度は如何？曰く、第三階級の人々に對して「觀念の眼を閉ぢる」やうに働くことがこれである。つまりあきらめの哲學を教へ、枕頭の念佛を唱へ、葬ひの鐘を撞くといふことなのである。今の佛教徒や耶蘇教の諸君が、階級鬪爭の事實に面して、第四階級のためにあきらめの哲學を說き、「觀念の眼を閉ぢさせる」ための念佛を唱へ、宗教なり、國體なり、道德なりの名によつて、奴隷道德の鼓吹に急がしいとは反對に、有島氏はブルヂョアに對して牧師、僧侶、埋葬官の役割を演んじやうといふのである。プロレタリヤよ、あきらめよといふこと（牧師、僧侶、講談師、教誨師、社會政策論者、御用學者、泣き男其他の合唱團）の代りに、ブルジョアよあきらめよといふのである。ブルヂョアよ、お前の榮華の時代はもう過ぎた諦らめよ、といふのである。

私はこの有島氏の役割が非常に貴重な役割であることを信んずる。若し多くの有島氏が現はれたならば、そして今日の僧侶や、牧師や、教誨師や、泣き男や、ドラッグ商會や、普選尙早論や、社會政策や、社會主義尙早論や「社會民主主義への對抗」やのブルヂョア合唱團の代りに、ブルヂョア埋葬團としての多數の有島武郞が出てきたなら、少くとも階級鬪爭の前におけるブルヂョアの慘忍性、例へばファシッチや、オルゲッシや、若しくは「過激社會運動取締法」なぞが不人氣になるであらうことが想像されるのである。そこで有島氏曰く、「それは取りもなほさず、第四階級に何ものか與へてゐるのでないか」と。

ところが、こゝに絕壁が橫はる。といふのは、有島氏のやうに唯物史觀を奉ずるものにとつては、ブルヂョア・イデ

イオロギイはブルヂョア生産樣式の上部構造なのである。 Die herrschenden Ideen einer Zlit waren stets nur die Ibeen der herrschenden Klasse. なのである。だから一萬人の僧侶、百人の社會政策學者が出てきてあきらめの哲學を說いてもプロレタリヤの階級的自覺を如何ともすることができないやうに、百人の有島武郞が出てきてブルヂョアのためのあきらめを說いたにしても、その herrschenden Klasse が存在する限り、その上部構造としての herrschenden Ideen に「觀念の眼を閉ぢ」させることができやうとは思はれぬ。從つて第三階級に觀念の眼を閉ぢさせることは、それに對してあきらめの哲學を說くことではなくて、この階級が、自ら觀念の眼を閉ぢなくてはならないやうに、彼の生產形式を變更することではないだらうか？

有島氏はもう一度考へ直ほす必要はないだらう？か或はもう一步進めて考へる必要はないだらうか？有島氏に從へば、ホ井ットマンが詩人としての自覺をえたのはエマアソンの著書を讀んだことが與つて力ある。がしかしエマアソンはそれだけのことでホ井トマンから感謝を要求する權利はない。從つて「第三階級にのみ役に立つてゐた教養の所產を……第四階級が取り上げたといつたところが、………第四階級の功績とはいはれない」と。何故に功績でないだらう？エマアソンがホ井ットマンを詩人としての自覺に導いた時に、エマアソンは有島氏の所謂「何ものをか與へてゐる」のではないだらうか？また第三階級に屬してゐたものの教養の所產が第四階級によつて取り入れられた時に、「それは取りもなほさず、第四階級に何者をか與へてゐるのではないであらうか？若しもエマアソンが、ホ井ットマンを詩人としての自覺に導きえられたとしたら、第三階級者としての教養の所產も、第四階級に對して、プロレタリヤとしての自覺に導くことができないであらうか？そして若し將來の社會を擔つて立つべき第四階級を、プロレタリヤとしての自覺に導きえられたとしたら、それは新社會に對して「何ものをか與へてゐる」こととなりはしないだらうか？

私は有島氏がこゝに進一進すべきの時がきたやうに思ふ。有島氏は甞つてそれを「超ゆべからざるもの」を越えることだとも考へたやうである。またそれが第四階級にとつて「或は邪魔になるもの」でもあると考へてゐたやうである。

しかし「想片」に現れた有島氏は依然としてブルヂョア階級に踏みとゞまることとの、堺氏の言葉でいへば、「絶望の宣言」を維持してゐるのではあるが、しかし「想片」は、有島氏が第四階級に投ずることを、最早や第四階級に邪魔になるとも、若しくは越ゆべからざるもの」を越えることともいつてはゐない。否、正反對である。何となれば、彼はそれが「合理的」であることを自ら承認してゐるからである。平たい言葉でいへば「越ゆべきもの」とするに至つたのである。こゝに有島氏の一大躍進が存する。然り、「越ゆべからざるもの」から「合理的」への一大躍進が存する。

しかもその躍進は、流行や、煽動や、事大思想からでなくて、本氣な、眞面目な、省察、煩悶、研究の結果であるだけに、退却の憂のない躍進である。私はこの眞面目さを買ふ。この眞面目さから私は更に進一進の生れることを期待する。

私は既に有島氏の「宣言一つ」が自由人の宣言でなくて機械人の宣言であるといふた。私たちが聽かんとすることは機械人としての宣言でなくて、自由人としての有島氏の宣言なのである。

彼は唯物史觀を精神化するために無駄な努力を費すことの代りに、彼自身を精神化すべきである。唯物史觀や共産黨宣言や、マークスや、エンゲルスは如何に精神化しやうとしてもそれはガルバニジエルングであるに過ぎないが、有島氏の唯物化も、恐らくは氏自身の本來の面目ではなくて、氏の思想的遊戯であるに過ぎないであらう。ほんとうの有島氏は、私の見るところでは、自由人としての有島氏であらう。であればこそ、ブルヂョア階級に生れて、そこに永年かゝつて養はれた「知識と思想」とをもちながらも、尙ほ唯物の桎梏から脫して、太陽の光を浴び、大地を踏もうとする煩悶なり　努力なりがありうるのである。その煩悶なり、努力なりの存する以上、彼は、本來は、機械人ではありえないのである。（室伏高信）

哲學と傾向と

哲學が原理の學であることには多く異論がない。しかしながら哲學とは元來古代の學であつて現代の學でない。それは倫理學や、美學や、法律學などゝとひとしく古代人の空想より發生し、古代人の空想のなかに花さいた學である。古代人は生活に對して直接に面しなかつた。之に反して「觀念」又は「理想」を通じて生活を見た。故に生活は必ずある觀念なり理想なりの變形でなければならなかつた。しかしながらこれはより深い意味に於ける「認識」の欠乏から來た欠陷である。さうして近代科學は哲學的認識以外に正しい認識を教へた。さうして觀念や理想の偶像を破壞した。その故に哲學が科學として成立するためには科學の救助を求めなければならなくなり、美學や倫理學や法律學はその軌範的性質をすてゝ記述學となるべくやむを得ざるに至つた。その最もいい例は心理學である。今日でも時代を知らない哲學者は心理學を以 哲學の一分科と考へてゐるかも知れない。しかし心理學は今日純然たる科學の一部分である。しかもその發生のときに於て哲學であつたことは、あらゆる古代の哲學體系の一部として存してゐたことから知られる。かくして現代の學は古代の學のすべてを改造せんとしつゝある。

原理の學としての哲學が現代社會生活を批判するに當つていかなる態度に出るのであるか。不幸にして日本に於ける哲學は多く古代の學である。その位置する處は知るべきである。

生活の展開は新たなる道を開いてゐる。それはある空想せられた「理想」のあらはれでもなく、また「價値」の表現でもない。かゝる科の古代の觀念を以て生活を批判しようとするとき、その批判は當然尙古主義に陷る。これ「原理」がやゝもすれば反動的なる所以である。

原理の研究とはその名は美である。さうしてそれが同時に反動的な效用をつとめることが出來るとすれば、それが現實に眼を開けやうとする哲學者にとつていい逃場となることも事實である。現代の日本の哲學者は、この數年來の

社會思想の勃興に驚かされた。しかもそれらの社會思想に哲學の根底がない故を以てこれを強いて無視しようとしてゐた。その無視が出來切れない時、彼等はその有する「先驗的」合法性や、普遍妥當性をもつて來て之を律しようとした。それによつて彼等は間接に反動氣分をそゝり立てたのである。

一口にいへば現時の日本は反動的である。さうしてその勢に乘じ、若しくはその勢を助長せしめたのが哲學論であつた。今年の哲學者の論策の多くはそれである。田邊元民の「文化の概念」（改造三月號）の如きもまさしくその一つに算へられる。

余等の見て不思議の感に堪へないことが一つある。それはドイツ思想が全然日本の哲學界を征服し去つたことであり、同時に日本の思想の一方がそれで滿足してゐることである。哲學がある一派のみを誇り、それ以外を認めまいとすることが奇妙なことであると共に、その一派といふのが實は他に征服されたものだとすればなほのこと妙である。思想は自由でありたい。抽象名詞を使用して論理的構造をのみ誇るならば、思想はどれだけの屈曲さをもつのである。いはんやそれだけをいはゆる「正系」哲學として高く殿堂にまつり上げるに至つては沙汰の限りである。哲學者の偏狹はどこでも同じである。しかしそれは自らを持することが堅いからだ。日本の哲學者のやうなドイツ風な考へをして、それを威張るのは晏子の御者と好一對の例をなすのである。しかしそれが日本の支配政治の官僚主義の政策が當然の結果を得たのだとすれば、仕方がない事かも知れない。

この風潮が勢をなすとき、その本來の理由を知らないで、若い哲學の學徒が好んでその風をなして來るのである。さうしてそれらの徒にとつては、哲學が原理の學であるとしてその原理が實は何物の原理でもなくなつてゐるのに氣がつかない。さうして眞面目に原理を考察すればするほど、その詐欺に陷るのである。さうして日本が支那哲學や印度思想を受けて、しかも漢字の文字を用ゐるところからもその欠陷が來るのである。朝永三十郎氏、桑木嚴翼氏、阿部次郎氏その他の哲學者の業蹟がことごとく反動思想のために力を盡してゐるのも怪むに足りない。

（一九二二、五 十七）　村松正俊

福田博士の「社會政策」其他

一

社會問題に關する論議の流行期は確かに去つた。流行の消滅は、その本體の絶滅を意味してゐない。否、流行期の經過は社會問題に關する論議の深刻化を語るものである。社會とか勞働とか云ふ名さへ附けば、どんな下らぬ本でも賣れた時代は、眞面目な研究者の出ない時だ。眞面目な研究は却つて流行期後に出づるであらう。まして社會問題そのものの解決には、その論議の流行によつては少しも貢献されなかつたからである。社會問題の本質並にその解決法に關する思索は寧ろ今後の冷靜なる研究に俟つべきである。

福田徳三博士の「社會政策と階級鬪爭」はこの冷靜なる研究期における一産物である。この書はその形態上二部に分たれてゐる。第一部が社會政策序論であり、第二部が階級及鬪爭とその當事者である。博士は本書における自己の態度を約言して云ふ。

「我々の微弱な力を以て無限なる欲望を充さうとするには、必ず共同生活がなければならぬ。共同生活が發達すれば、其間から階級が起る。階級と階級との間には、自ら階級鬪爭が生ずる。今日における階級鬪爭は、資本所得階級と勞銀所得階級との爭で其形は一方は雇傭懸引、他方は勞働爭議を以てしてゐる。社會主義も社會政策も、否一切社會と名の付く事は少くとも今日においては、此の形に於ける鬪爭を主題とするものである。然るに社會主義は、少くともマルキシズムの說においては、此鬪爭に關する唯物史觀として極めて樂觀說を持してゐる。即ち此くの如き階級の對抗は資本主義がそれ自ら必然的に崩壞す可き運命を有するものであるから、之れと共に、當然早晩消滅すべきものであると云ふのである。私の解する社會政策は此樣な樂觀に恥ずぬ

ものであつて、資本主義を以て、其自らに崩壞す可き必然的運命を有して居るものとは認めない。此儘に放擲して置けば、即ち必然的運命に任せゝ置けば、資本增殖の勢は益々强烈となりて人生の眞の厚生幸福は全く其の爲めに蹂躙せらるる外はない。我々は必然の運命の到來に一任せず、人爲の政策を以て此大勢に對抗せねばならぬと主張するものである。是が即ち社會政策存在の理由である。從つて社會政策はマルクス流の唯物史觀を以ては到底打立て得られないもの、否な否認せらるべきものであると共に、我々の如く唯物史觀を取らぬものに取つては、社會主義が誤りて敎へつゝある所を正しく敎ゆるもの即ち社會政策である。(序五――六頁)

博士の立場は極めて明確である。即ちマルキシズムを排して社會政策を採る。これが博士の立場であり、「社會政策と階級鬪爭」の五百余頁は、この立場を說明し辯護するために費されてゐる。

二

博士の社會政策論は單なる行政論でも、常識論でもない、それは一の經驗的智識の上に立脚した理論である。博士はこの理論を打ち立てるために、先づ國家と社會の對立を以つてし、近世の社會運動は實に「社會の發見」にあるとした。一度社會を發見し、其存在と其活動の法則とを知るに至つては、國家に一括する能はず、個人に分割し能はざる此等の異例的現象は、之をあげて「社會的」現象なりとするに至る。社會運動、社會問題、社會主義、社會階級、社會事業などと云ふ場合に關する「社會的」「ソーシアル」なる概念は斯くして出で來つた。而して其等が直ちに人の注意を惹くことは、此等は個人的でないは勿論、國家的とも云ひ盡されぬと云ふことこれである。」(一七――一八)故に社會政策の理論は先づ國家哲學の研究にあらねばならぬ。「社會政策の根本研究は此の新しき國家哲學、社會哲學の產物を十分に體得することなくしては、決してこれを完ふする能はざるものである。」(二一五頁)

然るに從來の國家學說を見ると、少くとも二つの形態がある。それは國家至上の哲學と國家否定の學說である。「前者は之を押詰めて行くと、社會を國家に融化し盡さうとすることになり、後者は國家を社會に融化し盡さうとすることになる。」(一九頁)即ち國家至上主義は一切の事象を擧げて、これを國家てふ容器に盛り上げやうとする。然るに一方國家否定の學說は一切を擧げて社會の內に包含せしめやうとする。兩者の對立の結果は社會か國家か二者擇一の結果となる。社會政策は兩者共に否とする。「國家を社會へ包攝し去らうとする考も、社會を國家へ包攝しやうとする考も共に社會政策の取らざる所である。」(一五四頁)國家至上主義の缺點は、團集生活の一形式たる國家に、個人的事象も、社會的事象をも包攝せしめやうとする點にある。國家も一の人格である「國家は國家それ自らの生命を持つてゐる。」(六五——六六)けれどもこの獨立人格の所有者である國家はすべての社會事象を包攝し得るものではない。勿論過去においては、かゝることは可能のことであつた。けれども社會の發見はこれを不可能ならしめてゐる。單に不可能ならしめてゐる許りではない。國家至上主義を否定し、更らに國家そのものをも否定せんとする傾向がある。この兩傾向を調和することが、社會政策の使命である。即ち人間の厚生鬪爭は「決して國家てふ容器以外國家の範圍以外に於てのみ行はれるのではなく、國家に盛り上げられた部分、國家てふ容器の中にある共同生活に於ても行はれる者で、國家範圍は決して鬪爭範圍でなく、鬪爭は國家の內外を通じて一樣に行はれるのであるから、「社會」は國家の內外を通して、其存在を維持する者と考へられる。(一五一)これを具體的に云へば、從來の權力國家を變形して、義務國家たらしめようとするにある。これを他の言葉で云へば「財產國家より勞働國家へ」の一言を以て言表はし得る。而して其獨立點は、生存權の認承にあることは、アントン•メンガアの說を承けて、私の十數年來主張しつゝある所である。」博士の雄大なる議論は、その十數年來の主張たる生存權の認承に歸着してゐる(一六二——三)

三

生存權の認承なる義務國家を如何にして建設すべきか。國家形態の變改後における國家の範圍如何。「社會的なりと

認めらるものの範圍如何。殊に「國家てふ共同生活は今日までの事實としては、此の不自由不平等の第一淵源たる財産制度の擁護を以て、其事實上、經驗上の第一任務としてゐた——本質上の第一任務たる譯では決してないが——。從つて、今日迄の國家に就いて云へば、其統治、其支配の下に立つ人類の生活こそ、不自由、不平等の體現であると云はねばならぬ。」(一三一)「事實に於ても國家の弊害の最大なるものは、其財産擁護制度に伴ふ弊害であつたので、國家の權力を掌握する者は、又同時に財産權力を掌握することになり、反對に財産權力を掌握すれば、自然に國家權力を掌握すると云ふことが、少くとも今日迄の歷史的發展上の常例であつた。」(一二七並に一四九)かくの如き國家に關する經驗的智識と「一度存在を發見した社會に就て、更らに其運動の法則を發見すること、其運動の進行上に於ける國家との交渉を正しく解釋すること、他方同時に個人との關係を究明する社會政策理論」(三五)とを如何にして解說すべきか。博士は自己の學說が經驗的智識の上に立脚して、決して社會主義者の如く一の獨斷から出發してゐないことを誇りとしてゐるのである。(「階級鬪爭當事者としての雇傭所得と資本所得」中のマルクス階級鬪爭論に對する批評を見よ)

博士はこの經驗的事實の認承の上に自己の學理を建設せんとするが故に、博士の所謂經驗的事實から出發して、故に當然社會の内に融化せらるべきを主張するマルクス派社會主義殊にレーニンの說に反對するのである！博士は、かゝる目的のために、マルクスの經濟論と唯物史觀とを斥ける。マルクスの唯物史觀全體に對する博士の議論は本書中には、これを發見することが出來ない。たゞ階級鬪爭論は歷史的事實に反してゐるが、たゞ近世資本主義制度の下においてのみは、正しいと主張せらるる。さうして社會政策は階級鬪爭を否認する。「社會政策が階級鬪爭を否認すると云ふのは、決して現存の事實を否認する謂ではない、其は爲す能はざる所、否學問上爲す可からざる所である。其否認と云ふのは、階級鬪爭を飽迄を階級鬪爭として進行せしめ、此に標的と目的とを指示して、より有力に、より有意義的になすと云ふことを否認するのである。」(三六八)博士の見るところによると社會主義は階級鬪爭を唯一の目的としてゐる。故に博士はこれに贊同することは出來ない。私は博士のマルキシズム觀はあまりに窮屈に過ぎずやと考へ

ゐものである。

最後に博士は資本の增殖と資本主義の崩壞に就いて論ずる。博士は資本增殖は、勞働階級の消費減退の事に不拘らず、進行するものであるが故に、ツガン・バラノウスキイと共に誤りであると主張する。この點に就いてのマルクス說辯護は河上博士が「社會問題研究」「我等」に掲げてゐる。私は兩說に就いてこゝに何ごとも云はない。けれども博士と雖も資本制度の永遠性を信ずるものではないやうだ。曰く「我々は今日現在此の資本制度と云ふ形を與へられて、其の中において、我々の力を、又た他の或る更らに進んだ急所へ集中して攻め立て、我々の運命を開拓しつゝある。而して此れも、ある度まで我々の力が達すれば、やはりからとなつて亡び行つてしまふものである」と。博士は、この點に於いて唯物史觀を純然たる機械論と解するのである。

要するに社會政策と階級鬪爭は博士の深遠なる學殖を傾けて、社會政策の理論的基礎付けを行はふとするものである。乍然、博士の云ふところによると「社會政策序論」は汎論の汎論と云ふ積りで、云はゞホンの見本に過ぎない、後篇においても、論じやうとする問題は甚だ多いのである。(序)吾々は博士の眞意を知るために、更らに博士の末刊の論文の發表を願はねばならない。

四

福田博士のマルクス社會學說の批評に對しもう一つマルクス批評を吾々は、本年の上半期の收獲として持つてゐる。それは二月の「改造」に現はれた小泉信三教授の「勞働價値說と平均利潤の問題マルクスの價値學說に對する一批評」であつた。小泉教授の所論を一言にして云ふとかうである。マルクスは資本論第一卷において、すべての商品の價値は、その生產に要する社會的に必要なる勞働時間によつて、決定せらると主張した。然るにその第三卷におい

ては、平均利潤と云ふ觀念を入れて來て、商品は、その費用價格と平均利潤との和を以て賣買されると云ふ。この第一巻においては、商品の價値は社會的必要勞働時間によつて決定せらるると云ふ勞働價値論と第三巻における費用價格プラス平均利潤によつて價格が決定されると云ふのは、明かに矛盾だと云ふにある。小泉教授は、先きにカアル・デイルのマルクス價値說學說を紹介された。（社會問題硏究所載）今、この矛盾を指摘するのにオーストリア學派の大斗ボエーム・バウエルクのマルクス學說批評に據つた。勿論小泉教授も云つてゐるやうに、勞働價値說に對する主觀價値論者の批評は今日始まつたことではない。隨分古いのである。

この批評に對するマルキストからの回答は、山川均氏によつて、その主宰する「社會主義硏究」（五月號）においてなされた。この回答もまた幾度か操り返されたところである。詳しく云ふと大變長くなるから、簡單に云ふが、資本主義の發達したところで、商品がその勞働價値によつて、賣買されないのは、自由競爭その他の障害が存するからである。それは、空中から物が落下する場合に引力の法則の支配を受けるが、空氣その他の障害があつて、法則通りは行かない。けれども、これは法則の存在を否定するものではない。大體かうである。

けれども吾等の問題とするところは、價値は、果たして勞働から發生するかと云ふことである。マルクスは豫め、その對象の商品を人間の勞働によつて自由に再生產し得るものに限つてゐる。これは、甚だマルクスには都合のよいことかも知れないが、價値問題を解決する所以ではない。英國で、八十年代に社會主義が勃興して來たときに、當時流行のジエヴオンスの主觀的限界價値論によつて、マルクスの客觀的勞働價値論を批評したものがあつた。マルクス主義の長老ハインドマンは「最終利用は最終無用だ」と罵つたが、價値學說發展の上における最終利用說は最終無用ではなかつたのである。マルキストはその第一巻と第三巻との間の價値論の矛盾を說く前に、利用說に對する批評を行かねばならない。

次に云ふべきことは、勞働價値論と餘剩價値說との關係がある。マルキストは勞働價値論の否定は、直ちに餘剩價

値說の否定と速斷するが、これは誤りである。ベルンシユタインは勞働價値說の誤謬は、直ちに餘剩價値說の誤謬を立證するものでないと云ふやうな意味のことを云つてゐる。またフエビヤンスは勞働論を否定しながら、地代論の擴張によつて餘剩價値論を立證してゐる。マルキストが勞働價値論の否定者を以つて、直ちに餘剩價値論の否定者たり、社會主義者たることを得ないやうに云ふのは速斷である。

要する近事の社會問題の論議は漸くその中心問題に觸れて來たと云つていい。流行期の雜駁な議論から、眞面目にして內容的な論議に移りつゝある。吾々は流行期の經過を悲まざるものである。五月九日（加田哲二）

會議の空氣を一新して協同的氣分を導きました。その結果第三インタナショナルの代表者は次のような聲明書を發表しました。

(一)ヂヨールヂア問題についての双方の情報を蒐集することに一致すること。

(二)社會革命黨員の政治犯については、辯護士としてのヴアンダベルトの辯護を許容するようロシア政府に建言すること。

(三)Zellenbildung の戰術をとらないことは第三インタナショナルが既に左翼派を除名してゐることによつても分る。たゞ理論宣傳以外に、勞働組合の破壞の戰術は既にとつてゐないこと。

これは無論第二インタナショナルの大讓歩ですが、これと同時に第二インタナショナルも協調的となつて、結局右の第三インタナショナルの讓歩の程度で双方の妥協が成立し、その結果(一)八時間勞働の維持、(二)ロシヤ革命擁護(三)ソヴ井エツト・ロシヤの承認といふ大綱目について共同行動をとることとなり、そしてこの共同行動のために九名の委員が選まれることとなりました。

自由人の手帳

ロオザ・ルクセンブルヒ女史の遺稿を讀む
（ロシヤ革命の批評）

一

私が最近に讀むだもののうちで最も多く興味を感じたものはロオザ・ルクセンブルヒ女史の遺稿「ロシヤ革命」（註一）である。單に私が興味を感じたばかりではなく、この一小著は共産主義の文献のうちで、レニンの「國家と革命」と並ぶべき地位を占めるほど重要なものだと思はれる。この書を讀むことなくして、世界の社會主義革命が産み出した最大の革命婦人ロオザ・ルクセンブルヒを知ることができないと同じく、またロシヤ革命を論じ、共産主義を論じ、ロシヤ・ボルシエヴ井キの諸政策を論じ、若しくはその根本理論としての「獨裁」の問題を論んずるものにとつては、この一小著こそ、何人も先づ一讀してかゝらねばならぬ重要な歴史的文献である。（註二）

（註一）Die russische Revolution; Ein` kritische wirdigung, aus demNachlass von Rosa Lvxemburg,1922

（註二）カウツキーはその最近の論文のうちで、このロオザの一小者こそ、多くのボルシエヴ井キ革命への反對贊成の諸文献のうちで水平線上に高く聳ゆるものであろといつてる。（Rosa Luxemburg und Bolschewismus, von Karl Kautsky——「カムプフ」本年二月號）「フライハイト」はその社説のうちでこの一小著を批評し、それは獨逸勞働運動においても若しくは國際的勞働運動においても Grosste Aufsehen であるさなしてゐる（同紙一九二二年十二月二十日朝刊）「フォルベルツ」もまたこの小册子のために長篇の社説を掲げてこの一小册子が「眞正のロオザ・ルクセンブルヒ」を知るために重要な文献であることを述べてゐる。（同紙一九二二年十二月十日夕刊）

この小册子は一九一八年の夏、ロオザがまだブレスラウの牢獄にあつた時に、（註三）そして外には世界戰爭が續行し、ロシヤではボルシエヴ井キが天下をとつてから四分の一ケ年獨露の間にブレスト・リトウスク條約が締結され、トロツキーの有名なロシア革命史「十月革命からブレスト講和條約まで」も出版された後のことであつたってこの論文は彼女

等の一團の「スパルタクス書簡」(Spartakusbrief) のために書かれたものであつたが、スパルタクス團の一派では、彼女の論文を發表することに反對し、且つそれを燒き棄てることに決議してゐたものである。(註四) この論文は爾來パウル・レ井ーの手許にあつたのを、昨年末レ井ーはそれを發表することに決心して、長篇の序文を添へて今年初頭にいよ〳〵出版の運びとなつたものである。

(註三　ロオザ女史は戰爭中二回まで投獄された。第一回は一九一五年二月から翌年二月までの一ヶ年間、次は一九一六年七月から一九一八年十一月十日までの二ヶ年四ヶ月である。後の場合には伯林、ヴロンケ、ブレスナウの諸監獄にあつたがこの「ロシア革命」を書いたのはブレスラウに行つてからである。從つてロシヤ革命の起つた時にも、またその後の一ヶ年も彼女は牢獄のうちに幽閉されてゐたわけであるがこの間に彼女は獨逸出版の新聞雜誌書籍は勿論、直接ロシヤ語の諸文獻を通じてロシヤ革命を研究することができたのである。

(註四) この頃の獄中から彼女の書簡は其書簡集 (Rosa Luxemburg, Briefe aus Gefängnis, のうちに集錄されてゐるが、このロシヤ革命論だけは三ヶ年有半の間埋沒されてきたのである。

二

ロオザは、リーブクネヒトとともに、或はリーブクネヒトよりも卓越した、獨逸共産主義の智的指導者であつた。

彼女がシャイデマン政府の毒刃に仆れてからもう三年を過ごしたが、ラデックのいつてゐるとほり、彼女の屍は、尙ほ「獨逸共産主義の旗」である。(註五) 否、獨り、獨逸共産主義の旗であるばかりではなしに眞正なる「世界共産主義の旗」であるといふことができるであらう。波蘭のギムナジュウムに早く既に社會主義の研究を重ねてゐた彼女、一九〇七年の有名なスッツガルトの會議に、レニンと相結んで對戰決議のために、戰つた彼女、世界戰爭が始まるや、直に勇敢に戰爭に反對し、「社會民主主義の危機」を叫んで立つた彼女、牢獄から出ると再び獨逸共産革命のために身を挺して戰つた彼女、遂に一九一九年に、革命の鮮血をもつて彼女の最後を彩つた彼女は、疑もなく共産主義の巨大な紀念塔である。第三インタナショナルが最初にモスカウに開かれた時に、世界の革命的勞働者にとつて、紀念すべきこの會議の劈頭に立上つて開會の言葉を述べたものはウリヤノフ・レニンその人であるが、彼の口から最初に叫ばれた

とは、凡てのことに先だつて、この會議の凡ての出席者が「第三インタナショナル」の最善の代表者――カール・リーブクネヒトとロオザ・ルクセンブルヒとの二人の追憶のために起立したいといふことであつた。(註六)そのロオザ・ルクセンブルヒから、その「第三インタナショナル」の最善の代表者」から、若しロシヤ革命についての、忌憚なき批評が聽かれるとしたら、そは疑ひもなく、最も權威ある批評であらねばならぬ。何となればそは資本主義の諸新聞一流の荒唐無稽、出鱈目でないのは勿論、日和見主義者一派の、攻撃のための攻撃ではなくして、實に革命に燃ゆる心が、その感情を押さへ、その一時の利害を顧みずに、眞に彼女の信んずるところを、大膽卒直にいふたものであるからである。

(註五 Rosa Luxemburg, Karl Liebknecht, Leo Jogisches, von Kal Radek, S. 26)
(註六 Der . Kongress der Kommunistischen Internationale (Protokoll)S.

三

ロオザ・ルクセンブルヒ女史は長く純正マークス主義の立場に踏いてきた。彼女は如何なる意味においても革命的社會主義の敵ではありえない。彼女の遺稿「ロシヤ革命」の卷末においても、ある意味において、世界の將來がボルシエヴ井ズムのうへにかゝつてゐるとさへ考へてゐるのである。しかしカウツキー派の社會民主主義に痛撃を加へる彼女、世界の將來がボルシエヴ井ズムのうへにかゝると信んずる彼女は、たゞモスコウへの巡禮の旅に渇仰の涙をこぼしつゝある世の多くのレニン、トロツキーの崇拜者ではない。ボルシエヴ井キのためとあらば、非を是とし、黑を白とし、たゞ手を合せて讃美のコオラスを唱へる一派の盲目的ボルシエヴ井キではない。それとは正反對である。彼女曰く、ロシヤ革命の經驗と教訓とを偉大ならしめる道は、「無批評の辯解ではなくて、あくまで眞面目な批評であると。また曰くロシヤ革命を、あらゆる歷史的關係において批評することが、獨逸の勞働運動にとつても、若しくは世界の勞働運動にとつても、「最良の教育（ベストシユールンク）」であると。(註八)こういふ立場から彼女の小冊子「ロシヤ革命」は書かれたのである。從つてそは最も公明正大な批評であるとともにまた最も大膽にして徹底的な批評であらねばならぬ。

(註七 Die russische Revolution, S. 7, 73)

四

彼女はロシヤ革命が非常な難局のうちに生れたことを認めてゐる。そしてミリ・ユウコフ、ケレンスキー等の革命で結局王制への復歸が止むを得ないやうな狀態にまで陷つたことを認めてゐるとともに、この難局を切り拔ける唯一の道が勞働者及び農民の手に政權を掌握するにあることを認めてゐる。從つてレニン黨こそ革命の利益を救ふことのできる唯一のものであることを認めてゐるのである。彼女はレニンが背つていつたことのあるとほり、ロシヤ革命のこの狀態は反革命の勝利か無產者階級の獨裁政治か、若しくはカレデインかレニンか、といふ場合であり、そしてこの難局に當つたレニン黨こそ、たゞにロシヤ革命の救濟者であるばかりではなしに、實に「國際社會主義の名譽救濟」であるとなしてゐるのである。(註八)

(註八)同上七六、七七、八二頁

しかしボルシエヴ井キ革命に對してかくのごとき同情をもち、かくのごとくにそれの功績を認めてゐる彼女は、ボルシエヴ井キの根本政策についても、またその根本原理についても、如何なる反動主義者にも劣らぬほどの峻嚴に批評家としての彼女であることを妨げない。

彼女の批評は、ボルシエヴ井キの農民政策から始まる。蓋し農民政策は、卽時平和の政策とともに、ボルシエヴ井キ革命の最初の二大根本政策であるからである。

五

彼女に從へば、大地主の土地及び中地主の土地を國有にすること、そして工業と農業との同盟を實現することが、社會主義革命にとつての二つの根本的の立場であり、この政策の實現がなくては社會主義は存在しえられないのである。從つてボルシエヴ井キ政府が社會主義の經濟政策を實現しやうとするものである以上、そは少くともこの二大方針の方向に向つて步を步めるものでなくてはならない。ところがレニン一派のパローレは何か?「行け、そして土地を取れ!」これがレニンのパローレではないか。卽ち農民によつての土地の卽時の占有と分配との[illegible]である。土地の國有ではなくて分配であり、生產の集中ではなくて小規模生產である。ロオザ・ルクブルヒ女史曰く、そはたゞに社會主義的方法でないのみならず、それへの道を切斷するものであり、社會主義的意味においての農業狀態の改造に打

ち勝つべからざる困難が積み重ねるものである (Sie ist nicht nur keine sozialistische Massnahme, sondern sie schneidet den weg zu einer solchen ab, sie türmt vor der Umgestaltung der Agrarverhältnisse im sozialistischen Sinne unüberwindliche Schwierigkeiten auf)(註九)

(註九) 同上八二——四頁

彼女は更に進んで曰く、創造したものは社會的財產ではなくて、新らたなる私有財產であり、そして土地の大所有を中小所有に分割したことであり、比較的に進步した大經營を原始的小企業に逆轉することである。しかもその政策の實行は農民の間における階級對抗を減退せしめなかつたばかりでなしに、却つてそれを激成するの効果をもたらしたのである。特にこのレニン政府の農民政策は、ロシヤにおける一般生產の關係において、都市無產者と地方農民との間の、反抗的、鬪爭的狀態を導くに至つたのである。從つて「レニン的農業改革」は土地における社會主義のうへに、有力なる人民階級を、敵と化せしめるに至つたのである。(註十)

(註十) 同上八五——七頁

六

次に注目すべきことは、獨裁と民主主義との關係、若しくは獨裁と階級または政黨との關係についての、彼女の立場である。蓋しこの問題は、政策としてゝなしに、ボルシエヴヰズムの根本理論に關するものにほかならないからである。この點に關する彼女の立場は、頗るカウツキーのそれに一致するものがある。彼女は獨裁、即ち無產者階級の獨裁の必要であることを認める。しかし彼女が獨裁といつてゐる時に、そは、カウツキー流の「狀態としての獨裁」ではないのであるが、それとともに一黨一派の獨裁でもない。彼女曰く、しかしこゝに獨裁とは、階級の獨裁であつて、一政黨または一つの徒黨の獨裁ではない (Diktatur der Klasse, nicht einer Partei oder einer Clique) 即ち無制縛なる民主主義における、活動的にして妨げられることなき民衆の干與のもとにおいての、最も廣い開放における、階級の獨裁(Diktatur der Klasse, d. h. in breitester Oeffentlichkeit, unter tätiger ungehemmter Teilnahme der volksmassen, in unbeschränkter Demokratie) でなければならぬ。彼女また曰く、獨裁とは階級の仕事であつて

少數のものが階級の名において語るものであつてはならぬと。(註十一)　この點において彼女の論じてゐるところは、變節漢」カウツキーが、屢々論じてきたところと重要な一致點があり、特にカウツキーの「階級獨裁と政黨獨裁」の一論文とその揆を一にしてゐるのを見るのである。(註十二)

(註十一)同上百十五、百十七頁

(註十二)この論文（Klassendiktatur und Parteidiktatur）は「カムプフ」の昨年八月號（二百七十一頁以下）に出たもので、また本年三月になつて雜誌「解放」に譯載された。

だから、彼女が無產者階級の獨裁政治といふのは、彼女に從へば決して民主主義に反對するものとしての獨裁政治ではない。彼女曰く、「然り、獨裁政治！しかしこの獨裁政治とは民主主義を用うることの方法に存するのであつて、それを廢止することに存するのではない」Jawohl: Diktatur! Aber diese Diktatur besteht in der Art der Verwendung der Demokratie, nicht in ihrer Abschaffung)(註十三)

(註十三)「ロシヤ革命」百十六頁

七

以上はロオザ・ルクセンブルヒ女史の遺稿「ロシヤ革命」の一般を紹介したに過ぎないのであるが、これによつて見ても、彼女のこの遺稿が、ボルシエヴ井ズムの根本理論と相容れざるものであること、否、それに向つて挑戰するものであることを知ることができるのである　だからこの遺稿の發表されるとともに、共產主義者の間に一つの大きな驚きを與へたことは寧ろ自然であるが、獨逸の合同共產黨は幹部會を開いてこの小册子について協議した後、クララ・ツエトキンから、この小册子は、ロオザ女史の出獄以前の思想を代表するも、出獄後の彼女の意見ではないと辯じた。して見るとロオザ女史は、出獄後はカウツキーと反對の方向に「變節」したこととなるのである。しかしまた同じく共產黨員パウル・ランゲが「赤旗」のうちで書いてゐるところによると、この小著こそ眞のロオザの立場を宣明したものであつて、クララ・ツエトキンの書いたことが僞りであり、ロオザはその內心においてボルシエウ井キではなかつたのであると。(註十四)

(註十四)「ローテ・フアーネ」一九二一年十二月二十七日

私は、この點について、ランゲが正しいか、若しくはクララ・ツエトキンが正しいかの問題を詮索するよりもロオ

ザ・ルクセンブルとの次の一句こそ眞に彼女自らの口から彼女の眞精神を語つたものだと思ばれる。彼女曰く、トロツキーは、彼がマーキストとして、「形式的民主主義の偶像崇拜者」ではないといつてゐるが。價に私たちも形式的民主主義の偶像崇拜者ではなかつた。しかし私たちはまた社會主義やマークス主義の偶像崇拜者でもないと。(註十五)

(註十五)「ロシヤ革命」百十五頁

晩年のクロポトン

(バークマンの手記)

(室伏高信)

私はロシヤへきてから間もなくピイタア・クロポトキンについての噂を聞くようになつた。それは非常に矛盾したものであつた。ある人は、彼がボルシエヴ井キに對して好意をもつてゐるといふた。ある人は彼がそれに反對してゐるといふた。またある者に從へば彼は比較的滿足すべき物質的狀態において生活しつゝあるといひ、他の者に從へば彼は事實上飢えつゝあるといふような次第であつた。私は事の眞相が知りたかつた。ほかに、私は個人的に、彼を見たかつた。過去何年、私は彼と時々の通信を交はしたが、しかし私たちはまだ會つたことはなかつた。私は最初に彼の名を聞き、そして彼の書いたものを知るようになつた少年の時分から彼の嘆美者であつた。………。

一九二〇年三月までは、私は、ピイタア・クロポトキンを訪問する機會をもたなかつた。彼はモスコウから六十バアスト隔つてゐる小さな町のドミトロフに住むでゐた。ロシヤの鐵道は、この頃最惡の狀態にあつた。單に訪問といふことのためにペトログラードからドミトロフへ旅行するなぞは思ひもよらないことであつた。しかし倫敦の「デーリー・ヘラルド」の主筆チョージ・ランヅベリーがペトログラードへ到著したことは、私のモスコウ行の可能をもたらした。ランヅベリーは特別車を與へられ、そして私は彼の通譯として首都へと隨行した。他の二人のモスコウの同志とともに私はこの機會を捕へた。

著名の士と會ふことは多くの場合に大なる失望である。どの道、私たちの想像の繪はぴつたり實際と添はないのである。しかしクロポトキンの場合はそうではなかつた。肉體的にも精神的にも、殆んど正確に、私が心に書いてゐた

ものと同じであつた。彼は親切な眼と、快い笑と、そして寛やかな髯と、丁度彼の寫眞のように目立つて見えた。……
……理想家の刻印が強く彼のうへに、そして彼の人格の靈性が實際に感覺されることができた。しかし私は彼は衰弱と彼の明らかな虚弱との樣子に驚いた。彼は組織的に營養不良で、半ば飢えて、そして年の割合に老けてゐた。

クロポトキンの家では、飢えつゝある全ロシヤの凡ての家と同樣に、食物問題が非常に困難な問題であつた。……クロポトキンは一定數の科學者や革命家に與へられる所謂Pah-yok若しくはこれに等しいものを受けてゐた。それは量においても質においても一般市民に發せられた日糧よりも餘程以上であつた。しかしそはとても生命を支へるに充分なようなものではなかつた。幸にしてクロポトキンは時々外國またはウクライナの同志から食物の包を受取りつゝあつた。しかしそれをもつてしてもクロポトキンの一家(彼の妻と娘のサシヤ)は餓を凌ぐには非常に困まつてゐた。燃料と燈火もまた始終困難する事件であつた。冬は非常に酷しく、薪は非常に稀れであつた。石油(ケロシーン)は得るに難く、一時に一ランプ以上を燃やすのは、滅多に耽ることのできない餘程の贅澤であると思はれてゐた。この欠乏はクロポトキンにおいて特に感じられた。それが彼の文筆勞働を非常に不利の立場に置いた。

これ等のことは、私は凡てソフヰー・グリゴリエフナとサシヤから聽いた。たゞの一語でも、クロポトキン自身は自分の生活の困難を語りはしないであらう。しかし彼の孤獨が彼に煩ひしたことは明らかであつた。クロポトキンの家族は數回モスコウの彼等の家を處分され、その數角は政府の所用のために徴發されてゐた。彼等はドミトロフへ轉居することに決めた。そこは首都から半百バースト位ひの距離であつたが、しかし數千哩も離れてゐるのと同樣であつたのだ。何故ならそれはクロポトキンを、殆んど牢獄にも等しいほどに、隔離したからである。交通組織の危機的狀態のために、またその時の一般狀態のために、クロポトキンの友は滅多に彼を訪ふことはできなかつた。西歐からの報道、科學的の著述、外國の出版物——凡てこれ等のものは手に入れることができなかつた。クロポトキンは深く知的同僚と精神的慰籍との欠乏を感じてゐた。

私はドミトロフに二回ピイタア・クロポトキンを訪れた一度は一九二〇年三月に、二度目は同年七月に。二度目の時には、彼は大分よくなつてゐたように見えた。そう瘠せ

てもゐず。前よりは顔色も健康に、丈夫でそして活動的に見えた。赫く夏の太陽は著しく彼に幸ひであつた。彼はクロポトキンの小邸に隣る小園を散歩してゐた。そしてソフ井ーの手になる滿開の野菜畑を指しながら得意であつた。彼の眼は輝き、清澄な空の瑠璃色がそれに反映してゐた。それは溢るるような好意の笑みによつて人を魅化する特別の目であつた。それはクロポトキンの全人格を直に映し出す人間のカメラレンズであつた。彼の人間及び自然への愛、そして凡ての生への彼の天賦の聖なる尊敬を。

私たちは多くの問題を議論した。私はクロポトキンが、力を入れて、斷乎としてボルシエヴ井キに反對するのを知つた。或は、寧ろ、彼が繰返して主張したように、國家社會主義の、全國的暴力によつて強制された共産主義、そして汎くマークス主義の妥協すべからざる敵であつた。ボルシエヴ井キからは別に何ものも期待されたものではなかつた、と彼は述べた。ボルシエヴ井キは理論においても目的においてもマークス主義者であつた。彼等は全能な、專制國家の創造に向つてゐた。彼等の一九一七年十月―十一月の革命的スロウガンは、無産者階級と農民を、特に無政府主義者を、全く誤つた。無政府主義者は無論、その美辭麗名にかゝわらず、凡て強力のうへに立てられた……か常に誤謬で害惡であることを知つてゐた。しかし一九一七年に、彼等はボルシエヴ井キが偉大な革命的要素であることを見、そして彼等はマークス主義の哲學に固有な危險について盲目でゐた。ロシヤの無政府主義者は革命の勝利のために、ボルシエヴ井キと手を携へて働き、相並んで戰ひ、犧牲的に、勇敢に戰つた。數百人の彼等は生命を失つた――そして今は如何？今や彼等は迫害され、獵られ、凡ての表現は彼等に禁んぜられ、彼等の多くはその思想のため牢獄に、そしてあるものは射殺さへされてゐる。そしてボルシエウ井キは政治とそして國の全經濟的及社會的生活の完全な統制をすること殆んど三年にして、彼等は人民のために何ごとを爲したか？「私は飢え且つ滅びたロシアについて語つてゐるのではない。無論それは全然干渉と封鎖とのためではないのだが、國家共産主義とそしてボルシエヴ井キ方法とは、それに對して小さくない責任をもつてゐる。彼等の集中への狂的欲情、彼等の生活の實際問題に對する非能率、――腐敗をいふのではない――特に、彼等の農業問題並に農民心理についての無知、凡てこれ等のことは大に今日のロシヤの經濟狀態に責任のあることである。しかし私

が今まカ說しようとするのはこの點ではない。私が特にあなたに指摘しようと思ふことは」クロポトキンは苦るしみに滿ちた眼で私を見、そして彼の聲は憤りに慄えてゐた「ボルシエヴ井キ國家が人民――個人とそして集まりに對する態度である。私は平靜にはそのことを話すことができない。壓迫と威赫、これがボルシエヴ井キの、革命の友に對してさへとるところの手段である。革命を深めることの代りに、彼等は今はたゞ政權獲得のことにばかりかゝわつてゐるのだ。彼等の革命の眞髓即ち………人民の自發、自己表現、組織及び自發的協同への最大の機會及奬勵については全く盲目である。盲目だと私はいつたか？いや、彼等は熟慮的に且つ組織的にそれの凡ての徵候を壓迫し、或は根絕さへしつゝあるのだ。それがロシヤ革命の恐怖すべき悲劇なのである。」

……彼はボルシエヴ井キが他の凡ての革命的諸政黨及び運動を壓迫する態度を責めた。そして特に無政府主義者を投獄し或は射殺する彼等の政策を憤つてゐた。それは野蠻主義であつて、革命ではない、と彼はいふた。彼はボルエヴ井キがロシヤの偉大な協同組合運動を破壞したことについて詳らかに語つた。………ロシヤの農民に對するボルシエヴ井キの政策は、クロポトキンの言葉に從ふと、ボルシエヴ井ズムの最闇黑の頁であつた………　一九二二年一月ストックホルムにて　　アレキサンダア・バアクマン

伯林會議

インタナシヨナル三派の伯林會議のことについては前號にも書いて置きましたが、その後伯林からの新聞が到著して會議の模樣や、結果の詳細を知ることができましたからこゝにその大體を紹介します。

伯林會議は四月二から四日間に亘つて獨逸議事堂で開かれました。集まつたものは左記の四十九名です。

第二インタナシヨナル　△ヴアンダベルト、ハイスマン、ウエルス、マクドワナルド・シヨウ、ゴスリング、ヴリーゲン、スタンニング、ミユーラー、ツエレテリー（以上代表者）マン、ブラウン、シツフ、ミエトケレス、ベビナ、ギリース、コース（以上客員）十七名

第二半インタナシヨナル△アドラア、クリスピエン、ロンゲー、バウアー、ツエルマーク、ウオルヘツド・マルトフ、

カルニン、フオール、ガリム(以上代表者 シユライゲア、アブラモヴ井ツチ、カプランスキー、ブラツク、ロツカー、ザツトマン、コムペール・モレル(以上客員)

第三インタナショナル△ブハリン、ラデツク、ツエトキン、フロツサール、ストカノヴ井ツツ、スメラール、片山、ロスマー、ウワルスキー(以上代表者)ヴナノヴ井ーツ、ブノヴツツ(以上客員)

外に伊太利社會黨から△セラテイ(代表者)アデルフ井、ドメニコ(客員)

先づショウ(第二インタナショナル)アドラア(第二半インタナショナル)ツエトキン(第三インタナショナル)の三人を座長に撰み、それから會議に入つてから先づフリッツ・アドラーが會議の趣旨を述べました　この三派インタナショナルの共同會議の目的は「資本主義を　　する目的をもつて、無産者階級の合同的國際行動の必要から、　　の基礎のうへに凡ての無産階級の政黨を結合すること」であるとされました。次いでクララ・ツエトキンが第三インタナショナルを代表して次のようなことが述べられました。

第二インタナショナルにプロレタリアの大衆が〇〇〇國體に政權を獲得し〇〇〇〇〇〇〇〇に同復することを自覺しそして、この目的のためには無産者階級の Einheits front が必要であるがこの點において第三インタナショナルは、第二半インタナショナルのイニシアチーフに敬意を表するものである。

次にヴアンダベルトが第二インタナショナルを代表して雄辯を振つたが、彼に從ふと三派インタナショナルの共同運動に入るためには、第二インタナショナルは次の三條件の滿たされることが必要であるとされました。

(一)勞働組合の中に所謂 Zellenbildung 並に今後勞働組合の分裂運動の戰術放棄すること

(二)ザヨールヂヤに對するボルシヴ井キ政府の處置を調査するために三派インタナショナルの代表者から調査委員を擧げること

(三)政治的犯人を釋放し且つ政治犯人の審理に國際社會主義の辯護權並に管理のもとに立つ裁判廷を設けること

この第二インタナショナルの條件に對してラデツクが第三インタナショナルの立場から逆襲的な辯駁があつたためにこの伯林會議は一時行き惱みの狀態に陷りました。しかし第二半のオツトウ・バウアの大演説が非常な印象を與へ

(第十五頁へつゞく)

小劇場及び民衆劇場運動に就て

私は今日の演劇を救ふものは小劇場の運動及び民衆劇場の運動に依る外はないと確信して居る者である。併し日本の演劇研究者の間には、小劇場と民衆劇場の本質及び其の關係をはつきり意識しないで、漠然とした意味で論じて居る人が多いと思ふが、それに反して此の自分の短い考察を記して見たいと思ふ。

演劇と云ふものは誰でも言ふやうに立體的のものであり、さうして綜合的な一つの藝術である。殊に他の藝術は文章或は音、色彩と云ふものだけで構成されるのに比較して、演劇は吾々自身の肉體を其の構成の一大要素として居ると云ふことは、余程面白いことでもあり、又アンビツシアスなことでもあると思ふ。演劇は吾々の實際の社會狀態——其の時代の有ゆる文化の程度を材料にして、其の上に創造されるものである。それだけに他の藝術に比べて創造の材料も社會的で其の演劇の享樂範圍も亦社會的なものである。それだけに或る社會が大きな變革を來たさうとする時、或は變革を來した時に、直に要求される藝術は矢張り演劇であらうと思ふ。其の意味から今日の日本が此の藝術に對して新しい要求を有たうとすると云ふことは亦當然でもあり、それだけ此の藝術に携はつて行く人々の責任も重いと思ふ。

演劇は綜合藝術だと云ふ。例へば光、線、色、音、——もつと具體的に言へば繪畫的要素、彫刻的要素、建築的要素、音樂的要素、總てそれ等の要素がそれ自ら完成されたものである。同時に演劇に於てはそれ等のものが充分に綜合されて、其處に新しい一つの創造が生れて來なければならない。是等の要素を綜合する力は二つの階段に於て行はれた、一つは文學的方面のドラマに依つて、もう一つは其のドラマの演出者に依つてゝある。最も理想的な狀態は文學の方面のドラマを創造しやうとするものと、演出者の創造しやうとするものとが一致した場合であるが、それは到

底望み得られることではない。何故ならば戯曲家の創造しやうとする創造の能力と、演出者の能力とが各々違つて居るからである。唯此の二つの創造者が或る一點に於て接觸し、其の接觸點から一つの新しい世界が創造されて行くものである。而して文學者の創造と演出者の創造と何方を主にすべきかと云ふやうな問題が、獨逸のハーゲマンのやうな人に依つて複雜な分類的な研究々されて居る、私は今其の事に就いて語らうするものではない。唯文學者が創造しやうとするものを、プロテジウスな演出者が新しい創造に移さうとする時に起る、多くの不統一の状態を今日の演劇の中から擧げて見やう、さうしてそれ等の不統一、不調和が如何にして生れて來るかと云ふことを考へて見やう。

演出者が或る一つの戯曲を演出しやうとする時に、演劇を構成する色々な要素がどう云ふ風に調和されて居るか、其の調和さ　て居る状態に依つて、其の上演された演劇が成功して居るか成功して居らないかと云ふことを批判することになるのであるが、今日の演劇を見て居ると實に是等の要素が不統一の極に達して居るのである。

先づ一つの　劇を上演するに先立つて、演劇を構成する要素以外にアップリオルに其の調和を破壊しやうとするものがある。それは今日の檢閲制度である。今日の檢閲制度は舊ロマノフ朝時代の檢閲制度に匹敵する程のものであると噂されて居るが、日本の演劇には先づ第一に此の檢閲制度の壓迫が演劇の上演に不安を與へて居る。一體檢閲制度と云ふものは單に演劇にばかりでなく、人民に藝術を鑑賞したり、道徳を批判したりする力がないと云ふ侮蔑の思想が、でなければ其の民族の支配階級が民族の思想感情を理解することの出來ない不安の状態に置かれて居る事を示すものだと想ふ。兎に角演劇の構成以前に起る檢閲制度は今日の劇壇に對する最も大きな障碍物の一つであると思ふ。其の次に演劇の調和を破壊するものは資本家の越權である。此の例は近く日本で一番大きな劇場である帝國劇場の株主と劇作家との間、論争などにも明かに觀る事が出來る、私も劇作家の一人として此の事件に關係した者であるが、一株主が劇場一日買取つて改作すると云ふことは、同時に總ての株主が劇場を買取つて改作をし得ると云ふことを示したものであつて、是程明かな不合理はない筈である。さうして此の度の資本家と劇作家との論争は、單に此の度の事件としてだけで見るべきものでなくて、もつと根本的にもつと永久的な問題として、もつと徹底的に進めて宜い、問

題であつたと私は信じて居る。

其の次に演劇の構成を妨けるものは俳優の越權である。俳優は演劇を構成するもの丶中で最も重大な一つの要素をなして居ることは事實であるが、併し俳優其のものが演劇の全體ではない、然るに今日迄の演劇に於て俳優の肉體が先づ第一に拔出して來て、其の演劇を構成すべき重大な要素が其の調和を破壞する最も著しいものになつて居ると云ふことは不思議に感じられる。併し俳優の肉體が演劇の上に於て拔出して來ると云ふには理由のないことはない、他の藝術的の要素を作る藝術家は時間的に求められて居ないけれ共、俳優は或る短い時間の間どうしても舞臺の上にあることを要求される、劇場資本家は其の內容に對して不當の給金を支拂ふ、又一方俳優の演技が觀客に對して個人的な牽引を生じて來る、或る俳優の演ずる役割、例へば勇敢なるもの、悲壯なるもの、苛憐なもの、或は殊に所謂濡場を演ずる俳優に對しては一種の戀愛さへも感ずることがある。さう云ふやうなことが俳優に對して個人的な最屓と云ふ感情を起させる、劇場資本家はさう云ふ現象を利用して巧みに俳優を一個の商品として客を喚ぶ方便としやうとする、是は即ちスターセスティム——俳優が特種の地位を得たり、或は最屓の感情を起させると云ふことは、演劇と云ふ藝術の上に於て許されて宜いことであると云ふ論者もあるが、私はそれには反對である。それは何故かと言へば演劇制度に於けるスターセスティムは單に俳優制度として惡いばかりでなく、延ては文學としての脚本の性質にも影響して、上演脚本の形式及び思想を制限することになるからである。今日の上演脚本の種類を見ると悉く此のスターセスティムに當嵌つたものが可なりある。今日私達が一つの演劇を觀ると云ふことは、色々な演劇の要素が藝術的に統一された一つの創造を觀るのでなぐて、此のスターセスハイムの中から生れた或る種類の俳優の肉體的運動を觀ると云ふに過ぎない、是は從來のスターセスティムの極端に行はれて居た劇壇の演出法及び上演脚本を見れば能く分ることである。

檢閱制度の不合理、資本家の橫暴、俳優の越權に反抗して理想的な演劇藝術を作る爲めには吾々はどう云ふ途を取つたら宜いか、私は先づ第一に藝術を構成するところの各藝術家同志の意志の疎通と云ふことが、先づ第一の必要條件

であらうと思ふ。勿論組織の變革も行はれない以上は、理想的なものを造り出す事は出來ないのは言ふ迄もないが、少くとも藝術家同志が同じ理解の上に立つて、一つの目的に向つて進むと云ふことは、どんな狀態に置かれて居る場合でも必要なことであると思ふ。今日の俳優生活も演劇を構成する他の藝術家の生活と比較して見ても、全く異つた環境に住つて居ることが分る。是等の環境を異にして居る藝術家がどうして統一のある藝術を創造することが出來るであらうか、此の問題は決して今更起つた問題ではなくして、歐羅巴では四十年以前からの問題であつた、今日の日本の劇場組織は決して藝術家の理解や親密を造り出すところの場所ではなく、又それと同時に觀客に藝術を味はせる所でもない。今日の劇場組織は藝術の假面を被つたところの計算箱に過ぎない。例へば私達は先づ劇場に入つて一番先に目に付くものは吾々の肉體を入れるところの四角な桝である、私は何時もあの桝のことを考へると金があつても劇場へ入らうと云ふ氣にはならない、あの桝は決して人間に藝術を味はせる爲めに造られたものではなくて、人間の頭數を計算する爲めに造られたものである。桝ばかりではない、椅子制度の劇場も亦決して人間に休息と慰安と創造を與へる場所ではない、又大道具の專横無智と云ふやうなことも日本の劇場の藝術的な統一を妨げる一つの要素である。是等の不快な人間の計算箱から免れて新しい藝術の世界を造らうとする爲めには、先づ第一に今日の資本主義の束縛から藝術を救ひ出さなければならぬ。第二には藝術家同志が御互に理解し合つて統一ある創造をしなければならぬ。第三には徒來全く異なる別々の世界に住んで居た觀客と舞臺とが接近しなければならない。卽ち第一の要素は今日の小劇場及び民衆劇の運動の生れる共通した一つの思想であり、第二の要素は小劇場の運動の動機であり、又第三は現代の民衆劇場の生れる動機であると私は思ふ。

一體今日私達の觀て居る劇場建築はコンマーシャルズムの發達したものであつて、演劇は其の最初に於ては何れも屋外で演ぜられたものである。で此のコンマシャルズムに反抗して廣い屋外に出て、新しい藝術を造り出さなければならないと云ふのは、民衆藝術としての野外劇の運動である『澄んだ空、青々とした樹木』の間で自由に藝術を享樂しなければなるまい、と云ふのが野外劇場運動者の標語である。

今日の劇場から放れて小さな理想的な劇場を有つて、其處で新しい藝術の世界を造つて行かうとするのは即ち小劇場の運動であつて、コンマーシャリズムから解放されやうとする點、或は觀客と舞臺の接近と言つたやうな點では小劇場と民衆劇場は全く共通したものを有つて居るのである。小劇場の運動は民衆劇場の運動と全く反した運動のやうに思つたり、或は小劇場は近代の民衆思想に反した運動であるやうに思つたりする人があるが、それは全く誤つて居る。今日迄歐羅巴の小劇場で演ぜられた脚本目錄を見ると其の事が能く分る、例へばヘッベル、イブセン、ストレンドベルヒ、ミイレルリング、ゴルキー、ショー、ブリユーなどの近代の歐羅巴民衆思想の先驅者或は主唱者の作物が多く演ぜられて居るばかりでなく、又其の演出法は槪してナチユラルズムの演出法を用ひて居るのでも分ると思ふ。

そこで小劇場運動の哲學はどんなものかと言へば、大體次のやうに言ふことが出來る。

第一、商業主義に對する反抗

第二、藝術家同志の綜合的協力

第三、舞臺と觀客との接近

第四、上演目錄制度

第五、試驗的

と云ふことで、是だけのものは各國に於ける小劇場運動に共通した思想であると云ふことが出來る。

小劇場の運動を年代的に記して見ると、佛蘭西のアントワースの自由劇場が一八八七年、今から三十四年程前で、此の運動は實に近代の小劇場運動の勃興の先驅をなしたもので、單に演劇運動であつたと云ふばかりでなく、澤山の劇作家と劇場美術家を生んで居る。ストレンドベルヒの小劇場は一八八八年で今から三十三年前、有名なモスコーのビユーチ座は一九〇年で、此の運動は明に日本に於ける小劇場運動に直接の影響を與へたものであつて、小山内薰君の自由劇場坪内博士の文藝協會などと此の運動に刺戟されたものであると云ふことが出來る。英國の舞臺協會が一八九七年、亞米利加の小劇場の具體的に起つたのは一九一一年で僅か十一、二年前であるが、此の運動は近來著しい

發達を遂げて居ると云ふことである。殊に亞米利加の小劇場の運動は各大學の演劇研究者に依つて發達を遂げて居ると云ふことゝ、村々の演劇愛好者に依つて起されて居ると云ふところであつて、是は非常に面白い現象だと思ふ。日本に於ける小劇場の運動は一九一二年（大正二年）から一九一六年（大正六年）迄が第一期の運動と見ることが出來る、併しながら今日の日本の劇壇には未だ判つきりした小劇場の運動と目さるべきものが現はれて居られないやうである。今日の新劇の運動は劇場資本家に利用され、又劇場運動者が資本家を利用すると云ふやうな、妥協的な傾向を多分に帶びて居ると思はれる。是に比べると第一期の新劇運動は、判つきりした小劇場運動の主張を有つた劇場設備あゝ云ふ組織——藝術内容に對して叛旗を飜し得たと云ふことは可なう花々しいことであつたと思ふ。さうして其の第一期に於て小劇場運動の倒れたと云ふことは、其の運動の眞面目で妥協的でなかつたと云ふことを證明して居るものである。

民衆劇の運動が小劇場の運動よりも餘程以前から哲學としては存在して居たけれ共、それが明瞭な旗を揭げ得るやうになつたのは歐羅巴に於ても比較的近代の事である。それは近來の民衆の社會的地位及び其の思潮に勵まされて勃興し來つたものであつて、其の哲學としては近代の有ゆる思想の泉であると言はれて居るルッソーから生れて居るやうである。ロマン・ローランなどに從へば民衆藝術の思潮はルッソー及び佛蘭西の理學者のデードロに依つて、一方は獨逸に入つてシルラー、ゲオテを生み、又ウィンに入つて色々な民衆藝術運動を刺戟し、更に端西（スウィツル）に入つて人民が自ら造つて自ら演ずる澤山の平民劇の運動になり、又白耳義（ベルジューム）に於ける民衆演劇を生み、更に近代の佛蘭西のボートシエなどの民衆劇場の運動を生むやうになつたのであると言はれて居る。日本に於ては坪内博士のページエントの運動を除いては殆ど民衆劇の運動と見做さるべきものがないやうである。民衆劇と云ふものを單に平易な分り易い、或は道化た芝居を演じて多くの觀客を享樂させると云ふ風に解釋する民衆藝術論者があるが、是は民衆劇と云ふものゝ本質を誤つて居るばかりでなくて、民衆と云ふものゝ思想感情を侮蔑した差別思想から生れて來るものであると私は考へて居る。藝術を求める心、藝術を味はう心は決して今日の文化の所有者に比較して民衆は劣つて居るものではない、

藝術を解しない大學敎授もあれば、一二度飜譯劇を見たり讀んだりしただけで近代の藝術思想を最も端的に摑み得る工場勞働者もある、今日迄の誤つた藝術を味はう事の出來なかつたと云ふことは、民衆の誇りになつても恥辱にはならない、ロマンローランは將來の演劇は民衆に現實の姿を見せるものでなくてはならぬ。感情の解放を示すものでなくてはならぬ、思想を公道に導くものでなければならぬと言つて居るが、今日迄の劇場組織の中から生れた總ての藝術は民衆に對して斷はられたと云ふことは、民衆其のものに取つて一つの幸福でなければならない。將來の演劇は民衆の有つて居る明い性質、自由な性質、理性を求むる心、共同的感情の上から生れた積極的な巧妙的な、さうして力に滿ちたものでなければならぬ。多くの民衆に娯樂を與へると云ふやうなことは、寧ろ民衆の意識を鈍くし感情を痲痺させるものであると思ふ。其の意味で私は從來漠然とした意味で言はれる民衆藝術論には反對するものである。

要するに民衆劇場と小劇場の運動は其の現はれるものは異つて居ても、生れる動機と其の目的は一つ所にならなければならぬと私は信じて居る。

（秋田雨雀）

通俗相對性原理講話（寮佐吉譯）

この書物はアメリカで一萬圓懸賞に當選した論文を譯したものである。それは相對性原理が知識界に貢獻をける最高貢獻でありながら、專門家以外の人には六かしくて分らないのを殘念さし、誰れにでも分る説明が欲しいさいふ理由から募集したのである。その當選論文であるだけにこの書はわれわれ素人にもよく分る。サイエンチフヰック・アメリカンは、この書物の著者は「何を言ふべきか、何にを言はずに置くべきかについて非常に卓越した判斷力をもつ」さいつたそうだ。どうも噓ではないらしい。譯者もこうした通俗書はどうして譯すべきかを善く心得てゐるようだ。（價一、八〇錢東京麴町富士見町四ノ二聚明閣、振替東京五五七八番）

平等か自由か

――(アンリ・バルビユス對ロマン・ロオラン)――

アンリ・バルビユス對ロマン・ロオランの第一回公開書に就いては本誌『批評』及び『改造』の五月號を參照されたい。二人の間に交はされたポレミックは第一回の公開書で終結を告げなかつた。それぱかりではない。二人の間に交されたポレミックは今や世界の革命的思想家全體の問題にならうとしつつある。僕は玆で自分のそれに對する立場を明瞭にしやうとするものではない。そのことに就いては已に『クラルテ・運動の將來』の題下のもとにきつぱり言つてある。不幸にしてその記事の要點はところどころ抹消の浮目に遭つたが、僕の言はんとしたところは、もしも、アンリ・バルビユスが、『明日』の建設のために實際インタナショナル・コムミユニスムがあるものの實現に最も有効な理想と確信するならば、彼は進んでクラルテ運動をして具體的に共產主義化しなければならぬものであり、且又、そうしない限り彼の主張も、彼の信仰も、また、彼の常に言ふところの思想の權威も遂に空文にしか價しないこと、恰度彼の批難するロランデイストと同じ精神主義的誤謬に墜る結果になると言ふのであつて、如何に僕らは思想家の運動がより以上具體運動と密接な關係を保ち、それといはゆる共同戰線を一つにしなければならぬことの意志を發表して置いた。しかし、このことは今僕が改めて更に玆に述べやうとするのではなくて、今日はその後に、即ち第二回に取交されたバルビユス、ロオラン二氏の公開書を紹介するに止まる。

總べて、第二回の公開書は第一回のそれに比して大した變化がない。ロマン・ロオランは クラルテ誌第六號にあるアンリ・バルビユスの公開書に對し、L'Art Libre 及び la Ressegna Internazionale 誌上に於てバルビユスに答へた。そこで、また、アンリ・バルビユスはクラルテ誌第十號に於て更らにロマン・ロオランに答ふるところがあつた。これ

だ、兩氏の第二回公開書なるものである。

僕は言つた。第二回の公開書は第一回のそれに比して大した變化がないと。しかし、僕らはロラン●バルビユスのポレミックの間に多少神經質に撒兵戰を見る。ロオランはブルジョア●アナーキストと言はれたことに就いて。二なる程アナーキストの中にはブルジョアが居る。がしかし、それはコムミユニストの中にも見受けることだ』。バルビユスは言ふ。『私はアナーキストの友人を可なり持つてゐる。私はそれらの人たちに尊敬を拂つて居るし、また、それらの人たちが人道的理論を具體化しやうとすることを認める。しかし、私は、私の考から見ると、これらの同士たちの理論はセンチメンタルであり、道德的であり、且又あまりに組織の缺いてゐるはせぬかとの危險を懷かざるものでもない。私が偶々ロランデスムと呼ぶところのものは他の人たちがアナーキスト氣質といふものと同一であるのであつてこの二つの對照は成立してゐるものと思ふ』と。また、ロオランがガンディを例に引いて non resistnce の代りに新にいはゆる non acceptation 論を主張されるけれども、バルビユスによれば結局勿論も總罷業に於けるlutte des bras croises と何等撰ぶところがないと言つてゐる。

といつた具合に、結局、ロオランとバルビユスの理論の彼れ目は自由か平等か、暴力の是認か否認かにあることは第一回の公開書にある通りである。ロオランは、現下に於ける藝術家、學者、思想家は一九一四年の歐洲戰爭に於けると同樣に、革命そのものに對しても絕對の自由を保有しなければならぬと主張するのである。そして、現在の共同の敵は人類社會の强制的暴力であるのに、バルビユス一派がその暴力に對するに他の暴力を備へやうとするのであるが、それが反つて、二つとも共倒れになるものであると批難するのである。

しかるに、バルビユスに言はせると、今のところ絕對の自由は求め得られない。よし、そんなものがあるとしてもそれは必ずしも眞の自由でも、また、絕對なものではなくて、言はゞ最大限の自由であるに限ぎない。それ故、今のところ自由といふものは架空的な言はば詩人の資源に過ぎない。そして、差ありそれよりも必要なものはそれの完全を期するための 'Theorie Collective. 團體の存在のためのある意味の强制の甘受であつて、それがためには多少の自由の不足に滿足しなければならない。眞の自由は○○○○○○○○○○にしか求められない。その時に先づ平等が最も比較的に普く行きわたるに容易であらう。しかし、その平等――自由への第一步であるところの平等すらもあらゆる空想と個人主義的平等を捨てない限り、それすらも得られないであらう。（小 牧 近 江）

近代經濟制度の藝術的批評（二）

五、

中世紀における工匠は屢々物質的窮乏に惱んだ。けれども工匠と封建的權力者との間の階級組織は甚だ嚴格のものであつたにも拘らず、彼等の間における差別は一時的のものであつて、本質的のものでなかつた。彼等の間には言語風俗、思想において今日の有産者と勞働者との間に見るが如き溝梁は存在しなかつたのである。彼等の勞働狀態に就いて見ると、彼等の職(クラフト)は各々組合(ギルド)に形成せられて、その間に嚴密の區別があつた。さうしてその生産は自己の消費を主として、その餘剩のみが市場に齎された。また組合內部においては、分勞の行はれることが少なく、一職業に徒弟となつた者は、その職の全體を習得し、必ずその職の親方たることを得た。組合制度の初期においては、一職においては徒弟親方と云ふこの一時的區別しか存在しなかつた。後期に至つては、組合の親方が資本家となり、その徒弟もまた特權を持つた職人 Journeymen-craftman の階級が存在した。然し乍ら職人と組合貴族 the aristocracy of the gild との差異は、また一時的のものであつた要するに、この時代における勞働の單位は有識的の人々であつた。この制度の下における工匠においては、勞働の執行は急速を要さなかつた。工匠は徐々に、考へながらその仕事を遂行することが出來、工匠の智識は彼の才能に應じて發達せしめることが出來た。さうして彼の全精神を一小生産に沒頭せしめる必要がなかつた。これを他の言葉で云へば、工匠の手とその心靈とを競爭的市場の必要の犧牲に供するの必要がなく、人間の發達に應じた自由がこれに與へられたのであつた。人間が商業のために存在するのでなくして、商業が人間のために存在するこの簡單なる事實が中世紀の調和ある最高の藝術を生んだ。この藝術のみ、自由と呼ばるべきである。(Art under Plutocracy, pp. 1775-177)

イタリアにおける文藝復興時代における優秀なる藝術の出現は、實にそれ以前五世紀における民衆藝術の興隆の結

果である。そはその當時勃興し來つた商業主義のためではない。文藝復興期の隆盛が、商業的競爭の發達と共に衰、亡に到つたことを以て知ることが出來る。さうして第十七世紀の終末に到つて精神的並に裝飾的藝術は僅かにその形骸を殘すに止まつて、その心靈と傳說とは失はれ、裝飾藝術は單に市場における商品と化した。かくて商業主義は勞働のギルド組織を亡ぼし、これに代ふるに職場組織を以てした。生產の單位は最早個人でなくして、個人の集團となつた。さうして集團の各員は互に他に依存し、彼自身としては完全なる生產者たらざるに到つた。この職場的分勞の制度は、企業家階級の市場擴張の努力によつて、第十八世紀中に完成された。この制度の下においては、既に云つたやうに、眞の藝術の精神は亡ぼされた。けれども平凡なる藝術は未だ存在したのであつた。何となれば製造の主要なる目的は、未だ新しい思想と相反するやうな貨物の生產にあつたからである。當時の生產は一方においては企業家の利潤のために、他力においては勞働者の雇傭のためにすると云ふ新思想と稍や爭鬪しつゝあつたのである。(Art under Plutocracy, 177-178)

商業は目的であつて、手段ではないとする思想は職場制度の特殊的時代である第十八世紀においては、充分に發達しなかつたのであつた。製造家は未だ自己の生產した商品に信用のあることを喜んで、全然商業的需要の必要のために、その信用を犧牲とすることを肯ぜなかつた。さうして勞働者は、藝術家ではなくして自由勞働者であつたが、その職に熟練することを要求された。然し乍ら、商業は新販路の開拓と新機械の發明と共に益々發達し、從つて生產組織は古代中世のそれとは甚だ異つたものと化した。プリニーの時代とサア・トーマス・モアの時代との間には一物を生產するその方法の差異は殆んど發見し得ない。然るに現在の生產は年々にその生產方法を變化せしめる。さうして昔時のクラフト組織は失はれて、勞働を省略すると稱せられてゐる機械が生產手段中の最重要位を占めるやうになつた機械生產の組織、工場生產の組織の勝利を促進したのは、實にこの機械採用の事實であつた。工場組織においては、職場組織におけるが如き機械的勞働が實際の機械のために驅逐せられ、勞働者は機械運轉の一部に附屬し、その重要においても、その數においても益々その瑣細の地位に置かれやうとする。けれどもこの制度は未だその完成期には達

してゐないので　職場組織的生産は僅かに行はれてはゐるが、そは段々と消滅しつゝある。その完成期に達すると・熟練職工は、存在しなくなり、彼の地位は少數なる技師によつて指揮せられ、熟練も知識もない男子、婦人並に小兒によつて執行される機械によつて代はられるであらう。さうしてこの組織は、既に云つたやうに民衆藝術を生み、イタリアの文藝復興の藝術を齎らしたやうな組織と相反してゐる。故にそは昔時のクラフト組織の生んだものと正反對のものを發生せしめた。藝術の死滅がこれである。言葉を換へて云へば生活の環境の墮落である。(Art under Socialism, pp. 17d-179)

藝術は亡びつゝある。生活の幸福は文明の進歩と共に減退しつゝある。そは如何によつて起つたか。ある者は機械の使用であると云ふ。けれども勞働を省略する機械を發明しやうとするのは人間自然の性情である。藝術的勞働は疑ひもなく、それ自ら快樂である。然るに勞働の中には必要にして、然も快樂でないものと、必要にして且つ苦痛なる勞働が存在する。この種の勞働の負擔を輕減するための機械の必要はこゝに呶々を要さない。けれども事實はこの理想に合致しない。吾々はジョン●スチユアート●ミルと共に近代のすべての機械が勞働者の負擔を輕減したかを疑問とする　近代の機械は疑ひもなく勞働の費用を減じた。けれどもそは勞働それ自らの苦痛を輕減したのではない。何故に然るかと云へば、生産の主要なる目的が利潤の獲得に存するからである。製造せられた貨物が世の中に利益を與へるか否かは問題ではない。一定の價格を以て、そが販賣せられ、さうしてそが勞働者に僅かに生活の資料を與へ、資本家をして一定の費用以上の利潤を獲得せしむることが出來るならば、生産せらる貨物の種類と、勞働者がそを生産する條件は、これを顧みる必要がないと云ふのが、近代經濟生活の原則である。故にこの組織の下においては、勞働の種類並に時間は無制限でこれを制定せんとするが如きは愚の骨頂とせられる。かくの如き商業至上主義の迷信――人間のために商業が存在するのではなくて、商業のために人間があると解する商業至大主義の迷信のために藝術は滅亡せられ、さうして腐敗と不斷の無秩序が、これに代つて榮える。かくて近代經濟組織と藝術とは相容れざる兩極に立てるものである。(Art under Plutocracy, pp. 179-191)

（一九、二二●四●一〇稿了）

――加田哲二――

英國、印度及スワラヂ（ガンヂ手記）

一、英國の狀態

讀者――であなたの陳述から私は英國の政府は願はしくもなし、また私たちによつて眞似るの値打ちもないと推論します。

主筆――あなたの推論は正しい。英國の現時の狀態は憐れむべきである。私は印度がその狀態に立たないことを神に祈る。あなたが「議會の母」であると思つてゐるものは、不姙の女、そして賣女のごときものである。この二つの言葉は苛酷な言葉であるが、しかし正に事實にぴつたりと箝まる。議會は自ら一事のよきことをも爲してはゐない。だから私は不姙の女に比べたのである。この議會の自然の狀態は、外部の壓迫なしに、それは何ごとをも爲しえない。それは賣女のごときものである。何どなれば始終變更される諸大臣の統制のもとにあるからである。今日はそれはアスクイス君のもとにあるし、明日はバルフォーア君のもとにあるだらう、

讀者――あなたはそれをいま諷刺的にいふた。「不姙の女」といふ言葉は適用されない。議會は人民によつて選擧されてゐるから、公衆の壓力のもとに働かねばならぬ。これがそれの性質なのである。

主筆――あなたは誤られてゐる。モ少しそれを嚴密に檢討しようではないか。最良の人間が人民によつて選擧されるものと假定する。選擧人は敎育されており、そしてそれゆへに彼等は概してその選擧を誤らないものと推定すべきである。左樣な議會は請願の皷舞やその他の壓力を必要としない筈である。それの仕事は、それの効果が日一日と益

々明瞭になるほどに滑らかであるべきである。然し事實は議員は僞善的で且つ利己的であると一般に認められてゐる。皆が彼自身の小さい利益を考へる。それが指導的の動機であることを恐れる。今日なされてゐることは、明日はなされないかもしれない。それの仕事に對して最後性が斷定され得るたゞ一つの實例をも思ひ出すことは出來ない。最大問題が討議されてゐる時には議員等は手を伸ばして投薬するやうに見られる。時としては議員等は傍聽者が倦きるまで喋つてゐる。カーライルはそれを「世界の喋り店」といふた。議員等は考へないで自分の黨派のために投票する。彼等の所謂黨紀がそうさせるのである。若し如何なる議員でも、例外の方法によつて、獨自の投票をすると、彼は變節漢と考へられるのである。若し議會によつて空費された金と時間とが少數の善き人物に委せられたとしたら、英國民は今日占めてゐるよりはもつとはるかに高き地位を占めたであらう。議會は國民のたゞの贅澤な〇〇である。こうした考は決して私に特有なものではない。英國のある偉大な思想家がそういつてゐる。この議會の議員の一人が最近にいふた、眞の基督教徒は議員にはなれるものでないと。他の人はいふた、それは幼兒であつたと。しかし、若しそれが七百年間の存在の後にまだ幼兒として殘つてゐたとしたら、何時幼年性を失ふだらうか？

讀者——あなたは私を考へさせた。あなたはあなたのいふことの全部を私が直ぐに受入れることを期待しまい。あなたは私に全く新らしい見解を與へた。私はそれを咀嚼せねばならぬ。今度は「賣女」といふ形容を話して下さるでしようか？

主筆——あなたが私の意見を直ぐと受入れることができないのは尤もだ。若しこの問題についての文獻を讀むだらあなたはそれについてある意見が出來るでしよう。議會は眞の主人がない。總理大臣のもとで、それの運動は不變なものでなく、それは賣女のごとくに打つかり歩るく。首相は議會の幸福よりもそれの權力にかゝわる。彼の精力は彼の政黨の成功をうることに集中される。彼の注意は常に議會が正しいことをすべきの點にあるのではない。首相は單に政黨の利益のために議會をして事をなさしめるものとして知られてゐる。凡てこれ等のことは充分考へるに價する。

讀者——では、あなたは吾々がこれまで愛國的で且つ正直であると思つて來たところの人をほんとうに攻撃しつゝ

あるのですか？

主筆――如何にもその通りだ。私は首相に反對すべき何ものもない。然し私が見たことは私をして彼れ等がほんとうに愛國的であると考へられないやうにさせる。若し彼れ等が、一般に賄賂として知られてゐるものをとらないために、正直であると考へられなければならないとすれば、彼等をしてそう思はせられて置くがいい。然し彼れ等はもつと陰險な勢力を用いる。彼れ等の目的を達するために、彼れ等はたしかに名譽をもつて人民を買收する。私は彼れ等が眞に正直でもなくまたほんとうの良心を持つものでもないといふことを斷言するに憚からない。

讀者――あなたが議會についてそうした意見を發表した。で英國民についてのあなたの意見を聽きたい。それで彼等の政府についてのあなたの意見を知ることができようから。

主筆――英國の選擧人にとつては彼れ等の新聞紙が彼れ等の聖書である。彼等は彼れ等の合圖言葉を、屢々不正直な新聞紙からとる。同じ事實が、違つた新聞によつて、政黨に從つて――新聞が、それの利害のために編輯される――違つて說明されてゐる。一つの新聞紙は或る一人の偉大なる英國人は正直の模範であるとするし、他の新聞紙は彼れを不正直だとする。新聞紙がかくの如き有さまである人民の狀態はどんなものだらうか？

讀者――あなたが說明して下さい。

主筆――かうした人民は屢々彼れ等の意見を變更する。彼れ等は七年每にそれを更へるといはれてゐる。これ等の意見は時計の振子のやうに振動する、そして決して不動ではゐない。人民は雄辯家または彼れ等に宴會や招待なぞを與へる人物に隨從する。人民がこうだから議會もそのやうなのである。彼れ等はたしかに非常に強く發達した一つの性質をもつてゐる。彼れ等は決して彼れ等の國を滅すことを許さないであらう。もし何人でもそれについて邪眼をもつて見る時は、彼れ等はその眼を引つこぬくであらう。しかし、それはこの國民がほかの德或は眞似べきものをもつてゐるといふことの意味ではない。もし印度が英國を眞似るなら、それは滅落するであらうといふことは、私の動かすことのできない確信である。

讀者――何ものにあなたはこの英國の狀態の罪を歸するでせうか？

主筆――それは何も英國民の特別の欠陷であるといふわけではない。この狀態は近代文明の結果である。指すべきはたゞ文明である。それのもとでヨォロッパの諸國民は墮落して日一日と滅落しつゝある。

二、文　明

讀者――さてあなたは、今度はあなたが文明といつてゐることは何を意味するかを說明しなくてはならぬ。

主筆――それは私がどう考へてゐるかの問題ではない。數多の英國の記者がその名のもとに蔽はれるものを文明と呼ぶことを拒絕する。多くの書物がその問題について書かれてゐる。諸團體が文明の害惡から國民を救ふ爲に組織されてゐる。一人の偉大なる英國人が「文明、其源因と救治」といふ名前の書物を書いてゐる。そこで彼れはそれを病といつてゐる。

讀者――なぜ吾々は一般にこの事を知らないのだらうか？

主筆――答へはきわめて簡單である。吾々は自分自身を攻擊する人をめつたに見ない。近代文明によつて、陶醉してゐるものは、文明を攻擊することを欲しない。彼等の注意はそれを支持するための事實と議論とを發見することである。そして彼れ等は、それが眞理であると信じながら、無意識的にそうするのである。人は、夢をみてゐながら、彼れの夢を信ずる。彼れは彼れの眠からさめた時に欺かれたことを悟る。文明の害毒のもとで働いてゐる人は、夢みてゐる人のごときものである。吾々が普通に讀むところのものは、近世文明の辯護者の書物である。勿論これ等の信者のうちにも非常に立派な、そして非常に善良な人さへもある。彼れ等の書いたものが吾々を催眠させる。そしてかくして吾々は、一人一人渦の中に落されるのである。

讀者――どうもそれは尤のように思はれる。でこの文明についてあなたが讀みまたは考へてゐることを何か話してくれまいか？

主筆——！先づ如何なる事物の狀態が「文明」といふ言葉によつて說明されてゐるかを考へてみよう。それの眞實の試煉は、そのうちに住む人民が肉體的の幸福を人生の目的とすることの事實のうちにある。吾々は二三の實例を擧げるであらう。ヨォロッパの人民は今日彼等が百年前におけるよりもよく建築された家に住む。これが文明の表徵であると考へられてゐる。さうしてこれが肉體的幸福を增進するの材である。昔は、彼れ等は皮を着て、彼等の武器として槍を使つた。今日は長いズボンをはいて彼れ等の肉體を美しく飾り、樣々の種類の着物を着、槍の代りに五つ以上も穴のある短銃を携へてゐる。もし從來多くの着物や靴などを着る習慣のない或る國の人民が、ヨォロッパ流の着物を着ると、彼等は野蠻から文明化したと想はれる。昔は、ヨォロッパでは人民は主として體力勞働によつて彼等の土地を耕した。今は蒸汽機關によつて一人が廣大なる土地を耕すことができる。そしてかくして巨大な富を積むことができる。これが文明の徵候と呼ばれてゐる。以前には極く少數の人しか價値ある書物を書かなかつた、今は誰でも書き彼の欲すものを印刷し、そして人の心を毒する。昔は人々は車で旅行した。今は一日四百哩若しくはそれ以上の速度で汽車に乘つて空中を飛び廻る。これが文明の最高度であると思はれてゐる。人間が進步するに從つた彼れ等は飛行船で旅行することも出來るであらうし、數時間のうちで世界のどの部分へでも旅行することができるであらうといはれてゐる。人間は彼等の手や足を使ふ必要が　くなるだらう。彼等はボタンを押し、そして着物が彼れ等のそばへ運ばれる。彼等は他のボタンを押すと、新聞が運ばれるであらう。第三のボタンを押すと自働車が彼等を待つてゐるだらう。彼等は美事に盛られた食物の樣々を持つだらう。凡ての事が機械によつて行はれるであらう。以前には、人民が互に相戰はんとした時に、彼等は、彼等同志で、その肉體の力を較りあつた。今は丘から、鐵砲の背後で働く一人の男によつて數千人の生命をとることができるであらう。これが文明である。以前には人々は彼等が欲した時にだけ戶外で働いた。今は數千の勞働者が集合してそして生活の爲に工場または炭坑で働く。彼等の狀態は獸のそれよりも惡るい。彼等は百萬弗長者の爲に最も危險な職業で彼等の職業で生命を賭して働くことを余儀なくされる。以前には人々は肉體的の力で壓迫によつて奴隸とされた。今は人々は金とそして金によつて買ふことのできる贅澤の誘惑によ

つて奴隷化される。今は昔の人間が夢にも想像しなかつた多くの病がある。そして醫者輩がその救治策を發見するために働きそして病院が増加した。これが文明の試練である。以前には、手紙を送るために特別の使者が必要でもあり、そして多くの費用がかゝつた。今は何人でも一片（ペニイ）の手紙によつて友達をわずらはすことができる。實に同じ一片で人々は謝意を送ることができる。以前には人々はその家庭でこしらへた麵麭と野菜とで一日二回か三回か食事をした。今は二時間每に何ものか食べることを求める。そして、それだから人々は外の何事をする暇を殆んどもたない。これ以上何ごとをいふ必要があらうか？これ等の凡てのことは、あなたは權威ある書物によつて確めることができる。これ等は皆な文明の眞の試練なのである。若し何人でもこの反對のことを言ふものは、彼が無知であることを知る。この文明は道德にも宗教にも注意を拂はない。それの信者は、彼等の仕事が宗教を說くことでないと靜に述べる。あるものはそれを迷信の成長であるとさへ考へる。他のものは宗教の衣を着け、道德を喋々する。しかし二十年間の經驗の後に、道德の名において不道德が屢々敎へられてゐるといふの結論に到達した。私の述べきたいところで、道德への誘引が存在しないといふことは、小供でさへ解るであらう。文明は肉體的快樂を增大することを求める。そしてそれはそうすることにおいてさへ、憐れむべきほどに失敗する。

この文明は非宗敎である。そしてそれは、ヨオロッパにおける人民に、そを信んずる人は半狂人と見えるような意見を與へた。彼等は眞の肉體的の力または勇氣を欠く。彼等は孤獨では殆んど幸福でない。家庭の女王であるべき女は、街をさまよひ、若しくは工場で奴隷となつてゐる。僅少の惠み物のために、英國における半百萬の婦人が、堪えがたいほどの狀態のもとで、工場またはそういつた制度のうちで、勞働しつゝある。

この文明は、人々がたゞ我慢してゐるなければならない、そしてそれが自壞するといつたものなのである。モハメットの敎へに從へば、これはサタンの文明であると考へられるものなのである。ヒンヅゥ敎ではこれを闇黑時代と呼ぶ。私はこのことについて適當な觀念を與へることはできない。それは英國民の生命の中に喰ひ入りつゝある。それは避けられねばならぬ。議會は眞に奴隷制度の表徵である。若しあなたがこの問題につゞて充分に考量したいなら、あな

たは同意見を抱くようになり、そして英國を非難することを止めるようになるだらう。彼等英國民は却つて私達の同情に値ひする。彼等は鋭敏な國民である。そして私は、それ故に、彼等はこの害悪を除去するであらうことを信んずる。彼等は企業的な、產業的な國民である。そして彼等の思索の方法は傳統的に不道德であるのではないのである。彼等は衷心悪るいのではない。それ故に、私は彼等を尊敬する。文明は不治の病ではない。しかし英國民は今日ではそれにかゝつてゐる國民であることを忘れてはならぬ。

三、何故に印度は滅ぼされたか

讀者――あなたは文明について多くを語つた――私をしてそれを充分に考へさせるほどに。私は今まヨォロッパ國民をどう扱ひ、またそれから何を避けべきかを知らない。しかし一つの疑問が直に私の唇に上る。若し文明が病であるならば、若しそれが英國を襲ふたとしたならば、何故に彼女は印度をとり、そして何故にそれを維持して行くことができるであらうか？

主筆――あなたの質問は私には答へるに六かしいものでない。そして私達は直にスワラヂ(自治)のほんとうの性質を討究することができるのである。何となれば私はまだこの問題に答へべきであることを承知してゐるから。しかし私はあなたの前の問題をとりあげるであらう。英國人が印度をとつたのではない。吾々がそれを英國人に與へたのである。彼等は、彼等の强さのために印度にあるのではなく、吾々が彼等を支持するがためである。私達はこの前提が維持され得るかどうかを見やう。彼等は最初に商業の目的で來た。會社バハアダル(註二)のことを回顧せよ。誰がそれをバハアダルとなしたか？彼等英國人はその時は少しも王國を建てるやうな企てはなかつた。誰がこの會社の職員を助けたか？誰が彼等の銀を見て誘惑されたか？誰が彼等の貨物を買つたか？歷史は吾々が凡てそれをなしたことを證據立てゝゐる。一足とびに金持ちになるために吾々は會社の職員を手を擴げて歡迎した。吾々は彼等を助けたのである。もし私が印度大麻(バング)を呑む習慣があるとすれば、そして商賣人がそこでそれを私に賣るとすれば私は彼れを、若しくは私自身を責む可きであらうか？商賣人を責めることによりて私はこの習慣を避けることができるであらうか？そして若し特種の小賣商人が除かれたとしても、他の商賣人がそれに代ることはないであらうか？印度の眞の奉仕者は**事物の根幹にまで行く可きである。若し婪食が私を消化不良にしたとすれば、私は水を責めることによつてそれを避**

けることの出來ないのはたしかである。病氣の源因を探査する人は眞の醫者である。そしてもしあなだが印度の病氣に對する醫者としての立場をとらうとするなら、あなたはそれのほんとうの源因を發見すべきである。

讀者――あなたのいふことは尤である。であなたの結論をもたらすためには私とあまりに多く論議すべきでないと思はれる。私はあなたのそれからの見解を知りたくてたまらない。私たちは今ま最も興味ある問題に對してゐる。で私はあなたの思索に追隨して行くことにとつとめ、そして私が疑ひを抱いた時にはあなたを制止しましよう。

主筆――私はあなたの熱心にもかゝわらず、私達が話を進めるに從つて、私達が意見の相違を來すであらうといふことを恐れる。それにもかゝわらず私はあなたが私をとめた時にだけ議論するでおらう。私達はもう既に英國の商人が、私達がそれを鼓舞したために、印度に足場を得ることができたといふことを知つた。私達の王侯が互ひに戰つてゐる時に、彼等はバハアダル會社の助けを求めた。そのコオポレーションは商賣にも戰爭にも通曉してゐた。それは道德の問題によつて、拘束されなかつた。それの目的はそれの商賣を擴張し、そして金を造ることであつた。それは私達の助けをうけ、そしてその倉庫の數を增した。この倉庫を保護するために軍隊を使役した。その軍隊を吾々もまた利用したのである。で吾々がその當時なしたことに對して英國人を責めるのは無用ではないだらうか？ヒンヅウとそしてマハメット敎徒とはまさに劍を拔いて戰はんとしてゐた。このこともまた會社にそれの機會を與へ、かくして吾々はこの會社に全印度の支配權を與へたところの狀態を創造したのである。だから、印度が滅ぼされたといふよりは、吾々が印度を英國人に與へたといふことがより多く眞實なのである。

讀者――そこであなたは今度は英國人が如何にして印度を支持することができるかに就て話して下さるでせうか？

主筆――印度を英國に與へた源因が英國人をして印度を支持させてゐるのである。ある英國人は彼等が奪ひ、そして劍によつてそれを維持してゐるといふてゐる。これ等の陳述のどちらもが誤謬である。劍は印度をもつてゐるのには無用である。吾々が獨り彼等を支持してゐるのである。ナポレオンは、英國民を番頭國民であるといふたとされてゐる。それは適當な記述である。彼等は彼等の商賣のために、如何なる領土でも持つのてある。彼等の陸軍と海軍とはそれを保護するために建てられてゐるのである。トランスバアルが左樣な目ぼしい物を申出でなかつた時に。逝けるグランドストーンはそれを持つてゐることが英國民にとつて正しいことでないといふことを知つた。それが見込みのあ　提供物となつた時に、そしてそれを拒絕したために戰爭が起されたのである　チェンバアレンは英國かトランス

パールのうへに保護權をもつゐたことを直ぐと見出した。何人かゞ大統領クルーゲルに月堡の中に金（ゴールド）があるかどうかを問ふたといはれてゐる。彼は、とてもそんなことはありそうもない。若しあつたとしたら、英國がそれを併合したであらうから、と答へた。多くの問題が、金は神であるといふことを記憶することによつて解決されるであらう。そこでわれ〳〵は英國人を印度において卑しい利己のために支持してゐることを會得する。われ〳〵は彼等の商賣を好み、彼等はその怜悧な方法でわれ〳〵を喜ばせ、そしてわれ〳〵から、彼等の欲するものを獲得するのである。このために彼等を責めることは彼等の權力を永久にすることである。われ〳〵は更にわれ〳〵自身の仲間爭ひをすることによつて彼等の勢力を强めるのである。若しあなたが以上の陳述に御同意なら、英國人は商業の目的のために印度に入つてきたことが證明されたのである。彼等はその同じ目的のためにそこに止まり、そしてわれ〳〵は彼等がさうすることを援助する。彼等の武器と軍需品とは全く無用のものなのである。英國人は彼等の商業のために日本と條約を結んでゐる。そして若し英國人が日本を支配することができるとしたら、彼等の商業はそこに大に擴大するのであらう。彼等は全世界を彼等の貨物の廣大な市場に化せしめようと望む。彼等がそうすることのできないのは眞實であるが、しかし責は彼等にあるのではない。彼等は目的に達するためにはあらゆる手段をとるであらう。

四、どうしたら印度は自由となることができるか

讀者――私は文明についてあなたの見解を尊重する。私はそれについて熟考しなければならない。私は急に受け容れることはできない。ではあなたは印度を解放することについてどういふ意見をもたれるか？

主筆――私は私の意見が急に受け容られようとは思つてゐない。私の義務はあなたの讀者の前にそれを提供することなのである。それ以上のことをするは、時間に任せなくてはならぬ。私たちは既に印度を解放することの條件について討究してきた。しかしそれをあまりに間接的にしてきた。私たちは今それを直接的にしよう。病氣の原因を除くことが病氣それ自身を除くことであることとは、世界に知られた格言である。同樣に、印度の奴隷制度の原因が除かれたなら、印度は自由となることができるであらう。

讀者――若し印度の文明が、あなたのいふごとく、最善のものであるとしたら、どうして印度の奴隷制度を云々す

ることができるであらうか？

主筆――この文明は疑もなく最善である。しかし凡ての文明が審判をうけてきたことを見なくてはならぬ。永久である文明は審判に堪える。印度の子孫が貧弱なことが見出されために、それの文明は危殆に瀕してゐる。しかしその力は振動に打ち勝つて生残するそれの能力のうちに見らるべきである。そのうへに、印度の全體が犯されたのではない。西洋文明によつて影響された人々だけが、奴隷となつたのである。われ／＼は世界をわれ／＼自身の憐れむべき一呎尺によつて計量する。われ／＼が奴隷である時に、われ／＼は全世界が奴隷化してゐると考へる。われ／＼が卑しき狀態にあるために、印度の全體もさうだと考へる。事實はそうではないが、しかしわれ／＼の奴隷制度を印度の全體に歸することもよからう。しかしわれ／＼が以上の事實を心得てゐるなら、われ／＼は、われ／＼が自由となつた時に、印度が自由であることを、知ることができる。そしてこの思想で、あなたはスワラヂの定義を知る。われ／＼自身を支配するのを知る時に、それがスワラヂなのである。だからそれはわれ／＼の掌のうちにあるのである。このスワラヂを夢のようなものだと思ふこと勿れ。これ故にそこには靜座の思想はない。私があなたと私との前に畫こうと思ふスワラヂは、われ／＼が一度それを悟つた時は、他人をも同樣にすることを說伏するために、われ／＼は終生の努力をするのであらう、といふようなものである。しかし斯樣なスワラヂは、各人によつて、彼自身のために、經驗されべきである。一人の溺れた人は、決して他人を救ふことはできない　われ／＼奴隷自身が、他人を解放すると考へるは單なる口實なのである。猪、あなたは、英國人を放逐することをわれ／＼の目的とすることの必要でないことを知つたであらう。若し英國人が印度化したとしたら、われ／＼は彼等と調和することができる。若し彼等が彼等の文明とともに印度に止まることを望むなら、彼等への餘地はない。かゝる事態をもちきたすのは、吾々の仕事である。

（註一）この論文は彼の有名な「印度自治」で最初に發表され、次で英國でこの四月末に發表され五月二十一日私の手に著したものである。（註二）バハアダルとは印度人が英國人を尊敬して呼ぶ名樣、普通大士と譯されてゐる。

（一九二三年五月二二日朝）

大正十一年三月廿一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）批評六月號
大正十一年六月一日印刷納本

（定價卅錢）

定價	
毎月一回一日發行	郵税
一部　卅錢	五厘
半年分　一圓七十錢	税共
一年分　三圓三十錢	税共

但し特別臨時號の價は別に申受く

▲送金は可成振替
▲郵券代用一割增

大正十一年六月一日印刷納本
大正十一年六月一日發行

東京市芝區三田一丁目二十六番地
印刷發行編輯人　利部一郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷所　川崎活版所

東京市芝區三田一丁目二十六番地
發行所　批評社
振替東京四五三四六

廣告	
半頁	十五圓
一頁	三十圓
二等一頁	四十圓
一等一頁	五十圓

大賣捌
▲神田　東京堂　上田屋……
▲京橋　東海堂　北隆館……
▲日本橋　至誠堂…………

大正十一年三月三十一日第三種郵便物認可
大正十一年七月一日印刷納本發行（毎月一回一日發行）

批評

……………（七月號）第四號……………

世界の階級運動と其主潮（講演）

室伏高信

社會主義運動は下火となつたか、それとも共產黨宣言の所謂審判の時間が切迫しつゝあるか並に世界の階級運動の主潮は？

＝內容＝

流行の回轉と勞働問題——知識階級からの解放と其意味——マークスの科學的社會主義——資本主義の最近の發達——エルフルト綱領以後——獨逸及び世界階級運動の現狀——ウンゲボイレン・メールツアール——資本家階級の反動——反動の理由——階級闘爭——階級闘爭への組織——國際社會主義の三潮流——第二インタナショナルとその「死滅」第二インタナショナルの三派——第三インタナショナルの成立——ロシヤ革命とその影響——ボルシエヴヰズムの颶風——第三インタナショナルの原理——無產者階級の獨裁——政黨の獨裁——一人の獨裁——レニン、ヂノヴヰエフ、カウツキー——「無產者階級への獨裁」暴力對暴力——タクチーク——共產運動の現狀——ヂノヴヰエフの說——ロシヤ革命の成果——その農民政策——ロオザ・ルクセンブルヒの批評——マークス主義と農民政策——ロシヤ革命の日和見化——共同陣營——共產黨宣言後七十餘年にほんとうのプロレタリヤの大衆運動——黎明

ジヤン・ジヨレスの死（小牧近江）

勞農治下の新藝術家（エリゼ二郎）

自由教育（土田杏村、手塚岸衞）

病中のレニンと彼の最近の二論文（室伏高信）

批評社

批評七月號目次

世界の階級運動と其主潮

この一篇は今年四月十九日慶應義塾理財學會大會においての私の講演の速記で、それを大體原形のまゝ掲げることさしました。（室伏高信）

一

私の申し述べたいと思ひますのは、勞働運動に關することであります。勞働運動もしくは勞働問題、若しくは社會主義の問題は、近頃餘りはやらなくなつたといふことであります。如何にも、知識階級の人、或は知識階級の一部の人の、玩具としての社會主義は、日本だけでなく、世界的に、確に流行しなくなつたと思ひます。社會主義流行の歴史を觀ますると、社會主義思想の勃興の最初の時代には、大抵の國で、社會主義思想や運動の魁をなし、若しくはそれを支持したのは勞働者ではなくて、却つて知識階級の一部の者であつたのであります。日本の過去數年の社會主義思想の勃興期若しくは流行期でも、矢張り同樣に社會主義が知識階級の思想的遊戯の具、若しくは賣名の具に供せられてきたのを見ます。諸大學の經濟學の先生などは、卒先して、社會主義の講釋をしたり、若しくは宣傳をしたり、なかには、私共第三者から見ると、あの人は少くとも内心は社會主義者であるかと思はせるような人が現はれ、或はあんな人までが矢張り社會主義者であつたかと思はれるような人までが、社會主義の問題を說いたりする事實を見たのであります。啻に經濟學の學者ばかりではありませぬ、平生は倫理學をやつてをるといふやうな人さへも、社會主義の問題が少し流行になつて來ると、俺はもう十年も前からマークスを研究してゐた、といふやうなことを言ひ出す人が現はれる。そして丁度、この流行が過ぎて、宗教の問題が流行するといふやうな時になつて、俺は既に三十年間

も一燈園の生活をして、あらゆる苦心慘憺して來たのだ、といふやうな人が現れて來る。そうなると、つい先頃まで俺は十年前からマークスを研究してゐたと言ひふらしてゐた人が、今度はそんなことは一切忘れてしまつたかのような、元のもくあみになる。流行が去りますと、今まで社會主義者らしく見えた人が、急に社會主義を攻撃したり、階級鬪爭を非難して又復社會政策の安全地帶に復活したり、俺はどうせブルヂョア階級に生れたんだ、俺が俺の財產を全部抛け出したところで、俺にはまで永年かゝつて養つた知識と思想が遺つてをる、だから俺はどうせブルヂョアで、ブルヂョアとして泣いたり、笑つたり、歌つたりするのが俺の任務だ、といふやうなことを勇敢に言ひ出す人が出て來るのであります。私は決して個人攻撃をするのではない。たゞそこに時代の傾向を見るのであります。勿論流行が遲れたときばかりではありませぬ、流行期に當りましても尙ほ且つ、社會主義に勇敢に反對したり、或は普通選擧は尙早である、といふやうなことを叫び出した、これも勇敢なる大學の先生も在つたのであります。しかしながら、社會主義が、斯の如き知識階級の一部の人々の玩弄物でなくなつたといふことは、果して、本統に社會主義が流行しなくなつたといふことの證據になるのでありませうか。平生の、日常の騷々しさといふものは本統の動きを意味するものでないと、私は思ふのであります。本統の時代の中心の動きは、天に坐する星のやうに靜かに遷るものである。知識階級の一部の人達が、社會主義は流行遲れであるといふやうに思つてをる間に、本統の社會主義運動は益々深身へ々々と向つて進みつゝあるのであると、私は信ずるのであります。私は世界を一年ばかり步るいてきたものでありますが、實は外國を一年や半年廻つて來たところで、何にも解る筈はないのであります。私は伯林に暫らく居ました。伯林は爲替相場の關係で日本の金を持つて行きますと、日本では隨分貧乏してゐるものでもあちらでは相當贅澤が出來ます。ビール一杯が二錢、シャンペン一本が一圓位ひですから、誰れでも日本人は一ケ月何萬マークといふ金を懷ろにして、シャンペンを飮み、ダンス場へ行き、所謂官能的陶醉ができるわけです。で酒を飮み、ダンスを踊り、そして大使館あたりで、若しくは在外の日本人から嘘と本統とを附けまぜて聽いてくる多くの旅行者に外國の事情の分らう筈はないのであります。だから、私もそうした洋行者の一人として烏許がましく人の前に出てお話するなどといふこ

とは、成るべく差し控へようとは考へてゐるのであります。ところが、その後、いろ〳〵のものを見ますと、外國に行くには、多少金が要りますから貧乏人は行けない、特別の場合の他は貧乏人では行けないので、やはり金持が多い、金持の大學の先生だとか、會社の重役だとか、若しくは資本家の新聞の記者であるとかいふやうな人だけが、主として外國へ見物に行くのであります。洋行者とは殆んど凡てブルヂョア階級の人たちであります。それが外國で酒を呑み、ダンス場へ行き、夜フリードリッヒ●シトラッセを徘徊し、そして日本大使館から、二、三の報告位い聽いて來ると、物識り顔に、新聞雜誌其の他のものに、自分の見てきたものとして、あること無いことを書いたり話したりする。またこゝ數年は凡ての洋行者が勞働問題の話をするのが恒例なので、誰れも彼れも分に應じて彼是と意見を述べる。それがまた近頃は揃ひも揃つて外國では勞働問題は流行しなくなつたとか、勞動運働は衰頽の時機に瀕してをるとか、自分達に都合のよいことばかり、それも本統の出鱈目なことを、眞しやかに言ひ觸らしてゐるのを見ます。私自身は、私が決して勞働問題について充分の知識があるとはいはない。また充分の研究をしてきたのでないことも明らかである。しかしこゝに私にとつて信じえられることは、私が他のブルヂョア階級の洋行者のように、自分の立場が、外國で見てきた勞働運動の話をするうへに、自分の良心を僞ることの必要のないといふ一點であります。

二

今日の勞働運動はいふまでもなく、今までの歴史上に於て嘗つて見ることのできないばかりでなく、私たちは今日において初めて本統の勞働運動、勞働者の大衆によつて行はれる本統の、嚴肅の、勞働運動を見ることができるようになつたと、私は確信するものであります。マークスが七十餘年前に彼の共産黨宣言によりまして、在來の所謂空想的社會主義に反對しまして、マークスの所謂科學的社會主義を唱道したといふことは、皆樣の御承知の通りであります。マークスの有名な階級分析はいふまでもなく彼の科學的社會主義の基礎をなすものでありますが、この社會階級に就てマークスは、資本主義がだん〳〵發達するに從つて社會は二つの相對する階級、マルクスの言葉を以て云へば

gegenüberstehende Klassen 即ちブルヂョアジーとプロレタリアートとの相敵對する二つの階級に分裂するものであるそしてこの社會がブルヂョアとプロレタリアの二階級に分裂するといふことは、マークスの科學的社會主義なるものの基礎をなすものであることは前に述べたとほりでありますが、このことは、マークスによつて學說は樹てられましたけれども、そしてマークスはこの社會階級の分裂のうへに彼の社會主義の基礎を置いたことによつて自分から科學的社會主義と言つただけれども、實際は、マークス・エンゲルスの時代には、まださういふ社會の現象を事實として經驗することは出來なかつたのであります。資本主義は、その晩年にエンゲルスが述べてをりますやうに、當時はまだそんなに發達の頂上に達してゐなかつたのであります。資本主義の本統に爛熟の域にまで發達しましたのは、歐羅巴等の比較的進步した國におきましても、極く最近の事實であります。

私は伯林に四ヶ月程滯在しました。その間に、獨逸社會民主黨の大會が、ゲールリッツといふ人口十萬ばかりの町で開かれました。私も社會民主黨の一代議士、日和見主義者として世界に知られるベルンシタインに紹介されてこのゲールリッツの社會民主黨の大會に出席して見ることとの機會をえました。凡そ二千人ほどの代表者が全國から集りました。この會義は二つの重要問題を決定したことによつて歷史的な會議であつたといふことができます。一つのことは有名なエルフルトの綱領を、新しい綱領に取り換へたことであります。一千八百九十一年に極められた、私共の誰でもよく知つてをる有名なる社會主義の綱領、歷史上逸することの出來ない有名な社會主義綱領に、エルフルト綱領が、三十年後において始めて改正されたのであります。その改正されたのはどういふ理由であるかといふの、いろ〳〵の理由があつたのだらうと思ひますが、少くともその理由の一つは、彼等自身が言ふております通り、この三十年間に、世の中の、政治的なり、經濟的なりの狀態が、一變したといふこと、即ち時代の大きな變化といふことであらうと思ひます。一千九百七年には、この獨逸では、小規模な工場の數が二百十七萬幾何といふものであつたのが、昨年においては、減つてきて、百八十萬幾何といふ數になつてをりますが、その反對に、大規模の工場といふものが非常に激增しまして、一千九百七年にはたつた九千幾何であつたのが、昨年には約三萬幾何になつてをります。そして

この大規模の工場に働いて居る勞働者の數は、一千九百七年に百五十萬ばかりであつたものが、昨年は約五百萬になつてをります。この事實によつて解りまする通り、最近十數年の間において、獨逸の資本主義は非常な勢をもつて發達したのであります。獨り獨逸ばかりではありませぬ、恐らくこの事實は、英國でも、佛蘭西でも、米國でも、其の他の各國において適用されるところの事實であらうと思ひます。資本主義は斯ういふ工合に非常な勢を以て發達をしてきたのでありますが、資本主義の斯の如く大なる發達といふことは、同時に、社會をしてマークスの所謂、二つの相敵對するところの二大階級に分れる、といふ事實を生み出さしめたのでありまして、この事實は、勞働者の種々なる組織團結、特に勞働組合員及び、勞働政黨員の數の異常な膨脹によつて、一番能く證明することができると思ひます。獨逸の例を取つて見ますと、エルフルトの綱領を極められた當時、社會民主黨に屬してをつた者の數は、十萬ばかりのものであつた、それが昨年になりますと、社會民主黨員だけでも百二十二萬人に上つてをります。獨立社會黨にしても、今年の一月ライプチッヒで會議を開きました際の報告によりますと、約三十萬人の會員を有つてをります。それから共産黨でありますが、これは一時五十萬人にも上つたことがありましたが、その後減りました。それでも尚ほ今日三十萬の數を維持して居るといふております。この他にまだ共産勞働黨といふのがあつて、これも三萬八千人の會員があるさうで、全部を合せると、二百萬に近い社會主義政黨員が、いまの獨逸に在る譯であります。勞働組合の方の數から言へば、その事實は一層顯著になるのでありまして、エルフルトの綱領が極められた即ち今から三十年前の當時には、獨逸の、勞働組合 屬して居つたものの數が、二十萬人ばかりしかなかつたのでありますが、それが昨年の報告によりますと、一千二百五十何萬人といふ大きな數になつて居るのであります。獨逸の今の人口が五千五百萬人あります。その五千五百萬の人口のうちで、勞働組合に屬するものの數が一千二百五十何萬人といふ多數に達してをります。これには無論婦人勞働者及少年勞働者の數も含まれてをりますが、要するに働くもの、勞働して生活するものの集團でありまして、親の脛を嚙つてをるもの、女髮結の脛を嚙つて居る亭主などは無論この中には入つて居りませぬ。それでこれに斯ういふ寄生蟲を加へまするると、——諸君の事を寄生蟲だといふ譯ではありませぬが——この

一千二百五十萬といふ數は、更に非常に大きな勢力であります。獨逸人口の大多數を包含する數であるといふことができると思ふのであります。この事もまた獨逸ばかりではありませぬ。英國の例を見ましても、勞働黨に屬しておるものが今日四百五十萬人あると計算されてをります。勞働組合に屬して居りますものも矢張り八百萬を超へて居ると言はれます。人口四千五百萬ばかりのうちで、勞働組合に屬してゐるものの數が八百萬を超えてゐるのであります。そこで世界の全體に就いて見まするると、勞働組合に屬してゐるものの數が、今日では、昨年末の統計によりまするると、三億何千萬の人口を有して居るところのこの西歐羅巴のうちに、四千萬人ばかりの勞働組合員があるのであります。そしてその四千九百何萬人、約五千萬人に達してゐるのであります。そしてこの大部分が歐羅巴、特に西歐羅巴で、三億何千萬大部分は矢張り工場勞働者でありますから、農業勞働者を除いての工場勞働者といふことになれば、殆んどそれの大部分のものが、西歐羅巴では、勞働組合に入つて居るといふ事實を、私達は見るのであります。斯の如く勞働組合員の數は西歐羅巴に於て最も多く、從つて進歩したる工業國におきましては、その人口の大多數が、組織せられたる勞働者の團體に屬してゐる譯でありますし、そしてこれが、資本家の階級に對抗する陣營のうちにあるといふことは、マークスが共産黨宣言を發表しましてから後、今日まで七十何年になりませうが、その七十何年の後に至つて、初めて實現せられたる事實でありまして、共産黨宣言にありますところの、所謂本統の巨大なる人口の多數が、即ち ungeheuren Mehrzahl が、無産者階級としての一階級に組織されたといふ事實は、今日初めて、私達の世界に實現されたのであります。マークスは科學的社會主義運動の先祖ではありますけれど、しかしながらマークスの科學的社會主義運動は、マークスの時代には實現せられずして、今日初めて、その實現せらるべき本統の時代に入つたのであると私は思ふのであります。決して、社會主義若しくは勞働運動が衰へたのではなくして、今日に至つて始めてそれが本統に實現せらるべき科學的成熟の時機に到達したのである、と私は信じます。

三

こういふ流れが一方にありますときに、世界の資本家階級がどういふ態度をとつてゐるかといふに、私は、今日世界の資本家階級のとつてをります態度程面白い、興味のある、愉快な態度はまづ無からうと思ふのであります。惟ふに慶應義塾は、今迄自由主義の看板をたてゝ今日に至つた大學であり、また政治的自由主義を標榜して福澤先生が建てられたものであると、私は思ふのであります。この政治的自由主義は、少くともアングロ・サクソンの世界では、一つの大きな流れであつたのであります。資本家は、少くともこのアングロ・サクソンの世界では、レーニンなどのいふような、暴力を以て勞働運動に對抗するやうな國家組織をなしてをつたといふことはなからうと思ひます。少くとも、之を革命前の獨逸、若しくはザーリズムの行はれた露西亞などに比べますと、英國や米國などの資本家が勞働者に對してとつた態度は、大に區別されなければならぬところと思ひます。ところが世界戰爭は、デモクラシーのための戰であるといふ大きな標榜の下に起されたに拘らず、事實においては、何百萬か何千萬かの犧牲を拂つて、デモクラシーを世界の地上から葬むるために戰はれたのである、と云つてもよいと私は思ふのであります。自由の祖國などと言はれてをつた英國において、若しくは自由を以て建國の基礎であるとまでいはれましたところの米國において、今日、自由主義は一條の、昔の夢となつて了つたのであります。特に私はいま勞働運動に對する場合に就て言てゐるのでありますが、勞働者の團結といふことは、從來、英國に於ても米國に於ても、可なり多く自由であつたのであります。諸君も御承知の通り、クロポトキンの如き無政府主義者は、英國を第二の祖國と思つて、自由に、彼の主義思想の宣傳を爲しえたのであります。多くの社會主義者乃至は無政府主義者が彼等の安全なる地位を求めたのは、英國であり、米國であり、其他の諸國であつたのであります。然るに、その英國におきましても、私は丁度去年の石炭坑夫ストライキの時あちらに行つてをりましたが、この炭坑夫のストライキが、ロイドヂョーヂ政府の暴力、軍隊の力及び警察の力によつて壓迫された、といふことができると思ひます。米國に於ても、勞働運動殊に平和なるストライキが、屢々機關銃によつて壓迫されてをるのであります。のみならず、戰爭中は言論の自由さへ束縛して、單なる一ツの演說をしたために、社會黨から大統領の候補者にまで擧げられた偉大なる、私共が本統に米國の產みだした最大の偉人であら

うと思ひますところの、ユーヂーン。デヴスのやうな人物までも十年間の懲役の宣告うけたといふやうな、實にアングロ・サクソンの世界に於て、初めて見る所の暴力政治が、資本家階級によつて實現されたのであります。獨逸などに至つては、私は既に雜誌「改造」に書いたことがありますが、オルゲッシ運動、これには會員が百五十萬位いあつて、それが一つの暗殺團だと言はれてゐるものであります。日本では、丁度私が外國に行つてをりますときに、安田善次郎が何者かに殺された、また時の總理大臣であつた原敬氏が刺客の手に殪れたといふやうな事實がありました。支配階級の人が殺されると、殺した者は「不逞鮮人」、「主義者」若しくは暴徒であり國賊であると言はれるのでありますが丁度そのとき獨逸では、例のエルッベルが暗殺されて了つた。その以前にもカール・ガーライス其他の共産主義社會主義の名士達が、オルゲッシ即ち支配階級の暗殺團によつて殺されてをるのであります。從來無政府主義と云へば、恰も暗殺團體であるかの如くに、吾々は子供のときから敎へられてきたのでありますが、今日ではそのあべこべに、資本主義と云へば暗殺團ではないかと思はれる位いに、資本主義の方から社會主義者の先驅者、指導者に對して盛んに暗殺主義を實行する傾向となり、獨逸、匈牙利、伊太利邊りでは特にその事實を見るのであります。伊太利のファシッチ運動といはれる暗殺團運動、若しくは暴徒運動も、實は支配者階級のために働くところの暗殺暴徒の團體運動なのであります。支配階級が斯ういふ態度を取るやうになつたのは、どういふ爲めであらうか、社會主義が流行らなくなつた爲めに斯ういふ態度を取るやうになつたのであらうか。

四

惟ふに今日まで、支配階級の諸君は、勞働運動が起つてきても、左程恐るゝに足らないものと考へてゐつた、勞働者のやるだけやらして見よう、あの貧乏な、無智な勞働者によつて、何事をか爲し得られんや、と高をくゝつてゐたのであります。こゝにブルヂョア・リベラルが榮えたのであります。ところが世界大戰の影響は、彼等の眼から見て無智であり無力であつたところの勞働者に、遽に擡頭し自覺するの機會を與へた。この戰爭は、勞働者に、勞働者とて

も一つの人間である、といふ人間としての自覺を與へずには置かなかつた。この大なる刺戟は、世界の勞働者をして、こゝに、彼等の階級として、革命的の階級としての自覺に導くに至つたのである、と私は思ふのであります。この自覺より起つたところの、大なる勞働者階級の革命的組織、及びその精神の前に、流石の支配若階級も自づからおびえざるを得なくなつた。支配者階級は自分等の足許を考へるに及んで、自づから戰慄しない譯には行かなかつたのであります。資本家がおびえ出したとき、即ち資本家の手が顫え出したときに、こゝに資本家階級は、今までのやうな日和見的の態度をとつてをることができなくなつたために、直ちに、自からの軍隊なり警察なりの機關をもちだして、勞働者の運動に向つて積極的の方策を講じなければならぬ必要に迫られたのであります。その結果が、今日世界に見るところの、支配階級の大なる反動的態度、暴力的階級爭鬪の手段に訴へるに至つたものであると私は思ふのであります。

言葉を換えていへば、今日の世界は、マークスが言ふてそしてマークスの時代には實現されなかつたところの、二つの社會階級、相敵對するところの二つの社會階級に分れた一時代となつた、といふことができると思ひます。あらゆるものが、この二大階級の鬪爭を中心として展開する、政治も經濟も、若しくは學問も藝術も、總てがこの階級鬪爭を中心として展開しつゝあるといふことは、現代の世界における嚴然たる事實であります。それはたゞ政治や產業の世界においてだけではない。人間生活のあらゆる部面において、階級鬪爭は今日の世界を支配する最高最大の力でありま す。こゝに世界を歩いて興味を感じた一つの例として新聞紙の一例を擧げます。新聞紙といへば公平なる立場から世の中を觀る、即ち社會の耳目であり木鐸であるといふやうなことを、自分自らもまた世間もそういふてきたのでありま す。しかし、今日の進歩した諸國では、新聞紙は最早や昔日の新聞紙であること許るされない。階級鬪爭の事實の前には、新聞紙の態度も非常に露骨になつたのであります。一般の勞働者若しくは社會黨の新聞紙も多數にありますが、それと同時に資本家側の新聞紙も、勞働運動に對して、從來取つてきたやうな中間的な態度をとらずに、飽くまで之に反對する、資本主義に都合の惡いことは一切載せない、勞働運動に對する惡口を主として滿載するといふや

うな態度が見えるのであります。要するに勞働者側の新聞と資本家側の新聞紙とが截然と分れて、その間に中間的の存在がないのであります。

この社會階級の分裂、この階級鬪爭の巖然たる事實を見て、或る者は後ろに引き下る、支配階級の一部のものは後退りをする、丁度暗いところで人間の影を見た犬が、何か恐ろしがつて後退りをしながら吠へるやうに、或る者は吠へながら後退りをするのであります。今まで社會主義者のやうな顔をして、ゐた者が、革かに社會主義を攻撃しながら後へ後へと退つてをるものを、私は、夜人の影を見て吠へながら後退りする犬のごときものだと思ふのでありま す。そして斯ういふ人がだん／＼出てくるといふことは、社會運動が本統の深みへと入つてきたことの證據である。と私は思ふのであります。

五

今日は世界の勞働運動のことに就てお話するやうになつておりますが、その總ての關係に亘つてお話するといふことは、無論不可能でありますから、そのうちで一番注目せらるべき國際社會主義の諸潮統について、大體のお話を致したいと思ふのであります。

國際社會主義の運動は、今日では大體三つの流れに屬してをります。それは御承知の通りに、第二インタナショナルと第二半及び第三インタナショナルであります。このほかに第四インタナショナルがあります。その第四インタナショナルの中にも、右翼派と左翼派――伯林を中心とするものとさうでないもの――との二つの區別がありますが數の上から見て、極く小さいものでもあり、またこのことについては雜誌「改造」に書いたことがありますから、そのことは今日お話いたしませぬ。

先づ、第二インタナショナルは、皆さんも御承知の通りに、一千八百八十九年に巴里で開かれたものであります。マークスの第一インタナショナルが亡びてから、永い間、國際社會主義運動はなくなつて居つたのでありますが、一千八

百八十九年に至つて巴里で復活したのであります。そしてこの運動は戰爭前までは相當の注目を受けておりまして、この國際社會主義の團體は、世界戰爭の始まる前には、一九〇七年にシユツツトガルトで、一九一二年にはバーゼルで會合し、飽くまで戰爭を未前に防ぐ爲めの全手段を講じ、萬一いよ〳〵戰爭が始つたら、その政治的經濟的關係を利用してどこまでも戰爭終結のために奮鬪しなければならぬ、といふ決議までしました、にも拘らず、實際にあの世界大戰が始まりましたときに、この國際社會主義團體は、ブラツセルの決議とチヨウレスの屍とを殘して、戰爭に反對の行動を取ることを爲しえなかつたのみならず、多くの社會主義者は相踵いで「愛國者」レニンの所謂ソーシャル・パトリオツトとなつたのであります。無論、この第二インタナショナルの中には、最初から、無政府主義者の入るのを拒絶排斥しておりましたけれども、それでも尙ほ、本統の統一のあつた譯ではなかつたので、そのうちには自然に、右翼派もあり、眞中のやつもあり、それから左翼の團體もあつたのであります。左翼の團體としては、獨逸のローザ・ルクセンブルヒの一派であるとか、また露西亞のボルシエヴ井キの一派であるとかいふものが是れで、第二インタナショナルの内部におきましても、そのためにいろ〳〵の紛紜や爭ひなどが存在しておつたのであります。いま申しましたシユツツトガルトにおける戰爭反對の決議といふものも、實は總ての人が本統の心から通過させたのではなくして、レニンが獨逸のローザ・ルクセンブルヒと牒し合せて、その當時の大立者であつたアウグスト・ベーベルを抱きこむで彼の決議をさせたといふのが事實なのであります。さういふ譯で、第二インタナショナルの中でも、自づから三つの流れがあつて、さうして互に相爭つてゐたのであります。表面では、また議論の上では、若しくは決議の文句の上におきましては、多くの場合に、中央派、若しくは左翼派が勝利を占めてゐる。換言すれば、多數の者が會議に集つて意見を鬪はせ、或は決議をするといふやうな場合には元氣のよい者が多くの場合に勝つのであります。しかしながら、本統の運動といふことにおいては、必ずしも左翼派の力によつて指導されてきた譯でもなく、またその指導力が中央派にあつた譯でもなかつたのでありまして、私は寧ろ、國際社會運動は、第二インタナショナルの時代では、少くとも、右翼派の修正派の諸君が實際力であつたらう、と考へております。

でいよ〳〵戰爭が始つたと

きに總ての社會黨は戰爭に反對するであらう、と或る人は考へてをつた。事實、レニンのやうな左翼派の人でも然う考へてゐるのであります。ヂノヴ井エフがレニン傳を書いておりますーーヂノヴ井エフがペトログラードで演說したのを本にしたのでありますが、それを見ると、あの大戰爭の始つたとき、レニンとヂノヴ井エフとは、墺太利のクラカウといふ市に逃げておつた、そして愈々戰爭は始つたが、此際多くの獨逸の社會民主黨員は果してどういふ態度を取るであらうか、とレニンとヂノヴ井エフと話し合つてゐた。レニンが言ふのに、自分は、獨逸の社會民主黨は屹度戰爭に反對するに違ひないと思ふ。そこでヂノヴ井エフは、自分はどうもそう思えない、と言つてゐた。ところへ獨逸から、社會黨の機關新聞であるところのフォルヴェルツがきたものだから、早速開けて見ると、獨逸の社會民主黨は政府の豫算に賛成した、といふ記事があつたので、その新聞をヂノヴ井エフがレニンに見せた、けれど、その新聞を見ても尙ほ且つレニンは信用しなかつた、これは多分獨逸政府が敵國を欺かんために出した間牒新聞だらうと、言つて相手にしなかつたといふ位いであります。これ位いに、この國際社會主義團體たる第二インタナショナルは、必ず戰爭に反對するだらうと、眞面目に考へられてゐたのであります。ところがいざ戰爭が始まると、戰爭に反對しないばかりか、みんなが、愛國者になつたり、大臣になつたりして了つた。ゲードがそうであり、ハインドマンがそうであり、ヴァンダアベルトがそうであり、英國のヘンダスンなどは、樞密顧問にまで成り上つたのであります。今迄資本家が狼のやうに怖れてをつたところの勞働運動の古い巨頭連は、進んで愛國者に豹變し、さうして坐り心地のよい柔かい椅子に腰をかけて、すまし込んで了つたのであります。そこで、第二インタナショナルは死んだ、本統に終焉を告げたといふ聲が起つてきたのであります。こゝに於てか、レニン、ヂノヴ井エフ、若しくは戰爭の初めから最後まで反對してゐたところの伊太利の勇敢なる社會黨、獨逸のスパルタクス・グルッペの一派、和蘭のトリビユニステン　此等の團體は　今までの國際社會主義の流れに反對の、本統のマークスの精神を承け繼いだ革命的勞働者の運動を起さねばならぬといふので、一つの小さいけれども力強い運動を起したのであります。その頃レニンとヂノヴ井エフとは、瑞西で、小さい一つの雜誌を出してをりました。それはゾチアアール・デモクラートいふ小さなもので、近

頃、その時分に書いたものを集めて「ゲーゲン・デン・シトローム」といふ名前で大きな書物にしております。これを見ますとよく解りますが、當時レニン、チノヴ井エフ一派の、國際社會主義の本流に反對して、さうしてマークスの精神をうけ繼ぎ、本統の革命的無産者の運動を起さなければならぬといふことに、非常に努力をしてをつたのであります。それが、最初の、具體的の會合として開かれたのが、御承知のチンメルワルトの會合で、千九百十五年の五月であります。それからだん／＼第三インタナショナルといふものが、一つの團體として纏まるやうな潮流になつて來たのであります。初めチンメルワルトで、第二回目はキーエンタルで開いたのでありますが、そのなかには、レニン、トロツキー、チノヴキエフ、セラチィ等を始めとして自づから左翼あり右翼あり、若しくは眞中で日和見をする人もあるといやうな有様で、決して意見が一致してをるといふ譯ではありませんでしたが、一千九百十七年に、皆さん御承知の通り、露西亞革命ができたときには、最早やこの運動は、一つの小さい、瑞西やそこいらの隅ッこの運動ではなくして、世界勞働運動の本流に流れてゐるところの大運動となるやうになつて來たのであります。實に、露西亞革命が起つてから數年の間は、世界の勞働運動は、露西亞革命を中心として展開したといふことが出來るだらうと思ふのであります。

マークス・エンゲルス逝いて以後、永い間、革命的精神に缺乏して來たところの世界の國際社會主義運動は、こゝに、露西亞革命によつて、彼等の心に革命の大なる感激を見出したのであります。そしてこの革命の偉大なる感激の下に彼等の不斷に心に描いてゐた美しき世界に向つての大なる奮闘を、お互に自覺するやうになつて來たのであります。即ち露西亞革命があつてから數年間に、獨逸でも、英國でも、佛蘭西でも、伊太利でも、殆んど歐羅巴の總ての國を通じて、露西亞革命のこの偉大なる感激は、勞働者の少くとも良き頭腦には浸潤したのであります。斯くして、今迄世界のの勞働運動の上に權威を有つてをつた多くの、古い々々巨頭達が衰へて、その代りに、若い生き々々とした、革命の血に燃ゆる人達が、勞働運動の前線に立つやうになつて來たのであります。

具體的の事實を言ひますと、獨逸では獨立社會黨が、一千九百二十年に、ハルレの會議で、可なり多數を以て、第

三インタナショナルに入るといふ決議をしてをります。佛蘭西でも一昨年の末に、社會黨が半分に割れて、多數のものが共産黨に入りました。英國の如きに於ても、昔マークスは、英國には社會主義を實現すべきあらゆる要素が具はつて居るけれども、たゞ一つ缺けてをる、それは革命的の精神である、と斯う言つたことがあります、その革命的精神に缺けてをるといふ英國に於てさへも、一時は共産主義の運動が非常な强烈さを以て全國に流れ渡つたのであります。伊太利に於ては、社會黨の全部を擧げて、その革命的指導者セラチイの指導の下に、盡く第三インタショナルに入らうといふ形勢を示したのであります。斯ういふ譯で、歐羅巴の勞働運動の大きな流れが、露西亞へ露西亞へと向つて流れてをつたといふことは、これが露西亞革命があつてから數年間における歐羅巴の勞働運動の顯著な傾向であつたと私は思ふのであります。

六

第三インタナショナルの目的とするところは、既に皆さん御承知の通りでありますが、要するに無産者階級の獨裁政治 Diktatur des Proletariats を實現するといふことが、他のインタナショナルの流れと異つて居る點であると言ひ得ると私は思ひます。第三インタナショナルでは「コムムニスチツシエ・インタナチヨナーレ」といふ機關雜誌を出してをりますが、其の第一號で、レニンは、第三インタナショナルの歴史上に於ける地位 Die dritte Internationale, ihr Platz in der Geschichte といふ題の論文を載せてをります。それによりますと、第三インタナショナルの目的といふものは、總ての日和見的の社會主義運動に反對する。總ての社會的愛國主義の運動に反對をする。彼等の目的とするところは、社會主義の永遠の理想、ewigen Ideale des Sozialismus を實現する所に在るのである。マークスの遺志を繼いで、而して今迄の日和見主義の代りに、今までの社會的愛國主義の代りに、無産者階級の獨裁政治を以て置き換へることを目的とするものである、と斯う彼は言つて居る。この言葉は、惟ふにレニン一個の見解ではなくして、第三インタナショナルの本統の精神を能く言ひ現したものであると思ふのであります。無産者階級の獨

裁政治を實現するといふことは、一方に於て今迄の國家――彼等の見解に從ひますると、今までの資本家の國家といふものは、單に資本家が勞働者を壓迫するところの、その壓迫の機關に過ぎなかつた、假令、民主的の共和國のやうなものでも、やはりそれは勞働者を壓迫するところの一の壓迫の機關、若しくは、彼等の言葉を借りて言ひますと、軍事的の獨裁政治、ブルジョア階級の軍事的の獨裁政治 militärdiktatur der Bourgeoisie の形式に過ぎない。故に、この國家機關を廢止して、そして其の代りに勞働者の獨裁政治、即ち勞働者の手にこの國家機關を握掌して、あべこべに、勞働者の手によつて、今までの支配者階級に對して壓迫を加へる形式にする、これが無產者階級の獨裁政治である。今までの、總ての資本家の國に於ける資本家階級のみのための國家の武力を解いて、即ち資本家階級の武力を解いて、そして總ての勞働者、總ての無產者階級の手に歸せしめ、あべこべに勞働者を武裝して、この武力により資本家階級を壓迫するのである。これが無產者階級獨裁政治の原理である、といふのであります。しかしながら、無產者階級の總てが獨裁政治をするといふことは、素より出來ないことで、實際には勞働者の多數が、然ういふ革命的精神によつて統一されてをるといふことも出來ないし、また勞働者の大多數が自ら獨裁するといふことも出來ないのでありますから、その實際の運用の上から言ひますと、勞働者階級の中で、少數の自覺した、革命的精神に充實したところの一團が組織されて、實際にはこの一團の獨裁政治が行はれるのであります。即ち共產黨を勞働者の間に組織して、その共產黨の手によつて獨裁政治をするのであります。だから、無產者階級の獨裁政治といふものは、同時に共產黨の獨裁政治、一政黨の獨裁政治 Diktatur eine- Partei となるのであります。

このことは、ボルセヴヰキ革命以來、カウツキーが逸早く言ふたところでありまして、この理論を、一番よく整つた形で紹介したのが、近頃雜誌解放に掲載された「階級獨裁と政黨獨裁」といふ論文であります、この論文は、昨年の八月に、墺太利の首府維也納で發行されてをります「デア、カンプフ」といふ一雜誌に、掲載されたものでありますが、要するに階級獨裁といつても、その實は政黨獨裁であり、從つてボルシエヴヰキの所謂階級獨裁とはマークスの所謂「無產者階級の革命的獨裁」ではないといふのであります。ところがこの階級獨裁即政黨獨裁といふことは獨り

「變節漢」カウツキーの言葉ではなくして、既に從來屢々ボルセヴヰキ自身が言ふてをることであとあります。第三インタナショナル執行委員長のヂノヴヰエフが前から言ふてをる事であります。本統の無產者階級の革命運動といふものは、無產者の間に一ッの前衞 Avantgurde を組織することである、そしてこの前衞の力、卽ち共產黨の力によつて全體のものが革命的勞働運動に從ふといふことに外ならない。だから無產者階級獨裁政治といふものは、また同時に共產黨の獨裁政治を意味するものである、といふことを言ふて居るのであります。レニンになりますと、更に一層進んで、本統の能率ある政治を施すためには、共產黨の獨裁政治すらも、實際に實行の出來るものではない。本統の獨裁政治は一人の獨裁政治でなければならぬ、といふて居るのであります。之を實際の事實にあてはめて言ひましたら、恐らくは、レニンの所謂獨裁政治、一人の獨裁政治といふことは、レニンの獨裁政治、と同じ意味になると私は思ふのであります。斯ういふ譯で、無產階級の獨裁政治といふものは、一人の獨裁政治にまで行かなければならぬことであらうと私は思ふのでありますが、またそれ故に、この無產者階級の獨裁政治といふものは、單に資本家階級に對してだけ行はるゝものではなくて、勞働者自身に對しても行はれる、といふ結果を來すのであります。これは日和見屋の一社會主義者の說でありますが、「ノイエ・ツアイト」といふ一雜誌に揭げられた一論文によりますと、露西亞無產者階級の獨裁政治といふものは、無產者階級の獨裁ではなくして、無產者階級に對する獨裁政治 Diktatur über das Proletariat である、卽ち無產者階級の上に與へられる所の獨裁政治である、といふことを言ふて居りますが、斯ういふ言葉までも非常に意味があると思はれます程に、無產者階級の獨裁政治といふものは、實際に於て、無產者階級に對する獨裁政治とまでならなくてはならないことである、と私は思ふのであります。

　そこで、この第三インターナショナルは、單に資本家階級に對して、斯ういふ暴力——彼等の言葉によりますと、暴力に對する暴力 Gewalt gegen Gewalt 武力に對する武力 waffe gegen waffe を以て資本家階級を威嚇して居るばかりでなく、勞働者階級の間に於ても、一ッの高壓的の專制政治をしなければならない、といふことになるのであります。さういふ立場から、この第三インタナシナルは、今迄の第二インタナショナルやその他の古い一派の勞働運動

の形に對しても、之を破壞しなければならないといふ立場になつて居たのであります。それ故に、第三インタナショナルにしても、その姉妹團體としての赤色勞働組合インタナショナルにしても、今迄の、古き政治的勞働團體なり、若くは古い勞働組合なりをブチ壞すといふことを以て、當面の目的としたのであります。さうして彼等の言葉で言へば、即ち彼の有名な二十一ヶ條に從ひまするならば、今まで世界の勞働運動の上に輝いて來た人々、例へば、獨逸のカウツキーであるとか、佛蘭西のロンゲー、英國のマクドウナルドといふやうな人達をも、盡く之を葬り去らなければならぬ、といふことまで要求してゐるのであります。

七

ところが、この運動はいま申しました通りに、露西亞革命の後數年、少くとも昨年の春まで、非常な勢、宛も燎原の火の如く、世界、少くとも歐羅巴の勞働運動を風靡したのであります。日本に於ても近頃露西亞が發表したものに見ますと、日本で共產黨に加つて居るものが八百人から九百人あるとのことであります。ところが露西亞のボルセヴ井ズムの運動は、昨年の春までは、世界の勞働運動を風靡するの勢を示したのでありますが、それを最後にして、今日では少くとも世界を通じて休養の時代に入つてゐると私は思ふのであります。ヂノヴ井エフが演說してをるところによりますと、これは一九一九年のことでありますが、ペトログラードで、革命に勝ち誇つて、ヂノヴ井エフが大勢の勞働者を集めて演說をした、その一節に斯ういふことがあります。そのときは、伯林で死んだカール・リーブクネヒトやローザ・ルクセンブルヒなどもまだ健在でありました。そして伯林の革命的勞働運動者を率いて、獨逸のブルジヨア的の共和國を顚覆せんとするの勢を示して居たときなのであります。ヂノヴ井エフが勝ち誇つた態度で、ペトログラードの勞働者たちに告げて言ひますのに、「吾々は既に、世界の最大國の一たるところの露西亞に於て、ボルセヴ井ズムの勝利を見た、今や、また、歐羅巴の最大國の一なる獨逸に於ても、將にカール・リーブクネヒトの獨裁政治が實現されようとしつゝある、だからレニンが全歐羅巴に號令するのときも、最早や遠くはあるまゐ。」それから三年を

經過しましたが、カール・リープクネヒトの獨裁政治が伯林に實現しないばかりでなく、却つてリープクネヒトもローザ・ルクセンブルヒも遂にシャイデマン内閣の毒刃に仆れたのであります。獨逸は露西亞に亞いでの共産主義の最も盛んな國であります。そして、バイエルンでは、曾つてクルト・アイスナアのような勝れた共産主義者が、こゝに獨裁政治を實現した事實があるのであります。しかしながら、この獨逸でも、最近一年ばかりの間は、共界主義の運動が餘り盛んであるとは思はれない。一時、一昨年の秋頃には、五十萬からの會員があると言はれました合同共産黨がロシヤから財的援助があるにかゝわらず、今日では三十萬の數があるかどうかと言はれてをるのであります。佛蘭西は一時社會黨の大半を擧げて共産黨に加はりましたけれども、またサンヂカリズムも分裂したのでありますけれども、今日では大體の形勢と分野とが固定の狀態に入つてゐるように見えます。英國や米國の如きは、元來資本主義の祖國であつて、共産黨は僅かに一萬人足らずの會員を有つてをるに過ぎない。英國では勞働黨に屬して居るものの四百五十萬人といふ數に對して、共産黨に屬して居るものゝ數が僅かに一萬人足らずであります。伊太利では一時社會黨の全部を擧げて、莫斯科の第三インタナショナルに加はるといふ形勢を示してゐたのにも拘らず、其の後、實際に同黨へ入らぬことに態度を決定したのであります。以上のようなわけで、爰一年の間は、共産主義運動が世界に於て固定的の狀態に入つたといふことが出來ようと思ひます。

しかし、之を以て、露西亞莫斯科の第三インタナシナルの運動が固定したといふことは出來るとしても、決して勞働運動そのものが衰えたといふことには成らない。

それなら一體何故にインターナショナルの景氣が悪くなつたのか、といふことにつきましては、極く最近、今年の四月に、第三インタナショナル執行委員長ヂノヴ井エフが演説してをるところによりますと、これは共産インタナショナルの罪ではなくして、エーベルト一派によつて行はれた獨逸革命失敗の結果である、世界の勞働者は獨逸の革命に非常に大なる期待を有つてをつたに拘らず、この革命が實現されて見ると、これは勞働者の革命ではなくして、却つて一つの大きな資本家――世界の表に於ける偉大なる一ツの富豪スチンネスを造り上げるために出來たところのブ

ルジョアの革命であつたのだ。そこでこの獨逸革命の失敗といふものが、世界の勞働者の革命的感激の喪失の原因となつたのである。またその結果、世界の勞働者といふものが日和見的になり、革命的精神が缺けて來て、皆改良主義に落ちて行くといふことになつたのである、といふやうな意味のことを述べてをります。惟ふに、このことも一ッの理由ではあらうと思ひますが、私は寧ろ；最も大きな原因は、露西亞革命の指導者達が、その革命の指導を過つたといふことに在らうと思ひます。露西亞革命の成果といふものは、惟ふに獨逸革命の成果といふものよりも一層大なる期待を以て、世界の革命的勞働者に感激を與へて居つたものと思はれるのに、この露西亞の革命は、露西亞のやうな百姓の多い國で一番重要なる農民問題に於て、最初から大なる失敗をしてをるのであります。このことは、資本家側が言ふだけでなく、また日和見的社會主義者が言ふだけでもなく、本統の革命的精神に燃えて居るところの人々も亦、同じやうな憂ひを以て見て居つたところであります。第三インタナショナルが始めて出來たときに、先づレニンが起つて挨拶をしたが、レニンはその挨拶に先き立つて、各國から集つて來た代表者の前で、「吾々は第三インタナショナルの會議を開く前に、そして革命運動のために尊い血を流した逝けるロオザ・ルクセンブルヒとカール、リーブクネヒトのために、敬意を表しようではないか」と皆に諮り、一同起立して敬意を表したといふことでありますが、そのロオザ・ルクセンブルヒの遺稿が近頃發表されました。「ロシャ革命」といふ小さい書物であります。この書物は、ロオザ・ルクセンブルヒがライプチヒの監獄の中に居たときに書いたものであります。そのロオザ・ルクセンブルヒは、昔から露西亞のことに通曉してをるし、ボルセヴ井キと深い關係を有つた、獨逸に於ける、また恐らく世界に於て最も勝れたる革命婦人であらうと私は思ひます。その小册子はもつと早く發表さるべきでありましたけれども、ボルセヴ井キの一派にとつて少し都合がよくないといふ譯で發表されないでゐたのが、今年になつてポール・レウ井の手によつて漸く發表される運びとなつたのであります。その發表の結果は非常な問題を伯林の諸新聞に惹き起しました。またボルシエヴ井キの側からも最近ヴァルスキーによつてその反駁論が發表されました。Rosa Luxemburgs Stellung zu den taktischen Problemen der Revolution といふ小册子がこれであります。ところでこのロオザ女史

の遺稿によりますと露西亞の農民政策といふものは全然間違である。土地を農民に與へるといふ政策は、たゞ農民の私有財産への欲望を煽ふる以外に何等の意味がないもので、これはマークス主義でないのみならず、マークス主義とは正反對の行き方をするものである、と種々なる事實を擧げて論評してをるのであります。私共は必ずしもマークス主義を奉ずるものではなりませぬ。しかし本統にマークスの精神を精神として、マークスの政策を政策として起つて居るといふことを彼等が若し標榜するものであつたならば、この農民政策は少くとも全然彼等の標榜を裏切るものであるといふことが出來ようと思ふのであります。去年の三月になりまして、彼等は、彼等の政策が全然失敗であつたといふことを裏書しなければならなくなつたのであります。所謂新政策と稱せられるものがそれであります。このことは露西亞のボルシエウ井キ政府が、全く露西亞農民、特に中産農民に降服したといふことが言ひ得るであらうと思ふのであります。しかしこのことは一部の御用學者がいふようにボルシエヴ井ズムが資本主義に降伏したることでは決してない。それはボルシエヴ井ズムが日和見派の社會主義への一後退を意味するものであるが、しかし、ボルセヴ井ズムが彼等の本來の立場を捨てゝ、そして日和見的の社會主義の軍門に降參したといふだけは、疑ひのない事實であらうと思ひます。これも矢張りヂノヴ井エフが先に引用しました演説の中に言ふて居ることでありまして、「吾々露西亞のボルセヴ井キ政府が新しい農民政策を取つたために、吾々ボルセヴ井ズムといふもの、即ち第三インタナショナルの根本とするところの主義と そして其他の日和見的の國際社會主義の取つたところの立場との間に於ける間隔が、非常に少くなつて來た。この隔りの非常に少くなつて來たといふことは、世界の國際社會主義を一ッの統一ある運動へと導くところの大なる理由となつたものである」と申してをります。即ちヂノヴ井エフの言ふところによりますと、露西亞のボルセヴ井ズムが日和見的の態度を取つたといふことは、世界の勞働運動統一のために非常に便利である、と非常に都合のよいことを言つてをるのでありますが、その言葉の裏にもあります通り、ボルセヴ井ズムなるものが、今迄の特色を失つて、日和見的若しくは古い社會主義に近い態度をとるものになつてきたといふことと、他の言葉でいふと、世界の社會主義運動が武力對武力、暴力對暴力の、性急な、手短かな、少數者によつての戰ひの代りに、プ

ロレタリヤの大衆によつての、長期の戰に入つたこの證據であるといふことができようと思ふのであります。

八

私は旣に世界の支配階級が最近數年の間に、反動的となり、暴力的となつたと申しました。しかし資本家階級が今や統一ある一ッの暴力を以て勞働者階級に向つて來た以上は、勞働者階級も、その運動に就て、今迄のやうに、小さい仲間同士の小競合をして居つてはならぬ、是亦、一ッの統一した運動として、この資本家階級に當らなくてはならぬといふ聲が、最近殊に高くなつて來たのであります。この結果の最も具體化されたのは、今年の四月二日から四日間に亘つて伯林で開かれた、三ッのインタナショナルの會議であります。この會議には第二、第三、第四の三派の代表者四十九人が集りまして、獨逸の國會議事堂、カイゼル王朝の下に建てられた獨逸國會議事堂の大會議室で、各國の社會主義者若しくは共產主義者が集つて會議を開き、世界革命の謀議を凝した、これが四月二日から六日にかけての四日間の會議であります。矢張りこの會議でもいろ〳〵な小競合がありました、けれども、資本家階級の攻擊的態度に對して、世界の勞働者は、一致協力、統一ある階級運動をしなければならぬといふことに就ては、皆意見が一致したのであります。そしてその結果露西亞ボルシエヴ井キ政府の承認、露西亞革命の擁護、若しくは八時間勞働維持などといふ大原則に就ては、從來互に殺戮し合つてきつた三つのインタナショナルが總て相提携して、一の勞働運動として統一した運動を起さなければならぬといふことを決議して、その實行委員として、三ッのインタナショナルから三人宛、都合九人の委員を擧げてをります。これが國際社會主義運動に於ける一番新しい事實であります。斯うい ふ譯で、マークス逝いて七十何年の本年に至つて、世界運動は、本統の大なる群衆、――マークスは今までの運動を少數者の運動 Bewegungen von Minoritäten と言ひ、プロレタリヤの運動を巨大なる多數の大運動と云つて居りますが、そのマークス・エンゲルスの所謂强大なる大群衆の大運動といふものが、今や世界の自覺した無產者階級の大群によつて、動かすことのできない力となつて、私たちの面前に、世界を徘徊する妖怪として、靜に、しかし威力をも

つて進んでゐるのであります。

私は最後に、私の一番愛誦してをりますウヰリアム・モリスの一句を引き度いと思ひます。「黎明と日とは來りつゝある、そして旗は進む。」旗は進む然り民衆の旗は、靜かに進んで行くのであります。（完）

イシドラ・ダンカン

（勞農治下の藝術家）

なぜイシドラ・ダンカンは露西亞へ行つたのだらう？　それは、本當の藝術家である彼女は、ブルジュア歐羅巴――破産した、皮を剝かれた、恥を知らない、憎惡と幻滅の片息をしてゐる歐羅巴を現に料理してゐる親分達が彼等の周圍に釀成した、此の雰圍氣の中にどうしても生活することが出來なかつたからだ。

――皆さんも御存じの通り、――イシドラ・ダンカンはいふ――倫敦も巴里も戰爭前と變りはありません。藝術上から見ますと、戰前既にそれは喧噪な大市場以上のものではありませんでした。今や物みな益々險惡に趨つてゐます。理想主義の最後の跡形も消え失せました。何處へ行つても、稍や精神的な、いい加減の娛樂として出來るだけ高く賣らうとする野心しか持つてゐない藝術が蔓延つてゐます。藝術家自身も、眞心も感受性もないやうな、公衆の犧牲となつて、愈よ道化役者に化して來ました。屈從を欲しない人は、苦難を甘んじて受けるか、一生日陰者で暮すかするより仕方がありません。

ダンカンが露西亞へ行きたいと云ふ希望を披瀝した時に、憤怒と驚愕の叫びが到る處から起つた。先づ初めに諸新聞は辭を揃へて、ダンカンが入露の希望を抱いてゐることを否認した。次に、彼等は此の希望を此の藝術家の敎すこ

との出來ぬ偏狹性に歸した。最後に、彼等は、歐米はもうイシドラ・ダンカンなどには用がないと云ふこと、また公衆の彼女に對する人氣が日每に墮ちるので、扨こそゐた溜らずに、此の藝術家は露西亞へ逃げたものであると、眞しやかに書立てて、讒誣中傷の限りを盡した。

これは皆な純然たる出鱈目に過ぎなかつた、そしてそれを書いた者こそ、よく其事情を承知してゐた筈だ。未だ露西亞行を決心しないうちのことだが、イシドラ・ダンカンは、米國と和蘭から、是非來て貰ひたいと云ふ馬鹿にうまい申込を受けた。彼女は例に依て、卒直に之を斷つた。クラシンはルナチヤルスキイに語つた、イシドラ・ダンカンは倫敦に於けるその告別興行の成否を稍や氣にしてゐたと。その前から、新聞紙は彼女の「ボルシエ井ズム」の爲に彼女に挑戰してゐた。夫にも拘らず、告別興行の當日、劇場は立錐の餘地もない程の盛況を呈した。間接に露西亞に向つて表白された此の熱狂した歡迎は、民衆が露西亞の勇敢なる偉業を稱揚したことを證明した。この歡迎に加はつたものが、特に上流階級であつたことは本當だが、併し――クラシンの語る所に依ると――平土間連も亦、桟敷に對して厚意ある寛容の態度を示したさうである。

露西亞に行かうと一旦決心したからには、勇氣がなければならぬ。イシドラ・ダンカンの友人や殊に露西亞貴族の亡命客たちは、莫斯科の街には、蛆のたかつた死屍が累累と血煙を立ててゐて、迚も一歩だつて進めるものではないと言つて、慘憺たる廢墟に歸した此の都をば彼女に描いて見せた。世人も亦、國境でもう彼女と彼女の生徒は强姦されるか、又はけもなく虐殺されるだらうと彼女に云つた。

此等の悲慘事に對して、ダンカン自身は、餘り信用を拂はなかつたけれども、彼女の生徒には非常な影響を及ぼした。卽ち三十人の生徒のうち、彼女と一緒に露西亞へ行く勇氣があつたものは、たつた一人であつた。

イシドラ・ダンカンの露西亞への旅立の目的は何であるか？ 彼女の主要な仕事は敎育上の境域にある。彼女は文部大臣及び外務大臣の同意を得て、露西亞へ來たのであるが、此の兩相は露西亞に新しい型の立派な學校を創立したいと云ふ彼女の提言を欣び迎へたのであつた。

イシドラ・ダンカンは體育及び美育を第一に重く見てゐる。而して常に此の敎育の範圍内に於て、彼女は革命家であつたのである。ダンカンに隨へば、大人の社會といふものは、虛僞と僞善に滿ちたもので、從つて醜穢見るに耐えぬものである。此の社會は、兒童を腐敗させずには置かない。兒童はそれ自身のうちに、正しい、明るい、眞の、從つて又、美しくて愛らしい生活を生活する爲の有ゆる天賦を享けてゐるものだ。兒童を優雅と高貴の資質を具有した、大いに敏感な人間に、隣人に對する同胞愛に溢れた人間に育て上げる爲には、此等の兒童の爲に、好ましい――それも物質的といふよりも寧ろ道德的見地から觀て――望ましい境遇を拵へてやればそれで足りると云ふことを、ダンカンは十人位或は百人位の兒童に就て、實證しようと一生懸命に努力した。ダンカンの實驗は、之を擧げて、着々成功の榮譽を擔うに到つた。ダンカンの學校を參觀した人人は、ルノワアルやロダンの如き偉大なる畫家彫刻家を初めとし、詩人も、敎育家も、皆異口同音に、イシドラ・ダンカンの指導の下に敎化された兒童が產み出したところの、自由の限りなき悅びと眞實の人間性との印象を物語つた。

イシドラ・ダンカンは既にづつと以前から敎育事業に携つてゐた。數十人の生徒は彼女の指導の下に敎育された。彼等の運命はどうなつたか？ 彼女は彼等を非常に敏慧な存在に仕立てたが、ブルジュアジイは彼等に藝人の地位しか與へることが出來なかつた。ダンカンが規範的人間の典型として考へた所のものは、一箇の見世物と成るに到つた。アブノオマルのブルジュアジイは、ノオマルの人間を指稱して「あの子を見ろ、實際不思議だ！」と云つた。そこであれが見られるなら、金を拂つても惜しくはないと云ふことになつた。ダンカンの敎子は今日非常に成功してゐる。併し此の成功は彼等を招待する者の手に歸する譯なので、寄席は喜んで彼等を招聘したであらうが、併し乍ら彼等は其の要めに應じない。今日に到るまで、彼等は高く留つてゐて、サンフオニイの演奏會の時か、一流の劇場に於てかでなければ舞踏しなかつた。けれども是は決してイシドラダンカンの目的ではないのである。

イシドラ・ダンカンの改革は、社會革命を俟つて甫めて可能である所の、學校の一般的改革の一部分と成らない限り、ブルジュア社會の毒廢の間に見えなくなる空想の小さな花に終ることは、火を睹るよりも明かだ。

巴里に於けるダンカンの最後の學校は、驚くべき結果を揚げ始めたが、此の學校はある大富豪に依て維持されて居た。此の大富豪は僕は、あれを新しい文化の中心にする積りだと、イシドラ・ダンカンに洵しやかに說きながら、善美を盡した裝飾を以て此の學校を圍繞した。それまでには、佛蘭西及び歐羅巴の第一流の人物が集まつてゐた。戰爭が勃發した、そして大富豪は見る見る自分の財產がぐらつくに違ひないと考へた。彼は先づ彼の學校を米國へ移轉に取掛つた。それから、或日のこと、最低金額の持參人に一枚の小切手を渡したまま、彼はあつさりと學校を見捨てて何處とも知らず姿を隱した。

イシドラ・ダンカンは、彼女の生活の此の多分に苦い經驗を語つてゐる。此の苦い經驗は彼女を現實にまで呼醒した。私人の資本を賴みとして、自分の思ふやうな改革を實行することは不可能だ、と云ふことを彼女は痛感した。

希臘政界の頭目、ヱニゼロスは彼女のうちに或種の希望を見出した。ヱニゼロスは、その奇怪な民族主義に於て、古代希臘(エラアド)の精華を復活させようとする觀念を熱愛した。ダンカンの方でも、古代希臘に對する其の讃美から、他の何人とよりも彼とよく意氣投合した。彼は陰謀に滿ちた其の政治制度を赫々たる圓光で飾り立て、ダンカンの援助を借りて、文化の古代形態を復興しようと云ふ計畫を懷いた。此の思想はイシドラ・ダンカンを蠱惑した。彼女は今日尚ほヱニゼロスの甚だ正當な、頗る深遠な金言を繰返してゐる。それは斯うだ、「社會改良と偕に生活に充分美を採入れることが出來る政治は、啻に現實の鬪爭に於ける勝利者である許りでなく、永久に歷史のうちに榮光もて生きながらへるであらう。」此の神聖な事業をして有終の美を收めしめることが出來る者は、ヱニゼロスではないと云ふことは明白だ。近代政治の操人形中の一操人形として、彼は操人形が失墜するやうに失脚した。

さうかうするうちに、露西亞の革命は益す發展して來た。イシドラ・ダンカンは眞心からかう信じた、露西亞に於ては、饑饉にも拘らず、生活必要品の缺乏にも拘らず、民衆の蒙昧、時局の絕對的重大、並びに國土の心を滅入らせる憂慮すべき事態の發生にも拘らず、それでもやはり、彼の國土に於てこそ、イシドラ・ダンカンがその全生涯夢みたやうな、収彼女が實際やつて見ようとした、兒童解放の事業を始めることが出來るであらうと。

ダンカンの夢想は頗る遠大なものである。彼女は五百人乃至一千人の生徒を收容し得る大規模の學校を創立したいと考へてゐる。併し乍ら差當り彼女は小數の兒童から始める準備をしてゐるが、此等の兒童は一般に勞農露西亞の敎師から敎育を受けることにして、唯だ美育と體育に關してのみイシドラ●ダンカンから敎をうけることにするさうだ。

――此等の兒童の爲に私が特殊の物質的條件を要求するものだ、と思つて下さるな、彼女は文相ルナチヤルスキイに云つた。貴下が莫斯科に於ける子供らに通例與へることにしてゐられると同じ丈の衣食を彼等に與へて下さればいいのです。最小量を以て、純潔にして優雅なる心情を培養することを私達は知つてゐます。一體食物に就ては……丁度いい折だから、私の身の上を御話しませうか。私の母は貧しい音樂の敎師でした。母は澤山の小供を生んだ上に、何の手蔓もなかつたものですから、私達は萬事にこと缺いて麵麭さへなかつたことがよくありました。私達が恐ろしく饑じかつた折や物悲しくて耐らなかつた時には、母さんは私達の爲にシウベルトやベエトオフエンの曲を奏して下さいました、そこで私達は此の音樂の調子に合せて踊りました。すると不思議にも空腹のことを忘れるのでした。是が私の藝術の由來です。私がなぜ飢餓を恐れないか、今はお解りになつたでせうね。

如何なる企圖であれ、殊に一見した處では、間の惡いやうに見えるかも知れない、斯樣にデリケイトな事業をして、其美果を收めしめようとすれば、勢ひ露西亞に於て彼等は非常な障碍に遭遇するに相違ない。けれども夫にも拘らず、イシドラ●ダンカンが幻滅の悲哀を感ぜざらんことは、吾吾衷心の希望である。此の計畫に就ては、有ゆる方面からルナチヤルスキイは熱心な賛成を得た。彼等既にその學校用の美はしい敷地を持つてゐる、で近日中に彼等は此の學校設立に取掛ることが出來よう。

併し此の時に當つて、ダンカンは無賴の徒に取捲かれてゐる。此の藝術家が露西亞へ著くか著かぬに、莫斯科のブルジユアジイの殘骸は群を成して駈けつけた。相場師と藝術商とは泡を吹いて彼女の前に殺到した。或る連中は文相の處へやつて來て、イシドラ●ダンカンは慥かに全く常軌を失してゐると告げた。何故?――と文相が彼等に問ふと――なぜつて、そりやあ、彼女はもう踊りたがらないぢやありませんか――と彼等は答へた。而してこれは本當の話！

だ！ダンカンは此程の申込を片つ端から拒絶してゐる。色々の「有利な申込」にも拘らず、彼女は慈善興行にすら出演することをきつぱりと斷つた。彼女は、誰も自分の座席を拂はないやうな、又觀衆が出來るだけ勞働者であるやうな會堂に於てのみ舞踏することを欲してゐる。

そこで勞働者の方でも、彼女を一人の友人として認めるやうになつた。ルナチャルスキイは最近勞働組合から三つの申込を受けたが、その内には鐵道從業員の組合がある。皆んなは勞働者の爲に無料演劇を出來るだけ早く組織することを文相に要求してゐる。此等の演劇は云ふまでもなく、開設されるだらう。然し投機師は相變らず、自分を賣ることをいやがる人を氣違ひだと稱して非難することを止めない。彼等は憤慨の極に達して、本物の毒蠅の如く、ダンカンの耳朶の中に彼等の毒卵を置いて行く。嚮に英吉利のブルジュアジイがそれでダンカンの露西亞行を思ひ止らせようとした、其同じ中傷が露西亞でもその運動を續けてゐる！「此等の怪物、此等の暗殺者、此等のボルシエヴイクなんぞに何が出來るものか、彼等には此の學校を創設することは出來まい、彼等は悉皆お前さんを騙し込んでゐるんだよ。」勿論ルナチャルスキイには、彼等が彼女に甘く取入つて置いて、そこで、此の大藝術家に革命が呪ふべきものに映るやうに仕向けようと目論むだらうとは分り切つてゐたので、彼は豫め此種の有ゆる無頼漢に對して厚意を持たぬやう、ダンカンに注告して置いた。

若し夫れダンカン自身に於ては、今のところ共產主義の戰鬪的精神を以て鼓舞されてゐるが、此の精神からして、無意識には出るが併し思遣りの深い親切な微笑が時たま顏を出すことがある。それだから、彼女の友達の一人である、露西亞の最も偉大なる一畫家と語つた後、そして彼の悲嘆を聽いてから、彼女は自から進んで彼に云つた。

「貴下は今かう云ふヂレンマの前に立つてゐられると私は思ひます、それは自殺して人生と別れを告げるか、さもなくば、共產主義者となつて新生を開拓するかです、そのどちらかを選ばなくてはなりませんよ。」——露西亞の大畫家は途方に暮れて默つてゐた。また是は他の折の話であるが、ある家族の饗應に招待されたダンカンは、彼等のブルジュア的虛飾に對して、また彼等の行爲と彼女が想像に畫いてゐた彼の燦然たる理想との間の矛盾に對して、露西亞

の共産黨員を叱責するの手段を見出した。ナイイヴではあるかも知れぬが、實際正しい此の忠言のうちに、如何に多分の自然の魅力が含まれてゐるかを、露西亞の同志にして理解しなかつたならば、恐らく一切の事業と雖も畢竟卑しい汚行に終るであらう。何故といふに、平凡ブルジュアジィの風習が吾々の生活の有ゆる形態に染込んでゐるからだ。新興露西亞の人人は彼等の生活をより美しいものにする餘裕がなかつた。若しイシドラ・ダンカンが彼等と手を携へて、此の神聖な仕事に取掛り、その實現に勤しむならば、彼女は無限の財寶を彼等の爲に創造することになるのである。

イシドラ・ダンカンの藝術に就て極く簡單に書いて見よう。彼女は確かに通俗の舞踏家ではない。彼女は自分の藝術を崇拜してゐるが、それは優美なジエスト（即ち英語のジエスチユア）と美的な肉體運動の頌讃である。「オペラは私のツァリスムです」と彼女は云ふ。而して獰猛な勢で、老紳士や低腦な道樂息子のために作られた飽滿階級のバレエと抗爭してゐる。ダンカンは「ジエストの女王」といふ渾名を頂戴してゐるが、彼女のジエストのうちで一番美しい奴は、そして最大の喝采に値する奴は、それは——彼女の眼先へ走馬燈のやうに廻轉して見せた有りと有ゆる慘狀にも拘らず、彼女が敢て露西亞へ入つたといふ——その最後のジエストと私は斷言する。

筆を擱くに當り　昨秋この大藝術家が莫斯科から佛蘭西の一同志に寄せた書簡を玆に掲げよう。それは大へん興味のあるものだから、その全文を譯載する。

「彼自身より更に高貴なるものを創造せんと欲し、斯くして寂滅する者を予は愛す。」
是の如くツラトストラは語れり…………

フリイドリッヒ・ニイチエ

親愛なる同志よ、

貴下は莫斯科の印象を私から待ち望んでをられるでせう。エイチ・ジイ・エルスや其他の此處へ來た文學者のやうに、私は貴下に政治上の感想を語ることは出來ません。此等の政治問題に就ては全く無知である私は、貴下に藝術家としての私の印象しか與へられません、而も此等の印象も論理的といふより感覺的なものです。有ゆる自然の子、就中小供と藝術家の友には、第六の官能があつて、之に據て私達は一個人や人間の一集團や或は一都市の心理をよく洞

祭することが出來ます。此の第六官が私の全生涯を藝術に捧げよと私に命じたのです。その聲を聴いて、私は藝術が商賣根性に依て破滅に瀕した歐羅巴を去つたのです。また此の第六官に據て私は莫斯科を占つて見るのです。何故かと云ふに、人人は自分の周圍に物質的な事實を目擊しながら、此處に而り起つてゐる事象を判斷することが出來ないのですもの。眼光紙背に徹する底の眼を以て注視しなければなりません。と申す譯は、此處に表面上存在するものは悉く瞬時の假相に過ぎません、そして眞理は國土の魂の衷深く秘められてゐますから。此の偉大な團體精神にこそ奇蹟が現れたのです。

　此處露西亞では、二千年以來はじめての、人類に對する〇〇〇〇が行はれてゐると私は信じて疑ひません。それを理解するには、私達は餘りに同時代に住んでゐます、それで〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、人類が確乎不拔の一大進歩をしたことを理解するものは、恐らく唯だ百年後に生きる人人だけでせう。〇〇〇は奇蹟の都です、そして〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇基督磔刑の受難と同じものになるでせう。人間の魂は基督が夢みた以上に、美しい、高潔な、また偉大なものでせう。

私は繰返して申します、私達はそれを理解し得ない程も一切の事件に近く居過ぎるのだと。

若し私達が基督と同時代に住んでゐたとしたら、何にも分らなかつたでせう。私達はみすぼらしい弟子達に附き纒はれた一人の平凡な人間を見たことでせう、そして十字架上の彼の悶死は、陳套な最後の如く私達には見えたでせう。

　併し乍ら、精神的眞理は全く表裏ではありませんでしたか。

茲に而り遂行されてゐる事業の精神的眞理、私はその輝く幻影を遠く將來に望み見る。ベエトオフエン、ニイチエ、それからヲオルト・ホ井ットマンの豫言は實現されるでありませう。〇〇〇〇〇呱呱の聲を擧げた解放の大濤に引寄せられて、全人類は兄弟になるでせう。

私の魂が受取つた、〇〇〇〇〇〇〇〇〇煙のやうに立上る豫言の聲が私に手渡した傳言は以上の通りです。

私が貴下に傳へようと思つた宣託は、以上の通りです。

たゞ世界の〇〇〇者の一致團結があるばかりです、ただ未來の文明を擁護し得るランテルナシオナアルがあるのみです。（イシドラ・ダンカン（エツゼ二郎）

自由人の手帳

病中のレーニンと彼の最近の二論文

レニンの病氣や、暗殺やについては、今まで私たちは幾度欺かれたかわからない。しかし彼の死報や重態說や、傳へることによつて、ブルヂョアの諸新聞がその信用な公衆の前に自壞し、そしてそれがブルヂョアのための合唱機關であることを證據立てた點において、幾度か聞かされたレニンについての嘘報も、決して無駄事ではなかつたのである。それにしても今度のレニン病氣說だけは、ブルジョア新聞だけではなくて社會黨の諸新聞も、或は共產主義の諸新聞も報道してゐるのであるから全然無根據であるといふわけではない。セマシコがこの五月にモスコウの勞兵會で、報告したところによると、レニンの病氣の源は、一九一八年に彼が兇漢から襲はれたことがあつたが、その際彼の體內に射込まれた二つの彈丸である。その彈丸を今年の春手術して拔きとつたとのことで、且つセマシコの報告によると手術後の經過は良好で、今年の五月には、彼 國務をとるに差支のない健康體にまで回復したとのことである。それがこの頃になつてまた〳〵重病說が傳へられてきたのである。果して重病であるかどうか、また例のブルヂョア新聞の「希望雜報」なのであるか、も少し待つてゐるのほかはない。

一

昨年十一月のロシヤ革命紀念祭は、いろ〳〵な意味で重要な意義のある紀念祭であつた。一つにはロシヤ革命が、ボルシエヴ井キの手に移つてから四ケ年の間、ボルシエヴ井キの權力が微動だもしなかつたといふことである。資本主義の諸國家が、西から東から、相呼應してこの無產者國の芽生えを無殘にも踏みにぢらうとしたあらゆる努力、陰謀、封鎖、戰爭が仕向けられたにもかゝわらず、よく時局の艱難に堪えて、內には無知なロシヤの農民や、若しくは反革命の各種の續き起る運動と戰ひながら、よくその政權を維持したことの記錄として、私たちはロシヤ十一月革命の四年の紀念祭を見ることができるからである。レニンがこの革命紀念のために發表した二つの論文「ロシヤ革命四周年紀念日」（N. Lenin: Zum vierten Jahrestag der russische Revolution）と「現在及社會主義の完全なる勝利の後における金の意義に就て」（N. Lenin: Ueber die

Bedeutung des Goldes jetzt und nach dem vollen Siege des Sozialismus) は、以上の二つの意味において、ロシャ・ボルシエヴ井キ革命の第四周年が産み出した最も代表的な精神と理論とである。

二

「われ／＼が今日の偉大な日から遠ざかれば遠ざかるほどいよ／＼ロシャにおける無産者階級の革命の意義が明らかとなり、總括的にわれ／＼の勞働の實際上の經驗をいよ／＼深く考へることとなるであらう。」レニンはその「ロシャ革命四週年紀念日」の冒頭にこう書き初める。

レニンに從へばロシャ革命の意義と經驗とは要するに次のような點に歸着する。彼曰くロシャ革命の直接且つ近接の職分はブルヂョア民主的職分であつた。中世紀の遺物を廢し、ロシャからかゝる野蠻，かゝる恥辱を消滅させて、各々の文化と各々の改良との障碍を掃除することであつたと。

また曰く、われ／＼はこの掃除を、百二十五年前のフランス革命よりももつと決定的に、迅速に、大膽に、有効に、廣大に且つ深く成しとげたことを誇るべき權利をもつてゐるものである。……われ／＼は獨りブルヂョア民主主義革命を終局にまで成就したのであると。

レニンはロシャ革命の最初の事業と意義とを實にかくのごとくに解してゐるのである。即ちそれをもつてブルヂョア民主主義革命であつたし、またブルヂョア民主主義革命を最後まで完成したところにロシャ・ボルシエウ井キ革命の第一に誇るべき點があるといふのでゐるてある。

それならブルヂョア民主主義革命とは何を意味するか？

レニンに從へばそは中世紀の遺物、奴隷制度、封建主義から國の社會關係（秩序、制度　を淸めることである。もつと具體的にいふと〇〇や、階級制や、土地所有や、土地使用や、婦人の地位や、宗教や、民族性の壓迫や、これ等のものの大掃除をすることを、即ち封建主義への「アウギアスシテルレ」を實行することなのである。

彼曰くボルシエヴ井キはその政權を掌握してから一週間に、即ち一九一七年十一月七日から翌年一月五日の憲法會議解散に至るまでに、ブルヂョア民主主義者（カデト）や、小ブルヂョア民主主義者（メンシエヴ井キ）及び社會革命黨）の八ヶ月の政治よりも千倍も餘計に、この大掃除をなしとげたのであると。

三

しかしレニンはボルシエヴ井キ革命が單なるブルヂョア民主主義革命であることに滿足してゐないことは勿論である。彼のいはんとするところは、ロシヤ革命の目標がブルヂョア民主主義革命にあるといふのではなくて、その革命の直接の職分がブルジョア民主主義革命であつたといふのである。

彼に從へばブルジョア民主主義革命の成果を保障するためには一歩を進めねばならぬ。卽ちこのブルヂョア民主主義革命を「主なる且根本的なプロレタリヤ革命の「副産物」(ネーベンプロデウク)」として考察しなくてはならぬ。われ〳〵は常にいふ、改革とは革命的階級鬪爭の副產物であると。ブルヂョア民主主義的改革は——われ〳〵が常に言ひもし實行によつて知つてもゐた——プロレタリヤ卽ち社會主義的革命の副產物であると。(Reformen, sagten wir immer, sind ein Nebenprodukt des revolutionären Klassenkämpfes. Bürgerlich-demokratische Reformen—sagten und wiesen wir durch die Tat,—sind ein Nebenprodukt des revolutionären der proletarischen, d.h. der sozialistischen Revolution.)カウツキーや、ヒルフエルデイングや、マルトフや、チエルノフや、ヒルキツトや、ロンゲーや、マクドウナルドや、チユラチーやその他の第二半インタナシヨナルの諸君はこのブルヂョア民主主義革命とプロレタリヤ社會主義革命との間におけるこの種の交互關係を理解することができないのである。前者は後者のうちに生れる。後者は經過のうちに前者の問題を決定する。後者は前者の事實を確固にする。レニンはこういつてゐるのである。

四

レニンはこの論文の最後で、ロシヤ共產政府の經濟政策に論及してゐる。そは今日まで繰返して論じてきたところでもあり、且つ彼が「個人的利益」の必要を說いたり、若しくは「われ〳〵は何よりも第一に且つ如何なる價を拂つても生產を高めることを成就しなくてはならぬ(Wir müssen vor allem und um jeden Preis die Hebung der Produktion erreichen.)と論じてゐるあたりは、彼のボルシエヴ井ズムが本質的に日和見化することの止むなき事態と、その事態の獨裁權のものにボルシエヴ井ズムの日和見化の事實を最も雄辨に語るものである。がしかし

彼がこの論文の最後で說いてゐるやうに（寧ろ訴へてゐるやうに）貧困、飢餓、衰頽、——過渡期における苦惱の如何に艱難なものであるかは、彼の凡ての敵が、同情の眼で見なくてはならないところである。（註一）

（註一） Russische Korrespondenz, Nr.10—11, S.849-86

五

レニンの日和見的轉回は「現在及び社會主義の完全なる勝利の後における金の意義について」の論文のうちで、一層卒直に述べてゐる。彼曰く、この大革命を紀念する最善の方法は、それが尙ほ解決しない問題に目ざすことである。就中時機に適し且つ必要なことは、革命がまだ解決しない「根本問題」が存在する時に、そして人々がこれ等の問題の解決に對して何等か新らしいこと（從前の例の見地からして新しいこと）を學なばなくてはならぬ。新らしいこととはわれ／＼の革命が目下その經濟的建設の根本問題において「改革的」漸進的、愼重熟慮的な迂廻方法への必要を把握することである。卽ちレニンはその革命紀念祭において、共産主義の「新方針」(Neuorientierung)理解することの必要を先づ說いてゐるのである。

ところがこの「改革的」へと「新方向」をとつて進むことは、レニンにとつては「立場の放棄」(Aufgeben der Positionen) でもなく、「破産の白狀」(Eingeständnis des eigenen Bankrotts) でも、またそれに類似のことでもない。そしてボルシエヴサキの敵としての「封建主義者からメンシエヴ井キ」までの諸黨派がこの問題について一致の態度をとつてゐることは、たゞこれ等の諸政黨がプロレタリヤ革命に面して、（エンゲルスが一八七五年及び一八八四年にベーベルへの手紙のうちでいつてゐるとほりに）一つの反動的群衆」となることの證據であるに過ぎないのであると。

六

レニンは續いていふ、一九二一年の初めに至るまでの三ケ年間における彼等の活動の計劃（方法及制度）は、大工業を改造し、それの農民農業との直接交換を導き、そして同時にそれの社會化を實現することを望んだことであつた。大工業の改造のために、われ／＼は農民から、強制徵發の方法によつて、食糧と原料とを取り上げることを望んだのである。このことは新らしい社會的及び經濟的秩序を

もつて代へるために、古るき狀態を直接且つ完全に絶滅するの意味で、一つの革命的方法であつたのである。それが一九二一年の初め以來、この制度、この方法、この取扱方法に代へるに、全く異つたもの、革命的性質の活動制度をもつてすることゝなつたのである。われ〳〵は古るき社會的及び經濟的秩序、商業、小經濟、小企業、資本主義をこのうへ破壞することを欲するのでなく、却つてそれを愼重且つ漸進的にわれ〳〵が掌握するか、若しくはそれの再興の割合に從つてだけ、國家的管理のもとに置くことの可能を支持しようとするのであゐ。

だから「以前の革命的破壞に比べてこの戰術は改革的である」(Im Vergleich zur früferen,revolutionären Einstellung ist diese Taktik reformisch.) レニンはかういつてゐるのである。

しかしそれはレニンに從へば革命の誤謬であつたことの承認でもないし、また革命的方法の失敗が吟味された後に改革的方法に宗旨變へをしたといふの意味でもない。

レニンに從へば、眞正の革命家は、革命に醉ふて、若し「偉大なる勝ち誇れる國際的」革命が、如何なる狀態、如何なる場所においても、無條件にその凡ての問題を革命的手段をもつて解決することのできるものであり、またそうしなくてはならぬものと決めてかゝるとすれば、たゞ滅落あるばかりである。

七

レニンに從へば、ロシヤ革命が完全になしとげてきたのはブルヂョア民主主義的方面であるが、それのプロレタリヤ的、即ち社會主義的の仕事は三つの要項に分れる。

一、帝國主義的世界戰爭からの革命的脫退(Das revolutionäre Ausscheiden aus dem imperialistischen Welkrieg)

二、無產者階級獨裁政治の實現形式であるソヴヰエット權力の創造 (die Schaffung der Sowjetmacht, der Verwirklichungsform der proletarischen Diktatur)

三、社會主義秩序の基礎の經濟的建設 (der wirtschaftlicheAufbau der Grundlagen der Ordnung)

の三項目がこれである。このうち第一項目は完全になしとげた。第二の項目はその中道にある。即ち「ブルヂョア民主主義的議會主義の時代が終りを告げ、世界歷史の新章、プロレタリヤ獨裁政治の時代が始まつたのである。」がソヴ

井エット權力とプロレタリヤ獨裁政治の凡ての形體の終局的完成はたゞ世界各國一列の仕事であつて、一國だけ到達されるものでない。ロシヤではまだこの點について完成されないものが甚だ澤山にある。第三の項目については「最も重要なこと、最も主要なことは、まだ終結されてゐないのである。それは尙ほ依然ロシヤ革命の主要任務である。そしてそれは理論上からも實際上からも、若しくはロシヤ・ソヴ井エツド社會主義聯合共和國の立場からもインタナショナルの立場からもそうなのである。

八

そこで困難なのはこの「最も主要なこと」を如何にして完成するかの過渡的形態のうへにあるが、レニンに從へば「商業は、プロレタリヤ國權、指導的共産黨が全力を擧げて固めなくてはならない、一九二一年から二二年へかけてのわれ／＼の社會主義的建設事業の過渡的形態における、事件の歴史的連鎖中のその鎖環なのである。」そして若しこの鎖環さへ充分に固めることができさへすれば近き將來において全連鎖を安全にすることができるが、でないと社會主義的、社會經濟的關係の根本を建設することはできないと。

レニンはいふ、この革命に對する改革の關係はたゞマルクス主義の立場からしてのみ正當且つ充分に理解することができる。卽ち一改革はプロレタリヤの革命的階級鬪爭の副産物である。凡ての資本主義的世界にとつて、この關係は革命的プロレタリヤ的戰術の根本であり、」そして第二及び第二半インタナショナルが牽強附會し且つ曖昧にしたアー・ベー・ツエーである。「一國だけにおいてのプロレタリアートの勝利の後には革命に對する改革の關係において何等か新らしいことが踏み進む。」そはマークスは先見することはできなかつたが、マークス主義の哲學及び政治學の基礎から明瞭にすることができるところである。

レニンは彼等の政策が國家資本主義へ退却したことを承認する。彼曰く、われ／＼は國家資本主義に退却したと。しかしこの退却は、レニンに從へば、一つの「力の貯蓄」(Kräftevorrat)である。(註二)

（註二） Russische Korrespondenz, Nr. 12, S. 980-984

九

ロシヤ革命が「力の貯蓄」の時に入つてゐるといはれて

ゐる時に、他の言葉でいふと、日和見主義の時に入つてゐる時に、(レニンと、その崇拜者とにいはせると日和見主義とは根本的に違つてゐるといふであらうが)レニンの病氣も、また死への道でなくて、單なる「力の貯蓄」であることを望むものである。(室伏高信)

獄中のガンヂ

ガンヂは今ま入獄中であるが獄中の彼は二つの監房を與へられてゐる。一つは晝、一つは夜の室である。そして掌大の空地が彼の運動のために與へられてゐる。彼は彼の入獄前に常用してゐた飲食、即ち山羊の乳、パン、オレンヂ、レモン、砂糖、茶及び乾葡萄を供給されてゐる。彼は彼の望みどほり一片の着物を着てゐる。そして。彼は獄吏に對して、幾度か、自分はこの取扱ひに滿足な旨を語つたとのことである。

しかしこの取扱方は、どういふわけか他の政治犯人から見ると遙に窮窟なものである。卽ちバンチャップのラチパット・ライは自分自身のコップと皿との使用を許容されてゐるし、また彼自身の寢具をも許されてゐる。そのうへ書物や新聞が供給されもし、可成り屢々人を引見することも許されてゐるのであるが、ガンヂはたゞ三ヶ月に一回の面會を許るされてゐるだけで、書物も彼の信仰する一、二册の外には手にすることを禁んぜられてゐるのである。從つて彼は殆んど全く世界から離されてゐるのである。

ガンヂが入獄してから印度は火の消えたようである。非協同派の運動も、ガンヂは後任獨裁者を指名しなかつたために今は指導者無しである。しかしそれは印度革命運動の終りを意味するのではなしに、印度革命の沈默の深化を意味するであらう。この間にもマラビアは英國官憲と惡戰しながら全國行脚の旅をつゞけてゐる。

ガンチの息、チユウダスは、五月十二日捕縛された。

次號豫告

新社會　ラーテナウ　一柳政夫譯

遠藤無水著　無政府共産主義の根本批評(下出書店)

林癸未夫著　產業民主々義運動　(同人社書店)

ジアン・ジョレスの死

一枚の古い新聞が、机の上に置かれてゐる。僕はそれを見ている。其の新聞は黑枠に成つている。黑枠の中に黑枠の寫眞がある。偉大な人物を思はせる樣な寫眞。新聞は、リ・ユマニテ、そして、其の見出しは「ジアン・ジョレス暗殺さる。」一九一四年、土曜、八月一日。

其の夜は暑かつた。地球の上に、或る何物かが、襲つて來さうな暑さであつた。僕は其の夜を忘れる事は出來ない。

今から七年前の七月三十一日の夜。

今から七年前の七月三十一日の夜、ジアン・ジョレスは、こうして暗殺された。無智な、熱狂した愛國者の手で。

未だ八時には成らなかつた。ジョレスは、社(ユマニテ社)へ歸つて來た。彼は院內社會黨を代表して、時の內閣議長ルネ・ヴィヴィアニ氏を訪問して來たのであつた。ルノーデルとロンゲが彼に伴をして。ジョレスは營業部の係のフィリップ・ランドリユや、一三の友と立話をした。彼は未だ夕飯をすまさなかつた。そして仕事は後から後から、ひつきり無しに出て來た。

——飯にしやうぢやないか。

と一人が云つた。

——ぢや行かう……。

皆が、ユマニテ社のすぐ傍にある、レストラン・デユ・クロアサンに出かけた。其の這入り口の左手に、大きなテーブルがあつた。皆は其處に座を取つた。ジョレスの右にランドリユ、左にルノーデル。それから此のトラジツクな食卓には、ボアソンと其の妻、アメデ・デユノア、デユク・ケルレ、ダニエル・ルヌ兄弟、ジョルジユ・ヴエル、モリス・ベ

ルトルと、それからジァンジ・アンゲが居た。それから其の遠くの、他のテーブルに、ボンネ・ルージュ社のドリエと其の若い妻が座を占めていた。

レストラン・デユ・クロアッサンは、人の出入が烈しい料理店で、始終客が出たり這入つたりして居たので、誰も人の出入に注意を拂はなかつた。

ジョンスは透通つた、底力のある聲で話をしていた。ジョンスは、政治部のデユノアと、ダニエル・ルヌに、それ〴〵指圖を與へてゐたのであつた。ジョレスの、あのやさしい聲での指圖は、聞いた人でなければ分らない。………皆は食事を終へた。丁度其の時、向ひのテーブルのドリエが立つて來て、色取りの寫眞をランドリユに示して云つた。

――君見たまへ、僕の娘だよ。

――ドレ見せて貰はふか。

と、人の善い微笑をたゝへて、ジョレスが云ふのであつた。

ジョレスは、寫眞を手にした。しばらく其れを眺めた。子供の年齢をたずねて、それからその若い父に御愛嬌を振りまくのだつた。

十時二十分前頃であつたらふか。

其の時突然――何と云ふ傷ましい思出であらう――二發の銃聲が繼ぎ早やに響いた。

硝煙の臭が人々の鼻を衝いた。女は叫んだ。恐しい聲で、ジョレスがヤラレた。ジョレスがヤラレた、と。

ジョレスの、あの大きな身體は、大木が切り倒された樣に、左を下に、うちころげた。そして、人々は立上り、叫びながら、又身體を痙攣的に震はせながら走り寄つた。其の時は明らかに、狼狽と混亂の瞬間であつた。二三の人々が外へ飛び出した。何故と云ふに、窓越しに、外からジョレス目がけて二發のピストルを撃ち放したのだつたからだ。

ジョレスは腰掛の上に横倒しに成つた。彼は、やつと、微かに呼吸をしてゐた。彼の眼は灰色の眉毛の下に、堅く閉

じられた。人々は夢中の有樣だつた。

ジヨレスの呼吸は、直ぐには絶えなかつた。醫者の來るのを待つ間に、丁度其處へ食事に來て居た一人の藥劑師が近よつて來て、ジヨレスの手を取り、將た絶えんとする彼の脉を數へた。そして頭を少し動かして見た。それから人々は、やつと彼のシヤツをひろげた。胸は微かに鼓動していた。皆は彼の身體をテーブルの上に乘せた。コムペール・モレルが驅けつけて來て、モウ死んだも同樣な手を取つて、聲を擧げて泣いて居た。

ルノーデルは、手許のナプキンで傷口から滴れている血を押へた。極く小さい赤い穴が、頭骸骨の後に見えた。そして其のあたりに、少しばかり白いものがついていた。

――皆さん、ドーモ駄目な樣です。

と投げる樣に醫者は云つた。

限り無く溢れて來る涙に、皆の咽喉はふさがつてしまつた。

――もう駄目だつて？　其麽事があるものか。この偉大な生命が永久に倒れる事がある筈のものか。

二分。三分。と時は經つて行つた。

――皆さん。ジヨレスはなくなりました。

努力して押へて居た泣聲の柵が切れた。皆は息を引き取つた此の偉大なる人に最後の敬禮をしやうと帽子を取つた。宗敎的な沈默――。

――それにしても社へ歸らなきやならない。――と一人が思ひ出した樣に云つた。

――新聞はいつもの時間通りに出さなきやならないんだ。ジヨレスが生きて居た時の樣に…………。

僕は古い新聞を讀んでゐる。

新聞は古い。しかし思ひ出は新しい。僕は此れが八年前の事の樣には思へない。どうしても昨日の樣にしか思へな

いのだ。社會主義者、平和主義者ジョレスは、民衆の仇敵、資本主義の擁護者の、熱狂した一愛國者の手に依つて暗殺された。ジョレスは、暗殺された。資本主義が存在して居る間は、軍國主義の戰爭は永久に存在するであらふ。そして幾多の國々に於て、偉大なる「歷史の流れ」を戻さんとする痴漢の手で、幾多のジァン・ジョレスが殺されるであらう。絶大な思想を胸に抱て、價値ある功績の果實も見ずに、永遠の根を呑んで。

そして僕の眼は今一度黒枠のジァン・ジョレスの寫眞の上に落ちた。(小牧近江)

「國家學說と社會思想」

加田哲二著

本書は四六版五五〇頁から成り立つ大册である。內容は四編に分れて居るが、その全部は獨立の論文でもあり、また一體系をなしてもゐる。本書は同氏が最近二年間に諸誌上に發表せられた論文集である。故に各論の間に重複する處もあるが、第一編は「マルクス主義の國家觀」第二編は「ギルド社會主義さその國家說」第三編は「無政府主義の諸問題」第四編は「現代經濟生活の批判」等合せて十六の論文を含むでゐる。

これ等の諸論は「はしがき」に書いてある如く「殆んど紹介である。」然しその間に加田氏の國家觀さ社會觀は充分に現はれてゐる。加田氏は二三年前より「社會」または「國家」の問題に就いての研究家さして汎く認められてゐる。本書は同氏の思想を知ろうへにも、また社會問題等を研究するためにも、是非一讀しなくてはならぬ。(下出書店五五〇頁定價參圓)I、K、生)

露國飢饉救濟金募集

一、本社は左の方法により、露國飢饉救濟金を募集します。奮つて御援助を願ひます。

一、金額には制限はありませぬ。勿論多いに越したことはないが、十錢二十錢の少額でも構ひませぬ。

一、送金は成るべく振替(又は郵便爲替)にて本社に御拂込みを願ひます。少額の場合は郵便切手(五厘切手に限る)でも差支へありませぬ。

一、御寄附に對しては、受領書を差出すか、又は誌上で報告をします。姓名の公表を憚られる場合は匿名、又は其由を御附記を願ひます。

一、寄附は個人でも團體さしてゞも構ひませぬ。

一、集まつた金額は便宜の爲め、大規模に露國救濟資金や物資の募集をしてゐる外國の確實な機關(例へば米國の『勞農露西亞友人會』等の如き)に寄贈すること。

東京大森新井宿　前衛社
振替東京五四七七七

自由教育の目的論的一見解

一、自由教育の概觀

自由教育とは何であるか。これを一言に要約してみるなら、「深く批判哲學に泉み、遠く理想主義の流に汲んだ、個人的に淵しては人格價値の實現となり、社會的に湛へては文化國家の思潮となり、これが方法的には自學と自治の二つの帆を揚げて、自覺と呼び自律と名づける自由によつて、常に達しつゝしかも永久に達することのできない自由の港へ、教育を舟漕がうとする」ものなのである。

批判的教育學の問題であるから、大きく自然主義に反對し、少さく實用主義(プラグマチズム)の教育に對立せんとする理想主義的の主張であり、個人的教育學とか社會的教育學とか、兩面を包容する思想である。しかして自由を以て教育の目的論を樹て、自由を以て教育の方法を築かうとする試みである。自由は教育の目的であるとともに方法である。自覺の力に信賴して自由に自我を創造せしむる即ち自由を自由に實理せしむること、換言すれば知に於て行に於て趣味に於て信仰に於て、人格價値の自由實現を期するものである。人格價値の實現は文化であるから、社會的には文化價値の不斷の創造と觀ることができるのである。教育方法上からは學習には自學主義を採り、訓練には自治主義に則ることになるのである。何となれば自學と自治とはその統一原理たる自由からのみ生れるからである自己學習上の自由か自學で自己訓練上の自由が自治であるはずである。從來の自學自治は單に方法上からのみ主張せられたから、その根柢が危かつたが、自由教育に至つて自學主義や自治主義は目的論上から演繹せらるゝ根强い基礎を持つことになつたのである。

二、自由とは何ぞ

自由とは何であるか。「理性の必然性に基いて多種多樣な意識現象を統一する活動、即ち多態の先驗的綜合の活動の

體驗的意識、これが自由の意識である。自由は無原因の偶然でもなく器械的必然でもない。理性の統一活動が自由であるから、自由は自由であつて同時にまた必然であるといひうる。」人は理想の實現をその本分とすべき存在として自由の理念によつて統整せられつゝあるものである。人は自然的存在者として見れば動物や植物と等しく、自然的因果としての一の所産であるにとゞまるが、自由の方面から眺めるなれば實に理想の實現者であり、已の行動の支配者である。たとひ行動が外部的刺戟によつて起るにもせよ、全然これに決定せらるゝことはない。外部の刺戟は行動の機會因ではあるがその必然因ではない。外部の刺戟が必然因となるは動植物で人ではない。要するに自由としての人は所産ではなく生産ではなく生産そのものである。人はもとより全き自由ではないが、しかし全き必然ではない。全き必然ではないから必然の鐵鎖を脫して自由を實現し、價値を創造する無限の可能性をその中に藏してゐる。これ人が人として有する特色特權である。

三、敎育とは何ぞ

敎育とは何であるか。「敎育とは理性の先驗的統一即ち自由に輔け導く働きである。」人をその現に「ある」狀態から「あらねばならぬ」狀態にまで止揚し、人として「あらねばならぬ」即ち人の理想的本分を充實せしむる働きを幇助するのが敎育である。「ある」狀態は存在であり「あらねばならぬ」狀態は當爲である。自然は存在であり理性は當爲である。なほ理性は理想を認め感じ欲し行ふ根源力であり、理想は理性の所産であるとするならば、實に敎育は自然を理性化する作用を輔くる働であるといふことができる。さらに理性が自由であり自然が不自由であるとしたら、自然の理性地はこれを不自由の自由化と飜へすことができる。敎育は兒童をしてまづ自ら理性の光に目ざめしめ自らの力で自らの統一をなさしめようとする純內部的の活動であつて、外部的器械的な植物の培養とか動物の馴養とかからは截然として切離さるべき活動である。自然發動と理性の活動とを對立せしめ、理性は實に自然を善導し純化する一大法則なので、理性はその一般原理で自然は特殊原理であり、自然はその發點をなし理性はその方向を指示し、人は生れながらに自然を理性化する可能性を有するものとしての確信を有する。もしものこの根本的な確信を缺かば、その時から一切敎育は不能となり、何等の敎化も徒勞となる。これ動物には馴養のみで敎育がなく、植物には培養のみで

教育がなく、礦物には變化のみで敎育なく、實にカントの加へ人のみ敎育しえらるゝ唯一存物でると信ずるのである

敎育は自然と理性と二元的に對立せしむることよりはじまる。かくて自然と理性の對立關係に四つの見觸がある。その一は自然即理性となし、自然はたゞちに價値そのものであるとするもの、萬物は造物主の手から出でた時善であるが、人の手に渡つて惡となるといふやうな考を持つたルソーはその代表者である。自然即ち「あるがまゝ」を伸ばせばよいといふ主張である。その二は理性は自然より發展するもの、價値は自然よりおのづからに流れ出つるものとなし、進化論に立ち受動的順應を說いたスペンサーはその代表者で、現今のデューイは發動的順應をも說き加へてはをるが、それとても本能衝動が外界に順應した副産物として高尙な精神作用が生ずるとするので、つまり根本的にはスペンサーの說と異るところがない。その一その二ともに結局は理性を認めず全く無理想に墮するものであらう。その三は自然と理性とを對立せしむる理想主義的見解である。これがまた二つに分れる。一つは理性は必然及自然に反對するとなすもので、人生は自然征服の途上にある。戰鬪である勝利によつて甦るところに人格があるとなすものでオイケンの新理想主義等に胚胎する主張である。最後の一つは理性は自然の內在的統整原理であるとする見解で、宇宙の原理を形式と實質とに觀て、實質を形式で統整し純化するが、宇宙進化の法則であるとしたアリストテレスはその代表者である。自然は善でもない。たゞ現實事實として「ある」の狀態である。理性はこれを統一する法則として內在する。自然の發達とともに理性の自由創造の連續發展がある。理性は必ずしも自然と反對はしない。時としてこれと一致することもある。自然を强むるは理性化の作用を强むることになるのである。

自然と理性との二重の世界を對立せしむるは二元、であるのではない。事實上自在と理性とは人生に於て或程度に融合して存在してゐる。存在してゐるといふこと自體が自然と理性を事實的ではなく、概念的に分離せしむる自動となるのである。かく概念的に分離せしむることによつて一層明かに二者の性質と相互を定めることができる。それは恰も一つの意識を心理學上で知情意と分離して考へるのと同じである。自然は現實態として實在し、同時に理性は實現せらるゝものとして可能態として存在するとの對立をなしたまでのことである。

四、自由敎育

かくして自由敎育は理想主義的見解に立つべきことは當然はであるが、前述の前者の主張とはやゝその趣を異にし

てゐる。前者はこれを自律と言つた言葉がよくその感じを表すやうに思はれる。自然を征御壓殺して新生せんとする教育は極度の鍛錬主義となり禁欲的主張となるかも知れぬ。後者は自由といふ語がよくその感じを表すやう聞える。自由教育は本能とか衝動とか欲望とかの强いのを嫌はぬ。いなむしろその强からんことを希望する。しかしながらこれを理性の作用のいよ〳〵益々强かるべきを要求する。例へば怒りの本能の强き生來の兒童ありとせよ。怒ることとそれ自身を極度に强迫して全然怒りのないものにしようとはしない。怒ることは必ずしも惡くない。たゞ氣まぐれに氣分に任せて放漫に怒ることがよくないのである。かの「君子一度怒つて天下安し」と言つたやうな怒り方にこれを善導しようとするのが自由教育である。これ「自然が內在的統整原理としての理性に導かるゝことが自由である」と吾等の主張する所以なのである。自律的の教育は青年以上のものに適する主張であつて、幼少年者には自由教育でなければならぬと吾等は信ずるのである。

かくして自由教育は外から强制壓迫する教權中心の教育に對するとともに、單に兒童の自然のまゝの發動を隨喜讃嘆して放任教育をなさんとするものに反對し、役に立つ爲めになるの利用價値をのみ重んずる實用主義的教育にも贊同せず、適應順應を說いて自然發動と理性の活動とを一直線上に並べる平面觀の主張に基づく教育にも共鳴することができないのである。

本能衝動は放散の原理である。放散を理性によつて統一する。この統一はいやが上にも累ねて、無限に連續發展をなすのである。人は理性活動の各方面即ち認識生活道德生活趣味生活信仰生活に亘つて人格價値の自由實現を期せなければならぬ。人格價値の實現は文化であるから他面よりは文化價値の不斷の創造をなさしめようとするのが自由教育である。これを要するに自由教育の主張は兒童をして已が理性にし兒童の有する程度としての理性に從つて自已を決定し生活の各方面に於ける自由をいやが上にも獲得し實現せしめようとするに過ぎないのである。生活の各方面に於ける自由を絕對に獲することは永久にできぬ。絕對獲得の相は神である。人は神にはなれぬ神にはなれぬが、一段一段の高次に於て相對的に程度程度の自由を獲得し實現することはできる。これが「常に達しつゝしかも永久に達せらざる自由」の所以である。だから自由は出發點であると同時に到達せられざる到達點であるといふのである。自由は實に無限の方向としてのみ了解せらるべきものである。だから自由教育には生成はあるが完成はないのである。（手塚岸衞）

自由教育の根本原理

最近の旋める一教育思潮としての「自由教育」の詳細を余は近著「自由教育論」上下二巻によつて述べ悉した。此處では出來るだけ簡約に「自由教育」思潮のいかなるものであるかを述べ、從來の教育思潮との關係を尋ねて見よう。詳しくは前著書を參照して貰ひたい。

1

自由教育が最近の教育思潮として其の意義を發揮した所以のものは、第一に舊來のプラグマチズム的教育に反對した事である。我々は此れまで教育學者により、又爲政家によつて、教育は實生活への準備だといふ風に教へられて來た。其の教材の選擇に於て、又其の教授の方法に於て、實生活への準備手段としての教育、實用の爲めの教育なる見方はいつも離れて居なかつた。併し此れは教育なる一つの文化生活に對する他律主義で無くて何であるか、自由教育論者は教育をして自律せしめ、或る他の生活の手段としての其れではなく、教育の爲めの教育であらうとする。第二に從來の教育學者の見て居た社會概念には多くの誤謬が含まれて居るか、然らずんば其れは狹義に過ぎるものであつた。其れ故に社會は屢々國家と同一視せられた。國家主義國家本位の教育は爲政家を悦ばせたのみならず、或る一部の御用教育學者に歡迎せられて居たのである。嘗て我國にも喧傳せられたケルシェンシュタイナア等の公民教育思潮は、時に獨逸軍國主義の謳歌なるかの如くに思はせらるゝ部分を少なからず含んで居た。自由教育論者は機械的社會觀を排して正當なる人格的社會觀の上に立ち、此處にも亦教育をして他の文化生活の手段たらしめず、其れ自身による支配を達成せしめようと力める。其れは國家重視主義に非ず、眞の意味のヒューマニズムである。換言すれば自由教育は教育の自律である。其れは實用主義にあらず、人格主義理想主義である。

自由教育主義の立脚點は、其れ故に文化主義の其れと全く同じいものだ。其の著しい特色を述ぶれば次の如くである。

2

第一に自由教育は教育學の哲學の上への立脚を力說する。從來の教育學は其の點では殆ど全く無哲學的であつたといつてよい。さて其の場合の哲學はいふまでも無く、我々の批判主義哲學である。教育學は獨斷的で無くて批判的でなければならぬ。兒童の生理學的心理學的硏究は敎育學では無い。其れは單なる存在學だ。教育學は教育なる一文化生活の中に內在する價値を批判しなければならぬ。其れは哲學の仕事に依據する。否寧ろ其れ自身が一の哲學である。其れ故に此の正しい意味の教育學を我々は批判的教育學と呼ぶ。

第二に其れはプラグマチズムの教育方針を打破する。理想主義人格主義は人格の自律主義であり、プラグマチズムは其れの他律主義なるが故に、兩者互に相容れない。

第三に、自由教育は從來の教育學の方法論重視に反對して目的論本位である。教育は一の文化現象である目的現象である。先づ教育の目的が明瞭で無くて、どうして正しい教育が出來ようか。然るに從來の教育學では、此の問題は餘り深く立ち入つて考究せられずたゞ『いかに教育するか』の技術的方面のみが熱心に硏究せられて居たのである。

第四に、自由教育は人格の自律を目標とする。人格は其のすべてのものにより、いかなる名目を以ても强制せらる可きで無い。すべての教育方針は此の人格自律、換言すれば眞の意味での自由を目標として其處へ集中する。此れ卽ち此の教育が自由教育と呼ばるゝ根本の意味であつた。

3

教育概念は自由教育の立場からはいかに決定せられるか。

我々は此れを爲す場合に、すべての獨斷的取扱を避ける。そして其處には批判し盡された哲學的堅牢性を有する概念を得ようとする。此の結果として批判的教育學での教育概念の定義は下の如きものとなる。教育とは、教へられる事の出來る人間の上へ、此の人間を形成し盡さう（ausbilden）とする目的を以て、繼續的意識的の影響を爲す事である』（拙著一八〇頁）言ふまでも無く此の概念決定では目的概念が重要のものになつて居る。併し此れは批判的方法の概念決定としては甚だ當然の事だ。目的無しには凡そ一の概念も決定せられる事が出來ないのである。右の定義をなほ要的すれば、下の如くにも言ひ換へ得られる。『現に在る人間を當に在る可き人間に進ましめようとして加へる影響』（拙著一八四頁）此の場合に『影響』を與へる人格と影響を與へられる人格との關係、即ち教育者と被教育者との關係は批判的教育學に取つては重要の考究題目だ。何故なれば、教育の目的が人格の自律にある以上、教育的影響は却て其の自律を害する一の他律行爲になるから。自由教育内部で矛盾し、自殺する。併し此の見方は毫も正當なものでは無い。自由教育は强制で無い。人格は連續する。乙人格の自律行爲が、此の人格連續の原理により、甲人格の自律行爲を以て應ぜられ、教育は毫も乙人格の自律行爲を害せずに行はれ得る。其れ故に教育概念は又次の如くにも定義し得られる『甲人格の自由活動を目的とした、乙人格の甲人格への影響。』或は『甲人格の自由化を目的とした乙人格への影響』（拙著二一四頁）或は『甲人格の自律を目的とした乙人格の甲人格への影響』（拙著二一八頁）

此等の教育概念決定は、略ぼ自由教育の輪郭を示し得るかと思ふ。

4

自由教育の目的は何か。一般に人生の目的を取扱ふものは哲學である。其れ故に教育學の教育目的論、換言すれば技術的教育學と區別せられた純粹教育學は當然哲學に依據する。否寧ろ哲學其のものだ。此の事は前述の通りだ。

自由教育の目的とするところは、教育概念の示すところによつて明瞭となつた如く、一般の人生の目的と何等異るものでは無い。**自由教育の目標とする人間は、『當に在る可き』人間だ。即ち語の正しい意味に於ての自律的人格だ。**

併し自律的人格は當然其れの生活内容を要求する。可及的に豐富の内容を得た人格は、眞の意味の自律的人格だ。何故なれば我々の文化生活とは、各文化價値範圍に於て無限の經過を以て其の價値の實現充實を計る努力に外ならぬから。此の努力を個人に對比して言へば、個人は少くも其の歴史的文化的社會の有する文化財産へ　其の個人の占むる當然の參與貢獻を爲す可きである。此くして教育の目的は形式的にも亦内容的にも、全く嚴密に決定せられたものになつた。

自由教育、否寧ろ眞に教育なるものゝ目的は何であるか。形式的には自律的人格だ。内容的には歴史的文化的社會生活への參與だ。（拙著下卷參照）

5

斯樣に自由教育の根本的立場を論述して來れば、自由教育は少しも不思議な又新奇な、内容を持つたもので無い。此れは最も普通の、最も珍らしさの少ない教育だ。併し此の批判的教育學の立場から出て來た技術的教育學の研究は必ずしも常套の教育意見其のものでは無い。方法としての自由教育に、現在の教育界に偉大な革命を喚起し得る。自由教育思潮は依然として學校教育に、又社會に、重大な使命を以て生れ出たものである

（土　田　杏　村）

早稲田大學
建設者同盟

夏期講習會

本同盟は社會奉仕の一端として夏期休暇を利用し東西の新進眞摯なる學者を聘し第二回夏期講習會を開催す

開催 場所 早稲田大學大講堂
日時（第一回 自七月二十四日至同三十日（午後六時より四時間宛）
　　（第二回 自八月一日至同七日（午前八時より四時間宛）

□聽講料 各壹回參圓 共通五圓

□講師氏名及講義題目左の如し

御注意

△聽講料を添へ御申込の方には聽講券及時間割を御送りします。
△事務の都合上なるべく早く御申込み願ひます。
△地方より御出かけの方には旅宿の心配も致します。
△御問ひ合せは一切返信料を添へて下さい。

第一回（自七月二十四日至七月三十日毎夜六時より）

○階級鬪爭と國際經濟　早大教授 猪俣津南雄氏
○古代法と結婚制度　長谷川如是閑氏
○インテリゲンツィヤを描ける文學　早大教授 片上伸氏
○民衆藝術論　早大教授 吉江孤雁氏
○マルクス主義の哲學的發展　帝大教授 恒藤恭氏
○インターナショナルの史的考察　室伏高信氏
○社會思想の變遷　早大教授 北澤新次郎氏

第二回（自八月一日至八月七日毎朝八時より）

○ロシアの國家制度と無産階級獨裁　同志社大學教授 波多野鼎氏
○政治現象の社會的基礎　早大教授 大山郁夫氏
○文藝と性慾　早大教授 矢口達氏
○社會組織に對する唯物史觀的考察　小泉鐵氏
○日本資本主義發達史概論　早大教授 佐野學氏
○ギルド社會主義に對する一考察　關西學院大學教授 新明正道氏
○第四階級藝術論　平林初之輔氏
○社會の新觀念と現代生活批判　早大教授 杉森孝次郎氏

大正十一年七月　申込所 東京市外池袋九三〇 建設者同盟本部（振替口座東京六〇六〇七番）

主催 建設者同盟

社會思潮十講

本同盟昨年度講演集（四六版三六〇頁）
定價 壹圓五拾錢

本同盟機關誌 **建設者** 來る九月一日創刊 月刊一部定價三十錢

建設者リーフレット
(1)小作人問題
(2)農民問題（一部一錢 以下續刊）

森戸辰男氏新譯（四六判三百頁麻布裝〇入）

勞働組合運動の理論と歴史

定價二圓
送料書留十五錢

勞働組合を論ずるものは直に英のウエッブ、獨のブレンターノを想起し併せてゾムバルトを忘れることはできぬ。ブ氏が民主々義自由主義思想の社會政策學派の人であるに反しゾ氏はマルクス流の社會主義派に屬して居る。原著は氏の名著「十九世紀に於ける社會主義と社會運動」と共に社會運動の意義と重要さを明示し其進歩的思想と奇警なる着眼と流麗なる才筆とは學界の珍とする所、譯者に森戸氏を得たる本書の價値を贅するは今更蛇足であらう。（大原社會問題研究所叢書第七）

發賣所　東京神田西紅梅町　同人社書店　振替東京二七〇六五　電話神田二一九五九

種蒔く人（世界主義文藝雜誌）

定價四十錢

府下代々木大山一〇四四（振替東京五九三八七番）　種蒔き社

大正十一年三月廿一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）批評七月號

（定價卅錢）

定價			
毎月一回一日發行	一部	半年分	一年分
郵税	卅錢	一圓七十錢	三圓三十錢
	五厘	税共	税共

但特別臨時號の價は別に申受く

▲送金は可成振替　▲郵券代用一割増

大正十一年七月一日印刷納本
大正十一年七月一日發行

東京市芝區三田一丁目二十六番地
印刷發行編輯人　利部一郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷所　川崎活版所

東京市芝區三田一丁目二十六番地
發行所　批評社
振替東京四五三四六

大正十一年三月卅一日第三種郵便物認可
大正十一年八月一日印刷納本發行

批評

室伏高信編輯

寫眞說明

第一頁　**レーニン**肖像

第二頁　第三インタナショナル會議光景（一九二〇年七月十九日ウリツキー宮殿）

第三頁　**トロツキ**（上）と彼の赤衞軍檢閱（下）

第四頁　共產黨首領**ブハリン**（上）**チノブヰエフ**（下）

第五頁　**ゴルキー**（上）勞農ロシヤ文部大臣**ルナチヤルスキー**（下）

第六頁　勞農ロシヤの教育振り（上）同上教員會議光景（下）

第七頁　勞農三巨頭―陸相**トロツキー**（左）內閣議長**レーニン**（中央）モスコウ・ソヴヰエット會長**カメネフ**（右）

第八頁　モスコウの苺市（上）モスコウの食糧分配委員室（下）

第九頁　全露ソヴヰエット會長（勞働者出身）**カリニン**夫妻（上）勞農政府機關紙イスヴエスタ紙主筆**ステクロウ**（下）

第十頁　ペトログラード勞兵會議（中央ランプ下が會長**チノヴヰエス**）

第十一頁　全露婦人勞働代表會議（上）勞農ロシヤ六十留紙幣（下）

第十二頁　前皇帝家族の夏別邸として有名なザールスコエ・セロ、今日はディエツコエ・セロと稱し一般勞働者の兒童療養及避暑地となつてゐる。こゝに掲げたは其食堂（上）勞農ロシヤ日曜日の小學兒童（下）

表紙裏　資本家の見た共產ロシヤ（ベルリーナー・ターゲブラットから轉載）

救へロシアの同胞を!!

今ロシヤの同胞は饑饉のために親は子の肉を食ひ、子は親の肉を食ひ彼等は野獸の如き生活をしてゐる。ヴオルガ河沿岸地方では殪れる者は、その數を知らずしかもその屍は安らかに墓場に眠ることを得ずして、生き殘つた人々の餌食となつてゐる。

死に瀕したロシアの同胞を救ふの道は、ただ偉大にして崇高なる人類愛に依る外はない。

昔、謙信が信玄に鹽を送つて敵の窮狀を救つた。

今日の國際場裡に於いて飢えたるロシアの同胞に食と衣を與ふる事は人類の當然の義務にして、また偉大にして崇高なる人類愛の發現である。

飢えたるロシアを救ひ!!

飢えたる同胞を救ひ!!

目下同業「前衞」は其救濟に左の通り義金募集を行つてゐる。我々はこれを最も機を得たものとして大方の御援助を乞ふ。

本誌讀者にして本社に寄附を委託された時は本社は喜んで前衞社に取り次ぎの勞をとり且つ御芳名を受領書に替ひて本誌に揭ぐる。

東京芝三田一ノ二六

批評社

振替東京四五三四六

露國飢饉救濟金募集

一、本社は左の方法により、露國飢饉救濟金を募集します。奮つて御援助を願ひます

一、金額には制限はありません。勿論多いに越したことはないが、十錢二十錢の少額でも構ひません。

一、送金は成るべく振替（又は郵便爲替にて本社に御拂込みを願ひます。少額の場合は郵便切手(五厘切手に限る)でも差支へありません。

一、御寄附に對しては、受領書を差出すか、又は誌上で報告をします。姓名の公表を憚られる場合は匿名、又は其由を御附記を願ひます。

一、寄附は個人でも團體としてでも構ひません。

一、集まつた金額は便宜の爲め、大規模に露國救濟資金や物資の募集をしてゐる外國の確實な機關（例へば米國の『勞農露西亞友人會』等の如き）に寄贈すること。

一、寄附金の淸算と處分に就ては、追つて社外から、信用すべき數名の人を選んで監督を受けます。

東京大森新井宿

前衞社

振替東京五四七七

レーニン肖像

共産黨首領
ブハリン

ザノヴヰエフ

上 ゴルキー　下 勞農ロシヤ文部大臣ルナチャルスキー

勞農ロシヤの教育振り

同上教員會議の光景

勞農三巨頭

陸相トロツキー（左）　内閣議長レーニン（中央）　モスコウソヴヰエツト會長カメネフ（右）

モスコーの苺市

モスコウ食糧分配委員室

全露ソヴキエツト會長 勞働者出身）カリニン夫妻

勞農政府機關紙イズヴエスタ主筆ステクロウ

ペトログラート勞兵會議（中央ランプ下が會長ヂノヴヰエフ）

全露婦人勞働代表會議

勞農ロシヤ六十留紙幣

前皇帝家族の夏別邸として有名なりしザヘルスコエ・セロ、今日はデイエツコエ・セロと稱し一般勞働者の兒童療養及避暑地となつてゐる、これは其食堂。

勞農ロシヤ日曜日の小學兒童

大正十一年三月卅一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）七月八月號

定價	
毎月一回一日發行	郵稅
一部 卅錢	五厘
半年分 一圓七十錢	稅共
一年分 三圓三十錢	稅共

但特別號は臨時に別に申受く

▲送金は可成振替　▲郵券代用一割增

大正十一年八月一日印刷納本
大正十一年八月一日發行

東京市芝區三田一丁目二十六番地
編輯印刷發行人　利部一郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷所　川崎活版所

東京市芝區三田一丁目二十六番地
發行所　批評社
振替東京四五三四六

批評

大正十一年三月三十一日第三種郵便物認可
大正十一年九月一日印刷納本發行（毎月一回一日發行）

「ボルシエヴヰキの虐政の話」

室伏高信

共産ロシヤは勞働者の天下か。それとも恐ろしいこの世の地獄か。共産主義は、その・最初の果實を熟せしめつゝあるか。それとも人間の肉が喰はれつゝあるか。ロシヤの「監獄」を逃れ出た有名な無政府主義者エムマ・ゴオルドマンはロシヤの眞相を如何に語る。先づその長い話を聽いて下さい。それから共産ロシヤの辯護者が如何にこれを辯解するかも聽いて下さい。本誌はこの爭ひに數號を費します。

第六號（九月號）

批評九月號目次

表現派の藝術(一)

カール・ヤヒブ・コルシの筆になるロオザ・ルクセンブルヒ女史の肖像畫です。

社會運動と社會的諸階級

近代社會における社會階級の分析とプロレタリア對ブルジョアジーの階級的鬪爭に就いての最も有力な所説を、吾々はカアル・マルクス並にフリドリッヒ・エンゲルスの「共産黨宣言」において發見することの出來るのは云ふ迄もない。マルクスは階級鬪爭と云ふことをその社會觀の中樞的要素としてゐるが、彼は不思議にも階級なる概念を明確にしてゐない。否マルクスに許する齢を以てしたならば、彼はその階級觀を吾々に提供し得たであらう。何となれば、彼の資本論第三卷の原稿は實に社會階級論の序論に終つてゐるからである。かくの如くして吾々は資本論においてマルクスの階級觀を學ぶことは出來ない。マルクスの他の著書において吾々の散見するその階級觀も甚だ明確を缺いてゐる。一例を擧げて見ると、マルクスは「革命並に反革命。一八四八年における獨乙」と云ふ書の中で、革命勃發當時の獨乙國民は封建貴族と、ブルジョアとブチ・ブルジョアと大中地持農民と小自由農民と封建的小作農民と農業勞働者と工業勞働者との諸階級から成立してゐたと云つてゐる。また彼は「ルイ・ボナパルト論」の中で二月革命中及びその後における佛蘭西に就いても多くの階級の存在を認め、就中ブチ・ブルジョアと小地持農民階級の演じた社會的役目に對して特別の注意を拂つてゐる。さうして彼のこれらの階級に對する觀察は、甚だ複雜予盾に富んでゐる。例へば極小地持農民も一つの階級たることを承認し、之が帝政成立の上に決定的の役目を演じたことを認めてゐる。曰く「ボナパルトは一階級を、然もフランスの社會において最大の成員を有する極小地持農民を代表したものである」と。然るに、マルクスは同じ著書の中で、極小地持階級、はある意味において階級とは認め得ないと云つてゐる。かくある場合には階級であり、ある場合には階級でないと云ふ。吾々はその適從に苦まざるを得ない。(Tugan-Baranowsky, Theoretisch Grundlagen des

マルクスの階級觀の不明瞭なことは、こゝばかりではない。階級鬪爭の理論を最も明白に表明した「共產黨宣言」もまた、ツガン・バラノウスキイの云ふ通り、その階級觀を明かにしたものではない。マルクスはプロレタリアを特殊の階級として取扱つた。マルクスは極小地持農民が一つの階級たらざることを主張する理由として「利害の共通が彼等の間に何等の共同關係、何等の國民的結合、何等の政治的組織を生ぜしめない」ことを擧げてゐる。(ルイ・ボナパルト論)この見地から見ると、プロレタリアもある意味において階級ではない。このことは、共產黨宣言の明示してゐるところである。即ち「共產黨の直接の目的は、他のすべてのプロレタリア政黨の目的と同じくプロレタリアを階級たらしめるにある。」また曰く「プロレタリアを階級從つて政黨に組織せんとする企圖は勞働者自身の間に行はるゝ競爭によつて、絕えず破壞せられる。」と。この文章に從ふとプロレタリアを階級とすることは未だ達せられざる目的である。

　マルクスの階級觀が不明瞭である論據として、ツガン・バラノウスキイが、マルクスの著書「哲學の貧困」から擧げてゐるところによると、プロレタリア階級の發達に關して、ブルジョアに對してのみ階級たる階段と、プロレタリアそれ自體が階級として構成せられる場合である。ブルジョアジーに就いても同樣のことを云ひ得る。第一の階段はブルジョアが封建的制度と專制君主制との支配の下に階級を成すに至つた時代で、第二の階段はブルジョアジーは既に階級を形成し、社會をブルジョア的社會たらしむべく、封建制度と君主制とを顚覆せる時代である。

　マルクスの階級觀は、かくの如く複雜であるが、その階級的關係の本質に至つては、甚だ簡明である。社會階級の利害は必ず對立すると云ふにある。この社會的利害の對立の基礎たるものは何か。それは一階級が他の階級の剩餘勞働を占有すると云ふ一事である。階級的社會卽ち國家が必要となつたのは、この剩餘勞働の奪掠を秩序的に行はんとするからである。故にマルクス、エンゲルスはその共產黨宣言に云つてゐる。「あらゆる社會の歷史は階級對立の中に發展してゐる。さうしてその階級對立は時代時代に從つて　その形態を異にしてゐる。然し、その形態は如何にもあれ、社會の一部分が他の部分を搾取すると云ふ一點は總ての過去の諸時代に共通な事實である。」と。

マルクスはこの見地から近代社會の階級分析を試み、階級鬪爭の主要な當事者がブルジョアジー並にプロレタリアートであることを力說し、さうしてプロレタリアートの必然的勝利を確信したのである。然るに現時の社會において階級鬪爭の當事者たるものは、これらの兩階級であることは事實であるが、この兩階級以外に階級が存在しないのではないこゝにおいてこれらの諸階級と階級鬪爭によつてある目的を達しやうとする社會運動とは如何なる關係にあるかと云ふ問題が吾々の興味を惹く。この關係に就いて既に論ぜられたことが多いやうであるが、私はこゝにボルシエヴィズムの理論家として著明なブハリン並にプレオブラチエンスキィの共著「共產主義入門」Das ABC des Kommunismus 1921. Hamburg. に從つてその一般的觀察を紹介しやうと思ふ。以下の文章は同書第一部第三章「共產主義とプロレタリアの獨裁」の第二十五節「共產黨と資本主義社會の諸階級」(七三—八一頁)に相當する。

一　共產黨と資本主義的社會の諸階級

プロレタリアがある國を征服するためには、彼等が結合し、組織されることが必要であり、さうしてそれ自體の共產黨を有することが必要である。共產黨は資本主義の發展方法如何を洞察し、さうして勞働者階級の實際的政治關係を明瞭に知り、その狀態に就いてプロレタリアに知らしめ、さうしてその戰鬪を指揮しなければならない。如何なる政黨も未だ嘗て、一階級全體をその黨員としたことはない。この程度の階級意識には、如何なる階級もまだ到達してゐない。

政黨に加入する者は一階級內で最も進步的で、勇敢で、戰鬪において最も持續し、且つ最も正當にその階級的利益を解するものであるのを普通とする。故に一政黨の黨員數は政黨がその利益を代表する階級の全員よりも大分少くないことを普通とする。正當に解釋された階級の利益を代表する場合において、政黨は一般に主要な役目を勤める。各政黨は全階級を指導し、權力を得るための諸階級の鬪爭は、支配權に對する諸政黨の鬪爭となつて表はれる。故に政黨の本質を了解するためには、吾々は資本主義社會の各階級の地位に就いて研究することがなくてはならない。かう云ふ事情から、一定の階級的利益が發生し、さうしてこの階級的利益を代表することが、政黨の本質を構成する。

二　地　主

資本主義發展の初期においては、農業は農民の半奴隷的勞働にその基礎を置いてゐた。地主は農民が地主の所有地において勞働を提供し、もしくは貨幣で支拂をすると云ふ條件の下において、農民にその土地を貸した。故に地主の利益は農民が都會に集中することを妨げた。地主は彼が村落に半奴隷の狀態を維持し得るやうに、すべての改革に對して反對を加へた。故に地主は工業の發達に反對した。斯樣な地主は、その多く自ら農業に從事しないで、農民の勞働に對する寄生蟲として生活した。從つて地主の形成する政黨は最惡の反動的のものであつた。さうして現在もさうである。地主の政黨は何處においても舊秩序の復活を要求する。そは常に地主の支配と鄕土の支配とさうして農民と勞働者の完全なる隷屬を要求する。そは所謂保守黨であり、眞の反動的政黨である。

軍國主義者が常に貴族的地主から出て來るやうに、地主と軍人とが最も折り合せいゝと云ふのは驚くべきことではない。それは何處の國でもさうである。プロイセンのスンプルはこの最もいい例である（プロイセンでは大地主はユンケルと呼ばれてゐる。）これらの人々から將校隊を成立してゐる。それはロシアでも同じであつた。ツアルの樞密院は大部分、大地主階級の代表者であつた。公爵、伯爵と云ふやうな舊家の大地主は、大概數千人の奴隷所有者の祖先の相續者である。ロシアにおいては、ロシア人民黨、國民黨（首領クルペンスキ）右黨十月黨等の地主黨が嘗て存在した。

二　資本的ブルジョアジー

ブルジョアジーの努力は產業の開發によつて最高の利潤を得ることに向けられる。卽ち勞働者から剩餘價値を得ることに努力する。彼等の利益が土地所有者の利益と全然一致するものでないことは明かである。資本が村落に入り込むとそは舊時の狀態を破壞する。資本は農民を村落から都會へと吸引する。そは都會の巨大なプロレタリアートを形式し、さうして其の新しい要求を村落に求める。かくて從來滿足してゐた農民も次第に馭し難くなる。斯樣な革命は地主の慾しない所である。然るに資本的ブルジョアジーは、この狀態において彼等の幸福を見出す。村落から都會に勞働者が吸引されれば、されるほど、多くの勞働力が資本家の自由になり、從つて低い賃銀で勞働を雇ふことが出來る。村落が疲弊すると、小地主は自己の消費のために種々なものを生產するのを止め、大製造業者からこれを購買することを餘儀な

くされる。村落が自己の消費のためにすべてのものを製造してゐた舊時の狀態が迅速に消滅すれば、する程、工場生產品に對する市場は擴張せられ、その結果として資本家階級の利潤が益々高くなる。

故に資本家階級は、舊式の地主に對して非難する。彼等はブルジョアジーと共同のものを多く持つてゐる。然しまた賃銀勞働と機械の助けを借りて、その產業を經營して行く資本家的地主もゐる。彼等の目指す戰鬪の相手は勿論勞働者階級である。もし勞働者階級が主として地主に對して戰鬪を開始し、ブルジョアジーに對してはあまり戰はないときは、彼等は勞働者と折り合ふことが出來る（例へば一九〇四—五年におけるが如し。）乍然、勞働者が共產主義の利益を實現し始め、ブルジョアジーに對して戰鬪を開始すると、ブルジョアは地主と相合して勞働者に對抗する。現時においては、すべての國において、資本的ブルジョアジー（所謂自由黨）は革命的プロレタリアートに對して激烈な戰を行ひ、さうして自由黨は反革命の政治的參謀本部となつてゐる。

ロシアにおける此種の政黨は人民自由黨、立憲民主黨（また單にカデッツ）並に今は見る影もない十月黨である。（この政黨はニコラス第二世が「一九〇五年十月十七日に憲法宣言を發布したときに形成されたものである。）工業的ブルジョアジー、資本的土地所有者並に銀行家はその追從者である大學教授、高級の法律家、著述家、技師等の有識者と共にこれらの政黨の主要な黨員である。一九〇五年において彼等は專制主義に對して大不滿を感じた。けれども既に彼等は勞働者と農民とを恐れたのである。二月革命以後においてカデッツは勞働者階級の政黨——ボルシエヴィキに對して反對したすべての政黨の指導者となつた。一九一八年並に一九一九年において、カデッツはソヴィエット政治に對してあらゆる陰謀を企てた。彼等はデニキン並にコルチッヤク將軍の政府に屬してゐた。彼等は要するに暴力的反革命の指導者であつて、地主の政黨と全然同一であつた。勞働者の支配の壓迫によつて、すべての大所有者の團體は、一つの不淨な旗の下に結束した。さうしてその先頭に立つてゐるのは、最も精力のある政黨であつた。

三　都市の小ブルジョアジーと小ブルジョア的有識者

この部類に屬するものは手工業者、小商人、精神勞働者並に小官吏である。これは一の階級ではなくて、統一のない

一の集團である。これらのものは、多少共資本によつて奪掠されてゐる、屢々その力以上に働いてゐる。彼等の多くは、資本主義の發展と共に劣敗者となる。乍然彼等の勞働條件は、資本主義下における彼等の地位の絶望なことを知らしめないやうなものである。手工業者を例に採つて見やう。彼等は牛馬のやうに働く　けれども資本は種々の方法で彼を奪掠する。金貸は彼を奪掠する。彼の勞働してゐる職業でも彼は利用される。これにも拘らず彼は「獨立の紳士」だと考へてゐる。彼は自分自身の道具を用ゐて働いてゐる。外見からする彼は獨立してゐるやうに見える。彼もまた勞働者と混同されないやうに骨を折る。さうして彼は紳士の風を眞似る、何となれば、彼はこの心に紳士となる野望を懷いてゐるからである。かくて、彼は教會の鼠のやうに貧しいにもかゝはらず、彼の感情は勞働者階級よりは、彼の奪掠者に近くなつて來る。小ブルジョア的政黨は一般に急進的、共和的、時としては社會主義の旗色の下に集つて來る。小主人達の間違つた地位から彼等を下ろすことは、甚だ困難である。けれどそれは彼等の過失ではなくして、その不運である。

ロシアでは他の諸國と同じやうに、小ブルジョア的政黨は、人民社會黨や社會主義者革命黨やある程度においてメンシエヴィキのやうに、社會主義的民衆の背後に隱れてゐる。社會主義革命黨が地方の中產階級や金貸にその基礎を置いてゐたことは注意すべきである。

四　農　民

地方で農民の占める地位は、都會で小ブルジョアジーの占める地位と同じである。農民は彼等自身一つの階級ではない。さうして資本主義の下においては、彼等は順次現在の階級の二三のものに陷ち込むのである。どこの村落でも、幾等かの農民が職を求めてゐる。ある農民は遂にプロレタリアに陷ち込み、あるものは金貸になる。斯樣な過程は中產階級の農民においても見ることが出來る。彼等のあるものは、彼等の馬と離れて、農業勞働者となり、工業勞働者となることを餘儀なくされる。他のものは、精を出して、自分の職を勸め、さうして人手を雇ひ、機械を据ゑつけ、一言にして云へば、企業家即ち資本家となる。けれども農民は一の階級を形成するものではない。彼等の中で少くとも三つの團體を區別しなければならない。その第一は農業的ブルジョアジーで賃銀勞働者を奪掠するものである。第二は中產階級

で獨立に農業を經營するか、賃銀勞働者で奪掠しないものである。第三が半プロレタリアートとプロレタリアートである。

これらの團體がプロレタリアート對ブルジョアジーの間の階級鬪爭において取る種々な立場を見ることは甚だ容易である。金貸は常にブルジョアジーと結び、屢々地主と結ぶ。（例へば獨乙においては、大農業家は僧侶並に地主と同じ團體に加入してゐる。スウ井ス並にオーストリアも同樣である、ある點までは佛蘭西も同樣である。ロシアでは地方の金貸が、一九一八年におけるすべての反革命的陰謀を支持した。）半プロレタリア並にプロレタリアは自然に、ブルジョアジー並に金貸に對する戰鬪において勞働者側に加擔する。中產階級の農民の地位はもつと複雜してゐる。

もし中產階級の農民が、彼等の多數は資本主義下においては救はれる望みのないことを知り、且つ彼等の中の極少數のみが富裕者となり、他のものは乞食にも均しい生活を送らなければならないと云ふことを知るときには、彼等は勞働者を助けるだらう。然し、彼等の不運なことには、他の地位が都會の手工業者並に小ブルジョアと同じことである。彼等のすべては、その心の底から富者になりたいと考へてゐる。けれども彼等は資本家、地主、さうして金貸から壓迫される。故に彼等はプロレタリアとブルジョアの間を常に變轉してゐる。彼等は全然勞働者階級の見解を取ることは出來ないと同時に、地主を恐怖する。

このことはロシアにおいてはよく見ることが出來る。中產階級の農民は、最初地主並に金貸に對して勞働者を援助した。けれども彼等は共產主義下において不遇であることを恐れて、彼等は勞働者の敵側に廻つた。金貸は彼等を自分達の味方にすることに成功した。けれども地主から彼等が危險を與へられたときに彼等は再び勞働者を支持し始めた。中產階級の農民はあるときは勞働者の政黨（共產黨）へ加盟し、あるときは地方の金貸並に大農業家の政黨（社會主義革命黨）に加入した。

五　勞働者階級（プロレタリアート）

勞働者階級は「その鐵鎖の外何ものをも失ふことのない」階級である。プロレタリアートは資本家によつて奪掠せら

るるばかりでなく、歴史的發展の過程において、一つの巨大な勢力に結成される。さうして共に勞働し、共に戰鬪することを敎へられる。故に勞働者階級は資本主義的社會における最も進歩した階級である。故に勞働者階級の政黨は最も進歩した政黨であり、最も革命的な政黨である。

この政黨の目的が共產主義的革命にあることも極めて自然である。プロレタリアの政黨は斷乎としてこの目的の達成のために活動する。その任務はブルジョアジーと掛引することではなくて、ブルジョアジーを覆滅し、其の反抗を打破するのにある。共產黨は「奪掠者の利益と被奪掠者の利益との間にある塡め難い溝梁」を明かにしなければならない。（恰度共產黨の綱領がこれをなしたやうに。共產黨の綱領はメンシエヴィキの人々によつて署名されたものであるが、彼等は不幸にもこれを全然忘却して、今やブルジョアーと共に吾々に突進しつゝある。）

吾々の政黨は如何なる態度を小ブルジョアーに對して取るべきか。吾々の態度は既に述べたところで明かである。吾々は中產階級の農民に對して、前途の困難を顧慮することなく、プロレタリアートに味方し、その戰鬪においては彼等を援助することが彼等の利益であることを常に熱心に說かねばならない。ブルジョアジーの勝利によつては、たゞ金貸のみ勝利し、さうして彼等が新しい地主階級となることを彼等に示すのは、吾々の義務である。一言にして云へば、吾々は、すべての勞働者をプロレタリアートと了解あるに到らしめ、さうして勞働者の立場に立たせなくてはならない小ブルジョアジーと中產階級とはその生產の狀態から生れた偏見に充ちてゐる。吾々の義務は彼等に眞實の地位、即ち資本主義下における彼等の地位は絕望であることを說明するにある。資本主義下においては、農民の生殺與奪の權は地主が握つてゐる。たゞプロレタリアートが勝利を得、さうしてプロレタリアートの支配が確立されたときにおいてのみ生活は全然新しい局面を轉回する。乍然、プロレタリアートは、彼等のソリダリテと組織と、さうして強力な絕對的な政黨の援助のみによつて、勝利を得ることが來る。吾々は、新生活の價値を解し、プロレタリアートとして生活し、戰鬪することを學んだすべての勞働者を共產黨に加盟せしめなければならない。

戰鬪のために結成し、これを準備した共產黨の意義に關しては、獨乙並にロシアの實例によつてこれを學ぶことが出來る。進歩したプロレタリアートを持つてゐる獨乙では戰前まで、ロシアのボルジエヴィキのやうな戰鬪的政黨が存在しなかつた。カアル・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルヒ等が共產黨を作つたのは、戰爭中においてゞあつた。故に一九一八年並に一九一九年の數次の反亂にも拘らず、獨乙の勞働者は、そのブルジョアジーを征服することは出來なかつた。ロシアにおいてはボルシエヴィキ黨のやうな確固たる政黨があつた。故にロシアのプロレタリアートはよい指導を受けることが出來た。さうしてすべての困難にも拘らず、ロシアのプロレタリアートは團結的戰鬪に入つた第一のプロレタリアートであり、如何に迅速に征服すべきかを知つてゐた。ロシア共產黨はこの點において他の共產黨の模範たることを得る。彼等のソリダリテと訓練とは有名である。それは最善の戰鬪的政黨であり、プロレタリア革命の指導的政黨である。（加田哲二）

プルウドンのノオトから

(近代の女) 一

アルトマイヤアの書いた和蘭土の女攝政、マルゲリイト・ドブウルゴオニユの傳記(一八四一年出版――譯者)には、コルネリウス・アグリッパの婦人論が引用されてゐるが、これはガンド弁イルが翻譯した De Feminei sexûs Praeczllentia(一五三二年出版――譯者)のうちから抜萃したものだ。

「男はアダムである、即ち自然であり、肉體であり、物質である。女はエエヴである、即ち生命であり、靈魂であり云ふに云はれぬ神聖なる萬能の神秘な四成語〇〇〇或は×××である。斯くして女は天地創造を完成せしめるものだ。女に生命を與へた後、神は斯様に完全な創作に疲れたものの如くほつと一息した。女は天國に呱呱の聲を擧げ、男は畜生の間に其生を享けた。女は精神により、美により、將又、此の神格の反映、此の天光の閃きによつて男に優つてゐる。極言すれば、女は神そのものである。」

引用者は續けて云ふ、「此の珍書のうちには、著者が婦人の境遇に就て傾聽するに足る、非常に進歩した意見を述べてゐる多くの章句がある。何故と云ふに、吾々の社會に存在してゐるものは、都べて此の形態の柔味を、此の嫋かさを、此の魅力を失つてゐるのに、而も世人は此等を覓めて息まぬではないか。して其の譯は? それは男だけがその胼胝の當つた手を作物に掛けて、女性には、換言すると何事でも出來ないことはない此の優しさには、何一つとして造らせなかつたからだ。全體だれが家を建て、像を彫り、文を書き、繪を畫いたのか? それはみな男であつて、斷じて女ではない。藝術は本來、綜合せねばならぬものであるのに、唯だ一つの性のみを所有する、そは男性である。だが云ふまでもなく、藝術が最も強い性の能力と最も弱い性の傾向とを結合するの日が來るだらう。その時に理想的表現の美の僞の

時代は到來して、その實を結ぶであらう。」

さてさて、これは恐れ入つた！ 縱し男が一切を創造したとしても、それは女には天才もなくまた獨創力もない爲だ。女は知らぬ！ その他に何の取得がある？ 藝術といふものは、假令それを創作するものが男であるにせよ、その性質上、女性的なものではないか？ 藝術は隨分と女性化の傾向があるではないか？ 婦女子がそれに喙を容れるといふことは、藝術を氣の拔けた麥酒にし、その名を汚す所以だ。

他の點に於て、アルトマイヤアは、アグリッパの論題は一のパラドックスに過ぎないもので、そのパラドックスの蔭に隱れて彼は聖書、その署惡史、及びその敎義に反抗して思ふ儘に振舞つたのだと認めてゐる……他の著書に於ては、アグリッパは前に引いた書に於ける程女に媚びずに女性に就て自家の見解を表明してゐる。此の書は題して De incertitudine etvanitate scieutiarum atque artium declamatio（一五三〇年出版——譯者）といふ。

一般に、アグリッパに從へば、有ゆる藝術、有ゆる科學、有ゆる人生の職業といふものは唯だ不幸な若しくは無用な結果に歸著するものだ。

彼はいふ、「生活の有ゆる眞理は、私をして味氣ないものにそれを思はせた。學問の眞理は倦怠もて私を惱ました。友情の眞理は私に陰影を見せて實體を隱した。若し夫れ戀愛の眞理に到つては、女と一緒に暮すのが幸福である爲にと云ふより、寧ろ如何に戀愛が幸福から遠いものであるかを學ぶ爲に、私に女を識らせて呉れた。」

* * * * *

吾々は女を識らないつて？

一體、識るとはどういふ意味だ？——何人も、彼の淸淨無垢は決して疑ふべくもなかつたフエヌロンより女をよく識らなかつた。

識るとは、私生活に於て且つ有ゆるその行爲、表現、狀態に於て觀察するといふことだ。

そは自然狀態より最高度の文明に到る、歷史に通曉するといふことだ。

そは物理と倫理を研究し、精力を測定し、産物、著書、勞作、作風を判斷するといふことだ。
識るとは、有ゆる種類の人間、青年、老人、良人、情人、處女及び細君の告白を聽取したといふことだ。
識るとは、どどのつまり、今度は自分が家族の情愛を、家族と父性といふ其二方面に於ての愛を身に親しく感じ、兄弟、息子、友達、親友、父、其他であつたといふことだ。
要するに、識るとは、經驗に依てでなければ、尠くもと觀察こ據て、戀愛の衞生學と病理學とを研究したいといふことだ。
熱病を識る爲に、自分が熱病に罹つて見たり、或はペストを療治する爲に、自分の體にペスト菌を接種して見る莫迦な醫者があるか？　蝮蛇や獅子を識る爲に、一々蝮蛇に咬まれたり、或は獅子に絞められたりして見なければならなかつたか？

（吾々は女を識らないいつて？）そりあ小娘や、青二歳の誇大忘想狂や、下劣な遊蕩兒やの非禮といふものだ。
併し世間では實際の經驗だけを信用するから、先づ初めに極度の老境に到るまで、色情は持續するものだといふことそれは唯だ衰へるだけで消えはしないといふこと、五十男は彼が體得した長い經驗と、どうしてもそれで片を附けなければならない意志とを別にすれば、二十の若者と同じ狀態に在るものだといふこと、隨つて最善の批判者は最もよく見た者だといふことを言つて置く必要がある。

* * * * * *

お神さんに綺麗な人はないわよ。——これが少女の抗議である。
吾々はその通有性に於て、即ちその體力、德性、智力の全體に涉つて考察された女性といふものを論ずるのだ。
以上の見方に從ふと、或る女の美は亦他の女に奴隷になる。而して一通りの心得と善良な習慣を修得することは、また事に臨んで敏捷に、物靜かで控目に起居振舞ふことは、どんな女にも、やらうとさへ惟へば、出來ることである以上美といふことはさまで大切なものではない。して見れば、私が美は凡ゆる女に共通であると云つたとて差支ないではないか。

* * * * * *

そんなら、女は何でそんなに不平を鳴らさねばならないのか？……
さう、疑ひもなく、不滿なのも無理はないやうな女が澤山にある、けれども彼等の不滿の原因は性のそれではない。
それは丁度かれらの情郎の勝利が權利のそれではないやうにね。

* * * * * *

律義な女は、話が偶ゝ彼等の性に及ぶと、莫連女とぐるになるといふ弱點を持つてゐる。そこで彼等に百萬遍も同じ事を繰返して說く必要が何處にある？ 女といふものは、體力、天資、才智、哲學、政治、藝術、それから事務とか云ふ點に掛けては迚も男には叶はないが、併し家事上の能力の實際に於ては、恐らく英雄的資質よりもつと得難いものかも知れぬ、此の目先の道德觀念に於ては、或種の長所を持つてゐるとは、一般の定評だ。これは天成の多感性に、彼等の性の激發性に、彼等の理想主義に、彼等の敏感性に基いてゐる。お氣の毒ではあるが、彼等が我等の上に掌握してゐる此の特殊な優越性は、我等男子がそれ以上は到達することが出來ぬ、同量の不道德の力に依て平均されるものだといふことを、更に玆に言はねばならぬ。其處からして斯ういふことになつて來る――立派な女は女性のうちのエリイト、多數の中に溺死した、極めて小數のエリイトのみを形成するのであるから、單なる感情の上に依據した、女性の平均道德性は、男子の平均道德性に劣つたものと之を見做さなければならぬ。

　これは故意に工夫した牽强附會の說ではない。そは事實の論理的歸結である。して見れば、私が何を其處に企て得よう？……

　あなたは實體な婦人です、ところで私の今言つたことはあなたを激昂させますか？――私はあなたを聖列に加へる、それどころではない。私はあなたの前に跪く、私はあなたを拜み、そうして私はあなたを愛する。而して私の口から出た此の最後の言葉は、私が私の感情を言ひ表はす爲に用ゐることが出來る最も力のあるものだと云ふことを、どうか本當だと思つて下さい。何故なら、縱し私が普通の女にしか注目しないとしても、私はやはり彼等に對してさう感ぜざるを得ないから。あなたは善良な婦人である、そうして私の眞心と私の理性はその善良な婦人の前に平れ伏すのだが、私はあなたの性を大して愛しもしなければ、尙ほ又尊敬などは更更しないのだ。

　そこで、それ以上あなたは何を望むのか？ 自然の樂園に遊ぶ、原始狀態にある女は、太平洋諸島の女の如く、能く吾々の性的本能を滿足させることが出來る。併し乍ら彼女は吾々の愛情と吾々の尊敬とを受ける權利をば殆んど有つてゐない。而して文明の女が此の原始狀態に近づけば近づく程、愈よ彼女は、縱令それが肉慾と官能のそれではないにせよ、何等かの權力を行使するの權利を失つて來る。それだから、世人があなたに要求してゐるやうに、物靜かに、愼ましく、內氣で忠實に、勤勉にして貞淑に、自制あつて用心深く、從順にして謙遜におなりなさい。さうすれば、啻に吾々はあなたの價値を批議しない許りでなく、吾々はあなたを祭壇に安置して、進んであなたに靈と肉とを捧げるであらう。

　以上に婦德を澤山列擧したが、何もあなたはそれに辟易するに及ばぬ。要するに、歸する所は常に同じことである。家事を巧く、といふ此の言葉が一切を云ひ盡す。戀愛も、自尊心も、また何物をも其爲に喪はぬであらう、と私はあなたに誓言する。（エリゼ・ジロオ）

新社會

一

人間の社會が、完全に社會化された事を語り得る、何等かの徴候又は標準があらうか？

一つある。そして唯一つある、即ち、何人も勞働すること無くしては、所得を得る能はざるに至つた時が、それである。

これは社會主義の徴候ではある、がその目標ではない。それ自體、決定的のものではない。若しも、各人が生活するに十分なものを持つ時は、何によつて貨幣或は貨物を得るかは問題とはならぬ、何ものの爲にでもなく、得ようとても亦關する所ないのである。そして、不勞所得の制度の遺物は常に遺る。老年に對する貯蓄の如き、これである。

目標とする所は、如何なる形態の所得の配分でもなく、財産の分配でもない。平等でもなく、勞苦の低減でもなくまた生の享樂の增大でもない。そは無産者的狀態の廢止である。そは世襲的終身奴隸階級、名もなき傳來の奴役、同一の名によつて呼ばるゝ二人の中の一人の廢止である。そは傳來的な社會の、二重成層の抹消であり、また同胞が同胞を奴隸化し、古代文明のそれの如く、現代文明の基礎を奴隸制度の上に置き、吾々のあらゆる行爲、創造、享樂を害はしむ、西歐の惡風の廢止である。

これ等とても亦、究極の目標ではない――經濟や社會はどうして究極目標を語り得よう――地上における總ての努力の、唯一完全な、最終目的は、人間の靈魂の解放である然し乍ら最終の目的は、政治學の行くべき道は示す事はないが、その方向を指示する。

無産者狀態の廢止として私の誌した、政治的の目標は「來るべきものに就て」（註・一）に云つた樣に、財産を教育に關する適當な政策、殊に相續權の制限によつて、密接に近づき得るであらう。この目的の爲には、嚴密な意味での社會化は、必要がない。然し乍ら、遠大な社會化政策――私のこゝで言及するのは、生産手段の單な、機械的國有化ではなく、根本の經濟的社會的改革である――は尙、必要であつて且緊急を要するものである。何故ならば、そは、責任感を換起し之を鍛練し、又不精な統治者階級の手から、時と方法との決定權を奪ひ返して、現代に於ては淺薄なデモ

クラシーの偽に、後援なく、立てる、より適切な資格のある全民衆の手に渡すからである。何となれば、唯政治的人物の間にあつてのみデモクラシーは、民衆支配の意味を持ち、教練されぬ、非政治的人間にとつては、そは單に、俗間の酒場に社會を論じ、雜談を試みると異る所ないのである。獨逸ブルジョアのデモクラシーの象徴は、居酒屋だ。そこから教化が開展し、そこで意見が形成される。そこは政治的黨派の集會場であり、演說者の演壇であり、選擧の投票所である。

然しながら、この遠大な社會化が實施された徴候は、不勞所得の斷絶にある。私はこれを徴候と稱し、規矩とは名付けぬ。何となれば、吾々は國家の完全なそして眞正な民主化と、各人に平等の機會を與へる教育制度とを以つてその規矩とせねばならぬ。その時にして初めて吾々は、階級と文化の獨占を破壞し得たりと叫び得る。然しながら、不勞所得の廢止は、階級獨占の最後の形式即金權政治の崩壞を示すものであらう。

これらの目的が實現された曉には、如何なる社會が來るべきかは想像するに、容易ではない。殊に、吾々が、現時の露國の制度やハンガリー國の過渡局面の如き、僅かな期間に就て見ず、永續的な、確定した狀態を考へる時に於てそうである。ボルシェビストのそれの樣な、獨裁的寡頭政治は、こゝでは思考の範圍外に存し、よき意味の社會物語のウトピアの如きは何等の價値もない。彼等はすべて、實際の可能範圍を十億も超ゆるほど誇張した、一般の安寧狀態を、幸福なほど無智な假定に立脚して考へて居る。

現時、吾々獨逸人、惹いては歐洲人の亦他の諸國民が、民衆の上下動搖に際し、向ひつゝある社會狀態の知識を得る事は、吾々をして只に、大なる社會問題に對してのみでなく、吾々の全政治的狀態に對しても、その態度を決定せしめるものである。吾々の目的を定め、決心を形作る時に吾々は、積極的衝動によつてゞはなく、消極的衝動によつて——何ものかを得んとする努力ではなく、何ものかを避けんとする努力によつて——衞られねばならぬと云ふ事はまつたく獨逸の傳統と一致する所である。この努力、その實は回避であるが、これに對して吾々は、社會主義との積極的名稱を與へる。そして吾々は、求めて居た所のものが得られた時に、——平凡な警句ではなく眞實に——事情が如何なるものとなつて現はれるかに就いては、毫も心を煩はさいのである。

これは單に、想像力の缺乏から生ずるのではない。全般から云つて、獨逸人が政治的傾向に對して了解を持たぬに由る。吾々は商業、科學、思想に於ては、多少教育されてゐるが、政治學に於ては、東スラブの農民と、その程度を略同じくしてゐる。よりよい所で――然も、常々ではないが――何が、吾々を壓迫し、迫害し、困惑せしめるかを知る位なものである。吾々は吾々の禍患を知る。目的を曉つたと考へるのは、唯それを倒樣にした時に於てのみである。「警察官が非難さるべきである。戰爭狀態が罪を負ふべきである。プロシャ人が責めらるべきである。ユダヤ人が惡いのである。英國人が咎めらるべきである。僧侶に罪を歸せらるべきである。資本家が非難さるべきである。」こうした　思惟過程は、よく了解する事が出來る。若しも吾々に吾々のよき性質と、組織を愛した二世紀の歷史がなかつたなら、丁度スラブ人と同じ樣に、吾々の原始的な政治本能は、百姓一揆や宗教鬼爭や、妖姿の魔法や、ユダヤ人の餌の形となつて、「組織立つた暴動」「註・二」の中に現はれたであらう。鳴り響く吾々の愛國心はかゝる氣質の明らかなる徵證を示す、即ち、國家主義、半ばは、妖怪攻略そして尊き靜けさ、熱心な自己獻身、政的理想に對する努力等は決して存在しない。

獨逸は今や共和國となつた。誰も眞面目に欲しはしなかつた。吾々は遂に議會政治を制定した。誰が欲したからでもない。吾々は一種の社會主義を實施した。誰もそれを信じてゐたものはなかつた。吾々は常に云つた。「人民は王公と共に生を享け死を共にせん。吾々の最後の血潮をホーヘンツオルレンの爲に流さん」と。誰も之を否定しなかつた。「人民は一系の君主により統御せらるゝものである。その將官の爲には、火中に飛び込む。獨逸の國土を敵の足下に蹂躪せられんよりは死を選ぶ」と。さてこれ等は妄想だつたのだらうか。否、決してそうではない、十分に誠實だつたのである。唯深くは進まなかつたのである、それは、その代替物の可能性を十分に知る事なしに、信賴してゐた誠實だつたのである。

代替物が可能となり、眞實となつて現はれた時、吾々はポメラニヤの小屋に住む人に至るまで、共和主義者と變じたのである。陸軍のストライキがその軍紀を破壞し去つた時に、將官は誤り扱はれたのである。戰爭が負けになつた時、艦艦が破れた時、そして祖國が汚がされた時、吾々は踊り初めたのである。

これを輕佻なりと稱すべきであらうか、決して然らず、唯政治的理想像力を欠く事、小兒の如くあつたからに由るのである。靈の深さと才能の訓練に於ては、獨逸人の足許にも及ばぬ、ポーランド人は一世期の間、國家的統一なる思想以外には何をも抱かなかつた。その間、吾々は消極的にその領土を統治して來たのである。吾々のこの軍隊教練も、この戰爭慾も、領土を渴望し、侵略を代表するものではなく、單に、何ものをも欲せず、何物をも想はず、時々刻々、物ごとの移り變りゆくに委せる、小供らしき從順さからであると云はば、如何なる英國人も、日本人も、米國人も決して了解する事を得ないに違ひない。

吾々獨逸人は、國民性の形成體を支配する術を殆んど知らぬ。深奧に對する人の能力は、個人としても、團體としても、決して、深奧ではない。それは民衆の間にあつて、單なる靈の粘化性、軟性となつて現はれ來る。集團的怜智の能力と、その力とは、唯個人から、人事に關した乾燥した智識と、利己主義を要求するのみであらう。吾々の政治的弱點は單に、靈の力の表現であると云ふのは過言であらう、何故ならば、後者は商業上の成功の障害とはならないからである。怠惰と、權力の信用とが、その分前を持つべきである。

然し、吾々は社會民主々義の、古典的な祖國ではなかつたか。そうして、急進派の土地と化しはしなかつたか、洵に、吾々は、權力に從順に、訓練に耐ゆる、組織立てられた不平の模範的國家であつた、今もそうである。そして亦吾々からその最も欲求して居る力——即、生產的な懷疑論と、具象的に對する想像力とを奪つてしまふ、反セミ族の國である。組織立たれた不平と、政治的創造とは、同じものではない。獨逸の後期マルクス派社會主義ほど思想貧困の社會主義及急進主義は未だ、無かつた。その半ばは書記の仕事であり、殘る半分は、煽動者等の最も安價な空想である。

獨逸革命と云ふ大事件が、好んで引起されたのではなく背返の結果であると云ふことほど重要な意味を持つものはない。吾々を自由にしたものは、吾々自身ではなく、その敵である。吾々の破壞が吾々を自由にしたのである。吾々が休戰を求めた、その前夜、否、カイザーの逃亡のその前日にさへ、恐らくは衆民投票が行はれたなら、社會主義に反對して、君主政治の爲に、大多數の勝利を得せしめたに違ひない。「鞭をもつて、その兒を訓戒する者は鞭によつて

のみ悟る」私が戰前に、屢々繰返した言は事實となつたのだ。

今日、すべてのものが、沸騰し、醗酵してる——これは決して社會主義の御蔭ではない——に際しては、あらゆる智的の仕事は、「社會化」と「勞農政府」との間に、躓きさまよつてゐる社會民主主義の上に出で、その外にあつて爲されねばならぬ。正統社會主義も尙、「よりよき禍患」である、佛語の所謂「最後の手段」(Pis aller) である。「事態は、あまりに惡い。だから、どんな變化も、より望ましい」のだ。何がより善く爲し能ふか、吾々は、社會主義者の問答法で教へられて居る。然し、如何にしてそう爲すべきか、如何にして、如何なるものが來るべきか、この唯一つの重大な問題は、見當違ひの問と見なされて居る。吾々を富有にするものは「余剩價値」であると、どこかゝら、ためらふ、不眞面目な聲で答へられる、そして私が他で云つた樣に、これは丁度一人宛平均二十五マーク宛を生み出すものである、と。一千五百萬人の成人が、政治的集合の霧と、鸚鵡言葉の囁きを通して顯はされた「望み滿てる國」へと押し出される——そしてそこから誰一人、葡萄の一房を持つて歸つても來ないのである。

若しも人が、聽衆に問はず、煽動者に尋ねて、彼等が、如何なる國を、望みつゝあるかを知らうしたならば、恐らく次の答を得よう——おど〳〵した、質朴(ナイーヴ)な、そして出來るだけ深刻そうに、拔目なく——それは、最早や、富める者の住む事なき土地である、と。

洵に、眞理ある、眞實らしき答である！ 然も、根本的の誤謬が、その底に、靜かに、潜んで居る。諸君は、富める者の存在しない所には、もはや、貧しき者も存在しないと、想像なさいますか？

「え！勿論だ、どうして富める者なき所に、貧しき者あらう！」然し、貧しき者は未だ絕へぬ。最早や、富める者もなき土地に於ては殘されたる者は、唯貧しき者ら、極く貧しき者らのみなのである。

このことを知らず、そして社會主義なる人、その人は單に牧者か賤民である。このことを知り、そして隱し欺く人その人は欺瞞者である。この事を知り、そしてそれにも係はらず、否、その然にこそ、社會主義者である人、その人こそ、未來に生きるべき人である。

民衆は滿足する、とまれこれが時代の趨勢であり、この流れを渡らねばならぬとの漠然たる感情を以つて。より考

へ深い人等は、時代の悪弊を惟ひ、最後の手段 Pis aller を以つて、片付けねばならぬと決心する。然し、責ある思索家たちは、民衆が導かれつゝある、土地を、研究しなければならない。最早や、富める者も住まはざる國、勞する事なくしては所得を得る能はざる土地が、如何なるものであるかを、吾々は、知らねばならぬ。吾々が「新社會」と呼ぶ所のものを、正しく形づくる爲に、これを了解しなければならない。

二

問題はさほど、緊急なものではない。數百年に亘る社會的世界革命の進路を阻み得なかつたのは、確かな事であるが、また、その方面の過程も、初めの急激な運動を、保持してゆかれない事は、確信することが出來る。勝利を得た國も、敗北した國も、極力その種々な局面の轉換、交替の爲に努力しなければならない。何故ならば、吾々が今日觀る所の歷史的發達中には　組織的發達と病患の現象とが混合してるのである。既に、健全なる國家の社會主義は、病める國家の社會主義と異なるものなる事を知る　ボルシエビスト病に罹つてる人々が、その病毒を世界に傳染せしめ樣と夢みるも、無駄な事である。

中央歐羅巴の吾々の國土に、日々、年々、起る小さな諸運動を、前以て決定する事は不可能である、それ等は、小さな、偶發的、地方的の外部力に起因してるのであるから大きい、必然的な事件の發出は、豫知する事が出來るが、それに附隨して生ずる、偶然的な行流、逆流を論ずるのは愚な事である。防備のない家が、穴藏から屋根裏に至るまで、爆發物で充たされた時は、何時かそれが、爆發することは知り得る。然し、それが、日曜に起るか月曜に起るか朝起るか夕起るか、又戸柱が吹き飛ばされるか或は殘されるか、などは、尋ねるだけ、愚かな事であらう。

歷史的見地から云へば、急進主義が此度彼處に、浸入しようが、反動と復古との勢が、はかない勝利を得ようが、大した重要な事ではない。歷史上の大運動は、大團圓の完成の時の樣に、除々に生ずるものであつて、この遲々たる事それ自身が、反動かの樣に見えるのである。吾々は、大異變(カタストロフ)には馴染んでゐない。吾々は、その最初のものを、作り出しはせず、それによつて苦しんだ。吾々は、急激な運動の後には容易く船暈に苦しむ――例へば前帝國議會を考へたまへ――その吾々は、確かに　吾々が革命の第一の激

浪に沈んだ後には、貴族的、君主的、金權的の浪漫主義や軍旗、戰捷の光輝に對する憧憬を經驗するであらうし、又確かに、智識に於ては第四流どこの招かれざる演説者の、勢なき、機械的博愛主義に對する反抗や、雇はれた騷擾者等の單調な、不眞面目な激論やその、躁暴な訓練に對する革命や、怠惰に對し、無智、貪慾、普通科學的經濟と假面を被つた誇張に對し、また下流階級から起る、獸的な、强暴な攻擊に對する反感を經驗するに違ひないであらう。そして、それ故に、吾々は、偉大な個人主義と、人の感情を頑くなにする、他國の傲慢と華飾とを讃美し、惡眞似する樣な、今迄と反對の性質の愚かしさに到達するであらう今日は擧つて急進主義贊成の、聰明な、戰爭利得者連は、間もなく矢車菊を彼等の鈕孔に差してゐるであらう。

三度、吾々は變節者らの、天眞爛漫な、無恥の標本を見せられるであらう。改宗の精神的經過は、注意に値する、ポーロは改宗勸告者たるべく、改宗したのである。然し乍ら、失敗した一地位から他の地位へ移り行く、然も、若し必要ならば、再び急ぎ歸り來るに十分な決心と、そして常に他人を指導せんとの要求を持つた、聰明な相場師の急ぎ樣は、生活は心的確信の事件ではなく、うまい儲けを得る事だとの、驚くべき事實を示すものである。

變節運動は、判斷も出來ない近視眼群集が安價な文句の二三に心を一杯にして、迅速な戰勝によつて、列强の諸事情が强まる事を、期待し、一方、坐確したまゝ取殘されるのを恐れた時に初まるのである。最も著古した自由主義も重要に思はれる、彼等は「光り輝やく鎧」を喧ましく求む他の方向に逃れ得ない爲に、止むなく前進する、精神的肉體的に、最も慘めな犧牲者も英雄と稱せられた。吾々の國語の最も男らしい、唯、最も自由なる者、最も偉大なもの最も尊敬さるべきもののみが値する、その言葉は、斯の如くして墮落せしめられる。戰爭に反對し、「勝利の日」に反對する凡ての言葉に、侮蔑を灑いだ、裏切者の憎みと怒りとを知るものは、如何に全民衆が、恥げもなく、悲しみもなく、彼等の誤解をさらりと水に流してしまふかは了解に苦しむ——否、むしろ知りすぎて居るであらう。今日に於ては、吾々は再轉化した變節者によつて嘲笑され、説教を聞かされる。明日は、三度轉化したものによつて嗤笑されるであらう。

然しそれは關する所ではない。現代の原動力は、商館から來るのでもなければ、街上より起るものでもない。また

演壇、說教臺から生ずるものでもなければ、教授の椅子から發生するのでもない。昨日、今日また明日の、騒々しい躍進は、最も外部の周圍の恐ろしい運動にすぎず、中心は唯、星の如く靜かに、動くのみである。

吾々の觀察には、吾々は、前進運動、逆進運動の數期を跳び超えねばならない。そして彼等から何らの感謝をもされないであらう。一人にとつて餘りに保守的である事が、他の者に對しては餘りに急進的であらう、審美家は怒つて吾々には筋力がないと罵るだらう。吾々を待つて居るものは、愚人の樂園ではなく、人道と教化との一時的迷變の危險である事を示したならば、手輕な空想家連は、彼等の二つの鸚鵡言葉で吾々を罵り倒すであらう。また、義務の觀念からと、世界の進化に調和する爲に、事物の核心の正義を信賴して、險しくとも、危險な道を步んだならば、吾々は權力の崇拜者と人數の嫌惡者から侮蔑されるであらう。

然しながら、吾々の立場として、吾々は權力崇拜者にも亦群集にも、惡事を周旋するものではない。吾々は、從はうべき何等の權力をも持たぬ。吾々の愛は、民衆に進む。然し民衆は、集合の群集でもなければ、勢力團體の全體でもなく、又新聞紙や論議俱樂部でもない。民衆とは、醒めたるも眠むれるも、凍えたるもの、息つまれるもの、即ち、獨逸精神の迸る泉を云ふのである。こゝに吾々が論じなければならぬものは、目下も今後も、人間性の海にそゝがんと流れつゝあるその精神に就てゞある。

三

來るべき社會化された社會の、標準として吾々の示したものは、物質的のものである。然し乍ら、一時代の精神的狀態は、物質的設備をもつて、決定し得られるものであらうか？それでは、唯物主義への信仰を自認するものではなからうか？

吾々は、標準に就て語つてるので、最風の原動力に就てゞはない。然し乍ら、私は唯物史觀——機械的歷史觀に趨るのを、避けたいとは望まない。私は一度ならず、それに就て他の著書で述べたが、聯絡をとる爲に、その大體そこに繰返さう。

個人の運命を決定する法則は、聚合的運動の歷史の中に再現する。人の經歷は、その體格、表情又はその環境によつて規定されるものではない、然し、これ等のものには、或種の關聯と類似が存する、それは、彼の智的、靈的生活

の過程を決定する法則と同一の法則が、肉體的、實際的の形態に、相反影するからである。吾々の經驗の各々の瞬間吾々の浸るすべての狀況、吾々から生ずるもの、吾々に起るすべての出來事は、みな吾々の性格の表現かまたはその產物である。洵に、吾々は人間としての限界に屬さなければならぬ。吾々は、水中に棲み、他の星に移り住むの自由は、持たないのである。然し、この廣い限界の中に、吾々は皆各人の生命を、形付くる事を得るのである。人を觀察する事、卽ち彼の仕事、運命、體格に表情、系累から結婚彼に屬するものに、彼の交はるものを觀る事が、すなはち人を知るの所以である。

　この見地からすれば、凡ての社會、經濟、政治上の計畫は無益であらう。何とならば、若しも人が非常に最高のものであるならば、彼の後見をする必要はないのである。然し乍ら、これ等の諸計畫が、吾々が人間としての經驗中に見る樣な、一般普通人の意志の力——概して云へば、外的事情の或程度以上の壓迫に突進し得ない——を、思ひ廻らせば、再び、相對的に重要さを持つのである。そして亦、これ等の諸計畫は、實に人の意志の表現の一部である、何故ならば、これによつて、人格の聚合體は、その周圍と戰ひ、その同時代の世潮と鬪ひ、彼等自らの運命を、自由に作り出すからである。

　一團體の內的法則は、それを形成する、各個人の法則と調和する。國民の或種の意志と性格上の特色は、貧と富、地勢と氣候、又は海岸線無きか否か等によつて、條件付けられたり或は進んで强ひられるものであるとの事實は、これ等の諸外的狀態が事實、人の上に配分せられるのではなくて反つて人によつて、望まれたのである事を陰蔽してしまひ易い。人々が、遊牧生活を欲し、或は海濱生活を欲し農業を欲し、又は戰鬪を欲するのである。若しも、その力が十分に强い時は、その希望を遂げる權力を得、然らざれば、敗北し、滅亡するのである。安寧と文化か懶惰と從屬又は勞働と精神的發達の間を決定するものは、亦、同じ意志と性格とである。ベニス人はたま〳〵彼等が富有であつたが故に、建築や繪畫に惠まれたのではない、英國人はたま〳〵彼等が島國に居を占めたが故に、海軍力を握つたのではない。ベニス人は、彼が自由と、努力と、藝術を意欲したからである。アングロサクソンは、彼が海を希ひ望んだからである。

　戰爭は神の裁きを體現するとの一般的な、政治信仰には

幾分かの眞理は存する。とに角、性格は戰爭によつて裁きをうける。人は絶望の狀態には「持ちこた」へられるものとの政治的意味に於てゞはないが、戰爭に至るまでの歷史政治と指導者の能、不能は、性格の問題であるか故である——吾々にとつては、それは、懶惰、政治に冷淡な事、階級支配、俗な自負心、利益慾等の問題にすぎなかつたのである。吾々の武裝した軍勢の領主が、權力に飢えた兵營と居酒屋の腰掛の樣な諸官廳、討論機關の要求によつて、神の召に應じて、正に英國——唯、彼等が新聞の記事によつてのみ知れる英國——を打ち懲らす義務を負ふて、進軍した、その時の吾獨逸に於けるほど、この神の裁きの信念が不敬な位、誇張されたことは、何處にもない。今日、この誇張は屈辱によつて報酬せられた、何となれば、神は支配し得ないものと判り、無智な神の冒瀆者は、靜かにそして齒をむいて、彼等の爲さんと欲する事を遠慮なく判斷せよと、同じ裁きに訴へた時に、正しきものは彼等の敵であつたと承認せねばならなかつた。

　靈魂と運呼との靈肉交錯に就ての、この簡單な觀察をすました後には、私は、簡約するする爲に、新秩序の精神が宛もその物質的構素によつて決定されるかの樣に云ふかも知れぬが誤解ない事を望む。實際に於ては、物的要素は精神の中に結合するのである。構成體は、觀察するのが容易である故、吾々はそれを論議の出發點とするのである。

（ラーテナウ原著——一柳政夫譯）

表現派の藝術（二）

カール・ヤコブ・ヒルシの筆になるカール・リープクネヒトの肖像です。

自由人の手帳

「ボルシェヴキの虐政の話」

無政府主義者の立場からボルレエウ井キ革命を批評したものとして、私は嘗つて一昨年の「批評」でクロポトキン翁から英國のボンドフ井ールド孃へ當てた手紙を紹介したことがあつた。復活後の「批評」でもバークマンとゴオルドマンの訴へを載せたことが二度あつた。こゝにはエムマ・ゴオルドマンが「ニユー・ヨーク・ワアールド」で最初に發表したといふ「ボルシエヴ井キの虐政の話」の大體を紹介したい。この一文はアナーキストによつて書かれた從來のボルシエヴ井キ批評のうちで一番新らしくもあり、且つ一番代表的なものだと思ふから、ボルシエヴ井キでも、でない人でも、みな一讀すべきものだと、私には考へられる。

一、何ものがロシヤ革命を破滅させたか。

エムマ・ゴオルドマンは失敗だといつてゐます。アメリカを追はれ、エリス島からボロ船に乘せられてロシヤに歸つてしばらくロシヤ革命の渦のうちに立つてゐた彼女は、彼女がまだロシヤに入る前までは、ボルシエヴ井キ革命に少からぬ望を抱いてゐたのですが、今日では何の保留もなしにロシヤ革命は失敗だと斷言してゐます。彼女曰く、「資本主義を仆し、共産主義を樹立する、急進的な社會的及び經濟的變化としてのロシヤ革命は、失敗だといはなければならぬ」と。

何ものがこの革命を「失敗」に終らしたか。エムマ・ゴオルドマンは二つの要素を擧げる。一つは反革命の要素である。ロシヤの「愛國者」——カデト、王黨、社會民主黨右翼が、ロシヤ革命を失敗に終らしめるために、諸外國の對露干渉を求めた。その聲は世界の到るところに滿ちた。その結果は潰れた對露戰爭で、數百萬のロシヤの同胞と、外國からの無辜を殺戮したのである。彼等の罪は永久に責めなくてはならない。このことは誰れも知つてゐることなのである。誰も否むところではないのである。しかしゴオルドマンはこの反革命の要素を算へるだけで滿足してゐるものでない。「この革命を潰滅した種々の要素を數へる場合に反革命の要素によつて演んぜられた役割だけを指摘するだけでは充分でない。」ロシヤと協商國の干渉派が、「ロシヤ革命の死によつて終りを告げたこの大社會劇」における唯一の役者ではなかつた。革命派のほかの他の役者があつた

他の役者といふのはボルシエヴヰキ自身のことである。」

ロシヤ革命は、恐らくその生れた時に運命が定まつてゐた。ロシヤから彼の最善の人間を奪ひ、彼の血を絞り、彼の土地を荒廢せしめた、四年間の戰爭に續いて起つたので革命は、世界の諸國からの狂的浸撃に抵抗する力をもつてゐなかつたのだらう。

ロシヤの人民は、大爆發に對しては充分な勇氣をもつてゐるが、除々の、苦るしい、革命時代の日々の要求に必要な忍耐を欠いてゐると、ボルシエヴヰキは認めてゐます。私はそれが眞實だとは思はない。

「しかし、この論點が縱令立派な根據のあるものだとしても、しかも尙ほ私は、革命を破壞し、人民の首に專制主義の軛をかけたのは、ロシヤの內部においての無感覺、殘忍な方法ほど、外部からの攻撃が災ひしてゐるのではないと主張する。」彼女は、ボルシエヴヰキのマークス主義的政策が、除々に革命における人民の信仰を覆した要素だといふのです。

革命について何が最大の危險であるか？外部的な攻撃か內部の人民の信仰の痲痺か。若しこうした疑問があつたにしても、ロシヤ革命はこれを解決した。といふのは、協商國の金、人、軍需品によつて後援された反革命派は全然失敗した。その失敗も、赤衞軍の力よりは、凡ての攻撃に抵坑した人民自身の革命的狂熱によつてである。ところが、この人民の革命的狂熱にもかゝわらず、「ロシヤ革命は悶死をとげた。」ゴオルドマンはこういふのである。それならこの現象は如何に說明したらいゝだらうか？

「主要原因は手近にある。」

手近とは何處であるか。ゴオルドマンに從へば、革命の成功のためには、その革命が常に一般人民に、「革命の光」を示し、人民をして常に「生ける、皷動する、革命の脉博」と密接させておかなくてはならない。他の言葉でいへば、常にこの革命が彼等自身の革命で、彼等自身が新生活を建設する困難な事業に參與してゐるのだといふ感じをもつてゐなくてはならない。

「十月革命の後、短い間、勞働者、農民、兵士、水兵等は、實に彼等の革命の運動の主人であつた。しかし間もなく見えざる鐵手が革命を操縱し、それを人民から引離し、そしてそれを彼自身の目的——共產國家の鐵手に隨從させ始めたのです。

「ボルシエヴヰキはマークス派の敎會內におけるジエス

井ット派である。彼等が人間として不誠實だからではない。また彼等の意圖が害惡だからではない。彼等の政策と方法とを決定したのは彼等のマークス主義である。彼等が使用したその手段が彼等の目的の實現を破壞したのである。共產主義、社會主義、平等、自由——あらゆるもの、そのためにロシャの人民はかゝる殉教に堪へた——は、彼等の戰術によつて、目的は手段を撰ばないといふ彼等のジエス井ット的標語によつて、信用を失ひ、そして汚されたのです。

犬儒主義と野卑とが、十月革命の特色であつた理想主義的願望に代つた。凡ての靈感が痲痺した。一般的興味が死んだ。無關心と冷淡とが支配した。ロシャの人民を革命から遠ざけ、彼等をして、革命から生ずるあらゆるものを憎惡の心で滿たしたのは、外國からの干渉でもなく、封鎖でもなく、却つて、ボルシエヴ井キ國家の内部的政策であつたのです。

人々はいふ、變化が何の役に立ちましよう?凡ての支配者はみな同一である——貧乏人は何時でも苦るしまなくてはならぬと。ボルシエヴ井キをしてロシャの支配に成功させるようにしたのは、數世紀の間の服從を伴つた、宿命論である。**ボルシエヴ井キはその經驗から、目的が凡ての手段を正化するものでないことを學んだだらうか?**

實にレニンは屢々後悔した。凡ての全露共產黨會議で、彼は「罪は私にある」と進んでいふた。ある若い共產黨員がある時私にいふたことがある、若しレニンが、他日十一月革命は誤謬であつたと宣言したにしても、私は驚かないだらうと。

實にレニンは、彼の誤謬を承認する。しかしそれは、決して彼をしてその同じ誤れる政策を繼續することを止めさせはしない。凡ての新らしい經驗は、レニンと彼の崇拜者によつて、最高の科學的及び革命的の智慧であると宣言されてゐるのです。この新らしい方法の正義と効用とを疑ふことを敢てするものは、禍ひである！ 彼等は反革命家として、投機師として、匪徒として、烙印されるのです。

しかしレニンは直ぐにまた後悔する。そして彼の群衆が實驗の可能であると信じたなら愚者として嘲弄する。四年の間、共產主義はロシャで建設されつゝあるといふ公言でロシャと世界とを欺いてきた後で、レニンは、最近の全露ソビエット會議の席上で、彼の同僚の、共產主義が今日ロシャで實現されることができると信んずる無邪氣を嘲弄した。しかも、三年前にレニンと同一のことを穩やかにいふ

たものは、尙ほ牢獄のうちに閉ぢこめられてゐるのです。」

エムマ・ゴオルドマンは、彼女の所謂ロシヤ革命失敗の最初の原因が、ブレスト・リトブスク條約にあつたといふてゐます。この害惡から、後の害惡が繼いた。「それがレニンの多くの失敗のうちで最も高價なものであつた。それが革命の息を絶つた。」何故なら、この條約の結果は、ラトビア、フ井ンランド、ウクライン及び白露の背反を結果したから。そしてこの時まで勞働者と提携してきた農民が、ボルシエヴ井キを憎惡し、これと抗爭するようになつたからであると。

二、食料の强制徵發

ブレスト・リトブスク條約に引續いて食物强制徵發制度(Raz vyorstka) が行はれた。ボルシエヴ井キはいふ、農民が都市に食物を供給することを拒んだから、この制度を賴ることのほかはなかつたのであると。半分眞實である。實際農民は彼等の生産物を政府の代官に引渡すことを拒むだのです。彼等は直接に勞働者と取引することの權利を要求したがそれが拒絶されたのです。ボルシエウ井キ政治の無能と、彼等の官僚政治の腐敗とは、地方人の不滿を買ふのには大に功勞があつたのです。農民に對して、その生産物と交換に約束された製造品は、滅多に農民に屆かないしまた實際屆いた時でも、破損品、分量不足なぞであつたのです。

カールコフで、私は、集中的官僚機關の無能の實證を見た。大きな工場の倉庫の中に、農業器具の大きな積み重ねがあつた。モスコウ政府は二週間内に、そしてサボタージを所罰するといふ命令で、それを造つたものなのである。ところがそれが出來上つてから半歳になつて、中央政府はこの農民の非常に必要としてゐたものを、分配するために何等の努力をもしなかつたのです。これはモスコウ制度の運用、いや非運用仕方の、無數の實例のうちの一つであつたのです。

かういふわけで、農民が、ボルシエヴ井キ國家の事物を適當に處理する能力についての信用を失つたことが不思議なことなのであらうか? ボルシエヴ井キは、農民が簡略することのできないのを知つた時に、こゝに强制徵發の方法を計劃したのです。これ以上、農民を反抗し、激せしめる方法は、今日まで發明することはできなかつたのです。そは農民の間における戰慄すべき恐怖となつたものです。

そは彼等から凡てを奪つたのです。たゞ將來だけが、この潰れたる方法と、生命と荒廢の一大犧牲との恐るべき結果についての、適當な描寫を與へることができるであらう。

信んずべからざるように見えるが、しかもこの強制徵發の制度が、今日の饑饉についても部分的に責任あるものであることは、ロシャではよく知られた事實であるのです。何故なら、農民はたゞに麥粉の最後の一プードを剝奪されたばかりではなしに、彼等はまた屢々次の播種のために貯藏して置いた種子をも奪はれたのです。無論旱魃はヴォルガ地方における傷ましい狀態の主要な原因である。しかし、それにもかゝわらず、若し農民が適當な時機に、そして自由に播種することができたとしたら、少くともある部分では、ボルガ地方の饑饉を減少する事の地位に置くことができたであらう。

政府の食料徵發者に對する村落の抗拒があると、征討軍が常に共產黨員の訴へに從つて、武力によつてその地方を攻擊し、そして屢々事實上そこを破壞します。空しくも、農民はその地方官憲に、そして最後にはモスコウ政府へ反抗しました。回復の道は見出すことができなかつた。ボルシ**エヴヰキの食料蒐集の方法について、農民がどう考へてゐ**るかをよく示してゐる、意味深い逸話がロシャに流行してゐます。

農民委員がレニンに面會した。「偖て、爺さん、お前さんは今日滿足だらう。お前さんは土地も、家畜も、雞も所有してゐる。お前さんは何んでも所有してゐるから。」一番年上の農民の一人に、レニンがこういつた。

するとこの農民が答へた。「さうだとも、ありがとう。さうだとも、おやぢさん、土地は私のものだ。しかしお前さんがパンをもつて行く。牛は私のものだ。しかし牛乳はお前さんのものだ。雞は私のものだが、しかし卵はお前さんのものだ。ありがとう、おやぢさん！」

こういふわけで、農民は奪取され、欺かれて、共產黨に背いた。強制徵發、征討、殘念な方法と不正と、地方における反革命的の強い感情を結果したのです。

ゴオルドマンはこゝまで述べてきてから、この農民と政府との抗爭について、ある人々が、政府側の言分だけでこの問題を判斷することの事實を擧げる。バートランド・ラッセルが、この問題について、農民が共產黨を憎惡するのが不相當だといつてゐるのは、この徵發制度を見ないから**である。若し見たら、全く違つた印象をえただらう、と彼**

女は附け加へる。

彼女はこの問題について最後にいふ、若しロシヤの農民が遅鈍で、消極的でなかつたなら、ボルシエヴヰキ國家は今日のように永く續くことはできなかつただらうといふのが眞實である。それでも、この農民の消極抵抗のために、ボルシエヴヰキの治世は殆んど終末に近づいた。それが分つたので、――强制徵發が非人道的で反革命的であつたことの事實が分つたゝめではない――レニンは、農業課税と自由商業の新政策をとることを餘儀なくされたのであると

三、消費組合の壓迫

「ロシヤの消費組合は、國民生活における經濟的にも文化的にも、偉大な力であつた。」一九一八年に消費組合の支部は全國に二萬五千、會員は九百萬人、投資資本額は一千五百萬ルーブル、取引額はその前年に二億ルーブルであつた。「勿論、消費組合は革命的組織ではなかつたが、しかしそは地方と都市との間における、缺くべからざる媒介であつた。」

彼女は述べる。消費組合の中には、如何にも反革命の要素があつたであらう。しかしそのために消費組合の全組織を破壞する必要はなかつたのである。それなら何故ボルシエヴヰキはこれを敢てしたか。消費組合にその職分を許すこととなると、國家の集中的權力を弱めるからであるのです。そこで消費組合は「破産」し、そしてロシヤの改造にとつての一大要素は、全然破壞されなくてはならなかつたのです。

そこで、消費組合がなくなつて、この運動のために立派な仕事をした男女がボルシエヴヰキ牢獄の中に彼等の生命を浪費した後に、レニンは再びいふ、罪は私にあると。消費組合は今や再興されなくてはならないし、屍は復活されなくてはならない！クロポトキンの死の一寸前に、消費組合が適法とされた。

クロポトキンは、死の床で、ドミトロフの六人の消費組合員の釋免の希望を述べた。彼はこの人たちを眞面目な、熱誠な勞働者として知つてゐたのです。この時には、彼等は、その仕事に忠實であつたために、ブーチルカとモスコウの監獄の中で、既に十八ケ月も費してゐた。彼等は、レニンが消費組合を再興しなくてはならないと宣言した後になつて、始めて放免されたのです。ボルシエヴヰキの國家において、消費組合が、以前の力と重要とに、到達するよ

うなことは、殆んどありえない。

四、ソビエット

ゴオルドマンは、今日のロシヤが、ソビエット・ロシヤだといふことに、若しくはボルシエヴ井キの治世をソビエット政治といふことも、間違ひだといつてゐます。といふのは、一九〇五年の革命の時に、既にソビエットの發端がありニ月革命の時に、再び存在したからだといふのです。彼女に從へば、ソビエットがボルシエヴ井キ政治に對する關係は、初期基督教徒が、クリスト教會に對する關係と似たものであると。

農民、勞働者、兵士、水兵のソビエットは、ロシヤの人民の解放されたエネルギーの、自發的な表現である。それは數世紀の沈默を破つた群衆の必要を代表する。既に一九一七年の五、六、七月に、ソビエットの原動力は、勞働者が工場を、農民が土地を、占領することを主張したのです。

ソビエットは非常な急速でロシヤに蔓延し、十月革命の焔を煽つた。そしてこの出來事の後、幾月か働いた。ある社會的政治家はソビエットの意義を把握するとができなかつた。ソビエットはたゞこれ等の政治家を一掃した。ボルシエヴ井キにしても、若しこの運動の突進的な潮を堰き止めようとしたなら、同樣の運命に會つたであらう。

しかし、レニンは鋭敏で、怜悧なジエス井ットである。レニンは凡ての權力をソビエットに、の一般の叫びに加はつた。彼と彼の同僚のジエス井ットが確實に政權を握つた時に、ソビエットの破壞が始まつた。今日では、ロシヤの他の凡てのものと同樣に、全然打ち壞された實體の、影である。

ソビエットは、今日では、たゞ共產黨の決議だけを表現する。その他の政治上の意見は、適當に聽取される何等の機會をもつてはゐない。共產黨員によつて實行された選擧の方法は、タマニイホールを羨望させないでは置かない。私がロシヤへ着いた時に、共產黨の一有力者によつて告げられた、ボスのマーヒイやタマニイホールなぞはわれわれにとつては何んでもないことだと。勿論、私はこの男が戯談をいつてゐるのだと思つてゐた。しかしこの男が眞實を語つたことを、私は間もなく納得した。

ゴオルドマン女史は、こゝで彼女の話をソビエットの選擧の實際のことに轉んじます。彼女に從へば、ボルシエヴ井キは共產黨の投票を殖やすためにはあらゆる手段を弄す

る。普通の辯論でだめな時は投獄の恐迫で行く。選擧人は何ごとが起るかを知つてゐる。そこで共產黨は常に多數の投票をとつてゐる。しかしそれでも尙ほメンシエヴ井キや社會革命黨左翼や、またアナーキストでさへも、時々代表者を選擧される。それはボルシエヴ井キ・ロシヤでは、決して小さな事柄ではないのです。何故？

新聞もなく、言論の自由もなく、工場における宣傳の法律上の自由もなくて、反對黨がソビエツトの間に幾何かの代表者を送ることに成功したのは、奇蹟といふのほかはないのです。しかしこの反對黨の代表者がソビエツト內で意見を聽取されることの段になると、無いも同様である。共產黨の雇喝采人たちは、共產黨員のほかは、傾聽を與へまいとしてゐるのです。

無政府主義者がソビエツトに選擧された場合には、政府は常に彼等の當選を承認することを拒むか、でなければ彼等を非常警察に送る口實を見出すのである。一九二〇年に私はモスコウのある工場クラブで催した選擧集會へ出席した。この時は政府が勞働者の候補者――一人の無政府主義者を選擧することを拒んだ二度目の時であつた。この選擧區での對抗候補者は、保健大臣のセマシコであつたが、勞働者等は三度無政府主義者を選擧した。セマシコは空しくも罵詈讒謗に屈從した。空しくも彼は勞働者の頭上に呪咀をあびせながら、彼等の面前に、拳を振るつて見せた。

勞働者たちはたゞ嗤ひ、嘲り、そして無政府主義者を再選擧した。數ケ月たつて、この無政府主義者は、ある口實のもとに捕縛されました。彼は永い絕食ストライキの後にそしてその當時英國勞働黨使節がモスコウに來てゐたのでボルシエヴ井キが非難を避けるために、彼は纔に免るされたのです。私がモスコウを去る前、一九二一年十二月一日モスコウのソビエツトの會員である三人の無政府主義者が捕縛された。一人は首都から追放され、他の二人は、私が後から聞いたところによると、「匪徒と陰謀」の罪名――非常に重罪で、普通は審問も公判もなくて銃殺される――の罪名をうけました。彼等は「片付け」られるのほかはなかつたのです。

モスコウでも、その他でも、ソビエツトが、何等獨立の辭、獨立の職分をもつてゐないことは、人々の容易に知ることができるところである。普通の共產黨員でさへ、多くの言論の自由はないのです。ソビエツトにおいては ボルシエヴ井キ政治の全體において同様に、無產者階級の獨裁政

治は、ごく少數の人々――ロシャとその人民を獨り支配する內部の一團――の手に屬してゐるのです。

甞つては、勞働者の、農民の、兵士の理想的な、自由な表現であつたものは、最早や人民が信んじもせず、求めもしない茶番に化してしまつたのです。

五、徵集勞働

勞働動員、實際においては勞働の徵集は、共產主義の最大の財產として世界に傳へられた。ロシャでは今は凡ての人が働かねばならぬ。最早や寄生蟲はないと！レニンは、この方法が、ロシャを改造するために布告された他の多くの同樣のもののように、誤謬であつたと公言はしてゐないが、しかし私は、彼が、この方法が勞働者の生產高を增加するうへに絕對に何の役にも立たなかつたことを悟つてゐると思はれる。

それが成就したものは、それが存在した間は、動產奴隷制度を樹立し、ボルシエヴヰキ寄生をもつて、ブルジョア寄生蟲に代へることであつた。それの職分は、勞働者を勞役に驅り、彼等の仕事を監視し、仕事を怠つたものを、捕縛し、若しくは時々射殺することなのである。勞働者の大多數にとつては、彼等は働くためにでなくて、休むために、そして妻子が田舍へ行つて麥粉や馬鈴署と代へるために、數個の物品を密かに造るために工場へ行くのです。それが偶々彼等の飢餓を防ぐのです。

田舍から何ものかをもつてくる機會についてだけでも、一冊の本を書くことができよう。商業の禁止とともに、個人が町へともつてくる凡てのものを沒收するために、各所に兵士や非常委員の派遣が行はれた。不幸な人たちは、旅行劵をうるのに非常な困難をして後に、ステーションで幾日も幾週間も曝らされた後に、不潔で混雜した車や其他で、戰慄すべき旅行をした彼は、たゞ奪いとられるために、麥粉や馬鈴署の一プードをもつてくるのである。

多くの場合に、沒收した材料は、共產國家の防禦者によつて、彼等の間に分配されたのです。犧牲者は、若しこれ以上の事件が起らないなら、實に幸ひであるのです。彼等は屢々その包をとられたうへに、「投機」として、牢獄にたゝきこまれるのです。捕へられた投機師は、こうして餓死を免れようとしたために、ロシャの監獄に滿ちてゐる不幸な人々に比べると、言ふに足るほどのことでない。

ボルシエヴヰキにとつて一つのことがいはなくてはなら

ない――彼等は何ごとも半端にはしない。強制勞働が法律となると直ぐに、懲罰をもつて實行した。男と女、若きと老いたると、貧しき衣服と破れた靴、或は襤褸だけを足にしてゐる人達が、無差別に、雪を掻き、氷を切るために、寒さと雨雪との中に驅られたのです。ある時は、彼等は木を挽くために、群をなして森林に送られたのです。

肋膜炎、肺炎、結核病が結果した。クレムリンの賢者ぶる人たちが、勞働の分配のために、新らしい部局を設けたのは、この後になつてからであつた。この役所が勞働者の肉體的適性を決定し、彼等の商賣に從つて、彼等を分類し分配したのである。

こうした奴隷化的な、そして墮落の狀態のもとで、人々が仕事を逃れようとするのは怪しむに足りないことである何故なら、人々は仕事とそしてそれに驅られる方法を憎んでゐるからである。彼等は、共産國家を、彼等の生血を絞る新らしい蛭だと考へ始めた。ペトログラードの勞働者、最も革命的で、永い爭鬪の衝に當つた彼等、勇敢にユデニッチに對してこの都を防衛した彼等、殆んど信んぜられないほど飢え且つ凍える彼等でさへ、虛僞の革命家と、そしてそれにかゝわるあらゆるものを憎むようになつたと、したら、何か不思議なことなのであらうか？

彼等の誤りであるのではない。慘酷なボルシエヴ井キの機關が彼等の理想と信仰とを覆したのである。この機關が容易に打ち勝つことのできない反革命的感情を醸したのである。

私はある光景――ペトログラードのソビエットの會合を決して忘れはしない。その夜、クロンシタットの運命が決すべきであつたのです。共産黨の指導者によつての長演說の後に、數人の勞働者と水兵とが演說を申出た。兵器廠からの一勞働者が演說する。彼は聽衆へでなくて會長席の方へ向く。彼の聲は抑えがたい感情で張りつめてゐる。彼の眼は燃え、彼の全身が振るへる。彼はペトログラード・ソビエットの會長ヂノヴ井エブに話しかける。

彼はいふ、三年半前に、君は獨逸のスパイ、革命の裏切者だといはれた。そして追跡され、迫害された。われ〳〵ペトログラードの勞働者と水兵とは、君を救ひ、君が今日占めてゐる椅子へと舉げた。われ〳〵は、君が人民の意のあるところをよく代表すると信んじたからそうしたのである。その時から、君と君の政府とは、われ〳〵から離れた今、君はわれ〳〵を汚辱の名で呼び、反革命派といつて罵

しろ。君は、十月革命の時に、君がわれ〳〵に與へた約束を履行することを要求するために、われ〳〵を獄に入れ、そして射殺すると。

私はこの男がどうなつたかを知らない。彼はこの大慘のために、獄にあるか、或は殺ろされたかであらう。彼の叫びは聽き容れられはしなかつた。しかもそは革命を願望し革命をあくまで立派に成しとげた、そして今日はボルシエヴヰキ國家によつて縛られてゐる、惱める精神、ロシヤの集合精神の叫びであつたのです。

六、非常委員會

全露非常委員會は、疑もなく、ボルシエヴヰキ治世の最闇黑の方法であるのです。そはボルシエヴヰキが天下をとつてから間もなく、反革命、サボターヂ、投機を退治するために組織されたのです。最初は、この非常委員會は内務部、ソビエット、及び共産黨の中央委員會によつて統悟されてゐました。

次第に、それはロシヤにおける最も有力な組織になりました。そはたゞに國家の中の國家であるばかりではなしにそは國家のうへの國家であつたのです。全露が遠い田舍の村に至るまで、非常委員の網で蔽はれました。

廣大な官僚機關の各部が、ロシヤ人民の生死のうへに萬能な、非常委員をもつてゐるのです。この組織によつて創造された地獄、それが非常委員會自身のうへに及ぼす慘忍化と破壞の効果、それがロシヤにもたらした恐怖、不信、憎惡、苦るしみ、そして死とは、ダンテの勝れたペンをもつてゞなくては、とても説明することはできないのです。

全露非常委員會の會長はヅエルチンスキーである。彼は彼の委員會の同僚とともに、試驗濟みの共産黨員である。公けの陳述のうちで、ヅエルチンスキーはいふた、「われ〳〵は組織的恐怖の代表者である。……われ〳〵はソビエツト政府の敵を恐怖せしめる。……われ〳〵は家屋に侵入し、貨物と資本とを沒收し、捕縛、尋問をなし、罪あると思ふものに罪を宣告し、死刑を科することの權力をもつてゐる」と。

言葉を換えていへば、非常委員は探偵、警官、判事、獄吏、死刑執行官を兼ねるものである。それは最高の權力でそこからはもう變更のできない、たゞ稀れに逃げることがあるのみである。それは殆んど每夜活動する。一區域における遠の光、狂氣のように急ぐ非常委員の自働車が、みん

なの驚きと恐怖との警報である。チエッカがまたやつてゐる！

「今夜摑まつた不幸者は誰れだらう？　この次は誰れの順番か？」

非常委員は反革命を退治るために組織された。しかしそれが發見した凡てのほんとうの謀叛に對しては（この處不明）。非常委員の主もな身上は挑發者と告發者とであることを注意して置かなくてはならない。チブスの毒のように、彼等はロシヤの大氣を附纒ふのです。彼等は彼等の犧牲者を陷れ、それ等の人々を危險な反革命家及び投機師として處刑するためには、縱令卑しく且つ殘酷であつても、彼等は手段を擇まない。それでゐて、非常委員それ自身が、反革命的陰謀と非常な投機との、温床であるのです。

凡ての共產黨員は、その黨紀によつて、何時でも、非常委員會の用を勤めなくてはならない。しかし非常委員會に屬するものの大部分はザー時代の秘密警察から、闇黑な百人から、ザー時代の軍隊の高級士官から、成立つてゐる。彼等は野蠻な方法を實行するには熟達してゐるのです。

西方世界はロシヤにおける人民裁判——勞働者と農民とによつて統帥される法廷——といふことに聽かせられてゐるが、非常委員會の領域のうちにはそんな法廷なぞはありはしない。それの進行は秘密であり、所謂聽取りとは、それがいくらかでもある時にも、判事の戲謔である。

未決囚は出來合ひの證據に面んぜられる。彼は證人もなく、辯護をも許るされてはゐない。彼がこの恐ろしい場所から引退らせられた時に、彼は彼が免罪になつたのか有罪になつたかさへも知らない。彼はある夜がきて呼び出される——決して再び歸ることはない——までは狂ふばかりの不安のうちに過ぎる。次の朝非常委員が彼の家族を迎へにやる。そして他の囚人たちが、冷酷な殺人が、今までの無數のうへに、また一つ加はつたことを知るのです。……

昔の秘密警察のように、ボルシエウ井キの秘密警察は、その惡事を秘密にしてゐる。しかし眞實は時に漏れる。チエッカの壁内における恐怖——殘忍な拷問、賄賂、投機の横行——について、既に多くの印刷物が存在する。その材料をうるためには、ボルシエヴ井キ治世の反對者に求める必要はない。非常委員それ自身が時々多くの材料を提供する。非常委員會の週刊機關紙の第三號には、拷問の必要についての一論文が載つてゐる。それは「センチメンタルは澤山だ！」といふ題である。その一節に曰く、ソビエットの

敵を處理するのに、彼等から自白を强制し、そして彼等を他界に送るために、拷問を行ふことは必要であると。……
　チノヴ井エフは、ペトログラードのソビエットの會議の折りに、ヅエルチンスキーのことを「革命に一身を捧げた聖徒」だといふたことがあつた。闇黑時代の歴史はかうした聖徒に滿ちてゐる。ボルシエヴ井キの治世が闇黑の過去を眞似るとは、如何に恐ろしいことである！……。

　この一文でそれの全部を紹介するつもりでしたが、あまり詳しく、そして殆んど全譯に近いまでに譯逃しましたので、まだこれで女史の論文の半ばにも達しません。次號に殘りをまとめて、紹介したいと思ひます。たゞクロポトキン訪問記の部分は、既に本紙の第三號でバークマンのものを紹介したから全部略します。

果して虐政乎

アナーキストの攻擊に對してボルシエヴ井キの側から如何なる辯明があるか、私の手許には適當なものがありません。でこゝにはアナーキストに答へたのではないが、四月の伯林會議でも、若しくは汎く各國社會主義者の問題となつてゐる社會革命黨員四十七名の裁判事件について、ボルシエヴ井キの御用通信として知られる伯林の國際新聞通信から左の一文を譯述することとする。それも無論プロパガンダではあるが、具體的の事實が擧げてあるので、社會革命黨が如何なることをなしたかについても、またそれについてボルシエヴ井キが如何なる態度をとつてゐるかを知るにも都合よきものと思ふ　それは社會革命黨首領チエルノフへの公開狀である。

　チエルノフ君はマクリン大佐が一九二一年の終りに近く「革命ロシヤ」のうちで、ソビエット政府に反對して武裝した農民の一揆を組織すること、鐵道線路を爆發すること、赤衞軍の兵員を殺戮することの方法について論文を公表したことを知つてゐるか？

　チエルノフ君はクロンスタットの水兵暴動の時に、「革命ロシヤ」がチエルノフによつて書かれた、ロシヤ農民の一揆を挑發した一論文を掲載したことを知つてゐるか？　この論文に曰く、汝、暴君、ボルシエヴ井キよ、お前の生命ももう知れたものである。若しお前は生命が大切なら、まだお前のできるうちに逃げろ！人民は來りつゝある。宣告は發せられるであらう！

　チエルノフ君はこの新聞がクロンスタットの暴動について次のようにいふたことを知つてゐるか？「クロンスタットの叛徒を援助しないものは血に汚れた元帥トロツキーと彼の死刑執行人の一味である。われ／＼はわれ／＼の採るべき道を定めた。われ／＼は壓制者と死刑執行人とに反對

してクロンスタットの人たちの側にあるぞ。

チエルノフ君は、第九回社會革命黨の會議で次のような決議の通過したことを知つてゐるか？ 曰く、ボルシエヴ井キの權力に對して政黨の武裝的鬪爭は不可避で、そしてその活動的力が組織されなければならないと。

チエルノフ君は、彼自身が彼の新聞で、彼の政黨の決議について、次のような意味を書いたことを知つてゐるか？ 曰く、社會革命黨は、あらゆる戰線において、ボルシエヴ井キの暴君に對して鬪爭を行ひつゝあると。

チエルノフ君は、佛蘭西政府が社會革命黨の運動に財力を供給し、そして仲介者がソビエット領内の丁抹使節であつたし、また今日ではプラーグのチエッコ・スロバカイの政府であることを知つてゐるか？

チエルノフは、彼の政黨がアントノフの謀判を援け、そしてアントノフが數百人の革命的勞働者を銃殺したことを知つてゐるか？

チエルノフは、サマラウとカザンで、權力が社會革命黨の手にあつた時に、野蠻極まる方法でボルシエヴ井キを根絕したことを知つてゐるか？

チエルノフ君は、社會革命黨が中央委員會の承諾のもとに、掠奪と、取り上げを行つて、その盜んだ金を中央委員會の一人（ラロフ）に渡し、そして第八回の黨會議がこの取上げを是認したことを知つてゐるか？

チエルノフ君は、社會革命黨が、ソビエット國の鐵道線路を爆發する目的のために、佛蘭西の軍事使節から爆藥を受取つたことを知つてゐるか？

チエルノフ君は、社會革命黨の衝擊隊がトロツキーとヂノヴ井エフの生命を奪ほうと用意し、そして同黨の中央委員會が個々の恐怖手段を是認したことを知つてゐるか？

チエルノフ君は、ボラダルスキーが社會革命黨の中央委員の承諾のもとに殺され、そして殺戮者、社會革命黨員セルゲーフが、同黨中央委員の一人ゴッツによつて彼の行動を完了することの指圖をうけたことを知つてゐるか？

チエルノフ君は、社會革命黨が、北獨軍をペトログラードに招致し、そしてこの町の權力をブルヂョア政府に引渡すの目的で、ノヴノフの反革命團と交渉したことを知つてゐるか？

彼は、彼の政黨がポストニコフ大佐をこの交渉の代表者に任命し、そしてポストニコフ大佐が北獨軍の司令官と交渉したことを知つてゐるか？

彼は、また彼の政黨がノグノフの反革命團から財的援助をうけたことを知つてゐるか?

チエルノフ君は、社會革命黨が、フ井ラネンコの反革命團と協同し、またこの團體から財的援助をうけたことを知つてゐるか?

チエルノフ君は、社會革命黨が赤衛軍の中に一團を組織し、數回、軍人的暴動を醸したこと、例へば十一月革命の後、この政黨の會員がペトクログラードに對して軍隊を送つたことを知つてゐるか? 彼はこの運動の參加者のうちに、アウクセンチエフ、ケレンスキー、チエルノフのあつたことを知つてゐるか?

チエルノフ君はリデイア・コノプレバが、レニン暗殺の計劃を同黨の中央委員に提出したことを知つてゐるか? 彼はチエルノフとゴッツがこの問題についてコノプレバと交渉したことを知つてゐるか? 彼は中央委員會がこの計劃を賛成したことを知つてゐるか? 彼は、中央委員會がこの暗殺を準備するために黨員のリヒタアを派遣したことを知つてゐるか?

チエルノフ君は社會革命黨の機關新聞レニン暗殺の計畫を賛成し、讃美したことを知つてゐるか?

チエルノフ君は、この種の罪惡に對して資本主義の諸國家の法律が如何なる所罰を規定してゐるかを知つてゐるか?

チエルノフ君はこの問に對して滿足な答を與へるか? 彼はこのことが反革命でないといふことを立證しえられるか? 若し彼ができないとしたら、第二及び第二半インタナショナルは、社會革命黨を辯護するの權利があるか?

……………。

レニンの後繼者

リコウ、ブハリン、トロツキー

□レニンは今絶對休養の時期にある。彼の病が、囘復するか、しないか。囘復しても、もとどほりに政務を引受けることができるかどうか。少し占ひじみてはゐるが、若しレニンが政治に復活ができないとしたら、何人が第二のレニンとなるか。ロシヤ内でも、いろ〳〵の噂があるらしい。

□アーサー・ランサムはロシヤ通の新聞記者として知られてゐる人、幾度か共産ロシヤに遊び、今年になつてからモスコウに行つたことがある。彼の説によるとこうだ――

□今度の初夏以來、つまりレニンの病氣以來、レニンの代理を務めてゐるのはリコウである。リコウが内閣議長の椅子を占めてゐる。彼はレニンのように學者でもない。内閣議長としての彼は、レニンのように閣僚を說伏しない、指導もしない。彼は彼の同僚以上に目先きが見えるでもなく、同僚以上の能力があるのでもなく、演說にかけては、吃りで全く話しにならない。

□それでゐて、レニンが地方廻りをする時に連れて出るのは彼である。レニンは深く彼を信んじてゐる。彼自身もまた理性の人といふよりは信仰の人である共產主義の理想社會を深く信仰する彼は、口を開けば目前の實際問題よりは、彼の樂しいユトピアを語る。彼はどこかに人を引き付ける力をもつてゐる。彼は勞働者出身である。こゝに彼の強味がある。

□しかし彼がレニンの病中に内閣議長の椅子にゐるのは、彼の地位が内閣副議長であるからであつて、國民經濟委員長として彼は　昨年來その腕前を疑はれてゐるともいはれる。

□リコウが若し落第としたら何人が第二のレニンとなるだらうか？　候補者の主もなものはトロツキー、カメネフ、スタリン、グレチンスキー、ブハリンなぞである。スタリンはレニンの親友の一人、コウカサスの人、クレスチンスキーは長く大藏大臣の地位にゐた人である。

□カメネフはモスコウのソビエットの會長で、嘗つてレニンが一九一八年に病氣の時は、彼がその代理をしてゐた。ブレスト・リトブスク條約の調印者の一人であるだけ理論家といふよりは實際政治家である。トロツキーの妹を夫人としてゐる。が彼は猶太人であるので、果してレニンの後を襲ふことができるかどうか、甚だ危ぶまれる。

□トロツキーの弱點の一つも矢張り彼が猶太人だといふ點にある。理論家で、雄辯家で、文章家で、熱情家で、ロシヤで何人も彼を稱贊しないものはないといふ。しかしあまりに熱情家であるので、一國を任せるのに安心ができないといふ感じを、一般にもたれてゐるので、彼はレニン二世としては先づ見込みの乏しい方の一人。

□リコウと並んで最も有力な候補者はブハリンである。リコウが『敵を作らない人』であるに對し、ブハリンは、彼れ獨自の見解を持して、容易に人に下らない人である。小男であるが、ロシヤ貴族の出で、頭腦が明晰で、讀書家で、人物がしつかりしてゐて、それで煽動やプロパガンダにかけても天才である。

□彼は勞働者の間に非常に人氣者である。彼は常に勞働者に接してゐる。彼は嘗つてクレムリン宮殿に住むだことがない。彼はまだ役人になつたことがない。それだけに彼はまだ無疵である、云々

定價

毎月一回一日發行

一部	一冊	卅錢	郵税五厘
半年分		一圓七十錢	税共
一年分		三圓三十錢	税共

但特別臨時號の價は別に申受く

▲送金は可成振替 ▲郵劵代用一割増

大正十一年九月一日印刷納本
大正十一年九月一日發行

東京市芝區三田一丁目二十六番地
編輯兼印刷發行人 利部一郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷所 川崎活版所

東京市芝區三田一丁目二十六番地
發行所 批評社
振替東京四五三四六

大正十一年三月卅一日第三種郵便物認可
大正十一年九月一日印刷納本（毎月一回一日發行）批評九月號

（定價卅錢）

大正十一年三月三十一日第三種郵便物認可
大正十一年十月一日印刷納本發行（毎月一回一日發行）

室伏高信編輯

評批

ロシヤの小供の問題

共産ロシヤは小供の天國だといはれてゐます。果してそうなのか。ゴオルドマン女史は、そんなことはたゞの傳説だといふ。『見せ學校』を見せられてきた外國記者の無知を語るに過ぎないのだといふ。そしてゴオゴルの『死靈』が再びロシヤを食らひつゝあると語ります。先づ彼女をして語らしめよう。

十月號（第七號）

批評十月號

□

革新倶樂部の批評

革新倶樂部がプロレタリヤの政黨でないことは一點の疑もない。彼には、その宣言のうへでは社會階級の觀念がない。政治を國民の實生活のうへに置くためには國民生活の根本原理がどこにあるかを先づ決めてかゝらねばならぬ。彼等が「國民生活」といふ時に、若しくは「天下民衆」といふ時にそこには社會階級、私のいはんとすることをもつと適切にいへば、社會經濟的階級が存在してゐないかのごとくである。明治初年以來、西洋では少くとも一八八九年以來、政治家が、デマゴーグが、天下民衆の名を舞臺言葉として叫びつゞけてきた。ナポレオン三世は、人民の聲は神の聲だとまでいふた。否、彼はフランスの勞働者を倫敦の歴史的萬國博覽會に送りさへした。しかし彼等が天下民衆といつてゐる間に、その天下民衆でない、他の天下民衆が起つてきた。彼等が國民生活といつてゐる間に、國民生活は二大階級に、截然と分裂してしまつた。こゝに經濟的であると同時に、少くとも現代ではそれの上部構造である政治的諸運動の中軸が二つに分裂してしまつたのである。分裂して既に久しいのである。この儼然たる事實を無視して、たゞ國民生活といひ、天下民衆といふのは、己れを欺き、人を欺くものである。

革新倶樂部の政治家の諸君は、明治初年以來の政治家の諸君、若しくはそれに隨從する一派の大小政治家である。明治の初年には、人民とは、若しくは天下民衆とは、少くとも實と名と、隔りの小さなものであつた。だから天下民衆といふ聲は、國民の大部分に何等かの反響があつた。その言葉は空虚な舞臺言葉でなくて、生命のある。ブルヂョア新興階級の生命の萠芽に滿ちた、生き〳〵した言葉であつた。爾來何十年、この天下民衆は生長して、彼等自身を支配階級に組織して、眞の天下民衆と袂を分つた。犬養氏、尾崎氏、島田氏は、慥に明治初年から晩年へかけて、新興階級の雄辯な代表的であつた。この新興階級の勃興とゝもに、彼等の盛名もまた天下に普きものであ

つた。多くの青年が彼等の盛名を聞きつゝ、その欝勃とした野心を燃やした。政治は、野心ある青年の檜舞臺でもあつた。しかし新興階級の代表者は、ただ新興階級の代表者であつた。尾崎氏 犬養氏、島田氏等の政治家としての使命は完全に有終の美を濟したのである。

犬養氏は既成政黨を目して資本家の政黨だといふた。如何にもその通りである。資本黨であるべく生れ、あるべく育ち、あるべく存在してゐるのである。しかしその點は國民黨も何等の撰むところはなかつた。犬養氏は改進黨の精神を維持してきたものは彼一人だといふた。これもその通りなのである。改進黨の精神とは何か、保守的資本主義がこれであつた。自由黨の資本的自由主義に對して保守的資本主義の精神を擔つてきたものが改進黨であり、進步黨であり、犬養氏であつた。それが、自由黨が榮えて政府黨となり、藩閥派となり、從つてその立黨の精神から遠ざかつて保守的資本黨となつた時に、改進黨系は、多年の黨勢不振のために、多年の在野生活のために、自然と野黨的傾向を示してきた。非封建的傾向を特徵としてきた。そこで在野黨としての犬養氏一派、非封建派としての犬養氏一派は、小ブルヂョア階級の間に、人望を收めてゐた。彼等は日本の明治年代から憲政擁護運動に至るまでの、進步的頭腦を支配するの中心の力であつた。しかしそは眞に急進主義であつたがためであらうか。進步黨は、國民黨は、若しくはその正統相續者としての犬養氏は、急進主義著であつたのであらうか?

彼は國策を說いた。近くは經濟的軍備をもつて彼の一枚看板とした。國策とは何んであるか。帝國主義政策であつた。經濟的軍備とは何か。經濟的軍國主義であつた。卽ちあくまでも保守的資本主義であつた。彼はこの境から一步も出ることはできなかつたのである。彼が普通選擧に對して如何なる態度をとつたか? 何故に彼は普通選擧問題のために黨內から何人かの犧牲をさへ出したのであるから最近に、彼が普選案を提げて立つたにしても、その憲政會と異るところは一年遲速の相違でないかしたのであるから最近に、彼が普選案を提げて立つたにしても、その憲政會と異るところは一年遲速の相違でないか政友會と異るところも數年であるに過ぎないだらう。その政友會、憲政會が資本家の政黨であるのに、何故に犬養氏一

派は資本家の政黨でないといへるか。その標榜してきた政策の凡そが根本において政友會、憲政會と同一でありながら、何故に犬養氏一派は資本家黨でないのであるか？　彼は黨費の出所を意味してゐるのか。然らば國民黨は何れから黨費を得きたつたか。國民黨の黨員は全國に何人あつて、一人當り幾何づゝの黨費を納めてきたか？　この點で國民黨は、何故に政友會憲政會と異るか？異るところはたつた一つあつた。國民黨が小さかつたといふの點である。

彼等は既成政黨の打破を叫んでゐる。既成政黨の打破は何人も異論がない。しかし何故に既成政黨は打破すべきか？　それが黨弊に滿ちてゐるためか？　大金持と大金持の養子が頭梁であり、官僚がその手足である政黨は眞に人間の堪えることのできる範圍でない。賄賂と買收と利權とが常に纏綿してゐる政黨は眞に人間の恥ぢとすところである。しかし單なる政治の廓清を叫ぶなら、彼等自身を政治的檢察官に組織するもいゝ「天下民衆」は見物してゐよう。或は喝采もしよう。しかし革新俱樂部が單なる廓清會でなく、矯風會でなく、政治の根本的一新を期待するとしたら、既成政黨は何故に打破すべきかの根本原理を先づ與へねばならない。そは犬養氏のいふとほり既成政黨が資本家黨であるがためか。果してそうなら、資本主義を倒さなくて資本黨を倒すことができるか？基礎構造を倒さなくても、上部構造を倒すことができよう。しかしその跡にまた第二の上部構造ができよう。革新俱樂部がその第二の上部構造となる考なのか？犬養氏を頭梁としての革新俱樂部がそれ以上の考をもつてゐる筈はない。政友會の「黨策」の代りに、憲政會の「珍品」の代りに「國策」を立てようといふか？　その國策とは何か？　資本主義の上部構造でなくてそれが何んであるか？

そうでないといふなら何故に資本主義の打破を叫んで立たないか？資本主義を打破する必要がなくて、資本黨を打破する必要がどこにあるのか？　あるとすればたゞ政權爭奪か？　賄賂といひ、利權といひ、買收といふ。如何にも武士の齢ひしがたいものなのである。しかしそれを排せとは何を意味する。「珍品」を排し、黨利を排して、資本主義のもとに、資本主義の側に、政黨が存在しえられるか？　資本主義そのものが買收であり、賄賂であり、利權であり、要するに人格でなくて金である。こゝに資本

主義の精髓があるのではないか。賄賂をとるのは政友會だけたと思ふのは大間違である。珍品を貰ふのが加藤高明だけだと思ふのが大間違ひだ。資本主義のもとにおける政治とは、賄賂と珍品である。如何なる場合にも賄賂と珍品である。人でなくて金の支配する時代に、賄賂と珍品とを貰はないものはたゞその日〳〵の生活を支へるに足りない勞働者である。でなければこの勞働者の汗と油のうへに寄生する階級なのである。賄賂がよくないといふ理由がどこにあるか、珍品が不道德だといふ理由がどこにあるか。金が人を支配するのがよくないといふことでなくて、何んであるか？ 果してそうなら現代そのものがよくないのでないか？ 金が人を奴隷にする現代を是認しながら、賄賂を非難し、珍品を非難することがどうしてできるか？ 彼等のもつてゐる凡てのものは、珍品か、賄賂か、絞取でなくて何んであるのか？ 犬養氏のもつてゐる財產がどれだけあるかは知らぬしかしそれが果して、犬養氏の勞働の蓄積であるか？ 珍品か、賄賂か、絞取か。絞取の上前をはねることを珍品といひ、賄賂といふのである。在野政治家が受取ると珍品であり、在朝者がとると賄賂である。珍品、賄賂、絞取でなくて、今日の、たゞの一人の政治家だつて存在しない。存在しえられない。だから廓淸といつても革新といつても、若しそれが必要であるなら、現代の社會制度の根本に向つて革新を加へなくては何の役にもたゝないのではないか。この自明の理が分らなくて何の政治の革新があるか？

愚ろかであるか、或は知つて瞞着しようとするのであるか。何れにしても、時代はかくのごときものを求めてはゐない。ある種の學者が入つたといふ。入つてもよし、入らなくてもいゝような人が、何人入つても根本に變りはない。

犬養氏は、既成政黨が資本家黨だから、來るべきものは社會の各方面の利益を代表すべきだといふた。犬養氏の言葉通りにいへば、現代我國の二大政黨は率直にいへば、一つの資本階級の集團に過ぎないのである。此際全國民各階級の溢るゝが如き欲望を調和する機關が當然なければならぬ」と。全國民各階級！ 犬養氏が宗敎家であるならどうでもいゝ。政治家であるなら本氣でそういふてゐるのであるか？ 各階級の溢るゝ如き欲望を調和することかできるかできないか？ 犬養氏はできるといふのである。搾取者と被搾取者との協調ができるといふのである。賃銀制度の礎

鎖のもとで、この二つの階級の調和ができるといふのである。資本家階級の政治家が、學者が、欺瞞家がみなそういつてゐるのである。福田博士は社會政策の哲學を求めようと苦心を重ねつゝあるといふ。その苦心は多くの資本家の苦心である。しかし「率直に」いへばそれも資本階級の集團に過ぎないではないか？　して見れば德川公、澁澤榮一が産業的にしようとする勞資協調を、犬養氏は政治的に代表しようとするのであるか。即ち政治的勞資協調會、――各階級の溢るゝ如き欲望を協調しようとするのであるか？　各階級の溢るゝ如き欲望！　それは何んであるか？　一分間でもいゝから考へて見て欲しい。資本家階級の溢るゝ如き欲望は何か？資本の集積でなく、富によつての人間の支配でなくて、何處に溢るゝような欲望があるか？　その欲望を、人格回復に對して溢るゝような欲望をもつてゐる勞働者階級との間に、如何なる協調の機關を設けようとするのであるか？　革新俱樂部の宣言には現代の諸政黨ほど時代後れなものはないといふた。その通りでいゝ。しかし犬養氏の國策、經濟的軍備、そして革新俱樂部の建設的方面の一枚看板としようとしつゝある各階級協調論が時代後れでないといほうとするか？　それなら德川公、澁澤榮一もまた時代の先驅者、時代の革新家である。先きに德川、澁澤出で、犬養氏、後に風を望むで走つたとしたら、如何に美しい時代の先驅者であらう！。

犬養氏に從へば、時代の變遷に伴つて、汎く民衆一般と手を提へなければならない。國民黨の城廓に立て籠つて民衆一般を隔ててゐることは時代が許るさない。これ國民黨が解散する必要のある理由だ。とほんとうにさうなのか？　それともあべこべに、「民衆一般」が犬養氏を隔てゝきたのではないか。民衆一般が何時國民黨の城廓に入りたいといふたか？　あべこべである。國民黨が、政權からも、民衆からも孤立の國民黨が、民衆一般の中へ入りたかつたのである。民衆が城廓を立てゝゐたのである。民衆は既に久しく一切の既成政黨を捨てゝゐたのである。否、もう忘れてゐたのである。あるかないかも忘れてゐたのである。國民黨がそれを出ようといふ。ほんとうに出ようとするのか？　ほんとうなら、老人でも若者でも、民衆一般はこれを隔てることはあるまい。しかし彼の城廓とは抑も何か？　南佐久間町の本部か？　國民黨といふ名稱か、それとも犬養主權

か？　その何れであつてもいゝ。そこから出ても、出なくても、それが民衆一般と何の關係があるか？　政黨合同を標榜して憲政會を出た人たちの五六、七人にとつては、それが城廓解放であるに相違ない。しかし民衆一般に對して、若し城廓開放の問題があるとすれば、彼等の據つて立つところの經濟的根據――資本主義の城廓から解放されることでなくて何んであらう。

私は政界の革新が必要でないとはいはぬ。また私自身の問題としても政治革新の運動に興味をもたぬとはいはぬ。吉野博士のように、政治家でないものは政黨に入らぬし、また入つてならぬとは、私は言はない。政治は政治家の仕事であるといふことが、アナーキスチックな意味があるなら別問題であるが、でなければそは少くともデモクラットの言葉ではありえない。而し政治の革新が、明治維新以來の空虛なお題目でないとしたら、最早や不眞面目な態度、輕卒な言葉で、國民を欺くものであつてはならぬ。また欺くことはできぬ。彼は現代・社會の最も嚴肅な問題、階級鬪爭の問題を、最も嚴肅な目で見なくてはならぬ。この問題から出發しなくては、政治の革新の問題はない。あるものはたゞ枝葉と末節である。この問題を正直に大膽に、そして正當に見ることのできる人だけが政治の革新を語りうる。既成政黨の打破を語りうる。一切の新運動の參加者となりえられるのである。革新倶樂部は、この覺悟をもつてゐるか、ゐないか。分りきつたことをくど〱しくはいはぬ。たゞほんとうの政界革新の必要を前にして、革新倶樂部の生れてきたことを多としながら、私たちのいはんとするところを一言しただけなのである。(室伏高信)

個人主義、日本、及啓蒙

一個の文明は必然的にその生活の反映である。文明とは生活の總計に過ぎない。その生活に基かざる文明が成立するとは考へることも出來ない事である。同時に生活は當然その文明の形をもち來すものである。この文明を好むと好まざるとに關せず、それが事實なのである。故にドイツがいかに「文化」をいふといへどもそれは畢竟ドイツの生活の總計であつて、他の生活が之に關すべきでない。またその「文化」を他の生活のなかに移入しても、その生活の許す限りの外は、之を拒否するの外はない。この故に同じ歐洲に位置しても、フランス、イギリス、ドイツ、ロシア其他がそれぞれの共通性をもちながらなほこの特有なる文明を固持するのである。さうしてその文明を決定すべき生活は具體的の生活であつて、決して抽象的な生活でない。あらゆる環境、即ち、國土、氣候等の外的條件と生活者たる人間との關係から生ずる日日の生活である。この關係を忘れて、その文明のみを論ずるとき、根據のない空論となつてしまふ。人は歐洲人が石の家に住むのを知る。日本が木の家に住むのを恥ぢる。しかしそれは一方に木が生え、一方に石がないと共に、一方は寒く、一方は暖いといふが如き程度の關係を失つて考へるからである。言語の如きすら、氣候によつて非常に變ずる事實のある以上、この關係を無視することが出來ない。

その故に現在の日本に於て一種の人たちの意見が空しいものとなる事を知るものである。ある人はアメリカに學んで日本をアメリカ化しようとする。他のものはイギリスを宗として、一擧手一擧足それを眞似ざらん事をこれ恐れてゐる。他のものはドイツに心醉して、ドイツにあらずんば人にあらずと思つてゐる。また他のものはフランスを師としてその後に從はん事のみをこれつとめてゐる。凡それこらの事業が一時の好奇心の氣まぐれから發したものならばそれでもいい。否らずしてこれによつて日本の生活、文明を之に化せんとするならばその愚や及ぶべからざるものがある。そうして事實としてこの計畫のことごとく失敗に歸してゐるのは、現にこの生活が證明してゐる通りである。それにもかかはらず、なほあとからあとから續々としてかかる種の宣傳者の出づるのは、どういふわけであるか。

一面には日本人の性質といふべきである。自己の個性を忘れたことは、大化の改新以來示されてゐる。日本はその本來の生活をもつてゐた。しかしその本來の文明をもつてゐない。言語は日本語であつた、しかも文字を支那から借

りた。衣服、儀禮、制度、美術、文學、凡そこれらの文明はことごとく借物である。しかも日本化せざる直輸入物である。さうして事實として生活が之を日本化してゐるのみで、日本人はそれに氣がつかないままに、物眞似のみでその無意味なる二千年の生活をつづけて來た。その根柢は自らを信じないところから來る。支那は自己より偉かつたのである。故に一切の支那的なるものは、自己にとつて輸入されるべきであつた。

この同じ心理が現代の日本人對歐米文明の關係にもあらはれてゐる。日本人は黑船に驚くと共に、生活以上の生活が歐米にあると考へた。さうしてあらゆるものゝ輸入がはじまつた。人は今や一語の歐語を交へずしてその思想を談り得ない。日本的なものは恥辱であると共に、歐米的なるものは誇りである。かくして日本の文學を談るより前に人はドストエフスキーを談り、ラシーヌを論じ、ゲーテに涙を流してゐる。宛たる殖民地である。それでゐて住むところはやはり日本であり、讀むところは日本の文學なのである。

しかしながらかかる性質のみに止まるといつてはならない、より大切なのはそれをしてかくならしめた事態なのである。それは生活對生活、即ち必然的に文明對文明の關係が生んだ事態である。

日本はこの支那文明の一支流たること幾十百年に及んだ。さうしてその根元と由來がどうあらうとも、結局事實としてはやはり、日本的とならざるを得なかつた。これ生活が直接にその輸入文明の上に及ぼした影響である。支那の生活が支那の文明を生んだ。その文明をそのまゝ輸入したところで、生活がこれを許さない限り生存し得ない。そこで支那文明は日本的に改造されるべく餘儀なくされた。一例として支那畫から日本畫の獨立したる經過の間にこの間の消息が明かにうかがふことが出來る。それは一例である　一例であるが、之によつて他の生活全體にわたつて同じ同化作用が行はれたことを推することが出來る。かくして日本の生活はこの必然的日本文明を有するに至つた。それが徳川時代にいよいよ確保されて明治にまで及んだ。それはすでに獨立したる一個の生活體系なのである。

二個の生活體系が相合するときいかなる現象を起すものであるか、それについてはすでに二三論述したことがあるが、これは結局合體して第三の生活體系をなすか、或は一が他のうちに合併されるのである。今日本の生活體系が西洋のそれに出會したとき、日本のそれは全然西洋のなかに併合せられた。即ち日本は亡んで、純然たる西洋が日本に入つて來たのである。そこに啓蒙運動が日本に行はれるやうになつたのである。さうして西洋と一口にいへども、このうちに多くの支流がある。それらは西洋といふ大きな生活のなかにあつて、その優越を誇りつつある。故に日本とい

ふ新たなる土地にその勢力を及ぼさんと欲するのは當然であらう。これ日本の生活が欲すると否とにかかはらず、頼まれもしない宣傳者が生ずる所以である。

現代を啓蒙時代といふのは、世界を考察のうちに置くとき、やや當つてゐない。この語の正當なる意味に就てはそれは十八世紀を指すものであり、また紀元前五六世紀のギリシアを指すのである。しかしながら一般的意味に於ては隨處に、常に啓蒙が行はれてゐるといふべきである。しかしながら現代の日本は特にこの甚しいものである。

何故に現代日本を以て啓蒙時代となすのであるか。それはこの二個の文明の對立に於て、日本の文明が根抵かの西洋のそれに代られようとするからである。學風の相違はある、國情の差違はある。しかも科學が國境を超越し、藝術が國をもたないとはしばしば言はれる。その故に一概に西洋文明といふ名の下にそれらのすべてを日本に入れようとする。日本は科學を有してゐなかつた。故に現代西洋が科學の世界なるが故に、その結果するところのすべては日本に存してゐない。原因を知らずして結果のみに驚くはの短見者流の事である。さうして日本人はこの結果にのみ驚いてゐるのである。故にそれをことごとく日本にもたらしめようとする。西洋にあるものは必然的に日本にもなければならないと思唯するのである。それは半ば正しい。しかも他の半ばはうそである。それにも關せず輸入は絶えない。この輸入が即ち啓蒙となるのである。

西洋の現在はその歴史をもつ。故に現在位置するところは必然的に定まつてゐる。さうしてその上に發達する進歩なり、進化なりも必然的經路をふんでゐる。之を文學にとれば、浪漫主義から自然主義、自然主義から象徴主義、象徴主義より未來主義に變ずる過程は必然であり、當然であり、そこに何等の無理がない。それは物質文明に於ても同じである。内外相應じ、生活と思想と一致してゐる。しかしながら日本はちがふ。日本はその本來の歴史の系統を好んで棄てようとする。その必然的發展は別としておいて、たゞ輸入をのみ模倣をのみこれ事とする。故に自然主義が千九百六年七年の頃から盛になつて見たり、同時に象徴主義が輸入されたり、又之に反してそののちになつて浪漫主義をたづねて見たり、急に未來主義に飛んだりする。それには何の根抵もなく、何の必然性もない。物好きと模倣と新しがりのみである。故にアナクロニズムであり、故にアナトピズムである。西洋に縦に發展したものを一時に横に輸入したのである。しかもそれぞれにイギリス、フランス、ドイツ、ロシア其他を同時に入れるのである。さうしてその生活の背後は儼然たる日本の生活であつて、本造の家に座して、泥田の如き道に靴をよごしてゐるのである。そ

れでも啓蒙時代なることには間違ひないのである。從つて飜譯と紹介が學者の唯一の仕事となるのである。

ギリシアに於ける啓蒙時代は特に倫理的なることによつて特徴づけられる。その隊長としてソークラテースの出でたのも不思議でない。それは人間の探究であつた。人間が萬物の尺度であるとは單に諺としてのみに止まらない。それがその時代の一特徴であつた。之に反して十八世紀の歐洲は論理的である。合理主義とは正しく名づけられたカントとヴォルテールはその持するところは異つてゐるが、いづれも當時の合理主義の産物であるには異論がない。さうしてそれは正しくルネサンスのつづきであり、自我の發見のつづきである。これが古代と現代との分れである。さうして現代の西洋はルネサンスに發足してその個人主義、自我主義を成立せしめた。個人主義は今日の文明の特徴である。否、それはまさに昨日の文明の鍵たらうとする。

個人主義文明の究極　るところは全體の否認である。絶對多元論に根據を與へるものである。しかしながらこれはルネサンスのあまりに多き効果であつた。それは刺擊のききすぎである。故に科學は主觀の世界を刺擊して客觀に制御しようとする。カントはその以前の主觀客觀を顚倒せしめた。これ自らをコペルニクスルに比する所以である。しかしながら現代科學は認識の世界を相應じて、個以外に金の世界をおいた。それは客觀の勝利である。アインスタインが示したる結果を見よ。その故に個人主義は正にその行きつまりに達した。さうしてそのあとから全體の認識を開いたのである。個人主義はブルジョワの哲學である。プロレタリヤの哲學はむしろ原始にかへつてまた團體主義にかへらうとする。しかもディアレクチクを信ずる時、この團體主義は個人主義の後のものでなければならない。それは決して原始そのものでない。個人主義をそのうちに含めるところの團體主義である。それはルネサンスの當然の歸結と見られなければならない。

然らば日本は如何の状であるか。同じき啓蒙は古典主義から未來主義までを同時にこの千九百年代に輸入しなければならない。さうして日本それ自身は未だかつてルネサンスを經たことがなかつた。即ち日本は東洋全體として依然として意志の世界にあり、倫理的人生觀のうちに生きてゐる。ギリシアの人間にすら至らざるものである。それが正しければそれでいい。しかもそれは西洋文明を受けて偶然にもルネサンスの結果のみを影響されなければならなかつた。そこに矛盾と橦着が起るのである。個人主義を知らざる團體主義を信じてゐるところに個人主義が輸入された。さうして道德にも、法律にも、實業にも、文學にも個人主義が未だしみわたらないうちに、同時に新たなる團體主義

が輸入された。故に極端は一致すると共に、その根本的差違を如何ともすべくもない。人はいまだ個人主義文明の果すら味はないのである。それでゐてすでに新たなる團體主義がおしよせた。人は幼年にして、一足飛びに老人に入つた、これ日本の現狀であり、啓蒙の一悲哀であり、模倣の一悲劇である。さうしてその悲哀とこの悲劇とは、日本といふ生活に今や固着せしめられた悲哀であり悲劇である。何人といへども之を免れることは出來ない。詩人は表現主義に出でんか、古典主義に執らんかに迷ひ、經濟人は資本主義を完成せんか、共產主義に走らんかにまどひ、倫理學者は個人主義に徹せんか、團體主義に進まんかに惱んでゐる。これらの悲劇はいかに解決されるべきか。

他に策はない。生活そのものに歸るの外はない。啓蒙をしてあくまで徹せしめよ。模倣をしてその極をつくさしめよ、しかも日本が日本である限り、生活が之を解決するであらう。現にかくの如くにあり、またかくの如くにあるの外に何でもであり得ない。この混沌とした啓蒙時代は決してかの「輝ける時代」ではない、それを整理するのは生活のみである。然らば現在の日本の生活の如何であるかを知ることが第一の要件である。さうしてその上に於て、その生活に對してもつところの個人主義及び團體主義の意味が明かにされる。それは他日の機會に於て論述されるであらう。（一九二二、九、十七村松正俊）

ラスキンの經濟的美術觀　御木本隆三著

この書物はまだ序文を讀んだだけです。しかしそれだけでもこの書物の内容が窺はれるほど興味もあり、且つ著者の僞らざる感激を語つてゐます。こゝにその序文の拔書きをしましよう――

私は時々もつと人間らしく考へて死なねばならぬ。そして折角此の世に生れたならばせめて墓へ向つての道程中に、もつと思想を深めて行かねばならぬと思つた……工場主の馬鹿息子に生れた私は實際不安を感んずる。私は洗禮すらも受けたキリスト教信者である。私がもしも眞に神の愛を享けて居るならば不安が無い筈だ。けれども自らの信仰淺き爲めか、私は唯祈りにのみ安心が求められなくなつた。……靜かに思ふと自分達の前途が心配である。私は私の父としての責任がある如く私は何となく恐ろしい將來の變化を豫期せねばならぬ。滿二十五歳の父が彼を此の世に產み出した事は如何にも罪の樣に思ふ。私は父から讓り受ける私有財產でお前を養つて行くのでは何となく自らの良心に濟まぬ樣に思ふ。如何なる種類の勞働かは知らないが、兎も角私は自分でかせいだ勞力の報酬によつてお前の生長を希望するの權利をもつものである――私の如く社會主義經濟學時代の一住民として生れながら却つて平氣で奢侈の生產を出來る限り一所懸命にやつて行くお前の父を恶んで貰ひたいのである。（芝西久保八幡町厚生閣定價三、二〇）

新社會（二）

四

吾々の知る凡ゆる文明は、社會的に二層に分れた多數の富める人から生じたものである。文明はこの二層が一つに融合する時にその頂點に達する。

それ故、一國民が、數多く富んでゐると云ふ事だけでは十分でない。富と力とを持ち、他方貧しい多數の人々も包含し、更に壓迫され奴隷となされたものさへなければならぬ。之を得るに難い時は、その代りとして他國の文化を征服し、また利用しなければならぬ。一はローマのなした所であつた。他はアメリカが今なしつゝある所である。恐ろしい事だ、然し理解し得られる。何故ならば、この點までは自然の無意識的過程、卽ち相互鬪爭が勢力を占めて居た。その間は團體組織は猛獸であつた。たつた今、彼等は人間的秩序の境界を超えんとして居る。

理解し得られそして釋明し得られる事だ。何故ならば、文化の創造物は皆相關聯してゐる　人は價高きものを拒絕しつゝ、より安價なものを追ふ事を得ない。安價な文化なるものは無い。文化の創造物は、總體として、その費用を要求する、史上に知られたる最も莫大な支出、必要品の供給以上の人間の勞作が只それによつてのみ償はるゝ支出を要求するのである。

文明の創造物は、他の生あり或は生なき諸物と同樣に、交互に關係あるものである。植物、人間、野獸または道具などは、時代から時代へと關聯がある。描くに際し、人は數千年來の繪畫を見て、初めて新らしき繪畫の存在を見出すに至る。吾々の詩歌、吾々の研究は數千年來の成果である。斯く云ふ事は、技術上或は思想上の天才に對する侮蔑ではない。天才は、丁度古き枝に咲ける新らしき花の如く新らしくして尙過去將來に永遠なるものである。中央アフリカか或はニユー、ジーランドの土人が油繪を描いたと聞いたならは、兎も角もパリーにでも行つた事があるに違ひないと想像する事が出來る。歐洲の藝術家がタヒチで製作し、創作しても、彼の作品はタヒチ文化の生產品ではない。何處かの不毛の地に、一度枯れ失せた文明は、唯新らしき土地に、他國の種によつてのみ復活する事を得るのである。

然し乍ら、文化の永續は、開化の時に於てすら、只絕えざる出費によつてのみ保たれる。丁度乾燥地にては繁茂する植物が不斷の灌漑を要するが如きである。ルネサンスの藝術の精華を產み出す爲には、東洋の富の流れを伊太利に灑がねばならなかつた。藝術と科學や、學業、名工、學徒、或は傳統を榮えしめる爲には、數多き貴族または世俗的或は精神的の王侯等は、寺院、王宮、庭園、碑、ページエント、遊戲、或は家具等を見出して之を飾り立てねばならなかつた。十七世紀と十八世紀前半との獨逸の特色であつた外國文化の崇拜は卽ち吾々の國が自らの收穫を得るにはあまりに貧しく育まれた事を意味するものである。中世紀の文化は、歐洲の人口が稀薄で、製作の機會が一地方で努力を費やすには餘りに少なすぎた間は、世界的のものであつた。人口が少なかつたホーマー時代の希臘でさへ、建築師と詩人は、一所に定往しなかつた。彼等はさすらへる藝術家であつた。若しも、今日でも、グアテマラ共和國がホンヂユラス共和國か、元老院や停車場を建てたいと思へば、ロンドンかパリーから建築家を迎えねばならないであらう

文明の模範的藝術である、手藝、工業の技術すら、それを保持する爲には、練磨に、委託に、賣買に大なる不斷の費用を省く事は出來ない。今までにはそうした事はなかつたが、若しセルビア人やスロヴアーク人が歐洲の大學教育を享け、その技術の傳統を學んだなら、如何して彼等も一大發見を爲し得ないと云ふ理由があらう。然し乍ら、多額の費用を以て大學と研究室を設立し、外國の教授を招聘したとて、獨立した永久のセルビヤ又はスロヴアキヤ自身の技術を生れしむるものではない。この後で、その國内に市場を持たねばならない。熟練した購買者、製造業者、仲買人、多くの熟練じた技師、技手、職工、勞働者或は亦國外市場――約言すれば、工業的雰圍氣――あつて初めて製造及生產の標準を保つ事を得るのである。

貧しき國は、富める國の爲に高價な產物を提供する事は出來ない。需要から生ずる敎育を持たぬからである。例へば、遊獵、愉樂の生產品は英國が第一であるが、佛國ではこれ等の製品は、馬鹿々々しい程誤解され、馬鹿げた裝飾で眞似される。然し乍ら、他方に於て、佛國製の贅澤品、美術品は、他のすべての國から需要される。獨逸が富を得て、科學の力と技術、生產と市場、補助工業と僅少の利潤財政と商業、敎育と訓練、習慣と相應なる價の感念等の諸要素の協力がもたらされたる時までは、その製品は安價な

卑俗なものと考へられて居た。

然し乍ら、人間の力は、諸制度や、物質的產物と同樣な教養、同樣な出費、同樣な高い訓練を必要とする。纖細な仕事は、敏感な手と生活から保護された道とを必要とする發明は閑暇と自由とを必要とする。趣味は、教練と傳統とを、科學的思索と藝術的意想とは、教化、思想、智識の斷えざる連續した圍繞を必要とする。死に瀕せる文明と、暫しが間は、消え去らぬ文化の腐植土の上に、また消えやらぬ思想の雰圍氣の中に生き延びる事も出來よう。然し新らしくこれ等の諸要素を創造する事は、その力の及ぶ範圍外にある。

吾々は自らを欺いてはならぬ。まつすぐに事實を見つめよう！　僻見をもたぬプロレタリアとして、無邪氣に誇つてゐる優れたるカナダ人は、學位あるものもないものも皆官僚的、貴族的教化に養はれた子にすぎない。彼等が、假令その堅い襟と眼鏡とを手離した所で尙異る所はない。彼等の一言一句、議論、思想の體系、智識の程度、强く主張するその智能、藝術的科學的趣味、凡ての手工、工業等は皆彼等が既に投げ棄てたりと想つてゐるものゝ遺產であり彼等が賤しむものへの貢物にすぎない。眞正の急進主義は只、それが諸事物の關係を理解し、結末を恐れない時にのみ、尊敬せらるべきである。その急激なる前進は、文化を殺すものなりと心得ねばならない。適切な結論は卽、文化に寄食せず文化を蔑視すべきである。初期の基督教はすべての邪教の屑と憎惡を棄てた、初期の急進黨は、その最初の瞬間に、金滿家を擇り拔く事に急いだであらう。

前述の如く、文化と文明は、閑暇、勞働力、富等の形體に於て、莫大な支出を必要とする。それは保護と市場とを必要とする。また學校、規範、傳統、比較、判斷、智識、教養、性癖、正しは養育所等卽ち雰圍氣を必要とするその外圍に立つものは、屢々これに慣れてゐるものよりも、彼の新らしい力をもつてより强く役立ち得る。然し彼も亦同じ空氣を呼吸して生きてゐなければならない。文化と文明は、豐饒なる土地を必要とするのである。

然し土地が豐饒であるだけでは十分でない、文化は對照によつて基礎づけられ、增大せられねばならぬ。富は自由に使用し得る多數の貧しき、寄食者を持たねばならぬ。然らずして、如何して文化の經費が支拂ひ得られよう？一人の人は自由に爲し得る數人を持たねばならぬ。他人が彼と同等であるならば、如何して之を自由に爲し得よう經費は大であつて、實際行はれなければならぬ。若し數千人の勞働が低廉でないならば、如何してそう出來よう？數人の高きものが、權力と光彩を發揮せねばならず、模倣さるべき典型とならねばならぬ。若し、之に從ふ者、見物するもの群集等が居なければ、如何して斯くなり得よう？　幸福の地、卽萬人に平等なる幸福の地は、小さく地方的のもので

ある。國家とその當局者または社會の堅實な、勤勉な人々から成る各種の委員會が、その提案、豫算、異議、統轄を以て、メーセナスやメヂチの地位に代つた時に吾々は、戰碑、客間、新聞紙、涼亭、酒飲場の如きものを得る事が出來よう。常にそうではなかつたか？そうではなかつた。然し、最も貧しき時に於ても、パトロンたりしものは王者であつた。

然し乍ら、文化が斯の如き毒ある花にすぎず、貧困の滋地に富有の太陽を戴いてのみ、榮ゆるものならば、それは破壞さるべきであり、破壞されねばならぬ。吾々の情操は、最早多數の不幸から生ずる小數の幸福と光輝には耐え得られない。感覺の時は過ぎ去つた。意識の時代の曙が初まりかけてゐる。

そして、今や臆病な悶えた清教主義も現はれ出た。何か中庸の途はないものか？　中庸政策で十分ではなからうか？否、決して駄目である。「日々のパン」を語り、之に「最も尊き藝術の喜び」のバタをつけようと欲する、あなた方「單なる必要品」の選ばれたる供給者たちに、只一度限り明らかに曰はう？　それは、駄目である！と。

半途の手段は駄目である。四分の一手段も亦無駄である病めるも、健全なるも、食過ぎたるも、全世界擧つて吾々と同じ心であるならば、それもよからう。モスカウでは人々は世界革命を今かと待つて居るそうだ。然し世界は承知しそうもない。それ故、若しも文化と文明がありのまゝに殘るべきだとすれば、一切りに吾々から、毒を含める衣をもぎ去るより外に道はないのだらうか？或は——何か「或は」何があるだらうか？　考へてみよう。まだ道は遠い。先づ第一に、働かざるものは所得なく、最早富める者なきその日が來た時に、吾々と世界とはどの位に富むか、或は貧しくなるかを識らねばならぬ。

若しも、經濟制度が吾々をして、自給自足可能の民とするならば、必要品はすべて之を所有し、時々駝鳥の羽を積み出してコーヒーや聖歌集を獲るボーア共和國を規範として、問題は決定する。然し、嗚呼！吾々は二千萬人に營養を得んが爲には、血と腦味噌を輸出しなければなるまい。若しも吾々が燐酸鑛を得んが爲に、吾々の藝術的努力の最善の產物として、木綿の靴下と寢帽子とを提供して、これは最も美事な手工品ですと云ふ時に——何故ならば、わが「日々のパン」經濟時代には、現代の編絲機械の如き惡魔の道具を用ふる事はとうに忘れてゐるのだから——人々は答へるだらう。先づ第一に、私共は寢帽子は入りません、若し欲しいとしても、その十分の一の價で出來ますと。そして吾々の綿製品は、賣殘つて送り返されるであらう。

世界貿易は、その範圍の小なるものも、只高き技術組織を根底としてのみ行はれる。然るに此高き制度は、「一文惜み」經濟の基礎の上には立てられない。部分を意慾するものは亦全體をも願はなければならない。然してこの全體には、技術のみならず、文明、また洵に文化の概念すらも歸屬せしめられるものである。破れ調子で一年中、奏してゐる、日樂部屋のオーケストラに、年に一度だけ、然も只一度受難日に、一生懸命になつて、バッハの大齊音樂を立派にやれと云ふ事を得ようか？（ラーテナウ原著—柳政夫譯）

自由人の手帳

ボルシェヴヰキの虐政の話（三）

七、小供の問題

エムマ・ゴオルドマン女史は、ボルシエヴ井キの諸政策を論んじてから、進んでボルシエヴ井キの諸政策中で、最も好評のあるものの一つ、小供の教育問題へと轉ずる。彼女は、ボルシエヴ井キが小供の保護と教育とのためになした努力を承認しながらも、それの失敗であることを指摘し、また世間に傳へられる「ロシヤの小供の生活」についての話が、多くは單なる傳説に過ぎないものであることを指摘する。「それなら何故に失敗したか？　ゴオルドマン女史はロシヤにおける彼女の實感を語る。

私は一九一九年に、マデイソン角園で催された十月革命の二同目の年祭で、辯士の一人からうけた印象を目に見るように記憶してゐます。この男は丁度ロシヤから歸つたところであつた。彼は、ロシヤにおける小供の保護と待遇とを話して、聽衆に非常な熱狂を起こさせてゐたのです。私の心は、この國——民衆が多年の羈絆を脱して、そして今や「小供の手によつて導かれて」ゐる——の人民の方へ惹きつけられたのです。それはしかく不可思議であつたのです。

水上監獄、バフォードでの航海中、ロシヤで小供のためになされた仕事のことが、私の精神を助けもし、暖めもした。如何に希望に充ちた未來である。この立派な新生活の一部となることが、如何に感激的である！しかしロシヤへきて、私は社會主義國家といふ一つの誤謬——それがその軌道内におけるあらゆる努力を壓搾してゐる——を計算外に置いてゐたことが分つたのです。

ボルシエヴ井キが小供の保護と教育とについて彼等の全力を注ごうとしたことは事實である。また若し彼等がロシヤの小供の必要に奉仕することに失敗したとしたら、その過失が、彼等自身のものであるよりも、遙に多く彼等の敵の罪であるといふことも、眞實である。干渉と封鎖とは、無若氣な小供と病人との弱い肩上に最も重くふりかゝつた しかしもつと好都合な狀況のもとでも、ボルシエヴ井キ國家の官僚的怪物は、小供と教育とのために、共産主義者によつてなされた最善の企てを挫き、最高の努力を痲痺させ

るよりほかにはできなかつたのです。

ゴオルドマン女史は、彼女がボルシエヴ井キ・ロシヤでの模範學校、(Pokazatelnyashkola) を見た時の經驗から彼女の話を進める。彼女がこの模範學校を見たのはロシヤへ入つてから數週間の後のことであつた。この學校はオテル・ド・リユーロープの中に立つてゐた。そこはまだ殆んど昔のまゝに優美を存して、廣い室、美しいチヤンデリエル、贅澤な定具をもつてゐた。

一九二〇年の冬は、燃料の不足のために、ペトログラードでは殆んど凡ての人が死ぬばかりであつた。だから小供等をできるだけ小數の室に密集させることが必要であつた。しかしそれ等の室は清潔で、よく整つて、そして氣持のいゝものであつた。平均六歳から十三歳までの小供等が、健康で營養がよくて、滿足してゐるように見えた。保護の醫者は、ゴオルドマン女史を、愛らしい銅皿で輝いてゐる臺所をもいれて、いろ／＼の場所を、詳細に說明しながら案內してくれた。

この學校はロシヤの各地から、また各地へ小供等を受けたり、送つたりする中心であつた。小供等はロシヤの全土特に地方から集められた。禽獸の皮を着て、瘠せ衰へて、病氣でこゝへきた。こゝで彼等は入浴し、身長身重を增したり、そし大切な取扱ひをうけた。暫らくの間この學校で基礎的教育をうけてから、小供のための寄宿學校へと送られる。

「私の見たところは私に深い印象を與へたのです。こゝに、ロシヤでは小供のために偉大なことがなされたといふことのアメリカへきた報告の證據があつたのです。」

ゴオルドマンはロシヤにゐる間に、アメリカで多年知り合ひであつた一婦人の訪問をうけた。彼女は、二月革命の後間もなく、彼女の良夫や小供とともに彼女の故鄕へと急いだ。彼女は偉大な十月革命にも參加し、それからはいろ／＼な仕事に掌はつたが、彼女の最大の興味は小供の世話であつた。彼女が、ゴオルドマンを訪問した時は、彼女は少女寄宿學校の管理婦(マトロン)をしてゐた。彼女は、小供等のことについていろ／＼のことを話した。そして學校にとつて入用なものを得るために苦るしい努力をしてゐることを話した。

彼女の話したことは、ゴオルドマンが信用することができなかつた位ひに、オテル・ド・リユロープで見たところと全然違つてゐました。しかしゴオルドマンは彼女が絕對に

正直で信頼のできることを信んじてゐました。

『皮(鈴馬薯の)を捨てなさるな。』

『どうして、この皮をどうなさるのですか？』

小供等はそれで馬鈴薯菓子を造ります

そしてそれを食べるのを非常に好きます。

「小供等が？ どうしてそんなことが？ 彼等は第一日糧をもえてゐないのですか？」

ゴオルドマンは彼女に夕食を食べてゆくことをすゝめたゴオルドマンが臺所で馬鈴薯の皮を剝いてゐた時に、彼女等二人の間にこうした會話が交はされたのです。ゴオルドマンはオテル・ド・リユーロープで小供等が白麵麭や、チヨコレートや、牛乳や、ココアや、米や、牛肉すらも食べてゐるのを見て、そしてボルシエヴヰキ政府が如何に小供を大切にしてゐるかをつく〴〵感心してゐたものだから、今この一婦人の話を聽いて、全くそれを信んずることができなかつたのです。

「私の學校へ入らつしやいまし。そして得心なさいまし。」この一婦人は微笑しながらこういつた。

ゴオルドマンはこの學校へ行つて見た。「私は幾度もこの學校へ行きました。私はこゝで問題の裏面を見ました。しかし尚ほこの場合でも私はそう簡單に信んじたのではなかつたのです。この學校には六十五人の小供がゐました彼等の食物は窮乏し、そして貧弱な質のものであつた。彼等の多くは彼等の親達や親戚が田舎から送つてきたもので養はれてゐたのです。彼等は殆んど着るに暖衣なく、そして多くは穿くべき靴をもつてゐなかつたのです。私の友は、彼等の時間の多くと、そして全精力とを、教育院のいろ〱な部門に浪費しなければならなかつたのです。

彼女は六十五人の小供等のために二十個の木匙をうるために二週間もかゝりました。列に立つて、上役人の許るしを待ちながら、丸一ケ月たつてから、二十五足の雪靴を與へられたのです。嫉妬や、憎惡や、喧嘩を起こさせないでそれを六十五人の小供等の間に分配するのは非常な智慧と手練とが必要であつたのです。

私はこの學校を訪問する度に、どこかに何か悪るいことがあるといふことを益々信んぜさせられるようになりました。でなくて、どうしてこのオテル・ド・リユーロープとグロンベルスキー・ブロスペクトでうけてゐる小供の保護のこうした相違を說明することができましよう？

一方では、小供等はあらゆる點 ―食物、衣服、室、音樂會、舞踊について最善のもの――一般狀態から考へてあ

まり善すぎるものを與へられてゐました。他方では小供等は始終飢えを覺えるほどに僅かのものを與へられ、そして彼等が辛うじてえたのも、非常な困難で獲得しなければならないのであつた。

間もなく私は二、三の事實を學んだのです。ロシヤには凡ての小供に充分なだけの食物と着物はなかつたのです。ボルシエヴ井キは、外國の宣敎師や、代表者や、新聞探訪なぞの便利のために、各市に二、三の「見せ學校」を拵らへて置くことが必要だと考へたのです。小供等は凡ての機會に陳列され、見せものにされ、そして書かれたのです。これ等の學校は各種のものについて最良のものをうけたのです。他の學校――それが勿論大多數である――には殘りのものが與へられたのです。

「見せ學校」だけを尋ねて、そしてそれによつてロシヤにおける小供の保護の問題を判斷する人々は、ボルシエヴ井キ治下における小供の群の眞の狀態について全然無知で歸つたのです」

ゴオルドマン女史はこゝで、彼女の立場から、ボルシエヴ井キの小供に對する態度を攻擊してゐます。彼女に從へば、ロシヤでは材料が不足であつても、また資本家國の封鎖のためにされたにしても、しかも尙ほこれ等の材料が凡ての小供に平等に分配されたなら、一般の兒童の窮乏は幾分か緩和されるのである。しかもこの「見せ學校」を造つたことが、それ自身不道德で且つ特權を造つてゐるものである。そしてこの虛飾、僞り、瞞着とが、小供と敎師とのうへに影響しないではゐないのである。

八、「死靈」

百年前にゴオゴルが彼の偉大な著作「死靈」によつてロシヤの同胞を驚嘆せしめた。そはロシヤの封建主義とその寄生主義の、辛辣な問罪であつた。「死靈」はまたロシヤに復活してゐます。たゞそれを問罪するゴオゴルがない。そして若しあつたにしても、今日のロシヤでは、偉大なゴオゴルが彼の時代にもつたように聽かれる機會はとてもあるものでない。

何ものが近代の死せる靈であるか？　そは例示的說明によつて最もよく明らかにすることができよう。凡ての託兒所、寄宿學校、感化院――實に小供や大人の住むあらゆるインスチチユーションは――それ寄の寓者の數だけの食物や衣服の日糧をうけとる權利があるのです。

凡てのインスチチユートションは、ペトログラードのペトロクムミユナ、モスコウのモスコムミユナなぞのような中央分配局の供給によつて立つてゐるのです。あるインスチチユーションが必要なものを受取るためには、多數の命令が數十人のチノウニキによつての署名、副署名が得られなければならないのです。

チノウニキは、彼等がある賄賂を受けるまでは事件を組織的に後らせるのです。だからインスチチユーションの實際の人の數よりも以上の人數に對する命令をうることが必要となります。」

何故に必要なのか？この「餘分」のものが、役人への賄賂と、そしてこのインスチチユーションの供給を管理する「經濟的管理者」の空腹な友人に與へるために必要であるのです。こゝにゴオルドマン女史は、彼女の所謂「死靈」を見てゐるのです。彼女の話はつゞく――

例へば私のこの友人の學校には六十五人の小供がゐますそれを彼女の前任者たちは假裝の名――「死靈」――をこの學校の實際の小供の數に加へたのです。こうやつてえて、そして賄賂に使はれた餘分の日量の代りに前任者たちは迅速に供給をうけたのです。……私の友人は、このロシヤに普く行はれてゐる實行方法の仲間にはならなかつた。彼女は「死せる靈」を附加することを拒むだのです。彼女はこれ等の「死靈が」小供等のもと〳〵僅かな日糧を喰ひつゝあることを知つてゐたのです。……

ボルシエヴ井キの學校内における小供の部分飢餓のことは私は日一日と、だん〴〵に、そして苦心して學んだ。私は最初はこの「死せる靈」の方法が一般的實行であることを信んじなかつた。「ソビエットの第一の家」、ホテル・アストリアの私の隣室に、一人の小さい婦人と彼女の二人の小供とが住むでゐた。彼女は共産黨員であつたがしかし「死靈」の方法に反對してあくまで戰つた一人であつた。彼女はいろ〳〵な小供のインスチチユーションで働いた。彼女は私がクロンベルスキー・プロスペクトの學校で見た狀態を裏書きしたばかりではなしに、彼女は私を同樣な實行の行はれてゐる他の多くの場所をつれていつた。

到るところで「死せる靈」が半飢餓の小供等に寄生してゐたのです。私の隣人は彼女自身の、三歳の男兒と九歳の女兒との二人の小供についての彼女の經驗を話した。二人とも「殖民地」にやられた。彼女の貧弱な稼ぎから、この母は充分なもののえられなひ彼女の小供等に「餘分」のもの

を定めて送つてゐた。六ヶ月目の終りに、二人の小供が病氣になり、彼等の母の室に移されることとなつた。女の兒の方は危險な發疹にかゝり、男の兒は非常に衰弱した。どちらも營養不良のためだと診斷されたのです。

私はこの誠實な、勤勉な隣人と友達となつた。彼女をとほして私は非常に小供の一般狀態について學んだ。私は益々ボルシエヴヰキが小供のためにあらゆる努力をなしつゝあることを見た。しかし彼等の努力は、彼等の國家が創造した寄生的官僚政治によつて水泡に歸したのです。……共產青年團の委員によつてなされた調査の結果、ペトログラードのある學校における傷ましい狀態が暴露された。一九二〇年五月ペトログラードのプラウダにこの報告が發表された。それが屢々なされてきた攻擊を證據立てた。そのうちには「死靈」の一般的實行、小供の日糧を種子に多數の寄宿生の名を增加すること、それから他の腐敗と非能率との方法などがそのうちに含まれてゐた。委員會は、例へば百二十五人の小供しかない學校に百三十八人、二十五人しかないところで三十八人の假裝寄宿生があつた。これ等は決して例外的なものではなかつたのです。

このほかに、委員會の報告は、小供等が非常に等閑視され、穢い襤褸を着、不潔なそして惡臭のする布なき寢臺に寢させられてゐることを明らかにした。ある小供は一晚中暗室の中に幽閉の罰をうけ、またある小供は、夕食を食べないで寢につかせられ、そしてあるものは打擲さへされたことを明らかにした。この報告は役員連中の間に非常な騷ぎを起したのです。

特別調査がすぐと命ぜられました。そこでアメリカでの類似のことと同じように、それは無論罪晴らしに終つたのです。共產青年團の委員會は『誇張』といふことで譴責されました。プラウダにこの論文は決して現はれなかつたこと、そしてかゝる物語りは、反革命派の水車への水であるなぞといふことがいはれたのです…… ……。

ウクラインを通つての四ヶ月旅行の中に、私は託兒所や幼稚園や、寄宿學校や、そして殖民地やを、勿論非公式に訪問するの多くの機會をもちました。私は到るところで同じ狀態を見ました。模範的な「見せ學校」は食物もよく注意も行きとどいてゐました。そうでないのは小供等が飢餓の狀態にゐました。私は屢々保護の男女が、如何に官僚的機關に反抗して小供等の利益の保護のために熱心に努力してゐるかを見ました。しかしたゞ全能の機關によつて最後に藏

首されるだけの無益の努力であつたのです。

私はモスコウを離れる少し前に、この現象の驚くべき實例を見ました。ある區域に模範託兒所があつた。それは私がロシヤで知つたところでは最善に組織され、備へられてゐるものであつた。この保護者は非常に稀れに見る女性、理想家、長い經驗の教育家、倦むことなき働き家であつた。彼女は嚴重に「死靈」の實行に反對しました。彼女はパウルを養ふためにピイタアから奪ひはない。下級官廳の小役人に送賄をしようとはしなかつた。

例のとほりに、一人の戰士が彼女の反對のために撰まれた。この憐れむべき攻擊における第一人は、託兒所の醫師共產黨員であつた。あらゆる種類の非難が、彼女の前に加へられた。その何れも根據のあるものではなかつた。しかし機關はこの婦人がその地位から除外されるまでは止まりはしない。かくして遂に、彼女はまた私女の室をも奪はれたのです。彼女は四ケ月の赤兒の母であつたのです。

時は十一月で、天氣は寒く、冷氣は身に浸みつゝあつた。しかも託兒所のために戰つた保護婦は、この託兒所から立ち去ることを命令されたのです。彼女はその幼兒のために室のえられるまではこゝを立ち去ることを拒絕しました。彼女は三ケ年間火の氣のない地下室の小さい、暗い、濕つぽい室を與へられました。この墓の中で、幼兒は病氣にかゝり、爾來患つてゐました。

ルナチャルスキーはこうした事件を知つてゐるか？ 共產黨の首領はこれを知つてゐるか？ あるものは疑なく知つてゐるのです。しかし彼等は「重要な國務」にあまりに忙しいのです。そして彼等はこうした些々たる事件には無感覺であるのです。そこでまた、彼等自身が、Vicious Circleに、ボルシエヴ井キ官僚の機關に捕へられてゐるのです。彼等は共產黨への執着が多くの罪惡を庇護することを知つてゐるのです。

私の二年間のロシヤ滯在の間で、私は多くのインスチチユーシヨンを訪問した。しかし殆んど幸福な小供には遭ひませんでした。

ゴオルドマン女史は、小兒勞働を廢止したことが、勞農ロシヤにとつての一大功業であることを認めながらも、小供の問題について、最後に、次のように彼女の感想を述べる――

「これを要するに、ボルシエヴ井キ・インスチチユーシヨンのもとにおける大低の小供は、特色のない、ステロに箝つた、眞の孤兒院の小供であるといふことを私に印象しました。

これ等の小供を、實際に把握する何ものかが存在します彼等はたゞに食物に飢えてゐるばかりではなしに、より以上に愛情に飢えてゐます。――彼等は寂しい小供であるのです。

勞働組合と「勞働反對」

ゴオルドマン女史は最後にロシヤにおける勞働組合のことについて話します。彼女に從へば、ボルシエヴヰキ治下におけるロシヤの勞働組合は、保守的勞働組合でもなく、革命的組合でもない。勞働組合は、その職分を「國家」に吸收されてしまつて、たゞ一つの新らしい職分を殘された、警察的職分がこれであると。

ボルシエヴヰキ政府となつてから、ロシヤでは凡ての勞働者が勞働組合に入らなければならないことになつた。凡ての勞働者は、まだこれがために强制的に賃銀のうちから組合費を引きとられるのである。ところが組合の强制加入は、勞働組合をして、勞働組合の職分を盡させることではなくて、それの職分の奪取――國家への奪取なのである。

「大きな、そして戰鬪的な組合を代表するモスコウの麵麭勞働者等は一九二〇年の夏に彼等の麵麭限量の擴張のためにストライキをしました。政府はこの問題で困りはしなかつた。たゞ罷業した支部を解散し、その指導者を除名し、そしてその最も活動的なもののあるものを捕縛したのです。」

英國の勞働使節がロシヤを訪ふた時に、モスコウ印刷工が彼等の集會に英國勞働使節を招き、そしてチエルノフとダレとがこの英國の勞働使節にロシヤの勞働組合と勞働狀態とについて二、三の話をした、それがボルシエヴヰキ政府から「許るすべからざる罪惡」だとされた。ロシヤの全國を通じて、モスコウ印刷工等は「反革命派」「勞働者の皮剝ぎ」として非難された。そして印刷工組合の役員は役を奪はれ、そのあるものは投獄されたのです。

一九二一年のペトログラードのストライキの間のことであつた。バルチック諸工場の勞働者等がその會員二十二名のものの捕縛に抗議した時に、數日たつて工場にチエツカが侵入し、そして多數の勞働者が捕縛されたのです。

「自然にこうした狀態は、勞働者の側に激しい不滿を引きおこさずには、永く續くことはできなかつたのです。實に一九二〇年にこの不滿は、政府がこの狀態について重大に考量しなくてはゐられなかつたほどに一般的且つ脅威的となつたのです。勞働組合の任務の問題が一九二〇年の終りに取りあげられ、そして共產黨員自身の間でも、この重要な問題について、相衝突する意見が激烈に鬪はされたことが明らかになつたのです。

「凡ての指導的共產黨員はこの勞働組合の運命を決すべき熱狂的な言論戰に參加しました。提案された議題は四つの主もなる傾向を示しました。」

「最後に最も重要なのは、勞働者とその支持者の實感情を眞實に代表したコロンタイ夫人とシユリアプニコフによつて率ゐられる勞働反對であつたのです。」

「勞働反對は勞働組合の軍事化がロシヤの經濟的改造についての勞働者の興味を破壞し、彼等の生產能力を痲痺させたことを主張したのです。彼等は群衆が官僚的國家とその腐敗せる役人連の覊絆から解放されること、そして人民に創造的精力を實行する機會を與へることを要求したのです

「彼等は十月革命が群衆をしてロシヤの產業生活の統制をなさしめるために戰はれたことを指摘しました。要するに勞働反對は一般勞働者の重り重つた抗議と不滿とを表現したのです。

「レニンは勞働反對をアナーコ・サンヂカリストだとして中產階級の觀念だとして、非難し、そしてそれの禁止を命令じたのです。

シユリアプニコフ、コロンタイ、リアサノフ、勞働反對の代表者のうへに壓迫が加へられたのです。

過去四ケ年の間ロシヤに事實上行はれてきた八時間勞働は今は事實上廢されました。一九二一年十二月のモスコウ・プラウダによると、六百九十五の工場のうちで僅に八十六だけが八時間勞働を維持してゐるに過ぎない。大部分の場合は九時間勞働であり、四十四の工場では十時間から十二時間、十一の工場では十四時間から十六時間であり、四十四の工場では勞働時間は一定してゐない。ある場所では小供もまた十二時間から十四時間働き、麵麭職工は最も長くて十二時間から十八時間働いてゐます。以上はモスコウの事情です。地方ではもつとひどい狀態になつてゐます。ドンの炭坑では、坑夫は十六時間乃至十七時間勞働させられてゐます。ヴ井テブスク國立製革工場では十二時間が標準勞働時間となつてゐます。

ゴオルドマンは最後にいふ。

「ロシヤ革命は、しかし、全然無駄ではなかつたのです。そはロシヤ群衆の古るくからの思想の多くを根絕し、そして勞働者は最早や從前のような柔順な奴隷ではないのです彼は飽くまで政治に寄つてきました。今は最早それを信じません。

ゴオルドマン女史に從へば、ロシヤの勞働者は現在よりはより直接的な勞働者の新組織を求めてゐます。「レニンとその從者」とはそれを感んじつゝあります。勞働反對とアナーコ・サンヂカリストへの激烈な壓迫の加へられつゝあるのはこれがためであるのです。（以上）

再改造のロシヤ

ブルヂョア化の諸相
本年五月の新法律

一、はしがき

全露勞兵會中央執行委員會は、革命の第一年には盛んに活躍したが、第二年目には「國家」があらゆる權力を獨占したために、爾來中央執行委員會はたゞ名ばかりのものであつた。レニンの人民委員會が獨裁して、カリニシの中央執行委員會は虛器を擁してゐるに過ぎなかつた。しかし第九回ソビエツト大會以來、中央執行委員會がその正當の職分に歸らなくてはならないといふことになつた。その結果、新に選擧された中央執行委員會は、各種の立法事項について活動を始めたが、その第三回目の會議は種々の重要な事項を決走した。一、飢饉問題。二、ゼノア會議。三、軍備縮少問題。四、新土地法。五、土地裁判。六、單一食物稅七、麵麭公債。八、地方行政。九私有財產權。十、刑法。十一、刑事裁判手續。十二、檢事及辯護士の問題がそれであつた。これ等の諸問題についての決定は、委員長カリニンの演說に從へば、何れも「ソビエツト共和國の內外の、地位の變化に應ずるもの」であつたのである。その內外の地位とは何か？ その變化に應ずる仕事とは何か？ 要するに共產ロシヤの內外における新政策からくる。獨裁的共產主義の總退却における、道路の開拓、修善である、卽ち共產ロシヤの私有財產化の法律的建設なのである。こゝにこの會議の結果を簡單に報告して置きます。

二、新土地法

農務大臣(委員)メシアツエフは新經濟政策に伴つて、新土地法の必要であることを提議しました。彼の報告によると一九一九年の法律のとほり、土地は「國家」に屬する。しかし人民はその土地の使用權を獲得することができることになつてゐます。ところが在來の法律ではこの使用權の意義が明瞭を缺いてゐた。特にその大部分の場合である個人的使用の權利について意義の不明瞭な點があるので、一般農民は使用權を與へられることになつてはゐながらも、その權利が安定的に保障されてゐない。土地の公沒がある點まで役人の自由に行はれるまで、使用權の權利としての內

容が不完全であつた。メシアチエフはこの權利を保障するために大體三種の改革案を立て、これを法律とすることの必要を提議したのです。その第一はこの使用權の公奪が嚴重な制限のもとにでなくては實行してならないといふこと即ち私有權の保護なのである。それによると土地の使用權は一、土地を與へられた家族が全然使用能力を失つた場合二、犯罪　三、國家が鐵道その他の國家用に必要である場合に公奪されることができる。その他にもある一定の條件のもとに一收獲期内だけ公奪ができることとなつてゐます。

第二に、從來は協同耕作を奬勵してゐたが、それが思ふように行かず、特に西部の最も重要な農業地帶で個人經營主義が全盛で、政府が成るべく個人に土地を與へまいといふ政策をとると、農民等は團結して、團體の名で政府から土地を割當てゝもらひ、そしてそれを各團體員に勝手に分割して使用したといふような有樣であつた。そこで政府もその協同耕作主義の强制の失敗であることを悟らざるをえないこととなり、その結果は、耕作の經濟形體、土地の使用の經濟形體は、個人的でも協同的でも、人民自身の自由にするといふことが必要である。こゝに定法の必要があるといふのです。つまり集產主義の放棄であるのです。

第三は個人がある場合、例へば一時的に耕作能力を失つた場合に、その土地は公沒されないこと、即ちこの土地を他の農民なりその他に賃貸することができること。もつと詳しくいへば、農民はその割當てられた土地は、一定の稅金さへ拂へば、ある場合には、他人にこれを賃貸して賃料を受取ることができるのである。だからその土地使用權なるものが、ブルヂョア國の土地所有權と、處分の權利を除くと、殆んど撰むところがなくならしめようとするものであることを意味してゐます。

この提案についてはラアリン、オシンスキイ等の間に議論が行はれたが、この新土地法案の根本原則に異論を唱へるものはなく、細目に亘つて規定するために十三人の委員が撰まれたのです。

三、單一食物稅

食物委員のブリユーハノウの報告によると、昨年中、即ち所謂新經濟的政策治下における食物說の徵收方法は不充分であり、そして改正しなくてはならないことが分つた。やの改正しようといふのが所謂食物單一稅案なのである。

單一食物税といふのは、家畜税を廢し、食物税を秣原と耕作しえられる土地のうへに置き、家畜類はたゞ農業の繁榮をもちきたす要業として税額を決定する計算に供することとすることとなのである。

そして今年は昨年の經驗に基いて、食物税を一割にすることが必要である。つまり昨年の豫定額三億八千萬プードから今年は三億四十萬プードに減じようといふのである、

第二の要項は農民の私有財產を尊重して、租税を納めない場合でも、その「租税を納めないといふ理由で」行政命令によつて家畜や農具を公沒することを「絕對禁止」することである　裁判所であつても、家畜や農具を、次回の植付耕作に差支へのある程度にまで公沒を命令することができないこととなつてゐる。

その他數項があり、何れも農民のために好都合な立法である。この法案は異論なく通過しました。

四、麵麭公債

財政委員、ソコルニコフの報告によると、共產ロシャは債權者の信用がゼロであるから、長期の公債を發してもとても駄目だから短期にすること、公債の返却を保證するため別に國庫から一千萬金貨留を用意し、萬一の場合はこの金をもつて內外の市場から穀物を買入れて返償すること、また買入れ不能の場合には金貨で返債してもいゝことが述べられた。討論が行はれた後にこの報告書に基いて大體左のごとく決定された。

一、總額一千萬プードのライ麥に對する麵麭公債を發すること、その返償は一九二二年十二月から翌年二月までの間に行ふこと。

二、額面はライ麥一百プードとすること。

三、この公債の賣出額は九十プード。

四、この公債の賣買は自由であること。

五、公債、補償はライ麥提供地においてされること。

六、補償準備として一千萬金貨留を別に積立てゝ置くこと。

五、私有財產權

私有財產權についての新民法案は共產ロシャの新方向を示すうへに最も重要な記錄である。

ロシャでは土地の所有權そのものは國家に屬してゐるが動產上には私有財產主義が認められてゐるが、この主義を

明確にし且つその適用範圍を擴げ、徵發及び沒收の一般的權力を廢止したのは所謂新經濟政策實施後、特に一九二一年に制定された諸布告であつたが、司法委員クルスキーの報告提案は、この動產上の私有財產を一層確定的に法律化しようとするもので、法案の第三章がこれである。

動產の抵當權が許るされる。

發明、特許及び著作の權利は從來は、國家のものと宣言されてゐたが、今囘の法案では發明者特許權者、及び著作者の私有權が承認される。

相續權については、從來はごく制限された最局部的なものであつたが、この法案によると原則として相續權が承認さるれこととなつてゐる。そして累進相續稅が課されることとなつてゐる。

また契約權が承認され、雇傭、賣買、債權、保證、保險、組合、爲替手形、入札等についての契約が禁んぜられない。そして法律上有効で、裁判所の保護をうける。

この法案については相當の討論があつたが、根本原則については異論を唱へるものがなく、原則としては、會議を通過したこと、並に細目のために再び委員に附託されることが決定された。

協同戰線の失敗の顛末

三派インタナショナルの宣言

三つのインタナショナルの協同戰線は、、世界の勞働者から多大の希望をもたれてゐたものであつたが、五月二十三日から同二十五日へかけての三派代表者、所謂九名委員の會議の結果、第二インタナショナルと第三との間が調和ができず、こゝに折角の努力も水泡に歸することとなつた。失敗の原因は、三派インタナショナルそれ〴〵に見るところに相違があるから、こゝにこの失敗についての、三派の宣言を譯出する方が便利と思ふ。

第二インタナショナルの宣言

第二インタナショナルは一九二二年四月二―五日の伯林會議の決議に贊成し、そして同時に、これによつてのみ國際會議が成功しえられるとは一般的條件を設けた。しかしわれ〳〵は資本主義に對しての協同戰線を希望する。われ〳〵は最初に共產黨がこれについて眞面目であることを信んぜられることを望んだ。われ〳〵の條件のうちで、社

會革命黨の裁判について部分的に受諾された。しかしレニンは被告に對して死刑を要求し、「プラウダ」はその辯護人を「社會的反逆者」、「ブルヂョア階級の從僕」と罵倒し、そして「煽動者」、「殺害者」として問責した。ヂョオルヂアは嘗つてない壓迫のもとに蹂躙され、そしてゼノア會議ではそは宛かも單なる特種石油坑であるように、全然資本主義的立場から、ソビエト・ロシヤによつて取扱はれた。しかしわれ／＼の一般的約束は協同戰線への好意と誠意とであつた。われ／＼は反對の報告をしなくてはならない。勞働組合を分裂させる仕事はモスコウの公然の指導のもとで、特にフランスとノルウエーにおいて續けられてゐる。ホルティのハンガリィにおいてさへ、共産黨は勞働者階級運動の無くてはならぬ結合を不可能ならしめつゝある。

伯林會議で決定した四月二十日の協同示威運動は、ヂョオルヂアでは武力で破壞された。獨逸では共産黨が單なる武力によつて多くの勞働者集會、ライプチヒにおける建築勞働者會議さへも、破壞した。社會民主黨への罵言は從前よりも狂暴になり、ウエルスとシャイデマンとはカアル・リイブクネヒトの殺戮の鼓吹者として罵しられた。そして五月一日の示威運動が、「ブルヂョア階級と社會民主黨に死！」と記るした旗をかざして、モスコウで行はれた。

獨逸共産黨の公式の決定によると、協同戰線は單に「ソビエット權力と、そして共産主義者の目的のためにする勞働者階級の獨裁政治のための戰における豫備的舞臺」であると宣言されてゐる。

第二インタナショナルは、この協同が實際には單なる僞瞞であつて、破滅と細胞組成との行程をもつて手際よく繼續するための戰術的詭計でありながら、單なる外面上の協同によつて、プロレタリヤ階級を欺くところの如何なる企てにも參加することはできない。共産黨の行動に變化が起らない限りは、如何なる一般會議も明らかに有害である。今日の狀態は、第二インタナショナルをしてできるだけ強く、ゼノアにおけるソビエット政府の態度が純粹に帝國主義的且つ資本主義であること、そして第二及び第三インタナショナルの間に存在する根本的相違が、自由と社會とは何を意味するかについての觀念のうちに存在するものであることを力說させるのである。

第二半インタナショナル の宣言

われ／＼は一般インタナショナル會議の發議者であるヴ

井ーン・インタナショナルの執行委員が、この一般會議の道に横はつてゐる障害に打ち克つためにあらゆる努力をなすことについて、常に一致し且つ堅い決心でゐるといふことを斷言する。われ〱は更にヴ井ーン・インタナショナルの仕事が決して盡きたのでなくて、一般國際勞働會議と國際的協同行動をもたらすために、われ〱は寧ろ狀態に應じてわれ〱の努力を繼續すべきであるといふの意見である。

しかし、ヴ井ーン・インタナショナルの執行委員がこの仕事に協同してゐても、われ〱は不幸にしてかゝる協同は今日においては他の二つの執行委員の組織の何れもにおいて、そして第二及び第三インタナショナルの執行委員會における内部的意見の相違が、この問題の解決を一層困難にし、そして一般國際會議の途上における障害を增大するといふことを陳述しなくてはならぬ。

これ等の障害は、第一には獨逸における右翼社會主義及びフランスにおける共產黨からくる。獨逸社會民主黨の中央機關フォルヴェルッの主張は世界勞働者會議の開催に公然と反對である。しかし第三インタナショナルの中においてさへ、今日國際勞働會議に對する豫備的の仕事の繼續を妨害する目的が疑もなく觀取することができる。われ〱はレニンが伯林會議に關し、九人委員會の共產黨代表者の態度を公然非難したこと、そしてこの不信任投票が公的に發表されたことを思ひ出す。共產インタナショナルの總裁ヂノヴィエフが五月十七日即ち九人委員會の開かれる前に書いて、そしてそして「赤旗」に發表されたものはもう一步を進めてゐる。この論文でヂノヴ井エフは「九人委員會の破滅は協同戰線に對する共產インタナショナルの鬪爭を弱めないで强めるであらう」と宣言してゐる。これは九人委員の活動の停止は今日においては共產黨によつて彼等のための有利な結果として利用することができるといふことの明らかな宣言である。

これ等の傾向について、われ〱は九人委員會の活動の範圍をあまりに廣く廣ろげたといふの意見である。四月五月の伯林決議に從へば、委員會の義務は三執行委員會並に未だ三つのインタナショナルの何れにも屬してゐない黨派を含めての擴大された規模のもとに、このうへの會議を開く準備をなすことであつた。この點について第三インタナショナルの内部に分裂が起つた。フランスの共產黨は九人委員會が何か永續的職分を遂行することの觀念に反對した

第三インタナショナルの內部において彼等の代表者が世界會議が直に開かれるかでなければ九人委員會が直に解散すべきであると宣言したのはこの困難のためであつたのである。

これに反してヴ井ーン・インタナショナルの執行委員會は、九人委員の仕事は精力と忍耐とをもつて繼續することが世界勞働會議の利益である。何となればかくしてのみ協同的國際行動の途上に橫はる困難に打ち克つことができるといふ意見である。われ〳〵は九人委員會世界勞働會議のための準備行動を遂行するために適當にして不可缺の機關であると考へる。それ故にわれ〳〵はこの委員會の仕事を眞面目に進め、そして交涉の自然的繼續に、各派代表者の間に依然存在する困難と誤解とに打ち勝つことがわれ〳〵の義務であると信んずる。共產代表者も、もと〳〵は九人委員が世界會議のために必要だといふ意見なのである。何となればそれは下のごとく宣言してゐるから、曰く「若しプロレタリヤの非共產黨の多衆が彼等の指導者の態度の變化を來させることに成功したなら、共產インタナショナルの執行委員會は常に彼等の代表者を更めて三派執行委員會の協同會合に送るの用意をしてゐるであらう」と。

世界勞働者會議は各派執行委員會から成立する組織委員會の媒子によつてのみもちきたらせるものであるといふの原則上に一致が存在するにかゝわらず、第二及び第三インタナショナルの宣言の根本において、今日この交涉を繼續することの不可能であることを認めるのである。……

（アドラア、ブラック、クリスピエン）

第二インタナショヨルの宣言

三派執行委員會の代表者會議は、第二インタナショナルの態度から見て、世界勞働會議は四月末に開くことができないといふことに決した　しかし同時に、全世界における社會的及び政治的方面に亘つて、プロレタリアートに對する資本主義の攻擊を防ぐために缺くべからざるこの會議の成るべく速かな召集のために九人委員會を組織することに決した。三派執行委員會の會議から八週間過ぎた。たゞ開議が開かれなかつたばかりではなしに、九人委員會を召集することさへも可能であることが分らない。この不可能に對する唯一の理由は、第二インタナショナルがあらゆる方法をもつて資本主義外交官がプロレリヤ階級の侵入によつて攪亂されないようにしようとした態度にある。……

三派インタナショナルの代表者會議がソビエット・ロシヤを援ける事が凡ての社會黨の義務であると決められて後に獨逸社會民主黨の會長で且つ伯林會議への第二インタナショナルの代表者であつた人(ウエルス)は、彼の政黨の伯林代表者會議の席上に於る演説によつて挑戰を始めた。彼は共産インタナショナルが、ソビエット・ロシヤの外交政策それ自身帝國主義政策を遂行しつゝあると非難した。ゼノアにおける苦るしい戰の全期を通じて、獨逸社會民主黨の新聞は、ソビエット政府の政策を資本主義の政策だと論んじた。白耳義の社會民主勞働黨は同國政府が無制限的にロシヤに私有財産を回復しようとする戰に對して中立を宣言した。第二インタナショナルの會員であり、スエーデン政府に列し、第二インタナショナル執行委員の一人たるブランティングは同國政府の代表としてゼノアに出席したにかゝわらず、スエーデン社會民主黨は、ソビエット代表者が産業をロシヤ無産者國家の手に維持しようと戰つたことに一言の助けをも與へなかつた。不幸にしてヴ井ーン・インタナショナルは口のうへでロシヤ革命を擁護しながら、資本主義的復興に反對するソビエット・ロシヤの戰ひに對して、彼等の新聞紙上での初歩的な援助さへも與へなかつた。却つて背後で攻撃した、……

第二及第二半インタナショナルとはソビエット政府と共産インタナショナルとをソビエット・ロシヤの外交政策の明らかな機關だと攻撃した。……この宣傳によつて第二インタナショナルはその協同戰線を怠業せんとする固執的の政策を是認し、そして資本主義の益々加はる恥なき攻撃に對する勞働者階級の地位を結合せしめることの社會主義の初歩的義務を回避しつゝあるといふ非難に抗辯しようと望むのである。

この狀態に顧みて、ロシヤ共産黨の中央委員會は自ら―それが第二インタナショナルを滿足させるなら――共同宣言のうちからソビエット權力の防禦について述べられてゐる一切の字句を除外することを承諾する。……

共産インタナショナル執行委員會はこの見解を全く正當だと認める。萬國の勞働者階級はその鬪爭においてソビエット・ロシヤを援助するであらう。何となれば資本主義に對する防禦的戰爭に於てソビエット・ロシヤが國際的無産者階級の最も重な位置の一つであることを知つてゐるからである。第二インタナショナルの指導者及び第二半インタナショナルの指導者の一部をして、プロレタリアートに對

してソビエット・ロシャの擁護を聲明せしめたのはこの勞働者群の壓迫なのである。これ等の指導者や黨派がその黨員に對して彼等がソビエット・ロシャに反對であることを聲言したにしても、若し第二及第二半インタナショナルの諸黨派が少くとも西歐及アメリカにおける最も直接な切迫的利害に對して共產黨とともに戰ふの用意がありさへすれば、共產インタナショナルの協同戰線に對する態度には何の變りもないであらう。……われ〱は資本主義の攻擊に對して無產者の力を結合するため出發點として、世界勞働者會議の召集が近き將來において不可缺であると考へる。

共產インタナショナルの代表者は、共產インタナショナルが四月會議で交された凡ての協定を遂行したことを確認し、そして更に、協同戰線の途上に橫はるあらゆる障害を取り除くことに用意してゐることを確認する。共產インタナショナルの代表者は凡ての勞働組合の問題を、赤色勞働組合インタナショナルを加へて（そは旣に承諾した）、アムステルタムインタナショナルとともに討議するの用意がある。それにもかゝわらず、若し第二インタナショナルの代表者が近き將來において世界勞働會議を召集することが不可能であると考へるなら、共產インタナショナル代表者はこれによつて九人委員會は、今日の組織せられてゐるものとしては、それの存在の理由を失つたものであると宣言する。……

若し第二インタナショナルが近き將來において世界勞働者會議を召集することを拒絕するなら、共產インタナショナル執行委員會の代表者は九人委員會から辭任する。そして共產インタナショナルは倍增の勢ひで、協同戰線のための鬪爭を遂行し、そして多くの群衆を共產黨員でない勞働者であつても、協同戰線の必要であることに說得し、彼等の指導者をして、ブルヂョア階級との協同戰線を止めて、彼等の階級を無產者階級の共同利益のための戰ひのために結合することを餘儀なくせしめるであらう。若し共產黨に屬しない勞働者の群衆が彼等の指導者の態度にこうした變化をもちきたすことに成功するなら、共產インタナショナルの執行委員會は何時でもその代表者を再び三派インタナショナルの共同集會に送ることを承諾するであらう。

九名委員會共產インタナショナル委員

大木が倒れる時

――ジユルゲードの死について――

大木が朽ちて倒れる時、そこに巣くんで居た多くの小鳥は棲家を失つてその方向に迷ふ。ジユルゲードが死んだ時そこにはもう小鳥はゐなかつた。だが、小鳥は大木のようようと倒れる音を聞いて、もう一遍かつて惠まれた棲家を顧みた森は嚴肅であつた。

ジユル、ゲードの末路が、よしどうあつたにもせよ、惠まれた世界の無產者は彼を忘れてはならない。

廿六の身をもつて、パリ・コムミユンに馳せ參じた彼は、フランス勞働黨を起し、統一社會黨を組織した。妥協をもつて邪道となし、彼は、はたして何度ジオレスと爭つたのだつたらうか。

理論家、彼は社會主義の思想を衆化した。大木の若かりし頃、幾多の枝葉がその樹液にはぐまれたことだらう。

使徒、彼はアルベールド、マン伯に答へて、しかり我等はともに勞働者を愛す。貴下は血まみれし勞働者を愛すのだ

大木は老ひた。諸々の雜草が大木の周圍にはびこつて來た。山上には更らに一本の大木が現はれた。〇〇〇その木は更に高い。あはれむべきは人の思想である。〇〇を準備し、〇〇を急いだ。ジユルゲードは〇〇の本體を知り得なかつた。

パリの赤色旗は無數に列をなす。小鳥は倒れた大木の上を飛びまはる。

人は地下に眠る。その思想は地上にをどる。

（二二、九、十七、小牧近江）

三越マーケットの好評

……三越呉服店の五階の奥に常設してあります

三越マーケット特色

一、値段が廉い事
二、品質が良い事
三、商賣にする人には賣らぬ事
四、實用品の外一切賣らぬこと

◇販賣品目◇

◆木綿類……新銘仙、双子、紡績縞、遠州縞、縞縮、綿セル、綿ネル、晒木綿、裏地、紺絣、布團地、染絣、白絣、紡績絣、モス其他
◆雜貨類……毛布、帽子、傘、シャツ、猿又、靴下、筆、墨、紙、履物、小兒服、石鹸、手袋、ハンカチーフ其他
◆食器、食料品、臺所用具……罐詰、砂糖、菓子、鰹節、茶、乾物より荒物まで一切
◆洋服類、靴、中折帽子

最近に賣出したる、スコッチ洋服三ツ揃金二十七圓八十錢、メルトンのオバーコート金二十四圓九十錢、同トンビ金二十五圓八十錢、編上靴金六圓九十錢、短靴金五圓九十錢、中折帽子金三圓は非常な好評を博して居る、如何に内容が充實せるか是非御一覽を願ひます

東京 三越呉服店

定價		
毎月一回一日發行		郵稅
一部	廿錢	五厘
半年分	一圓二十錢	稅共
一年分	二圓四十錢	稅共

但特別臨時號の價は別に申受く

▲送金は可成振替　▲郵券代用一割増

大正十一年十月一日印刷納本
大正十一年十月一日發　行

東京市芝區三田一丁目二十六番地
編輯
印刷發行人　利部一郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷所　川崎活版所

東京市芝區三田一丁目二十六番地
發行所　批評社
振替東京四五三四六

廣告	
半頁	十五圓
一頁	三十圓
二等一頁	四十圓
一等一頁	五十圓

大賣捌

▲神田　東京堂　上田屋　……

▲京橋　東海堂　北隆館　……

▲日本橋　至誠堂　……　……

大正十一年三月廿一日第三種郵便物認可　（毎月一日一回發行）　批評十月號　（改正定價金廿錢）

批評

大正十一年三月三十一日第三種郵便物認可
大正十一年十一月一日印刷納本發行（毎月一回一日發行）

十一月號（第八號）

ソレル紀念號

批評社

‖批評十一月號（第八號）內容‖

自由人の手帳

生活統一と日本の將來

個の限界は一個の全である。しかし乍ら、その全の限界はまた一個の個である。かくの如き循環的論證に於いて、その個と全との關係は、常にある種の段階を設くることに依つて區別される。卽ち一つの個は、ある段階に於てその全體との關係を保持する。其處に價値及び意義が生ずる。さうして進化の事實も亦其處に存するのである。

進化の事實は今日に於ては單に生物學的見解のうちにのみ止つてはゐない。現實の事實は總て一個の存在である。しかしながらその現實が生活である限り、それは必ず進化の事實を示してゐる。卽ち生活といふ事實に於て進化の證跡が認められるのである。進化とは此場合に於て、如何なる意味を持つであらうか、

凡そ一個の個はそれの限界として一個の全を持つ。然しながら、その一個の個を持つ。總ての位置するのは盡く無價値である。此無價値なる存在を價値づけむが爲には、その存在の全體に對する關係が規定されなければならない。價値とは、元來關係の概念である。從つて進化も亦關係の概念の裡に生ずる。概念とは事實ではない。それは常は抽象的である。故にそれは他の語を以てすれば、常に精神的のものであると云はれるであらう。一個の單細胞動物から人間に到る迄進化した一體系を觀察せよ。その間に存するあらゆる個々の一個體は、それが集つた時、異同に依て判別せられて一つの族をつくる。斯くして生物學上の分類的段階、卽ち門、綱、屬等を作る。然しながら、是等の段階の區別は、云はゞ概念なのである。それは事實としての存在ではない。例へば一個の目に屬する個々の個體は、それぞれ大體を同じくしてゐて、しかも內觀的には各々異つて居る。各個人の顏が如何に異つても其差異がある個人をして人類といふ屬を脫せしめないのと同樣である。此の關係を目して段階的となす所以である。故に、若し其の差異が極めて甚だしく成れば、そこに新たなる分類の綱目、又は種族を作るのである。日本人も人間である。白人も亦人間

である。然し乍ら何れも人類以外の生物ではない。それにも關らず各種の變異性は新たなる個體を作り、新たなる種族を作る。さうしてその總ての種類を互に聯結する時、初めて段階的概念を得るのである。さうして進化も亦さうなのである。

進化的原理として認められるものは、自然淘汰及び雌雄淘汰である。然しながら若しも此の進化的事實を精神的に認めるならば、其處に他の原理が用ひられなければならない。

生活とは元より人間の生活である。人間も生物の一種であるには違ひない。しかし乍ら人間の生活を他の生物の生活と區別するものは、高度なる意識の生活である。意識は如何にして生じたのであるか。凡ての生物はそれの生存を保持する爲に本能の力に依る。人間も亦さうである。然し乍ら、人間に於て本能はその生活の指揮をするに甚しく不足である。この事實に依る時、人間の生活は一般生物界の生存に比して、その生活本來の意識から甚だしく墮落したものである。さうして神經系統の發達に伴ふ意識の發生が、遂に本能に代つて生活を指揮し初めたのである。

其の理由は外でもない。生物の生存に於いてそれの目的は元よりの自己保存と種族維持とである。人間も亦さうである。しかし乍ら、此の根本的本能の目的を全うする爲の補助的本能が充分に其の役目を果し若しも其の力が及ばなて居る時は別に問題はない。例へば蜂が其巣を作り、さうして其生活を終るが如き時に於てさうである。然し乍ら、い時には、他の手段に依らなければならぬ。例へば人間が家を造るが如き時である。人間が樹の上に、住んだり、穴居したりする時に、自然がそれを壓倒すれば、人間の生活は危殆に陷らざるを得ない。故に本能はそれに對抗する手段を講ずる。さうして人間をして家を建てる方法を立てしめる。そこに意識が發生し、その役目を盡すのである。即ち意識は本能の一表現に他ならない。意識生活は、本能生活の代りに發生したものである。故に意識生活と雖其の根底は依然として本能生活である。それにも關らず人間の生活としていふ時、第二次的なる意識生活が本能に代つて第一次生活となるのである。それはあらゆる存在の獨立的傾向から論ずるも亦然るが故に意識は本能より離れてそれ自身の存在を保ち、それ自身の生活を爲すのである。

人間の生活は、故にその根底に本能生活を持ち、總ての事實は本能に基してゐるにも關らず、その上部構造としては意識生活を有し、乘てその意識生活が上部構造としての生活指導の任務を取つてゐる。

故に生活は現實には常に全體として觀察せられ、意識生活及び本能生活の二者が混同して存在してゐるのである。從つてかゝる全體的なる生活の內に進北の事實を認めんとする時は、單に自然的進化原理を豫想する外に、なほ精神的進化原理をも豫想しなければならぬ。それは意志である。

思ふにあるが故にあるところのものを欲するといふことは調和の原理である。同時にあるところのものなるが故にあらざらむと欲する事は除斥の原理である。又あるが故にあらざるところのものを欲するといふことは對象の原理である。同時にあらざるものなるが故にこれを欲せずといふことは放棄の原理である。卽ち此の四つの見解は二元的なのである。卽ち欲すると、欲せざるとあらざるところのものを欲すると、欲せざると、あるところのものに滿足すると、せざると、何れも補足的態度を取り、結局二元的見解に歸着するものである。一を假に Pro と名づければ他は Contra である。

生活は現實である。それは本能の生活に他ならない。さうして意識生活も亦ある意味に於て現實である。それは本能生活と獨立して一個の世界を持つと共に、これと關係して一個の全體的生活を構成する。一個の現實的生活ありとせよ。その意識は、或は此れを欲するが故にその現實と結合して益々その方向に進化するであらう。或はこれを欲せざる故に、これと反對の方向にその現實を導くであらう。簡單なる例を取つて云へば、沈欝なる人は沈欝なるが故に沈欝なる生活を欲する。それは調和の原理である。又、沈欝なる人は自已が沈欝なるが故にこれを欲せず快活を愛する。それは除斥の原理である。レオパルディの如きはこの例である。モリエールとその戯曲の如きその例であらう。ヴアイニンゲルの男女觀の如きもこの所說を裏書きするものといふべきである。此の二元的見解は常に同時存在を爲してゐる。之れをデイアレクティーク的にいへば、それは Pro と Contra とである。この二箇は同時に存在するものであるが故に、それが現實に接する時、その孰れが發生するかは全然決し難い。さうしてその孰れであるかを決定するものは一切の還境であ

り、又意志者の傾向である。

進化段階に於て、この二箇の傾向は必ず共存する。從つて進化の一段階が、次の段階に昇らんが爲には、この二元的傾向の孰れかの發現を必要とするものと見做なければならない。例へば自由主義と專制主義、古典主義と浪漫主義理想主義と現實主義の如き何れもそれである。假に藝術思潮にその例をとれば、この二個の見解が常に對立してゐることが解るであらう。ニィチエはそれをディオニュソス的、及びアポローン的を名づけた。ギリシャ藝術に於いては正しくそれが共存してゐたのである。しかし一般的にいへばそれは各々の時代に應じて或は現れ、或は衰へてゐたといふ方が確かであらう。それは同時存在であるが故に同時代に於ても一人は一方を取り、他の一人は他の一方を取るかもしれない、しかし事實をより廣く時代的に見る時、この考が明らかとなるのである。例へば十七八世紀の古典主義を進行の一段階とせよ。其内に Pro と Contra との二傾向が同時に働くが故に好んで古典主義を助長せしめんとする一派があり、之を好まざるが故にこれと反對の方向に走るものが現はれるであらう。概言すれば古典主義の發生から成長期へかけては、古典主義に對する Pro が動き、それの盛時よりそのデカダンスにかけては Contra が動くのである。しかもこの Contra は、他の進化過程に於ける最初の半分を暗示してゐる。それは浪漫主義の初期である。さうしてそれが全然浪漫主義にはいつた時、又 Pro と Contra との共存が次の運動を却つて浪漫主義の段階にうつして自然主義の方へ導いて行かうとするのである。同様にして自然主義は象徴主義に轉じ、象徴主義は未來主義に轉じやうとするのである。

文藝史上に於けるこの例は、極めて明白に此の進化の二元的見解を示して餘りがある。他の精神的分野に於てもそれ程明白ではないにしても、同様の現象をあらはしてゐる。さうして、これらの現實は常に相對的關係にあるのであり、小は飽くまで小に、大はいよいよ大になるが故に、この段階はかの生物學的分類の段階と等しく觀察されることが出來るのである。例へば、近世原子論の發達に從へば、一原子の構造は一原子核を中心として數電子がその周圍を廻轉してゐるのである。その狀は恰も一遊星が衞星を伴へるが如きものである。さうしてその遊星は太陽の周圍を

廻轉する。故に太陽を一原子核として、遊星が此の周圍　廻轉してゐるのに當るであらう。同時にその太陽は他の恆星の方へ進行しつゝある。さうして結局今迄知られてゐる宇宙の限界が、銀河系宇宙に歸着してゐるが如きものに成るのである。

これを世界の文明の進化に適應すれば、如何になるであらうか。元來世界文明とは何を云ふのであらうか。現實的にいへば、此の地球上に於けるあらゆる人間的生活の總計でなければならない。しかしながら、相對的見地に依れば人間の生活はその段階を有してゐる。パプア土人の文明も人間の文明であり、又世界文明の一部を成すのである。しかしながら、それが世界文明の主要素としては、認められないであらう。この除外は實は不當なものであるかも知れない。殊にそれは現實を捨てゝ意識の中にのみ退かうとする智識階級的思想、或は白人的思想であるかも知れない。しかしながら一度意識の世界の獨立を認め、そしてこれを時代的にその段階を定めんとする時、この除外は意味のない事でもない。然らば世界文明とは、要するに現在位置する世界文明の所謂主要なる要素の文明の謂でなければならぬ。それは、總ての進化段階を分類して、その間の關係を認識して、その進化の度に應じて之を定めるのである。故に生蕃の文明が全體としての日本文明の一要素として存在すると共に、それが日本文明の段階の主位を占め得ない如く、世界文明に於てもその主位を占める段階を取つて考へるのが最初の仕事である。

現在の主要なる文明は、ゲルマン族の文明である。それは、しかしながらローマ時代の文明にあつては、文明要素からは除外されて居た。當時にあつては時にローマ族のみがその要素に當つてゐたのである。それは文明段階の相違に依るのである。さうしてそのゲルマン族が文明段階の主位にはいり得たのは、彼等がよく古代文明の一體系中にはいり、その段階を繼承し、更に之をその上の段階に導き得たからである。故に文明の段階は系統的であり、連續的である。

然らば、現在に於ける世界文明の特徴は何であるか。古代文明に於てギリシャ及びローマがその最たるものであつた事は認められる。現實的に云へば、それらは更に先進文明を受けたからで、これを初期の段階と假定すれば、ギリ

シャ及びローマの文明を古代文明の主位に置くことは許されるであらう。

古代文明の特徴は何であるか。それはあらゆる視點から觀察されるであらうが、しかし最も抽象的にこれを指示すれば、それは倫理的世界である。倫理的世界とは、即ち善の世界であり、各個人がその權威を自己以外に持つ世界である。即ち、個人が認められずして、ある團體のある權威が認められた時代である。此の團體主義は古代の生活の必然的要求から生じたものである。即ち種族の生活がなければ、生物としての人間の生活が出來なかつたからである。故に家の生活も亦さうであつた。此の團體生活が生長する時、國家主義が發達する。そうしてあらゆる個人は、その一切の存在の意義を其の團體に附着せしめてゐた。例外は固より然りである。殊にギリシャの生活は、必ずしもその具體的生活から云へば、その例證とはならないかも知れない。しかも一切の宗教的崇拜が家の制度を保持し、團體主義を固執してゐたことはその一證となるであらう。この宗教的生活が古代の社會の特徴であり、團體主義を固執してゐたことはその一證となるであらう。この宗教的生活が古代の社會の特徴であり、團體主義的生活の基礎であつた。それが正しく、倫理的世界の一變形に當るものである。

かゝる生活段階に於て、個人は如何に位置して居たであらうか。それは自我の沒却と、團體主義への犧牲であつた即ちこの文明の進化原理としての Pro と Contra とは、單に Pro のみが動いてゐたと見做さなければならない。個々の個人主義や、反宗教がギリシャの哲人の中にあるにしても、それは小なる Contra に過ぎぬ。全體としては依然として團體主義が勝利を占めてゐたのである。

しかしながら、前述の例の如く、その團體主義はそれの完成と共にその轉向を見なければならない。その團體主義に對する Contra の完成が次の文明段階を豫想するのである。さうしてルネサンスの文明史的意義がそこに存する。ルネサンスは、當時のキリスト教的宗教的傾向に對する Contra である。それの目標としては、單に古代ギリシャの光榮を恢復することにあつたのかも知れない。しかしながら、その得たる結果はそれと異つた景相を呈して來た。しかもこの異つた景相が現代にとつて甚だしく重要であつた。フマニスムス、宗教改革の如きはその主要なる一例であ

る。そして世界は國體主義に代るに個人主義を認める樣になつた。

この結果を一言にしていへば何であるか、それは古代人の夢想だもせざる論理的世界の發生である。それは「眞」の世界である。古代の世界にあつては一個の事物が生活に價値を供するのは、それが眞であるか或は眞でないかよりは善であるか善でないかに依つてゐた。ルネサンス以後に於ては、それがあべこべに善であることよりも眞であることを必要とするやうになつた。眞理とは論理的體系の一目標である。かくして實驗、觀察、分解、分析、即ち批評的方法、即ち科學が發生した。さうして今やこの科學生活が世界文明の基調となつて來た。

科學的生活とは批評的立場である。批評とは結局個人に歸着するものである。さうして個人の權威は外の世界を脫して個人に戻つて來た。團體主義が崩壞して個人主義となつた。さうして現代とは、正しくこのルネサンスの繼續に他ならない。この形勢を生み出したものは、固より前代の世界に對する Contra である。他の語を以てすれば自由主義である。自由主義は必然的に個人主義に結合してゐる。自由とは團體の自由にあらずして個人の自由である。團體に束縛せられたる個人がその束縛から脫せんとする傾向である。それは單は消極的努力に過ぎない。即ち Contra の意志は常に消極的であり、Pro の意志は積極的である。又前者は下降的であり、後者は上昇的である。一は崩壞的であり、一は建設的である。故に自由主義は團體主義の崩壞原理に他ならない。さうして科學的生活觀が保持するところの眞理といふ目標は、この個人主義的自由に一根據を與へてゐる。さうしてこの自由主義と個人主義とはこゝに結合して科學の應用とその効果とを基として新たなる生活過程にはいつた。古代の社會はそれの宗教的。團體的、倫理的見地から、必然的に政治が重要なる體系となつた。現代はこれに反して經濟がその主要なる要素である。即ち交通の發達に伴つて、各國の重商主義となり、企業の自由主義となり、さうして資本主義的傾向に進んだ。資本主義は故に科學の直接の子であり又さ人の知るが如く、個人主義、自由主義の結果である。

資本主義の發達は、この個人主義、自由主義に對する建設的傾向の發現である。自由主義は單に崩壞原理に過ぎないのであるが、それが一歩轉じて自由主義といふものゝ Pro としてこゝに積極的位置を見出した。さうして資本主

義として完成せられたる時は、それは本來の自由主義を捨てゝ、資本主義的自由主義を保持するのであつた。

この傾向は進化原理の建設意義から當然古代の世界の建設的方向と一致する。從つて資本主義と個人主義とは、自由主義として殘つてゐるが、資本主義そのものは新たなる團體主義を形成する。近世に於る國家の發達は正しく古代の團體主義の資本主義的再生に他ならない。さうしてそれが益々鞏固になるに從つて、その團體主義がますます固くなるのである。そしてそれが帝國主義と化して、一面には國家と結合する。しかしながらルネサンス以後の生活觀は單に資本主義にその根據を與へたゞけではない。科學は本來中立である。自由主義は本來凡ての人について共通である。この自由主義は又必然的にこの新たなる文明の進化段階に際して Contra として働かなければならない。それは無政府主義、社會主義である。無政府主義の立場は單に古代世界に於ける團體主義に反抗して、個人の自由を保持せんとするものに過ぎない。これ多くの無政府主義の古代的であり、貴族的であり、動もすれば、反動主義に化さんとする傾向のある所以である。それは古代の團體主義に對する Contra であつて、資本主義が獲た團體主義と共通する所がある。故に必ずしも、現代資本主義的團體主義に反對するとは限つてゐない、社會主義はこれと進化段階を異にする。それが持つところの自由主義は現代の團體主義卽ち資本主義、國家主義に反對するものである。故にそれは單に一個人の自由を目的とはしない。それは資本主義と全然同一の段階にあるものである。故にそれは資本主義がなければ決して存在しないものである。故にそれは資本主義を完成せしめたる自由主義乃至個人主義に反對するものであつて、寧ろ直接に團體主義にならうとする傾向を有してゐる。殊に共產主義と名づけられて居るものに於て其特徵を有する。共產主義はその中に平等主義を保存する。しかしながらそれは共產主義以上に出でない平等主義である。寧ろ自由を制限しても團體を構成し、これに依つて現代資本主義的團體に當らんとするものである。それはある點からいへば、古代主義の復活であるともいへる。故に資本主義と同じ段階にあると共に、資本主義の間をおいて古代主義に連續する。宛も文藝史上のかの一系統の如きものである。

以上觀察するところに從つて、ルネサンス以後の世界觀が一文明段階を成すことが知り得ると共に、現代はその段

階の後半期に屬するものである事も明らかである。これは個人主義を經過し去らんとし、將に新たなる國體主義にはいらんとする時である。しかしながらこの世界文明の段階は主として西歐文明の段階である。これを世界文明と稱するのは、やゝ當つて居ないかも知れない。しかも主なる文明要素としてはさう認めざるを得ないのである。

人は西洋文明を東洋文明とを對比する。これは正しく世界の二つの文明體系であるかも知れない。しかしながら東洋の文明とは印度支那、及びアラビヤの文明であるが、この三文明の進化段階は、世界文明に於ては正しくルネサンス前に屬するものである。卽ち東洋文明に於ては、ルネサンスは無かつた。印度は人種的に西洋文明とその基を同じくしてゐると共に、古代にあつてはその倫理的、宗敎的、政治的文明であることにも間違ひはない。それはそのまゝ現代まで續いてゐるので未だ嘗て科學的世界にはいつたことがなかつた。故に世界文明發達の段階からいへば、今の西洋は世界文明の一要素として、ルネサンス以前の文明段階ではない。現在に於ては西歐文明を以て世界文明の先進といはざるを得ない。そのことは事實に於て西歐文明が世界の文明を征服しつゝあることに依つて知られる。

この現象は何に依つて說明せらるべきか。それは進化段階が異るのである。異なる進化段階に位置する二文明が共に世界文明の一要素であるとすれば、一は他に依つて代表せられるのである。それは對等存在權を主張し得ない。古代文明として例へば、ローマ文明と支那文明とを對等に置くことは出來る。しかしながら一度、段階を認め進化を認めるならば、今日の西歐文明と支那文明とを同一に視ることは出來ない。かゝる異れる段階の二文明が接觸した時如何なる結果を齎すべきか。

文明とは生活の Réumé に過ぎない。生活はその還境に依つて變化する。北方の民は南方の民と同一の生活を保ち得ない。故に一文明は必然的にその生活に依據する。しかもその文明の意義はその還境から抽出することが出來る。東洋文明が東洋の生活に依據せらることは、西洋文明が西洋の生活に依據せるものに等しい。此問題は意義の上に存する。生活は常に統一的である。意義は必ず現實の生活と合體する。生活は常に現實的であり一切をその體系中に融合する。二文明の接觸に於て、若しもその意義が平等であるならば、二者は互に同化し合ひ各々の還境に應じてそれ

ぞれの生活に統一しぞの必然的の生活を保持し、しかもその意義を等しくする。しかしながら異れる段階の二文明が接觸する時、低度の文明はその統一を失ひ、高度の文明に全然征服される。さうして高度の文明の移植に依つて、その植民地として存在し、その環境や、その人種の生活の必然性を無視するに到る。これに反して高度の文明はその文明を進化せしむべき要素を低度の文明より吸收すると共に、これを全然同化してその體系の中に統一する。故に日本人は洋畵を輸入してこれを模倣すると共に、西洋人は日本畵より暗示を受けて、その體系の進化に資するに止まる。エクゾティズムとはこれである。それは極めて卑近な例である。さうして日本は生活の混亂を招くと共に、西洋は單にその生活の内容を豐富にするに過ぎない。それは極めて卑近な例である。しかし全文明の會合も亦然りである。

こゝに於て問題は日本にかへる。世界文明の進行に面して、東洋の文明、特に日本の文明が如何なる形勢を呈すべきかはわれら日本人にとつて重大なる問題でなければならない。

日本はもとより支那文明の一亞流である。さうして全體としていへば、東洋文明の一潮流の中に捲き込まれる。現實の生活に面する時、日本はまだルネサンスを經てゐない。換言すれば、それはその基調が倫理的であり、宗教的であり、政治的であり、表志的である。さうして一切の個を放棄して團體主義的理想を抱いてゐる。嘗ては祭政一致としてその外的權威を固くした。さうして此幾千年の存在を通じて内部的には家權制度を確保し、外部的には國家主義を鞏固にした。しかしながらその國家主義は古代的宗教意識の發現に他ならない。それが進化する爲に、この團體主義に對する Contra は一切用ひられずして、常にその Pro のみが動いてゐた。それは常にそれの建設的方面にのみ働いてゐた。しかもその間に外の世界に於ては西洋文明が既に新たなる世界を開いた。さうしてその影響が直接に日本に及んだ。開國とはその結果に他ならない。しかも單なる一結果は重大なる他の外の結果を生ぜしめてゐる。日本は西洋文明に面してそのルネサンスの働きのみを見た。そは鐵道であり、汽船であり、電信であり、電話であつた。しかもこれをして生み出さしむ可き生活の内面的必然性と、その體系の統一性とを忘れてゐた。意識生活と現實生活との結合を忘れてゐた。還境と意志との關係を忘れてゐた。さうして單に所謂文明の利器を輸入することにのみ滿足

してゐた。しかしながら生活の如何なる一片と雖、その全體との關係を先つてはゐない。何故に科學であるか。何故に商業であるか。何故に帝國主義であるか。何故に電話であるか。何故に電車であるか。凡そこれらすべての所謂物質文明は盡く西洋の意識生活と關聯しそのいはゆる精神生活と不可分の關係を爲してゐる。生活とは、幾度もいふが如く統一的、全體的の流動體である。その何れもが全體として一つにまとまつてゐないものはない。極端にいふならば電車にのることとそのことが必然的に、あらゆる西洋の哲學體系、科學體系、藝術體系、政治體系等、即ち一言にして言へば西洋の生活體系を豫想してゐるのである。電車にある時、ソークラテースを考へ、プラトーンを考へ、ニウトンを考へ、ゲエテを考へ、ナポレオンを考へ、アインシユタインを考へなければならないのである。それは誇大して言つたのであるが事實は正しくさうでなければならない。それを忘れて單に物質文明の輸入にのみこれ努めることの結果や知るべきである。

その生活史に於て日本は既に一度かゝる生活の危機を經過した。これはかの重大文明の輸入であつた。しかしなから當時にあつてはその危機は今日の比ではない。當時の日本は殆ど何ら自己の文明を持つてゐなかつた。原始的なその生活とその環境を外にして何の統一的體系を有してゐなかつた。故に他の文明の輸入は談、きはめて容易である。それはただ輸入さへすればよかつた。必然的な生活の統一力はその後で働くのである。日本人は万般唐を模範としてそれに從へばそれで一切は解決された。その日本的統一は生活それ自身の力である。その力は日本と雖缺けてゐない今日遺れる奈良朝文明がいかに唐的であるにしてもそれから發したところの文明は、遂に日本的でなければならない衣服である。文學である。繪畫である。生活万般である。そこに日本として特色づけられるべき日本生活體系が、たとへ支那文明の一支流であるにしても、なほ完成されてゐた。この事實を古代は和魂漢才と稱してゐた。それは生活の統一的方面を輸入したる方面の區別をいふのである。必ずしも支那思想に盲であつたのではない。否、支那思想もまたひとしく物質文明と共に吸收してゐた。さうしてそれも亦日本の生活體系の一部として完全に統一されて了つたのである。

この時に於ける日本の生活の混亂は、現代の比でない。それは生活段階が兩者共にひとしく古代的であり、意志的であり、倫理的であり、宗教的であつたからである。さうして日本は支那と共に日本的生活體系をなしつゝも、なほこの古代の特色を保ち、舊團體主義を保持ししてゐた。さうし西洋文明が遂にルネサンスを經たにも關せず、その數廿年の長い夢をつゞけてゐた。

故に明治の開國が大事件であつた。そこに輸入された文明は個人主義の世界であつた。決して團體でない。一事一物と雖、それに合するものはなかつた。それは量の相違でなくして質のちがひである。段階の相違である。その混亂の狀や察す可きである。

しかしながら當時の日本人のとつた態度は正しかつた。それは今日から論ずればその明の及ばざるものがあつた。にしても、當時としてはすぐれたものであつた。當時の日本人は一切を通りこして一意西洋文明の外形を學ぶの外なかつた。それより他の手段がなかつた。その精神なり、その文明の意義なりを討究するに暇がなかつた。さうでなければ日本の滅亡より他、その運命がなかつたのである。それはやむを得なかつたにしても、その結果を受くべき日本の生活こそ災難でなければならなかつた。支那文明の輸入の時は、日本に體系がなかつた。今日それがある。さうしてその體系と全く異る體系の輸入であるが故に生活の混亂は來さゞらんとするも得ないのである。しかもそれは生活そのものゝ統一性によつて現に生半可にでも落ちついてゐる。だが問題はその意義の上にある。

日本が舊段階から新なる段階に入るためには、いかにすればよかつたか。團體主義は結局個人主義によつて倒されなかつた。西洋に於てもすぐに個人主義本來の自由主義は死して資本主義、帝國主義に力をそゝいでゐた。その結果として、資本主義は近世的國家主義とかたく結んで、新たに又團體主義を固くしてゐた。故に日本はその侵略の勢にそなへるべく、もとよりその由團體主義を固くするか、また新らしきその資本主義、帝國主義に入るかしなければならなかつた。自由主義、個人主義は全く必要がなかつた。さうして日本は直接にその帝國主義と資本主義とを西洋に學んだ。それは當時として當然である。日本の生存にかゝる問題であつたからである。しかも個人主義、自由主義か

ら脱却した資本主義が日本に興り、それが直に國體主義と結んだのは、日本の生活の勝利であつた。さうして日本は遂にルネサンスをも經ようともしなかつた。自由とか、平等とかの語も輸入された。それは單に日本の資本階級の內部に於ける問題に過ぎなかつた。

さうして日本は依然としてその古代的特徵を保持することを以て得意としてゐた。嘗て東洋が精神文明に於て優り西洋が物質文明に於て勝ると稱してゐた。如きはその誤れる見解を表白せるものといふべきである。かゝる得意さは段階の劣るものが段階の高きものに對して、猶その存在を主張せんとする時に發する心理である。さうして却てその固執するところが發達の段階の低きことを明示するのも知らないのである。卑近なる例をとれば、西洋にては敎會に於て結婚式を擧げる。その眞似をして日本で神前や佛前で式を擧げるが如きこれである。模倣は既に自己の劣ること のを示すものである。それにも關らず日本はその劣れることを單に物質文明に於てのみ認めた。その故にその國體主義をより堅くせんが爲に家族主義、國家主義を强調した。一切の思想的、意識的生活には、西洋文明を輸入することを禁じた。その當然の結果として古來の國體主義が、新たなる個人主義の精華なる資本主義的國體主義と結合した。かくして日本は個人主義的精神を經過せずして、その結果のみを經驗してゐる。その生活に根底がなく、統一がなく、必然性がないことが、日常万般に見られる百藪の根元なのである。しかしながら、あらゆる努力にも關らず形勢はそのまゝ止つてはゐない。生活の統一は物質のみを許すことをしないが故に、輸入せられたる西洋文明はその全內容を擧げて來り、今や意識的方面も這入つて來やうとする。卽ち個人の解放といふことが今日の主要なる生活の問題となつてゐる。日本のルネサンスはその本來の意義に於て、今日に於いてはじめて始まつたのである。故に第一に個人主義の徹底、婦人の解放等一切を擧げて今日に行はれやうとする。しかも舊時代の意識は全力を擧げて之に對抗しやうとしてゐる。さうしてこのルネサンスも必ずしも日本に榮えようとはしない。それは古い國體主義が未だ日本にその勢力を振つてゐるからである。それにも關らず時代は正に根底から個人主義的にならうとしつゝある。嘗て直譯時代の民法や刑法が個人主義的であつたにも關せず、生活との矛盾が明らかに示されたるが如く、今日各種の舊思想は、

あべこべに個人主義的思想と衝突せんとしてゐる。そこにも日本文明の混亂が生じてゐる。

困難はそれのみには止まらない。問題は二重にならうとする。既に述べた如く西洋文明は個人主義的思想の極點に達した。これに對する Contra の意識は既にあらゆる方面にみなぎつてゐる。今日は自由主義に非ずして獨裁主義である。個人主義に非ずして團體主義である。しかも日本がその生活の全部を擧げて世界文明に參加せんが爲には、等しくこの二つの主流に投じなければならぬ。日本の環境は本來的には古代主義の團體主義を持するにも關らず未だ個人主義すら徹底せず、僅かにその曙光を見んとする時に當つて、既に早くこれを放棄しなければならないのである。こゝに於て困難が二重に倍加される。

等しく團體主義である。而も一は個人主義を經過せざるものであり、一は經過したものである。ヘーゲル的論法に依れば或は一は Thesis であり、一は Synthesis であるかも知れない。このディアレクティークを信ずると信ぜざるとを論ぜず、その內色的意義が非常に異る事は明らかである。

科學は嘗て分析の原理を敎へた。これに依つて世界は客觀文明に傾かうとしてゐる。しかしながら一つの奇妙なことは個人主義本來の傾向は、寧ろ主觀主義に傾くのである。ここに於て一つの矛盾が生じなければならない。この矛盾は個人主義思潮が直接に科學の子ではなく、單に個人主義思潮が古代團體主義に反對して立つた時、偶然にもこの個人主義を生ぜしめたところの根底の原因が科學を生み、さうしてこの科學がこの個人折義を援護した譯になるのである。即ち古代的生活觀に對して主として科學と個人主義とは共に手を携へて戰つたがその關係は科學が寧ろ建設的で、個人主義が崩壞的であつたのである。しかるに科學それ自身は、發生の時期に於ては建設的であるにも關らずその方法と意向とはむしろ崩壞的であつた。そこに個人主義との會合がある。近世に及んで全體としての世界觀が確立されて、科學が純然たる建設主義をとり、分析的方法から綜的に赴き、客觀主義になつてきたのである。それは丁度自由主義や個人主義思潮が却つて古代の團體主義に近づいて、帝國主義や資本主義を堅くしたのと對比的に等しい關係を持つてゐる。さうして個人主義的思潮が自我の探究に赴き、カントやフィヒテやニイチエの如き主我主義を出す

ようになつたと反對に、客觀的眞理を目指して、この自我主義を消滅せしめやうとしてゐる。ある人がいつた如く、十九世紀の最大發見は社會を發見したことである。さうして個人は結局社會生活的方面を忘れることが出來なくなつた。從つて現代に於いては、如何なる個人主義者と雖も客觀的に證明せられたる社會科學の示すところに從はざるを得なくなつてゐる。故に、近代科學は個人主義や自由主義を擁護するよりも團體主義や決定主義を證明してゐるのである。その關係は昔時と反對である。社會主義、社會連帶說等は、その實證となるべきである。

この新たなる團體主義は固より科學の洗禮を受けたものである。それが原始的團體主義を甚だしく異るところのあるのは申すまでもない。しかしながら、既に證明されたるが如く、進化事實の二元的見解は常に、一段階を隔てゝは互に類似してゐることを示してゐる。卽ち、文藝の例をとれば、古典主義が自然主義に近く、浪漫主義が象徵主義に近いのを以ても知るに足る。故に進化過程に於て、一段階は、必然的に第三段階に近づくのである。共產主義や社會主義の如き團體主義が古代の團體主義とその外貌を等しくする事は當然である。凡て現實的にかへり原始的にならうとする傾向は、その他の分理の哲學なり藝術なりにも認められる。しかもその意義は甚だしく異つてゐるのである。第二段階を經過せざる第三段階は却て進化の意義を缺いてゐる。禪の坊主が悟つたといふときには、凡てのものが悟らない前と異つてゐるけれども、更に悟つた後では、その坊主の見解が復、元の俗人の見方と一致する。それにも關らずその內色的意味が全然違ふのである。歷史哲學に於て、ヴィーエの回歸說の如きはこれに近いのかも知れない。さうして見ると第一段階から同時に第三段階に飛び込むといふことは單に外形が等しいだけであつて、その內色的意味が甚だしく異るが故に、それは生活の統一といふ事實からも缺陷が生ずるのである。奴隷の集合と自覺せる個人の一團體とは、同じ團體であつてもその現實的意味並びに存在的意味が違つてゐる。果して然らば、日本が今日その大部分に古代の思想を受けてゐるにも關らず、直ちに次の段階をとびこえて、新たなる團體主義に入らうといふのはいかゞなものであらうか。それは事實としては、日本の舊思想がこれを許容すべくもない。しかも明治維新の時、外國の凡てが帝國主義なるが爲、之に對抗すべく帝國主義を盛んにしなければならなかつた事情は、今日にも正に當ては

まるのである。現に勞農ロシアを相手として通商を開始するのにさて、多大の困難を感じてゐるではないか。もしも世界全體がこの新たなる團體主義の文明には入つた時、日本はもとより日本特有の事情に應じてこの體樣を異にするであらうが、それにしても立憲政體を日本的に改造して施行した如く、やはりその世界的新團體主義に附屬して行かなければならないであらう。この場合、日本はある點からいへば最もいゝ位置にゐるのである。それは進化原理の二元的解譯からいつても、もしも全く個人主義を知らないならば、たとひその內色的意識を缺くとはいへ却つて好都合だといへるであらう。しかもこの場合の困難は、結局人が個人的自由を要求する日の來ることのあるのに存すると共に「又現在の日本がすでに個人主義の味を少しでも嘗めてゐるところに存する。この點についてどうすればいゝのであるか。

具體的の例をとればかうである。日本人は洋服の着方を知らなかつた。背廣さへ着てゐれば一切は通つた。改化主義に依つてその着方をまさに知らんとした時、その歐洲が旣にドレスやモオニングを棄てゝ、背廣だけで通用する用になつた。これは日本人にとつて物怪の幸ひであるといはなければならない。日本人はそれで堂々と大手をふつて步けるのである。只問題は之を將に知らんとした連中にかゝる。その連中はブルジョワである。その恨みや知るべきである。しかも民衆は平然として新たなる歐洲へ行けるのである。

この立場は正しく日本文明が現在の世界文明に對する立場を示してゐる。さうしてこの例に從へば日本は、異論もなく舊團體主義から卽座に新團體主義の中へとび込んで行けさうに見える。しかもこの眞理は一面の眞理であつて全面の眞理でない。日本はその將來を如何にすべきであるか。

一體系の統一は、それの進化に應じて變化する。故にその統一的態度は流動的である。一體系が次の體系に更はるには、崩壞要素と建設要素とが同一時に働くべきである。もしもこの二つの要素が現實的に同時に働き得るならば、個人主義的段階を經過せずして新たなる團體主義に這入ることが可能である。しかしながら一存在はその全體との關係に於て、あらゆる觀點を持つ故にこの點は云ふべくして行はれざることである。故に科學的眞理が更に確實に主觀

主義を抑制することが出來れば成就する。それは總體に安全なる進行の方法である。生活は常に現實なるが故に、現實の爲に計るのが當面の急務である。故に極めて穩健なる手段としては、この自由主義思想を徹底せしむべきである一段階を越えての見解は却つて反動的である。しかも外界のすべての存在がその見解をして持せしめざればやはりその現實主義も亦危險になる。日本は第三段階の世界に圍まれたる第一段階である。さうしてそこに日本的啓蒙思潮の一特徵がある。新らしき現實をそこに開かなければならない。この新らしき現實とは第三段階の現實を認める現實である。日本の文明は輸入の啓蒙に初まつて輸入の啓蒙に終る。しかも生活が絶えず無言の中にこれを處理する。この現實が正しいものである。從つて個人主義も新團體主義も同時に輸入されて同時に混亂を起すと雖、其混亂といふ事實が生活を規定する樣になる。レーニンはベラ・クーンに訓電して、ホンガリヤの事情があるが故に、必ずしも會シャ革命の例にならふ必要はないといつた。この一言は彼が經世家であることを證明する。生活が景後の歸着點である。

日本は結局日本である。日本にして進化の過程を輸入的にもせよ、模倣的にもせよ、正當に踏むならば當然新らしき第三段階に這入るであらう。さうしてそれは日本的個性を確保しながらしかも世界文明史的意識を持つ。これが統一であり、又個性的なのである。

世界文明の將來はさましく科學的生活觀に依つて決定される。今日迄に科學の教へた事實は常に全體への方向であつた。しかも既に述べたるごとく、全體と個との關係は相對的なるが故に、その個の自覺が等しく全體の將來を左右する。從つて盲目的團體主義は全體への貢献をなさない。蟻の世界に於ては一個の蟻は、單に生物中の一細胞の如きものに過ぎない。それは機械的な一存在である。人間の社會に於ては一個の人間は全體への關係に於ては、一細胞と違ひはないのであるが、而もそれ自身が自己に對して持つところは一個の全體を成してゐる。それは單なる機械的存在以上のものである。そこに個の意義が存する。

日本が世界文明の一部を成すことは、日本の生活の致すところである。日本は個人主義の徹底に於て、その一段階を經なければならない。その個人主義の一面は、資本主義に於て表はされてゐる。日本が全然の舊團體主義であるといふことは最早半ばは嘘である。いかに力をつくしても資本主義帝國主義か世界と共に完成したる時、それは止しくいはゆる物質的方面の自由思想、個人主義を輸入したのである。これを自覺せしめなかつただけである。舊團體主義

は資本主義としての國體に入つてゐるには違ひない。さうして人は個人主義について相關しないかも知れない。しかも生活それ自身が最早かくの如く個人主義に對して盲目なることを許さない。現に目覺めたる新たなる國體主義への方向が、實はその個人主義の結果として生じたるものなることを思へ。そこに崩壊としての個人主義が實はすでに新らしき國體主義の基礎となつてゐる。それは決して舊き國體主義から盲目的に新らしき國體主義へ入らうとするのでない、盲目的にしかせんとするのさへ、舊國體主一が禁じてゐるのである。個人はその個人に於て自覺したが故に、新たなる國體主義に入らうといふのである。それは科學の敎へる通りである。さうして十九世紀に見出されたる社會生活がその本來の道を行くのである。こゝに日本の世界文明に對する新たなる道がある。日本もいつまでも呉下の舊阿蒙ではない。さうしてその新たなる國體主義に對する準備も出來てゐるであらう。

じかも現實に目を注げ、日本の生活體系の紛亂は恐らくその極に達してゐるのであらう。世界が今面せるところは個人主義文明の行きづまりである。フランスもイギリスもドイツも皆然り、たゞロシヤのみが新らしき道を開いてゐる。それは恐らく今日試驗の時であらう。さうして日本は一面にはその個人主義文明の極點に行きつまりながら、なほ一面、古來の國體主義を奉じてそこに身動きも出來なくなつてゐる。さうしてその前面には新らしい國體主義を理想とする前衞がある。それらのすべてが單なる輸入者であるとせよ。しかもその生活の混亂はいづれにもが救ふことの出來ない狀にある。たゞ生活は唯一の救ひ主である、現實のみがよくこれを解決する。生活は常に自ら動きつゝ自己を統一する。たゞ日本は古來輸入と直譯を以て生命としたことを忘れてはならない。さうしてしかも今日に於て最も安全であると思唯される生活統一の方針は、やはり個人主義の徹底に存する。それは古來の古陋なる國體圏から日本を救ふと共に、また徒らに現實を顧みずして新たなる國體主義の中に導き込むのを支へるであらう。この考へはブルジヨワ的であるかも知れない。しかも落人主義は現實の日本にとつて缺くべからざるものである、資本主義の完成に非ずして崩壊の爲に、さうして日本をして一歩世界文明に近づけるために、さうして結局正しき意義に於ける世界主義を了解する爲に個人主義の思想的徹底を必要とするものである。單なる個人主義でない。また單に西洋の模放をこれ事とするのみではない。個性を持ち侵すべからざる自己を有して、しかも常に現實を正しく見んとするものの正しき義務である。さうして進歩はコントのいへるが如く秩序と共にある。急進は之を妨げないであらう。（村松正俊）

資本主義の發達と社會主義革命

マルクス主義とボルシェヴィズムに對する一考察

一

「世界の共産黨が無産階級的革命の最大の指導者たるカアル・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスによつて書かれた宣言の形ちで、その綱領を發表してから七十二年の歳月は流れ去つた。……この七十年の間における共産主義の發達は荊棘の道であつた。……乍然、その根本においてその發達は共産黨宣言の中に示された道を行つた。最後の決戰の時期は社會革命の使徒が期望したよりも遲れて來た。乍然そは遂に來た。歐洲、アメリカ、アジア諸國の革命的プロレタアリートの代表者である吾々共產主義者は、ソヴィエットのモスクワに會し、七十二年前に宣言された綱領の信奉者であり實行者であることを感ずる。」(Der1. Kongress der Kommunistschen Internationale s. 171) これは一九一九年三月二日から十九日まで開催された國際共産黨第一回大會において卜ロッキイによつて讀まれた新共產黨宣言の一節である。この宣言の中に表はれてゐるやうにロシアの共産主義者はカアル・マルクスの熱心な信奉者である。このことは殆んど說明を要さない程明白な事實である。さうして彼等は熱心にボルシエヴィズムこそ眞のマルキンズムであると主張する。ボルシエヴィズムは果してマルクシズムであらうか。

マルクスによると社會的革命は、經濟的基礎を必要とする。即ちマルクスの唯物史觀の法則によると「如何なる社會制度も、すべての生產力が餘地ある限り發展し遂げない間は消滅することがない。さうして新しいより高い生產關係は、この物質的の存在條件が舊社會組織の內に成熟しない內は、出現し得ない。」のである。(Zur Kritic der Politishen Oekonomie Vorwort) さうして「資本論」第一卷の序文によると「一社會はその運動の自然法の跡を追ひ得

るに至つた場合と雖も決してその順當なる發達階段を跳び越えることは出來ぬし、また法令を以てそれを撤去することも出來ない」のである。資本論第一巻の結論は、資本の集中と勞働の社會化とが相矛盾して資本的生産方法の革命時代が來ると敎へてゐる。(資本論第一巻第二十四章參照) 更らに共產黨宣言もプロレタリアのブルジョアジーに對する勝利の基礎として、資本的生産の發展、この結果である少數者に對する資本集中と人口の大多數がプロレタリアート階級に陷ち入ることを擧げ、さうして、プロレタリア的革命の勝利を信じてゐるのである。要するにカアル・マルクス社會主義的革命の基礎的條件として擧げたものは次の五つであると云ふことが出來やう。(一)資本主義的生産の高度の發達と集中の存在すること。(二)その結果として産業に共同的または社會的勞働の行はれること、(三)有力な巨大な資本家階級の存在すること。(四)工業勞働階級が人口の大多數を形成し、訓練せられ、結合し、組織せらるゝこと、(五)資本家と勞働者との間に激烈な能動的な意識的な階級闘爭の行はれることである。(Morris Hilquit, From marx to Lenin- p. 18) 然るにロシアの狀態は一九一七年の革命勃發當時は勿論英 米、獨、佛等の如く資本家的生産方法において進歩してゐなかつた。このことはニコライ・レーニンが新經濟政策として實物稅を說明するためにロシヤの統濟狀態が過渡的時期にあることを明かにし、現時のロシアにおいて五つの生産形態——即ち(一)自然經濟的家長的小農生産、(二)商品の小規模生産、(三)私人的資本主義、(四)國家資本主義、(五)社會主義——を擧げてゐるに徴しても明かである。(N. Lenin, Die vorbedingungen und die Bedeu Tung der nuen politik Sowjet-Russlands uber die Natural Steuer S. 6) 今私の問題とするところは、ロシア革命の當事者であるボルシエヴィキがマルクスの言つた意味における資本主義の發達と社會主義革命との關係をどう解釋したかと云ふことである。この目的のために私の用ゐやうとする文獻はニコライ・ブハリンとプレオブラチンスキイの共著『共產主義入門』Nicholai Bucharin Das ABC des Kommunismus とカアル・ラデックの「科學から行爲への社會主義の發達」Karl Radek, Die Entwicklung Dis S Sozialismus von dor Wissnschaft zur Tat. (Die Lehrn der russischen Revolution) である。

ブハリンは現在の經濟生活に對してマルクス主義的の觀察を行ふ。即ち現時における資本主義的生産の特徴は、第一に商品が直接消費が生産されず、反つて販賣のために市場を目的とすることであり、（Bucharin, 1.Kapitel. §6）第二に生産機關が資本家階級によつて獨占せらるゝことであり、第三にその結果として生産に要する勞働が商品として賣買せらるゝことである。（§7.8.9.）さうして生産機關の形態において保持せらるゝ資本家の「資本は餘剩價値を生む價値である。」故に「資本家的生産は餘剩價値の生産である。」（§11）マルクスの教義によると餘剩價値は勞働力の購買に投ぜられる資本の可變的部分のみから發生する。換言すると勞働のみ餘剩價値を生むことが出來るのである。然るに資本家は生産機關の獨占者と云ふ優勝的地位を利用して、勞働者の産出した餘剩價値を奪掠することが出來るのである。そこで資本家と勞働者との利害が相反して來る。このことは資本主義制度に必然伴ふものである。マルキシストはこの點に資本主義經濟組織の第一の難點を求めやうとしてゐる。次に資本主義制度と下における生産はすべてが見込生産である。故に需要と供給とは嚴密に一致し難いのである。恐慌はかくの如き點に起る。資本主義の制度の第二の難點はこゝにある。この二つの點から、資本主義制度の自家撞着を主張する。ブハリンとプレオブラチエンスキイはこの點を次のやうに説明する。

一見確固不抜のやうに見える資本主義社會には大なる矛盾と罅隙とが存在する。第一に資本主義の下には生産物の組　的の生産も分配も存しない。たゞ生産の無政府狀態が存する許りである。生産者は、他の生産者と全く獨立に生産に從事する。從つて需要と供給との間に調和がない。生産における無政府狀態は市場における競爭を惹起する。市場における競爭は先づ二人の生産者間の競爭に出發し、その最も發達した形態として世界市場の獲得のためにする資本主義生産國家の抗爭に至つてゐる。かくてこの資本主義における無政府狀態こそ資本主義の一主要の難點である。次に資本主義社會の階級的性質である。資本主義社會には勞働者と資本家の二つの階級が最も有力な利害の相反する階級として存在する。この點が資本主義の重要な罅隙である。この二つの點から資本主義の制度は必然的に崩壞しなければならないのである。（§13）即ち資本主義義生産の結果「資本家の數は減少し、勞働者の數は増加し、その人數程

急速でないが、それと共に勞働者のソリダリテは增加する。資本家と勞働者の差別は益々著しくなる。故に資本主義の發展は必然的に階級鬪爭卽ち共產主義革命へと導かれる。」（817）

この狀態は最近において益々著しくなりつゝある狀態である。これは金融資本の支配權の增大である。卽ち二三の金融資本家の支配下にすべての生產業が從屬しつゝある。各國の生產者は自國內における自由競爭を避けるために企業合同もしくは企業聯合を企てた。金融資本家はこの企業合同また聯合を支配することによつて、自國內における生產の無政府狀態を輕減した。自國內における競爭の輕減は絕對的の競爭の廢絕ではない。金融資本自國內の競爭に代へるのに對外國との競爭を以てした。さうしてこれに對する政策としては關稅と帝國主義とを擧げることが出來る。卽ち自國內における外國品の競爭を抑壓するための關稅と他國に對する販路擴張のための帝國主義的戰爭である。何となれば、國外に對する資本の輸出は必然的に資本保護のために强大な軍隊を必要とするからである。さうしてこの目的を貫徹するためには一國の軍國主義化を必要とする。列國の財政における軍事費の增加は有力にこのことを物語るものである。さうして一九一四年——一九一八年における歐洲大戰はこの國際的資本競爭の直接產物である。この歐洲大戰爭は更らに資本主義の發達を極度まで發展せしめたのである。從前の戰爭はたゞ金の問題であつた。ナポレオンが第一に金、第二に金、第三と云つたのは這般の問題を說明したものに過ぎない。然るに近時の戰爭は國を擧げての戰爭である。軍に金の問題のみでなく、同時に組織の問題である。たゞ全然生產機關の集中によつてのみ戰爭は可能となつた。更らに一の必要條件は生產機關の集中は軍需品の生產のためせらるゝことであり、且つ生產の軍需品への集中は他の生產部面における荒廢を意味し、材料品の浪費を意味する。これと共に、戰時中と云ふ名目の下に勞働者側に對して著しい抑壓を加へることになるのである。「戰時產業の地位は石炭、鐵、その他の必要材料の缺乏のために危機に瀕した。世界のすべての國家は一のアメリカを除いては、完全に貧窮に陷つた。饑餓と破壞と寒氣とが全世界を侵略した。勞働者は特にこの困窮に惱んだ。彼等はこれに對して抗議の中立をしやうと努力した。けれども彼等の前には、すべての權力を有するブルジョア國家がゐたのである。すべての國家において勞働者階級は未だ皆

てなき壓迫を蒙つた。勞働者は同盟罷工權を奪はれた許りでなく、彼等がこれに對して如何に僅少な抗議を行つた場合においても、無慈悲にも抑壓されたのである。かくて資本主義の專制は階級間の入亂へと導いたのである。」(S.31)

三

資本主義的生産に內在する矛盾に始つて、帝國主義的世界市場の護得に終る資本主義生産の發展をブハリンの云ふ通り承認するとしても、(資本集中に關するエツユワアド・ベルンシユタインの批評の如きはしばらく措いて)資本主義制度の最も發達した英、米に革命が起らないで、反つてロシアに社會主義革命の起つてゐる事情を說明することが出來ない。そこでコンミユニストは資本主義生産に附隨する現象——卽ち資本主義制度を保護するブルジョアジーの組織と云ふことを舉げて來る。次にこの點に關するコンミユニストの說明を聞きたいと思ふ。

ブハリンが資本主義の成熟と社會主義革命の關係を飽くまで保持しやうとするに對して、カアル・ラデツクの態度はこの關係を强調しない。否彼はこの關係を否定するのである。曰く、「ロシャ革命の經驗は資本主義の最も發達してゐるところに社會主義革命は始まるものでないことを吾々に語つた」と。(S.15) ラデツクは社會主義の勝利は生産力の發展に依存してゐて、資本主義が全國に普及してから以後においてのみ確保されるとする說をマルクシズムの「改惡された解釋」としてゐる。(S.12) かくの如くラデツクは唯物史觀的見解を斥けて、かくの如きはマルクス說を以て統計的見解でありとし、または算術の問題とするに均しい愚昧であるとする。「統計表によつて民衆に社會主義革命の不可能を知らしめるものは、彼がマルキシズムスに就いて何ものも理解してゐないことを示すのである。」「このマルキシズムスの化石化は資本主義の平和的發達なる事によつて說明せらるべきマルキンシズムスの精神に對する罪惡である。」(S.15)

然らば、何故に最も資本主義の進步した國において社會主義革命は起らないのであらうか。資本主義の發展と共にブルジョアジーは强大な國家權力をその手中に收める。さうして資本主義の防禦戰を勇敢に行ふことになる。從つて

對資本主義の戰鬪は益々惡戰苦鬪たざるを得ないからである。社會主義革命は資本家階級に對して未だ嘗てあらざる特權を與へた全資本主義的經濟方法を變革しなければならないので、鐵を以てのみ打ち破ぶることが出來るやうな最も强力なこの階級の反抗を惹起する。さうして資本主義が一國において强力に發達してゐればゐるほどプロレタリアートに對する防禦戰は、益々無遠慮となり、益々强暴となり、プロレタリアート革命は愈々流血的となり、勝利を得た勞働者階級をその抑壓すべき施設は益々無遠慮となる。」(S.17) かくの如き場合は決して社會主義革命が容易に起り得るところではないのである。ブハリニも資本主義の最も進歩した諸國における革命が資本家の强力な抵抗によつて益々狂暴なるべきことを主張する。(S.33)

然らば何處に社會主義革命は起るのであらうか。ラデックは答へて云ふ「資本主義から社會主義への變遷は次のやうな場合に始まる。資本的社會が民衆の生活の靜な歩みを破壞し、資本の支配に對して抗爭するやうな惱みを與へた時卽ち資本的經濟によつて形成された關係が最早民衆の耐え得ざるに至るときこれである。ある一國において資本主義が非常に發達し、産業の最も重要な部面、信用並に交通が資本的の集中的の、團體の掌中にあるときには、プロレタリアートは産業交通並に信用をその手中に――勝利的な國家權力として組織されたプロレタリアートの手中に置くことが可能であるし、またこれを要求しなければならない」(S.13) 別の言葉を以つて云へば、「社會主義的革命は資本主義的組織の弱い資本主義國に最初に起る。最も非組織的な、抑壓機關を持つてゐる資本主義國は社會主義の發點である。そこに社會主義革命は始まる。」(S.15) ブハリンはある制限した意味においてこの意見を採つてゐる。彼れによるとロシアにおいて革命の起つたことはロシアの資本家階級が他國のそれに比して薄弱であつたことと、紙織を缺いてゐたことによるのである。けれどもブハリンはこれがある故にロシヤ革命を最も典型的革命とするものではない。彼は曰ふロシヤにおいては革命は資本主義の發達が低度であつたために起つた。乍然この弱點卽ちロシアがのプロレタリアートが人口の少部分を占め、多數の小商人が存在すると云ふ事實が、共産主義の經濟組織を組織するのを困難ならしめたのである。」(S.33)

四

共產主義者は資本主義の成熟と云ふ要素のみを以ては、社會主義革命、少くともロシア社會主義革命を說明することは出來なかつた。こゝにおいて資本主義の成熟してゐない處でも、もし資本義主組織と防禦力との弱い場合には社會主義革命の可能性があるとした。(ブハリン)ラデックは資本主義の諸關係がプロレタリアートの耐えざるに至るときに社會主義革命は起ることを主張しプロレタリアートの必理狀態に甚だしく重要性を認めてゐる。さうして彼は明かに資本主義の生產力の最高頂に達したときにおいてのみ社會主義の革命が來るべしとする唯物史觀的見解を斥けてゐるのである。

カアル・マルクスの諸著に現はれてゐる根本思想が唯物史觀であることは本文の始めにおいてこれを述べたが、共產主義者がその信奉者であり、實行者であるとしてゐる共產黨宣言に就いてのみ云つても、均しく唯物史觀的見解の上に立つてゐる。同書の第一章は無產階級の不可避を論證したものであるが、その基礎條件として資本主義の高度の發達を以てしてゐる。資本の蓄積と集中と人口の大多數がプロレタリアートに陷ち入ることによつて、「のみ大多數の利益のためにする大多數の獨立の連動」なるプロレタリアの運動が可能となるのである。「如何なる國においても行爲としての革命は人口の多數によつて始められない」(S.17)と云ふラデックの言葉は共產黨宣言の云ふところと明かに相違してゐる。私はこゝで共產黨宣言が正しくして、ラデックの云ふところが誤りであると云ふのではない。たゞラデックの云ふところと共產黨宣言の云ふところとはかくの如き差異があると云ふに過ぎない。さうしてかくの如き差異の存するにも不拘、彼等が吾々のみ眞正のマルキシストだと云ふの理由を發見し得ないのである。

吾々の見るところによれば、革命が當時の社會關係に耐え得なくなつた階級によつて起されると云ふだけならば、これを承認することが出來る。たゞこれを以てマルキンズムだと云ふことは得ないであらう。社會主義革命の諸條件は單純なものではない。私はこのことに就いて別の機會において述べたことがあるから、(表現八月號拙稿「社會主義革命の諸條件」)こゝに繰り返す必要はない。たゞ私はマルクスの主張する社會主義革命は資本主義の最も發達したところにおいてのみ行はれると云ふ意味であり、以上要約して紹介したコンミユニストの意見(殊にラデック)は明かにマルキシズムの見解と一致せずと云ふことを主張するために本稿を起したのである。(一九二三・一〇・一一)(加田哲二)

ソレルの山川小泉論爭觀

サンヂカリストのマルクス批評

「改造」の二月號に現はれた小泉信三氏の「勞働價値說と平均利潤率の問題」が導火線となつて喚起された同氏對山川均氏のマルクス價値理論に關する論爭は、空前の龍巻を學海に惹起し、餘波は遠く飛んで社會に反響するの盛觀を呈した。（週刊朝日、十月十六日號）況んや七月の「改造」に於て答へた辛辣極まる小泉氏の逆襲戰に對し、更に山川氏の陣營には、再攻擊に必勝を期し得べき有ゆる謀計と準備との成れるを信ずべき充分の理由がある。謂ゆる「知識」に餓ゑた我國の讀書子は刮目して戰場の結果を待つべきであらう。

所で私から見れば、兩氏の論戰の內容には何等の新しいものがない。一方がベエム・バヱルク、ツウガン・バラノウスキの古城に立籠つてマルクス說を海底に沈めるに成功すれば、他の一方ではルイス・ブウヂン、ガブリエル・ド弗イルの堅壘に據つて其の殘骸を海底より奪ひ、人工呼吸を以てあはよくば彼を蘇生せしめんとするに汲汲たりで、與に偕に全く三十年來マルクス文學の上に行はれて來た兩派――マルクス直系と自稱する謂ゆる科學的社會主義者とそのブルジユア的批評家――の戰術を其儘蹈襲してゐることは遺憾である。小泉氏にしても、氏が經濟學史の專攻者であり特にマルクス說に通曉してゐると稱せられるからには、尠くともその價値理論に對する批評を爲すに當つても、只一二ベヱエム・バヱルクの徒を引用するのみでなしに、夙にマルクス經濟論に就て新しい見解を表明してゐた左翼社會主義學派（とも云ふべき人人）、譬へば伊のアルツロ・ラブリオラ、佛のクリスチヤン・コルネリセン諸家の批評にも、亦た廣く答へるべき義務がなかつたであらうか？　何となれば以上の諸家は一介の經濟理論家たるに止らず、何れもその背後に拉典民族獨自の社會思想を中心とする革命的勞働運動を卒ゐてゐたからである。

次に山川氏にも敢て苦言を呈することを容して貰へるならば、何人であれマルクス資本論に對して僅かでも非難を放つものあれば、彼は一箇のブルジュア、資本主義の代辯者、自由主義の御用學者として氏の白扁には反映するかの觀がある。勞働價値說と平均利潤率とは相容れないと斷言するものはブルジュアである、御用學者である、小泉教授である！　そこまではよろしいとしても、若しマルクスの眞の學徒にして、或はマルクスを眞に祖述すると稱するものにして、資本論の抽象經濟論は全然失敗の勞作である、「人間精神の偉大なる創意である」餘剩價値學は無用の廢物であると絕叫するものがあれば、如何なる態度を取られるのであるか？　平常は極めて冷靜なる頭腦の持主である氏にも似ず、一度資本論の圓光に放射されると氏の理性は全く痲痺して、ソレルの謂ゆる「科學的（シアンチフイク）」社會主義の「空想的（ユトピイク）」分子が活躍を始める。此の空想的分子は小泉氏を是非ともブルジュア御用學者に祭り上げなくては承知が出來ぬ。その爲には勢ひ小泉氏に對する勇猛にして痛烈極まる皮肉が迸出せざるを得ない。これが亦た小泉氏を驅つて辛辣な諷刺を衷に藏した Y－B＝0 なる方程式を案出するに到らしめる。小泉氏は山川氏が支拂濟の借金の言譯のために「社會主義研究」五月號に載せた長文は千九十二字に及ぶと御苦勞にも計算されたが、此の長長しい兩氏の論戰が終結を告げるに至るまでには、總計恐らく堂堂一萬言の論集を成すことであらう。ソレルの口吻を學べば、「科學的社會主義の騎士の面々は自分達がこんなに澤山のインクを煩瑣哲學の遊戯に消費したとは信ずることが出來ないだらう。」尤も否味と當擦りと缺探しと揚足取りに懸けては近來の傑作である兩氏の論文は、アイロニイは哲學の窮極の言葉とならなければならぬと主張したルナンから見れば、立派な哲學になつてゐるのかも知れぬ。

マルクス批評家のタイプには、ドヰイル、ウンタアマン、ブウヂンなどのやうに何處までも師の學說を擁護しようとする所謂正統マルクス派と、ベエム・バヱルク、トオマス・マザリユイク、ツウガン・バラノウスキなどの如く自由な立場からマルクス說を批評しようといふ所謂ブルジュア學者の一團との外に、もう一つ左翼から忌憚なく批評する一派があると云ふことが出來る。革命派サンヂカリスム及び無政府コンミユニスムの理論家は此の範疇に屬する。茲では主としてマルクス價値理論だけを批評の主題として論じた此の方面の著書を擧げて見よう。

先づアナアキストの立場からマルクス價値理論を論駁したものに浩瀚なる Chr. Cornélissen, Théorie de la valeur. Réfutation des théories de Rodbertus, Karl Marx, Stanley Jevons et Böhm-Bawerk. Paris, 1904. 1913. (Theorie der waarde. Kritiek op de theorieën van Rodbertus, Karl Marx, Stanley Jevons en v. Böhm-Bawerk. Amsterdam, 1904)がある。著者コルネリセンは亦たEn marche vers la société nouvelle, Paris, 1900. の作者として無政府黨内の有力な闘將であるが、前に掲げた價値論の著に依て經濟學者として一層有名である。此の大著に對する小泉教授あたりの批評を聞きたいものだ。

次にサンヂカリストからのマルクス價値論に對する代表的批評家としてジョルジオ•ソレル及び彼の高弟アルツロ•ラブリオラの二人を擧げることが出來る。ソレルは已に十九世紀の末葉、それぞれ佛、伊、獨の專門雜誌にマルクス價値論に就ての自家の見解を發表してゐる。卽ち左の如し――

G. Sorel, Sur la théorie maxiste de la valeur. (Journ. d. Econom, 1897, mai.)
G.Sorel, Ueber die marx'sche Werttheorie. (Socialst. monatshefte, I,1897.)
G. Sorel, Nuovi contributi alla teoria marxistica del valore (Giorn degli Economisti, 1898, luglio.)

次にアルツロ•ラブリオラはサンヂカリスムの理論家たると同時に、伊太利有數の經濟學者であるから、夙にマルクス價値論に注目し、例の平均利潤率の問題をも論じ、此等に關して諸雜誌に現れた論文も相當に多い卽ち

Arturo Labriola,――

1. Le conclusioni postume di Marx sulla teoria del valore. con postilla della direyione. (Critica sociale, V, 1895)
2. La teoria marxista del valore e il saggio medio del proffito. (Critica Sociale, V, 1895.)
3. La teoria marxista del valore. (Riforma Sociale, 1897.)

右の外、見落してはならぬ獨立した彼の著書が二冊ある。

4. **La teoria del valore di C. Marx. Studio sul III. libro del capitale. Palermo, 1899.**

5. **Marx nell'Economia e come toerico del Socialismo, Lugano, 1908.**

以上の二書はラブリオラのマルクス價値論觀ひいてはラブリオラ自身の經濟體系を窺ふ上から云つて最も重要なものだが、生憎く今日伊太利で絶版になつてゐる。尤も此の最後に掲げた經濟學に於けるマルクス並びに社會主義の理論家としてのマルクスは一九一〇年、ソレル門下の逸足エドワアル・ベルトに依て經濟學者社會主義者カアル マルクスなる表題の下に佛譯され巴里のリヰエエルから出版された。此の佛譯にはソレルが約四十頁に亘るマルクス批評の序文を寄せてゐるが、これが亦た大變重要なものだ。一般に社會思想家には警句、風刺、機智、皮肉などの天分を多量に享けてゐるものが多いが、特に此の「サンヂカリスムの純正哲學者」の如きは最の最たるものだらう。彼は此の論文に於てその該博なる知識の蘊蓄を傾けて繼父の缺探しに全力を擲つてゐて、吾々非マルクシストをして間ま快哉を叫ばしむるものがある。曾て瑞西のザイペル教授が彼のリエニンは亡命中ソレルの著書に耽溺して思想上實行上その感化を受けたことは夥しいと書いたのをソレル自ら修正して、リエニンが或は余の思想を採り容れたかも知れぬが、若し余の思想で彼に役立つ部分があつたとしたら、それは余がプルウドンの戰爭と平和から繼承した思想に相違あるまいと言つてゐる邊りは (Sorel, Reflexions sur la violence, edition de 1820, Plaidoyer pour Lenine.) ソレル其人の哲學がマルクスを祖述すると云ふよりはそれ以上にプルウドンの嫡子であることを吾々に首肯させる。そこでマルクス直系を自任してをられる山川先生としては「ソレルも近頃老耄れたね」とか「ソレルも近頃はちつとも振はないね」とか云はれるのは甚だ道理に適つてゐる譯だ。尤も此の七十五歳の (Agostino Lanzillo, Giorgio Sorel. Roma 1910. にはソレル自身のLettera autobiografica が附いてゐる。それに依ると、余は一八四七年十一月二日シエルブウルに生るとある) 老耄隱居が昨年 De l'utilité du pragmatisme といふ貴重な哲學上の著述を創作したのだから、吾々碌に翻譯さへ出來ずにごろ／＼してゐるパラシイトの類は慚死するのが本當なのかも知れない。

餘談はさて置き、以下に掲載するのは、ラブリオラのマルクス研究の佛譯へ序文として寄稿したソレルのマルクス批評の全文である。ソレルは山川對小泉の大論爭に於て間接ではあるが孰れへ勝利の團扇を上げるであらうか？ 恐

らく何方へも團扇を揚げまいと思はれるが、若し勝負があつたとしたら、卽ち預りとなつたら、餘儀なく小泉先生へ○星を山川先生へ△星を與へはしないだらうか。小泉氏は豫期せざる方面よりの救援を得て恐らく苦笑を漏らさざるを得ないだらう。

ソレルの文章は相當に難解だと稱せられてをる上、余の淺學を以てしては、間ま誤譯なきを保し難からう。けれども原文中に引用された書は、その大部分に就て余も亦親しく原書と參照したことを附加へて言つて置く。（九月十三日沓掛星野にて、エリゼ二郎）

（一）

此の約三十年以來マルクスの學說を宣傳したり註釋したり或は反駁したりする爲に、非常に澤山の論評が書かれたが、その中には人氣取りの通俗化に終るものもあれば、又た堂堂と科學的の態度を裝つてゐるのもある。けれども一般に世間では此等の理論の知識が此の批評の浪費に依て大いに普及したとは認めてゐない。予がその爲に此の序文を書く本書は、決定的な歸結に到達するに相違ないやうに見える一つの道を思想史家に開いてゐる。著書は往往あの不思議な經濟問題の取扱方をマルクスに强いてゐる偏執の起原をフオイアアバッハ哲學のうちに探求すべきことを吾々に敎へてゐる。而して、他方では、社會主義運動を一層よく理解するために、吾々がマルクスの直覺から引出さなければならぬ敎訓を、著者は限定してゐる。最後に吾々は彼等の政策上の必要に應じて社會民主黨の人人に依て製造された例の傳統的なマルクス說から釋放されることを望むことが出來る。吾々は軈て、その思想の發展のうちに本當に現はれる通りに、マルクスを考察することが出來るやうになるだらう。

アルツロ・ラブリオラの說明、假說、及び個人的見解は、著者の甚だ特別な學識上の地位から推しても、鑑識ある人人の注意を惹く價値がある。彼は啻に歐洲社會主義思想の最も權威ある代表者の一人であるばかりでない。ナポリ大學に於て經濟學を敎授してゐる人である。吾々は斯樣な事象を佛蘭西では殆んど理解することが出來ないだらう。實

際、吾々は此の陳腐な經濟學觀――それに隨ふと經濟學は平和の術策に依て彼等の國土を繁榮させようとする政府者を啓發する爲に用ゐらるべきであるといふ――を實によく墨守してゐる。斯樣な觀方は國家の實地を指導すべき運命を擔つた學問の品位を最高度にまで上げるといふ結果に立到るだらうと或人は想像するかも知れぬが、然し乍ら實際は、純理上の命題は、色色の社會學派が沒頭してゐる綱領に對して適宜に安排されてゐる。で自由貿易を主張する經濟學があるかと思へば、保護貿易を力說する經濟學もある。個人主義の經濟學もあれば、干涉主義の經濟學もあり、革命主義(一)の經濟學もある。更に又、傳統主義の經濟學があれば、唯物論に基く經濟學あり、他方には基督教的の經濟學もあると云つた調子である。

(一)一七八九年の原則に一致するといふ意味に於てのみ革命主義である。

伊太利は純粹に公平な硏究の非常に古い傳統を有つてゐる國土である。考古學や、藝術史や、文獻學が何時もアルプスの彼方の熱情を以て硏究されて來たのも良に故ある譯である。だから伊太利人が、種種の政策とは沒交涉である今日謂ふ所の純理經濟學を厚意を以て迎へたことは洵に當然であつた。マフエオ・パンタレオニは新しい敎育の傾向の特質を最も善く擧げた。卽ち一八九七年十月二十二日、彼はジュネエヴ大學に於ける開講の辭に於て、次のやうに述べた。「余は、恐らく、余が如何なる學派にも屬してゐないこと、又余の工房から來るやうな學說は生憎一つも持合せて居ないことを諸君に告白することに依て、自己流の鄙見を諸君に開陣するだらう。恐らく、余は更に經濟學には學派がないと云ふことを附言することに依て、諸君を立腹させるだらう。」こんな意見が公然と行はれてゐる大學の境涯に生活する人人は、資本論のうちに其の著者の眞正の思想を探求する上から見て、佛蘭西や獨逸の著述家よりもずつと適任である。

バスチアの著書のうちに眞の經濟原論を見出した積りになつてゐるやうな連中にマルクス學說の正當な評價を要求することが出來ぬのは明白だ。ヰルフレド・パレトオは、バスチアの體系は倫理的ユウトピアを構成するものであつてその中には相當に正確な或種の分析が含まれては居るが、然し一般に今日科學硏究に於て要求されてゐる嚴密といふ

點が缺けてゐると指摘した。此のロオザンヌの名高い大學教授の論證にも拘らず、我が佛國民の最大多數は敢て此の理想卿を正統經濟學の名を以て呼ぶことを辭さないのである(一)

(一)Vilfredo Pareto, Les systémes socialistes, tome II, PP.46—66. 一九〇九年二月二十五日、勞働の自由に關して佛蘭西哲學會で行はれた討論に於て、一人として正統經濟學の名で批評されたものの空想的性質を指摘したものがなかつた。

我國の法科大學に於ける敎育は通例、純理經濟學の精神から出來るだけ離れた精神で敎導されて居る。放任して置けば、血氣に任せて絕對の解決の方へ走るかも知れない學生を、社會上の詭辯を弄するに適した、賢明な政略家に作り上げるために、自分達は國家から俸給を貰つてゐるのだと敎授連は信じてゐる。そこで彼等は孜孜として學生に吹き込んでゐる——社會主義は、餘りに自家撞著の革命を豫想するものだから、決して是認してはならぬ。けれども、そうかと云つて進化の美を理解しないやうな淺狹な保守論者にも追從してはならぬ。解決すべき大問題は、それ程抵抗を惹起さない中庸の解決を見出すことに依て、馬鹿者がより高き正義の理想と呼んでゐるものの方へ、全く平穩無事に社會を嚮導することであると。

マルクスの著述に沒頭してゐる社會主義者は、殆んど一人殘らず、多くの權威者が彼等に與へた惡例に從つた。彼等はそれに據て彼等の運動を辯正し得る特別な經濟學の必要があると信じた。彼等は此の先入見に捉はれて資本論を說明した。彼等に隨ふと、此の書は社會學史に於て、ニウトンの原理論が物理學史に於て占めたと等しい重要な地位を占めるものであると。彼等は縱し多くの敎授連がマルクスの與へた經濟上の證明に反對したとしても、それは此等の敎授連が資本主義の消滅を必然にする原因をば社會に認識させないやうにして、それで特權階級を擁護しようとしたのだと想像した。世界の將來は社會主義者が第四階級の利益を徒にしなくては批評することが出來ないやうな時として恐ろしく曖昧な或る文句の解釋に懸つてゐるだらう。

アルツロ・ラブリオラに於ては、以上述べたやうな僻見を認めることが出來ない。然し乍ら彼を第四階級革命の敵で

あると云つて非難することは至難であらう。そこで社會主義博士を以て自ら任じてゐる人人は、今迄資本論の註釋者に向つて投ぜられた駁論を彼等が檢討した以上の眞面目さで彼の論題を檢討しなければならぬだらう。

（二）

余は、資本論の第三卷が未了の儘になつたことは、思想史家には非常に幸運な事情であると考へる。誰でも、第一卷に含まれた論證は之を、狡猾な僧侶が俗人に尊敬の念を起させるやうな神秘の姿を與へんが爲に、衣裳や裝飾や覆面やで文り立てた磨滅した偶像と比較することが出來はしないかと、幾度でも反問することが出來る。反對に、吾々は第三卷の下書のお蔭で、マルクスの精神には經濟上の事實がどう映つたかを望見することが出來る。

最先に、「利潤率低下の傾向法則」を檢討して見よう。といふ譯は、マルクスは彼の體系の優越を目立たせるのに特に適してゐるものとして之を觀たやうに思はれるからだ。實際、彼は云つてゐる、「此の法則は、今吾々が説明した所によると簡單に見えるだけに、經濟學者にはそれを發見することが不可能であつた。此の兇暴な現象は彼等の觀察を免れなかつたけれども、彼等がそれを説明する爲に試みた企畫は悉く失敗した。とは云ふものの、吾々が發表した法則はアダム・スミス以來の有ゆる經濟學が其の解決に沒頭した問題であり、又種種の學派の間の境界線の基礎となつた問題であると謂ふことが出來るといふ位、資本主義生産にとつては最重要を有するものである。」

資本論のうちに見出される論證は極めて簡潔なものだ。そは數行に係つてゐる。「活勞働の重要さは、その使用する生産手段に體現せられて居る死勞働に比例して間斷なく減少するが故に、不拂活勞働の分量、即ち餘剩價値量は總資本に比例して絕間なく減少せざるを得ぬは明白である。餘剩價値と總資本額との間の比率が利潤率の表現であるから則ち利潤率は漸次に低減せねばならぬ。」(Capital, trad. franc. tome III, Ire Partie, pp. 220—230) 結局、マルクスと共に、餘剩價値は常に勞銀と同一の關係にあると云ふことを容認さへしたら、一切が自明の理に歸著して仕舞ふ。併し乍ら此の關係の恒久不變といふことより明瞭でないことはない。第一卷の「餘剩價値率」と題する章はマルクス經

濟學の重要な要素であるが、其處には極く僅かの引證しか出てをらぬので、驚かぬものはない。此の章は二つの實例を舉げてある。一は一八一五年の「ジャコブの著書」に從つて、保護貿易制度の治下に、英吉利の農業が運轉した條件に關するものであつて、餘剩價値率は當時十割を極く僅か超過したであらう。他の計算は一八七一年四月の一週間に於ける一萬錘の製絲工場の報告から借用したもので、當時は十五割三分八厘四毛を獲得したさうだ。併しエンゲルスは、第三卷に於て、此の週間は事情が特別に誂へ向きであつて、綿花の價格が非常に低くて紡績絲の價格が非常に高かつたと吾々に敎へてゐる。（二）――もう少し溯つて、一八三一年に露西亞のキセレフ大將がダニウブ諸國に對して公布した組織的規定は、原則として餘剩價値率が單に六割六步六厘六毛であるやうに賦役を定めたと云ふことに吾々の注意を促してゐる。是は「英吉利の工業及び農業勞働者の勞働を規定する率よりも非常に低」率である。（三）

（一）Capital, tome I, p.94 et tome III, 1ri partie, pp. 58—59. 此の例外の餘剩價値は三割三分二厘八毛の利潤に相當する。第三卷の第四章はエンゲルスに依て編纂された。

（二）Capital, tomel, p.102, col. 2. マルクスが英吉利の平均率を十割に見積つたのは如何にも尤もらしい。彼の概略の計算に現はれるのは何時も此の率である。

利潤率は、マルクス文學に於て著名である所のもう一つの問題を惹起した。づつと以前のことであるが、經濟學者は利潤率は一地方の産業の全體に於て、齊一される傾向があると云つた。一時の高率利潤の爲に、益す資本を吸引する企業に於ては、競爭が愈よ激しく行はれ、之に比して有利でない企業に於ては競爭が衰退して行く傾向がある。そこで賃銀は前者では騰貴し、後者では下落する。斯くの如くにして、若し經濟が算盤珠の如く落着するものならば、利潤率は平均されるだらう。併しながら、若し餘剩價値率が生産の總ての部門を通じて同一であるといふことを容認するならば、産業が一部門に他と比較して多くの勞賃を使用すればするほど利潤はその部門に於て、投下資本に比例して、益す大を加へるであらう。此の時からして、利潤率が相互平均し得るといふことは不可能に思はれる。

一八八五年、第二卷の序文の終りに、エンクルスはロオドベルッスの門弟ら（彼等はマルクスは彼等の師を剽竊した

たのだと難詰した」に向つて前記の難問題を解いて見てはどうかと勸めた。「だが急いで貰はう」と彼は附け加へた。何故といふに間もなく第三卷のうちにマルクスが叙述した理論が發表される筈であつて、其時はどんなにかマルクス其人が彼の論敵に優越してゐるかが分るだらうから。一八九四年に、第三卷の序文に於て、エンゲルスは彼の挑戰に應へるために提出された諸種の說明を論評してゐる。彼は傲慢に、もかなり滿足な答案を齎したものは唯二人のマルクス論者のみだつたと證言した。彼は平均利潤率に就て彼の友が書いた章は人間精神の最も美はしき創意の一つをなすものだと明かに確信した。

然し乍らマルクスはエンゲルスが斯樣に得意となつて公言した解決を發見したからと云うて、何も自ら多くの誹謗を引受けるには及ばない。彼はかう云つたに止まつてゐる。賣買された價格の總和は生產された價値の總和に等しいといふこと、價格は當對價値より低いこともあれば高いこともあるといふこと、賣買は利潤率が相互に平均するやうに行はれるものであると云ふこと。極めて簡單な計算で、概略の一例に就て、如何に此等の相殺が行はれ得るかが說明される。(一)

(一)Capital, tome III,1re partie, pp. 160—164.

斯樣な推理方法に當面すると、何人も經濟學に於ける量の使用の問題に就てマルクスはどんな考を抱いてゐたかを反問せざるを得なくなつて來る。物理學の問題を論ずる數學者がそを理解する如く彼が此の使用を理解しなかつたことは明白である。量的關係は彼には單に概略の、遠い或は恐らく象徵的な徵證を與へるに恰適したもののやうに思はれたらしい。それは此の量的關係が非現實的であればある程、その透明(クラルテ)さは愈よ大となるからだ。(一) 若し吾々にして資本論の眞髓を完全に理解し盡さうと思ふなら、此の難解な問題を硏究することが肝要であるだらう。

(一)第一卷の百七十六頁二行目に、此の種の推理の甚だ奇妙な一例を見出すことが出來る。改良された機械を採用する資本家は、「搾取される勞働者の比例數の減少を相對的餘剩勞働のみならず、尙ほ絕對的餘剩勞働の增加に依て補ふために、最も極度の染方を以て本能的に勞働時間を延長するやうに」なるものだ。

けれども經濟學を眞に數理的に取扱ふことを許す方法に就て、一八七一年以來公にされてゐた、あのやうに周知の研究に對してマルクスが全然無關心であつたとは不思議ではないか。アルツロ・ラブリオラは、マルクスはジイヴンスの論題を識つて居た、そして資本論の著者は新說は彼の學說には缺けてゐるある新しいものを產む力を持つてゐることを自認したので、此の大著述を中途にして拋棄したのだと見てゐる。エンゲルスは、嘗てマルクスの精神が斯樣な疑惑に襲はれたとは吾々に敎へなかつたから、此の說明に反對することが出來ないことはない。けれども吾々は、非常に多くの實例に依て、エンゲルスがマルクスの學識的活動に就ては大變惡い證人であることを知つてゐる。マルクスは彼の健康が許さなかつた爲に一八七〇年から一八七七年まで資本論の勞作に從事しなかつた。此の一八七七年の春彼は印刷に附する爲に第二卷を編纂すべく努力したが、一八七八年の七月にその企てを拋棄した。エンゲルスは、第二卷の序文に於て、マルクスは彼の死の少し前に、彼の友が彼の蒐集した材料で何か爲て貰ひ度いといふ希望を彼の娘の一人に漏らしたさうだと吾々に敎へてゐる。だからマルクスは彼が殘した仕事に對して餘り好感を抱いてゐなかつたらしい。して見ればアルツロ・ラブリオラが資本論の完成しなかつたことを新しい學說の出現から生じた失望落膽に歸したのも尤もである。

若しアルツロ・ラブリオラの見解を承認するならば、何故マルクスがその晩年になつてから、カトンが希臘語を學び始めた如く、微積分を研究したかといふ疑問が氷解する。彼の研究の範圍は少しも原理を越えてゐない。（一）即ち大なる興味を與へない解析の部分に止まつてゐる。果して彼が數理派經濟學者の推論に從ふ準備をすることが必要であると信じなかつたとしたら、如何なる目的でマルクスが自ら進んで此の不愉快な勞苦を忍ぶことが出來たのが更張り分らない話である。

（一）一八八四年九月十五日のJournal des économistesのうちに、ボオル・ラファルグはマルクスに依て書かれた微積分に關する著作の近刊を知らせた。アルツロ・ラブリオラは此の原稿は出版されなかつたけれども、その中には唯だ研究者の手控が祕められてゐるに過ぎぬと云つた。資本論を書いた時に、マルクスは二項が共に零になる比の價値

を求める爲に一般に用ゐる方法に就て全く明白な觀念を持つてゐなかつたに違ひないことは、第一巻の百三十三頁一行目を見れば誰にも分る。

アルツロ・ラブリオラの巧妙な假説を檢證し得ることは全く興味のあることだらう。マルクスの書簡の裏には、ジイヴンスの思想に留保された未來に就て彼がどう考へたかを吾々が知ることが出來るやうな徵證が秘められてゐるといふことは如何にも有りさうなことだ。若し此の假說にして間違ひがないとしたら、吾々は一人の師の精神とその曖昧な解說者との間に一般によく存在する對抗の顯著な一例を得た譯である。蓋し、ジイヴンスの理論の無爲無能を宣言する爲には、金箔附のマルクス學徒がそこら邊りにざらに轉がつてゐる。

（三）

社會民主主義の學說を言ひ表はす爲に一般に獨逸に於て用ゐられた科學的社會主義なる術語は、マルクスの著作に關する研究の海中に或る混亂の大石を投ずるのに非常に功勞があつた。（一）此の稍や大袈裟な名稱は一八七七年にエンゲルスが書いた文章に由來する。彼に從へば、社會主義は彼の友の二大發見のために科學になつたであらう。唯物史觀の學說と餘剩價値の理論とは即ち此の二大發見であるといふ。此の定式は、デユ・ボワ・レイモンドの所言から出發すると、之を大分合理的な意味に解することが出來よう。此の高名な生理學者は云つた、「Science なる語を佛蘭西人はそのまゝ自然科學 Naturwissenschaft といふ意味に取るし、又 Wissenschaft なる語を獨逸人はそのまゝ精神科學といふ意味に取る。」（二）故にエンゲルスは唯だ、マルクスは社會主義者に幼稚な想像の暗示に耽溺するのはもう止めにして經濟現象の觀察に、批判に、又反省に沒頭するやう勸說したのだと謂はうとしたに過ぎないと主張することが出來よう。併しエンゲルスはもつと大きな野心を抱いて居た。

（一）Socialisme et science といふ表題で飜譯されたベルンスタインの講演のうちに、著者がどんなに此の定式に當惑してゐるかを窺ふことが出來る。

（11）Revue scientifique, 10 novembre 1883 p.586, col. 2.

一八七七年・エンゲルスが一八七〇年戰役以來科學といふ言葉が享有した眞に驚くべき勢名をば彼の黨派をして利用せしめんと欲したことは明白である。當時人人は到る處で獨逸の豫想外の勝利はその科學の優越に據るものだと繰返して言つた。そこで社會民主黨員は、若し勞働者にして社會民主主義の學者の敎訓を素直に聽き容れるならば、第四階級の勝利は獨逸軍隊のそれにも增して目覺ましいものであらうといふことを彼等に信じさせるのが明かに利益であると看て取つた。

それに又、社會主義文書に於てはマルクス說は一種の唯物論である、換言すると自然科學の方法と同樣な方法で組織された認識であるとの思想が絕えず現はれてゐることを附言しなければならぬ。そこでマルクスは近世の學者のうちに見出されるやうな偏見と同じ偏見を以て彼の學理を建設したのであると誰でも信ずるやうになつた。これは、アルツロ・ラブリオラのマルクス經濟學說の批評が吾々に提供された以上、最早之に陷ることを許されない根本的な誤謬である。

マルクスの研究をよく理解するためには十九世紀の前三分の一の間獨逸の諸大學が授けた敎育を絕えず囘想する必要がある。當時はヂユ・ボワ・レイモンドが「獨逸科學の恥辱」と名けてゐる自然哲學が全盛であつた。（Loc. cit.,p. 680, col. 2.）リイビッヒは一八二四年、ヨハネス・ミウラアは一八二六年、エエレンベルグは一八二七年、ヱエバアは一八二八年、ヴエラアは一八三五年、敎授に任命された。ヂユ・ボワ・レイモンドは新時代はフンボルトが伯林へ歸つた時（一八二七年）から之を劃することが出來ると考へてゐる。それまでフンボルトは巴里の學界で頗る重大な地位を占めてゐたが、當時巴里は確實に學問上の覇權を掌握してゐた。此の事情が獨逸に於て非常な勢力を彼に保證したので其處に彼は立派な研究を奬勵した。（Loc. cit.,p585, col. 2 et p. 586, col. 1.）併し乍ら舊思想も一朝一夕にして消え失せるものではない、でヂユ・ボワ・レイモンドは自然哲學の最後の代表者は彼の時代にも尙ほ危險であつたと吾々に敎へてゐる（Loc.cit., p. 680, col. 2.）が、——此の彼の時代とはマルクスの時代に外ならぬのである。

自叙傳の斷片のうちに、リイビツヒは、その青年時代に、非常に卓越した化學者と看做されたが、その實分析することを知らなかつたカストナアの講義を聽いたと語つた。彼はマアルブルクの一教授を識つてゐたが、此の先生は不思議な木製の道具を持つてゐて、その中で水銀が自生的に產出された。又此の先生は、素燒の管の中で酸素を熱して實驗的に酸素が窒素に變質することを證明した。リイビツヒは、姑らくの間、シエエリングがエルランゲンで敎授した講義に心を奪はれて居た。(二)で巴里でゲイ・リウサツクやテナアルやヂウロンの講義を聽いた時、彼の驚愕は非常なものであつた。(三)

(一)此の事實は例外ではない。何故と云ふにヂユ・ボワ・レイモンドは多數の優れた人人が此の哲學の誘惑を受けたと觀てゐるから。リツタアはそれを受け容れたし、ヨハネス・ミウラアは此の陷穽に掛らなかつたことを大いに不安に感じた。(Loc. cit., p. 584, col. 2.)

(二)Revue scientifique, 20 mai 1891, p. 643, col. 2; p. 644.

獨逸思想の革命は、純粹な專門家の威信が廣く行はれなかつた丈け、愈よ科學的思潮の改革を遂行するのに多くの時間を費した。此の隔世の感ある時代に、識者は獨逸にはその名前に依て彼等の國土が世に顯はれるに違ひないやうな學者があると固く信じて怪しまぬかのやうに見えた。ヂユ・ボワ・レイモンドは、此の精神狀態獨特の例證として、ハインリツヒ・ハイネがゲツチンゲンの諸敎授に就てライゼビルダアのうちに試みに揶揄を舉げてゐる。(一) 彼等の中には、十九世紀に於ける一流の大先生の一人であるガウスがあつた。(二) ハインリツヒ・ハイネは、佛蘭西の公衆へ捧げるために彼の創作を深く訂正した時にも、彼の諧謔を削り取らねばならぬとは信じなかつた。多分彼はヹエハアとヴエラアとが此の大學の上に新しい光彩を投ずるに貢献してゐたことを何時も知らなかつたのであらう。

(一)アンリ・ハイネに隨へば、ゲツチンゲンは大腸詰と大學とで名高いさうである。(Henri Heine, Reisebilder, 2e édition française, tome I, p. 8)ゲツチンゲンとボロニヤとでは何處が違つてゐるかと云ふと、後の伊太利の町には大學者と小狗がゐるのに前の獨逸の町には小學者と大犬がゐるんださうな。(tome II, p. 149)

(11)Revue scientifique, 10 novembre 1883, p.584, col. 2.

大抵、大學教授らが切賣する二束三文の講談は卓越した人人の上に永續するやうな影響を與へないものだ。何故といふに此等の人人は、その倦むことを知らない好奇心のお蔭で、彼等の思想の貯蓄を日日に新にすることを忘れないからだ。斯くの如くにして、多くの獨逸の學者は彼等が、大學で受けた呪ふべき教育にも拘らず、近代的認識の再生に於て斯かく偉大なる役割を演ずることが出來たのだ。彼等は佛蘭西や英吉利に於て攻究された通りの、眞正な科學と接觸し始めた時に、自然哲學の奇怪な方法をば抛擲した。マルクスが舊來の獨逸諸學派の影響を消滅させるに好適した研究に一身を委ねたとはどうも思はれない。

一八九八年、余がマルクスに依て利用された典據を調べて見た時に、余は資本論の參考資料が著者の認識のうちに非常な缺陷があることを教へてゐるのを見て一驚を喫した次第である。彼は、綿密な注意を以て、經濟學の諸大家、英吉利の歷史に充てられた多數の英書、及び特に議會に關する無用な書類の山積を讀破した。併し乍ら佛蘭西に關しては又古代及び中世に就ては、彼は實際殆んど何も知らなかつた。縱令彼は屢ば、或時代の社會關係を理解せんには、生產に使用された方法を回想して見なければならぬと主張したにせよ、彼の生產技術の研究は不思議にも初步に止まつた。彼は勞働者に課せられる勞働の過度に由て惹起される害惡に就て非常に多數の文章を書いたが、その際にも近世生理學に關する一般概念を把握したと云ふ欲求を感じなかつた。(一)

(1)Sozialistische Monatslefte, juillet 1898, p. 321 et G. Sorel, Saggi di critica del marxismo pp. 27—32.

——マルクスが生理學に就てどの位の知識を有つてゐたかといふ例證として、茲に甚だ典型的な一文を擧げて見よう。「繼續せる單調な勞働は終に動物精神の飛躍と緊張と(die Spann und Schwungkraft der Lebensgeister)を弱めるに至るものである。何となれば動物精神は活動の變化のうちに慰安と快樂とを見出すからである。」(Capital, tome I, p. 148, col. 2)

マルクスが十九世紀の科學的精神を以て貫徹されなかつたと云ふ此の事實から出發する時、何故に彼の著書か斯か

く矛盾した斷定を招來することが出來たかといふ理由を理解することが容易となつて來る。或る批評家は、彼の經濟上の定理は、奇怪にも科學的推理を爲し得る條件を理解してゐないことを證明したと宣言したが、是は寔にその通りである。併し乍ら、他方では、人人は近代社會主義の上にの如く、古代の社會運動の上に溌溂たる明光を投じてゐる所の鋭敏な、深刻にして嘆美すべき多分の直觀に就て注意を喚起した。マルクスの榮譽の眞價は講堂に於て講ぜられない處の彼の著作の部分に存するものである。

(四)

マルクスの書いたものと彼の青年時代に全盛を極めた哲學との間に多くの比較對照を立つて見ることは誰にも出來る。斯樣な比論類似が著しい時には、毎にマルクスの言ふ所をひしひしと吟味するがよい。何となれば其處に誤謬の推定があるからだ。

(a)デユ・ボワ・レイモンドに隨ふと、自然哲學の迷妄は「何でも深く堀つて行つて窮極の結果へまで推究せんとする獨逸人の性向」と結び著いた。當時は世を擧げて藝術的直觀に依て世界を改造すべしと絶叫し「經驗論者の規律正しい辛抱強き勞苦の眼に見えない結果」をば輕蔑した。彼は更に附加へる、「最も優れた人々は、彼等の想像と彼等の物を普遍化せんとする傾向とが卑俗平凡な一切の事物を輕蔑するやうにさせたので、屢ば(此の哲學の)誘惑にけもなく引掛つた。」(一) 如上の省察は完全に資本論の多くの部分に適用されるやうに私には思へる。而してマルクスが如何に輕蔑して市井經濟學を語つたか、吾々は之を知つてゐる。

(1)Revue scientifique, 10 novembre1883, p. 580, col. 2.

自然科學者のオオケンが、實在に到達する爲には、假現の奴隸であるところの畫家の眼を以て事物を觀ずに、生理學者の眼で觀察せねばならぬと頻りに勸說したのを見る時に、誰でも尙ほ本能的にマルクスのことを考へる。(一) 天才の直覺のうちに多量の自家撞著的推理を混淆した、此のオオケンの無謀さ加減が如何ばかり大であつたが、誰でも

知つてゐる。(三)

(一) Revue scientifque, 29 novembre1879, p. 516, col. 1.

(二) Edmond Perrier, La philosophie zoologique avant Darwin, pp. 167—170.

老朽した獨逸の教授連に取つての大問題は眞理を發見することではなくて、寧ろ工夫を凝らした話題を捕捉すると云ふ處にあつた。リイビッヒは云つた。「誰でも自然現象に、巧妙な人が切取つて甘く配合した、婀娜つぽい綺麗な衣裳を釣合はせた。而も是が謂ふ所の自然哲學であつたのである。」(一) カストナァに據れば「月の雨に及ぼす作用は一目瞭然であつた。何者 月が見られると雷雨が止む。一歩を進めて論ずると、日光の水に及ぼす影響は、中には眞夏でも採鑛されないのがある樣な坑道の凹地に溜つた水の上昇のうちに證明されると。工夫を廻らさねばならぬ講義としてはただ單に、雲が散ると月が見えるとか、夏汲出喞筒を動かす谷川が涸渇して居る時には凹地の水が蒸發するとか云つた丈けでは、それでは餘りに面白味がなかつたのであらう。」(二)

(一) Revue scientifique, 23 mai 1891, p. 643, col. 2.

(二) Loc. cit., p. 643, col. 1.

マルクスを驅つて次の如き眞に奇怪な文章を書かしめたものは、單に凝つた名句を吐かうとする厭くことを知らない欲望なのである。「夫自體に於ては、斷じて商品でない、例へば、名譽とか良心とか云ふやうな物件が、金で買はれるものとなり、而してそれらに與へられる價格に依て、商品の形態を獲得することが可能である。故にある物件は、價値を有せずして、形式的に價格を有することが出來る。茲に於てか價格は、數學上の或る分量の如く、想像的表現と成る(一) 然し乍ら他の一面から見ると、想像的な價格形態は、例へば何等の價値を持たない、未耕の土地の價格の如く 直接ではなくとも、實際の價値關係をば隱匿することが出來る。」(二)

(一)此の文句は資本論編纂の際には、マルクスは想像量とは何であるか全然識らなかつたことを證明する。

(二)Capital, tome I, p. 43, col. 1.

此等の大神祕の漠然たる定式のうには探求すべき一物も無い。著者は單に生產及び價値がなくても、商品並びに價格が存在することを確證する二箇の場合を指摘しようとしたに過ぎない。即ち或時は道德上の物件が、道義の非常な頽廢の結果、恰も商品であるかの如く、公然と價格を定められ、又或時は物質上の物件がその所持者たる權利が與へる利益に應じてゐる價値を獲得する。後者の場合に於ては、價格は間接に生產に結び著く。何故と云ふに市街地の持主は、事業を始める爲に新しい地面の必要を感じてゐる工業家に彼の思ふやうな條件を强制することに依て、利益を得るからである。ところが道德上の物件の價格は之を同樣に生產に結び著けることが出來ない。何故と云ふに背德漢がその良心を賣る代價は法律制度に設定された規則とは何の關係もないからだ。思惟の表現を混亂させるやうな叙述的比喩を用ゐることなしに、簡單な言葉で之を言表はしたら、もつとづつと明瞭になつたのである。

（b）世人は屢ばマルクスは諧謔や諷刺や警句こ依てそれを晦澁なものにした論法を蹈襲したものであると云つて彼を非難した。彼の書物の此の瑕瑾は、急進的なヘエゲル左翼に於て流行した精神の常癖に留意すると、容易に說明される。ベルンシタイン、はブルジョワを呆と言はせることに夢中となつてゐた此の文士社界が、伯林のカフエ・ヒッペルで自由人 Freien の連中と繁く交際したマルクス及びエンゲルスの上に與へた影響に就て極めて巧みに注意を喚起した。此等の自由人のうちに、その大膽なる逆說に依て、彼等の理論が或意味での高名を贏得た二人の大立物があつたそれはブルノオ・バウワアとマックス・スチルナアとであつた。（1）

（1） Bernstein, Socialisme théorique et Social-democratie pratique, trad. franc., p. 35 スチルナアに就てはエンゲルスが一八九二年に記憶から描寫した一枚のスケッチがあるばかりで、其外には肖像がない (Debats, 18 juillet 1899.)

ルナンは此等の哲學者に就て嚴な格言葉で自分の所感を述べてゐる「フオイアアバッハとヘエゲル新學派」に關する論說の冒頭に、彼は次のやうに書いた。「人間思想界に於ける有ゆる顯著な發展は、誰も其處に激動してゐる思想の根柢に大なる價値を認めない時でさへ、注目に値するものである。批評の探求に一身を委ねた人が、基督敎に關する

新ヘエゲル學派の事業が必ずしも眞に科學的な性質を持つて居る譯でもなく、亦そこには史家の嚴密な方法よりも屢ば多分のユウモリストの空想があるにも拘らず、此等の事業に對して自らその注意を禁ずることが出來ないのは、全く此の理由からである。」(二)

(一) Renan, Etudes d'histoie relijieuse, p.405. 此に止らず彼はエエルベックに依て反譯された此の學派の拔萃集のうちには、「如何なる意味に於ても、之を眞面目に取ることが出來ない」やうな斷片があると云つてゐる。(p 407)——尙ほ彼は書いた、「吾々はバウワァ君の著作をその相當以上に眞面目に取らせるために助力しようとは思はないだらう。」(p.185) バウワァに關するエンゲルスの意見參照。(Religion, philosophie, socialisme, p. 15) ルナンがマルクスの舊友の或る人人に放つた非難を、マルクスも亦屢ば甘受せねばならぬと云ふことを證明するには、何も例を擧げるまでもない。

(c) ベルンスタインはマルクス及びエゲルスがあんなに屢ば彼等の歷史觀をヘエゲルが嘗て獨逸で敎授した例の辨證法の勝手な範疇の中へ押込めねばならぬと信じたことを惜しんだ。彼は此の對偶の雜然たる堆積を悉く拋棄しなければならぬと觀てゐる。(Bernstein, op. cit., pp. 38—39) 斯くの如き冒瀆的な傍若無人の言論に對して、カウツキィは甚く憤慨して開き直る。「然し乍ら、若し研究の最善の道兵であり、その最も銳利なる武器であつた辨證法をマルクスの方法から奪ひ取るならば、果して何がその跡に殘ると思ふか?」(Kautsky, Le marxisme et son critique Bernstein, trad. franc, p. 48) 獨逸社會民主黨は、實際ベルンスタイン叛逆の時に到るまで、眞正の敎理として次の命題を承認して居た——マルクスは、ヘエゲル哲學の衷に眞に大切に祕められてゐたもの、即ち辨證法をば難破から救助したものである。加之、彼はそれをヘエゲル唯心論から獨立したものにすることに依て、此の辨證法を改造したものであると。(Engels, op. cit., p. 174 et pp. 205—207) 例へば、プレカァノフは一八九一年、ヘエゲル沒後六十年祭の爲にかう書いた。「辨證法的方法は獨逸の唯心說がその後繼者たる近世の唯物論に遺した最も重要なる學問上の遺産である。」(Ere nouvelle, novembre 1894, p.273)

マルクスは、資本論の第二版の序文に於て、彼が辨證法の變形を如何に考へたかを物語つた。次の章句は屢ば引用されたもので、又實際、甚だ重要なものである。「余は曾てヘエゲル辨證法が尙ほ流行してゐた時代、さう今から三十年以前に、その神祕的方面（mystificirende Seite）を批評した……ヘエゲルは神祕說（Mystifikation）に依て辨證法を不具にしてゐる……彼に於ては、辨證法は天上に進行する。全く合理的なるその形相を見出さんには、そを足下に納めさへすればそれでいいのである（Man muss sie umstulpen um den rationellen Kern in der mystischen Hülle zu entdecken）。その神祕的方面より見れば（in ihrer mystificirten Form）、辨證法は獨逸に於て一種の流行と成つた、何となればそは存在する事物を讚美するかの觀があつたからである。その合理的方面よる見ると（in ihrer rationellen Gestalt）、そは支配階級並びに彼等の兄弟たる觀念論者に對する侮辱と憎惡である。何故と云ふに、存在する事物の確實概念に於ては（in dem positiven Verstaendniss des Bestehenden）、辨證法は同時にそれらの宿命的否定のまたそれらの必然的崩壞の認識を含んでゐる（das Verstaendniss seiner Negation, seines nothwendigen Untergangs einschliesst）からだ。」（Capital, tome I, p. 350, col. 2 et p. 351, col. 1.）

此の佛蘭西原文は之をよく親しく吟味して見る値打がある。何故かといふに、此の原書がマルクス自身の公認を經たものであることは、此の序文の前に附いてゐる緖言を見れば明かであるからだ。mystique なる語は茲ではリットレも識らないやうな意味に用ゐられて居る。マルクスが此の語をどう云ふ意味に用ゐようとしたかを充分に理解する爲には、一八一八年にクウザンが爲した講義を囘想する必要がある。（一）クウザンの意味では、ヘエゲル辨證法は神祕的である。何となれば、ヘエゲルは歷史を指導する世界精神といふものを想定し、且つ此の精神をば現實の力として論じてゐるからである。然るにマルクスは、之に反して、辨證法といふ道具立のうちに、事實の全體を特にそれをうまく認識し得られるやうに再現するの手段を見るに過ぎない。「ヘエゲルに取つては、彼が理念の名辭の下に人格化してゐる（unter dem Namen Idee in ein selbstaendiges Subjekt verwandelt）思惟運動（Denkprocess）が實在の造物主であつて、此の實在は理念の現象形態に過ぎないものである。所が、余に取つては、思惟運動は、人間の腦

腦の中に移轉され換位されたる(ラ・ンスポオゼ・ダン・ル・セルヴオ・ド・ロム)、現實の運動の反射(ラ・レフレクシオン・デュ・ムウヴマン・レエル)に外ならない (das Ideelle nichts andres als das im menschenkopf umgesetzte und übersetzte materielle)。」(二) 故にもう吾々を離れて精神に依て投影される如何なる想的存在もなく、(クウザンが此の語に與へたやうな意味での) 神祕的錯覺もなく、亦つ欺瞞もないのである。(三)

(一)此の講義は一八三六年に漸く上梓された。ルメンは彼の講義がどんなに深い印象を一八四二年頃に彼の上に與へたかを吾々に知らせた。(Renan, Feuilles detachees, p. 299) 一八四四年にはマルクスは巴里に住んでゐた。

(二)Capital, tome I, p. 350, col. 2

(三)今日でも尙ほ mystituen (神秘)といふ語は、多くの大學の人人に取つては、クウザン流の意味を保有してゐるし、亦たそは mystification(欺瞞) の觀念を表はしてゐるが、是はよく注意すべきことである。余はアンリヴオジヨワの論說のうちに此の種の遺習の一例を見る。乃ち彼は次のやうな句を用ゐた。"triomphe de la mystique dreyfusienne et de la mystification dreyfusarde,, (Action francuise,17 mai 1909)

マルクスがヘエゲルの辨證法は天上に進行すると云つたのは、之に依て、そは彼等の精神歷史的實在の意識的觀察を超えて飛翔させる人人に依て、巧妙に織り成されたものであることを寓意しようとしたからだ。處が彼の證辨法は地上に進行する。何故と云ふにそは嚴密に事實の觀察に忠實であるからだ。カウツキイは此の特質の上に堅く執つて動かないマルクスは、如何にして事物が近世史上に生起し、不可抗力に因て死滅するに到るものであるかを確證した後に、甫めて辨證法の形態の下に資本主義的財產の運命に關する彼の總括的見解をば明言したであらう。(Kautsky, op. cit, p. 50 et p. 60,)

ヘエゲルの方法とマルクスの方法との間にマルクスが非常な勢で宣言したやうな時抗が存するものとはどうも余には受取れぬ。ブレカアーフすら、先に引用した論文のうちに、斯ういふ事を認めてゐる。即ち屢は此のヘエゲルの愛讀者は「自分が唯心論者と戰はねばならぬことを殆んど忘れて、而して眞にヘエゲルに有るが儘に歷史を觀てゐるといふ事、またヘエゲルは經驗的に歷史的に推究する法則に嚴密に從つてゐるといふことを、承認しかけてゐる」と。(一)

又一面、プレカアーノフがヘエゲルを非難して此の哲學者は彼特有の洞察力からして餘りに局限された觀念を捺へ上げたと言つてゐるのは、大いに注目に値する。「存在するものからして、死滅の道程にあるものからして、(ヘエゲルは)轉成しつつあるものを推斷することを學んでゐる。」(一) 此の露西亞の社會民主義者が叙上の問題を解くことが出來るやうな方法を吾々に敎へなかつたことは、返すがへすも殘念な事である。プレカアノフ獨創の哲學のうちにも明かに多くの專斷の分子を交へてゐるだらう。で余は、マルクス學徒の辨證法は時として經驗の堅固な地上を離れて天空に飛翔しはしなかつたかを甚く怖れるものである。

(一)Ere nouvelle, octobre 1894, p. 145.

(二) Ere nouve novembre 1894, pp. 269—70.

私の考では、マルクスは其の青年時代に知合であつたヘエゲル學徒ほどそんなにヘエゲルに感(かぶ)れてはゐない。彼等は師の體系を放擲はしたが、此の學派の對偶といふ道具を恐ろしく器用に操つた。恐らく彼等は眞の詭辯家(ソフイスト)と云ふよりは、寧ろ拙劣なる辯士であつたであらう。彼等は如何なる問題たるを論ぜず、何でもそれを證明する爲に、否定と否定の否定といふ偉大なる排列をすることをば知つてゐた。(一) ハインリッヒ・ハイネは一八四〇年頃獨逸を驚嘆させた此の綱渡りの稽古を非常に侮蔑して語る。「伯林の辨證法といふ蜘蛛網(くものゐ)の中には、蠅一疋も死んではゐまい」と彼は冷かしてゐる。而して、彼に從ふと、此等の精力絶倫な論理家は何時も全くヘエゲルの敎訓を理解しなかつたとさへ考へることが出來る。何故といふに、ハイネは吾々にかう敎へてゐる——巴里に(伯林にの誤解かと思はれる——二郎) 滯在中、彼は「まだ辨證法の公式を立てることを覺えた丈けで」それでヘエゲル說の蘊奥を極めたものだと早合點してゐる手合に頻頻と出會つたと。(二)

(一)Misere de la philosophie(pp. 148—149)に於て、マルクスは一切のヘエゲル說を對偶に依て論究するの術に要約してゐるかの觀がある。

(二) Henri Heine, De l'Allemagne. edit. de 1855, tome II, p. 301 et p. 294.

斯くの如く、叙上の巧妙なる兒戯は此　方法の使用の名聲を失墜せしめるに與つて力があつたが、マルクスがヘエゲルの辨證法に貢献した改善は、此等の兒戯を屏息せしめるに到つたかと言ふに、決してさう見えない。實際、社會民主主義の論者は悉くエンゲルスがヂウリングを駁すに於て、確實に否定の否定を利用せんとする門第らを嚮導する爲に立派な典型を與へたといふことを容認した。(一) 然るに、此等の例證は一般に甚だ貧弱なものである。余は唯だ數學から借りた二つの例をその中から擧げて見るといふ譯は、エンゲルスはヂウリングの駁論を逆襲するのに特に好適したものと之を看做したからである。先づ或量をaとして「之を否定すれば -a 更に -a を -a を以て乘じて此の否定を否定すれば、$+a^2$ 即ち原の正量を得たが、併し乍ら一次だけ高き量である。」微分は有限量を否定して「量なき量的關係」を創造するに在る。積分は否定の否定である。此の見事な事に感嘆して、エンゲルスはヂウリングに挑戦して曰く、「a を -a を以て乘じても $+a^2$ とならないし、又微分や積分を求める者は何人を問はず之を死刑に處す、とでも云つたやうな新しい數學」(二) を君が發明しない限り、對偶的辨證法なしに一日でも暮すことが出來るかと。社會黨に屬してゐるない理性人には、理解することが出來ない。(三)

(一)Antonio Labriola, Socialisme et philosophie, tr. fr, p. 189.
(二)Antonio Labriola, op. cit, pp. 228—230 et p. 238.
(三)辨證法に對して讃辭を呈さなかつたので、余は今から十年前に、此の譫語を人間精神の傑作だと考へたアントニオ・ラブリオラの叱責を蒙つた。啻に彼は余との有ゆる私交を絶つたのみならず、社會民主教の信仰を糾問する判事に、異端者の中に朋友を持つてるとの廉で告發されては一大事とあつて、公式に余を破門した。

（五）

以上の探索の結果、吾々は一八四〇年の獨逸思想が非常な影響をマルクス思想の上に及ぼしたことを承認することが出來る。斯くして吾々は、資本論の經濟學をフォイアアバッハ哲學から生れた僻見に據て説明するアルツロ・ラブ

リオラの批評に出會つても、さまで目眩はずにそれを理解することが出來る。

アルッロ・ラブリオラの研究は、學者に對して非常な利益になるのは云ふまでもない――何故つて、彼等は重ねて、ある著者の偏見の由來に就て爲された探究は、彼の學說の正當な解釋に導くのに大いに役立ち得るものだと云ふことを、喜んで認めるであらうから――だが、單にそれだけではない。更に余は此の研究が社會主義に對して最も重要な實際的影響を齎らすだらうと考へる。社會主義はもう資本論の解說者がそれに鍛めた厄介を、騷々しい、重い鎖を長長と曳いて步くには及ばないだらう。

多くの讀者は昔から資本論は一貫した著述と云ふよりも、寧ろ相互に丸で違つた種類に屬する斷片を編纂したものであると注意した。その中には、第一にリカアドォの事業を完成せんとの非望を抱ける抽象經濟論、第二にマルクスが資本主義發達の典型を示すものと見做す英國經濟史、第三に大生產が行はれる條件に關する觀察が含まれてゐるが以上のうち第三の觀察は時として他の本文の中に散亂された小さな註釋に限られてをり、又或時は、敷衍された形態を取つて居る。

今日まで、殆んど總ての社會主義者は斷章の第一範疇を以て最も重要なるものと思惟した。エンゲルスは、一八七七年の有名な神託に於て、價値、勞働力及び餘剩價値に關する定理は「料學的社會主義」の二つの基礎の一つを成すものであると宣言したではないか？ 一八八三年ガブリエル・ドゥヸィルに依て公にされた、資本論の大綱は此の相對的重要の尺度から出發して組織された。ところが今や、アルッロ・ラブリオラは多くの社會主義者がその上に勞苦した、此の抽象經濟論を悉く利用に堪えないものにする所の根本的缺陷を剔抉しに吾々の面前に進み出る。マルクス的編纂の各部分に就ての一切の舊式な評價は擯斥すべきである。餘剩價値の學は、正當な理由に據て、之を無用の長物と見ることが出來るのであつて、却つてマルクスの著書を現實の上に利用せんと欲する讀者は、生產に關する諸觀察を深く究めねばならぬだらう。此等の斷片を殘らず蒐集するといふこと。又それを譬へば哲學の窮乏や共產黨宣言から拔萃した同種類の斷片と結合して、終にマルクスの具象經濟の體系を社會に公表せんことは、吾々の諸君に希望し

て息まない所である。

余はアルツロ・ラブリオラの創見が社會主義者の間で賞讃者よりか多數の非難者に遭遇するだらうと明言する。多くの人人は、多數の抗議を惹起さずに、資本論の常用解說の上に稍や徹底した新見解を採り入れることを可能にせんとて、まあ何本の筆を餘剩價値の爲に折つたことだらう！「科學的社會主義」の騎士の面面は自分達がこんなに澤山の墨を煩瑣遊戯に使つたとは信ずることが出來ないだらう。彼等が「黨」に於て享有してゐる權勢は彼等がマルクスの經濟定理を理解してゐるといふ世評の賜物である。(一) そこで彼等は自分等の貴重な特權が神祕の消滅に因て消え失せるといふことを、反抗せずには、承認することが出來ない。疑ひも無く、斯樣な狀態は何時までも持續するものではあるまい。今日の社會主義者が資本論の慣用的解釋の爲に發揮してゐる執着心は、蓋し空想的分子の殘存に基くものであつて、吾々は此等のユウトピアの時代が今日既に終りを告げたと信ずべき充分の理由を持つてゐる。

(一)玆にモリエエルの女學者第三幕第五場を思ひ浮べて見ようか。(玆にもソレルの思ひ違ひがある、以下の會話はレ・フアム・サヴアントの第三幕第五場には出て來ない。頃日。豐島與志雄氏と一緒に調べて見たら同幕の第三場に出てゐる――二郎。)

トリソタン

彼の方は昔からの作家で一杯になつた知識を持つてをいでです。さうして、奥さん、佛蘭西人にしてはよく希臘語を知つてをられますよ。

フイラマント

希臘語を！　おやおや！　希臘語を！　お前、あの方は希臘語を知つてお出でだとさ！

……………………………………………………………………

なあに！　貴方は希臘語を知つてゐらつしやるの？ああ！　御生だから、あなた、希臘語の愛のために、皆んなが貴方に接吻するのを許してやつて頂戴。

官僚的マルクス學徒は、古い空想家と全く同じやうな結論をそれから引かうとの意志から、資本論を説明することが出來たのだと云へば、それは、マルクスは社會主義を空想から科學へと躍進させたと云ふエンゲルスの神託を何時も念佛して居る人人には、怪しからぬ逆説だと見えるかも知れない所の斷定である。併し乍らちよつと反省して見れば分る通り、其處には　等の逆説もないのである。誰でも知つてゐる如く、極く多數の場合に、吾々が吾々の行爲を説明する爲に與へる動機は、實際に吾々を動かした力とは大變違つて居る。が之に較べると、吾々の理論は吾々の批判に止まらない諸の意向に依て屡ば決定されるものだと云ふことは、仲仲之を容認し難い。けれども、此の第二種の現象も第一種の夫れの如く的確なものである。そこで此の二つの場合に於て、吾々が尚ほも主智説（アンチナレクチュアリスム）の領域に占據して、煩瑣哲學的な論文に表明される分子のみに注意を拂へば拂ふ程、此の潜在分子が愈よ確實に活動するものであるとさへ附言することが出來る。

社會主義者は、現代の產業制度はマルクスの理論に隨へば、不拂勞働に依る資本家の利得と云ふ見るに忍びない不道德の事實の上に、換言すれば賃傭人が其の犧牲者である盜奪の上に建設されてゐると云ふことを、第三階級に論證すべく努力するが、此の時彼等は、明かに空想的傾向の影響の下に行動する。多數のマルクス學徒は此の訴告を飽くまで反覆して言つたし、またエンゲルス自身も彼等の文書を非難したとは思はれない。何故と云ふに、一八八四年、彼は哲學の窮乏への序文のうちに次の樣に書いた。「今日の社會は、表向き此の正義の原則（それに從へば、一切の交換は價値の平等に準じて行はれる）を承認するが、而も實際には何時も遠慮なしに、之を蹂躙の如く棄てて顧みざるかの觀がある　此の世道人心の頽廢に依て、正直なブルジョワの良心は深手を負ふたものだと自ら感じなければならぬ。」(Misere de la philosophie, p. 14) サンチカリスムの運動が階級戰爭を一層痛切に理解せしめて以來、かかる推理はその有ゆる存在の理由を失ふものである。蓋し社會主義者は、第三階級がその倫理的原理を適用するに當つて陷つた誤謬を自覺させる爲に、此のブルジユアジイに訴へてはならぬ、――彼等は唯だ、第四階級の將來は之を擧げて其の主人に對して宣言された休息なき〇〇に懸つてゐることを理解させる爲に、此のプロレタリアへと赴かねばならぬ。此の目的に到達する爲には、餘剩價値の學説は無用である。多くの近世社會主義者は、資本論の大部分を難解なものにした謂ゆる經濟定理に對して隨喜の涕を零したが、更に此の空想的分子を一掃せよとの最後の要求と共に、此の欽仰の圓光は消え失せるであらう。一九〇九年八月、ジヨルヂユ・ソレル

自由人の手帳

ソレルの死と其暴力哲學

一

古き社會主義がだん〳〵と地に墜ちてゆく。英國ではハイドマンが、獨逸ではハーゼが、そして佛蘭西ではヂョウレスを早く失つたのであるが、最近になつてもゲードが逝き、それから今またマルセル・サンバとヂョオヂ・ソレルとの訃に接した。サンバはヂョウレスの友として終始したゲードと彼とは、世界戰爭後全く佛蘭西勞働者の感激から遠ざかつたように見えた。ヂールも云つてゐるとほり、ボルシエヴ井ズムの影響を考へなくては今日の世界の社會主義運動を理解することはできない。佛蘭西でも無論そうなのである。あるものはボルシエヴ井ズムを恐れて退却した。あるものはその影響に捲こまれて人心に投じた。ヂョウレスの門弟マルセル・カシャンは修正主義から一足飛びにレニンの陣營に飛躍した。飛躍したものは時代に時めいてきた。サンバは最後までヂョウレス黨として殘つた。そして全く時代の大きな動きを把握することができないで彼の一生を閉ぢた。

ソレルの立場はこれとは全く違つた立場であつた。彼はロシヤの革命のうちに偉大なものを見た。ヂョウレスから何等の偉大なものを見なかつた彼は、レニンのうちに偉大なものを見た。彼の英雄主義とボルシエヴ井キの英雄主義との間に、慥に契機の相通ずるものがあるからである。サジカリストの一派（C.G.T.u.）が赤色勞働組合インタナショナルに入らうとするのも、また革命的サンヂカリズムの鬪爭的精神とボルシエヴ井ズムの鬪爭的精神との間に一點の相通ずるものがあるからであらう。ロシヤ革命の後に、世界の勞働者の鬪爭的精神は、慥にボルシエヴ井キによつて鼓舞されたに相違ない。實にロシヤの外においても内においても、ボルシエヴ井キの一派が試みた努力、その勇敢な戰ひは、痲痺しきつてゐた古るき勞働者運動の首領連を一蹴するに充分なほどのものである。

しかしソレルの理論とボルシエヴ井キの理論とはその根本において一致ができるであらうか？ ソレルの暴力論はボルシエヴ井キの暴力論とその根本において一致すること

ができるであらうか？　統一勞働總同盟の赤色インタナショナル加入條件が却てボルシエヴヰキの根本條件の轉覆の要求であるように、ソレルの暴力論は、ボルシエヴヰキの暴力論の根本的轉覆ではないであらうか？　ソレルについて私のもつてゐる知識は極めて僅少である。私は彼の暴力論を讀んだに過ぎない。そして彼の死報を聞いて再びそれを繰返して讀んだ。その限においては、ソレルと混同してはならないように思はれる。

二

ソレルの主張は慥に一種のヒロイズムである。彼は弱者の道德を痛罵した。今日の世界に行はれてゐる道德は、彼に從へば主としてギリシャの衰頽時代から傳來した道德である。弱者の道德をもてしては革命的サンヂカリズムは不可能であると彼は云つた。彼はまた一種の亞魔主義者でもあつた。バクーニンが亞魔の崇拜者であつたように、彼れもまた亞魔の崇拜者であつた。彼は亞魔を名づけて「世界の王子とまで云ふてゐるのである。彼は、彼自身が世界の社會主義理論のうへに重要な寄與をなしてゐることを誇りをもつて語つてゐる。その寄與とは何んであるか？革命運動の倫理化がそれである。彼曰く、社會主義がその高き倫理的價値を負ふてゐるのは暴力――それによつて近代の世界に救濟をもちきたす――であると。こういふ立場から彼はブルヂョア階級の墮落に對して、勞働者の殘酷行動を用ゐることを說いた。總同盟罷工の思想によつて啓蒙された暴力こそ彼が佛蘭西勞働者にすゝめた理想であつた。

三

彼の暴力論は現代の世界に對する一つの大きな反抗であつた。彼は現代の世界を消費者の道德の支配する世界だと考へた。彼は消費者道德に對して未來の生產者道德を打ち樹てる事の必要を說いた。彼にとつては、欺僞や暴力以下に罰する現代の道德は消費者の道德であつた。「虛僞の破產」に對して死刑を課した一七二五年八月五日の宣告は彼にとつては寧ろ望ましい道德であつた。

かくのごとき消費者の道德の行はれてゐる時代が、その最後の歷史的舞臺に近づくと、個人的意思の行動は無くなつてしまう。そして社會の全體が宛かも一つの組織體の樣に自動的に働くのである。ところが多くの倫理學者や經濟學者の誤りは、この時代の現實を自然的なもの、または原

始的なものと考へるの點にある。何故なら「それは暴力によつて造られたものであるとともに、また暴力によつて破破することができるからである。」ソレルはこう云つてゐるのである。彼は機械的現代を暴力によつて破壊することができると考へてゐるのである。

機械的時代の特徴は、人々がその犠牲的精神を失ふことである。利己的なものが支配して犠牲的なものが無くなる機械的なものが榮えて個人的意思が痲痺してしまうのである。彼はこゝに時代惡を見た。この時代惡を救ふの道は、だから彼にとつては、ルナンの次のような言葉であつた。ナポレオンの兵士は彼が常に貧乏であることをよく知つてゐた。しかし彼は彼がたづさわつてゐる史詩は永遠でありそして彼が佛蘭西の榮光のうちに活きるであらうと云ふことを知つて感じてゐた。」と。また曰く、兵士は一時的の報酬の約束で製造されるものではない。彼は不朽の生命をもたなくてはならぬ」と。然り、ソレルにとつては不朽の生命に活きる道德こそ、生産者の道德であり、勞働者の道德であり　從つて將來の道德である。彼の暴力論は實にこの高き道德的!!界の産物であるのである。言葉を換えて云へば一つの道德的暴力である。利己的暴力に對する道德的暴力、若じくは犠牲的暴力の主張だとも云ふことができようと思ふ。

四

そこで彼の暴力は國家的權力とは全く違つたものである暴力の崇拜者としての彼は國家權的力の痛罵者としての彼である。彼に從へは國家的權力はブルヂョア階級の使用したものであり、プロレタリヤ階級はこれに對して暴力をもつて反動するものである。彼曰く、サンヂカリストの暴力は國家の顚覆を要求するプロレタリヤによつてストライキの進行中に繼續するものであつて、それは國家迷信家の殘忍性と混同してはならないと。

ソレルのサンヂカリズムは國家に對する絕對的の對抗である。彼はブルヂョア國家を否認するものであるばかりではなしに勞働者の國家をも否認する。社會主義國家をもつてブルヂョア國家に代へることは、彼にとつてはマルクス主義の冒瀆なのである。

正統社會主義は、彼に從へば、國家によつて資本主義を破壞すると云ふ。そしてその爲に、勞働者は凡てのものを犧牲にしなくてはならな、。資本主義を廢止することを約

束する人々を權力の地位に進めるために凡てものを犧牲にしなくてはならない。しかしこうした制度は、ソレルに從へば、たゞ新らしき主人が、古るき主人に代つただけなのである。生產者の群はたゞその主人を變更したに過ぎないのである。彼等が奴隸であることには何の變化もないのである。そして多くの勞働者が、所謂「訓練」の名のもとに彼等の「智的指導者の榮光」のために奴隸制度を永久化するに過ぎないのである。

彼がデモクラシーの攻擊者であつたのは實にそうした立場からであつた。彼が「勞働者はデモクラシーの奴隸的本能をもたない」と云つてゐるのは實にこうした立場からであつた。彼がデモクラシーとは、一つの機械的組織であり群衆の「訓練」であると考へてゐたがためなのである。彼のこの考は極めて徹底したものであつた。彼は指導者をいたく攻擊した。彼はいたく國家を攻擊した。國家とは彼にとつてはブルヂョアの政治組織であつた。プロレタリヤはこのブルヂョアの政治組織を眞似てはならないと云ふた。彼に從へば、かくのごときブルヂョアの政治組織を眞似るよりは、一時は縱令混亂もし、弱くあつても、その方がましであると。

五

ソレルの暴力論は無論カウツキー派の正統マークス派、若くはヂョレス、ベルシンタイン等の修正派に向けられたものであるが、彼のこの根本批評はまた今日のボルシエヴ井キのうへにも加へられてゐるものと見なければならぬ。ここに私はソレルの暴力論と、ボルシエヴ井キの暴力論との間に混同すべからざる區別があると思ふ。ソレルは矢張りサンヂカリストであつた。彼は後にボルシエヴ井キへの同情者ではあつたがそれ自身ではなかつた。私はソレルの死に際して、彼の暴力とボルシエヴ井キのそれとの間に超ゆべからざる區別のあることを思ふものである。

ラーテナウの思出

獨逸の「ノイエ・ルンドショウ」はラーテナウの暗殺を記念するために、ラーテナウ號を出しました。それにはゼーンガア、ベルンハルト、ウンルー、ヴリンクマン、アインシタインなどの各方面の著名な人々が筆をとつてゐる。またラーテナウ自身の二つの文章も載せられてゐる。現代獨逸における最高の政治家について、彼の親しき友アインシタインが、如何にその人を見、如何にその人を惜しみ、また如何に猶太人としての思ひを述べてゐるかは、こゝに譯した短い一文によつてもよく知ることができやうと思ふ。(譯者)

ラーテナウについての私の感想は樂しい尊敬と感謝とであつた。また現在もそうなのである。實に彼は私には、今日の暗らいヨーロッパの狀態において、希望と慰藉を與へそして彼は明らかに見、暖かに感んずる人として私に忘れがたない時を與へてくれたのである。大きな經濟上の關係についての彼の理解、諸國民の特性と人民の凡ての方面についの彼の心理的了解、個々の人々に對する彼の知識は驚嘆すべきものであつた。そして彼は、その知らない人であつても、その生活を肯んじてゐる人のように、凡ての人を愛するのであつた。彼が友とともに卓を圍んで饒舌つてゐる時に、彼の話は眞面目とベルリン・ユーモアの美しい織りこみとの類ひない歡びであつた。天上に住む人が理想家であることは何の不思議もない。しかしこの地上に住みながら、しかもその臭味のない——人の追縱を許るさない——理想家であつた。

彼が大臣となつたことは殘念に思ふ。獨逸の教育ある人々の大部分が猶太人排斥に組してゐるような狀態のもとで、猶太人が公生活から遠慮することとの自然であることは私の誇りある確信であつた。しかしこの憎惡がかくまでに深く盲目的で且つ蕪惡であらうとは私の思ひ及ばないところであつた。またしかし過去五十年間に獨逸の倫理的教育が教へてきたところのことを、私はこゝに叫びたいのである。

——彼等の果實によつて汝は彼等を知らねばならぬ。

(アルバアト・アインシタイン)

ソレル自叙傳

ジウル・ゲエド、マルセル・サンバの二大老將を相次いで失つた佛蘭西の社會運動は、更に啻に佛蘭西のみでなしに全世界の革命的組合運動の上に燦爛たる明光を投じてゐた一大惑星を喪つた。九月八日のマンチエタア・ガアヂアンの週刊はジョルヂユ・ソレルの巴里に於ける訃を吾々に知らせた。第四階級理論の素材第二版の附錄「プルウドン說の解釋のうちにプルウドンを以て十九世紀に於て佛蘭西が有つたところの唯一の偉大なる哲學者と爲したソレルは、同じ書の扉に於て自らを以て「プルウドンがさうしたやうに、何處までもプロレタリアの私心を挾まない忠僕として押通して來た老人」に擬した。常々ソレルを以てプルウドンの再生と考へてゐた私は、今や計らずも彼の訃報に接して、二十世紀に於て佛蘭西が持つたところの唯一の偉大なる哲學者を失つたかの感を深うせざるを得ない。

彼の死は要するに老衰の結果とは思ふが、最近のリユマニテやラ・丼イ・ウヴリエエルなどが手許にないので細しいことは分らぬ。取敢へずアゴスチノ「ランツイロのジオルジオ・ソレルの卷頭にソレルの著者に宛てた自傳の手紙がついてゐるので、それを簡單であるが紹介することにした。尤も此の書簡のうちにもある通り、羅馬のヂヱニレ・ソチアレからソレルの懺悔錄が出た筈であるが、實際公刊されたかどうか私は識らない。若しそれが今日まで出版されなかつたとしたら、以下の短い書簡がソレルの唯一の自叙傳として後世に傳はるものだらう。

此の原文は伊利太文である。貧弱な伊語の知識から邦譯したものだから誤譯があるかも知れないが、それは大目に見て戴きたい。(十月十九日、大宮東京庵にて、エリゼ二郎。)

レテラ・アウトビオグラフィカ

巴里、一九一〇年二月二十日

親愛なる友よ、

……　……以下極く手短かに私の傳記を書いて見ませう。私は一八四七年十一月二日、シェルブウルに生れました。私は此の町のコレエジュ勉強しました。尤も一年間は（巴里にある）コレエジュ・ロオランに學んだのですが。私は一八六五年から一八六七年までレコオル・ホリテクニイク（工科大學の如きもの）にゐました。一八九二年に私は土木係の職を棄てました。卽ち其時私は叙勳（レジオン・ドヌウル十字章は或る階級の總ての官吏に對する法定勤務の證書である）され、また技師長に任命されたけれども、私は在職中辛うじて大過なきを得たに過ぎません。私は無限休職に止まるの特別待遇（これは土木行政部の全官吏に與へられるものです）を要求することが出來たでせう。此の無限休暇に依て、私は恩給を受ける權利を保留することが出來たのです。だが實際には私は何人にも特別待遇を申請しないことにして、辭職して仕舞ひました。

私の二つの著書（Saggi di critica 及び Réflexions sur la violence）は私の妻に捧げられました。私の妻は社會主義の著述家としての私の生活の一部を爲してゐると言ふことが出來る。實際、彼女は私にとつては何時も勇氣と誠實に充ち溢れた、眞實の友でありました。私は一八九七年に彼女を失ひました。而して其時から私は彼女の記念に値する哲學上のモニユマンを建てるために努力したと云ふことが出來ます。彼女の思出は失意の時にも尙ほ私に力を與へてくれます。

私がルッソオに就ての論文のうちに次のやうな文章を書いたのは、彼女のことを考へながらしたのです。「献身的な又力強くてその愛を誇つてゐる女にぶつかつた男は幸福である。彼女の愛は何時でも彼をしてその青春の時代を眼前に髣髴せしめるであらう、彼女の愛は彼の魂を滿足することから妨げるであらう。彼女の愛は彼の課業の義務を絶えず彼に喚び起すことが出來るだらう、而して彼女の愛は時として彼の天才を彼に啓示するであらう！斯くの如くにして、吾々の知識生活は大部分、然なる廻り合の如何に因るものである。ルッソオを理解するには、彼の結婚を思ひ浮べる事が必要だ……妻の選擇は男の深い心理が最もよく現はれる行爲の一つである。」（Mouvemet socialiste, Guiu 1907）

愚妻の歸後、私は、妻して家父である、彼女の甥の一人と一緒に田舍に引退して暮しました。一八九九年から一

八九七年までの間、私はDevenir Social に立籠つて大いに活動しましたが、之は私がラフアルグやド井ヤイルやアルフレド・ボンネと共に創始したものです。私は論說や新刊書の批評など書いて、全體の三分の一程此の雜誌を編輯しました。私は、デユクロオイの總長の下に建設された、レコオル・デ・ホオト・ゼチユド・ソシヤルの理事でしたが、一九〇六年に此の職を辭しました。それは、理事の一人が Réflexions sur la violence を公にすることは、此の學校にとつて危險であると私には思はれたからです。實際、此の學校は國家から補助金を下附されてゐたのですから。一八九九年にラガルデエルが Mouvement Socialiste を創刊した時に、私は之を共同編纂して彼を援助しました。併しそこに唯自分達を有名にするためにのみ騷ぎ立つてゐる青年を見た時、私は早速此の雜誌と手を切りました。私はそれから長く此の團體と離れて傍觀してゐましたが、遂にラガルデエルが眞面目な新方針を採りたいやうに見えて來たので、そこで、一九〇六年、私は再び Mouvement に協力することになりました。丁度その間のことです、私があなたの Div-enire に於て Cnsiderazioni sulla violenza の初版を出版したのは。ラガルデエルは私が伊太利で發表した論題の價値を認識して私が指示した道に從ふだらうと、私は想像してゐました。けれども、彼は敢てさうしなかつたのです、と云ふのは、彼は野心家で餘り遠慮のない青年達に取捲かれてゐました、彼等は自稱サンヂカリストの團體の親分として色々の會議に彼を引摺つて行つたのです。斯樣な團結のお蔭で、此等の策士連は勞働同盟の諸將と相並んで有力になりました。而して恐らく彼等は佛蘭西に於ける勞働組織の轉機を決定する上に非常な役割を演じたでせう。一九〇八年の終りに、私はラガルデエルの周圍には私とベルトとが彼等を自由にして欲しいと望んでゐる多くの政略家が居ることを認めたので、吾々は此の集團との有ゆる關係を絕つて、是非黑白を明かにしました。

Divenire が刊行中の Confessioni は、私の生涯の極く詳しい輪廓を與へることが出來ます。

目下のところ、私は極度に疲れて意氣沮喪してゐます、で私はもうこれ以上あなたに申上げることは出來ません。

終りに臨み、謹んで貴下に敬意を表します。

ジヨルジオ・ソレル

以上でソレルの手紙は終つてゐる。ランツイロは之に補足して次のやうに言つてゐる。

彼はブルジュアの舊家の出である。そして其の家風は嚴格な道德觀念の訓練の傳統を保つてゐるさうだ。彼の兄弟のうち一人は士官であり、他の一人は化學者であつたが、此の人は死んだ。

彼は巴里郊外の町、ブウロオニユ・スユル・セエヌの小さな庭園に圍まれたささやかな家に住んでゐる。其所に彼は知識と批判の盡きせぬ好奇心に刺戟されて毎日を研究に送つてゐる。彼は云つた「私は大學教授でもなく、巷に道を說く者でもなく、また一黨の首たらんことを窺覦する者でもない。私は私獨自の學習に依て私に與へられた足前を何人にでも贈る一介の獨學者である」と。

以上でランツイロの附言は終つてゐる。ソレルの自傳もランツイロの補足も與に一九一〇年に書かれたものだから近くソレルの死ぬまでには、十二年の歲月が流れてゐる。私は寡聞にして最近のソレルの動靜を詳かにせぬが、彼自身も言つた通り、有ゆる實際運動との交渉を絶つて、一介の獨學者、一箇の研究者として終始してゐたらしい。即ち私の知る限りに於ては、シャアル・ラッポポオルの主宰する Revue Communiste 誌上に新刊批評を書いたり、彼の舊著の暴力の省察や進步の幻想や第四階級理論の素材などを重版するに當つて、現時の世界の形勢に應じた重要な新章を增補したり、最後にプラグマチスムの効用に就てといふ貴重な哲學上の新作を殘して靜かに死んだ譯だ。要するにその舊作を整理し、一大新著を置土產にして、一介のアウトヂダッタとしての天命を全うして、大往生を遂げたと云ひ得よう。

終りに彼の言葉を繰返して筆を擱くことにする。——Io non sono né professore, né volgarizzatore, né aspirante a capo di partito; sono un autodidatta che presenta a qualcuno gli appunti che gli son servìti per la propria istruzione".

Ecco l'uomo. E. G.

定價

每月一回一日發行	郵稅
一部	卅錢	五厘
半年分	一圓七十錢	稅共
一年分	三圓三十錢	稅共

但し臨時特別號の價は別に申受く

▲送金は可成振替　▲郵券代用一割增

大正十一年十一月一日印刷納本
大正十一年十一月一日發行

東京市芝區三田一丁目二十六番地
印刷發行編輯人　利部一郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷所　川崎活版所

東京市芝區三田一丁目二十六番地
發行所　批評社
振替東京四五三四六

大正十一年三月卅一日第三種郵便物認可
大正十一年十一月一日印刷納本
（毎月一回一日發行）批評十一月號

定價參拾錢

解題

飯田泰三

（一）

雑誌『批評』は、**大正八（一九一九）年三月**に創刊され、翌九年十二月までに二二号を出し、一年余の休刊を挟んで、大正十一年四月から十一月まで、さらに八号を出して終刊した。本書はそれを復刻したものである。

大正八年という年について、この雑誌の主宰者だった室伏高信は、**「改造論の一年」**と題して『中央公論』十二月号に一文を寄せている。その書き出しの一節が、当時の社会的精神的雰囲気の一端をうかがわせる。

「われ等は今ま世界とともに改造の十字路に立つてゐる。実際生活の苦痛からくる被絞取階級の痛ましい訴へ、外部からくる世界的改造の刺激、さうして伝統的制度と生活とに対する自己批評、意識、感激、合理的及び創造的欲求、こうした渦巻きのうちに立つて、興奮し、反省し、動揺してゆくことの目ざましい記録は、最近一年間におけるわれ等の社会生活に、内在的及び外在的に浸透してきた全記録である。……」

かくしてこの年に噴出し、入り乱れ、目まぐるしく交代していった「社会改造の主義」として、室伏が挙げているのは、次のようなものである。「第三階級のブルジョア・ラヂカルの立場」からの「政治的デモクラシー」。「第四階級の立場」からの「ソーシャル・デモクラシー」。後者のさらに分化したものとしての、「正統マルクス派社会主義」、「国家社会主義」、「修正派社会主義」、「ギルド社会主義」、「無政府主義またはアナアコ・サンヂカリズム」、「I・W・W

主義」、「分産主義」等々。それに加うるに、「日本において発明」された「温情主義的労資協調論なるもの」。

近代日本思想史の流れのなかで、**一九一九年前後**はひとつの画期を形づくっている。そこを境にして知的状況に大きな断層ができ、人々の意識に急激な流動化が生じる、そういう時期のひとつである。

外面的な事件の上から見ても、まず、シベリア出兵の宣言、成金景気とインフレと生活難のなかでの**米騒動**の勃発、それを契機にした寺内超然内閣の総辞職、原敬政友会内閣の成立、とつづくのが一九一八年八―九月の出来事である。それを承けて秋から暮れにかけて、大阪朝日新聞筆禍事件(白虹事件)に端を発した国粋団体「浪人会」と「デモクラシー博士」吉野作造との立会演説会、そこにおける吉野の「勝利」と「**デモクラシー**万歳」の空気の中からの、知識人団体「黎明会」と学生団体「新人会」の結成、等のことが起こる。

背後に落ちているのは、**第一次世界大戦**と**ロシア革命**の巨大な影である。そして一九一九年に入ると、海外では、パリ講和会議の開催、その間に朝鮮で三・一事件、中国で五・四運動が起る。さらに三月、コミンテルン創立、同月、ムッソリーニ「ファッショ戦闘団」結成、七月、ワイマール憲法採択とつづく。国内では、「火事泥」的「大戦景気」による日本資本主義の急膨張とともに、**労働問題**が一挙に本格化する。東京砲兵工廠、石川島造船所、足尾銅山等の大ストライキをはじめ、各地で争議が激増し、労働組合が続々結成されたのがこの年である。

こうした「社会問題」の急速なクローズアップが、種々の「改造」運動を昂揚させるにいたった。前年の京都「労学会」、ついで「黎明会」と「新人会」、あるいは「老壮会」の結成につづいて、この年なんらかの意味で「社会改造」を標榜して簇生してきた各種の団体名を例示してみよう。

◇**改造同盟**(八月　馬場恒吾、植原悦二郎、永井柳太郎、中野正剛、杉森孝次郎、石橋湛山、北沢新次郎ら)

◇**青年改造連盟**(十月　西岡竹次郎、加藤勘十ら)　◇**啓明会**(八月　下中弥三郎らによる最初の教員組合)

◇**文化学会**（六月　嶋中雄三、石田友治、下中弥三郎、三浦銕太郎、木村久一、野村隈畔、満川亀太郎ら）◇**北風会**（三月　大杉栄、和田久太郎、近藤憲二ら）◇**大原社会問題研究所**（二月　大原孫三郎、高野岩三郎ら）◇**協調会**（十二月　渋沢栄一、床次竹二郎ら）◇**民人同盟会**（二月　早稲田大学の学生思想運動団体）◇**扶信会**（二月　法政大学の同様団体）◇**オーロラ会**（二月　明治大学の同様団体）◇**建設者同盟**（九月　早大OB中心　民人同盟会の分裂発展したもの）◇**青年文化同盟**（十月　各大学の学生思想団体の連合体）◇**一高社会思想研究会**（十一月）◇**興国同志会**（六月　上杉慎吉指導の右翼学生団体）◇**猶存社**（八月　大川周明、満川亀太郎、北一輝、鹿子木員信、安岡正篤、笠木正明ら）

こうした状況のなかで、この年は多くの思想雑誌の誕生をみた。『**改造**』（四月　山本実彦）、『**解放**』（六月　麻生久、福田徳三ら）、『**デモクラシイ**』（三月　「新人会」機関誌）、『**社会問題研究**』（一月　河上肇の個人雑誌）、『**我等**』（二月　長谷川如是閑、大山郁夫ら）、『**社会主義研究**』（四月　堺利彦、山川均ら）、『**国家社会主義**』（四月　高畠素之ら）、『**労働運動**』（十月　大杉栄ら）等である。

三月創刊の『批評』も、かかる「デモクラシーから社会改造へ」という気運に乗って登場した雑誌のひとつに他ならない。

主筆は当時三〇歳の**室伏高信**だったが、彼は後掲の年譜に記したように、明治大学在学中に、馬場辰猪や中江兆民、また島田三郎や尾崎行雄らの「自由民権」風の思想に、当時としては季節外れともいえる関心をもつことから出発した。時事新報記者時代に刊行した『政友会罪悪史論』と『民衆政治』（ともに大正四年）は、そうした思想から、その直前の「大正政変」（憲政擁護運動）にインスパイアされて書かれたものである。

大正六年には『**民本主義について**』を著わし、その前年に吉野作造によって提起された「民本主義論争」の波に乗

る形で、「いはばデモクラシイ成金の一人」（自伝小説『葦』）として綜合雑誌にも毎号のように寄稿するようになった。しかし彼は政治記者として憲政擁護運動にかかわった感覚から、吉野のような二大政党主義や議会万能主義は、「首領の政治」と「金権主義」を帰結するとして、「政治の能率化」や「コミュニティー」指向を打ち出すとともに、「第三階級」的な「政治的デモクラシー」に代る「ソーシャル・デモクラシー」を唱えて、しだいに「社会主義」への関心を強めるにいたる。『批評』発刊は、ちょうどその段階の彼の仕事であった。

それを助けたのは、当時、早稲田大学を除籍になったばかりの二一歳の**尾崎士郎**や、慶応大学理財科を卒業直後で同大助手をしていた二四歳の**加田哲二**、専修大学出の同じく二四歳の**野田豊**らだった。スポンサーは、もと三井物産社員で上海支店勤務時代に日露戦争から辛亥革命に際して暗躍し、そのころ中日実業公司社長として小田原電気鉄道株式会社副社長等を兼ね、塔連炭坑買収事件等で辣腕ぶりを喧伝され、ちょうど実業界から政界への転身を図りつつあった怪物(翌年、神奈川県から衆議院議員に当選。直ちに政友会の惑星的存在となる)、三六歳の**森恪**であった。編輯兼発行兼印刷人として雑誌の奥付に名前を出していたのは、九年十二月号までは尾崎士郎、十一年の再刊後は、利部一郎だった。(なお、この頃の尾崎士郎については、都築久義『若き日の尾崎士郎』昭和五五年、笠間書院、参照。また、加田哲二は、その後大正十二年にドイツに留学、帰国後十五年慶大教授となった。『ウィリアム・モリス』、『明治初期社会思想の研究』、『日本国家主義史』、『近代社会学成立史』等がある。昭和三九年歿。)

（二）

『批評』創刊号の扉裏には、「K生」の署名で「**編輯局より**」という、創刊の辞にあたるものが載っている。「**K生**」は、おそらく室伏高信であろう。「室伏高信」の読みについては、後に彼が出版した数多くの著作の奥付に付されたル

ビをみてもマチマチで、「むろぶせこうしん」、「むろぶせたかのぶ」、「むろふしたかのぶ」等があるが、大正期には彼が「**むろぶせこうしん**」と称していたらしいことは、彼の全集（昭和十二～十三年）の巻頭に掲げられた英独仏の名家からの手紙の写真、たとえば「文明の没落」他が収められた第一巻の、アインシュタインからの一九二一年八月二七日付けのものに、「Herrn Koshin Murobuse」とあることからも解る。「K生」は「Koshin生」と推定されるのである。ただし、故しまね・きよし氏が「室伏高信論」（『世界政経』昭和五三年新春号）で指摘されたように、戸籍名の元来の呼び方は「むろぶせ**たかのぶ**」だったのであろう。戦後、室伏が公職追放令を受けたとき、G・H・Qに提出した自筆の特別免除申請書に、そうローマ字書きされているからである。（とはいえ、通称はやはり「こうしん」で通っていたらしい。最晩年の著作『野球と正力』、『テレビと正力』等の奥付のルビがなお、そうなっている。）

さて、この創刊号の「編輯室より」では、冒頭にまず、「▲『批評』の立場は**デモクラシーの立場**です」と宣せられたのち、「▲その立場からデモクラシー自身についての研究をします。またその立場から政治、社会、教育、文芸を批評します」と続けられる。「▲デモクラシーは政治の領分にだけあるのではなくして、われ等の生活一切を規定する道徳的本能であります。その『道徳的本能』を体現するものが『批評』であります」というわけである。

したがって、一方で、「▲『批評』は日本の改造を要求します。新日本の創造のために働きます」と言われると同時に、「▲だから私どもは民主主義に反対するあらゆるものに非難を加へます。無政府主義に非難を加へることも勿論です。社会主義については厳正な批評を加へます」とも明言されることになる。

しかしながら、第一号と第二号においては、室伏の「吉野博士の誤謬を指摘して普通選挙の主義を論ず」や「デモクラシーの新理想」が主論文であり、「デモクラシー研究」の特集が組まれていたのにたいし、第三号になると、室伏の「社会主義と民主主義」、およびラッセルの「社会主義の陥穽」（*Political Ideals*第三章の全訳）が主論文となり、ス

パルゴウの「社会主義とは何ぞや」（*Social Democracy Explained*の一節）などが訳載されている。同号の扉裏の「『批評』より」には、「◆今度の号は、主として社会問題または社会主義問題を取扱ふことゝしました」とあり、「◆『批評』は社会主義に対しては第三者の立場です。第三者の立場から厳正な批判を加へます。**厳正な批判を加へるために、社会主義が本来何ものであるかを究明し**、それと過激主義、それと無政府主義、それと政治、国家、権力、民主主義との関係を明かにします」という。

そして、以後、「無政府主義の批判」、「国家社会主義の批判」、「サンヂカリズムの批判」、「ギルド・ソーシャリズムとその批判」、「労働組合主義の批判」、「レーニンの著書を読む」等の室伏の長編論文が毎号の巻頭をかざることになる。かたわら、尾崎士郎や甲野哲二（加田哲二）が、「マルクス伝」、「ラサール」、「一八四八年のマルクス」、「ロバアト・オーウエンの社会主義」等を紹介する。結局のところ、前述のごとく「デモクラシーの立場」に立つとされ、「われ等の精神はたゞ一つである。**批評的精神――自由の精神**がこれである。」（第七号扉裏「『批評』より」）と言われながらも、『批評』全誌は諸「社会主義」をめぐる紹介と検討・批評の論文一色に塗り潰されていくのである。

（三）

さらに、大正九年に入るころから、この雑誌の焦点は**ギルド社会主義**に合わせられていく。一月号に「ナシヨナル・ギルヅへ」（雑誌*The New Age*からの室伏訳）と「ウェッブよりコールへ」（甲野哲二）が出たのち、二月号には「ギルド社会主義研究」特集が組まれ、室伏と甲野（加田）の論文のほか、ホブソン、オレーヂ、ペンティーらの論文が訳載される。三月号以下も同様で、その状況については、本復刻版で直接見られたい。

ギルド社会主義については、土田杏村、井箆節三、河田嗣郎らが論じ、翻訳書もいくつか出たが、それらはいずれ

も九年半ば以降のことである。土田杏村「ナショナルギルドの社会論の文化主義的修正」（『雄弁』九年九月、『文化主義原論』所収）、井箆節三『ギルド社会主義』（十一年）、コール（G.D.H. Cole）『産業自治とギルド社会主義』（黒田礼二・谷島勝太郎訳、九年五月、原題、*The Self-Government of Industry*）、コール・メロー（W. Mellor）『ギルド社会主義』（森戸辰男訳、九年六月、原題、*The Meaning of Industrial Freedom*）、ペンティー（A.J. Penty）『ギルド社会主義の立場』（関未代策訳、九年七月、原題、*Guilds and Social Crisis*）、ホブソン（S.G. Hobson）『賃金制度並にギルド組織の研究』（井箆節三訳、九年七月）、テイラー（G.R.S. Taylor）『ギルド国家論』（新明正道訳、九年十月、*The Guild State*）、コール『ギルド社会主義の理論と政策』（白川威海訳、土田杏村解説、十二年、原題、*Guild Socialism Re-Stated*）、等。なお、宮島新三郎・相田隆太郎『改造思想十二講』（十一年）には「コオルのギルド・ソシヤリズム」が、また、北沢新次郎『社会改造の諸思潮』（十二年）には「ギルド社会主義」が、それぞれ一章を設けられている。

室伏はこの頃、ギルド社会主義の機関雑誌、***The New Age*** (ed. by Orage) と ***The Guilds man*** (ed. by Cole) を購読し、**National Guilds League**の諸パンフレットや、コール、オレージ、ホブソン、ペンティー、テイラーらの著書を取り寄せる他、G・D・H・コールとの文通なども始めていた。『批評』第一五号あたりからは、（ギルヅマン）という署名のコラムも登場しているし、第二〇号の同欄では、「日本のギルド運動」と題して、「数か月前の『ギルヅマン』［上掲コール編の雑誌］は日本においてナショナル・ギルド同盟の運動の起こりつゝあることを報じてゐる」と紹介するとともに、この年、大正九年九月四日の大阪鉄工組合代議員会議の決議を引いて、同組合の「ナショナル・ギルド化」を言っている。

しかし同時に、この時期においても、誌面はギルド社会主義一辺倒だったわけではなく、**クロポトキン**の中世ギル

ド論、**カウツキー**のプロレタリア独裁批判、**ウィリアム・モリス**の芸術的社会主義、**ソレル**のサンディカリズム、**I・W・W**主義、**ベルンシュタイン**の修正主義、**ゴドウィン**の無政府主義、**大山郁夫**の民衆文化主義、**レーニン**主義、**レオン・ブルジョア**のソリダリテ論、**ヘンダーソン**の国際労働標準論、等々についての紹介や批評がなされている。

（四）

九年十二月の第二二号の扉裏の「読者諸君に」で告げられているように、室伏は同年末から一年間、改造社からの派遣で欧米に外遊することになり、『批評』は休刊となる。

外遊中の室伏の事歴の概略は後掲の年譜に記したとおりだが、彼が英国に行って、まず連絡を取ったのがG・D・H・コールであり、その紹介で多くの社会主義関係の政治家や思想家たちに会うことができたのである。

しかしながら、ロンドンの或る地下室にある書店でふと手にした新刊書（Walther Rathenau, *Von Kommenden Dingen*の英訳、*In Days to Go*）が、彼に決定的ともいえる衝撃を与えることになった。**ラーテナウ**の名は、室伏は日本にいる頃から、ドイツにおけるギルド社会主義者というような理解で知っており、かれの著書『ギルド社会主義』でも引用していたので、この書を直ちに購入したわけだが、ヴィクトリア駅近くのカフェで読み始めた彼は、すっかりその虜になった。

この書によれば、社会主義は、もはや「思想貧困」に陥っている。宿命的な「必然性」の世界ではなく、自由に選択する価値創造の世界、もしくは、「機械化」した世界ではなく、目的の世界としての「霊の王国(Das Reich der Seele)」こそが求められねばならない。「近代主義は無意味」と化し、「復古主義は屑」でしかない中にあって、「来るべき社会は、新しくも古くもない。力強い生命は、ただ若いのである。」（「ラーテノウの社会思想」『批評』復刊第一号、参照。

なお、この論文は同年刊の『霊の王国』にも収録。）
こうしたラーテナウの思想に根幹から震撼された室伏であったが、帰国後しばらくは、なお、諸種の社会主義や労農ロシアを論じながら、しだいにボルシェヴィキ流の共産主義に対する批判を鮮明にしていくという方向で、『批評』を復刊・継続していった。
有島武郎「宣言一つ」（『改造』一月号）をめぐる論壇を批評した「階級闘争に於ける知識階級、文化、及び芸術の問題」（四月号）、いわゆる「ダグラスイズム」の「クレディット運動」を紹介した「**信用社会主義**（英国の新社会主義運動）」（五月号。これについては土田杏村も翌大正十二年の『文化』に「ダグラスイズム及び其の論争」等を掲載し、のち昭和五年に『生産経済学より信用経済学へ』にまとめた）、ロマン・ロランが『クラルテ』に発表した二つの書簡を紹介した「**ロマン・ロラン**と共産主義」（同号）、**エマ・ゴールドマン**とアレキサンダー・バークマンがストックホルムから各国同志へ送った手紙を紹介した「アナキストの抗議」（同号。これについては、大杉栄もほぼ同時に『労働運動』に「ソヴィエト政府、無政府主義者を銃殺す」と題して紹介している）、「**ロオザ・ルクセンブルヒ**女史の遺稿を読む（ロシア革命の批評）」、「晩年のクロポトキン（バークマンの手記）」、（インタナショナル三派の）「伯林会議」、翻訳「英国、印度及びスワラヂ（**ガンヂ**手記）」（以上、六月号）、「世界の階級運動と其主潮」（講演筆記）、「病中のレニンと彼の最近の二論文」（以上、七月号）、『**ロシア画報**』（八月特集号。露国飢饉救済金募集とリンクして）、「ボルシェヴィキの虐政の話（エンマ・ゴオルドマン）」（九—十月号。これも大杉栄が翌年二月の『労働運動』に訳載した）、等である。そして、「逝ける**ソレル**と彼の暴力哲学」、「ラーテナウの思い出（アインシタイン手記）」等が掲載された十一月号（復刊第八号）をもって『批評』は終刊となった。

（五）

その後の室伏高信の軌跡については、後掲年譜および著書目録で見ていただきたい。

大正十四年に刊行された生田長江の『超近代派宣言』の巻頭に、「『新しい』『古い』の問題」という一文がある。「新事物崇拝は近代的迷信」と題された一節から説き起こし、「**時代に引きずられ行く新しさ**」というものがあるとして、「息をきらしながら流行を追ふてゐる者」の「みじめさ」を論じている。それにたいして、「時代に先んずることによつて、所謂季節はづれとなることによつて、時代をより善き時代へ引き上げて行かうとする」あり方もあること、また、「新事物」にたいしては、まず「それを『生活』して見ること」と、「永久に若々しく新しいところの過去」から学び、「それから創出したところの私達の尺度によつて、自由の、独立の批判と評価とを加へるやうにならなければならない」と述べている。

『批評』時代の室伏高信には、まさにこの意味での「時代に引きずられ行く新しさ」に幻惑されて、「息をきらしながら流行を追」いつつ、先物買い的主体性や独創性を求めていた嫌いがあった。欧米遊学から帰国後の室伏が、ラーテナウやシュペングラー（Oswalt Spengler, *Der Untergang des Abendlandes*）から受けた衝撃も、そうした自分の姿への反省が、「近代的迷信」としての「進歩」信仰の批判と結びついて展開したという一面があろう。

とはいえ、『文明の没落』から『土に還る』へ、そして『日本論』、『亜細亜主義』へ、さらには『アメリカ』、『ファッショとは何か』、『南進論』、『戦争と青年』へとシフトしてゆく室伏のその後の姿にも、結局「時代に引きずられ行く」運命を免れえない、度し難い**ジャーナリスト型インテリゲンチャ**の体質を見ることができる。しかも、「近代主義批判」を掲げながらの、その転落の構図は、さまざまの意味で「先駆的」であった。

その「転向」の外見の底に秘められていた彼の「主観的」意図については、後掲年譜の中に紹介しておいたが、それを「客観的」にどう評価するかは、おそらくさまざまに見解が分かれるところであろう。いずれにせよ、その膨大な著書目録に示される室伏の多面的な思想展開は、大正→昭和の知識人たちの思想遍歴の縮図、ないしインデックス（総索引）ともいうべきものになっていて、興趣つきないものがある。

※なお、室伏高信論としては、前引のしまね・きよし論文のほかに、山領健二「室伏高信論——ジャーナリストの転向」（『思想の科学』一九六二年四月。同氏著『転向の時代と知識人』一九七八年、三一書房に再録）がある。

室伏高信　年譜

飯田泰三・山領健二

一八八九（明22）年　旧暦二月二十二日［戸籍上は五月十日］、神奈川県足柄下郡土肥村（現在の湯河原）に庄太郎の四男として生まれた。二が並ぶ誕生日だったので、後に彼が自伝小説を書いたとき、その主人公を二二郎（ふじろう）と名付けた。父は同年に施行された市町村制により出来た村役場に、初代収入役として勤めるかたわら、農業を営んでいた。

一八九五年　実母ユウが三三歳で病死した。父は再婚したが、高信は祖母ツル(但、高信の母は養女、父は入り婿だったから、血縁はない）に可愛がられて育った。

一八九九年　村の尋常小学校四年を終え、隣の吉浜の高等小学校に通う。同校では、第三学年の三学期に代って来た代用教員浅田岩次郎の、**アギナルド**（フィリピンの独立革命家）や**クルーゲル**（ボーア戦争を指導した南阿の愛国政治家）についての話に感激し、初めて自発的に勉学する意欲をもつ。

一九〇三年　高等小学校を優等で卒業したが、父が上級学校への進学を許さず、農作業の合間に、東京から兄が毎月送ってくれる大日本国民中学会の講義録で勉強し、少年雑誌に詩を投書して賞品として送られてくる本（大町桂月『学生訓』など）を読む、といった生活が一年八ヵ月つづいた。◆その間、兄の送ってきた高須梅渓『時代思潮』という本に、星亨を悪徳政治家とし、**島田三郎**を清貧の中で正義のために闘う政治家として描いているのに感銘をうけ、新聞記者→政治家のコースを夢見るにいたった。また、父が役場から持って帰る『**万朝報**』の、幸徳秋水や堺枯川らによる社説を愛読した。

一九〇四（明37）年　十一月末、やっと父の許しが出て**上京**。翌年正月の学期始めから、神田の正則英語学校と正則予備学校（ともに校長は斎藤秀三郎）に通う。◆三月、**錦城中学**（校長は龍渓矢野文雄）の三年の編入試験に一番で合格。三年、四年とも、一五〇人のうちで二番の成績だったが、五年のとき、栄養失調からくる脚気にかかり、帰郷して静養しているうちに学業が遅れ、最後の半年は自堕落な生活を送る。

一九〇八年

三月、当時流行っていた雑誌『成功』や『実業之日本』の影響で志望していた、東京高商へ入学願書を出すが、その帰路、実業家になることへの疑念が萌し、志望を取り止めるとともに、帰宅後、下宿の部屋に閉じこもり、一週間で一五〇枚の原稿を書き上げ、新渡戸稲造の序文を貰って『**学生論**』と題して自費出版した。実業熱に浮かされ、小利口、軽薄で個人主義的な当時の学生の風潮に、鉄槌を加えるという風のものだった。千五百部以上が売れ、それで出来た約二百円を学資として、九月、**明治大学**に入学した。◆入学後まもなく、当時流行し始めていた**学生雄弁会**に入り、各大学の聯合演説会や擬国会で活躍する。その頃の学生雄弁界には、芦田均、鶴見祐輔、田熊福七郎、後藤国彦、森戸辰男らがいた。明治大学の擬国会では、首相に選出されたが、辞して野に下り、英国の例にならって労働党党首を名乗ったりした。◆本科は法科に進み、当初は花井卓蔵に憧れて弁護士を志願したが、まもなく憲法学（とくに美濃部達吉の**天皇機関説**）への関心から、**ルソー**、イエリネック、ミル、中江兆民、**馬場辰猪**（とくにその『天賦人権論』）等の政治思想に惹かれ、上野図書館に通って耽読し、さらに政治家としての**尾崎行雄**に傾倒するようになった。

一九一二（明45）年　各大学雄弁会の学生たちが丁未倶楽部を作り、そこで知った中大の学生、横田稔との関係で、その兄、**横田千之助**がこの年春の総選挙で群馬から立候補するのに応援演説の弁士として出向いた。こ

のとき足利で、のちに彼の妻となる芸者、園枝を知った。しかしこれらに忙殺されている間に、卒業試験の準備ができなくなり、結局、最後の民事訴訟法の試験を放棄し、明治大学は卒業しないで終った。

◆九月、学生時代からしばしば訪れていた万朝報の茅原華山に頼り、その紹介で**二六新報**に入社した。初任給十八円。政治部記者として早速、尾崎行雄、花井卓蔵、島田三郎、大隈重信、犬養毅、武富時敏、大石正巳、板垣退助、幸田露伴、徳富蘆花、等を訪問した。まもなく、秋田清らに評価されて夕刊の社説を担当するにいたり、給与も三十三円にまで上がったが、年末に盛り上がった桂内閣反対の「**憲政擁護**、閥族打破」の運動で、二六新報の社主、秋山定輔が桂擁護に回ったため、室伏も政治部長関口一郎らと翌年初頭に辞表を出した。

一九一三年

一ヵ月ほど憲政擁護運動の陣笠として飛び歩いたのち、尾崎咢堂に東京日日新聞の主幹対馬健之助に紹介されたが、東日は満員ということで、対馬の弟、対馬機が経済部長をしていた**時事新報**（社長福沢捨次郎、主筆石河幹明）に紹介され、同社に入社することになった。貴族院、同志会、政友倶楽部、文部省、等を受持ち、ここでも主要な政客を片っ端から訪問した。そのうち後藤新平や仲小路廉に接近したが、情報源を洩らさなかったことで遠ざかる結果となった。原敬とは初対面のときから衝突した。

一九一四年

第一次大戦勃発で**青島**に**従軍記者**として派遣されたが、山梨参謀長の談話を無検閲で打電して時事新報に掲載され、即日退去となるとともに、帰国後、検事局で取調べを受けた。しかし時の司法大臣が尾崎行雄だったので、起訴は免れた。

一九一五年

この年行われた総選挙で、前年成立した大隈内閣を支援し、小田原、福井、八王子、足利、等で応援演説の演壇に立つ。◆と同時に、この頃から次第に評論的なものへの関心を強め、この年四月に『**政友会**

罪悪史論』、十月には『**民衆政治**』を刊行するにいたった。前者は一二〇頁のものを五日間で、後者は二三〇頁のものを一五日間で書き上げたものであった。両著ともに友人横川雄作主宰の世界雑誌社からの刊行で、後者には尾崎行雄と花井卓蔵の序文をもらう。花井は出版費も出してくれた。◆十月五日、井上正明のすすめで**東京朝日新聞社**に入社する。主筆は松山忠次郎で、杉村楚人冠、鈴木文史朗、山本笑月、岡本一平、安藤正純、米田実、緒方竹虎、美土路昌一、大庭柯公、等が同僚だった。

一九一六年　九月、足利から上京してきた園枝と結婚する。まもなく伊藤正徳の世話で大森に新居を構える。園枝との間には、三年後のクララ以下、エミヤ、ナヲミ、不二子の四人の女の子ができた。ただしナヲミは一歳のとき小児麻痺に罹り、七歳で夭折した。

一九一七年　春、寺内内閣の手で総選挙。朝日の派遣で各地方の選挙状況の視察をするうち、金沢で**永井柳太郎**に**応援演説**を頼まれ、寺内閥族内閣を攻撃し、政友会式の政党のボス支配をも攻撃して、ルソーやフリードリヒ大王の言葉を引用して、「官吏は人民の奴隷でなければならない」と述べたところ、官吏侮辱の嫌疑で勾引され、**金沢刑務所**に収監された。九日目に保釈となり、一週間後に予審公判、さらに一ヵ月後に有罪決定がなされたが、地方裁判所に回る前に警察側の告訴取下げで事件は落着した。時の内務大臣後藤新平の取りなしがあったらしい。◆しかし、これ以後、朝日新聞記者としての活動に対して次第に意欲を失い始め、むしろ『雄弁』（大5・3「代議政治を論じて吉野博士に質す」）、『新小説』（大5・5「民主主義と議会及政党」）等から始まり、『中央公論』（大7・7「軍国化より民本化へ」が最初）以下の諸雑誌を舞台とした評論活動のほうが目立つようになる。その間、『**新小説**』の**社説**欄を大山郁夫とともに受持ち、また、同誌編集長田中純の肝煎りで、大山、有島武郎、および尾崎敬義（愛媛選出の若手代議

士で中日実業専務、室伏は記者として親炙していた）と呼び掛け人になって、「**末日会**」という毎月末に開く会を組織し、二年余つづける。里見弴、岩野泡鳴等が常連だった。

一九一八年 丸善で見つけたトロツキーの英文の新刊書『ボルシェヴィズムと世界政策』を翻訳刊行したところ、七月一日付刊行『新社会』誌上でその「誤訳振り」を指摘される。この年、東京朝日新聞社から突然の書留郵便を受取り退職金八百円で解雇される。

一九一九（大8）年 三月一日、尾崎士郎らと**月刊雑誌『批評』**を創刊、事務所を銀座の対鶴館三階の一室に置く。毎号、長編巻頭論文のほか、数編の評論、翻訳等を寄稿した。創刊号の扉裏の「編輯局より」には「『批評』の立場はデモクラシーの立場です」とある。この雑誌は最初は千部でスタートし、第二号は二千部、第三号から三千部になり、以後は二千部から四千五百部の間、大部分は三千部を印刷した。（九年一二月号、扉裏、「読者諸君に」）◆四月、『**デモクラシー講話**』を刊行。日本評論社から四百字三百枚、百五十円買切りという条件での依頼で、一週間で書き下ろしたものだが、これまでの自費出版的なものと違って、著述家として社会的に認められるにいたったことを意味した。一万部近く売れ、八十歳に達していた元老山県有朋が、老いても新しい思想にたいする知識欲が旺盛で、病床でこの本を読んでいたという新聞記事が、出たこともある。◆十一月には『**社会主義批判**』を刊行。これは大部分、雑誌『批評』の巻頭に掲載されたものの集成だったが、発行後間もなく二万部を突破した。この年五十八歳だった森鷗外は、「この書は英国の社会主義については明快だが、ドイツの社会主義については不透明なところがある」と評した。事実、この段階での室伏は、マルクス主義それ自体にたいしては、深く踏み込んで「批評」することを避けていたふしがあった。◆十一月二十五日、大阪朝日新聞を「白虹事件」で退社した

鳥居素川を主筆に、鉄成金勝本忠兵衛と熊本出身の藤村男爵の支援の下に、資本金百五十万円で**大正日日新聞**が創刊されたため室伏も井上正明との関係で嘱託となる。百四十円の俸給を受けたが、一回も記事を執筆せず、翌年七月十九日に会社が解散するまでに、名古屋と四国の三ヵ所に講演に行き、序でに大阪本社に立寄って歓迎会を開いてもらったというだけの関係に終る。

一九二〇年　前年九月号の『批評』に「ギルド・ソーシャリズムとその批判」を書いて以来、同誌は次第にG・D・H・コール、オレーヂ、ペンティー、ホブソンらの**ギルド社会主義**の紹介に力を入れるようになり、この年二月号は同主義の特集号とした。そして七月には、『ギルド社会主義　その創生及び建設』を刊行し、コールと文通も始めた。このきっかけは、元来、室伏が『自由への道』や『社会改造の原理』の著者、バートランド・ラッセルに傾倒しており、その思想との親近性をギルヅマンらの運動に見たことにあった。さらに室伏の興味は、その潮流の源を遡って、ロバート・オーエンやウイリアム・モリスに向かった。◆十月二十五〜二十七日の新人会第二回学術講演会（北沢新次郎・室伏高信・有島武郎・長谷川如是閑／聴講者六百名）において「ギルド社会主義の発達及原理」の演題で講演する。◆十一月某日、高畠素之の訪問を受ける。無政府主義の大杉栄、国家社会主義の高畠、社会民主主義の堺利彦、山川均、荒畑寒村、それに友愛会や信友会の幹部も加わって、社会主義各派が大同団結して「**日本社会主義同盟**」を結成する動き（十二月十日発会式）に発起人の一人として参加するようにとの勧誘だったがちょうど**外遊**の予定が入ったこともあって断った。◆十二月二十八日、横浜出航の伏見丸でシアトルへ向け発つ。

一九二一年　米国には約一ヵ月滞在し、大西洋を渡って倫敦に約四ヵ月、伯林に三ヵ月余、それから巴里、ジュネーヴなどに少しずつ滞在して、十二月十六日、神戸着の諏訪丸で帰国した。この外遊は、**改造社**の山本実

彦社長が、賀川豊彦『死線を越えて』の二〇万部に及ぶ空前の売行きによる利益を活用するために企画したもので、時々通信を『改造』に寄稿することと、アインシュタインやベルグソン等を改造社で日本に呼ぶための交渉をしてくる、というものだった。堀江帰一が山本に室伏を推薦した。室伏が向こうで会って話を聞いたのは、英国ではコール、ハインドマン、ヘンダースン、ウェッブ夫妻、ジョン・バーンズ、H・G・ウェルズ、カーペンター等、独逸ではアインシュタイン、マックス・ベーア、カウツキー、ベルンシュタイン、エーベルト等、仏蘭西ではベルグソン、ロマン・ローラン、米国ではゴンパース等であった。その会見印象記と、各国での、主として社会主義運動についての見聞記は、『改造』に寄稿されたものに数編を加えて、帰国後『**印象と傾向**』にまとめられた。

一九二二年

四月、『**批評**』を**復刊**する。友人の利部一郎を介して、父の代からの高利貸で文学青年の財産家、武藤重太郎が費用一切を負担するからと、勧めてきたからである。今回は加田哲二の他に、村松正俊、秋田雨雀、小牧近江等の『種蒔く人』同人、さらに土田杏村、百瀬（エリゼ）二郎らの寄稿協力が得られた。室伏は「ラーテナウの新社会思想」から始まって、ロマン・ローラン、ガンヂー、ローザ・ルクセンブルグ等の思想やロシア革命観を論じ、「ボルシェヴィキの虐政の話」（エマ・ゴールドマン）等を紹介しながら、次第に共産主義批判を鮮明にしていった。しかしマルクス主義が急速に論壇を制覇してゆく状況下で、それは流れに逆行する形となり、第一号は八千部印刷して六千余部が売れたが、以後は号を追う毎に読者を失い、結局、十一月号（第八号）の「ソレル紀念号」をもって**終刊**となった。◆四月十九日、慶応義塾で小泉信三主催の理財学会大会に招かれ、「世界の階級運動と其主潮」について講演する。（『批評』七月号に掲載の上、『印象と傾向』に収録。）◆八月、後藤新平の主催する軽井沢夏期大学に招

かれ、共産主義批判をテーマに二日間延べ八時間の講演をした。他の講師は杉森孝次郎と河合栄治郎。同じころ軽井沢に来ていた尾崎咢堂、島田沼南、末弘厳太郎、有島武郎らとも会った。◆その頃、**シュペングラー**の『西洋の没落』(ドイツ語原版)を入手する。前年滞欧中にロンドンでたまたま手にした**ワルター・ラーテナウ**の『来るべき事物』の英訳本からの衝撃とならんで、この本は、社会思想家からさらに歩を進めて「文明批評家」へと転換する契機となった。◆十二月号の『中央公論』に「**創造人の宣言**」が巻頭論文として掲載される。ラーテナウ、シュペングラーからの啓示にもとづいて四〇枚を一日で書き下ろしたもので、翌年刊の『文明の没落』の巻頭に置かれた。この著作によって「思想紹介者」としての自分が「自己表現者」に生まれ変った、という自覚をもつ。また、これを契機に、外遊からの帰国後いったん途絶えていた『改造』との関係が復活し、同誌に論文と随想を、交互に隔月で書くこと、競争雑誌には執筆しないこと、毎月三百円ずつの手当を受けること、という契約が新たに結ばれた。

一九二三年

九月一日の**大震災**により、改造社の社屋が焼失し、右の契約も雲散霧消した形になる。家計の窮迫だけでなく、社会思想研究から文明批評への転換を鮮明にするためにも、長年集めた蔵書を処分することにする。平野義太郎の仲介で政治・社会・経済関係の洋書だけ、約二千冊を東京帝国大学法学部研究室で買ってくれることになり、蠟山政道助教授が二、三日通ってきてピックアップし、最後の日にトラックで運んでいった。◆十二月、『**文明の没落**』を自費出版し、翌年十二月刊の『**土に還る**』と合わせると、八、九万の売行きを見た。これを転機として完全に社会主義と袂を別ち、「近代主義の総括的な絶滅」と「世界観としての進歩の思想を否定」する立場を鮮明にする(『人間記』)。同時に、この成功によりジャーナリズムやアカデミズムの主流からは無視されながら、比較的少数の心酔者たち(主として地方在住の

知識青年たち）を読者層にもつ、「野に叫ぶ」（同前書）ジャーナリストという自らの地位を、以後十年ほどにわたって確立する。◆その間の代表的著書としては、**『日本論』**（大14・12）、**『新しき時代とは何乎』**（大15・6）、**『亜細亜主義』**（大15・12〜昭2・3）、**『大衆時代の解剖**―文明の没落第三巻―』（昭3・12）、**『アメリカ**―其経済と文明―』（昭4・3）、**『日本はどうなる』**（昭4・7）、**『新英雄伝』**（昭4・12）等。他に、**『自由人は斯く語る』**（大13・6）、**『文明の彼岸へ』**（昭2・12）、**『街頭の社会学』**（昭4・3）、**『反乱の社会学』**（昭4・11）等の評論・随想集がある。

一九二九年　十一月、二年ほど共同生活していた銀座のカフェの女給、時子と別れる。妻の園枝とは別居を続けたが、三人の子供たちはやがて時おり訪ねてくるようになった。

一九三〇（昭5）年　二月、**総選挙**に湘南地方（神奈川県第三区）から**立候補**し、次点で惜敗する。社会民衆党書記長の赤松克麿のすすめによるもので、選挙の保証金、供託金は党で出してくれたが、運動資金は、湯河原町長を長く勤めるかたわら高利貸しを営んでいた父親から借りた、五千円だけだった。厚木、藤沢、小田原等で開かれた演説会は超満員だった。◆夏、神田の巌松堂に売った蔵書三千余冊の代金三千五百円を旅費として、**中国**に**旅行**する。。上海で二ヵ月余を過ごし、帰途、北平、天津、大連に寄り、朝鮮経由で帰国した。彼はそのころ、「眠れる獅子」中国がいかにして目を覚まし、起ち上がるかに関心があったからである。**汪精衛**、**周作人**、魯迅、郁達夫らに会った。また、北平の書店で偶然、『村治月刊』という雑誌を手にし、梁漱溟、王鴻一らの「**村治派**」運動の存在を知る。◆十一月、国民新聞夕刊にコラム「**銀座風景**」を受け持ち、ほとんど毎日出社して執筆した。しかし約九〇回続いたところで、国民新聞の経営者が替わり、翌年二月二十八日をもって同コラムは打ち切られた（六月発行の同名書に収録）。

一九三一年　四月、『**支那は起ちあがる**』を公刊。さらに柳条湖事件の後に『**満蒙論**』という小冊子を著わしたが、これはその軍部批判によって発行即日発売禁止となった。しかし間もなく上海で訳本が刊行され、また北京の大公報はこれを全文訳載した。◆七月五日、**全国労農大衆党**結党大会で副議長をつとめ、中央執行委員の一人に選出される。

一九三二年　十二月、長年住んだ大森の住居を引き払って、相模川上流の津久井郡**三沢村**塩民に移り住む。前年来、彼は**ファッショ**の運動・思想の紹介にエネルギーを注いできた。そこにベルグソンやニーチェの「生命の哲学」に通ずるものを感じたからである。しかし、ムッソリーニがローマ帝国を夢みたり、ヒットラーがチェコ併合に取りかかったりした頃から、批判的立場に転じた。同時に生活面でも荒廃と行きづまりが顕著となり、過去を清算して生活を根本的に転換する必要が痛感されたのである。二年ほど前に知り合った紀子（二四歳）を伴って来た。翌八年六月、女児が生まれ、ミサワと名付ける。◆三年間の山村生活の間に、『**危機の宣言**』、『**日本の次の一歩**』、『**現代文明講話**』等を執筆するかたわら、日記風に自己の身辺雑事を語りつつ思想や時代について考察していく『**三沢村日記**』、『**人間記**』以下の新しいスタイルのエッセイを刊行し、文壇・論壇にも反響があった。

一九三三年　池崎忠孝らの排米論の流行に対抗して、六月号の『中央公論』に「**排英親米論**」を投稿し、採用される。

一九三四年　四月、読売新聞が新設した時評のコラム「**一日一題**」に、長谷川如是閑、三木清、桜井忠温、稲原勝治らとともに常連寄稿者となり、一九四〇年九月に同欄が廃止されるまで、毎週一回執筆した。◆九月十一日の同欄に書いた「軍部とタブウ」、十八日に書いた「衆怨の府となる勿れ」で軍人の政治関与を批判したのにたいし、右翼団体が読売新聞社に何度か押しかけるということがあった。

一九三五年　前年十二月から雑誌『経済往来』と関係ができ、この年二月号からは、その編輯にたずさわって毎月のプランを立て、一週一、二回出社することになった(月給二百五十円)。同誌は十月から、彼の発案で『**日本評論**』と名を改めた。こうして彼は三沢村への隠棲によって、かえって中央ジャーナリズムとの関係を回復する結果となったのである。◆七月、読売新聞の依頼で**中国を再訪**する。今回は二十日ほどの滞在だったが、北支事件が梅津・何応欽協定で一応おさまったかに見える状況下で、梅津司令官、胡適之、陶希聖、陳立夫等に会った。上海でインタビューに来た上海毎日新聞（日本字新聞）に、日支親善を言うなら駐在武官を撤廃すべきだ、と語ったところ、翌日の同紙には「**室伏高信の暴論**」という註釈つきで大々的に取り上げ、他方、さらに次の日の中国の新聞は一斉にこの記事を紹介し、『申報』などは「室伏高信正論」という大見出しで報じた。帰国後、血判で百六十余人の中国人が「為被圧迫中華民族吐気者室伏先生万歳」と書いた手紙をくれたが、同時に十八ヵ所の駐在武官から、国賊室伏を厳重処分せよという電報が陸軍省に舞いこみ、渋谷の憲兵隊に呼び出されて散々に審問された。

一九三六年　春、雑誌『セルパン』に二・二六事件の感想を書き、右翼の脅迫を受ける。◆五月、『**青年の書**』を刊行。『文明の没落』以来のベスト・セラーになったものである。これは自分なりの「人生読本」を書こうとの企てで、自分の言葉よりも古来の哲人、詩人等の言葉を豊富に織り込み、青年層の教養＝形成への欲求に応えるものとなって成功した。この成功がきっかけになって、翌年からの『室伏高信全集』全十五巻の刊行も可能になった。◆八月、読売新聞の委嘱で、軽井沢の別荘に**近衛文麿**を訪ねた。近衛は『三沢村日記』を読んだと言い、室伏がそのころ『日本評論』等で展開していた「排英親米論」や「南進論」(同名書昭11・7、また『大英帝国主義批判』昭12・12。いずれも軍部の北進論ないし中国大陸侵略論、

および対米開戦論を牽制する意図があった）にも理解を示すかの素振りを見せ、親しみを感じた。

一九三七年 四月、全十五巻の著作集「**室伏高信全集**」の刊行を開始、八千部を配本する。◆九月発行の『戦争の知識』（清沢洌と共編）が直ちに発売を禁止され、警視庁で取り調べを受ける。◆十一月、長谷川如是閑、馬場恒吾、河合栄治郎、矢内原忠雄とともに、**首相近衛文麿**から招かれて霞山会館に行く。**日華事変について**意見を聞きたいということで三十分ずつ話したが、室伏は「中国侵略の非なることを痛論し、事こゝに至つたのは、要するに日本に政治がないからであると説き、そして最後に、この事態を解決する道は、軍部から国民の手に政治をとりもどすにあると結んだ。近衛公はいゝ顔はしてゐなかつた。」（「追憶」『一日一日』）◆このころ、東洋協会刊行の雑誌『**東洋**』に毎月寄稿。◆また、この頃、小林一三を囲む言論人のサロン「**二六会**」が出来る。毎月二十六日に赤坂の料亭「長谷川」に集まる会で、常連は室伏の他、芦田均、馬場恒吾、島中雄作、佐々木茂索、三宅晴輝、邦枝完二、笠間杲雄。また、伊藤正徳、清沢洌、長谷川如是閑、正宗白鳥、上司小剣、谷川徹三、阿部真之助、鈴木文四朗、鶴見祐輔らも時々顔を出した。自由主義的知識人たちが気を許して論じあえる場として、室伏は努めて出席した。◆十二月、陸軍大将**宇垣一成**を訪問し、時局について意見を交換する。◆この頃、杉森孝次郎と三木清に呼び掛けて、**日本評論家協会**を大新聞社と大雑誌社に資金を求めて作り（会長杉森、幹事津久井龍雄、伊佐秀雄）、ささやかなりとも軍部に抵抗する世論の結集の場を作ろうとしたが、多勢に無勢、その日暮しの座談会に終わった。この協会は五年後の四二年十一月、「大日本言論報国会」（会長徳富蘇峰、事務局長鹿子木員信）結成とともに解散を余儀なくされた。

一九三八年 六月、『室伏高信全集』完結。購読者数は配本につれ減っていたが、それでも完結時に二千足らずの読者

があった。九月十四日、父庄太郎の死を見とる。

一九三九年

四月二十八日、改造・文芸春秋・日本評論・中央公論四社主催の**「対英時局大講演会」**で、「事変ノ解決ヲ論ズ」と題して講演する。◆九月二日、博多から飛行機で**上海**に向け旅立つ。ブロードウェイ・マンションに泊まって、「梅機関」の軍人影佐禎昭らと連絡し、陶希聖に会った後、七日、日本大使館の一書記官を伴って、重慶脱出直後の**汪兆銘**を静安寺路の隠れ家に訪ね、陶希聖、林伯生、楮民誼、李聖五、梅思平、周化人等の同志たちも交えて晩餐を共にしながら約二時間、会談した。『**和平を語る**』(10月刊)はその訪問記である。同書の末尾に室伏は、「日本は一大転回をしなければならない。日本は男らしくその一切の過去の誤謬を清算して新たに生れなければならない。……東亜合作の大理想へ。中国の征服者としてでなく、中国の解放者としての、この東亜合作の大理想に向つて!」と記した。◆帰国後、長女クララを中国に送り出し、一年間、汪の南京政府の仕事に従事させる。

一九四〇年

六月、荻窪の近衛邸、荻外荘を松本正雄とともに訪ね、「下から(フォン・ウンテン)」の「国民組織」による一大「運動」の必要を説き、その中に軍の勢力を吸収し、解消せしめるほかに道はない、と説いた。そのためには「軍に悪くなく、国民の信頼もうけ」られる、「日本的で新しい人物」が必要だとして、近衛の蹶起をうながして(『戦争私書』)近衛の同意を得る。数日後、近衛の第一の側近だった有馬頼寧を中央農会に訪ね、同趣旨を説いた。まもなく**「新体制運動」**を標榜する近衛声明が発表された。それに呼応するような形で室伏は、『**新体制講話**』(10月)を著わした。だが、できあがった新体制運動は、「上から(フォン・オーベン)」のもので、軍を押さえる代わりに軍から押さえられるものとなったので、翌年一月刊の『一億人の新体制』ではそれへの批判の意をこめて「一億人の」とした。結局、幸か

不幸か室伏には、公的に同運動の推進に関与するような声は掛からず、「大政翼賛会」の役員等に推されることもなかった。◆この年、六番目の女の子が洋子との間に生まれ、当時代々木西原に住んでいたので、代々子と名付けた。

一九四一年

この年初めの冬、**「四社会」**（『文芸春秋』、『中央公論』、『改造』および『日本評論』の四社の記者と、陸軍報道部の軍人たちとの共同の定例宴会）に初めて出席する。席上、陸軍中佐**鈴木庫三**らを前に、今の日本の中心は軍であり、政党も官僚もデカダンスなのだから、軍は無理にパペット内閣を作ったり倒したりすることはない、政局を安定させるためには軍が表面に立って責任をとってもらいたい、と発言する。陸軍側は一同席を蹴って立ち、会はそのままお流れになった。鈴木らはそれから席を代えて徹宵飲み続け、「あの野郎けしからん、生意気だ、国賊室伏を銃殺にせよ」と息巻いていたと伝え聞き、数日後、日本評論社内のすすめにしたがって、陸軍報道部に出頭し、謝罪して一応ことなきを得る。◆十月、山崎靖純と本位田祥男の連名による、時局についての懇談会への招待状によって、天羽英二**外務次官の官邸**に赴く。末弘厳太郎、高田保馬、河田嗣郎、加田哲二、津久井龍雄らが列席していた。日米戦わざるべからずという勇ましい発言が続いた後をうけて室伏は「支那事変が四年も続いて国民は疲弊しており、さらにアメリカを敵とする余裕はない。第一次大戦の経験からしても、アメリカの工業力は開戦後半年で強大な軍事力を備えるにいたるであろう。もし勝つか負けるか分からないとしたら、明治維新以来ようやく大国にまで作り上げてきたこの国を、勝つか負けるか分からない賭博に巻き込むことには反対である」と述べた。一座は白けわたったが、高田保馬が短く賛意を表し、多数は沈黙を守ったまま、会はお開きとなった。◆十二月号の『日本評論』に**「日米戦ふか」**を書いたが、慎重なカモフラージュ

一九四二年　の下に同趣旨を反語的に展開したつもりであった。
二月号の『日本評論』に寄せた「大東亜の再編成」が軍部の忌諱にふれ、同誌への執筆が困難になる。◆八月二十三日、**与瀬**（現相模湖町）の山村に居を移す。◆九月、『日本評論』から退職を勧告され、九年間来の関係を断つ。退職金二万余円。まもなく、わずかに残っていた中日新聞と満州日日新聞のコラム執筆も停止となり、ジャーナリズムでの発言の場は一切なくなり、収入の道も途絶える。この「**与瀬の幽囚**」（『戦争私書』）後、著書は、翌四三年に『三沢村日記』のスタイルで書いた『**山村記**』（八月）および東西文化の交渉史を書いた『**東洋の書**』（十二月）が出版できただけで、『青年の書』の再版も、自伝小説『葦』の続編の出版も不許可となった。◆十二月、自分の家を初めて建て、棕櫚荘と名付ける。物置まで入れて二八坪の小住宅だが、洋子と代々子との三人の生活には十分である。土地は、四年前に父が死んだとき後を嗣いだ甥の朋治に四千円ほど出資してもらって手に入れておいた、与瀬の四六〇余坪である。

一九四三年　十月二十六日、二六会に出席。席上、「世の中はまた自由主義に帰る」と清沢洌、芦田均の立場を称賛する。

一九四四年　二月二十六日、二六会出席のため上京。これが敗戦前最後の二六会となる。◆三月末、一年四ヵ月住んだ棕櫚荘を、疎開先を求める人に売り、**国府津**の駅前の国府津館という旅館の別館を借りて、そこに移る。経済的理由の他に、ちょうどそのすこし前から**黄疸**に罹り、その治療と保養の必要ということもあった。三月六日に起った胃痙攣と、それに続く高熱の中で、十一日には、呼び寄せたエミヤと不二子に、「この戦争は日本の間違いだ」で始まる遺書を筆記させようとして、彼女らが泣きだして筆を投じたた

め果たせなかった。◆いったん快方に向った病状が、四月十六日、ふたたび悪化し、帝大病院内科部長の坂口博士に東京から往診を仰いだのち、**沼津**の**駿東病院**に四月三十日に入院した。五月二十一日、副病院長立柄俊毅の治療よろしきを得て、退院。国府津館には毎月二、三回、特高が訪ねて来た。彼の日本評論社時代の同僚、松本正雄が「横浜事件」で捕まり、獄中から「先生のことが度々問題になっている」というメモが届けられたこともあった。「非戦論者」としての非国民扱いだったが、彼自身、十八年の段階から、日本に勝つ見込みはなく、デモクラシー論時代以来彼が求めてきた「自由」は、軍の治世を打破することによってしか回復しえず、そのためには敗戦しかないと考え、日本が負けて解放される事態のみを待つ心境＝認識になっていた。◆十月、伊東温泉に行く。

一九四五年

二月六日、高野岩三郎・森戸辰男・大内兵衛が国府津館で会合の後、来訪。◆二月、三宅晴輝が**青山虎之助**を伴って来訪。青山とは初対面。彼らは戦後の出版活動の下準備のために熱海の島中雄作を訪問しようとして、空襲のため国府津で途中下車したものである。◆三月末、伊豆長岡の別荘に住む旧知の**宇垣一成**を訪問し、出馬を勧める。◆五月十五日、沼津の兄を誘い、伊豆修善寺温泉に遊ぶ。六月十二日、長野県の別所温泉を訪ねる。六月二十六日、仕事と入浴のため伊東温泉に行き、佐々木茂索、尾崎士郎を訪ねる。七月十九日、空襲の不安のない土地での安眠を求めて、湯河原の弟宅に一泊。翌日さらに丹沢の奥の温泉宿を探し一泊する。◆七月二十二日、湯河原に行き、菩提寺の福泉寺に**書物**の**疎開**の交渉をし、二十五日、家族総動員でトラックに積み込む。八月八日、再疎開の準備のため青山虎之助を同道して郷里の湯河原に行き、旅館に一泊。◆八月九日、帰宅後間もなく小田原署の特高警部がソ連の動向について情報を求めて来訪。その直後にラジオで**ソ連参戦**のニュースを知る。十一日、読売新聞の伊佐

秀雄から「ソカイノヒツヨウナクナツタ」との電報が届き、戦争終結の近いことを知る。同日夜、青山虎之助来宅、**終戦**決定を報せる。◆敗戦後直ちに青山虎之助の依頼で三宅晴輝とともに新しい総合雑誌の創刊準備を開始。十八日、上京して空襲の焼跡を見た感慨から『**新生**』の誌名を発案。元『日本評論』編集部員の長尾和郎を編集長として、新雑誌の総合的指導に当る。九月十日、内幸町の大阪ビル旧館六〇四号で新生社発足。九月十二日の朝日新聞に「室伏高信編輯」として同誌創刊号近日発売の広告が出る。十月十日、『**新生の書**』二万部を出版。十月十八日、『新生』**創刊号**発売（十一月十日付け発行）。八万部を日本経済新聞社の輪転機で刷って、即日売切れ。十二月号は一躍十五万にして、これも三日間くらいではけたという。室伏は創刊号の巻頭に「**新たなる日のために**」を書き、第二号巻頭にも「**民主主義のために**」を寄せたが、以後、同誌から離れる。翌二十一年の初めに新生社と目と鼻の先の幸ビル三階に**第四書房**を設立して出版に力を入れ始めたためとも、彼の政治志向が青山虎之助の文芸志向と合わなくなったためとも、伝えられている。◆十一月五日、「**民間憲法研究会**」が新生社の別室に設けられる。室伏と岩淵辰雄の発案で、それに馬場恒吾、高野岩三郎が加わって発起人となり、三宅晴輝、森戸辰男、堀真琴、今中次麿、鈴木安蔵らが参加した。資金は新生社から出た。この民間知識人の協力による新憲法草案の起草に、室伏は中心のメンバーの一人として参画、早くから国民主権の立場を打ち出し、天皇について「象徴」の言葉を用いた先駆的論者として同人に記憶されている。十二月二十七日には同研究会の新憲法試案として「**憲法草案要綱**」が発表され、幣原首相に提出された。翌二十一年四月に刊行された『**室伏高信起草　新民主主義**』もこれを踏まえたもので、「天皇は政治上の主体としての地位を保持しない」ことを明確に打ち出している。なお室伏は、この民間憲法研究会を母体に「**民主主義連盟**」

なる政治団体も結成し、事務局を第四書房内に置いて、河上肇や美濃部達吉なども動員したといわれる。◆十一月十三日、森戸辰男、大内兵衛、高野岩三郎、杉森孝次郎、新居格らとともに準備してきた**「日本文化人連盟」**の結成に参加。

一九四六年　一月二十六日、日比谷公園で開催された**野坂参三帰国歓迎国民大会**に、室伏と岩淵は、憲法改正を渋っている幣原内閣にたいして、人民政府樹立をデモンストレートするために積極的に参加することを主張、新生社をあげて協力することになる。室伏は尾崎行雄(代読伊佐秀雄)、徳田球一、加藤勘十、鈴木茂三郎、片山哲、山川均の後を承けて壇上に立ち、天皇を「彼」と呼び、宮城を指さしつつ共和革命を暗示する演説を行なった。これにたいし室伏の戦中の言動を記憶する読者から、新聞の投書欄等で言論人としての変節を指弾される。◆三月五日、「民主主義」と題して新聞に投じた短文で、「ブルジョア民主主義」から共産党にいたるまでの「人民主権」の立場に立つ「民主主義戦線」の統一を呼びかける。

一九四七年　社会党が第一党となったのを機に、鈴木茂三郎・加藤勘十・水谷長三郎とそれぞれ面談、**尾崎行雄**を首相候補として推薦し、尾崎に出馬を求めたが、断られ不成功に終わる。◆六月二十七日、軍国主義者の公職追放を指示する占領軍指令につき、言論報道・言論統制関係の諸団体に対する適用範囲を政府が発表。主要役員の範囲・該当団体名が発表され、該当者は反証のない限り言論文筆活動を大幅に制限されることになる。◆七月二十五日、**山中湖湖畔**に購入した別荘に隠棲する。

一九四八年　一月三十日および五月十日の決定により、公職追放令G項の該当者に仮指定される。指定の理由は、①戦中に『日本評論』の「主幹」の地位にあったこと、②『新体制講話』『一億人の新体制』『日本預言』『時局の書』の四つの著作の内容、の2点であった。五月二十二日、公職追放令G項該当の文筆家の一

人として、新聞紙上に氏名を公表される。

一九四九年　この年から、山中湖の家を「放追荘」と名付け、「放追荘主人」と自称。

一九五二年　四月二十八日、講和条約発効により一九四八年以来の公職**追放**が**解除**される。◆七月末、山中湖畔を引き払い、**相模湖畔**の青田入江に面した丘の上の山荘（稲川荘）に移転する。

一九五九年　一月二十一日、「葦」の筆名で、**「読書手帳」**と題する読売新聞夕刊の書評コラムを執筆し始める。

一九六〇年　七月一日、「湖」の筆名で、サンケイ新聞朝刊の時評コラム**「声なき声」**を毎日執筆し始める。

一九六一年　三月、**「焦点の人物を斬る」**を『旬刊全貌』に連載し始める。荒木万壽夫、嶋中鵬二、中山伊知郎らを取り上げ、数十回連載。◆九月、**「あいつと私」**を『旬刊全貌』に連載開始。第一回の大隈重信以下、板垣退助、後藤新平、徳川家達、近衛文麿らを回想する。

一九六二年　九月、**「想い出す先覚者たち」**として、尾崎行雄以下を『全貌』に連載。

一九六三年　五月、小説形式の自伝**「無冠の帝王」**を『経済評論』に連載開始。◆六月、**「山の小屋から」**と題する随筆を『全貌』に連載開始。十一月二十八日、評論集『声なき声』の出版記念会がホテル・オークラで催される。

一九六五年　一月十四日、火事で家を全焼し、全蔵書を失う。◆九月、**「続山の小屋から」**を『全貌』に連載開始。この年、サンケイ新聞のコラム「声なき声」の執筆を退く。

一九六六年　三月十日、かねて雑誌**『新生』**の**復刊**を青山虎之助に助言していたが、週刊誌タイプの月刊誌として出ることになり、四月十日号から七月十日号まで自伝的回想を連載する。

一九六七年　八月三十日、**「相模湖日記」**を読売新聞夕刊に連載開始。

一九七〇年　六月二十八日、神奈川県相模湖町富士見台で死去。

215　**戦争私書**　―彼らは何をしていたか―
昭和41・8・10　全貌社
酩酊した百姓　支那とわたし　近衛首相を囲んで　戦争中に躍った人々　汪兆銘との共鳴　敵の包囲の中　戦時下のジャーナリズム　与瀬の幽囚　崩壊の七日間　敗戦直後　ほか

216　**思想に強くなる本**　―読みはじめたら時計が止まる―
昭和42・9・15　全貌社
考える葦　わたしの思想遍歴　社会主義について　共産主義について

217　**どんな日本をつくろうとするのか　池田大作**
昭和42・11・10　全貌社

218　**人の一生**　昭和43・8・15　青友社
［*185*の改訂増補版］

219　**戦争私書**（中公文庫）　平成2・7・10　中央公論社
［*215*の文庫本化］

人民資本主義　浮動する票　マージナル・ディファレンシエーション　ボスとスター　ソ連の「雪どけ」　新しい自由へ　ほか

207　**テレビと正力**　昭和33・3・5　大日本雄弁会講談社

第一部　テレビはどうして生れたか　第二部　テレビと文化

208　**野球と正力**　昭和33・5・7　大日本雄弁会講談社

アメリカ野球団を招く　巨人軍・その成立とキャンペーン　正力コミッショナー　二大リーグの対抗　混乱からフェアー・プレーへ　私の見た正力松太郎　ほか

209　**それを自分でやり給え**―アメリカに追いつきアメリカを追いこす―　昭和33・10・15　池田書店

海の泡の中から生まれでた日本　パンの日本から菓子の日本へ　マッスの日本　保守か革新か　日本の将来　機械の王国　それを自分でやりたまえ　日本のメーン・ストリート

210　**マッス**（大衆）　昭和33・11・20　全貌社
［*206*の改訂増補版］

私は労働者ではない　私は商品である　新しい人間のタイプ　マッスとボス　人民資本主義「ジョニーはなぜ読めないか」　人間のフィード・バック

211　**青年期**　―花咲こうとする渇望―
［*193*の改版］　昭和34・6・1　全貌社

212　**これが人間である**　昭和35・10・7　宮坂出版社

自分を問う　人間とは何か　サルと人間　人間の脳　習うことと考えること「こうして人間は毎日賢くなる」　いかに生きるか　天才への道　ほか

213　**声なき声**　―現代文明批評―　昭和38・11・25　全貌社
［サンケイ新聞連載コラム150編　水野成夫・序］

静かな革命　フルシチョフの顔　ゲイッケルの死　社会主義の近代化　進歩的文化人　国会と知性　母親大会　ほか

214　**青年の書**　［*197*の改版］　昭和41・7・12　新生新社

土井虎賀壽、高橋誠一郎、天野貞祐、高桑純夫、宮本富士雄、宮城音弥、長谷川鉱平、佐藤信衛、小林珍雄、柳田謙十郎、中村元、森宏一、島影盟、帆足理一郎、岡本重雄、白井浩平、鈴木二郎]

196 小説　葦　昭和29・11・5　綜合日本社
[自伝小説*149*・*151*に続く**第三部**]
第一部　関東大震災　第二部　孤独なジャアナリスト

197 **青年の書**　[第32版]　昭和29・12・1　綜合日本社
[*165*～*167*、*172*、*174*の合冊]

198 **生きるとは**　昭和30・1・5　綜合日本社

199 **シンセシス**―青い麦　それにも明日はある―
[*192*の改題再版]　昭和30・1・31　綜合日本社

200 **美しい革命**　―雨を予告する一羽の鳥―
[*194*の改題再版]　昭和30・3・31　綜合日本社

201 **孤独な人々**　―淋しいジァナリスト―
[*196*と同内容の改題版]　昭和30・6・10　綜合日本社

202 **人間第一章**　昭和30・7・5　綜合日本新社

203 **相模湖日記**　昭和30・9・30　綜合日本社　*

204 **親と子** ―湯ヵ原物語―　昭和30・11・30　綜合日本社
[自伝小説*149*の書き直し版]

205 **第三の女性**　昭和31・4・28　経済往来社
イトランとプロヌバ蛾　種のヴァイオリン　記号から象徴へ　遊びから芸術へ　象徴としての処女　恋愛学入門　女のリアリズム　妻という自由職業　妻から母へ　危険な年令　そして彼女はどこへ　ほか

206 **現代人**　―第二の革命は始まっている―
昭和32・4・5　朋文社
マス（大衆）とは何か　リースマンの三つの型　孤独な群衆「私は中流である」　工場は労働者を駆逐する　財産から職業へ　教育の世紀　マス（大衆）とボス（親方）　組合とボス

青年観　男と女　考える葦　労働と人生　社会と個人　生活の幾何学的中心　幸福とは何か　青年と老年　ほか

186　**新しい日本に寄す**［*183*の改題版］昭和28・3・30　綜合日本社

187　**教養事典**［編］―古今東西の聖賢―昭和28・6・15　綜合日本社

［教養・人生・死生・性と愛・家族・世の中・道徳・知恵・幸福等についての、古今東西の聖賢の箴言集］

188　**いかに生きる**　―受精卵から老年迄―

［*185*の改題版］　昭和28・6・30　綜合日本社

189　**汀**（なぎさ）室伏高信随筆集1　昭和28・9・25　綜合日本社

［昭和19〜20の日記から　*175*・*177*の再録を含む］

190　**頭の時代**　―マルクス主義から知能主義へ―

昭和28・11・10　綜合日本社

新しい時代とは何か　静かな革命　自由主義と社会主義の交流　他人社会(ゲゼルシヤフト)　第五階級　現代の支配者は誰か　知能人とは何か　公私両顧と合作社　頭の時代　ほか

191　**第二青年の書**　―花咲こうとする渇望―

昭和29・1・5　綜合日本社

花咲こうとする渇望　より高くとぶために　新しい人生観のもとに　ほか

192　**20世紀の正午**　―現代を問う―　（知能主義キャンペーンⅠ）

昭和29・5・15　綜合日本社

日本に寄す　文明を問う　現代を問う　マルクスから百年　現代のバックボオン　ノイロンの時代

193　**青年期**［*191*の改題版］　昭和29・6・1　綜合日本社

194　**未来**　―美しい革命―　（知能主義キャンペーンⅡ）

昭和29・7・1　綜合日本社

未来　予言　戦争と平和　アメリカの資本主義とソヴエトの社会主義　大衆とエリイト　思想の将来　美しい革命

195　**青年夏期大学**―シンセチック―　昭和29・8・1　綜合日本社

［編　巻頭に「読書と教養」、巻尾に「青年はいかに生くべきか」、他に「天才観」を執筆　他の寄稿者は、武者小路実篤、

174 **青年の書** —第六部　青年と生活—
昭和23・8・25　第四書房

175 **一日一日**　昭和22・9・20　第四書房
[昭和20・1・1～8・15の日記]

176 **人間の思想**　昭和24　*

177 **人生逍遙** —追放記—　昭和25・11・10　第四書房
高原日記[昭和22～25 追放後、山中湖畔に隠棲時の日記より]
窓のない年 [昭和18・6～19・3の日記]
国府津日記 [昭和19・4～5　肝臓病の闘病と入院の記録]

178 **追放記** —人生逍遙—　昭和25・11・10　青年社
[内容は*177*とまったく同一]

179 **人生Ⅰ**　昭和26・6・15　青年社

180 **人生死なず** —人生Ⅱ—　昭和26・9・30　青年社

181 **人間宣言**—社会主義に代るもの—昭和26・12・15　青年社
私と社会主義　文明の新段階に立つて　現代と共産主義　階級思想の崩壊　次に来たるもの　人間性の分析　現代ヒユウマニズム　ソヴエトの現実　ほか

182 **日本の将来**　昭和27・6・1　綜合日本社
[雑誌『日本』臨時増刊　独立記念　室伏高信単独執筆]
悲観か楽観か　戦争か平和か　ソヴエトかアメリカか　戦争と日本　日本について　日本の計画　科学立国論　日本の指標

183 **日本の出路**　昭和27・8・5　綜合日本社
[*182*に、「憲法の改正」「現代知識人の危機」を加う]

184 **日本人の由来**—日本文明史Ⅱ—　昭和27・10・25　綜合日本社
日本人の先祖は誰か　エゾ（蝦夷）とアシハセ（粛慎）　クマヒト（肥人）とハヤト（隼人）　ワ（倭人）とは何か　メリジョナル（南方人）と日本　日本石器人の輪郭　ほか

185 **人の一生** —受精卵から老年まで—昭和27・12・15　綜合日本社
人の一生　受精卵から誕生へ　夢幻の年令　親と子　青年と

自由主義か社会主義か

163　室伏高信起草　**新民主主義**　昭和21・4・10　第四書房
新民主主義について―新民主主義連盟宣言草案―
綱領　綱領略解

164　**孔子**［*155*の再刊］　昭和21・8・1　潮文閣

165　**青年の書―第一部**　青年と人生―昭和21・8・20　第四書房
［*100*の分冊再刊］

166　**青年の書―第三部**　生と死・**第四部**　人生の航路―
昭和21・8・20　第四書房
生と死　人生の航路　民主主義と青年［新稿］

167　**青年の書―第二部**　恋愛と結婚―昭和21・9・15　第四書房
［100の分冊再刊］

168　**日本の天皇**　昭和21・10・1　新生社
造られた神話　太陽の子　天皇の誕生　鉄と血と「しらす」
神武天皇の伝説　僭主としての天皇　氏族と国家と天皇　天皇制の基礎と天皇の本質

169　**民主主義大講座**　全六巻　昭和21～22　日本正学館
［今中次麿・加田哲二・堀眞琴との共同編輯で、第一巻に「民主主義の原理」、第三巻に「無政府主義」、第四巻に「東洋の民主主義」、第五巻に「民主主義と日本」を執筆］

170　**自由**（新自由叢書２）　昭和21　交通協力会
鳥の生活　氏の上と氏人　国家　覚醒　近代的自由　人間の目ざめ　自由主義と個人主義　自由と平等　自由主義と社会主義　自由のために

171　**女性の書**　―**第一部**　性・愛・結婚―
［*17*の分冊再刊］　昭和21・12・10　第四書房　＊

172　**青年と思想**―青年の書**第五部**―　昭和22・4・30　第四書房
民主主義の問題　自由主義とは何か　自由主義か社会主義か
ほか

173　**妻・母・社会**　―女性の書　**第二部**―
昭和22・8・1　第四書房

考へる葦　人生と死　世代の更新　血と土　若返りの理論　戦争と青年　勤労の理念　農民の思想　科学と技術　日本的世界観へ　大東亜戦争と青年　ほか

154　**第二青年の書**　［*153*と同内容］昭和17・4・25　育生社弘道閣

155　**孔子　人とその哲学**　昭和17・8・10　潮文閣

若き日の夢　教育家としての孔子　王道　政治家としての孔子　晩年の孔子　仁の思想　完成の思想　目的の国　ほか

156　**大東亜青年論**［編著］　昭和17・8・20　聖紀書房

［秋山謙藏、竪山利忠、大島豊、佐藤信衞、菅井準一、加田哲二、下田博、矢田英一との共著　室伏は「青年と政治」、「現代青年論」を執筆］

157　**東洋政治思想**（東洋思想叢書6）昭和17・11・20　日本評論社

先秦支那社会　天の思想　王道の思想　辞讓と易姓　王道下の臣と民　大同の思想　農本思想　村治派の思想　ほか

158　**山村記**　昭和18・8・1　元元書房

［*86*・*89*の系統の随筆集］

159　**東洋の書**　昭和18・12・5　元元書房

東洋の問題　東西の交渉　日本と西洋の交渉　東洋は一つ　アジアの覚醒と東洋再評価　東洋文化と西洋文化

160　**新生の書**　昭和20・10・10　新生社

［全64頁のパンフレット］

八・一五の出来事について　日本は再建されうるか　戦争の性格と責任　この妖怪を去らしめよ　新生

161　**民主主義と日本**　昭和20・11・20　新生社

［全64頁のパンフレット］

わが国と民主主義　わが国体と民主主義　民主主義とは何か（其の1・其の2）

162　**自由主義か社会主義か**　昭和21・1・15　新生社

［全64頁のパンフレット］

民主主義の新段階　自由主義とは何か　社会主義とは何か

先づ旧体制について　自由主義の功罪　社会主義の問題　全体国家とは何か　全体的日本主義　協同体について　皇道国家の実現　大政翼賛とは何か　上意下達・下意上達　公益と私益　隣組　肇国の精神と世界観　大東亜新秩序と世界新秩序　高度国防国家の建設　ほか

146　**一億人の新体制**　昭和16・1・10　青年書房

日本主義とは何か　八紘為宇とは何か　大化改新と明治維新　全体主義の日本化と日本の全体主義化　新しい自由へ　仕事と労働と職分　協同体の思想へ　家庭にかへれ　民族と国家　国体の明徴　指導者の問題　経済の新体制―公の経済へ　営利から職分へ　農村の問題―血と土地　新世界観へ　ほか

147　**室伏高信選集**（精神文化全集16）昭和16・3・13　潮文閣

148　**新体制と思想問題**　昭和16・4・15　青年書房

自由主義の問題　全体主義と社会主義とはどこが違ふか　革新と社会主義　財産奉還の問題　いかに社会主義を克服するか　家族制度の問題　憲法と新体制　翼賛会のゆくべき道　知識社会の動員　思想の展望　ほか

149　小説　**葦**　昭和16・8・20　育生社弘道閣

［自伝小説　生い立ちから学生時代、新聞記者時代まで］

150　**国聖日蓮**　昭和16・12・1　潮文閣

日蓮の生涯と事業　預言者としての日蓮　法華経の使徒としての日蓮　日本人としての日蓮　立正安国論　ほか

151　小説　**椰子**　昭和17・1・20　育生社弘道閣

［*149*の続きの自伝小説　社会思想評論家としての論壇へのデビューと欧米外遊記］

152　**日本の理想**　昭和17・4・18　元元書房

大東亜戦争を論ず　大東亜の再編成　大東亜文化とは何か　国内体制の再編成　思想の再建　支那事変をどうする　支那の有識者に訴ふ　日本の歴史に聴く

153　**新青年の書**　昭和17・4・25　育生社弘道閣

題　文化の合流　中国に寄す　日本に警告す　ほか　[付録]
近衛声明　汪兆銘声明　国民党六全大会宣言綱領　ほか

139　**人生・世相・時局**（黒白叢書7）昭和15・2・15　砂子屋書房
わが父・その死　独学青年に与ふ　官僚独占時代　サラリイマン中心説　現代大学教授論　生命保険国営論　矢野恒太氏に答ふ　全体主義外交論　アメリカへの関心　全体主義外交論　和平を論じて日本及び中国に警告す　ほか

140　**現代学生は何を為すべきか**　昭和15・2・20　四谷書房
[編著　他の筆者は、茅野蕭々・阿部知二・舟木重信・本領信治郎・矢部貞治・杉森孝次郎・菅円吉・本多顕彰・林髞・佐藤俊子・加田哲二・杉山平助・由良哲二・今中次麿]

141　**日本創世記**（日本文化史第一巻）昭和15・3・15　モナス
あめつちのはじめ　土の歴史　日本列島　風土　人類の渡来　北種の南下　原日本人　日本石器人の生活　弥生文化の本質　農業のはじまり　青銅文明と石器時代の崩壊　高天原と日本　スサノヲノ命と大国主神　出雲の経営　筑紫の文化と地位　天孫の降臨と八紘一宇　ほか

142　**我が闘争**（ヒットラア原著の抄訳）昭和15・6・15　第一書房
[実際の訳者は春山行夫だが「室伏高信」名儀で刊行]

143　**日本預言**　昭和15・7・13　三省堂
ボタンを押せ　民族交替の法則　太平洋上に立つ　高天原の理想　民族闘争と種族闘争　アジア的新秩序　太平洋の新秩序　戦闘の世紀　新体制の輪郭　欧州戦と日本　ほか
[付録]新党問題と知識社会

144　**太平洋の夢**　昭和15・9・18　青年書房
「仏印」とその夢の跡　安南の今昔　起ちあがる「象の王国」　シンガポオルに立つて　ビルマとその再建　熱帯の女王「蘭印」　ジヤガタラの国と日本　秀吉の雄図を追ふて　南洋の新スヰス　豪州への旅　開かれた太平洋　日本の世紀　ほか

145　**新体制講話**　昭和15・10・16　青年書房

た魂　世紀の指標　世紀の輪郭

131　**東亜の世紀に序す**　—漢口陥落の後に—
[時局評論集]　昭和13・11・8　青年書房
支那をどうする　これからの日本　精神総動員の再出発　統制と指導　官僚と革新　世界内日本主義へ　自由の再検討　既成政党の没落と新政党の問題　インテリの再建　知的動員の問題　大学の革新　日本・東洋・世界　ほか

132　**光は東より**（青年書房文庫１）　昭和13・　青年書房　*
［*30*の改版］

133　**青年の書**　（青年書房文庫２）　昭和13・12・15　青年書房
［*100*の改版］

134　**時局の書**　昭和13・　青年書房　*
時局に直面して　二・二六事件以後　近衛公に与ふる書　単一政党の方へ　青年日本運動ために　事変の第二段階に当りて　大英帝国打倒論　胡適之に与ふる書　ほか

135　**日本・今日・明日**［評論集］　昭和14・4・25　モナス
新東亜・其の原理　第三次近衛声明と其の解決　汪兆銘に与ふる書　南方への視野　平沼批判　闇相場の社会学　官僚政治から国民政治へ　自由主義の転落　日本の再組織を語る（有馬頼寧との対話）ほか

136　**時局打開論**［評論集］　昭和14・8・15　青年書房
事変の解決を論ず　中国のインテリに与ふ　蔣介石に与ふる書　汪兆銘と新支那　ヨオロッパの危機　ナチズムの転換　事変二周年　打倒大英帝国　ほか

137　**戦後の思想問題**［共著］　昭和14・9・15　第一書房
［巻頭に「戦後の思想」を執筆。他の筆者は、安部磯雄・高木友三郎・斎藤晌・阿部知二・中川善之助・高神覚昇］

138　**和平を語る**　—汪兆銘訪問記—　昭和14・10・18　青年書房
陶希聖と語る　汪兆銘会見記　汪運動を語る　重慶の現状を説いて蔣政権の運命を予言す　和平への道　日支合作の諸問

121 **大英帝国主義批判** 昭和12・12・25 千倉書房
先づ平和のために そして解放のために しかし発展のために 印度と大英帝国 支那と大英帝国 亜細亜を喰ふものは誰か 世界史の回転 生長か老衰か 日英戦ふか 英国の東南洋侵略史 大英帝国の現勢 ほか

122 **室伏高信全集 第十四巻** 昭和13・1・20 青年書房
(続青年の書・新英雄伝) 第10回配本

123 **室伏高信全集 第十二巻** 昭和13・2・20 青年書房
(三沢村日記・山の小屋から) 第11回配本

124 **室伏高信全集 第九巻** 昭和13・3・20 青年書房
(荘子・日蓮) 第12回配本

125 **革新論** 昭和13・4・3 青年書房
認識ために 時の理論 「黎明と日」 言葉と時代 革新とは何か 自由主義について 社会主義について ファシズムについて 全体主義の理論 革新の革新 思想の昂揚 日本主義について 斯くあるべき日本 ほか

126 **室伏高信全集 第四巻** 昭和13・4・20 青年書房
(マルクス征服 [=*39*]**・マルクスを乗越えて)** 第13回配本

127 **室伏高信全集 第六巻** 昭和13・5・20 青年書房
(東方主義へ・中間階級の社会学) 第14回配本

128 **学生の書** 昭和13・5・20 モナス
私の学生時代 今日の学生 驢馬か人間か 学校の価値 「学問のすゝめ」 何を読むべき 学生と恋愛 大学と思想教育の革新 [付録]大学無用論 ほか

129 **室伏高信全集 第五巻** 昭和13・6・20 青年書房
(人間記・文明学序説) 第15回配本

130 **世紀の論理** [全文、問答体] 昭和13・8・18 三笠書房
世紀入門 世紀の哲学 世紀の人間 知性の再建 土地と血の規範 新しい自由へ ファシズムの擁護 一つの熱病 国家の崇拝 指導者政治 経済の転落 所有から放棄へ 開い

107　**室伏高信全集　第十五巻**　　昭和12・7・15　青年書房
　(南進論・戦争論 [=*103*]**)**　　第4回配本

108　**青年日本の指標**　　昭和12・7・15　モナス
　[読売新聞コラム「一日一題」から集めたもの]

109　**ソ聯の知識**(時局知識I)　　昭和12・8・2　青年書房
　[清沢洌との共同編輯]

110　**支那の知識**(時局知識II)　　昭和12・8・12　青年書房
　[清沢洌との共同編輯]

111　**室伏高信全集　第七巻**　　昭和12・8・20　青年書房
　(支那論 [=*65*]**・支那遊記)**　　第5回配本

112　**謎の国・支那の全貌**(支那史の表裏)
　　昭和12・8・20　大東出版社
　[実際の執筆は沢田某だが室伏高信著として刊行]

113　**戦争の知識**(時局知識III)　　昭和12・9・12　青年書房　　*
　[清沢洌との共同編輯　昭和12・9・9発売禁止]

114　**室伏高信全集　第三巻**　　昭和12・9・20　青年書房
　(日本論・光は東より)　　第6回配本

115　**戦争経済の知識**(時局知識IV)　　昭和12・9・28　青年書房
　[清沢洌との共同編輯]

116　**室伏高信全集　第二巻**　　昭和12・10・20　青年書房
　(土に還る・農民の書 [=*80*]**)**　　第7回配本

117　**戦争と青年**　　昭和12・10・20　日本評論社
　青年の立場　事変と認識　クラウゼヴヰッツ　孫子　戦争は罪悪か　戦争の進化と戦争目的の進化　何のために戦ふ　日本の敵は誰か　日本よ健康であれ　ほか

118　**事変の知識　―ソ・支エンサイクロペヂアー**(時局知識V)
　[清沢洌との共同編輯]　　昭和12・10・20　青年書房

119　**室伏高信全集　第十一巻**　　昭和12・11・20　青年書房
　(社会主義批判・共産主義批判 [=*21*]**)**　　第8回配本

120　**室伏高信全集　第十巻**　　昭和12・12・20　青年書房
　(結婚の書 [=*31*]**・女性の書** [=*17*]**・現代文明講話)**　　第9回配本

澤保恵、吉江喬松、石川欣一、坪内逍遥、福士幸次郎、市河三禄、米川正夫、冠松次郎、神近市子の諸篇とともに、室伏の「近衛公訪問記」、「時髦姑娘」を収録]

100 **青年の書** 昭和11・4・20 モナス

あれかこれか　第二の誕生　自由のために　青年期の危機　読書　知識と智慧　反省　生命の秘密　性の目ざめ　プラトニック・ラブ　生と死　人生の目的　職業　労働　いかに世に処する　若き女性へ　ほか

101 **南進論** 昭和11・7・20 日本評論社

日本の世紀へ　内か外か　日本の敵は誰か　アメリカはどうか　ロシヤへの一瞥　陸軍か海軍か　大陸政策か南方政策か　支那をどうする　侵略か解放か　英国の再認識　日本海軍のために　処女地南洋　南へ南へ　王者の道　ほか

102 **続青年の書** 昭和11・12・15 モナス

青年とは何か　この時代を見よ　ヒユウマニズム　人間は何処へ　現代の情況　歴史の理論　虚無主義　「進歩か死か」　機械と人間　近代主義の崩壊　マルクス主義　自由主義　ファシズム　青年の指標　ほか

［付録］独逸の青年運動　イタリアの青年運動　ソヴエートの青年運動

103 **戦争と平和** 昭和12・1・20 千倉書房

戦争の理論　文明と戦争　戦争と経済　戦争と帝国主義　非戦論の価値　軍拡狂時代　二時間の戦争　西洋と東洋　日ソ戦ふか　日本は何を為すべき—『戦争か餓死か』　ほか

104 **室伏高信全集　第十三巻** 昭和12・4・20 青年書房
（青年の書・現代の書［＝*88*］） 第1回配本

105 **室伏高信全集　第一巻** 昭和12・5・15 青年書房
（文明の没落・第二文明の没落） 第2回配本

106 **室伏高信全集　第八巻** 昭和12・6・20 青年書房
（論語・孔子） 第3回配本

文明学序説　この文明はどうか　マルクス、テクノクラシイ及び文明学　文明学の建設

91　**日本の次の一歩**　昭和9・7・10　大東出版社

危機と日本精神　排米か排英か　王道と皇道　支那をどうする　印度をどうする　亜細亜の世紀　日本の次の一歩　人口問題と食糧問題　ほか

［付録］汪兆銘に与ふる書　広田外相に与ふる書　排英親美論（支那訳）

92　**論語**［現代語訳と注釈］　昭和9・9・15　日本評論社

93　**立正安国論**　―日蓮の宗教―　昭和9・12・15　大東出版社
（仏教聖典を語る叢書15）

この時代を見よ　行動の人日蓮　預言者日蓮　法華経の日蓮　日本人日蓮　立正安国論

94　**孔子**［評伝］　昭和9・12・20　日本評論社

95　**荘子**（漢籍を語る叢書7）　昭和10・4・5　大東出版社
［現代語訳と注釈］

96　**山の小屋から**　［*89*の続］　昭和10・4・15　日本評論社

ひとり思ふ　病間録　虚無内存在　日蓮の片鱗　ほか

97　**支那遊記**　明治10・9・18　日本評論社

長城丸　梅津司令官　天津市長程克　王克敏君との対話　胡適之　陶希聖　藍衣社の正体　「排日巨頭」陳立夫　「服務区」運動　「一十宣言」　支那は敵か味方か　中国本位的文化建設宣言　ほか

98　**山荘三年**　昭和10・12・30　モナス
［*86*・*89*・*96*からの抄録に、11編を追加］

行者か預言者か　山の春　土田杏村のこと　身延の日蓮　ニイチエの復興　雑誌の編輯　宇宙人と文明人　詩人と哲人　日本不在記　ほか

99　**現代随想全集　第六巻**　昭和11・3・25　金星堂

［成澤玲川、鍋井克之、木村荘八、小島烏水、兼常清佐、柳

84 **マハトマ・ガンヂの思想と運動**　昭和8・2　東洋協会　*

85 **マルクスを乗り越えて**　昭和8・6・20　千倉書房

何が現代の指導原理か　種族の意志が呼びかける　個人的・社会的・宇宙的　新日本の理想　日本主義のために　文明は昇り坂に変つているか　世界経済の転向と日本の新経済政策　機械の反乱　宗教の時代が来る　社会主義と宗教　国民的宗教の方へ　文明批評家としてのガンヂ　ほか

［付録］非常時日本に誰がゐる　農村報告書

86 **三沢村日記**　昭和8・7・5　第一書房

［随筆集　半ば以上は、元『中外日報』掲載］

土に還る　堺利彦・高畠素之・森恪　花井卓蔵　ガンヂ協会　アドルフ・ヒトラア　敗北的「室伏イズム」　村治派　山本実彦　わが父・わが兄弟　吉野作造　「二六」時代　武者小路実篤・加藤武雄・加藤一夫　伊之蔵　いかに生くべきか　ほか

87 **現代文明講話**　昭和8・9・24　千倉書房

「フランケンスタイン」　世界の二重化と文明学　主人はどこに　現代文明について　資本主義と機械文明　機械文明から技術文明へ　文明の現段階　ほか

88 **危機の宣言**　昭和8・11・20　学芸社

—其の後に来たるもの—

危機時代　危機とは何か　歴史哲学の革命　唯物論の超克　科学と哲学と宗教　科学の危機　其の後に来たるもの　人よ何処へ

89 **人間記**［随筆集　*86*の続］　昭和9・2・10　第一書房

紀子のお産　時子　悲劇の誕生　民主主義者　ジャアナリズムの波　彼は何故に社会主義者となりえなかつたか　「文明の没落」　土田杏村　文明批評　長谷川如是閑のこと　「三沢村日記」に登場する人の会　ほか

90 **文明学序説**（建設文庫）　昭和9・6・20　建設社

政治の復興　共産党とヒットラア党　反動と革命、認識と実践　陰謀か大衆か　軍閥か兵卒か　帝国主義の問題　愛国とは何か　国民主義と国際主義　五ヵ年計画の問題　新階級観　金融資本の問題　日本はフアッショ化するか　国民的な大運動を起せ　マルクス主義の第三期　唯物的社会主義の克服　ほか

76 **ムッソリニとムッソリニ運動**　昭和7・3・3　平凡社
［グラフ］

77 **第二文明の没落**　昭和7・4・28　一元社
文明とは何か　文明の秘密　アメリカ主義とマルクス主義　機械の帝国　メカニズム　第二文明の登場　ソヴェイトからフアッショへ　機械文明は何処へ行く　ほか

78 **中間階級の社会学**　昭和7・6・20　日本評論社
タンタロス　中間階級は転落するか　プロレタリア時代は来るか　「白襟労働者」の時代　マルクス階級理論の転落　搾取される者は誰か　金融資本と中間階級　ヒットラアと中間階級　中間階級イデオロギイへ

79 **現代文明サイクロペヂア**　昭和7・6・25　平凡社
［事典　編］

80 **農民は起ちあがる**　昭和7・8・30　平凡社
都市と農村　機械文明と農民経済　マルクス農業理論　大経営・機械化・コルホオズ　農民的世界を目ざして　ほか

81 **マルクスかファッショか**　昭和7・9・20　夜明け社
（室伏高信パンフレット運動第一号）
［*75*の改訂普及版］

82 **戦争か平和か**　昭和7・10・28　夜明け社
（室伏高信パンフレット運動第二号）
時局を前にして　戦争は起るか　日米戦はんか　非戦論の価値　リットン報告書　聯盟か脱退か　日本のとるべき態度

83 **日本ファッショを批判する**　昭和7・12　夜明け社　＊
（室伏高信パンフレット運動第三号）

[「国民新聞」夕刊連載の同名コラムの集成とエッセイズ]
銀座文明　飛行機文明　都会化の時代　家庭の没落　社会民主主義とは何か　汗ばむ黒襯衣　デカダン独裁と戦闘的独裁　若槻礼次郎論　現代センセエショナリズム　大学転落説と知識階級消滅説　評論の評論　ロシアは何故復興するか　アメリカから支那へ　印度の将来　三十年後の日本　ほか

67　**宗教はアヘンであるか**　昭和6・7・3　夜明け社
(室伏高信宗教パンフレット1)
打倒宗教か宗教復興か　宗教批判の批判　宗教は階級的であるか　ほか

68　**プロレタリアとしてのイエス・キリスト**　昭和6・8・7　夜明け社
(室伏高信宗教パンフレット2)
価値の総改変　神の王国とこの世の王国　「地に火を点ぜん」　時代の表現者としてのイエス　イエスの精神の発展　ほか

69　**仏陀は生きている**　昭和6・　夜明け社　*
(室伏高信宗教パンフレット3)

70　**マハトマ・ガンヂ**　夜明け社　*
(室伏高信宗教パンフレット　)

71　**満蒙論**[昭和6・11・17発禁]　昭和6・11　夜明け社　*

72　**ファッショとは何か**　昭和6・12・9　夜明け社
(新日本パンフレット1)
どこへ行く　ファッショ化の世界　ヒットラアと国民社会主義　ムッソリニとファッショ　ファッショとは何か

73　**ファッショ治下の伊太利**　昭和6・12・29　平凡社
ファシスト国家とは何か　ファシスト党　ファッショとサンヂカリズム　農業の問題　ファッショの人口政策　オペラ・ナチョナアレ　ドポラボロ運動　伊太利の文化政策　伊太利の公共事業　ほか

74　**ヒットラアとヒットラア運動**　昭和7・1・20　平凡社
[グラフ]

75　**フアッシヨかマルクスか**　昭和7・2・6　一元社

52　**全日本に呼びかける**　昭和5・2・5　田舎社
[全文問答体]
政治へ！政治へ！　何人の、何人のための、何人によつての、日本であるか　希望乎絶望乎！　なんぢの認識を戦ひとれ　どうしたらよいのか？　全日本に呼びかける

53　**全日本に呼びかける**［*52*の改版］昭和5・7・5　忠誠堂

54　**社会思想批判**［*43*の改版］　昭和5・7・5　忠誠堂

55　**文明の没落・土に還る**［*40*の改版］昭和5・7・5　忠誠堂

56　**日本論**［*24*の改版］　昭和5・7・5　忠誠堂

57　**東方人の理想**［*44*の改版］　昭和5・7・5　忠誠堂

58　**共産主義批評・無政府主義研究**　昭和5・7・5　忠誠堂
[*21*と*51*の合冊・改版]

59　**街頭の社会学**［*41*の改版］　昭和5・7・5　忠誠堂

60　**反乱の社会学**［*49*の改版］　昭和5・7・5　忠誠堂

61　**クロポトキン　田園・工場・仕事場**　昭和5・7・5　忠誠堂
[翻訳*45*の改版]

62　**無政府主義の話**（十銭文庫）　昭和5・11・10　誠文堂
[*51*の一部を割愛しての再版]

63　**共産主義の話**（十銭文庫）　昭和5・11・15　誠文堂
[*21*の「共産主義の理論」に、付録として同書の「第三インタナショナル」と「第四インタナショナル」を加えての再版]

64　**綜合アメリカ論**　昭和6・2・20　万里閣
―アメリカの精神分析―
[ヘルマン・カイザーリング著　室伏高信訳　但、実際の訳者は瑞祥専一]

65　**支那は起ちあがる**―室伏高信游華記―
昭和6・6・11　新潮社
時髦姑娘　汪精衛を語る　村治派の思想　三民主義と共産主義　支那・アメリカ・ロシア及び日本　日本の立場を論ず――一つの日支聯邦論　ほか

66　**銀座風景**　―高度文明解剖―　昭和6・6・22　夜明け社

及農民運動　アメリカ主義　アメリカ文明　アメリカを代表する人々　アメリカ、ヨオロツパ、日本及び将来

43 **社会思想批判**（室伏高信集）　昭和4・4　田舎社
［*8*と*22*の合冊］

44 **東方人の理想**　昭和4・5・10　田舎社
［*30*の書替え版］
東方人の宣言　光は東より　東洋の政治思想　東洋の社会・経済思想　東方人の理想

45 **クロポトキン　田園・工場・仕事場**　昭和4・6・10　田舎社
［翻訳　*34*の「田園工場及仕事場」の改版］

46 **日本はどうなる**　昭和4・7・10　先進社
日本はどうなる　社会主義への希望　太平洋時代が来た！人口問題は何を語る　日本は何によつて立つ　支那の目ざめと日本　共産主義、アメリカ主義、及び日本主義　ほか

47 **共産主義と無政府主義**　昭和4・8・13　田舎社
（室伏高信集）
［*21*と、*38*の「無政府主義の批判(1) (2)」の、合冊］

48 **自由人の社会学**　昭和4・10・18　批評社
［*18*に、*23*からの「民主主義の理想」、「民衆戦ふ可き乎」、「フセン・フアンに与ふ」の3編を追加］

49 **反乱の社会学**［随想集］　昭和4・11・15　田舎社
日本への反乱　都会文明への反乱　反乱としてのファシイズム　大学無用論　賄賂の社会学　「パパ」の反乱　没落期の女性を賛美す　大山郁夫君　土田杏村君　中間的イデオロギステンの解剖　社会主義者としての老子　ほか

50 **新英雄伝**（上巻）　昭和4・12・11　先進社
英雄とは何か　ナザレのイエス　人間孔子　大思想家としての老子　沙門仏陀

51 **無政府主義研究**　昭和4・12・1　田舎社
［*38*の「無政府主義の批判(1) (2)」の再刊］

35　**クロポトキン　相互扶助論**（社会思想全集36）
［翻訳］　昭和3・4・25　平凡社

36　**クロポトキン　無政府主義者の道徳**（社会思想全集36）
昭和3・9・16　平凡社
［翻訳　平林初之輔訳「倫理学」、麻生義訳「サンディカリズム論」ほか3編とともに、クロポトキンの小論文を集めた巻］

37　**大思想エンサイクロペヂア9　東洋思想(B)**
昭和3・9・20　春秋社
［井篦節三、加藤玄智、山辺習学、高須芳次郎、小野玄妙、金原省吾、土田杏村との共著。但し、室伏は巻末に総論的な「現代文明と東洋思想」を執筆しており、実質的な編者ではなかったかと思われる。］

38　**東方主義へ**　昭和3・12・25　平凡社
民主主義の解剖　無政府主義の批判(1)(2)　現代文明と東洋思想
［うち「無政府主義の批判(2)」は*32*の、「現代文明と東洋思想」は*37*の、再録］

39　**文明の没落　第三巻　大衆時代の解剖**　昭和3・12・25　改造社
帝国主義の文明批評　人口の論理　この人間を見よ　弁証法的批判の批判　ほか

40　**文明の没落・土に還る**　昭和4・1・15　田舎社
（大改訂合冊普及版）

41　**街頭の社会学**［評論・随想集］　昭和4・3・3　田舎社
文明は何処へ行く　鶴見祐輔の解剖　評論とは何か　カフェ社会学　ジャヅとは何か　不良少女の勝利　頭としての長谷川如是閑　「漂泊する人間」と「漂白された思惟」　文明からの批評と文明への批評　ほか

42　**アメリカ　―其経済と文明―**　昭和4・3・10　先進社
アメリカの世界征服　アメリカの繁栄　フウヴア、フォオド及びアメリカの繁栄経済　新しい経済学への出発　労働運動

［*20*の人口問題の部分を十数頁増補し、統計数字を最新のものに改訂］

25 **共産主義と社会主義** 大正15・11・18 批評社
［*21*と*22*の合冊］

26 **亜細亜主義（第一冊 欧羅巴的から亜細亜的へ）**
大正15・12・18 批評社

27 **政治から倫理へ** 大正15・12・25 批評社
［*23*に「政治の非倫理化」（後藤新平『政治の倫理化』の批判）を加う］

28 **亜細亜主義（第二冊 王道の思想）**昭和2・1・22 批評社

29 **亜細亜主義（第三冊 大同の理想）**昭和2・3・5 批評社

30 **光は東より** 昭和2・5・1 批評社
［*26*・*28*・*29*の合冊・増補］
王道蕩々 天下為公 小国寡民 亜細亜精神について

31 **結婚論** 昭和2・6・20 評論社
何が問題であるか 肉欲について 恋愛について 母性愛について 結婚の意味 如何なる結婚を選むべきか

32 **無政府主義批評** 昭和2・11・23 批評社
［元「社会経済体系」（日本評論社）に掲載］
起源 発展 無政府主義とは何か 経済理論 政治、政府、国家 暴力と非暴力 連合主義 自由連合 マアクス主義と無政府主義 バクウニンの立場 個人主義的無政府主義 無政府共産主義 クロポトキンの思想 批評

33 **文明の彼岸へ**［評論・随想集］ 昭和2・12・10 批評社
「大調和」のために 「饒舌録」 生活の亜米利加化と亜細亜化 モダアン・ガアル 肉体に還れ 政党政治の総崩れ ファシズムの意味 日本と支那とのために 亜細亜思想とは何か ほか

34 **クロポトキン 田園工場及仕事場 同 相互扶助**(世界大思想全集34)
［翻訳］ 昭和3・4・25 春秋社

進歩乎没落乎　機械の論理　資本主義及び社会主義の行詰まり　土に還る

17　**女性の創造**　(文明の没落　別巻) 大正14・5・23　批評社

新しき日の女へ　世紀末の女性　芸術としての結婚　女性の創造

18　**自由人は斯く語る (改訂版)**　大正14・6・20　批評社

[*15*から「男性智から女性霊へ」「三越」等6編を除き、「社会科学運動」「我観如是閑」「トロツキーの永久革命」の3編を加う]

19　**デモクラシー講話** [*6*の再版]　大正14・11・10　成光館

20　**日本論**　大正14・12・1　批評社

日本について　商工日本乎農村日本乎　日本の理想

21　**共産主義批評** (室伏高信著作集1) 大正15・5・20　批評社

[ほとんどが、かつて雑誌『批評』に掲載されたもの]

共産主義の理論 [原題「ロシア革命に於ける独裁政治」]　共産主義の農民政策　第三インタナショナル　第四インタナショナル　労働反対　ボルシエヰキの虐政の話　ロオザ・ルクセンブルク女史のロシヤ革命論を読む

22　**社会主義批評** (室伏高信著作集2) 大正15・6・3　批評社

[ほとんどが、かつて雑誌『批評』に掲載されたもの]

社会民主主義　社会主義の陥穽　ギルド社会主義　ギルド社会主義と国家及び自由　ナショナル・ギルド問答　信用社会主義　モリスの芸術的社会主義　日本の社会主義

23　**新しき時代とは何乎**　大正15・6・23　批評社
(室伏高信著作集3)

民主主義の理想　民衆戦ふ可き乎　フセン・フアンに与ふ　人間不安　農村の問題　ゴシック芸術について　芸術における日本のとりもどし　印度と文明　ラアテナウについて　霊の王国　新しき時代とは何乎

24　**日本論 (改訂版)**　大正15・10・10　批評社

民主主義　デモクラシーの新理想　ほか

8　**社会主義批判**　大正8・11・25　批評社

国家社会主義　修正派社会主義　サンヂカリズム　ギルド社会主義　労働組合主義　ボルシエヴィキ主義　無政府主義

9　**ギルド社会主義**　大正9・7・23　批評社
（第一巻創生及建設）

10　**社会改造の原理**　大正10・7・25　冬夏社

［B. Russell, Principles of Social Reconstructionの翻訳。実際は、木蘇穀と加田哲二との共訳。］

11　**霊の王国**　大正11・8・14　改造社

［ラーテナウの思想の紹介］

目的　道徳　政治　経済　ラーテナウ、其人と思想

12　**社会主義批判**　大正11・10・18　近代名著文庫刊行会
（近代名著文庫第二編）

［*8*のポケット版］

13　**印象と傾向**［欧米紀行］　大正12・1・10　改造社

（人の印象）ロマン・ロオラン　ベルグソン　アインシタイン　カアペンタア　ウエルス　カウツキーとベルンシダイン　独逸大統領エーヴエルト　英国労働党首領ヘンダスン

（世界の傾向）アメリカ見聞　混乱の英国　三角同盟の死　改造の独逸　世界の階級運動と其主潮　排日と日本コロニイ　婦人運動の傾向　ほか

14　**文明の没落**　大正12・12・28　批評社

創造人の宣言　自由国と奴隷国　大社会と自由　都会文明から農村文化へ　ほか

15　**自由人は斯く語る**［随想集］　大正13・6・9　批評社

地震の後に　丸ビル時代　農民よ、背け　男性智から女性霊へ　三越　知識階級の問題　有島氏からの書簡　レニンのユトピア　ガンヂへ　ほか

16　**土に還る**（文明の没落　第二巻）大正13・12・4　批評社

室伏高信　著書目録

山領健二・飯田泰三

＊(未見のもの)

1　**学生論**　明治41・10・15　学生論出版部
序　僕は『学生論』を見た(新渡戸稲造)
時代と学生　学生界の廃物　男女学生の交際　学生の分野
成功論　職業問題　結論

2　**政友会罪悪史論**　大正4・3・23　世界雑誌社
尾崎咢堂序　横山雄偉跋
伊藤博文と政友会　妥協及情意統合　大正政変の表裏　呪はれたる多数党　ほか

3　**民衆政治**　大正4・10・10　世界雑誌社
尾崎行雄　花井卓藏　序
現代の民衆政治　国体論の誤謬　民衆文明と国家統制　代表政治の疑問　ほか

4　**民本主義について**　大正6・12・5
デモクラシーの意味について　戦争の目的　団体主義へ　政治能率へ　新理想主義へ　愛国心！　伝統主義について　民族主義

5　**トロツキー　ボルシェヴィズムと世界政策**　大正7　＊
[英語版からの翻訳]

6　**デモクラシー講話**　大正8・4・1　日本評論社
デモクラシーの概念　デモクラシーの中心思想について　デモクラシーの組織及び指導　民主主義と共和政治との関係について　政治的民主主義と社会的民主主義　産業民主主義
国際民主主義　現代民主主義と個人・国家及び世界

7　**社会主義と民主主義**　大正8・5・10　批評社
(民主主義叢書第一編)
第三階級民主主義とソーシヤル・デモクラシー　社会主義の煩悶　社会主義の陥穽　過激主義と民主主義　リンコーンの

編者

飯田　泰三（いいだ　たいぞう）

1943年生れ。法政大学法学部教授。東京大学法学部卒、同大学大学院博士課程修了。

専攻　日本政治思想史。

主要著書・論文

「長谷川如是閑評論集」（岩波文庫・共編著）岩波書店1989年
「吉野作造――ナショナル・デモクラットと『社会の発見』」（小松茂夫・田中浩編『日本の国家思想（下）』青木書店1980年）
「明治末年の或る精神風景――『現代国家批判』以前の長谷川如是閑」（『みすず』1980年11～12月）
「批判の航跡――長谷川如是閑」（日本政治学会年報1982年『近代日本の国家像』岩波書店1983年）
「アイロニーの銃眼――如是閑のラディカリズム」（『長谷川如是閑集 第2巻』岩波書店1989年）
「如是閑における小説の成立――異化と喪失の経験からの」（『如是閑文芸選集 第1巻』解説 岩波書店1990年）

編集協力者

山領　健二（やまりょう　けんじ）

1933年生れ。神田外語大学教授。東京大学文学部卒。

専攻　日本近代思想史。

主要著書・論文

思想の科学研究会編『共同研究 転向（上）』（共著）平凡社1959年
『転向の時代と知識人』三一書房 1978年
『人物書誌大系 6 長谷川如是閑』日外アソシエーツ 1984年
『長谷川如是閑評論集』（岩波文庫・共編著）岩波書店 1989年
「『改造社文学月報』とその読者」（『ブックエンド通信』1979年12月）
「黎明会」（『思想の科学』1980年5月）
「日本のプラグマティズム」（鈴木正・古田光編『近代日本の哲学』北樹出版 1983年）
「長谷川如是閑」（三谷太一郎編『言論は日本を動かす 第1巻 近代を考える』講談社 1986年）
「『我等』の時代」『長谷川如是閑集 第8巻』岩波書店 1990年

復刻版 批　評　第3巻

1992年4月復刻版第1刷　発行

揃定価 60,000円
本体価格

編　　者　飯田泰三
発 行 者　北村正光
発 行 所　株式会社 龍渓書舎

〒173 東京都板橋区南町43－4－103
電話03（3554）8045・振替 東京3－76123
FAX03（3554）8444

落丁、乱丁本はおとりかえします。
ISBN 4-8447-3347-8

印刷：武内印刷
製本：岸田製本紙工